

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (53)

東九州自動車道建設(志布志IC～鹿屋串良JCT間)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

かわ く ぼ
川久保遺跡5
A地点

(鹿屋市串良町)
古墳・近世編ほか
第2分冊

2023年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (53)

川久保遺跡5
A地点

二〇二三年三月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



本文目次(第2分冊)

第2節 古墳時代の成果	1	第3節 近世の成果	400
1 遺構	1	1 遺構	400
2 包含層出土遺物	383	2 包含層出土遺物	409

挿図目次(第2分冊)

第2-1図 堅穴建物跡(方形・円形)	24	第2-31図 堅穴建物跡7号 出土遺物(石器①)	58
第2-2図 東側(川側)の堅穴建物跡群	26	第2-32図 堅穴建物跡7号 出土遺物(石器②)	59
第2-3図 堅穴建物跡1号	27	第2-33図 堅穴建物跡7号 出土遺物(鉄製品・鉄滓)	60
第2-4図 堅穴建物跡1号 遺物出土状況	28	第2-34図 堅穴建物跡7号 出土遺物(鉄滓)	61
第2-5図 堅穴建物跡1号 出土遺物(土器・石器)	29	第2-35図 堅穴建物跡8号 輪の羽口設置想定箇所拡大	63
第2-6図 堅穴建物跡2号	30	第2-36図 堅穴建物跡8号 遺物出土状況(全遺物・柱穴)	64
第2-7図 堅穴建物跡2号 遺物出土状況	31	第2-37図 堅穴建物跡8号 遺物出土状況(土器・石器・炭化種子)	65
第2-8図 堅穴建物跡2号 出土遺物(土器・石器)	32	第2-38図 堅穴建物跡8号 遺物出土状況(鍛冶関連遺物)	66
第2-9図 堅穴建物跡3号・4号	34	第2-39図 堅穴建物跡8号 出土遺物(土器)	67
第2-10図 堅穴建物跡3号・4号 遺物出土状況	35	第2-40図 堅穴建物跡8号 出土遺物(土製品)	68
第2-11図 堅穴建物跡3号 出土遺物(土器)	36	第2-41図 堅穴建物跡8号 出土遺物(石器)	69
第2-12図 堅穴建物跡3号・4号 出土遺物(土器・土製品・鉄製品)	37	第2-42図 堅穴建物跡8号 出土遺物(鉄製品・鉄滓)	70
第2-13図 堅穴建物跡4号 出土遺物(装飾品)	38	第2-43図 堅穴建物跡9号	71
第2-14図 堅穴建物跡5号 平面・断面	39	第2-44図 堅穴建物跡9号 柱穴	72
第2-15図 堅穴建物跡5号 断面	40	第2-45図 堅穴建物跡9号 遺物出土状況	73
第2-16図 堅穴建物跡5号 遺物出土状況(平面・断面)	41	第2-46図 堅穴建物跡9号 出土遺物(土器)	74
第2-17図 堅穴建物跡5号 遺物出土状況(断面)	42	第2-47図 堅穴建物跡9号 出土遺物(土製品・石器・鉄製品・鉄滓)	75
第2-18図 堅穴建物跡5号 出土遺物(土器)	43	第2-48図 堅穴建物跡10号	94
第2-19図 堅穴建物跡5号 出土遺物(石器)	44	第2-49図 堅穴建物跡10号 柱穴	5
第2-20図 堅穴建物跡6号	45	第2-50図 堅穴建物跡10号 遺物出土状況	96
第2-21図 堅穴建物跡6号 遺物出土状況	46	第2-51図 堅穴建物跡10号 出土遺物(土器)	97
第2-22図 堅穴建物跡6号 出土遺物(土器・装飾品)	47	第2-52図 堅穴建物跡10号 出土遺物(土器・土製品)	98
第2-23(1)図 堅穴建物跡7号	48	第2-53図 堅穴建物跡10号 出土遺物(石器・鉄滓)	99
第2-23(2)図 堅穴建物跡7号	49	第2-54図 堅穴建物跡11号	101
第2-24図 堅穴建物跡7号 遺物出土状況(全遺物)	51	第2-55図 堅穴建物跡11号 遺物出土状況	102
第2-25図 堅穴建物跡7号 遺物出土状況(土器・石器・炭化物)	52	第2-56図 堅穴建物跡11号 出土遺物(土器)	103
第2-26図 堅穴建物跡7号 遺物出土状況(鉄滓・羽口)	53	第2-57図 堅穴建物跡11号 出土遺物(土器・石器・鉄製品)	104
第2-27図 堅穴建物跡7号 出土遺物(石器①)	54	第2-58図 堅穴建物跡12号	106
第2-28図 堅穴建物跡7号 出土遺物(石器②)	55	第2-59図 堅穴建物跡12号 遺物出土状況	107
第2-29図 堅穴建物跡7号 出土遺物(土器・土製品)	56		
第2-30図 堅穴建物跡7号 出土遺物(土製品)	57		

第2-60図	竪穴建物跡12号	出土遺物(土器・石器)	第2-102図	竪穴建物跡22号	出土遺物(石器)……	170
	……………	108	第2-103図	竪穴建物跡23号	……………	171
第2-61図	竪穴建物跡12号	出土遺物(鉄製品・鉄洋)	第2-104図	竪穴建物跡23号	遺物出土状況(全遺物)	172
	……………	109		……………	……………	172
第2-62図	竪穴建物跡13号	貼床面	第2-105図	竪穴建物跡23号	遺物出土状況(甕)	173
第2-63図	竪穴建物跡13号	遺物出土状況	第2-106図	竪穴建物跡23号	遺物出土状況(丸底甕・甗)	174
第2-64図	竪穴建物跡13号	出土遺物(土器)		……………	……………	174
第2-65図	竪穴建物跡13号	出土遺物(石器)	第2-107図	竪穴建物跡23号	遺物出土状況(その他)	175
第2-66図	竪穴建物跡13号	出土遺物(石器・鉄製品)		……………	……………	175
	……………	114	第2-108図	竪穴建物跡23号	出土遺物(土器①)	176
第2-67図	竪穴建物跡14号	上位硬化面	第2-109図	竪穴建物跡23号	出土遺物(土器②)	177
第2-68図	竪穴建物跡14号	下位硬化面	第2-110図	竪穴建物跡23号	出土遺物(土器③)	178
第2-69図	竪穴建物跡14号	底面	第2-111図	竪穴建物跡23号	出土遺物(石器・鉄洋)	179
第2-70図	竪穴建物跡14号	遺物出土状況		……………	……………	179
第2-71図	竪穴建物跡14号	出土遺物(土器①)	第2-112図	竪穴建物跡24号	……………	182
第2-72図	竪穴建物跡14号	出土遺物(土器②)	第2-113図	竪穴建物跡24号	遺物出土状況	183
第2-73図	竪穴建物跡14号	出土遺物(土器③)	第2-114図	竪穴建物跡24号	出土遺物(土器①)	184
第2-74図	竪穴建物跡14号	出土遺物(土器④)	第2-115図	竪穴建物跡24号	出土遺物(土器②)	185
第2-75図	竪穴建物跡14号	出土遺物(石器・鉄製品・ 鉄洋・裝飾品)	第2-116図	竪穴建物跡24号	出土遺物(石器)	186
	……………	124	第2-117図	竪穴建物跡25号	……………	188
第2-76図	中央部及び中央北側の竪穴建物跡群	……………	第2-118図	竪穴建物跡25号	遺物出土状況	189
	……………	132	第2-119図	竪穴建物跡25号	出土遺物(土器)	190
第2-77図	竪穴建物跡15号	……………	第2-120図	竪穴建物跡25号	出土遺物(石器・鉄製品・ 裝飾品)	191
第2-78図	竪穴建物跡15号	柱穴①		……………	……………	191
第2-79図	竪穴建物跡15号	柱穴②	第2-121図	西側の竪穴建物跡群	……………	201
第2-80図	竪穴建物跡15号	柱穴③	第2-122図	竪穴建物跡26号	……………	202
第2-81図	竪穴建物跡15号	遺物出土状況	第2-123図	竪穴建物跡26号	土坑・柱穴(断面) 遺物 出土状況	203
第2-82図	竪穴建物跡15号	出土遺物(土器)		……………	……………	203
第2-83図	竪穴建物跡15号	出土遺物(石器)	第2-124図	竪穴建物跡26号	出土遺物(土器)	204
第2-84図	竪穴建物跡16号・17号	平面	第2-125図	竪穴建物跡26号	出土遺物(土器・石器)	205
第2-85図	竪穴建物跡16号・17号	断面		……………	……………	205
第2-86図	竪穴建物跡16号・17号	柱穴①	第2-126図	竪穴建物跡27号～29号	平面	207
第2-87図	竪穴建物跡16号・17号	柱穴②	第2-127図	竪穴建物跡27号～29号	断面・炉跡・柱穴	208
第2-88図	竪穴建物跡16号・17号	遺物出土状況(平面)		……………	……………	208
	……………	144	第2-128図	竪穴建物跡27号～29号	遺物出土状況 (平面)	209
第2-89図	竪穴建物跡16号・17号	遺物出土状況(断面)		……………	……………	209
	……………	145	第2-129図	竪穴建物跡27号～29号	遺物出土状況 (断面)	210
第2-90図	竪穴建物跡16号・17号	出土遺物(土器・石器)		……………	……………	210
	……………	146	第2-130図	竪穴建物跡27号	出土遺物(土器)	211
第2-91図	竪穴建物跡18号	……………	第2-131図	竪穴建物跡28号	出土遺物(土器)	212
第2-92図	竪穴建物跡18号	焼土・柱穴	第2-132図	竪穴建物跡29号	出土遺物(土器)	213
第2-93図	竪穴建物跡18号	遺物出土状況	第2-133図	竪穴建物跡27号・28号	出土遺物(石器)	214
第2-94図	竪穴建物跡18号	出土遺物(土器・石器)		……………	……………	214
第2-95図	竪穴建物跡19号・20号	……………	第2-134図	竪穴建物跡29号	出土遺物(石器)	215
第2-96図	竪穴建物跡19号	……………	第2-135図	竪穴建物跡30号	貼床面	227
第2-97図	竪穴建物跡20号	……………		……………	……………	227
第2-98図	竪穴建物跡21号	……………	第2-136図	竪穴建物跡30号	底面	228
第2-99図	竪穴建物跡22号	……………	第2-137図	竪穴建物跡30号	断面・土坑・柱穴	229
第2-100図	竪穴建物跡22号	遺物出土状況	第2-138図	竪穴建物跡30号	柱穴埋土分層	230
第2-101図	竪穴建物跡22号	出土遺物(土器)	第2-139図	竪穴建物跡30号	遺物出土状況(平面)	231

第2-140回	堅穴建物跡30号	遺物出土状況(断面)	232	第2-179回	堅穴建物跡41号	出土遺物(石器)	278
第2-141回	堅穴建物跡30号	出土遺物(土器)	233	第2-180回	堅穴建物跡42号	……………	288
第2-142回	堅穴建物跡30号	出土遺物(石器)	234	第2-181回	堅穴建物跡42号	遺物出土状況	289
第2-143回	堅穴建物跡31号	……………	236	第2-182回	堅穴建物跡42号	出土遺物(土器・石器)	……………
第2-144回	堅穴建物跡31号	炉跡・土坑・柱穴	237	……………	……………	……………	290
第2-145回	堅穴建物跡31号	遺物出土状況	238	第2-183回	堅穴建物跡43号	……………	292
第2-146回	堅穴建物跡31号	出土遺物(土器・土製品・石器・装飾品)	239	第2-184回	堅穴建物跡43号	遺物出土状況	293
第2-147回	堅穴建物跡32号~35号	……………	240	第2-185回	堅穴建物跡43号	出土遺物(土器)	294
第2-148回	堅穴建物跡32号~35号	遺物出土状況	241	第2-186回	堅穴建物跡43号	出土遺物(土器・石器)	……………
第2-149回	堅穴建物跡32号	……………	242	……………	……………	……………	295
第2-150回	堅穴建物跡32号	遺物出土状況	243	第2-187回	堅穴建物跡44号	……………	297
第2-151回	堅穴建物跡32号	出土遺物(土器)	244	第2-188回	堅穴建物跡44号	遺物出土状況	298
第2-152回	堅穴建物跡32号	出土遺物(石器)	245	第2-189回	堅穴建物跡44号	出土遺物(土器)	298
第2-153回	堅穴建物跡33号	……………	247	第2-190回	堅穴建物跡45号	……………	299
第2-154回	堅穴建物跡33号	遺物出土状況	248	第2-191回	堅穴建物跡45号	遺物出土状況	300
第2-155回	堅穴建物跡33号	出土遺物(土器・石器)	……………	第2-192回	堅穴建物跡45号	出土遺物(土器・石器)	……………
……………	……………	……………	249	……………	……………	……………	301
第2-156回	堅穴建物跡34号	……………	250	第2-193回	堅穴建物跡46号	……………	302
第2-157回	堅穴建物跡34号	遺物出土状況	251	第2-194回	堅穴建物跡47号	……………	303
第2-158回	堅穴建物跡34号	出土遺物(土器・石器)	……………	第2-195回	堅穴建物跡47号	遺物出土状況	304
……………	……………	……………	252	第2-196回	堅穴建物跡47号	出土遺物(土器)	305
第2-159回	堅穴建物跡35号	……………	254	第2-197回	堅穴建物跡48号	……………	306
第2-160回	堅穴建物跡35号	遺物出土状況	255	第2-198回	堅穴建物跡48号	遺物出土状況	307
第2-161回	堅穴建物跡35号	出土遺物(土器)	256	第2-199回	堅穴建物跡48号・49号	出土遺物(土器・装飾品)	308
第2-162回	堅穴建物跡36号	……………	257	第2-200回	堅穴建物跡49号	……………	309
第2-163回	堅穴建物跡36号	遺物出土状況	258	第2-201回	堅穴建物跡49号	遺物出土状況	310
第2-164回	堅穴建物跡36号	出土遺物(土器・石器)	……………	第2-202回	円形堅穴建物跡群	……………	320
……………	……………	……………	259	第2-203回	堅穴建物跡50号(円形堅穴建物跡1号)	……………	321
第2-165回	堅穴建物跡37号~39号	……………	265	第2-204回	堅穴建物跡51号(円形堅穴建物跡2号)	……………	322
第2-166回	堅穴建物跡37号~39号	断面・柱穴	266	第2-205回	堅穴建物跡51号(円形堅穴建物跡2号)	遺物出土状況	323
第2-167回	堅穴建物跡37号~39号	遺物出土状況(平面・断面)	267	第2-206回	堅穴建物跡51号(円形堅穴建物跡2号)	出土遺物(土器・石器)	324
第2-168回	堅穴建物跡37号~39号	遺物出土状況(断面)	268	第2-207回	堅穴建物跡52号(円形堅穴建物跡3号)	……………	325
第2-169回	堅穴建物跡37号~39号	出土遺物(土器・石器)	269	第2-208回	堅穴建物跡52号(円形堅穴建物跡3号)	遺物出土状況	326
第2-170回	堅穴建物跡40号	……………	270	第2-209回	堅穴建物跡53号(円形堅穴建物跡4号)	……………	327
第2-171回	堅穴建物跡40号	遺物出土状況	271	第2-210回	堅穴建物跡53号(円形堅穴建物跡4号)	土器集中出土状況	328
第2-172回	堅穴建物跡40号	出土遺物(土器)	271	第2-211回	堅穴建物跡53号(円形堅穴建物跡4号)	遺物出土状況	329
第2-173回	堅穴建物跡41号	……………	272	第2-212回	堅穴建物跡53号(円形堅穴建物跡4号)	出土遺物(土器①)	330
第2-174回	堅穴建物跡41号	遺物出土状況(全遺物)	……………	……………	……………	……………	331
……………	……………	……………	273	第2-213回	堅穴建物跡53号(円形堅穴建物跡4号)	出土遺物(土器②)	331
第2-175回	堅穴建物跡41号	遺物出土状況(甕)	274	第2-214回	堅穴建物跡53号(円形堅穴建物跡4号)	出土遺物(土器・石器)	332
第2-176回	堅穴建物跡41号	遺物出土状況(甕以外)	……………	……………	……………	……………	……………
……………	……………	……………	275	……………	……………	……………	……………
第2-177回	堅穴建物跡41号	出土遺物(土器)	276	……………	……………	……………	……………
第2-178回	堅穴建物跡41号	出土遺物(土器・土製品)	……………	……………	……………	……………	……………
……………	……………	……………	277	……………	……………	……………	……………

第2-215区	竪穴建物跡54号(円形竪穴建物跡5号)	333	第2-247区	製鉄関連土坑1	出土遺物4	368	
第2-216区	竪穴建物跡54号(円形竪穴建物跡5号)	334	第2-248区	製鉄関連土坑1	出土遺物5	369	
第2-217区	竪穴建物跡54号(円形竪穴建物跡5号)	335	第2-249区	製鉄関連土坑1	出土遺物6	370	
第2-218区	竪穴建物跡55号(円形竪穴建物跡6号)	337	第2-250区	製鉄関連土坑2		371	
第2-219区	竪穴建物跡55号(円形竪穴建物跡6号)	338	第2-251区	製鉄関連土坑2	遺物出土状況	372	
第2-220区	竪穴建物跡55号(円形竪穴建物跡6号)	339	第2-252区	製鉄関連土坑2	出土遺物1	373	
第2-221区	竪穴建物跡55号(円形竪穴建物跡6号)	340	第2-253区	製鉄関連土坑2	出土遺物2	374	
第2-222区	竪穴建物跡55号(円形竪穴建物跡6号)	341	第2-254区	製鉄関連土坑3		375	
第2-223区	竪穴建物跡56号(円形竪穴建物跡7号)	342	第2-255区	製鉄関連土坑3	出土遺物	375	
第2-224区	竪穴建物跡56号(円形竪穴建物跡7号)	343	第2-256区	製鉄関連土坑4		376	
第2-225区	竪穴建物跡56号(円形竪穴建物跡7号)	343	第2-257区	製鉄関連土坑4	出土遺物	376	
第2-226区	川久保遺跡A地点	竪穴状遺構	347	第2-258区	溝状遺構1	377	
第2-227区	竪穴状遺構1号		348	第2-259区	古墳時代土坑	378	
第2-228区	竪穴状遺構2号		349	第2-260区	埴土土坑・小ピット	379	
第2-229区	竪穴状遺構3号		350	第2-261区	埴土土坑	埴土堆積状況	380
第2-230区	竪穴状遺構3号	出土遺物(土器)	350	第2-262区	古墳時代土坑1	381	
第2-231区	竪穴状遺構4号		351	第2-263区	古墳時代土坑2	382	
第2-232区	竪穴状遺構4号	出土遺物(土器)	351	第2-264区	包含層出土遺物(土器)	386	
第2-233区	竪穴状遺構5号		352	第2-265区	包含層出土遺物(土器・土製品)	387	
第2-234区	竪穴状遺構6号		353	第2-266区	包含層出土遺物(石器)	388	
第2-235区	竪穴状遺構6号	遺物出土状況	353	第2-267区	包含層出土遺物(鉄製品・装飾品)	389	
第2-236区	竪穴状遺構7号	平面・断面	354	第2-268区	包含層出土遺物(炉壁①)	390	
第2-237区	竪穴状遺構7号	断面	355	第2-269区	包含層出土遺物(炉壁②)	391	
第2-238区	竪穴状遺構7号	遺物出土状況	356	第2-270区	包含層出土遺物(炉壁③)	392	
第2-239区	竪穴状遺構7号	出土遺物(土器・鉄滓・装飾品)	357	第2-271区	包含層出土遺物(炉壁④)	393	
第2-240区	製鉄関連土坑		361	第2-272区	包含層出土遺物(炉壁・炉内滓)	394	
第2-241区	製鉄関連土坑1		362	第2-273区	包含層出土遺物(炉内滓①)	395	
第2-242区	製鉄関連土坑1	埴土範囲ほか(上面・下面)	363	第2-274区	包含層出土遺物(炉内滓②)	396	
第2-243区	製鉄関連土坑1	遺物出土状況	364	第2-275区	包含層出土遺物(炉外流出滓・製鉄滓)	397	
第2-244区	製鉄関連土坑1	出土遺物1	365	第2-276区	包含層出土遺物(鉄塊)	398	
第2-245区	製鉄関連土坑1	出土遺物2	366	第2-277区	炭窯跡1号	402	
第2-246区	製鉄関連土坑1	出土遺物3	367	第2-278区	炭窯跡2号	403	
				第2-279区	炭窯関連土坑1	404	
				第2-280区	炭窯関連土坑2	404	
				第2-281区	近代土坑1	405	
				第2-282区	近世 遺構配置図	405	
				第2-283区	近世土坑1	出土遺物(陶磁器①)	406
				第2-284区	近世土坑1	出土遺物(陶磁器②)	407
				第2-285区	包含層出土遺物(陶磁器①)	412	
				第2-286区	包含層出土遺物(陶磁器②)	413	
				第2-287区	包含層出土遺物(陶磁器③)	414	
				第2-288区	包含層出土遺物(陶磁器④)	415	
				第2-289区	包含層出土遺物(陶磁器⑤)	416	

表目次(第2分冊)

表 2-1	竪穴建物跡 6 号柱穴観察表	12	表 2-43	竪穴建物跡 23 号出土石器	180
表 2-2	川久保遺跡 A 地点古墳時代竪穴建物跡一覽 1 東側(川側) 検出竪穴建物跡群	26	表 2-44	竪穴建物跡 23 号柱穴観察表	181
表 2-3	竪穴建物跡 1 号出土石器	27	表 2-45	竪穴建物跡 24 号柱穴観察表	182
表 2-4	竪穴建物跡 1 号出土石器	28	表 2-46	竪穴建物跡 24 号出土石器	187
表 2-5	竪穴建物跡 2 号出土石器	33	表 2-47	竪穴建物跡 24 号出土石器	187
表 2-6	竪穴建物跡 2 号出土石器	33	表 2-48	竪穴建物跡 25 号出土石器	192
表 2-7	竪穴建物跡 3 号出土石器	38	表 2-49	竪穴建物跡 25 号出土石器	192
表 2-8	竪穴建物跡 4 号出土石器	38	表 2-50	竪穴建物跡 27~29 号 暗褐色埋土一覽表	195
表 2-9	竪穴建物跡 5 号出土石器	40	表 2-51	川久保遺跡 A 地点古墳時代竪穴建物跡一覽 3 西側検出竪穴建物跡群	201
表 2-10	竪穴建物跡 5 号出土石器	42	表 2-52	竪穴建物跡 26 号出土石器	206
表 2-11	竪穴建物跡 6 号出土石器	47	表 2-53	竪穴建物跡 26 号出土石器	206
表 2-12	竪穴建物跡 7 号柱穴観察表	50	表 2-54	竪穴建物跡 27 号出土石器	216
表 2-13	竪穴建物跡 7 号出土石器	62	表 2-55	竪穴建物跡 28 号出土石器	216
表 2-14	竪穴建物跡 7 号出土石器	62	表 2-56	竪穴建物跡 29 号出土石器	217
表 2-15	竪穴建物跡 8 号出土石器	65	表 2-57	竪穴建物跡 27 号出土石器	217
表 2-16	竪穴建物跡 8 号出土石器	66	表 2-58	竪穴建物跡 28 号出土石器	217
表 2-17	竪穴建物跡 9 号出土石器	76	表 2-59	竪穴建物跡 29 号出土石器	217
表 2-18	竪穴建物跡 9 号出土石器	76	表 2-60	竪穴建物跡 30 号柱穴一覽表	230
表 2-19	竪穴建物跡 10 号柱穴一覽	95	表 2-61	竪穴建物跡 30 号出土石器	235
表 2-20	竪穴建物跡 10 号出土石器	100	表 2-62	竪穴建物跡 30 号出土石器	235
表 2-21	竪穴建物跡 10 号出土石器	100	表 2-63	竪穴建物跡 31 号出土石器	237
表 2-22	竪穴建物跡 11 号出土石器	105	表 2-64	竪穴建物跡 31 号出土石器	237
表 2-23	竪穴建物跡 11 号出土石器	105	表 2-65	竪穴建物跡 32 号出土石器	246
表 2-24	竪穴建物跡 12 号出土石器	109	表 2-66	竪穴建物跡 32 号出土石器	246
表 2-25	竪穴建物跡 12 号出土石器	109	表 2-67	竪穴建物跡 33 号出土石器	253
表 2-26	竪穴建物跡 13 号出土石器	115	表 2-68	竪穴建物跡 34 号出土石器	253
表 2-27	竪穴建物跡 13 号出土石器	115	表 2-69	竪穴建物跡 33 号出土石器	253
表 2-28	竪穴建物跡 14 号出土石器 1	125	表 2-70	竪穴建物跡 34 号出土石器	253
表 2-29	竪穴建物跡 14 号出土石器 2	126	表 2-71	竪穴建物跡 35 号出土石器	256
表 2-30	竪穴建物跡 14 号出土石器	126	表 2-72	竪穴建物跡 36 号出土石器	258
表 2-31	川久保遺跡 A 地点古墳時代竪穴建物跡一覽 2 中央部および中央北側検出竪穴建物跡群	132	表 2-73	竪穴建物跡 36 号出土石器	258
表 2-32	竪穴建物跡 15 号出土石器	138	表 2-74	竪穴建物跡 37 号出土石器	268
表 2-33	竪穴建物跡 15 号出土石器	138	表 2-75	竪穴建物跡 37 号出土石器	268
表 2-34	竪穴建物跡 16 号出土石器	147	表 2-76	竪穴建物跡 38 号出土石器	268
表 2-35	竪穴建物跡 17 号出土石器	147	表 2-77	竪穴建物跡 40 号出土石器	271
表 2-36	竪穴建物跡 17 号出土石器	147	表 2-78	竪穴建物跡 41 号出土石器	279
表 2-37	竪穴建物跡 18 号出土石器	147	表 2-79	竪穴建物跡 41 号出土石器	279
表 2-38	竪穴建物跡 18 号出土石器	147	表 2-80	竪穴建物跡 42 号出土石器	291
表 2-39	竪穴建物跡 22 号柱穴観察表	169	表 2-81	竪穴建物跡 42 号出土石器	291
表 2-40	竪穴建物跡 22 号出土石器	170	表 2-82	竪穴建物跡 43 号出土石器	296
表 2-41	竪穴建物跡 22 号出土石器	170	表 2-83	竪穴建物跡 43 号出土石器	296
表 2-42	竪穴建物跡 23 号出土石器	180	表 2-84	竪穴建物跡 44 号出土石器	297
			表 2-85	竪穴建物跡 45 号出土石器	300

表 2-86	豎穴建物跡45号出土石器	300
表 2-87	豎穴建物跡47号出土石器	305
表 2-88	豎穴建物跡48号出土石器	307
表 2-89	豎穴建物跡49号出土石器	310
表 2-90	川久保遺跡A地点古墳時代豎穴建物跡一覽 4 円形豎穴建物跡	320
表 2-91	豎穴建物跡51号出土石器	323
表 2-92	豎穴建物跡51号出土石器	324
表 2-93	豎穴建物跡53号出土石器	336
表 2-94	豎穴建物跡53号出土石器	336
表 2-95	豎穴建物跡54号出土石器	336
表 2-96	豎穴建物跡54号出土石器	336
表 2-97	豎穴建物跡55号出土石器	344
表 2-98	豎穴建物跡55号出土石器	344
表 2-99	豎穴建物跡56号出土石器	344
表 2-100	豎穴状遺構 3号出土石器	350
表 2-101	豎穴状遺構 4号出土石器	352
表 2-102	豎穴状遺構 7号出土石器	352
表 2-103	包含層出土石器	399
表 2-104	包含層出土石器	399
表 2-105	近世土坑 1 出土遺物	408
表 2-106	包含層出土近世遺物	417

第四章 調査の成果

第2節 古墳時代の成果

1 遺構

(1) 方形竪穴建物跡(第2-1図)

古墳時代の竪穴建物跡は、方形竪穴建物跡49基、円形竪穴建物跡7基の計56基検出した。竪穴建物跡は調査範囲の広い範囲から検出されているが、調査範囲の南西部はやや数が少ない。これは調査区の南西部の西側約1/3が近現代の大きな攪乱を受けており、縄文時代前期以降の層が消失していることが一因としてあげられる。

古墳時代の方形竪穴建物跡に関しては、川久保遺跡の地形から、串良川に近い標高31m～33mの平坦に近い地形から検出された東側竪穴建物跡群、遺跡の中央部付近の標高33～34mの平坦に近い中段部から検出された一群及びその北側から密集して検出された中央部の竪穴建物跡群、標高34m以上の斜面及びその西側から検出された西側竪穴建物跡群の3つの範囲に分けて掲載している。なお、円形竪穴建物跡に関しては、多くが遺跡の西側で検出されており、西側で検出された方形竪穴建物跡の後に掲載する。

東側(川側)の竪穴建物跡群(第2-2図)

川久保遺跡と東側に隣接する串良川の標高差は約10mである。水場に近い立地であり、この東側からは鍛冶関連遺構が集中して検出されており、東側で検出された竪穴建物跡14基のうち、少なくとも5基が鍛冶関連建物跡である。

東側の竪穴建物跡群の特徴としては、中央部や西側の建物跡群と比較して、大型の建物跡が多く、重複する割合が低く、また建物間の間隔がやや空いていることが挙げられる。

川久保遺跡の地層はVa層の下位では、鬼界カルデラの爆発的噴火に伴う地震の影響で発生した液化現象によりVx(噴砂シラス)層等が遺跡のほぼ全面で確認することができ、東側では特にその様相が顕著である。

川久保遺跡A地点東側のアカホヤ火山灰(Va)層より上位の層は、近現代の耕作土であり、表土直下ですぐVa層という状態であった。

竪穴建物跡1号(第2-3図)

竪穴建物跡1号は、遺跡の調査区の北東角部C36区Va(一部Vx)層から検出されており、一部は遺跡外へと延びている。長軸(南北軸)3.9m、短軸(東西軸)3.4mのほぼ正方形に近い形状を呈し、検出面から底面までの深さは約20cmである。長軸はわずかに西側にずれるが、ほぼ南北方向に沿っている。壁面は緩やかに立ち上が

り、堆積した埋土は単一である。貼床等は確認されておらず、底面を床面として使用していたと考えられる。また、灰跡・焼土跡、硬化面も検出されなかった。

竪穴建物跡1号の周辺は、Va層の残存は部分的であり、表土直下Vx(噴砂シラス)層である範囲も見られ、竪穴建物跡1号の壁面や底面も砂質のVx層で形成されていた。そのためか、床面には複数の柱穴と考えられる円形のシミ痕跡が確認できたが、明確に柱穴と呼べるものにはならなかった。

出土遺物(第2-4図)

遺物の出土量は少なく、遺構の中央部から南西部にややまとまって出土しており、北側と東側では出土量がやや希薄である。そのような中でも、完形の丸底甕および丸底甕と考えられるものが2個体、底面から出土している。また、底面より浮いた状態ではあるが、丸底の底部が2点出土しており、竪穴建物跡1号から出土した甕の可能性ある土器の底部は全て丸底であり、脚は小破片を含め出土していない。

土器(第2-5図)

1～4は、その出土状況から竪穴建物跡1号に帰属する可能性が高い土器群である。

1は完形に復元できた丸底甕である。頸部はくびれ、口縁部が外反する丸底甕である。口径は23.0cm、器高は26.0cmを測る。器壁の厚さは、口縁部と胴部が7～8mm程度に対し、丸底を呈する。底部は2.7cmと非常に厚くなっている。非常に丁寧に製作された土器である。1は遺構の中心部から南西部にかけて散在して出土している。破片は大きく10cm以上のものが見られ、最大20cm程度となるものも見られる。破片4点以外は全て底面から出土しており、底面から浮いた状態で出土している4点は、全て3cm以下の小破片であった。

1の外周は口縁部から屈曲部である頸部までは、単位幅の不透明な横方向のナデが施され、さらに頸部ではその上から幅5mm程度の横方向の工具ナデを施す。また、頸部付近では調整の上から裝飾とした幅2mm、長さ2cm前後の工具によるナデ(凹み)を施す。胴部から底部にかけては、幅7mm程度の縦方向の工具ナデを施した後、部分的に横方向の工具ナデを重ねて施している。底部は摩滅しており、調整は不明瞭であるが、工具ナデが施されている様である。また、底部には同心円状に黒色化している箇所が確認できる。内面口縁部から胴部上位にかけては、幅2cm程度の工具ナデを各方向に施した後、単位不明瞭の直線的な横方向のナデが施されている。また、頸部屈曲部分に合わせるように、幅5mm程度の1条の横方向の工具ナデが施されている。胴部全面は幅2cm

程度の斜め方向の工具ナデが施されている。底部は単位不明瞭なナデを施している。

1の口縁部から胴部中程にかけては、吹きこぼれに由来すると考えられる炭化物の付着が見られた。この付着炭化物の放射性炭素年代測定（AMS測定）をおこなったところ（第3分冊自然科学分析査照）、2a暦年校正年代は424calAD-541calAD（95.4%）となり、およそ5世紀前半～6世紀中頃の範囲の値である。

2は壺の口縁部から胴部下半までの資料である。頸部がくびれ、口縁部が外傾する。口径は23.2cmを測る。遺構中心部に集中して出土しているほか、やや東よりや南側からも出土している。破片は大きく10cm以上のものが多い。南側の3点は胴部片であり、そのうち2点は10cm以上の破片である。遺構中心部と、中心部より東よりに出土した破片は、ともに10cm以上の口縁部片を含む。出土した破片の2/3は底面から出土しているが、大きめの口縁部片を含む1/3は底面から浮いた状態で出土している。出土状況からの判断は難しかったが、ほぼ同じ器形の1の出土状況を鑑みて、竪穴建物跡1号に帰属すると考えた。

2の器面には粘土帯の接合痕としての凹凸が残るが、明確な接合痕が確認できるのは内面の一部分のみである。比較的丁寧な作りである。特徴として、内外面ともに回線文の様な工具ナデが施されるが、すでに工具ナデやナデによる調整が施された上から、部分的に施されており、器面調整としての意味はあまりなく、意図が不明である。あるいは装飾を意識している可能性も考えられる。外面口縁部は縦・斜め方向の工具ナデを施した後、横方向の工具ナデが施されている。一部、粘土を貼り付けた箇所が見られるが、貼り付けたのみで、調整等は確認できない。胴部上位は斜め方向の工具ナデを施した後、単位幅が不明瞭な斜め方向のナデを部分的に施し、さらに回線文状の工具ナデを縦・横・斜め方向に施している。内面口縁部から屈曲部までは、口縁直下より2cm辺りまでは横方向のハケ目を施し、さらに下位では幅1.5cm程度の横方向の工具ナデを施している。ここでも外面同様な横方向の回線文状の工具ナデが確認できる。胴部は単位が不明瞭なナデや、縦・斜め方向の工具ナデが施された後、回線文状の横方向の工具ナデが施されている。縦・斜め方向の工具ナデは調整が粗く、器面の砂粒の動きが著しい。器面を軽々ならざる程度の調整と考えられ、砂粒を沈み込ます意図は見られない。

3は高坏の坏部資料である。遺構中央部と南壁の中間付近、わずかに東側によった位置で、底面から出土している。口径は17.0cmを測る。外面は横方向の工具ナデが施されている。下端には縦・斜め方向の工具ナデが施され、その下位の脚部に接する部分には横方向の工具ナデが施されている。内面は横方向の工具ナデが施されてい

るが、器面の剥落が著しい。外面には色調が酸化鉄と類似した付着物の範囲が広く見られたため、川久保遺跡で検出されている鍛冶関連遺構との関連を考慮して、金属探知機や帯磁率計による計測を行ったが、強い反応は得られなかった。

4は丸底甕もしくは壺の底部資料である。1と同様に底部の厚みが非常に厚い資料であり、厚さ2.7cm以上を測る。遺構の北壁付近・東壁付近・中央部のやや南寄りの位置と、広く散在して出土している。底面と、底面から浮いた状態で出土している。

4の外面胴部下位は横・斜め方向の工具ナデが施されている。底部は横方向の工具ナデが施されている。胴部下位から底部にかけては、工具ナデの上から縦・横方向の沈線が施されている。部分的には縦・横の沈線が交わり、格子状になる部分も確認できる。沈線は縦方向のものが多く、横方向の沈線を施した後、縦方向の沈線を施したことが、その切り合いから確認できる。内面胴部下位から底部にかけては、横・斜め方向の工具ナデが施されている。外面の調整と比較して、胎土中の混和材が目立ち、胎土内に沈みきっていない。これは調整を丁寧に施さなかったか、使用の結果として器表面の摩滅によるものか、判断は難しく不明である。

5・6は、貼床面から浮いた状態で出土しており、その出土状況から竪穴建物跡1号廃絶後に廃棄、もしくはは流れ込んだ可能性の高い器群である。

5は丸底甕もしくは壺の胴部から底部資料である。遺構の西側に南北に分かれて、底面から浮いた状態で出土しており、流れ込みと考えられる。内面底部の工具ナデが胴部中程から底部まで施されており、調整は丁寧で器面は平滑である。

内面は胴部下半に斜め・横方向の工具ナデを施した後、図面上の2点破線の範囲に粘土を貼り付け、斜め方向の工具ナデを施し、さらに工具により水平方向の太めの沈線を施し、その沈線の上から幅5mm程度の縦方向の工具ナデを部分的に施している。この縦方向の工具ナデが施されることにより、沈線は分割される形になっている。この沈線の意図は不明である。外面底部の工具ナデは粗い。底部中央部を除き、その周囲には粘土が貼り付けられているため、結果として底部中央は凹む形状を呈する。これら粘土の貼り付けは、補強・補修の意図が考えられる。

6は埴の胴部から底部の資料である。平底気味であり、底径5.0cmを測る。遺構の中央部と東壁の中間付近に集中して出土している。全て底面より10cm程度浮いた状態で出土しており、流れ込みと考えられる。外面は斜め方向のミガキが、内面はナデが施されている。

石器（第2～5図）

石1は軽石製品である。遺構の南西角部付近、底面か

ら出土している。断面は三角形になる。表面の一部が赤色化しており、被熱を受けた可能性が考えられる。

石2・石3は棒状硬である。

石2は3の高坏坏部と隣接して出土して、底面から出土している。網掛け部分に擦痕が確認できる。

石3は遺構の南西部で、底面から出土している。表面には敲打痕が確認でき、下面にも使用痕と考えられる剥離が確認できる。

鉄滓

微細な遺物の採取の為に底面埋土を採取し、ふるい掛けを実施したが、堅穴建物跡1号からは鍛造剥片等の鍛冶関連遺物は出土しなかった。

炭化物(第3分冊 自然科学分析参照)

堅穴建物跡1号では20点の炭化物を遺物として取り上げており、さらに底面埋土のふるい調査でも炭化物が得られている。炭化物は遺構の南西部に集中が見られ、底面から出土しているものがあった。遺構の南側と中央部付近でも炭化物の出土が見られたが、ほとんどが底面より上位に浮いた状態で出土している。

出土した炭化物の中から、堅穴建物跡1号に帰属する可能性が高い底面出土炭化物を抽出し、2点の炭化物について放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。分析の結果、2 σ 暦年代範囲を見ると、底面埋土のふるい調査により得られた資料の確率の高い値では379calAD-435calAD(73.2%)で4世紀後半～5世紀中頃、底面出土炭化材が2つの測定結果の範囲で398calAD-536calADで4世紀末～6世紀中頃の値となった。土器1から採取した付着炭化物の年代と比較すると、底面出土した炭化材が年代的に近い値を示している。

堅穴建物跡2号(第2-6図)

堅穴建物跡2号は、遺跡の調査区の北東部D36・37区Va層から検出した。長軸3.7m、短軸3.5mの正方形に近い隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さは約30～40cmであり、底面から10～18cm程度の厚さで貼床面が形成されている。底面までの深さは、遺構の北側半分がより深く掘られている。建物の長軸は南北方向に沿って建てられている。貼床面はほぼ水平に作られ、中心部には2カ所の焼土範囲が確認されている。焼土の周囲には南側～黒色土の範囲が広がり、黒色土中には細かな炭化物も混じる。焼土はこの黒色土の下位から検出されている。黒色土の周囲の貼床は南北方向と西側が硬化し硬化面を形成する。

堅穴建物跡2号の南側には、張り出しの様な構造が確認できるが明確ではない。柱穴は9基礎確認され貼床面上面から検出されているが、明確に捉えることができなかつたため、底面まで掘り下げた後、再度柱穴を検出し掘り下げた。よって貼床の厚さを考慮すると、実際の柱穴の

深さは10cm程度深くなると考えられる。柱穴はすべて同一の埋土である。柱穴はP1とP3以外は壁際もしくは壁面から検出されている。建物跡の中心部付近では柱穴は確認されていない。

出土遺物(第2-7図)

遺物は遺構の中心部から北側にやや多く出土しているが、遺物の集中区のようなものは見られない。口縁部が直行、または内湾する甕が貼床面から出土している。他は埴が数個体出土しており、壺や高坏の出土は確認できていない。石器は磨石が出土しているが、貼床面から出土していたため、遺構に帰属する遺物として掲載している。

土器(第2-8図)

7～15は、貼床面から出土しており、その出土状況から堅穴建物跡2号に帰属する可能性が高い土器群である。

7は口縁部が直行する甕D類の口縁部から胴部下半までの資料である。口径は24.8cm、脚部が欠損しているが、脚部を除く器高は26.0cmである。遺構の南側中央部貼床面から集中して出土しており、その範囲は8と重なる。

7の外面口縁部上端は、縦・横方向の工具ナデ及び、単位が不明瞭なナデが施されており、口縁部下端から胴部上位にかけては、この不明瞭なナデ調整が続く。胴部中程は幅1cm程度の縦・斜め方向の工具ナデが施された後、幅5mm程度の横・縦方向の工具ナデが施されている。胴部下位は単位幅が不明瞭なナデが施され、胴部下端は斜め・横方向の工具ナデが施される。内面の口縁部から胴部上半にかけては、縦・横・斜め方向の工具ナデ及び、単位幅が不明瞭なナデが施されている。所々に粘土帯の痕跡が確認でき、断面にも凹凸を確認することができるが、器面調整は丁寧である。胴部下位は、上から横方向の工具ナデ、縦・斜め方向の工具ナデの後、斜め方向のミガキ、そして胴部下端には横方向の工具ナデが施されている。斜め方向のミガキに関しては、光沢感が少ないが、器面は非常に丁寧に磨かれており、平滑である。内外面ともに調整痕が不鮮明な箇所が多いが、器面が摩滅していないことから、最終的な調整としてナデ消しが施されている可能性が考えられる。

8は頸部がわずかにくびれ、口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部中程までの資料である。頸部の内面に稜を形成しており、同様の特徴は9・16・17でも確認できる。口径は23.9cmを測る。遺構の南側中央部貼床面から集中して出土しており、その出土分布は7と類似している。口縁部上端は幅1.4cm前後の横方向の工具ナデが施されている。口縁部下半の調整痕は不明瞭であり、確認できない。突帯貼り付け部分とその上下の器面には、横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付け、突帯

には刻目が施される。刻目は突帯の上下にも確認できる。胴部には横方向の工具ナデが施された後、幅4～5mm程度の縦方向のミガキが施されている。内面口唇部にはナデが施されている。口縁部には幅1cm程度の横方向の幅の広い工具ナデが施された後、幅5mm程度の横方向の幅の狭い工具ナデが施されている。貼り付け突帯部分の内面は屈曲しており、この屈曲部には連続した指押さええの痕跡が残り、はっきりとした指紋の痕跡も確認できる。胴部上半は縦方向の工具ナデが施されており、上位では指押さえにより調整が消されている。胴部中程では横方向の工具ナデが施された後、縦方向のミガキが施され、部分的には光沢が見られる。

9は頭部内面がわずかに凹み、口縁部が内湾する雙D類の口縁部から胴部中程までの資料である。頭部内面に稜を形成している。口径は31.4cmを測る。遺構の北側の貼床面から集中して出土している。外面口唇部付近は、横方向の工具ナデが、口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には、横方向の工具ナデを施した後に突帯を貼り付けている。胴部は斜め方向の工具ナデが、胴部下位には単位幅が不明瞭なナデが施されている。内面口縁部は、幅1～1.5cm程度の横方向の工具ナデを施した後、幅5mm程度の器面に凹凸が残る横・斜め方向の工具ナデが施されている。屈曲部付近には指押さええの痕跡が残る。胴部は幅1～1.5cm程度の斜め方向の工具ナデが施されている。

10は雙の脚部資料である。底径は8.8cmを測る。脚の高さは2.3cmと低い。遺構の北側から大きな破片と2cm程度の小片の2点が出土している。小片は貼床面から浮いた状態で出土しているが、大きな破片が貼床面上で出土していたため、遺構に帰属する可能性が高いと判断した。外面胴部下位は縦方向の単位幅が不明瞭な工具ナデの後に、斜め・横方向の工具ナデが施されている。特に胴部下端の横方向の工具ナデは、工具の筋がはっきりしている。脚部は横方向の工具ナデが施されている。内面底部はミガキが施されているが、器面の摩滅が著しく部分的にしか確認できない。脚部内面天井部は、幅の細い入念なミガキが施されている。脚部内面は横・斜め方向の工具ナデが施され、下端には部分的に指押さええの痕跡が確認できる。

11は胴部下端から大きく反りながら開く形状をしており、また上位の器壁が薄いことから、雙の底部と考えられるが、鉢の脚部の可能性も考えられる資料である。底径は7.1cmを測る。脚の高さは1.7cmと低い。遺構の中央部、焼土の周囲に広がる黒色土の範囲の貼床面及び貼床面下位から出土している。外面は脚部下端に一部工具ナデが確認できるが、その他の部分は各方向の指ナデが施されている。部分的には指押さええの痕跡も確認できる。内面底部付近は指ナデが施されており、工具痕と考

えられる縦長の痕跡が確認できる。脚部内面は一部に工具ナデが確認できるが、主に指ナデが施されている。脚部内面天井部分には指押さええの痕跡が残る。

12は増の口縁部資料である。口径は9.4cmを測る。遺構の南側から散在して出土している。貼床面、貼床面下位、貼床面からわずかに浮いた状態で出土している。外面口縁部上半は横方向、口縁部下半は斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。

13は増の口縁部資料である。口縁部上端でやや垂直気味に立ち上がる。口径は10.0cmを測る。内外面に煤が付着している。遺構の北東部、焼土と壁面の中間あたりの貼床面から出土している。外面口縁部は、上方から下方へと縦方向の工具ナデを施した後、口縁部上端ではさらに横方向の工具ナデを施している。上頸部付近には横方向の工具ナデが確認できる。内面口縁部は、斜め方向の指ナデが施され、上端を外面同様横方向の工具ナデで処理する。口縁部が開く形状をしているが、内面の調整がやや粗く、脚部の可能性も考えられる。

14は増の胴部資料である。胴部最大径は10.9cmを測る。遺構の南西部貼床面から出土した一括資料である。接合はしないが、12と胎土・色調が類似し、また径も合うため、同一個体の可能性が考えられる。外面は指ナデが施されており、よくナデられているが、その前にミガキが施されている可能性が高い。底部付近にわずかに工具ナデの痕跡が確認できる。内面胴部上端に一部工具ナデが確認できるが、他は指ナデが施されている。胴部が張り出す部分には列状に指押さええの痕跡が並ぶ。

15は増の底部資料である。底径は10.3cmを測る。遺構の南西部硬化面から出土している。外面は丁寧なミガキ、内面は指ナデが施されている。外面底部には部分的にミガキが薄い部分が見られる。

16～18は、その出土状況から、堅穴建物跡2号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

16は雙の口縁部の資料である。頭部内面には稜を形成している。口径は28.8cmを測る。遺構の北西部、中央部の焼土と壁面の中間あたりから出土している。貼床面から8cm程浮いた状態で出土している。出土点数も1点のみであり、他に判断材料がなかったため、流れ込み遺物と判断した。口唇部には横方向のミガキが施されている。外面口縁部には、幅5mm程度の横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯部分の上位には、幅6mm程度の目の細かい工具ナデが施されている。突帯はこの工具ナデの上から貼り付けられている。内面口縁部上端は横方向のミガキが施されている。口縁部はナデが施されている。

17は雙の口縁部資料である。頭部内面には稜を形成し

ている。遺構の北側に散在して出土している。3点の土器片の接合資料であるが、それぞれ検出面近く、貼床面から7cm程度浮いた状態、貼床面から出土しており、流れ込みと判断した。外面口縁部上端には幅の細い工具でミガキが施されている。口縁部には工具・単位幅が不明瞭なナゲが丁寧に施されている。口縁部下端には筋のはっきりした横方向の工具ナゲが施されている。胴部上端には横・斜め方向の工具ナゲが施されている。内面口唇部には指押さえ痕跡が凹みとして残っている。口縁部上位はミガキ、口縁部中位は幅の細い工具ナゲ、口縁部下位には幅の太い工具ナゲが施されている。胴部上位には部分的に斜め方向の工具ナゲや、縦方向のミガキが施され、口縁部まで及ぶものも見られる。頸部付近には指押さえ痕跡が多く残る。

18は高杯の脚柱部資料である。遺構の北側、焼土と北壁の中間付近で出土している。貼床面から12cm程浮いた状態で出土しており、また、出土点数も1点のみであったため、流れ込みと判断した。外面は斜め方向のミガキがまばらに施されている。脚柱部下端には、指押さえ痕跡と爪形の痕跡が残る。内面はナゲやミガキが施されている。脚柱部と裾部分の境目はナゲ調整が不十分なため、接合線が明確に確認できる。

石器・礎(第2-8図)

石4は砥石である。焼土の中心より北東に約50cmの位置で、貼床面から出土している。

石5は磨破石である。表面に擦痕、表面の一部および、側面に敲打痕が確認できる。焼土の南側、黒色土の範囲内から出土している。

石6は礎である。焼土に隣接した黒色土の範囲の貼床面から出土している。上面の一部に平坦に近い面があるが、使用痕は確認できない。

炭化物・炭化木(第3分冊 自然科学分析参照)

竪穴建物跡2号では16点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から、竪穴建物跡2号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し検討を行い、2点の炭化物について放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。炭1は遺構の中央部よりやや北東の位置から、炭2は遺構の中央部よりやや北の位置の貼床面から、それぞれ出土している。

分析の結果、2σ 暦年代範囲を見ると、炭1が250calAD-383calAD(95.4%)、炭2が252calAD-381calAD(95.4%)となり、ともに3世紀中頃～4世紀後半の値となっている。

また、炭2については、樹種同定も実施しており、その結果、炭化材はヒサカキと同定されている。

竪穴建物跡3号(第2-9図)

竪穴建物跡3号は、串良川へ下る斜面から20mほど

内側に入ったF36区Va層から検出した。全体の4割ほどを竪穴建物跡4号に切られている。周辺には大型の竪穴建物跡である竪穴建物跡5号や7号がある。竪穴建物跡4号に切られているが、約3.2m×3.2mの隅丸方形の建物と想定でき、建物の軸はほぼ南北方向を向いている。検出面から底面までの深さは20～30cm程度であり、底面から約10cmの厚さで貼床が形成されている。炉跡・硬化面および遺構に付属すると考えられる柱穴は確認されていない。

出土遺物(第2-10図)

遺物は西壁中央部付近から土器が集中して出土している。出土状況を見ると、貼床面から出土しているものも見られるが、同一個体の破片が壁側から中心部に向けて傾斜しながら出土しており、これらは竪穴建物跡3号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだものと考えられる。土器以外には鉄滓も1点出土しているが、検出面直下の出土であり、流れ込み遺物である。また、石器の出土は見られなかった。

土器(第2-11・12図)

19～21は、その出土状況から、竪穴建物跡3号に帰属する可能性が高い土器群である。

19は完形に復元できた甕である。口縁部と胴部の境目に段差を設け、口縁部が外傾する甕C類である。脚部の高さは1.8cmであり、脚部内面天井部は下方に膨らみを持つ。口径17.9cm、底径8.3cm、器高20.3cmを測る。西壁中央部付近に集中して出土している。3点の破片のうち2点が貼床面から出土しており、1点がやや浮いた状態で出土している。口縁部は厚く成形され、胴部との境には段が設けられている。内外面ともに丁寧な調整が施されているが、粘土帯の接合等の成形の際に生じた凹凸はそのまま残存している。口縁部から胴部中程にかけて煤の付着が見られ、ほぼ全周する。

19の外面口縁部は、幅約3mmのミガキを斜め方向に施した後、口縁部上端のみ、その上から横方向にも施している。このミガキは高杯等に見られる精緻なミガキと比較すると、単位内のスジ状の条線が肉眼でも確認でき、やや簡易なミガキと言える。胴部上端は、横方向の丁寧な工具ナゲが施され、繰り返し調整を施すことにより、部分的には光沢を持つ箇所が確認できる。胴部上位より下位にかけては、縦・斜め方向の丁寧な工具ナゲが施され、光沢を持つ箇所も多く見られる。脚部は幅3mm程度のミガキが施されている。脚部と胴部の境の調整は工具を打ち込みながら、胴部から脚部に向けて施されている。内面口縁部は、幅約3mmの横方向のミガキが施されている。胴部は幅約2cmの斜め方向の工具ナゲが施されている。胴部中程から底部にかけては、工具ナゲの後、縦方向のミガキを施しているが密ではない。脚部は単位不明瞭なナゲが施されている。

20は甕の胴部下位の破片資料である。北西部の貼床面から出土している。外面胴部下位は、縦・斜め方向の丁寧な工具ナデが施されている。光沢は見られない。脚部上端は、斜め方向の工具ナデが施されている。内面胴部下位から底面にかけては、縦・横方向の工具ナデの後、縦・斜め方向の光沢を持つミガキが施されている。

21は高坏の坏部の破片資料である。西壁中央付近、貼床面から出土している。外面には丁寧な工具ナデが多方向に施されており、その後、幅約1mmの沈線、もしくは沈線状の調整が施されている。工具ナデ部分には、一部光沢を持つ箇所が見られる。屈曲部よりも下位には、幅約2mmの光沢を持つミガキが施されている。内面には単位が不明瞭な丁寧な工具ナデが施されている。工具の単位幅は不明瞭であるが、各方向の幅は確認できる。屈曲部よりも下位にはナデが施されている。

22～26は、その出土状況から、堅穴建物跡3号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

22は頸部がわずかにくびれ、口縁部が外傾する甕B類の口縁部から胴部中程までの資料である。口径は29.9cmを測る。貼り付け突帯には刻目が施されない。西壁中央付近、貼床面よりも5cm程度深い位置および、堅穴建物跡4号の埋土中から出土している。外面口縁部は、斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデが施され、その上から突帯が貼り付けられている。突帯下位には斜め方向の工具ナデが施されているが、それ以下の胴部には、幅4～5mm程度の工具ナデが様々な方向に施されており、方向や間隔を揃えるといった意識は見られない。粘土帯の接合部分に特に顕著に調整を施している点から、接合痕跡を消去することに注力した結果とも考えられる。内面口縁部は、横方向の工具ナデが施されている。突帯裏側付近は、指押さえの痕跡が2列並んだ状態で確認できる。胴部上半には斜め方向の工具ナデが施され、胴部下半は摩擦が著しく調整痕は確認できない。

23は完形に復元できた甕である。頸部がわずかにくびれ、口縁部がわずかに外反する甕C類である。脚部の高さは2.4cmであり、脚部内面天井部がわずかに膨らむ形状を呈している。口径29.4cm、底径9.8cm、器高35.5cmを測る。西壁中央付近から、中央部に向かい傾斜しながら集中して出土している。遺構廃絶後の凹みに廃棄されたものと考えられる。口縁部から胴部中程までで煤が付着しており、その範囲は全体の8割程度にも及ぶ。外面口縁部上端は、横方向のハケ目が施されている。口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には、幅5mm程度の横方向のハケ目が施された後、突帯が貼り付けられている。胴部上位突帯直下部分には、横方向の工具ナデが施され、胴部中程までは斜

め方向の工具ナデが施されている。胴部中程は、横方向の工具ナデが施された後、横方向のミガキが施されている。光沢感はないが、器面は平滑である。胴部下位には、器面が摩擦した範囲が広がり、被熱を受けたものと考えられる。部分的には剥落が見られる。その摩擦部分の直下、胴部下端には、わずかにではあるが横方向のミガキが確認できる。脚部は斜め方向の工具ナデ及び、単位が不明瞭な横方向のナデが施されている。内面口縁部から胴部中程までは、斜め・横方向の工具ナデが施され、その後口縁部上端には、横方向のハケ目が施されている。胴部下位には、摩擦の範囲が確認できるが、外面と比べると摩擦は著しくなく、剥落は見られない。内面底部は縦・斜め方向のミガキが施されている。密なミガキではないが、やや光沢を持つ。脚部内面には単位不明瞭なナデが施されている。

24は頸部がわずかにくびれ、口縁部が外傾する甕C類である。口径29.5cmを測る。西壁中央付近で、西側から廃棄もしくは、流れ込んだ様な状況で出土しており、また、堅穴建物跡4号からも同じような状態で出土している。外面口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後、突帯を貼り付けている。胴部上半は斜め方向のナデが施されているが、単位は不明瞭である。胴部下半は幅2～3mm程度の斜め方向のミガキが施されている。光沢感はないが、器面の砂粒は沈み込み平滑である。拡大鏡による観察では単位が確認できるが、肉眼では認識できない。内面口縁部から胴部上半にかけては、横・斜め方向の工具ナデが施されている。器面は平滑であり、調整痕の痕跡は薄い。胴部下半は横方向の工具ナデの後、縦・斜め方向のミガキが施されている。ミガキは光沢を持つものと持たないものがあり、下位ほどミガキが密になるが、外面ほどではない。

25は口縁部がほぼ直行する甕D類の口縁部から胴部下位の資料である。口径は24.9cmを測る。出土状況から23と同じく、遺構廃絶後の凹みに廃棄されたものと考えられる。外面口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向のハケ目を施した後、突帯を貼り付けている。胴部は斜め方向の工具ナデを施した後、縦方向のミガキを施している。ミガキは胴部下位ほど密になる。内面口縁部はナデが施されているが、単位幅は不明瞭である。胴部上半は縦方向の工具ナデを施した後、横・斜め方向の工具ナデを施している。さらに部分的には、横・斜め方向の工具ナデの後、縦方向のミガキが施されている。胴部下半は、摩擦により調整痕が不明瞭であり、器面に剥落が見られる。煮炊き後の洗浄等、使用に伴う摩擦の可能性が考えられる。外面にも一部剥落の著しい箇所が見られる。

26は鉢の胴部から脚部の資料である。脚部は低く成形

されている。底径は8.3cmを測る。西壁中央部付近及び、竪穴建物跡4号の埋土中から出土している。貼床面から10cm程度浮いた状態で出土しているため、流れ込みと考えられる。26を含めて、竪穴建物跡4号の西壁中央部付近には、23、25など完形品を含めた土器が集中して廃棄もしくは、流れ込んでいる状況である。

26の外面部下半は、縦方向のミガキが施されている。胴部と脚部の境は、ミガキが横方向に変わり、脚部は斜め方向のミガキが施されているが、端部にはミガキは確認できず、指押さえの痕跡が部分的に残る。内面部下半は、斜め方向のミガキが施されている。下端にも同じく斜め方向のミガキが施されているが、上位のミガキと比較して、細かなミガキが施されている。脚部内面は、部分的に工具ナデや、指押さえの痕跡が確認できる。

鉄滓(第2-12図)

竪穴建物跡3号からは1点1.0gの鉄滓が出土している。鍛冶滓のslagである。遺構の中央部北側で、貼床面から出土している。

竪穴建物跡4号(第2-9図)

竪穴建物跡4号はF36区Va層から検出した。竪穴建物跡3号・5号を切っており、竪穴建物跡3号・5号よりも新しい遺構であることが分かる。東西約4.2m、南北約4mの方形を呈し、検出面から底面までの深さは40～50cm程度であり、底面から10～20cm程度の厚さで貼床が形成されている。ただし、竪穴建物跡3号と接する西壁北側では、貼床面が見えなく立ち上がる形状を呈している。A-A'断面を縦ると、竪穴建物跡3号に接していない西壁では、このような立ち上がりは確認できないため、これは竪穴建物跡3号側からの埋土の流入を防ぐための構造とも考えられる。硬化面は貼床上面に確認でき全面に広がる。貼床埋土とは硬化している点の他に違いは見られない。が跡・焼土跡・土坑や柱穴は検出されていない。遺構の中央部には、貼床面の上に黒色土の広がりが確認でき、堆積状況から見て、流入した土とは考えにくく、何らかの活動の痕跡と考えられる。竪穴建物跡3号と同じくほぼ南北方向軸で建てられている竪穴建物跡である。

出土遺物(第2-10図)

土器は遺構全体に散在する状況で出土しており、北西部にやや集中する土器は流れ込みのものが多い。残りの良い土器は遺構の南壁中央部付近から出土している。南東角部付近では鉄滓等が集中して出土している。

土器・土製品(第2-12図)

27～31は、その出土状況から、竪穴建物跡4号に帰属する可能性が高い土器群である。

27は口縁部が内湾する甕D形の口縁部から胴部上位の資料である。口径34.0cmを測る。外面突帯下位には炭

化物の付着が見られる。遺構の南側壁面付近で貼床面から出土している。

外面口縁部は横方向の工具ナデの後、縦・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯部分の調整は、不明瞭であり確認できない。胴部上位は幅約6mmの縦方向の工具ナデが施されている。内面部縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。部分的には器面の表面が剥落し、その下に斜め・横方向の工具ナデが確認できる。突帯部分の内面は、横方向の工具ナデが1条施されている。胴部上位には幅約5mmの斜め・横方向の工具ナデが施されている。調整は胴部中程では工具幅が狭くなり、非常に密に施されている。内外面ともに、器面の剥落した部分から、下地の様な調整痕が確認でき、その下地の土から薄い粘土を貼り付けて整形し、その後、さらに器面調整を行っていることが観察できる。口唇部を上から観察すると、内外面ともに被膜状の粘土の貼り付けが確認でき、口唇部断面を見ると、貼り付けられた部分が盛り上がり、凹状の断面となっている。この粘土膜の剥落は口縁部でのみ確認されることから、口縁部分のみ被膜されていると考えられる。

27の突帯部分から胴部上位にかけては、広い範囲に煤の付着が見られた。この付着炭化物の放射性炭素年代測定(AMS測定)をおこなったところ(第3分冊自然科学分析参照)、2σ 曆年校正年代は確率の高い値で348caAD-436caAD(85.6%)となった。おおよそ4世紀中頃～5世紀中頃の値である。

28は鉢の胴部下半と考えられる資料である。遺構の南壁中央部付近及び、中央部付近から出土している。中央部付近の1点のみ貼床面から浮いた状態で出土しているが、南壁中央部付近の破片は全て貼床面からの出土である。外面胴部下位には、縦方向のミガキが施されている。胴部下端には横方向の単位不明なナデ、その下位には縦方向の工具ナデが施されている。内面部下位には、縦・横方向の工具ナデが施されている。

29は高杯の脚部資料である。底径は14.4cmを測る。遺構の南側中央部で、貼床面及び貼床面よりも下位、貼床埋土中から出土している。外面脚柱部は、縦方向のミガキが施され、脚柱部下位には斜め方向の工具ナデが施されている。脚柱部の上位から中位にかけては、斜め方向のミガキが施され、下位には横方向の工具ナデが施されている。脚柱部内面には、斜め方向の工具ナデが施されており、上端と下端には指押さえの痕跡が列状に残る。脚柱部は上位から中位にかけて、斜め方向の工具ナデが施され、下位には横方向の工具ナデが施されている。

30は高杯の坏部下位から脚部の資料である。まず坏部と脚部を接合し、坏部底部を埋め込んでいる。遺構の北西部、貼床面よりも下位、底面から出土している。外面坏部下位は、縦・斜め方向のミガキの後、所々に工具ナ

デが施されている。脚部にも縦方向のミガキの後、所々に工具ナデを施している。ミガキを施した後に、わざわざ工具ナデを施す意図は不明である。

内部内面は、横・縦方向のミガキが施されている。脚部内面には、所々に工具ナデが確認できる。

31は埴の胴部資料である。胴部最大径は8.1cmである。遺構の中央部と東壁の中間付近、貼床面から出土している。外面胴部は、縦・斜め方向の工具ナデが粗く施されている。胴部下位の屈曲部付近は、幅2mm程度の横方向のミガキが施されている。このミガキが施されている部分は、粘土を薄い皮膜状に貼り付けた上から、ミガキを施している。底部は幅5mm程度の丁寧な工具ナデが施されている。内面胴部上端は、斜め方向の工具ナデが施されている。その下位には連続した指押さえの痕跡が確認できる。胴部下半は、斜め・横方向の工具ナデが施されている。内面屈曲部には、縦方向の指ナデが施されている。また、内面上位には粘土の接合痕が確認できる。

32・33は、その出土状況から、竪穴建物跡4号礎絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

32は埴の口縁部資料である。口径は5.9cmを測る。一括取り上げ遺物であり、貼床面から浮いた状態で出土している。口縁部下位には丹塗りの痕跡が残る。外面口縁部は斜め方向のミガキを施した後、上部には横方向のミガキを施している。内面口唇部付近は、横方向のナデが施されている。口縁部は横・斜め方向のミガキが施されている。

33は轆の羽口である。排出口付近の資料であり、先端部の一部ガラス化したスラグが厚く付着している。器壁の厚さが1.4cmと厚いことから専用品の轆の羽口と考えられる。推定される羽口の径は3.0cmである。残存部の外面全体に鉄滓が付着しており、一部はガラス化している。非常に被熱を受けた資料であり、全体的に黒っぽい色調を呈している。検出面直下で出土していることから、流れ込み遺物と考えられる。

図化していないが、竪穴建物跡4号からは他に1点の轆の羽口片が出土している。高坏の脚の転用品と考えられる資料であり、送風口付近の破片と考えられる。転用前の高坏の脚部の形状は、竪穴建物跡8号出土の轆の羽口92の様な脚部に鋭角な屈曲を設ける形状と考えられる。外面に鉄滓の付着が確認できるが、同時に断面にもスラグの塊が付着している。検出面付近で出土しており、流れ込みである。

鉄製品・鉄滓(第2-12図)

鉄1は鉄鏝である。基部が欠損した柳葉鏝の鏝身と考えられる。貼床面より下位、底面付近で出土している。片側と推測され、開部付近には木質が残っている。薄いつば状で、残存部の最大長5.5cm、最大幅1.1cm、最大厚0.2cmを測り、重量は6.5gを量る。

竪穴建物跡4号からは、大きさが1~5cm大の、計33点の鉄滓が出土した。総量は110.0gである。内容は椀形滓・鉄塊・スラグであり、全て鍛冶滓である。椀形滓は1点出土しており、遺構の南東部の鉄滓が集中する箇所、貼床面から出土している。鉄塊は4点約50gが出土しており、1点のみ鉄滓集中箇所の貼床面から出土しているが、その他は貼床面から浮いた状態で出土している。

竪穴建物跡4号からは轆の羽口が出土しているが、2点ともに流れ込みと考えられ、椀形滓や鉄塊が貼床面から出土しているが、各1点のみである。また、炉跡も検出されていないことから、建物内で鍛錬鍛冶(小鍛冶)を行っていたとは考えにくい。

装飾品(第2-13図)

竪穴建物跡4号からは2点の大珠が出土している。2点の装飾品は遺構の東壁中央付近で、貼床面からまともに出土している。

装1は両側からの穿孔が1か所、片側からのみの未穿孔箇所が1か所確認できる。長さ1.85cm、幅0.85cm、厚さ0.38cmを測り、重量は0.7gを量る。蛇紋岩製であり、明緑色を呈する。

装2は両側からの穿孔が1か所確認できる。長さ1.8cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmを測り、重量は0.7gを量る。蛇紋岩製であり、暗緑灰色を呈する。

炭化物・炭化木・炭化種子(第3分冊 自然科学分析参照)

竪穴建物跡4号では、4点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から、竪穴建物跡4号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し、1点の炭化木について放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。4号炭1は遺構の西壁中央付近、貼床面から出土している。分析の結果、確率の高い2σ暦年代範囲を見ると、321calAD~399calAD(78.5%)、およそ4世紀前半~4世紀末の値となっている。

また、この炭化木については、樹種同定も実施しており、その結果、炭化木はコナラ属アカガシ亜属と判明している。

竪穴建物跡4号からは、2点の炭化種子が出土しており、種実同定の結果、モモの核(4号種1)と、ヤブツバキの種子(4号種2)であった。4号種1は遺構の南壁付近西寄り、貼床面からわずかに浮いた状態で出土しているため、流れ込みの可能性はある。しかしながら、他の流れ込み遺物から見ても、古墳時代の遺物ではあると考えられる。4号種2は遺構の中央部よりやや北側、貼床面から出土している。

竪穴建物跡5号(第2-14・15図)

竪穴建物跡5号はG36区Va層から検出した。竪穴建物跡4号に北東部角を切られている。大きさは東西軸7.7m、南北軸6.7mで隅丸方形を呈し、本遺跡古墳時

代竪穴建物跡の中でも最大級の大きさである。南側に張り出しを持ち、張り出し面を含めた南北軸の長さは7.5mである。検出面から底面までの深さは20～40cm程度であり、底面から10～20cm程度の厚さは貼床が形成されている。底面の地山は噴砂シラス層のV層で構成されている。遺構中央部貼床面からは焼土跡および土坑1が検出されている。焼土跡は長軸約80cm、短軸約50cmの隅丸長方形を呈し、多量の炭化物が伴い、炉跡と考えられる。土坑1の形状は、直径約30cm、貼床面からの深さ約55cmと柱穴に近い形状を呈するが、位置関係から焼土に伴う遺構と判断し土坑とした。南側の張り出し部付近には、貼床面から掘り込まれた土坑2が検出されている。大きさは長軸約160cm、短軸約135cmの略隅丸長方形の形状を呈し、貼床面からの深さは約60cmで、底面はほぼ水平である。硬化面は確認されていない。

竪穴建物跡5号の最大の特徴は、貼床面から掘られた中央付近の4つの大型の柱穴であり、南側の柱穴(P2・3)が大型で長軸120cm、短軸100cmの楕円形を呈し、貼床面からの深さは約100cmである。北側の柱穴(P1・4)は、南側の柱穴と比較してやや小ぶりであり、長軸約90cm、短軸約80cmの円形を呈し、貼床面からの深さは約60cmである。このような大型の柱穴を持つ竪穴建物跡は、本遺跡では他に類例がなく、また中央付近に4つの柱穴が配置されるものも検出されていない。建物跡の西側には5つの柱穴が並んで検出されている。西側壁面付近に直線的に配置されており、柱穴の間隔は一定ではなく、柱穴5～6間、柱穴6～7間は約40cm、柱穴7～8間、柱穴8～9間は約80cmである。柱穴5～8の4つは直径が約25cm、南西部角の柱穴9のみやや小さく直径約20cmである。柱穴5・6・8はほぼ同じ形状をしており、貼床面からの深さは約50cmである。柱穴9はやや深く約70cm、柱穴7は他とは形状が異なり、貼床面からの深さは約100cmで、途中で直径約20cmにすぼまり、底面径は約15cmとなる。このことから直径約15cmの柱が立っていたことが想定できる。

出土遺物(第2-16・17図)

遺構全体に満遍なく遺物が散在し出土している状況が見て取れ、貼床面から出土した遺物も同様に広範囲に散在した状況で出土しているのが特徴である。また完形に復元できた遺物もない。

土器(第2-18図)

34～42はその出土状況から、竪穴建物跡5号に帰属する可能性が高い土器群である。

34は甕の胴部から脚部までの資料である。脚部の高さは0.4cmであり、わずかに凹む程度である。底径は6.2cmを測る。遺構の東壁付近に南北方向に帯状に分布しており、一部は土坑2(南側土坑)の周辺からも出土している。1点が貼床面から出土し、残りは貼床埋土中、もし

くは底面から出土している。外面胴部下半から脚部にかけては、斜め方向の工具ナデが施されている。また、脚部には指押さえの痕跡も確認できる。内面胴部下半は、横・縦・斜め方向の工具ナデが施され、部分的には指押さえの痕跡も残る。脚部端部は指押さえにより成形されている。脚部の低さと、この指押さえから35のように、さらに脚部先端が付加延長されたものであった可能性が考えられる。

35は甕の胴部から脚部までの資料である。脚部の高さは1.4cm、底径は9.7cmを測る。遺構の東壁付近に南北方向に帯状に分布して出土しており、1点のみ張り出し部手前で出土している。ほぼ全ての破片が貼床面よりも下位の貼床埋土中から出土しているため、竪穴建物跡5号使用開始以前に製作された土器と考えられる。外面胴部では縦・斜め方向の工具ナデが施されるが、調整痕が不鮮明な箇所も見られる。脚部は横・斜め方向の工具ナデが施され、脚部端部は指押さえにより仕上げられている。内面胴部下半は、横・斜め方向の工具ナデが施されている。脚部内面は、斜め方向の工具ナデや、指押さえの痕跡が確認できる。また、脚部断面には脚部の接合痕跡が確認できる。

36は甕の脚部付近の資料である。脚部の高さは0.8cm、底径は7.0cmを測る。中央の炉跡と東壁の中間付近に集中して出土している。全ての破片が底面から出土しており、竪穴建物跡5号使用開始以前に作成された土器と考えられる。外面胴部下半は、斜め方向の工具ナデが施されている。脚部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。脚部端部は指押さえにより仕上げられている。内面胴部下半は、横・斜め方向のハケ目が施されている。脚部はナデが施されている。

34・35・36の3点とともに甕の脚部付近の資料であり、かつ遺構の東壁付近を中心に、貼床埋土中から底面から出土しているという同じ特徴をもつところが興味深い。

37は甕の口縁部から肩部の資料である。口縁部は外反し、口縁部中に刻目を施す段を持つ。口径16.0cmを測る。遺構の東側壁面付近に南北方向に帯状に出土しており、1点のみ中央部付近で出土している。この中央部付近で出土した1点のみ貼床面から約7cm浮いた状態で出土しているが、その他の破片は全て貼床面から出土している。外面口縁部上半は、横方向のハケ目が施されている。口縁部中位の段部分よりも下位は、横・斜め方向の工具ナデの後、縦・斜め方向のミガキが施されている。刻目が施される段部分は低く、粘土紐を貼り付けて突帯とするのではなく、調整により段を成形した可能性が考えられる。肩部付近は斜め方向のミガキが施されている。内面口縁部上位は、横方向のハケ目が施されており、調整痕から、外面と同じ工具原体により調整を施していると考えられる。中位より下位にかけては、横・斜め方向の

工具ナデの後、外面の段部分の内面側では、部分的に粘土を貼り付け、その上から縦・斜め方向のハケ目を施している。その後さらに、粘土貼り付け部にてきた段差を解消するために、幅2～3mm程度の斜め方向の工具ナデを施している。口縁部下位には、部分的にミガキも施されている。胴部には、斜め方向の工具ナデの後、幅2mm程度の沈線状の工具ナデの様な調整が施され、さらにその後、指押さえや指ナデが施されている。

38は壺の口縁部資料である。口径は21.9cmを測る。遺構の中央部から東壁付近へ帯状に分布して出土している。東壁に最も近い1点のみ貼床面から浮いた状態で出土しているが、他は全て貼床面から出土している。外面口縁部は、縦方向のミガキを施した後、上位から中位まで斜め方向のミガキを施し、さらに口縁部上端に横方向のミガキを施している。突帯貼り付け箇所は横方向のミガキを施した後、突帯を貼り付けている。なお、ミガキの間に横方向の工具ナデが散見できることから、ミガキの地下として、口縁部全体に工具ナデが施されていると考えられる。内面口縁部上位は横方向のミガキ、中位は斜め方向のミガキを施している。下位では横方向のミガキが施されており、またミガキの地下に工具ナデが確認できる。口縁部成形は、一旦厚さ6mm程度の口縁を成形した後、その上に重ねて粘土を貼り合わせ、口唇部を除く口縁部全体を肥厚させている。

39は甕もしくは壺の胴部下半から底部の資料である。底径は8.6cmを測る。中央部の底面から出土しており、竅穴建物跡5号使用開始以前に製作された土器と考えられる。底部は平底を呈し、外面には様々な方向に施された工具ナデが散見される。器面には少量の鉄錆や砂(石英・長石・磁鉄鉱等)の付着が見られ、調整は不鮮明である。内面も外面同様の様々な方向に施された工具ナデが散見されるが、器面の摩滅が著しく、また剥落も広い範囲で見られるため、調整の観察は困難である。被熱を受けている(赤色化している)箇所は見られないため、剥落等の原因は不明である。

40は高坏の坏部から脚部の資料である。口縁部と脚部の端部が欠損している。41と同様に遺構の南東部で出土している。坏部外面中位は、縦・斜め方向のミガキが施されているが、部分的には、その隙間に横方向の工具ナデが確認できるため、ミガキの地下として、横方向の工具ナデが施されていると考えられる。坏口縁部と底部の接合部分は、横方向の工具ナデが施されている。当初、この工具ナデは上記の地下用の工具ナデとは異なり、最終的な仕上げとして施したものと考えていたが、観察の結果、部分的に横方向のミガキに切られている箇所が見られたため、ミガキの地下として施した工具ナデをあえて残したことが確認された。坏部から脚部屈曲部分付近は、斜め・横方向のミガキが施されている。脚部は縦方

向のミガキが施されている。坏部内面は横・斜め方向のミガキが、脚部内面は縦方向のナデが施されている。坏口縁部と底部の接合部端部は擬似口縁となっている。このことは、各部位にある程度乾燥させた後、接合したことを表しており、また両部位を接着するために、粘土を貼り付けて接合している。よって、内面のミガキはそれぞれ、接合前に施されたものである。

41は高坏の坏部である。口径は26.4cmを測る。遺構の南東部で、貼床面から出土している。色調や胎土から40と同一個体の可能性が考えられる。外面口縁部は工具ナデを施した後、口縁部上端に横方向のミガキを施し、さらにその後、坏底部側より口縁部上端へ向かい斜め方向のミガキを施している。内面口縁部は、横方向の工具ナデの後、部分的に横方向のミガキが施されている。坏部中位は斜め・横方向の工具ナデの後、斜め方向のミガキが施され、さらにその後、横方向のミガキが施されている。

42は高坏の脚部資料である。端部はともに欠損している。中央の罎跡と東壁の中間付近、貼床面から出土している。外面は幅の細いミガキが縦・斜め方向に施されている。内面は指ナデが施されており、指押さへの痕跡も確認できる。

43～46は、その出土状況から、竅穴建物跡5号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

43は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部上位の資料である。口径30.0cmを測る。遺構の西側から散見して出土しており、貼床面から7～10cm程度浮いた状態で出土しているものが多い。また1点は柱穴P3の埋土中から出土している。外面口縁部は斜め方向の工具ナデを施した後、口唇部側および突帯上部で横方向の工具ナデを施しており、指押さへの痕跡も確認できる。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデが施されており、その上から突帯を貼り付けている。突帯には横方向のハケ目が施されている。胴部には横方向のミガキが施されているが、ミガキとミガキの隙間からは、丁寧な横方向の工具ナデが散見される。内面口縁部上端には、横方向の工具ナデが、上端以下には横・斜め方向の工具ナデが施されている。また、口縁部上位には指押さへの痕跡が多く確認できる。突帯直下には幅1mm、長さ1cm以上の細長い穿孔が確認できる。穿孔後の処理が非常に丁寧であり、工具を差し込んだ際の粘土の動きの痕跡は確認できない。穿孔角度から考えると、内面から外面に向かって穿孔したと考えられる。

44は甕の口縁部から胴部上位の資料である。頸部は大きくくびれ、口縁部は外傾し、形状から丸底甕と考えられる。口径20.0cmを測る。遺構の西半分の中央部に帯状に分布して出土しており、2点は貼床面から出土している

が、残りは貼床面から10cm以上浮いた状態で出土している。外面口縁部上半は、横方向の工具ナデが、口縁部下半は斜め方向の工具ナデが施され、部分的には横方向のナデ痕も確認できる。胴部は不鮮明ながら、斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上半は、横方向の工具ナデが施されている。口縁部下半も同じく横方向の工具ナデが施されているが、こちらは工具の打ち込み痕跡が明瞭に残る。口縁部と胴部の境目は調整痕がはつきりせず、器面がやや粗いため、指で軽くなぞる程度の調整しか施されていないと考えられる。胴部には斜め方向の工具ナデが施されている。

45は埴の胴部から底部資料である。底径3.4cmを測る。遺構の南西角部付近、貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。外面胴部には上位には斜め方向、胴部中位以下には横・斜め方向のミガキが施されている。内面は指ナデが施されている。

46は埴の胴部資料である。遺構の北西部分で出土している。出土した標高値が不明のため、遺構への帰属の有無は不明である。外面の最終的な調整は、胴部下位に横方向のミガキ、その後斜め方向のミガキを施した後、胴部中位では縦方向の工具ナデを胴部上位にまで施し、胴部上位ではその上から縦方向のミガキを施されている。内面は指ナデが施されており、胴部下半には指押さえ痕跡が多く確認できる。部分的にはあるが工具ナデの痕跡も確認できる。胴部上半には粘土を貼り付けており、粘土貼り付け部分に指ナデが施されている。

石器・礎(第2-19図)

石7~10は棒状礎である。4点のうち3点が底面から出土している。石11・12は礎である。全て明確な使用痕は確認できていない。

石7は遺構の東壁付近、底面で出土している。

石8は遺構の南西角部、底面で出土している。

石9は遺構の西側中央部、底面で出土している。

石10は遺構の西壁付近、柱穴P7に隣接して貼床面から出土している。

石11・12は礎である。

石11は中央部の炉跡と西壁の間付近、貼床面よりも下位の貼床埋土中から出土している。

石12は柱穴P2に隣接する位置で、遺構埋土中から出土しているが、標高値は不明である。

装飾品(第2-19図)

堅穴建物跡5号からは大珠が1点、管玉が1点の計2点の装飾品が出土している。2点ともに遺構北側で貼床面から出土している。

装3は両側からの穿孔が1か所確認できる。長さ1.3cm、幅1.0cm、厚さ0.35cmを測り、重量は0.6gを量る。蛇紋岩製であり、緑灰色から暗青灰色にかけての色調を呈する。

装4は長さ2.58cm、幅0.42cm、厚さ0.42cmを測り、重量は0.7gを量る。碧玉製であり、緑灰色の色調を呈す。

炭化木・炭化種子(第3分冊 自然科学分析参照)

堅穴建物跡5号では11点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から、堅穴建物跡5号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し検討を行い、1点の炭化木(5号炭1)について放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。炭1は遺構の東壁中央部よりやや北側で、壁面に隣接して貼床面から出土している。分析の結果、2σ暦年代範囲で251calAD-384calAD(95.4%)、およそ3世紀中頃〜4世紀後半の年値となっている。この炭化木については、樹種同定も実施しており、その結果、炭化木はスダジイと判明している。

堅穴建物跡5号からは、炭化種子も出土しており、種実同定の結果、コナラ属の子葉(5号種1)であった。

堅穴建物跡6号(第2-20図)

堅穴建物跡6号は、F38区Va層から検出した。調査区内では最も串良川に近い東側で検出された堅穴建物跡である。東西軸約4.8m、南北軸4.3mであり、南側に張り出しを持ち、張り出し部を含めた南北軸は5.0mである。埋土6を貼床面としており、中央部よりやや東側の一部は貼床を施さず、地山であるVx(噴砂シラス)層を床面としている。北側及び東西壁面は底面まで垂直に掘られているが、その後、壁面にも貼床を施し、床面から壁面へ緩やかに立ち上がり形成している。また南側に開いても、張り出し部の壁面を扶る様に掘り込んでおり、その後、埋め戻している。この埋め戻された土(埋土7)は一部が貼床埋土(埋土6)の下位より検出されているため、この埋め戻しは貼床面成形前に行われたと考えられる。検出面から底面までの深さは50〜60cmであり、貼床の平均的な厚さは約12cmである。

堅穴建物跡6号の埋土は、貼床面と考えられる硬めの埋土6を含めて、全て砂質土を主体としている。貼床が壁面にまで及んでいるのは、この地山層の緩さも影響している可能性が考えられ、壁面の崩落防止処置の可能性が考えられる。同様の処置は堅穴建物跡3・4号間の壁面でも確認されている。遺構内に炉跡・焼土跡や炭化物範囲は確認されていない。硬化面は貼床の上面が硬くしまっているが、硬さ以外に貼床埋土との差は見られない。柱穴は建物跡の東側からのみ検出されている。精査を行ったが、西側では1基も確認できなかった。柱穴は全部で7基検出されており、ほぼ全ての柱穴が貼床面(埋土6上面)から掘り込まれているが、P7のみ底面の地山層であるVx層から検出されている。柱穴の詳細は表2-10のとおりであり、柱穴P5とP7のみ極めて浅い。P3は埋土中に礎を多く含む、底面付近には平たい形状の礎が配置されていた。

表2-1 竪穴建物跡6号柱穴観察表

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	埋土
1	26	25	暗灰黄色
2	20	30	暗灰黄色
3	21	27	暗灰黄色
4	23	21	暗灰黄色
5	23	12	暗灰黄色
6	29	30	暗灰黄色
7	25	10	暗灰黄色

出土遺物(第2-21図)

南側の張り出し付近に遺物がやや集中して出土している。貼床面から出土している土器も、この範囲から出土しているものが多い。その他は遺構の全体に散在している状況であるが、東側の柱穴群周辺の遺物の出土はやや少ない。

土器(第2-22図)

47～50はその出土状況から、竪穴建物跡6号に帰属する可能性が高い土器群である。

47は口縁部が外反する甕B類の口縁部から胴部の資料である。口径28.4cmを測る。南壁中央付近、張り出し部の手前の貼床面から集中して出土している。外面口縁部は横方向の指ナデを施しており、口縁部から胴部上端にかけては、指押さえが列状に並ぶ。胴部上端には横方向の工具ナデおよびナデが、その下位には斜め方向の工具ナデが施されている。胴部中位には上位よりも幅の狭い斜め方向の工具ナデが施されている。残存部は少ないが、胴部中程からは器壁が薄くなるようである。内面口縁部は斜め・横方向の工具ナデを施し、指押さえを行う。胴部上位は斜め方向の工具ナデが、胴部中位にはナデが施されている。内面には粘土の接合痕が明瞭に残っており、その上下に指押さえが列状に確認できる。

48は口縁部がほぼ直行する甕D類の口縁部から胴部中程までの資料である。口径24.2cmを測る。張り出し部の手前の貼床面から集中して出土している。外面口縁部は横・縦・斜め方向の工具ナデが施されている。はじめに幅が1cm程度の横方向の、次に幅6～7mm程度と幅1cm程度の縦方向、最後に口縁部上端付近に横・斜め方向の工具ナデを施している。縦方向の工具痕には、工具の筋がはっきりと確認でき、少なくとも3つの工具原体を使用していると考えられる。突帯部分に関しては、突帯を貼り付ける前に下地として工具ナデを施しているようにも見受けられる。胴部には、横・斜め方向の工具ナデを施す部分と、斜め方向のミガキを施す部分が見られる。ミガキを施した部分は、その後、ミガキと同じ方

向に幅0.5mm程度の長細い沈線状の痕跡を残している。この痕跡を施す部分は特に光沢感強いのが特徴である。内面口縁部は、横・斜め方向の工具ナデと、単位幅が不明な丁寧なナデが施されている。突帯の裏側付近には、部分的にミガキ状の調整が施されており、やや凹んでいる。胴部には単位を持つ斜め方向の工具ナデも確認できるが、大部分は単位幅不明の丁寧なナデが施されている。

49は口縁部がわずかに内湾する甕D類の口縁部から胴部上位の資料である。遺構の中心と南壁の中程で集中して出土しており、東壁付近でも1点出土している。貼床面での出土である。外面口縁部には、横方向の工具ナデが施されている。部分的には斜め方向の幅2mm程度の長細い沈線状の痕跡が数条確認できる。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部には縦・斜め方向の工具ナデが確認できる。内面口縁部上端には、横方向の工具ナデが施されている。口縁部から胴部にかけては、斜め・横方向の工具ナデが、繰り返し施されている。外面全面に煤の付着が見られるが、特に突帯下位の付着が顕著に残る。

50は口縁部が内傾する甕C類の口縁部から胴部上位の資料である。48に隣接して、張り出し部の手前の貼床面から集中して出土している。外面口縁部には、斜め方向の工具ナデが施され、部分的に指押さえが並ぶ。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後、突帯を貼り付けている。胴部には単位幅不明のナデが斜め方向に施されている。内面口縁部上端には、横方向の工具ナデが施されている。口縁部から下位には、単位不明のナデが横・縦方向に施されているのが確認できる。また、胴部では粘土の接合痕と、接合部位の調整として指押さえが連続して確認できる。

51～54は、その出土状況から、竪穴建物跡6号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

51は甕・壺もしくは鉢の胴部下半から底部の資料である。脚部はわずかに高さを持つが、ほぼ平底に近い形状である。底径6.7cmを測る。遺構の南側中央付近で全ての破片が貼床面より5～20cm程度浮いた状態で集中して出土しており、廃棄もしくは流れ込みと考えられる。外面胴部下半は、縦・斜め方向の工具ナデの後に、胴部下端から上方に向けて縦方向のミガキをやや粗く施している。底部付近には、横方向の工具ナデが施されている。内面には全体的に幅1cm程度の工具ナデが施されている。

52は甕もしくは壺の胴部下半から底部資料である。底部は平底を呈する。底径6.2cmを測る。遺構の中央部、検出面近くで出土しており流れ込みである。外面胴部下位には幅6～7mm程度の斜め方向の工具ナデが施されてい

る。底部は底面も含めて、単位不明な丁寧なナデが施されている。内面胴部下位から底部にかけては、横・縦・斜め方向の工具ナデが施されている。

53 は高坏の口縁部資料である。西壁中央付近の検出面直下で出土しており流れ込みである。外面は横方向の工具ナデの後に、横方向のミガキが施されている。ミガキは口縁部上端には施されていないため、下地の横方向の工具ナデが確認できる。内面は横・斜め方向の工具ナデの後に、横・斜め・縦方向のミガキが施されている。ミガキはやや粗く施されているため、隙間から下地の工具ナデが確認できる。

54 は高坏の脚部資料である。底径は14.8cmを測る。遺構の中央部と南東部から出土しており、貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。外面脚柱部は縦方向のミガキが施されている。脚柱部は斜め方向のミガキが施され、端部には横方向のミガキが施されている。内面脚柱部には、斜め方向の工具ナデが施されている。部分的には、幅の細い工具ナデを曲線的に施す箇所も見られる。脚柱部には、斜め方向の工具ナデが施されている。

鉄滓

竪穴建物跡6号からは、遺構の南東部の検出面近くから3cm大の鉄塊が1点出土している。重量は22.24gである。流れ込みと考えられる。

装飾品(第2-22図)

竪穴建物跡6号からは大珠1点が出土している。遺構埋土中出土であり、流れ込みと考えられる。

装5は片側からの穿孔が1か所確認できる。長さ2.05cm、幅1.25cm、厚さ0.5cmを測り、重量は1.8gを量る。蛇紋岩製であり、緑灰色の色調を呈する。表面の穿孔部周辺に玉擦れ痕が見られる。

竪穴建物跡7号(第2-23図)

竪穴建物跡7号はG37区Va層から検出した。竪穴建物跡6号の次に串貝川寄りの位置で検出された竪穴建物跡である。南北軸約7.0m、東西軸約6.0mの隅丸長方形を呈し、張り出しは持たない。検出面から底面までの深さは、西側で約60cm、東側で約50cmであるが、壁面沿いでは約30～80cmの幅で底面を一段高く形成しており、一段高い底面の検出面からの高さは西側で約50cm、東側で約30cmである。この検出面から底面までの深さの差は、遺構の東側上面の削平がより著しいことに起因している。底面にはアカホヤ火山灰土を主体とする埋土の貼床が10～20cm程度の厚さで形成されており、縁辺の一段高い底面と同じ高さに揃えられ、一段高い底面はそのままだ面となっている。貼床の厚さは遺構中央部が約20cm、縁辺部が約10cmと、遺構中央部が緩やかな高まりを持つことが確認できる。

竪穴建物跡7号の中央部には、長軸(南北軸)約65cm、

短軸(東西軸)45～60cm程度の北西角部が欠けた形状の隅丸長方形の土坑1が検出されている。その土坑1を囲むように、南側に土坑2・3、北側に土坑4～6が検出されている。土坑1は深さ約20cmであり、南側は斜面が緩やかで、北側はやや急に立ち上がる形状を呈している。土坑底面の一部には被熱を受けた痕跡が確認されている。

土坑1内からは2点の金床石(石13・14)が出土している。一見すると2点が並び配置されている状況にも見えるが石13は使用面が下を向いており、逆さまになった状態で出土している。また、両金床石の下位からは鉄滓が出土している。土坑1の西側内部にはさらに掘り込まれた小土坑が検出されており、土坑内には炭化物が多く出土している。

土坑2は長軸(東西軸)約55cm、短軸(南北軸)約35cmの歪な楕円形状を呈し、深さは約20cmである。遺構内からは鉄滓が出土している。土坑2と土坑1は長さ約10cm、幅約10cmの浅い溝で連結されている。溝の壁面・底面はやや硬化している。

土坑3は土坑2の西側で検出されている。長軸(東西軸)約50cm、短軸(南北軸)25～30cm程度の楕円形を呈し、深さは約20cmである。

土坑4は土坑1の北西側に位置し、長軸(南北軸)約25cm、短軸(東西軸)約20cmの楕円形を呈する。深さは約5cmと浅い。

土坑5は土坑1の北側で検出されている。長軸約35cm、短軸約20cmの楕円形状を呈し、深さは約20cmである。

土坑6も土坑1の北側で検出されている。長軸約35cm、短軸約20～25cmの楕円形状を呈し、深さは約5cmと浅い。

この土坑1・4・5・6および、柱穴P4・5の隙間を縫うように、焼土域が形成されている。この焼土域の中心、4つの土坑に囲まれる範囲は特に強い被熱を受けており、貼床面の硬化が周囲よりも激しい。この焼土域が炉跡と考えられる。

竪穴建物跡7号の土坑と焼土域の周囲には、南北約3.5m、東西約2.5mの歪な長方形の範囲で硬化面が広がっている。焼土域から見ると、硬化面は北側に約50cm、東側に約60cm、南側に約150cm、西側に約100cmと、南側が広く、西側がやや広い。また、貼床範囲の南西角部付近にも、一部硬化面が確認されており、この硬化面からは輪の羽口の小破片が複数出土している。柱穴は焼土域を囲むように小型の柱穴が7基(P1～7)、硬化面範囲内とそれに隣接した柱穴が4基(P8～11)、硬化面外で貼床範囲内の柱穴が9基(P12～20)、建物周縁部の一段高い底面部分および、その内外の際で検出された柱穴が9基(P21～29)の計29基が検出されている。

柱穴は貼床範囲内および、遺構の東側と南側で検出されており、遺構の北側と西側の周縁部では検出されていない。

竪穴建物跡7号の西側では、底面で長さ約3m、幅約30～50cmの浅い溝が検出されている。この溝部分に隣接する一段高い底面のみが周囲よりも張り出して形成されているが、詳細は不明である。

出土遺物(第2-24～26図)

遺物は金床石・輪の羽口・椀形滓・鉄滓・鍛造剥片と鍛冶関連遺物が多く出土している。遺物の出土状況は、遺構の中央部および、南側で大型の破片等が出土しており、遺構の北側では遺物の出土は少なく、土器の破片も小さいものが多い。これは鉄滓や炭化物の出土状況も同じである。

土器・土製品(第2-27～30図)

55～61および、輪の羽口78～82は、その出土状況から、竪穴建物跡7号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

55は頸部がわずかにくびれ、口縁部がほぼ直行する甕C類の口縁部から胴部下位までの資料である。口径31.4cmを測る。遺構の中央部から南西角部方向に分布が見られ、中央部では貼床面から出土する破片が多く、中央部から離れるに連れ、貼床面から浮いた状態で出土し、一部は遺構外からも出土している。大部分の破片が貼床面から出土していることから、竪穴建物跡7号に帰属する遺物と考えられる。口唇部は横方向の工具ナデ、口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には、横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。突帯の下位には刻みが施されている。胴部は横・縦方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、縦方向のミガキを疎に施している。器面には粘土帯の凹凸と接合痕がやや残るが、土器自体の作りは粗くなく、主に縦方向のミガキが接合痕を消している。内面は斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、縦方向のミガキを施している。ミガキは外面よりも疎に施されており、器面を平滑にするための調整とは考えにくい。頸部付近では、部分的に口縁部と胴部の境の線を指押さえにより消している。

56は丸底の甕もしくは壺の胴部中程から底部の資料である。多くの破片が遺構の北東部に位置する柱穴P12の南から東側に隣接して出土し、一部が遺構の南東部に位置する柱穴P16の南側から出土している。全ての破片が貼床面から出土している資料である。外面は全体的に幅3～4mm程度の斜め方向のミガキが施されている。内面は胴部中位に横方向、胴部下半に横・斜め方向、底部付近では主に縦方向の工具ナデが施されている。

57は完形に復元できた鉢である。口径25.7cm、底径10.4cm、器高19.5cmを測る。遺構の南西部に集中して、

その大部分が貼床面から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデを施している。胴部は斜め・縦方向の幅約5mmの工具ナデを施した後に、胴部下半には縦方向のミガキを施している。脚部は横方向の工具ナデを施しており、指押さえの痕跡も残る。内面は口縁部から底面まで、横方向の幅約1.5cmの工具ナデを施した後に、胴部下半から底面にかけては、縦方向のミガキを施している。脚部内面は横方向の工具ナデが施されており、指押さえの痕跡も残る。器種は異なるが甕55や68と同様の器面調整が施されている。

58は完形に復元できた小型の鉢である。口径7.0cm、底径3.0cm、器高5.0cmを測る。炉跡の北東側で貼床面から出土している。外面は斜め方向の工具ナデが施され、底部付近には指押さえが行われている。内面には外面よりも幅の広い工具により工具ナデが施されており、口縁部付近には指押さえが巡る。

59は高環の脚部資料である。底径10.6cmを測る。遺構の東壁中央部付近で、貼床面から出土している。外面脚部は縦方向のミガキを施した後に、部分的に斜め方向の工具ナデを施している。また底部でもミガキの後に、横方向の工具ナデを施している。坏部底面付近は細かなミガキが、脚部内面は横方向の工具ナデが施されている。

60は完形に復元できた埴である。口径5.2cm、器高5.3cmを測る。遺構の中央部より50cm程北東側の位置の硬化面範囲内で、貼床面(硬化面)から出土している。外面口縁部には横方向の工具ナデが施され、頸部直上には細かな指押さえが並ぶ。胴部から底部にかけては、横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部には横方向の工具ナデが施されている。頸部直下には指押さえが並ぶ。胴部から底部にかけては、指ナデが施されているが、部分的に工具ナデも確認できる。

61は埴の胴部から底部の資料である。遺構の南壁中央部付近で集中して出土しており、一部は遺構の南東部でも出土している。出土位置は貼床面および、貼床面からわずかに浮いた状態で出土している。外面は非常に丁寧なナデが施されている。内面胴部上位には接合痕が残る。指押さえが並ぶ。後部中位は非常に丁寧な工具ナデが、下位は指ナデが施されている。

78～82は輪の羽口である。そのなかでも78～80は専用品の輪の羽口である。

78は一部破損しているが、全体の形状が復元可能な輪の羽口である。長さ14.1cm、排出口径2.7cm、器壁の厚さ2.0cmを測る。排出口の被熱によって、被熱が広い部分では全体の2/3程度が2次焼成を受けている。排出口の上部は一部がガラス質化しており、下部には薄く鉄滓が付着している。被熱の受け具合から、この輪の羽口は斜めに傾けた状態で設置されていたと考えられる。遺構の北壁中央部付近でまともな貼床面から出土している

ほか、炉跡の北東部・北西部でも貼床面から出土している。

79は一部破損しているが、全体の形状が復元可能な輪の羽口である。長さ13.3cm、排出口径2.6cm、器壁の厚さ1.9cmを測る。排出口の被熱を受けており、被熱が広い部分では全体の1/2程が2次焼成を受けている。排出口の一部には鉄滓の付着が見られ、ガラス質化している。被熱の受け具合から、この輪の羽口は水平か、わずかに傾けた状態で設置されていたと考えられる。遺構の南西角部付近に集中して貼床面から出土している。1点のみ遺構の南側で貼床面から出土している破片は、1辺約1cm程度の胴部小破片である。

80は送風口がわずかに欠損しているが、端部がわずかに欠けているのみで、ほぼ全体の形状が確認できる資料である。長さ11.1cm、排出口径2.1cm、器壁の厚さ1.4cmを測る。排出口の被熱によって、被熱が広い部分では全体の1/2程が2次焼成を受けている。排出口先端部全体に薄く鉄滓が付着しているが、排出口下部付近では鉄滓が厚く付着し、ガラス質化している。被熱の受け具合から、この輪の羽口は斜めに傾けた状態で設置されていたと考えられる。炉跡の北西・北東側と、遺構の南東角部付近および、南西部に散在して貼床面から出土しているが、一番大きな破片である排出口周部分と、次に大きな胴部片は遺構の南東角部付近で貼床面から出土している。送風口小破片は炉跡の北東側と遺構の南西部から出土しており、炉跡の南西側からは胴部小破片が出土している。全て貼床面での出土である。

81・82は高坏の脚部を転用した転用品の輪の羽口である。

81の長さは9.6cmを測る。脚部部が大きく開く形状の高坏であるため、送風口は広いが、排出口の径が最小径となり2.2cmを測る。器壁の厚さは1.6～0.6cmを測る。排出口から被熱を受けており、被熱が広い部分では脚柱部の下端まで被熱が及んでいる。排出口先端部全体に薄く鉄滓が付着しているが、排出口下上部付近では鉄滓の付着がやや厚い。被熱の受け具合から、この輪の羽口は斜めに傾けた状態で設置されていたと考えられる。また、脚柱部の一部は被熱により器壁が剥落しており、剥落した器壁の内側に被熱を受けているのが確認できる。遺構の西側と南側で貼床面から出土しており、西側からは排出口・胴部片・送風口と、出土した遺物の8割ほどが出土している。南側からは送風口と胴部小片が出土している。

82の長さは8.1cmを測る。脚部部が大きく開く形状の高坏であるため送風口は広く、そのまま緩やかに排出口まで径が狭くなる形状である。排出口が破損しているため、最小径は不明であるが、残存部での最小径は2.5cmである。器壁の厚さは1.2～0.6cmを測る。排出口側の

残存部分は被熱を受けているが、鉄滓等の付着は確認できない。炉跡の北東側と、遺構の南側で貼床面から出土しており、送風口部分を主とし、一部排出口側を含む全体の破片の8割は炉跡の北東側から出土している。遺構の南側からは排出口側の小破片が出土している。

以上のように、堅穴建物跡7号の貼床面からは専用品3点、転用品2点、計5点の輪の破片が出土している。この5点の輪の羽口のそれぞれの破片の出土地点を最も集中している箇所で見ると、78は遺構の北壁中央部付近、79は南西角部付近、80は南東角部付近、81は西壁中央部付近より、やや北側、82は炉跡の北西側で出土しており、散在して出土している状況が見られた。

62～77および、輪の羽口83・84は、その出土状況から、堅穴建物跡7号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

62・63の2点は、その出土状況から堅穴建物跡7号廃絶直後に流れ込んだ可能性のある土器群と考えられる。ともに遺構の南西角部に集中して出土しており、貼床面から出土している破片も多い。しかしながら、一部の破片に関しては、西側および南側壁面付近で、緩やかに傾斜しながら出土しており、流れ込みと考えられる。以上のように遺構の縁辺部のみ遺物が浮き、かつ貼床面からも出土している状況から、遺構が埋まり始めて間もない時期に流れ込んだ、もしくは廃棄された遺物と考えられる。ただし、堅穴建物跡7号の埋土の堆積がレンズ状堆積をしていない点が気になる。

62は頸部にびれを持たず、口縁部が直行しつづ、口縁部上端でわずかに外反する変C型の口縁部から胴部下端までの資料である。脚部のみ欠損している。口径30.0cmを測る。大部分が遺構の南西角部で出土しており、一段低い底面より10から20cm程度浮いた状態で出土している。また、壁面から遺構中央部に向かい傾斜しながら出土しているため、遺構内へ埋土が流入する過程で廃棄もしくは流れ込んだ可能性が高い。外面口縁部は、斜め方向のミガキが施されている。突帯部分は横方向の工具ナデが施され、その上から突帯が貼り付けられている。突帯直下には横方向のミガキが施されている。胴部中程までは、やや斜め方向のミガキが施され、胴部下位に行くほどミガキの方向は縦方向になっていく。内面口縁部上位は、横方向の工具ナデが施されている。口縁部の中程から胴部上位にかけては、斜め方向の工具ナデが施されている。胴部中程には縦方向の工具ナデが施されている。胴部下半には縦方向の工具ナデが施されているようであるが、摩滅が著しく痕跡が不明瞭である。

63は完全形に復元できた鉢である。口径26.6cm、底径11.8cm、器高20.0cmを測る。出土位置・出土状況ともに62と類似しており、ほぼ同時期に廃棄もしくは流れ込んだ可能性が考えられる。外面口は横・斜め方向の工具ナ

デが施され、胴部中程から下位では、幅4～5mm程度の工具により縦方向の工具ナデが施されている。脚部には横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施された後、脚部に下端以外は、胴部と同じ工具により斜め方向の工具ナデが施されている。内面は横・斜め方向の工具ナデが施され、胴部下位から底面にかけては縦方向のミガキが施されている。脚部内面は横方向のナデを施した後に、斜め方向の工具ナデや、横方向の丁寧な工具ナデが施されている。

64は口縁部がわずかに外反する甕C類の口縁部から胴部中程までの資料である。口径31.2cmを測る。炉跡の南側に集中して出土している。一部の破片は貼床面から出土しているが、大部分は貼床面よりわずかに浮いた状態で出土している。集中して出土していることと、貼床面からの距離が近いことから、竪穴建物跡7号に帰属する可能性も考えられる土器である。内外面ともに全体的に幅3～4mmの細い工具により調整が施されている。外面口縁部には横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分には、粘土を薄く貼り付け、その粘土部分に横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部上半には横・斜め方向の工具ナデが施されており、胴部の中程には縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部には斜め方向の工具ナデが施された後に、口縁部上位には横方向の工具ナデが施されている。胴部には横方向の工具ナデが施されている。

65は口縁部がわずかに外傾する甕D類の口縁部から胴部上位の資料である。口径32.6cmを測る。炉跡の南側と西側から出土しており、また一部は東壁に隣接した柱穴P24付近からも出土している。貼床面からわずかに浮いた状態や、5cm程度浮いた状態で出土している。炉跡の周辺に集中して出土していることと、貼床面からの距離が近いことから、竪穴建物跡7号に帰属する可能性も考えられる土器である。外面口縁部には斜め方向の工具ナデを施した後に、口縁部上位には横方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には、横方向の工具ナデを施した後に、突帯が貼り付けられているが、突帯の上下では調整の明瞭さが異なる。胴部には斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部には横方向の工具ナデが施されている。口縁部上位では工具幅が7mm程度と明瞭であるが、下位では単位幅が不明瞭である。突帯部分の内面には指押さえが列状に並ぶが、指押さえによる凹凸は見られない。胴部には縦・斜め方向の工具ナデが施されている。

66は口縁部がほぼ直行する甕C類の口縁部から胴部中程までの資料である。口径30.0cmを測る。炉跡および、その南側で貼床面からわずかに浮いた状態で出土しているものが多く、竪穴建物跡7号に帰属する可能性も考えられる土器である。外面口縁部には横・斜め方向の

幅5mm程度の工具ナデが施されている。突帯下位の胴部には、幅1～2mm程度の幅の工具によるミガキが、その下位の胴部上半には幅2～3mm程度の工具によりミガキがそれぞれ施されている。内面口縁部には斜め方向の工具ナデが、やや曲線的に施されている。口縁部と胴部の境目には、2条ほどの横方向に工具ナデが施され、この横方向の工具ナデを挟み、胴部には横・斜め方向の工具ナデが施される。

67は完形に復元できた口縁部が内湾する甕D類である。脚部内面天井部は中心部に突起を持ち、脚部最大高は0.9cmである。口径25.7cm、底径8.0cm、器高26.2cmを測る。遺構内全体に散在して、大部分は貼床面から浮いた状態で出土しており、検出面から出土しているものも見られる。外面口縁部は横方向の単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデの後に、横・斜め方向の幅9mm程度の工具ナデを施している。突帯貼り付け部分の器面には、横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部上位には幅1cm程度の縦方向の工具ナデ、胴部中位には横・縦方向の工具ナデが施されている。胴部下位には幅3mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。この工具ナデはミガキに似ているが光沢を持たない。脚部には横方向の工具ナデの後に、横・斜め方向のミガキを施している。内面口縁部には横方向の工具ナデが施されている。突帯部分の内面には指押さえが列状に2列並ぶ。胴部には丁寧な指ナデが施されている。

68は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部下位までの資料である。口径30.6cmを測る。焼土跡の南側から大部分が出土しており、そのほか東壁中央付近、焼土跡と西壁の中間付近および、焼土跡の北側に散在し、貼床面から5～10cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部は横・斜め方向の工具ナデを施した後に、口唇部および口縁部上端の内外面を指押さえにより仕上げている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は縦・斜め方向の工具ナデを施した後に、縦・斜め方向のミガキをやや疎に施している。器面には粘土帯の凹凸は残るものの、接合線は丁寧にナデ消されている。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部は斜め方向の工具ナデが施されており、突帯の内面部分には指押さえの痕跡が列状に並んでいる。胴部には横・斜め方向の工具ナデが施され、その後縦・斜め方向のミガキが施されている。外面のミガキと比べ、さらに疎に施され、工具幅も狭くなっている。55と比較すると、口縁部形態・突帯の刻目の有無などが異なるが、内外面に施されるミガキの施され方が非常に似ている。

なお、68の付着炭化物に関して、放射性炭素年代測定(AMS法)を実施したところ、2σ暦年代範囲を見ると、340calAD-424calAD(95.4%)で4世紀中頃～5世紀前半

の数値が得られている。

69は口縁部が内湾する変D類の口縁部から胴部中程までの資料である。口径19.0cmを測る。遺構の北壁付近に集中して、貼床面より5cm程度浮いた状態で出土している。口縁部上端には横方向の工具ナデが施され、その後、口縁部上端に指押さえが行われている。口縁部下位には不明瞭な横方向のナデが施されている。胴部には部分的に縦方向の工具ナデが確認できるが、器面の剥落が著しく観察が困難である。内面口縁部上端には外面と同じ工具より、同程度の範囲で横方向の工具ナデが施されており、指押さえも行われている。口縁部下位から胴部にかけては、斜め方向の工具ナデが施されている。

70は甕の脚部資料である。底径6.1cmを測る。脚部は中心部がやや張り出し、脚部高は1.0cmを測る。炉跡の西側で、貼床面よりわずかに浮いた状態で出土している。外面胴部下位は縦方向の工具ナデが、脚部には横・斜め方向の工具ナデが施され、その後、胴部と脚部の境目に指押さえが列状に行われている。

71は壺の口縁部から胴部上端の資料である。口径12.8cmを測る。遺構の南東部で、貼床面よりわずかに浮いた状態で出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデを施した後に、斜め方向の幅2mm程度の工具ナデを施している。ミガキ調整の様に施されているが光沢を持たない。口縁部上端では、この幅の狭い工具ナデの上から、さらに横方向の工具ナデが施されている。突帯に施されている刻目は、突帯の上下にも施されている。胴部には斜め方向の幅9～10mmの工具ナデが施された上から、幅3mm程度の斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上端には横方向の工具ナデが、その下位には横方向のミガキ様の工具ナデが施されている。口縁部下位には斜め方向の工具ナデが施され、その後、部分的に斜め方向のミガキ様の工具ナデが施されている。胴部には主に指ナデが施されているが、部分的に横方向の工具ナデが確認できる。頸部直下には粘土の接合痕が残る、その上下に指押さえが並ぶ。

72は壺の口縁部から胴部上端の資料である。口縁部上端は欠損している。遺構の北側で、検出面直下から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデを施した後に、口縁部下位は横・斜め方向のミガキを施している。胴部には口縁部より幅の狭い工具により横・斜め方向のミガキが施されている。内面口縁部は剥落が激しいが、横方向の工具ナデが確認できる。頸部内面は稜の部分のみ細かなミガキが施されている。胴部も口縁部と同様に剥落が見られるが、横・縦方向の工具ナデが施されている。

73は高坏の坏部資料である。口径12.1cmを測る。高坏の脚部の可能性も考えられたが、内面に坏部屈曲部の稜がわずかに残ること、内面のミガキ調整、口縁部端に擦れ

が確認できないことから坏部と判断した。遺構の南西部で、貼床面および検出面付近から出土している。外面は横方向の丁寧な工具ナデが施されている。内面坏部上端は横方向の工具ナデ、坏部下位は縦・斜め方向のミガキが施されている。

74は高坏の脚部資料である。底径16.8cmを測る。脚部は中空であり、輪の羽口としての使用痕は確認できないが、坏部との接合部分の割れ方から推定されており、意図して丁寧に加工した可能性が高く、未使用の転用品の輪の羽口の可能性が高い。遺構の北東部で、貼床面よりわずかに浮いた状態で出土している。外面脚部上端は横方向の工具ナデを、下位には横・斜め方向の幅2mm程度のミガキ様の工具ナデを施した後に、縦・斜め方向のミガキを施している。大きく反り返る脚部端部には工具ナデが施されている。内面脚部上半は指ナデや指押さえ、下半は横・斜め方向の工具ナデが施されている。なお、脚部の接地面には直径7mm程度、厚さ1mmの円形の粘土が複数貼り付けられている。

75は埴の口縁部から胴部上端までの資料である。口縁部端部は欠損している。貼床面よりわずかに浮いた位置と、検出面から出土している。内外面ともに器面の剥落が著しい。口縁部外面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上端には横方向の工具ナデ、口縁部には斜め方向のミガキが施されている。

76は埴の胴部から底部の資料である。遺構の南東角部付近で、検出面付近から出土している。外面胴部には斜め・横方向のミガキが、底部には横方向の工具ナデが施されている。内面は全体的に指ナデが施されているが、部分的に横方向の工具ナデも確認できる。

77は粘土紐である。高さ2.3cm、長さ8.8cm以上を呈する。内外面に指押さえの痕跡が多く残る。鹿屋市立小野塚遺跡で出土している仕切りのある高坏の仕切り部分に類似している。遺跡の南東部で、検出面近くから出土している。

83は専用品の輪の羽口である。全体の1/3程が縦方向に破損しているが、全体の形状が復元可能な輪の羽口である。長さ10.5cm、排出口径3.0cm、器壁の厚さ1.6～1.1cmを測る。送風口は楕円形を呈している。排出口から被熱を受けており、被熱が広い部分では全体の2/5程が焼けている。排出口先端部全周に、ごく薄く鉄滓が付着している。被熱の受け具合から、この輪の羽口は水平か、わずかに傾けた状態で設置されていたと考えられる。遺構の西壁中央部付近から、やや北側の位置で、貼床面よりわずかに浮いた状態で出土している。

84は高坏の脚部を転用した転用品の輪の羽口である。排出口部分の破片資料であり、詳細は不明であるが、残存部での長さ5.2cm、排出口径1.9cm、器壁の厚さ0.8cmを測る。排出口には鉄滓が厚く付着している。遺構の北

西角部付近で、検出面より5～10cm程下位で出土しており、流れ込み遺物と考えられる。

竪穴建物跡7号からは、その他にも輪の羽口が複数出土しているが、小破片であるため、ここで紹介した7点の輪の羽口の破片が、別個体かは判別できない。

石器 (第2-31・32 図)

石 13 は金床石である。花崗岩製であり、長さ35.9cm、幅26.0cm、厚さ12.9cm、重量16.2kgを測る。表面中央の凹み部分には鍛造剥片や鉄片の付着が見られる。

石 14 は金床石である。変成岩製であり、破損しているが、残存部分のみで重量2.95kgを測る。表面には鍛造剥片や鉄片が付着し、被熱を受け赤色化している。裏面は鉄片等の付着は見られないが、赤色化し煤が付着している。

石 15～石 19 は棒状礫である。

石 15・石 16 は焼土城北北東側の硬化面際で、2点隣接して貼床面から出土している。

石 17・石 18・石 19 は遺構の南東角部付近で、全て貼床面から出土している。

石 20 は両端に使用痕を持つ小型の石器である。遺構の南側で底面から出土している。上面には敲打痕が、下面には磨り面が2か所確認できる。

石 21 は礫である。炉跡の東側に隣接して、貼床面から出土している。使用痕はなく、裏面に平坦面を持つ。

石 22 は軽石製品である。炉跡の北西側で、検出面から出土しており、流れ込み遺物である。破損しており全体形状は不明であるが、環状を呈すると考えられる。

石 136 は敲石である。裏面に広く敲打痕が残る。

鉄製品・鉄滓・鍛造剥片ほか (第2-33・34 図)

鉄 2 は欠損した断面方形の棒状鉄器で、上端から下端に向かって薄くなっている。形態・大きさから、鉄鍔の基部の可能性がある。

竪穴建物跡7号からは263点、総重量2251.5gを量る鉄滓が出土している。全て鍛冶滓である。ここで示す鉄滓は、後述の埋土のふるい掛けで得られた鉄滓を含んでおらず、遺物取上げ等目視で採取した鉄滓である。内訳は、鉄塊84.9g、椀形滓132.0g、スラグ1121.9g、鍛造剥片7.8g、その他である。そのうち特徴的な5点を図化している。

滓 1 は大型の椀形滓である。最も厚みのある(約1.5cm)部分を底面として、最も薄い(約8mm)の部分まで、10cm程立ち上がる。推定される椀形滓の大きさは直径約26cm、深さ約10cmである。鉄分の付着は見られない。

遺構の北東部、柱穴P12の南側に隣接し、貼床面から出土している。

滓 2 は金属分のあるスラグである。裏面には炭化物の付着が見られる。炉跡から出土している。

滓 3・滓 4 は、いずれも断面に丸みを帯びる椀形滓で

ある。上面には部分的に少量の鉄分の付着も見られる。下面には砂粒と礫が付着している。遺構の北側で、検出面付近から出土している。

滓 5 は断面に丸みを帯びる椀形滓である。鉄分の付着は見られない。滓 4と同じ位置で出土しており、検出面付近での出土である。

竪穴建物跡7号の貼床面から出土した鉄滓のうち6点については、自然科学分析を行っている(第3分冊参照)。その結果、6点のいずれも鍛錬鍛冶滓と推定され、鍛冶作業が行われたことを示す遺物とされている。

竪穴建物跡7号については、貼床面上面の埋土を採取し、ふるい掛けを行っている。その結果、多くの鉄滓・鍛造剥片等が炉跡周辺から出土した。

炭化物・炭化木・炭化種子 (第3分冊 自然科学分析参照)

竪穴建物跡7号では33点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から、竪穴建物跡7号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し検討を行い、4点の炭化物について放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。

分析の結果、2σ暦年代範囲を見ると、それぞれ321calAD-405calAD(83.1%)で4世紀前半～5世紀初頭、320calAD-400calAD(76.8%)で4世紀前半～4世紀末、316calAD-398calAD(72.1%)で4世紀前半～4世紀末、325calAD-412calAD(88.2%)で4世紀前半～5世紀前半となり、ほぼ同じような年代値を示している。

竪穴建物跡7号からは、炭化種子も出土しており、種実同定の結果、アサの種子(7号種1)であった。

竪穴建物跡8号 (第2-35 図)

竪穴建物跡8号は、H36・37区Va層から検出された。長軸(南北軸)約3.2m、短軸(東西軸)約3.0mの隅丸方形形状を呈する。検出面から底面までの深さは約40cmで、底面から約10cmの厚さで貼床が形成されている。

遺構の中心部には柱穴P1が検出されており、P1の南側に隣接して焼土城が検出されている。この焼土城については、平成26年度の調査時に愛媛大学教授村上氏による現地指導を受けており、2つの高まりと斜面で形成されているこの焼土城は、その形状と焼け方から、輪の羽口を設置した場所と考えられるとの所見を頂いている。P1や焼土城の周辺には硬化面が広がる。遺構の周縁部では20～30cm程度の幅で底面が一段高くなっており、その高低差は約10cmである。貼床はこの一段高い底面と同じ高さで形成されている。遺構の南側には貼床面は形成されず、土坑状の落ち込みが形成されている。

竪穴建物跡8号の柱穴は、遺構内では貼床範囲内に4基(P1～4)、南側の凹みに2基(P5・6)テラス部分に1基(P7)、壁面に3基(P8～10)の計10基が検出されている。貼床面範囲内の柱穴は、P3のみが深さ約

75cmと非常に深い、その他の柱穴は壁面のものも含めて、深さは25～30cm程度である。南側の落ち込み部分から検出された小柱穴P5・P6は、その配置や造りから対をなすと考えられる。柱穴間の幅は約36cmである。

出土遺物(第2-36～38図)

遺物は竅穴建物跡7号と同様に、鍛冶関連遺物が多く出土しているが、竅穴建物跡8号からは金床石の出土は見られなかった。竅穴建物跡8号からは、大型の砥石・轆の羽口・椀形滓・鉄滓・鍛造刮片等が出土している。遺物の出土状況は、遺構の南側半分からのみ大型の土器片等が出土しており、北側で貼床面から出土した遺物は土器細片のみである。この状況は後述する鉄滓等の分布状況も同様である。

土器・土製品(第2-39・40図)

85および土製品92は、その出土状況から、竅穴建物跡8号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

85は幅広突帯を貼り付ける大型の壺の胴部資料である。突帯上には、鋸歯状の刺突が施されている。遺構の南側の凹み部分の遺構中央に向かい緩やかに立ち上がる斜面部分の底面で出土している。外面突帯部分には、横方向の工具ナデを施した後、突帯を貼り付けている。胴部には斜め方向のミガキが施されている。内面には、幅1.5cm程度の斜め方向の工具ナデが施されている。

92は有段の高杯の脚部を転用した轆の羽口である。長さ10.7cm、排出口径2.9cm、器壁の厚さ1.3～0.8cmを測る。排出口の一部は破損しているが、ガラス質化している部分が見られる。被熱の受け具合から、この轆の羽口は斜めに傾けた状態で設置されていたと考えられる。大部分は遺構の南東部で、貼床面から出土しているが、一部小破片は西壁中央付近で、貼床面から出土している。

その他に轆の羽口として、図化はしていないが5点の轆の羽口の排出口が貼床面から出土している。出土位置は5点ともに遺構の南西部である。

86～91および、土製品93・94は、その出土状況から、竅穴建物跡8号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

86は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部下位までの資料である。口径29.5cmを測る。遺構の南西部で、検出面から出土している。外面口縁部は斜め方向の工具ナデを施した後、部分的にミガキが施されている。突帯貼り付け部分の器面は、横方向の工具ナデを施した後、突帯を貼り付けている。胴部上位は横・斜め方向のミガキが施されている。胴部中位は幅2～3mm程度の幅の狭い工具ナデが施されているが密ではない。内面口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯内面部分には指押さえが列状に並ぶ。胴部は指ナデが施されて

いる。

87は壺の胴部上端から下位までの資料である。遺構の中心部よりやや南側に集中して出土している他、中心部よりやや南西側、南壁中央付近、遺構の南東部に散在して、検出面近くから出土している。胴部下位に行くほど器壁が薄くなり、下位では厚さ6mm程度となる。外面は幅6mm程度の斜め方向の工具ナデが施されている。内面は指ナデが施されており、胴部上位では接合痕の部分に指押さえが列状に並ぶ。

88は壺の胴部中程から底部までの資料である。底部はやや丸みを帯びているが平底を呈し、底径4.8cmを測る。遺構の中心部と東壁の中間付近にまともな状態で、貼床面より20cm弱浮いた状態で出土している。外面胴部中位は斜め方向、下位は縦方向のミガキを施している。内面は全面に指ナデを施している。

89は完形に復元できた埴である。口径5.6cm、底径1.8cm、器高7.9cmを測る。遺構の南側で東西に広く散在して、貼床面や貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。出土状況が広範囲に散在していたため、流れ込み遺物とした。外面口縁部上半は横方向のミガキ、口縁部下半は縦方向のミガキが施されている。胴部から底部にかけては、斜め方向のミガキが施されている。内面には粘土の接合痕が残る。接合部分には指押さえが列状に巡る。

90は埴の胴部中程から底部の資料である。底径は4.9cmを測る。遺構の中心部よりやや南側で、貼床面より10cm程度浮いた状態で出土している。外面胴部は横・斜め方向の工具ナデを、底部は斜め・縦方向の工具ナデを施している。内面胴部は横・斜め方向の工具ナデを、底部は縦・斜め方向の工具ナデを施している。

91は埴の底部資料である。底部は平底を呈し摩擦している。底径は2.5cmを測る。遺構の南壁中央付近で、検出面から出土している。内外面ともに、斜め方向の工具ナデを施している。

93・94は轆の羽口である。

93は排出口・送風口ともに一部破損しているが、全体の形状が復元可能な専用と考えられる轆の羽口である。長さ10.6cm排出口に一番近い部分の内径で3.4cm、器壁の厚さは1.5cmを測る。排出口の残存部分に一部ガラス化した箇所を確認できる。被熱の受け具合から、この轆の羽口は斜めに傾けた状態で設置されていたと考えられる。

94は轆の羽口である。排出口のみの資料であるため、専用転用は不明である。残存部の長さで4.7cm、排出口径2.9cm、器壁の厚さは1.5cmを測る。遺構の南西角部付近から南側にかけて、貼床面より5～10cm程度浮いた状態で出土している。排出口には鉄滓が付着している。遺物の残りが悪いので、設置時の傾き等は確認できない。

石器(第2-41図)

石23は大型の砥石と考えられる遺物である。長さ32.2cm、幅9.6cm、厚さ9.65cm、重さ4,550gを測る。遺構の南側の凹みへ落ち込む傾斜部分で底面から出土している。縁辺部には鍛打痕および鍛造剥片や鉄片の付着が見られる。砥石としての使用面と考えられる平坦面が5面確認でき、溝状の研ぎ痕が確認できる。全体的に被熱を受け赤色化しているが、使用面には、被熱痕・鍛打痕や鍛造剥片等の付着が見られないため、金床石からの転用品と考えられる。

石24は棒状礫である。遺構の東側で貼床面から出土している。使用痕は確認できない。

石25は小型ではあるが棒状礫とする。使用痕は確認できない。南側の凹み部分の貼床面の落ち込んでいく傾斜部分で、貼床面から出土している。

石26は砥石である。遺構の南側で、検出面から出土している。左右側面および下面に、縦・横方向の使用痕が確認できる。

石27は礫である。遺構の東側で、検出面から出土している。

鉄製品・鉄滓(第2-42図)

鉄3は三角形の小鉄板である。側面が平坦で、三辺の角が折れ曲がっている。大きさ、形状から鉄器制作の際に鑿で切り落とされた三角形鉄板と考えられる。

堅穴建物跡8号からは、213点の鉄滓が出土している。その全てが鍛冶滓である。出土した鉄滓の総量は769.4gである。内訳は椀形滓が168.5g、鍛冶滓のslagが182.3g、鍛造時に出る鍛造剥片や粒状滓(湯玉)が1.4gおよびその他である。鉄滓の多くは、轆の羽口が設置されていたと想定される箇所から南壁に向かい扇状に広がる。しかしながら、遺構の南西角付近で出土している鉄滓は、貼床面よりやや浮いた状態で出土していることから、鉄滓の分布の中心は、轆の羽口設置想定箇所から南壁中央部への直線的な範囲と考えられる。遺構の中心部から北側への鉄滓の分布は確認されていない。この鉄滓の中から特徴的な4点を図化している。

滓6～9は椀形滓である。

滓6は轆の羽口設置想定箇所の南側5か所から出土している。そのうち2点が貼床面(硬化面)と、南側の落ち込みの傾斜部分から、それぞれ出土している。アールのきつい形状を呈しており、推定される大きさは直径14cm、深さ7cmである。上面には鉄塊や鉄分が付着し、下面には砂粒や小礫が付着しており、一部では鉄分が底面に達している。内面のガラス質の色調は、やや白みがかった灰色を呈する。

滓7は遺構の南側および南東側3か所で出土しており、南東側で出土した1点が貼床面から出土している。滓7もアールがきつい形状をしており、推定される大き

さは直径14cm、深さ8cmである。接合はしないが滓1と同一個体の椀形滓である可能性が考えられる。上面の底面付近にごくわずかな鉄塊と鉄分の付着が見られる。8mm程の鉄塊の粒が下面にまで達している。

滓8は轆の羽口設置想定箇所の貼床面から出土している。断面形状はアールが強く、推定される大きさは直径18cm、深さ8cmである。上面には4点の中で最も多く鉄分の付着が見られ、下面の底部には沈み込んだ鉄塊も確認できる。滓8以外にも貼床面からは1cmに満たない大きさの鉄滓が数点出土しており、これらは全て磁性を帯びている。

滓9も轆の羽口設置想定箇所の貼床面から出土している。椀形滓片である。断面が薄く、密度の薄いslagで構成されており、椀形滓の上部部分と考えられる。

堅穴建物跡8号については、貼床面上面の埋土を採取し、ふるい掛けを行っている。その結果、鉄滓・鍛造剥片等が炉跡周辺から出土した。

炭化物・炭化種子(第3分冊 自然科学分析参照)

堅穴建物跡8号では貼床面から複数点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から2点の炭化物について放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。分析の結果、2σ暦年代範囲を見ると、それぞれ132caIAD-256caIAD(89.4%)で2世紀中頃～3世紀中頃、230caIAD-347caIAD(95.4%)で3世紀中頃～4世紀中頃となり、やや年代に差が見られる。

堅穴建物跡8号からは、炭化種子も出土しており、種実同定の結果、その種子(8号種1)であった。

堅穴建物跡9号(第2-43・44図)

堅穴建物跡9号は、135・36区V層から検出された。建物の方位はほぼ北側を向き、長軸(南北軸)約5.4m、短軸(東西軸)約4.7mの隅丸長方形を呈する。南北両側に張り出しを持ち、北側は幅約2.3m、奥行き約0.5mの長方形、南側は幅約1.6mもしくは約1.0m、奥行き約0.3mのやや歪な形状の張り出しを持つ。張り出し部を含めた長軸(南北軸)の長さは約6.2mである。検出面から底面までの深さは30～40cm程度であり、底面から15～20cm程度の厚さで貼床が形成されている。

堅穴建物跡9号の中央部には、長軸約65cm、短軸約55cm、深さ約10cmの坩土を伴う菱形の土坑が検出されており、炉跡と考えられる。炉跡の周囲には南北方向に広く硬化面が広がる。東西方向は壁際から1.0m程の範囲で硬化面が見られない。南側の張り出し部には、南北・東西軸ともに約80cm、深さ約20cmの不定形の土坑が検出されており、硬化面はこの土坑の手前で途切れている。土坑は底面で検出されている。

堅穴建物跡9号の柱穴は遺構内に10基、遺構周辺で18基、計28基が検出されている。断面図では底面から

掘り込まれているような表現がされているが、記録メモや写真等を確認すると、遺構内の柱穴は全て貼床面で検出されている。遺構内の柱穴はP5が炉跡の南側、炉跡と土坑の中間の位置で検出されている。硬化面の範囲で検出された柱穴は、この1基のみである。P1～P4は硬化面の東辺に沿うように直線的に検出され、またP6～P8は硬化面の西辺に沿うように直線的にそれぞれ検出されている。P9・P10は建物の西壁際と並んで検出されている。遺構周辺で検出された柱穴はすべて遺構の壁面に沿って検出されており、壁面からの距離は一定して近い。特にP17～P20は南側の張り出し部の形状に沿うように検出されている。

出土遺物(第2-45図)

遺物は遺構内全体から出土している状況である。ただし、大型の土器片は遺構の中心部よりも東西縁辺部で出土する傾向が見られる。後述する鉄滓等の出土状況も類似した出土状況を示している。

土器・土製品(第2-46・47図)

95～103および土製品109は、その出土状況から、竪穴建物跡9号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

95は口縁部がわずかに外傾する甕D類の口縁部から胴部下位までの資料である。口径は25.5cmを測る。遺構の北側をのぞき硬化面の周囲を囲むように出土しているが、その内容には偏りが見られ、遺構の東側には口縁部片を含む大型の破片が集中して出土しており、口縁部片を含む土器全体の1/3程度となる破片8点が集中して出土している。その南側の南東角部にも口縁部片が多く集中して出土している。また、東壁付近中央部にも口縁部片は1点であるが破片が集中して出土している状況が見られ、遺構の東側で資料のほぼ9割程度が出土している。遺構の西側には、南北に広く残りの1割程度の胴部小破片が軽々と散らして出土している状況である。東側の資料が貼床面で出土しているのに対して、西側の資料は貼床面及び貼床面から浮いた状態で出土しているため、95の原位置は遺構の東側であったものと考えられる。ただし、川久保遺跡A地点の地形は西側が高い地形をしており、地形に沿って遺物が移動すると考えると、西側の小破片群は地形に逆らって移動している点が気になる点である。

95の外口縁部上位には横方向の幅2cm程のハケ目が施されている。突帯部分にも同じように横方向のハケ目が施され、その上から突帯を貼り付けている。突帯部分のハケ目の上下は、丁寧なナデが施されている。胴部上半は、横方向の幅1.5cm程度の工具ナデを施した後、口縁部へ向かい斜め方向から縦方向への幅5mm程度の工具ナデが施されている。この工具ナデは口縁部へ向かい先細るものが見られ、繊維質の工具が使用された可能性

が考えられる。胴部下半は、胴部上半と同じ斜め方向の工具ナデが施されている。内口縁部上端は、横方向の工具ナデが施されている。口縁部には斜め方向の工具ナデが施され、その上から連続した指押さえの跡が確認できる。胴部以下は、丁寧なナデが施されている。内面の下端から5cm程上位までには、煮炊きの痕跡と考えられる炭化物が付着している。

96は口縁部がわずかに内湾する甕D類の口縁部から胴部中程までの資料である。口径22.6cmを測る。遺構の中央部と北壁の中間付近、貼床面よりも下位の貼床埋土中から大型の破片が1点出土している。外面口縁部上半は横方向のハケ目が施され、その上から指押さえの痕跡が確認できる。特に口縁部上端では指押さえの痕跡が密であり、成形の痕跡と考えられ、最終的に口縁部上端から口唇部を成形する作業は、器面調整の後に行われたと推察できる。口縁部下半は斜め方向の単位不明瞭な工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後、突帯を貼り付けている。胴部上端までは、突帯部分と同じ横方向の工具ナデが施されている。胴部上位から中程にかけては、幅6mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。内口縁部上端は強めの横方向の工具ナデを施した後、斜め方向の工具ナデを施している。部分的には粘土を貼り付け、その上から斜め方向の工具ナデを施している箇所も見られる。口縁部から胴部中程にかけては、斜め方向の工具ナデが施されている。

97は壺の口縁部から胴部上位の資料である。口径は13.2cmを測る。遺構の南側から東側にかけて、硬化面の周囲を囲むように出土している。そのうち3cm程度の小片ではあるが、口縁部片1点は南側土坑の埋土中から出土しており、その他は貼床面から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。口縁部上端については、口縁部上端の下位を強い工具ナデにより囲ませ、口縁部上端をわずかにではあるが外側に突出させている。屈曲部上位には斜め方向の工具ナデが施され、屈曲部は幅の狭い細かなナデが各方向に施されている。胴部上位は横方向の工具ナデが施されている。内口縁部は横・斜め方向の工具ナデが施され、その上に指押さえの痕跡が確認できる。胴部上位には斜め方向の工具ナデが施され、屈曲部ではその上に指押さえの痕跡が列状に連なる。

98は壺の胴部資料である。胴部最大径43.2cmを測り、幅広突帯を施す大型の壺である。遺構の南西角部に集中して、底面から出土している。外面は基本的に丁寧な横方向の工具ナデを施した後、横・斜め方向のミガキを施している。突帯部分付近のみはミガキが施されず、下地の工具ナデが確認できる。内面胴部は横・斜め方向の工具ナデが施されており、一部には指押さえの痕跡も確

認できる。

99は壺の底部資料である。底面の摩擦が著しい。遺構の西側に南北に散在して、貼床面から出土している。外面胴部下位は、縦・横方向の工具ナデの後、縦・斜め方向の、部分的には光沢を持つ丁寧な工具ナデを施している。底部は円形状に著しく摩擦している。内面胴部下位は、横方向のナデが施されている。底部は縦方向の工具ナデが施されている。堅穴建物跡9号は鍛冶関連建物跡である可能性が高いため、帯磁率計による遺物の測定を行っているが、そのなかでも99は高い数値が計測されており、川久保遺跡の一般的な二次焼成を受けた甕の2倍ほどの数値が計測されている。しかしながら、器面に鉄分の付着や過度な焼成の痕跡は見られない。

100は完形に復元できた鉢である。口径13.0cm、底径5.3cm、器高10.0cmを測る。遺構の南側と東側に散在し、貼床面から出土している。外面口縁部から胴部上半にかけては、横・斜め方向の工具ナデの後、丁寧な工具ナデを施している。胴部下半は斜め方向の丁寧なナデが施されている。外面の丁寧なナデは、器面は平滑であるが、光沢は持たず、また調整の単位の凹凸は顕著に残る。胴部と脚部の境には、指押さえの痕跡が列状に残る。また、脚端部の稜も指押さえにより成形されている。なお、2列の指押さえの間には、幅1～2mm、長さ2cm程度の沈線が施されている。内面口縁部は、横方向の工具ナデが施されている。胴部は縦方向の丁寧な工具ナデが施されている。一部は口縁部の横方向の工具ナデの上から施されている。外面の丁寧な工具ナデと比べると、調整の単位幅の凹凸は目立たず、調整の方向を描き、調整を重ねる幅も統一するなど、より丁寧な処理を行っている。しかしながら、光沢は持たない。脚部内面は、縦・横・斜め方向の工具ナデが施されている。

101は100に類似し、鉢の胴部下位から脚部の資料と判断した。底径7.8cmを測る。遺構の中央部と北壁の中間付近、西壁付近に分かれて、貼床面から破片2点が出土している。西壁付近の破片が脚部を含む、全体の表面積の9割以上を占め、遺構の中央部と北壁の中間付近から出土した破片は、胴部の小破片である。外面胴部下位は、縦方向の丁寧な工具ナデが施されているが、工具ナデが施されていない部分一部も見られる。脚部は横方向の工具ナデが施されており、脚端部をつまんで成形しているため、指押さえの痕跡が残っている。内面胴部は、縦方向の丁寧な工具ナデが施されている。外面の調整よりも、より密に調整を施している。脚部内面は、工具ナデ及びナデが施されている。

102は高杯の脚柱部の資料である。遺構の西側、柱穴P9とP11の中間付近、貼床面から出土している。エンタシス状の形状を呈する。外面は縦方向のミガキが施されている。内面脚柱部は、縦・横・斜め方向の工具ナデ

が施されている。脚根部は横方向のミガキが施されている。

103は円盤形土製品の可能性がある資料である。遺構の南東部、貼床面から出土している。直径約3.3cm、厚さ約6mmを測る。土器片を再利用しているため、器面は湾曲している。元々の土器の特徴として、外面は丁寧な工具ナデ、内面はハケ目後、丁寧な工具ナデが施されている。内外面ともに器面は平滑で、混和材はよく沈み込んでおり、精製された粘土が使用されていることから、元々は精製土器であったと考えられる。

109は輪の羽口の排出口資料である。破損しており、残存部での長さは6.9cmである。排出口径は2.1cm、器壁の厚さは2.2～1.5cmを測る。器壁の厚さから専用品の可能性が考えられる。排出口には鉄洋が付着している。内面には部分的に布目痕が確認できる。遺物の残りが悪いため、設置時の傾き等は確認できない。遺構の西側、輪の羽口片が複数点出土している地点で貼床面から出土している。

堅穴建物跡9号からは、他にも2点の輪の羽口の排出口と確認できる破片資料が貼床面から出土しており、少なくとも他に1個体の輪の羽口が出土しているのは確かである。この輪の羽口も器壁の厚さから専用品と考えられる。

104～108は、その出土状況から堅穴建物跡9号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

104は壺の底部資料である。やや丸みを帯びた平底を呈し、底径は3.6cmを測る。遺構の北壁中央部付近、検出面で出土しており、流れ込みと考えられる。外面底部付近から底部は、縦方向のミガキが施されている。底面は摩擦している。内面底部は、縦・斜め方向の工具ナデが施されている。

105は高杯の脚部資料である。遺構の南側土坑の直上で、堆積した埋土中から出土しており、流れ込みと考えられる。外面は縦方向のスジ状の痕跡の残るミガキの後、縦・斜め方向のミガキが施されている。脚部内面上位は、指ナデが施されているようである。脚部中位には、外面に見られるスジ状の痕跡が残るミガキを、各方向に短い長さで施している。

106は高杯の脚柱部の資料である。遺構の南西角部付近、検出面で出土しており、流れ込みと考えられる。脚部外面上端は、横方向のミガキの後、斜め方向のミガキが施されている。脚部上端から中位にかけては、縦方向のミガキが施されている。脚部上端のミガキは、それ以下のミガキにより切られている。また、上下でミガキの幅が異なり、脚部上端のミガキは幅が広く、単位内の条線が目立ち、やや粗い。脚部内面は縦・横方向の工具ナデが施されているが、調整はやや粗い。

107は高坏の脚柱部の資料である。遺構の中央部よりやや北側、貼床面から浮いた状態で出土しており、流れ込みと考えられる。脚柱部外面は、横・斜め方向の丁寧なナデの後、縦方向のミガキが施され、どちらの調整も部分的に確認できる。器面は平滑であるが、光沢は乏しい。坏部と脚柱部の境目と、脚柱部と脚裾部の境目には、複数本の平行した細沈線が施されており、全周すると考えられる。器面調整と言うよりはむしろ区画として施された可能性が考えられる。脚部内面の調整は不明瞭であるが、器面の凹凸はあまり見られず、部分的に工具ナデ、もしくは指ナデが施されている。脚柱部と脚裾部の境目には、双方のパーツの接合時の痕跡が粘土の盛り上がりとして残存している。

108は円盤形土製品の可能性がある資料である。直径約3.2cm、厚さ約7mmを測る。埋土中一括取り上げ資料である。103と同じく、土器片を再利用しているため器面は湾曲している。外面中央部に凹み、内面に沈線が確認できるが、これらがどの段階で施されたかは不明である。元々の土器の特徴として、外面は丁寧な工具ナデもしくはミガキ、内面は幅5mm程度の工具ナデが施されている。内外面ともに器面は平滑で、混和材はよく沈み込んでおり、精製された粘土が使用されていることから、元々は精製土器であったと考えられる。

石器・礎(第2-47図)

石28は磨礫石である。遺構の南壁中央際で出土している。南側土坑の埋土の直上で、壁面に接して出土しており、竪穴建物跡9号に帰属する可能性が高い。

石29は礎である。検出面から出土である。

鉄製品・鉄滓(第2-47図)

鉄4は鉄鏝の刃部である。断面は中央が厚く、紡錘形に近い。

竪穴建物跡9号からは16点、総重量143.9gを量る鉄滓が出土した。鉄滓は遺構の南側および、東西の壁面付近で出土しており、どの位置も大半は貼床面で出土している。特に西側では鉄滓が南北に列状に出土していた。内容は鉄塊・椀形滓・スラグであり、すべて鍛冶滓である。そのうち1点を図化している。

滓10は椀形滓である。厚みは1cmであり、上部部分と考えられ、直径6mm程度の鉄塊粒が付着している。遺構の北東部で、貼床面から出土している。

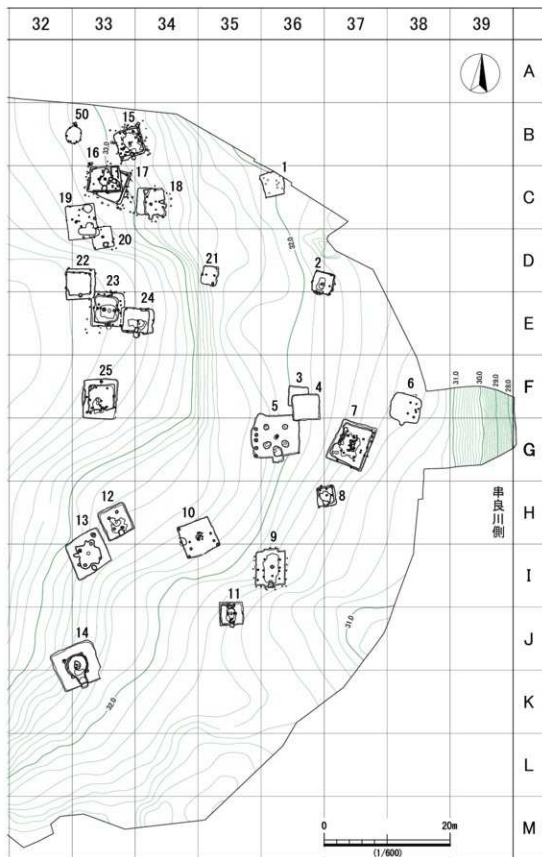
竪穴建物跡9号で、微細な遺物の採取の為に実施した貼床面上面埋土のふるい調査の結果、鉄滓片・鍛造剥片等の微少な鍛冶関連遺物が出土した。微少な鍛冶関連遺物は遺構の西側から、少量ではあるが出土しており、輪の羽口の分布と重なる。また南側でも少量出土しており、点で取上げた鉄滓の分布と重なる。

竪穴建物跡9号では、輪の羽口・椀形滓・鉄滓・鍛造剥片等が出土していることから、鍛錬鍛冶(小鍛冶)が行

われていたと考えられる。しかしながら、その出土量は少なく、きわめて短期的に行われたと考えられる。

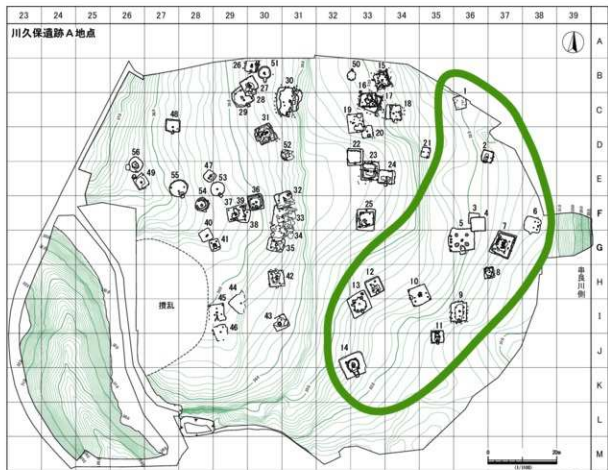


第2-1図 竪穴建物跡（方形・円形）



第2-1図 竪穴建物跡(方形・円形)

Va層コンタ図

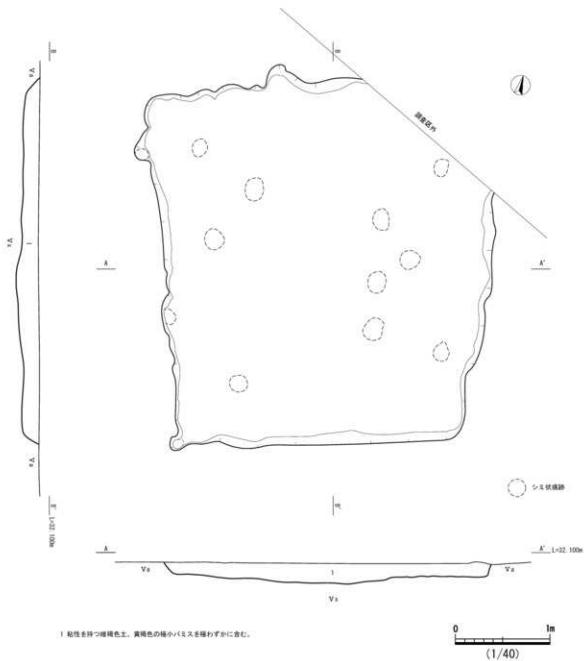


第2-2図 東側(川側)の竪穴建物跡群

Va層コンタ図

表2-2 川久保遺跡A地点古墳時代竪穴建物跡一覧1 東側(川側)検出竪穴建物跡群

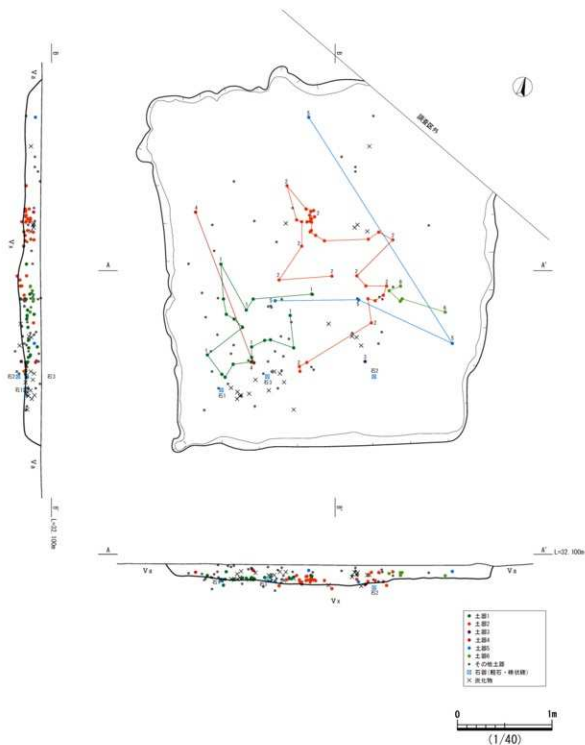
図号	遺構番号	IC	検出層	形状	大きさ (m)		長軸の向き	陥床	砂積層土	硬化面	張り出し	調査時遺構番号	備考
					長軸	短軸							
2-3	1	C36	Va	方形	3.9	3.4	北北西-南南東	なし	なし	なし	なし	SB8	年代測定
2-6	2	B06-37	Va	方形	3.7	3.5	北北東-南南西	○	○	○	なし	SB11	年代測定
2-9	3	F36	Va	方形	3.2	3.2	南-北	○	なし	なし	なし	SB20	4号より古い
2-9	4	F36	Va	方形	4.2	4.0	東-西	○	なし	○	なし	SB12	3号・5号より新しい年代測定
2-14	5	G36	Va	方形	7.7	6.7	東-西	○	○	なし	○	SB21	4号より古い年代測定
2-20	6	F38	Va	方形	4.8	4.3	北北東-南南西	○	なし	○	○	SB13	
2-23	7	G37	Va	長方形	7.0	6.0	北北東-南南西	○	○	○	なし	SB16	竊取関連・年代測定
2-35	8	B06-37	Va	方形	3.2	3.0	南-北	○	○	○	なし	SB15	竊取関連・年代測定
2-43	9	I35-36	Va	長方形	5.4	4.7	南-北	○	○	○	○	SB22	竊取関連
2-48	10	B134-35	Va	方形	5.5	5.5	北北西-南南東	○	○	なし	なし	SB23	竊取関連
2-54	11	I35	Va	方形	3.7	3.6	東-西	○	○	○	○	SB27	年代測定
2-58	12	H33	Va	方形	5.0	4.7	北北西-南南東	○	○	○	なし	SB43	竊取関連・年代測定
2-62	13	I33	Va	方形	6.15	6.15	北北西-南南東	○	○	○	なし	SB46	年代測定
2-67	14	B32-33	Va	方形	6.9	6.9	北北西-南南東	○	○	○	○	SB48	



第2-3図 竪穴建物跡1号

表2-3 竪穴建物跡1号出土土器

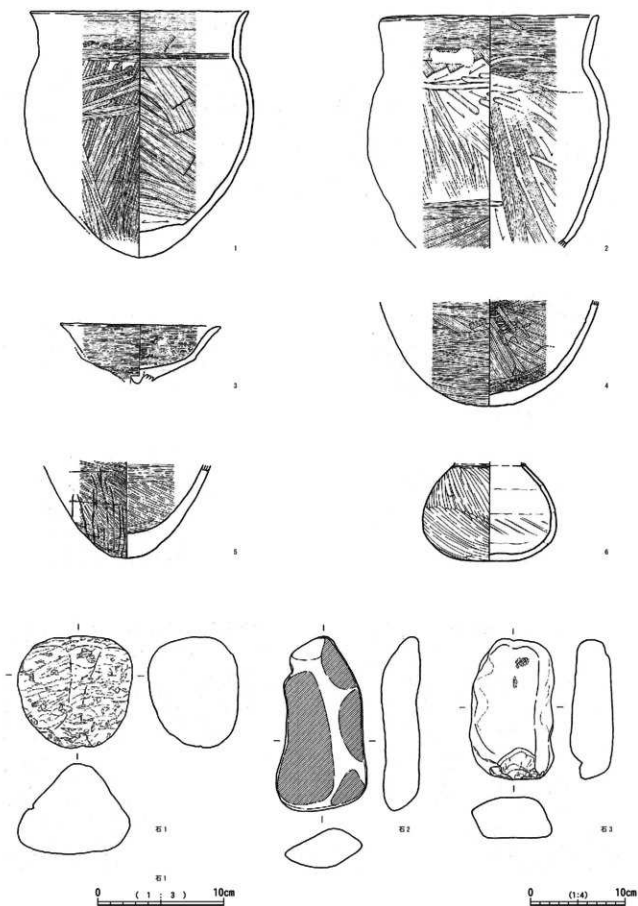
図番号	遺物番号	形状	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2-15	1	○	丸底甕	完形	—	26.0	23.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい・褐 内:にぶい・褐	石・雲・輝・ 白・小	突帯なし 胴部最大径24.2cm
	2	○	(丸底) 甕	(胴部欠損)	—	—	23.2	—	工具ナデ	工具ナデ	外:澄 内:澄	石・雲・輝・ 白・黒・小	突帯なし 胴部最大径25.3cm
	3	○	高坏	坏部	—	—	17.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外:澄 内:にぶい・赤褐	石・雲・輝・ 白・黒・小	
	4	○	甕・壺	胴部一底部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい・黄褐 内:明赤褐	石・雲・黒・ 小	
	5	○	甕・壺	胴部一底部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい・褐 内:にぶい・褐	石・雲・長・ 輝・白・黒・ 小	
	6		埴	胴部一底部	—	—	—	5.0	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:澄 内:澄	白・小・黒・ 小	



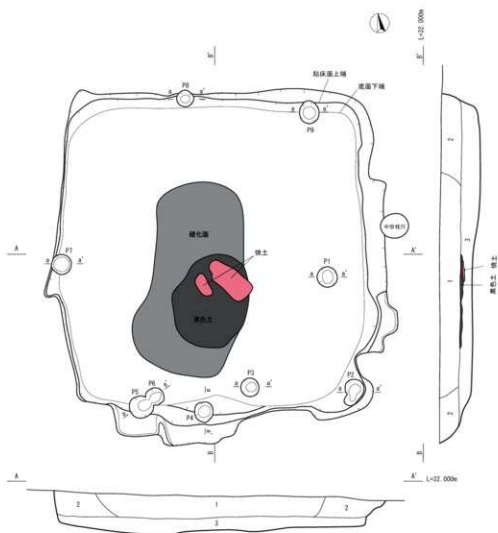
第2-4図 竪穴建物跡1号 遺物出土状況

表2-4 竪穴建物跡1号出土石器

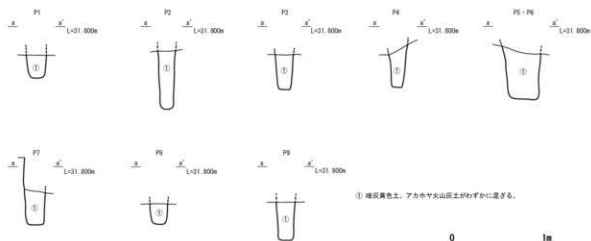
図番号	遺物番号	床面	跡種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2-5	石1	○	磨石製品	完形	8.8	9.1	7.2	110.0	軽石	被熱の可能性あり
	石2	○	棒状鏝	完形	18.4	9.5	4.0	960.0	砂岩	磨痕あり
	石3	○	棒状鏝	完形	14.4	8.9	4.6	980.0	砂岩	表面に磨打痕、下面に使用痕あり



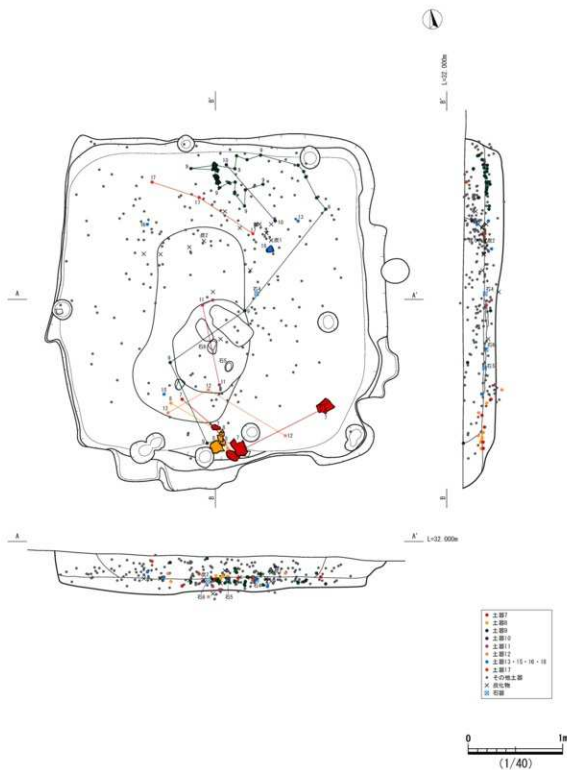
第2-5圖 竪穴建物跡1号出土遺物(土器・石器)



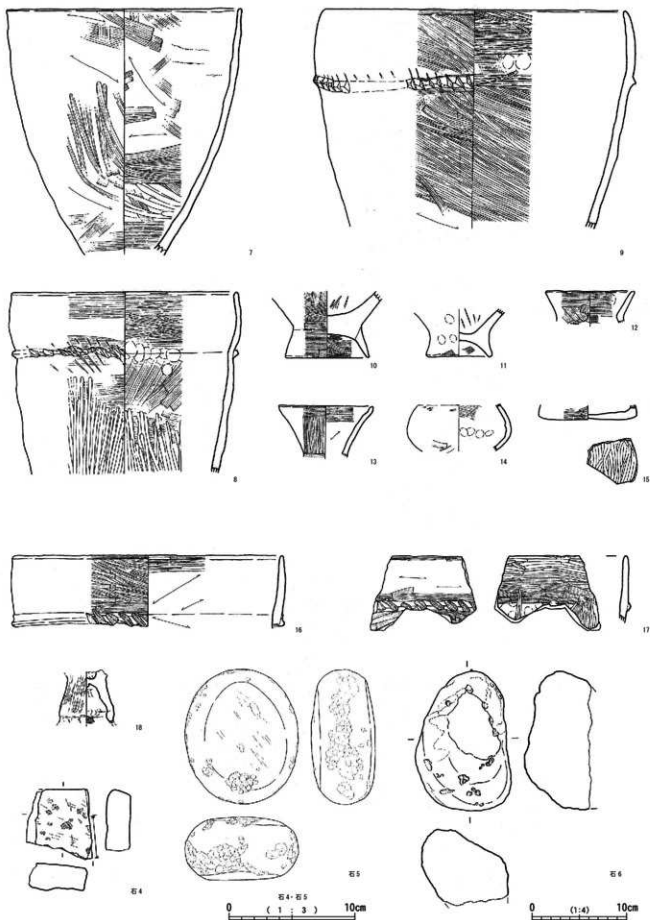
- 1 粘性を弱く硬質赤色土。
- 2 粘性を強く硬質グレイプ焼色土。埋土より色調が暗く、アカホヤ火山灰土ブロックを含まない。
- 3 埋土とVb層土またはVa層土アカホヤ火山灰土ブロックの混成土。粘床と考えられ、ほぼ水平に堆積している。焼土付逐のみ硬化している。



第2-6図 竪穴建物跡2号



第2-7图 竖穴建物跡2号 遺物出土状況



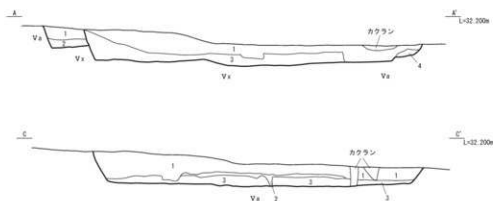
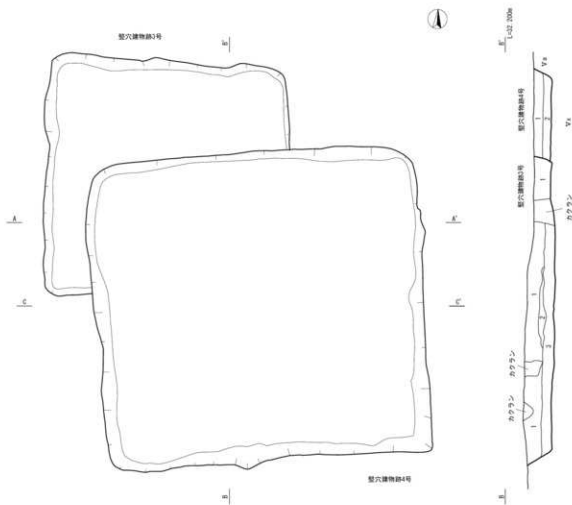
第2-8圖 竪穴建物跡2号出土遺物(土器・石器)

表2-5 竪穴建物跡2号出土土器

図 番 号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (大割部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 8	7	○	甕	(脚部欠損)	D	—	24.8	—	工具ナデ	工具ナデ	外:赤い燻 内:燻	赤・黒か	実態なし
	8	○	甕	口縁部一部	D	—	23.9	—	工具ナデ	工具ナデ ミガキ	外:にぶい燻 内:にぶい燻	赤・黒・黒か	
	9	○	甕	口縁部一部	D	—	31.4	—	工具ナデ	工具ナデ	外:燻 内:燻	赤・白・赤・ 黒か	
	10	○	甕	脚部	—	—	—	8.8	工具ナデ	ミガキ 工具ナデ	外:にぶい燻 内:にぶい燻	赤・赤・黒か	脚部高:2.3cm
	11	○	甕・鉢	脚部	—	—	—	7.1	指ナデ 工具ナデ	指ナデ 工具ナデ	外:燻 内:燻	赤・赤・白・ 赤・黒か	脚部高:1.7cm
	12	○	埴	口縁部	—	—	8.4	—	工具ナデ	工具ナデ	外:燻 内:燻	赤・白・赤	14と同一体 の可能性
	13	○	埴	口縁部	—	—	10.0	—	工具ナデ	工具ナデ 指ナデ	外:灰燻 内:灰燻	白・赤	内外面覆付着
	14	○	埴	胴部	—	—	—	—	指ナデ 工具ナデ	工具ナデ 指ナデ	外:明燻 内:明燻	赤・白・赤	12と同一体 の可能性
	15	○	埴	底部	—	—	—	10.3	ミガキ 指ナデ	指ナデ	外:燻 内:にぶい燻	赤・赤・白・ 赤・黒か	
	16		甕	口縁部	—	—	28.8	—	ミガキ 工具ナデ	ミガキ ナデ	外:明燻 内:燻	赤・白・赤	
	17		甕	口縁部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	ミガキ 工具ナデ	外:にぶい燻 内:にぶい燻	赤・白・黒・ 赤	
	18		高坪	脚柱部	—	—	—	—	ミガキ	ナデ ミガキ	外:にぶい燻 内:にぶい燻	赤・白・赤	

表2-6 竪穴建物跡2号出土石器

図 番 号	遺物 番号	床 面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 8	石4	○	砥石	楕圓	5.6	5.3	2.1	105.0	砂岩	法庫は残存部位で測定
	石5	○	磨礫石	完形	10.6	8.9	5.0		砂岩	
	石6	○	礫	完形	14.2	10.0	8.2	1160.0	安山岩	

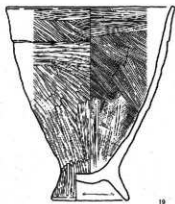


- 1 黄褐色土。
 2 黄褐色土。柱まじりに露出しているが黄褐色が薄く、しまりやや強い。アカホヤ火山灰土ブロックが混入する。
 3 黄褐色土層に近いほど黄褐色土色をブロック面に透み、上部は硬くしめる。局部的に構成されているがカクランの影響をうけ分断されている。
 4 褐色土。

第2-9図 竪穴建物跡3号・4号

0 2m

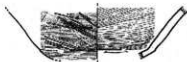
(1/50)



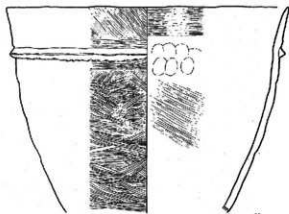
19



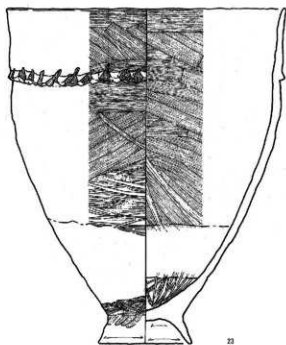
20



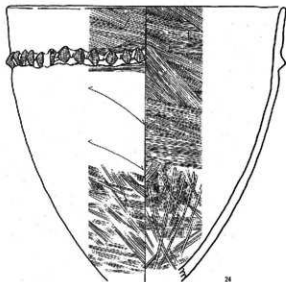
21



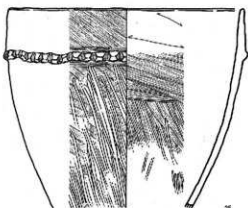
22



23



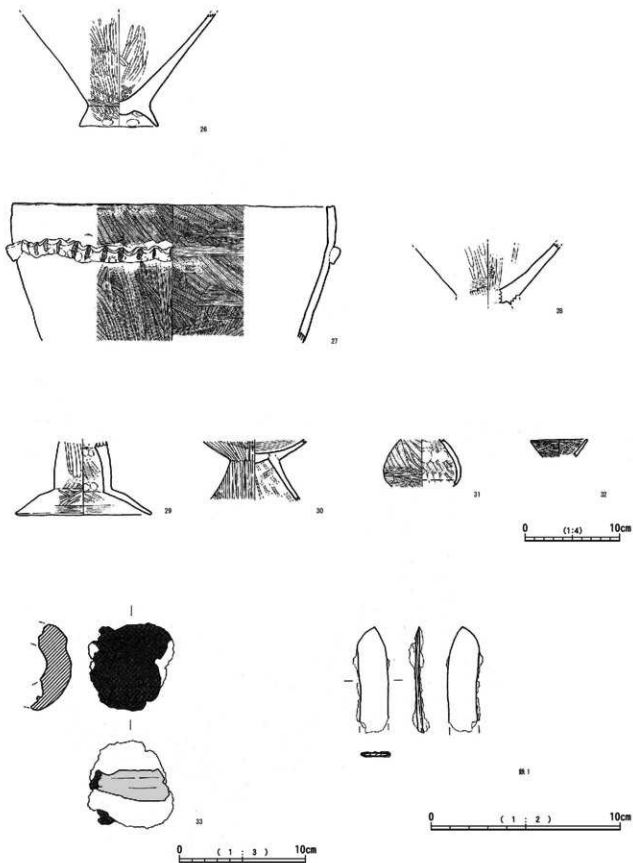
24



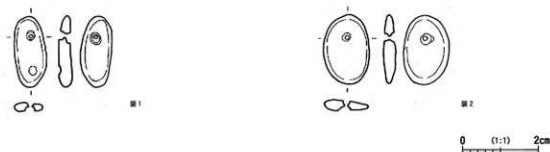
25

0 (1:4) 10cm

第2-11圖 竪穴建物跡3号 出土遺物(土器)



第2-12 圖 竪穴建物跡3号・4号 出土遺物(土器・土製品・鉄製品)



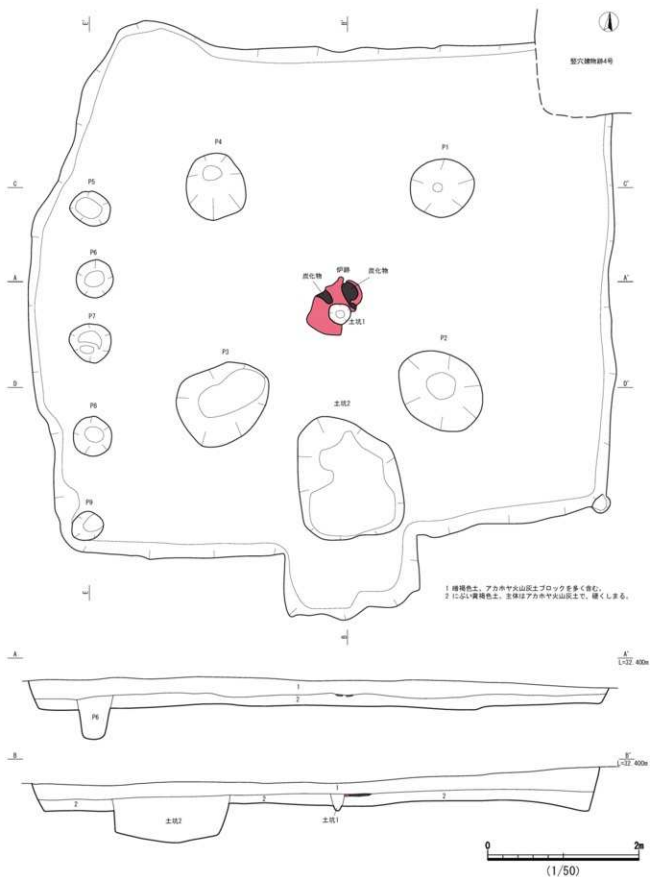
第2-13 図 竪穴建物跡4号出土遺物(装飾品)

表2-7 竪穴建物跡3号出土土器

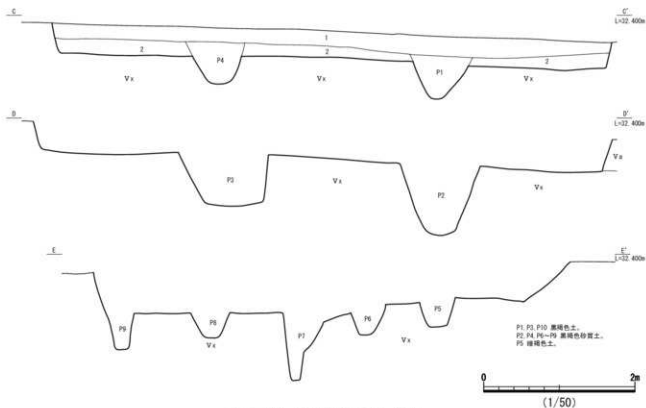
図番号	遺物番号	床面	器種	部位 (次根部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考
2-11	19	○	甕	完形	C	20.3	17.9	8.3	ミガキ 工具ナデ	ミガキ 工具ナデ	外: 黒 内: 黒	石・白・黒・ 小・ほか	脚部高: 1.8cm 脚部天井: 磨らむ
	20	○	甕	胴部下位	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ ミガキ	外: 黒 内: にぶい黒	黒・白・黒・ 小	
	21	○	高坏	坏部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外: にぶい黒 内: にぶい黒	石・長・白・ 黒・小	突帯に刻目なし
	22		甕	口縁部-胴部	B	—	20.9	—	工具ナデ	工具ナデ	外: 赤黒 内: 赤黒	石・長・小	
	23		甕	完形	C	35.5	29.4	9.8	工具ナデ	工具ナデ	外: 黒 内: 黒	石・白・黒	脚部高: 2.4cm 脚部天井: 磨らむ
	24		甕	口縁部-胴部	C	—	29.5	—	工具ナデ	工具ナデ ミガキ	外: にぶい黒 内: にぶい黒	石・白・小	
2-12	25		甕	口縁部-胴部	D	—	24.9	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外: にぶい黒 内: 黒	石・白・黒・ 小	
2-12	26		鉢	胴部-脚部	—	—	—	8.3	ミガキ	ミガキ 工具ナデ	外: 黒 内: 黒	石・長・黒・ 小・ほか	脚部高: 1.3cm 脚部天井: 磨らむ

表2-8 竪穴建物跡4号出土土器

図番号	遺物番号	床面	器種	部位 (次根部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考
2-12	27	○	甕	口縁部-胴部	D	—	34.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外: 黒 内: 黒	石・白・小・ ほか	
	28	○	鉢	胴部下位	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外: にぶい赤黒 内: にぶい赤黒	石・白・黒・ 小	
	29	○	高坏	胴部	—	—	—	14.4	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外: にぶい黒 内: にぶい黒	黒・小・ほか	
	30	○	高坏	胴部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	ミガキ 工具ナデ	外: 黒 内: にぶい黄緑	石・白・黒・ 小	
	31	○	埴	胴部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外: 黒 内: にぶい黄緑	石・白・小	胴部最大径8.1cm
	32		埴	口縁部	—	—	5.9	—	ミガキ	工具ナデ ミガキ	外: にぶい黄緑 内: にぶい黒	石・小	
	33		輪の引口	排出口	—	—	—	外径 (4.5)	内径 (3.0)	—	—	外: 黄緑 内: 黄灰	石・角・白・ ほか



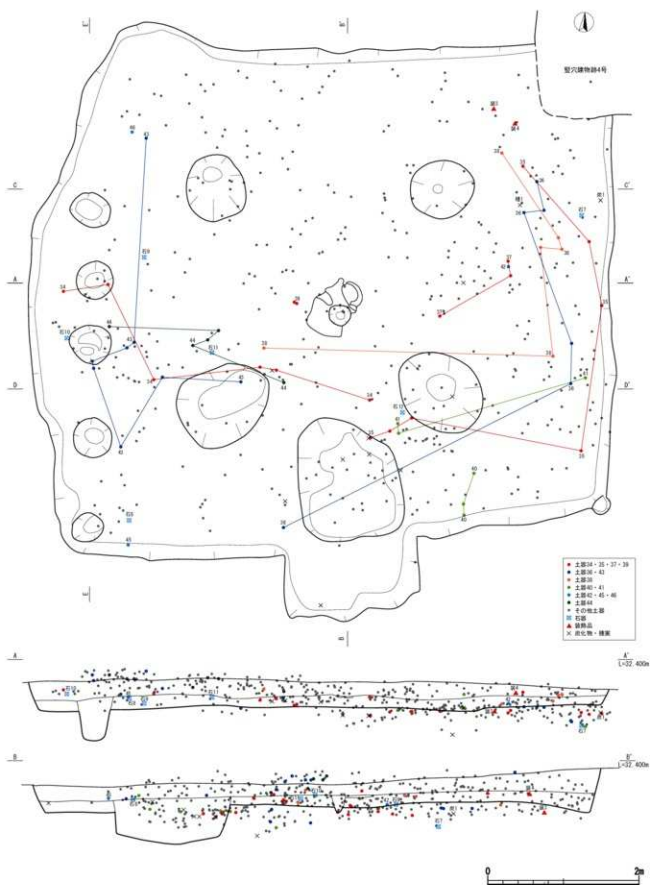
第2-14図 竪穴建物跡5号 平面・断面



第2-15図 竪穴建物跡5号 断面

表2-9 竪穴建物跡5号出土土器

図 番号	器物 番号	床 面	器種	部位 (穴脚部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	新土	備考
2 18	34	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	6.2	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい黄褐色内:橙	石・白・黒・小	脚部高:0.4cm
	35	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	9.7	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい黄褐色内:にぶい黄	石・白・小・ほか	脚部高:1.4cm
	36	○	甕	脚部	—	—	—	7.0	工具ナデ	ハケ目	外:橙内:橙	石・白・小・ほか	脚部高:0.8cm
	37	○	甕	口縁部-胴部	—	—	16.0	—	ハケ目・工具ナデ・ミガキ	外:にぶい黄褐色内:にぶい黄	外:橙内:橙	黒・小・ほか	
	38	○	甕	口縁部	—	—	21.9	—	ミガキ	ミガキ	外:橙内:橙	石・白・黒・小	
	39	○	甕・壺	胴部-底部	—	—	—	8.6	工具ナデ	工具ナデ	外:明黄褐色内:にぶい黄	石・黄・白・ほか	器面に鉄分付着
	40	○	高环	环部-脚部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:橙内:橙	石・白・黒・小	
	41	○	高环	环部	—	—	26.4	—	工具ナデ	ミガキ	外:橙内:橙	石・白・黒・小	
	42	○	高环	脚部	—	—	—	—	ミガキ	指ナデ	外:橙内:橙	黒・石・白・黒・小	
	43		甕	口縁部-胴部	D	—	30.0	—	工具ナデ・ハケ目・ミガキ	工具ナデ	外:橙内:橙	石・白・黒・小	
	44		甕	口縁部-胴部	—	—	20.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい黄褐色内:にぶい黄	石・白・黒・小	突眼なし
	45		埴	胴部-底部	—	—	3.4	—	ミガキ	指ナデ	外:明黄褐色内:明黄	石・黒・白・黒・小	
	46		埴	胴部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外:橙内:にぶい黄	石・黒・白・小	



第 2-16 圖 雙穴建物跡 5 号 遺物出土狀況(平面・断面)

(1/50)

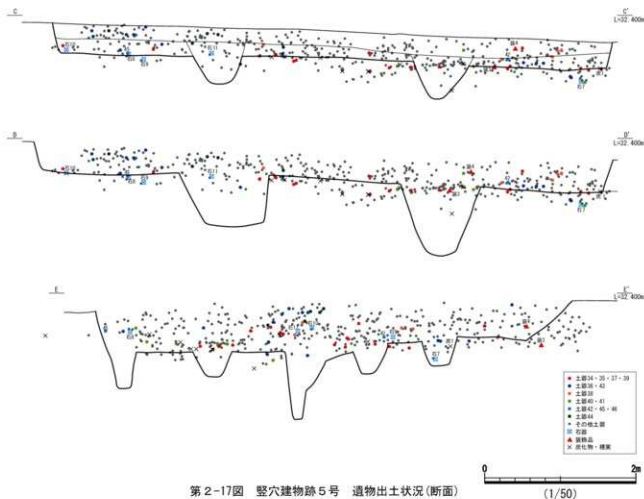
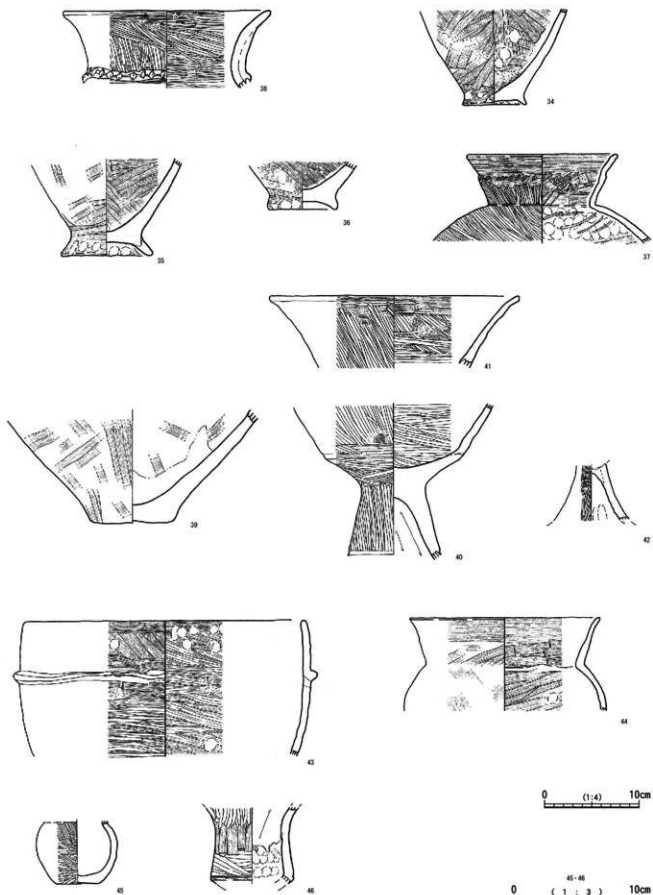
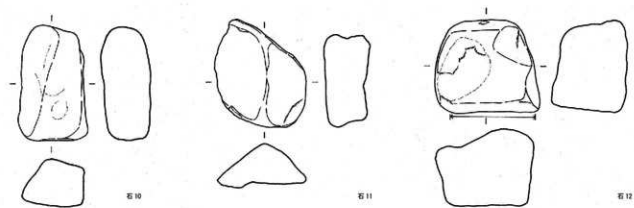
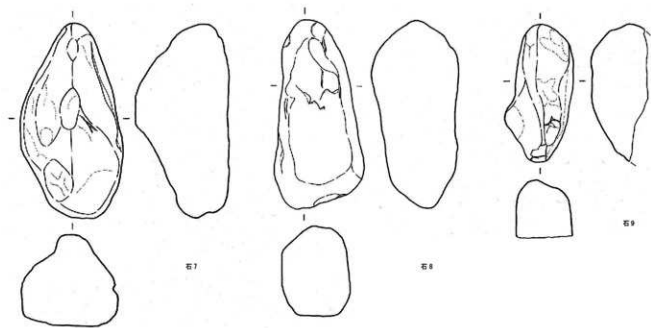


表2-10 竪穴建物跡5号出土石器

図番号	遺物番号	断面	器種	保存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 19	石7	○	棒状鏝	完形	20.5	10.8	9.9	2480.0	砂岩	
	石8	○	棒状鏝	完形	20.0	9.5	9.2	2370.0	ホルンフェルス	
	石9	○	棒状鏝	破損	14.6	6.6	6.0	740.0	ホルンフェルス	
	石10	○	棒状鏝	完形	12.3	7.4	5.2	730.0	砂岩	
	石11	○	鏝	完形	10.3	9.5	4.9	560.0	砂岩	
	石12		鏝	完形	9.6	10.4	8.0	1540.0	安山岩	



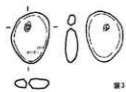
第2-18 圖 竪穴建物跡5号出土遺物(土器)



0 (1:4) 10cm

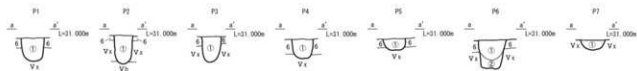
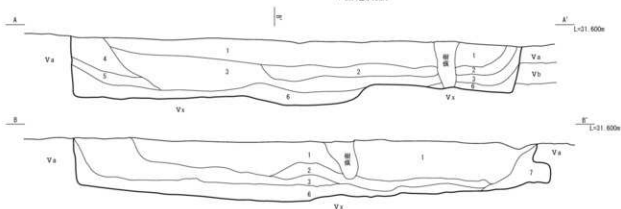
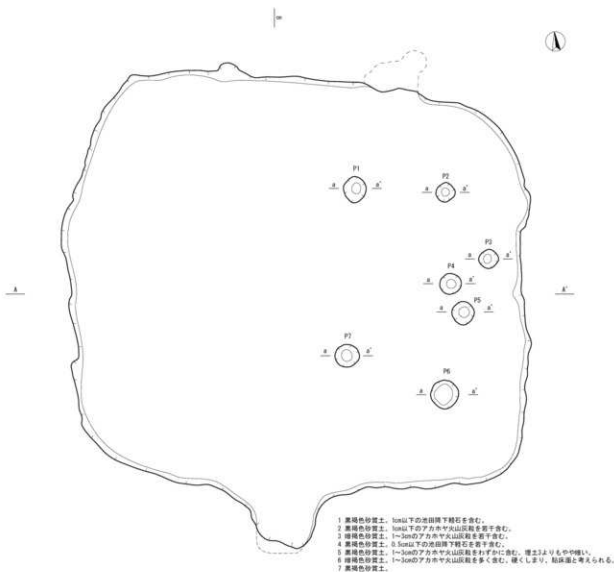


石4



0 (1:1) 2cm

第2-19图 整穴建物跡5号出土遺物(石器)

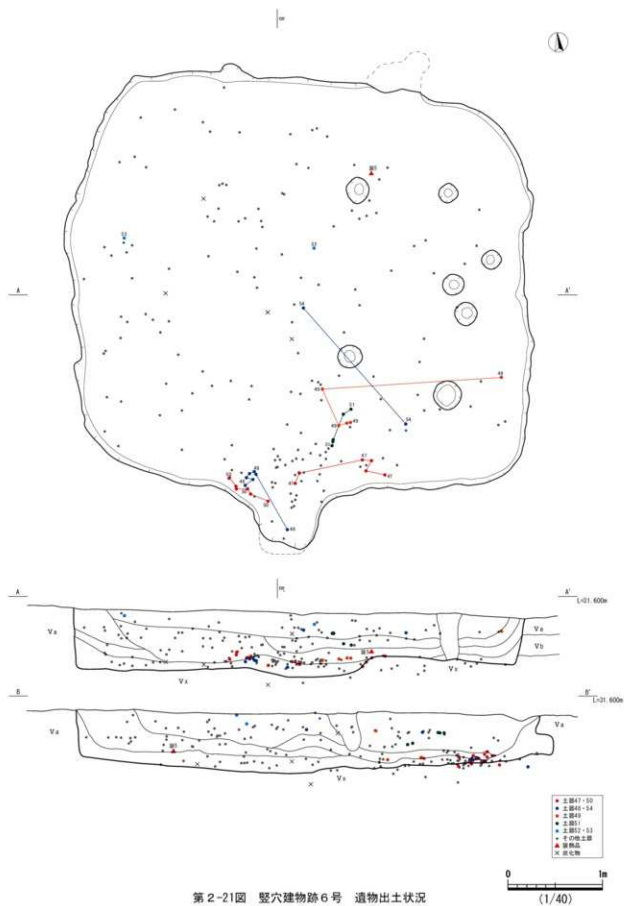


① 黄褐色土。
 ② 層土より層土6の混ざり。

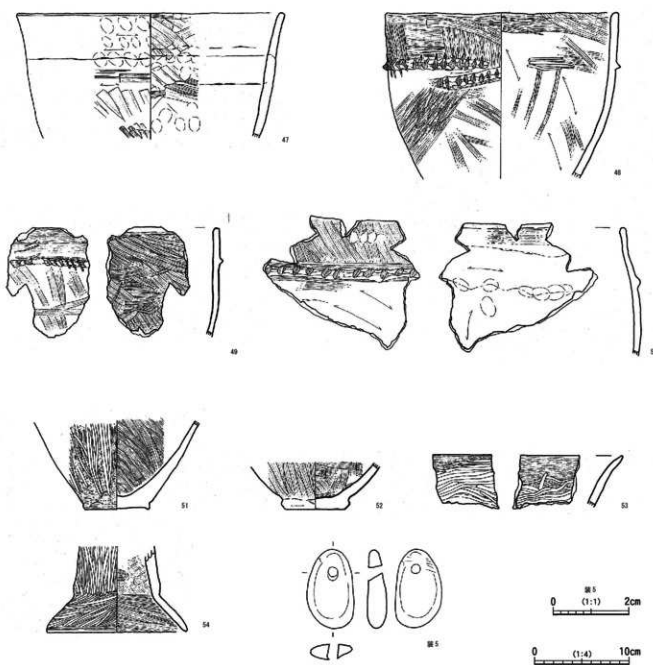


第2-20図 竪穴建物跡6号

(1/40)



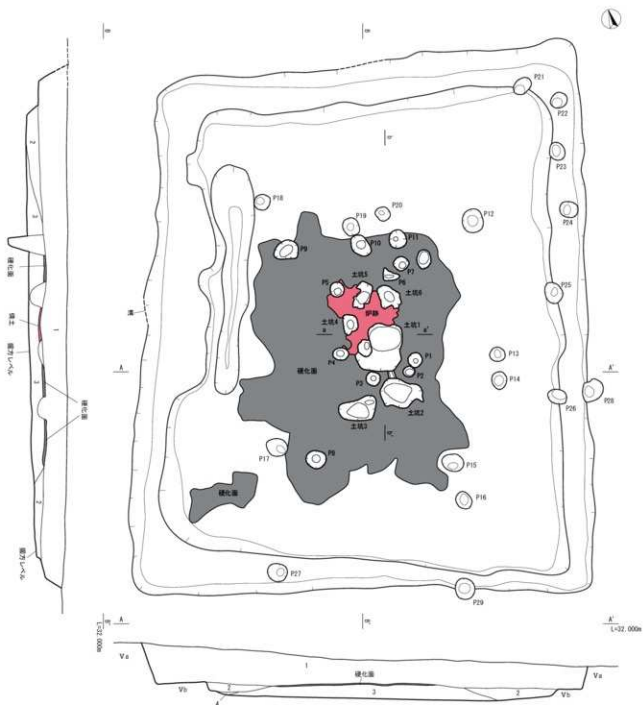
第2-21圖 豎穴建物跡6号 遺物出土狀況



第2-22 図 竪穴建物跡6号 出土遺物(土器・裝飾品)

表2-11 竪穴建物跡6号出土土器

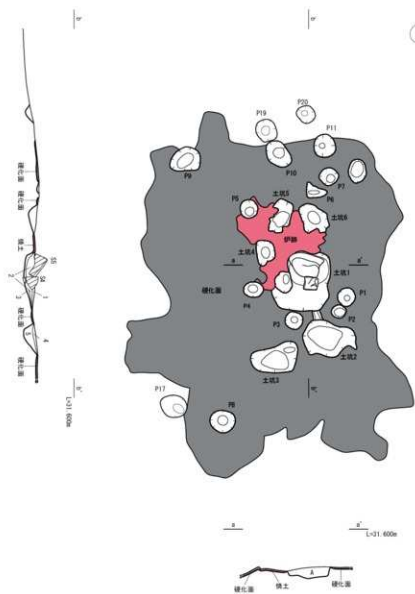
図 番号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (穴部部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調飾	内面 調飾	色調	胎土	備考
2 22	47	○	甕	口縁部-胴部	B	—	28.4	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい黄褐色 内:橙	小・ほか	実態なし
	48	○	甕	口縁部-胴部	D	—	24.5	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:にぶい黄褐色 内:橙	白・黒・小・ほか	
	49	○	甕	口縁部-胴部	D	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	石・黒・白・黒・小	
	50	○	甕	口縁部-胴部	C	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:黄褐色 内:黄褐色	石・黒・黒・小	
	51		甕・壺・鉢	胴部-底部	—	—	—	6.7	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:にぶい黄褐色 内:橙	石・白・小・ほか	脚部高: 0.2cm
	52		甕・壺	胴部-底部	—	—	—	6.2	工具ナデ	工具ナデ	外:明赤褐色 内:明赤褐色	石・白・小・ほか	脚部: 平底
	53		高杯	口縁部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	石・白・小	
	54		高杯	脚部	—	—	—	14.8	ミガキ	工具ナデ	外:橙 内:にぶい黄褐色	石・黒・白・小	



- 1 埴埴色土。
 2 埴埴色土に少量の黄褐色土が見える。アカホヤ火山灰土ブロックが見える。
 3 黄褐色土に埴埴色土が見える。アカホヤ火山灰土ブロックが多く見える。
 4 黄褐色土。

第 2-23(1) 図 竪穴建物跡 7 号

0 2m
(1/50)



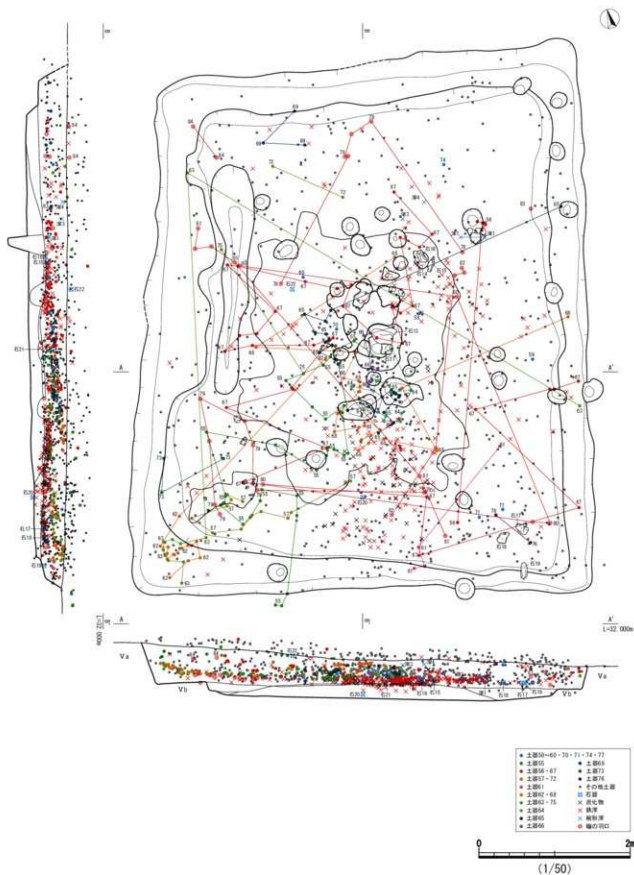
- 1 黄褐色土。上面のみを覆っている。
- 2 黒色土。大量にススを含んだような土。とりわけ竈跡下に多い。
- 3 灰白色土。
- 4 黄褐色土。部分的に黄褐色土。アカホヤ火山灰土が混入。
- 5 濃茶褐色土・黄褐色土・灰白色土が混合された土。

第2-23(2)図 竪穴建物跡7号

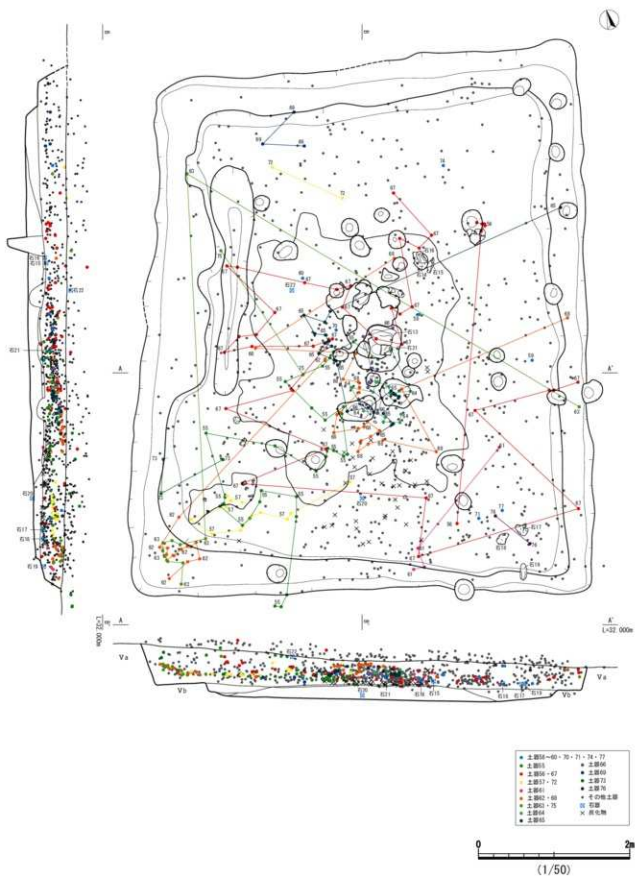


表2-12 竪穴建物跡7号柱穴観察表

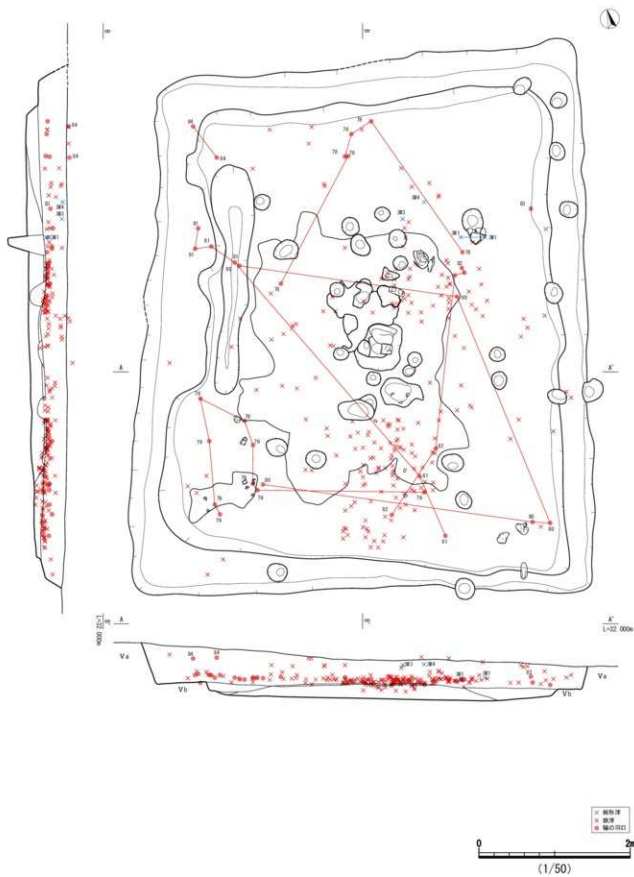
柱穴番号	位置	直径 (cm)	深さ (cm)	埋土色調	埋土特徴
1	中央硬化面	18	30	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
2	中央硬化面	16	5	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
3	中央硬化面	20	15	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
4	中央硬化面	20	5	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
5	中央硬化面	19	8	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
6	中央硬化面	21-11	5	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
7	中央硬化面	18	16	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
8	中央硬化面	27	12	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
9	中央硬化面	30	46	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
10	中央硬化面	25	47	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
11	中央硬化面	23	6	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
12	貼床面	25	27	暗褐色	
13	貼床面	20	26	暗褐色	
14	貼床面	20	27	暗褐色	
15	貼床面	26	38	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
16	貼床面	20	18	暗褐色	
17	貼床面	26	30	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
18	貼床面	20	12	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
19	貼床面	20	9	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
20	貼床面	20	8	暗褐色	鍛造剥片等が混ざる
21	底面 (床面)	21	10	暗褐色	
22	底面 (床面)	21	10	暗褐色	
23	底面 (床面)	20	9	暗褐色	
24	底面 (床面)	23	10	暗褐色	
25	底面 (床面)	21	10	暗褐色	
26	底面 (床面)	24	14	暗褐色	
27	底面 (床面)	25	28	暗褐色	
28	壁	26	19	暗褐色	
29	壁	21	22	暗褐色	



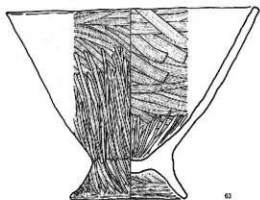
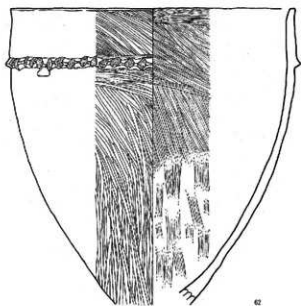
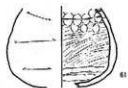
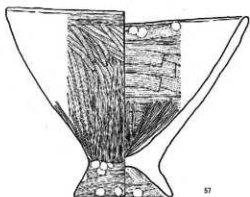
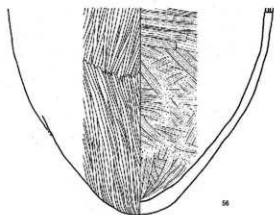
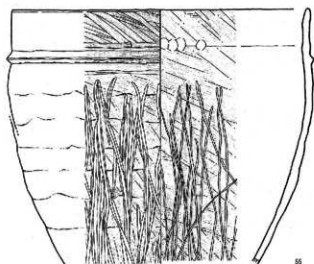
第2-24図 竪穴建物跡7号 遺物出土状況(全遺物)



第2-25図 竪穴建物跡7号 遺物出土状況(土器・石器・炭化物)

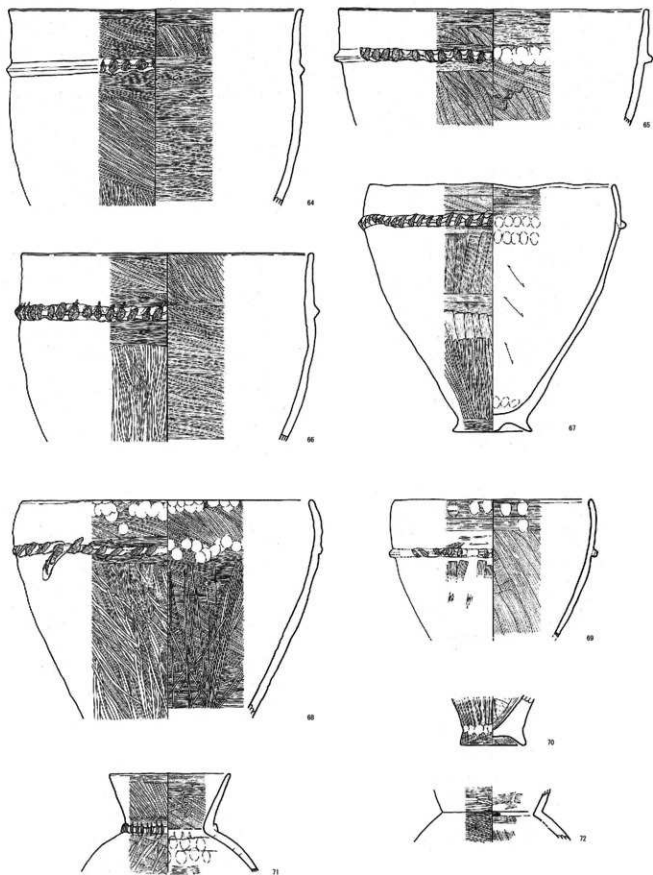


第2-26図 竪穴建物跡7号 遺物出土状況(鉄滓・羽口)



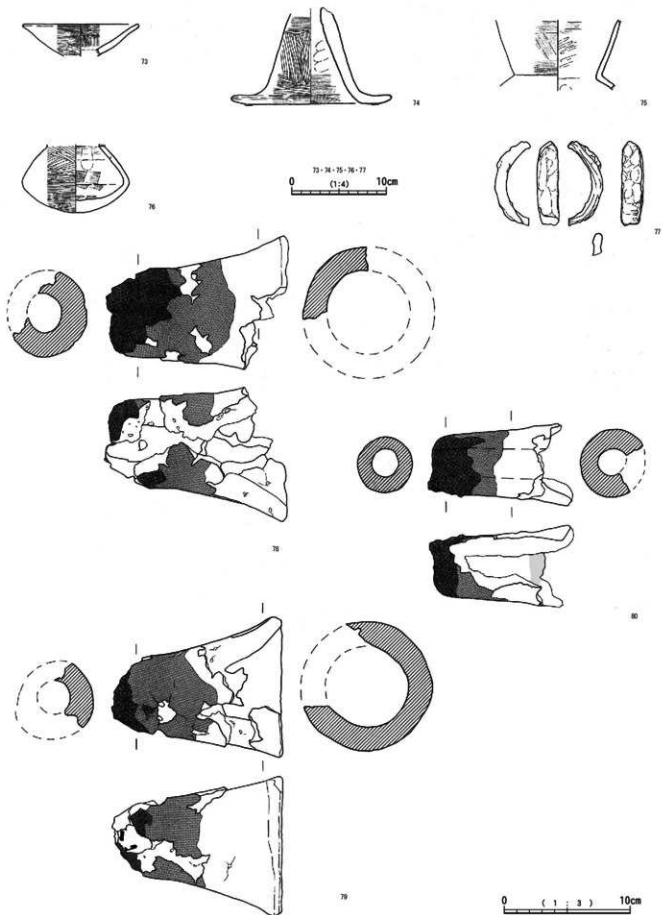
0 (1:4) 10cm

第2-27 圖 竪穴建物跡7号 出土遺物(土器①)

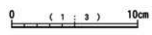
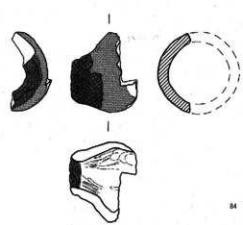
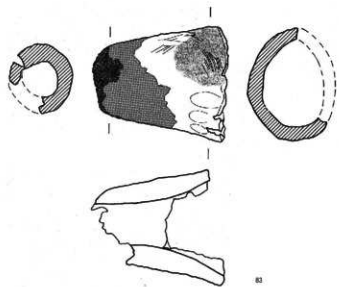
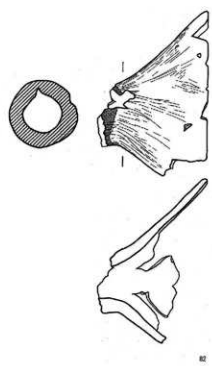
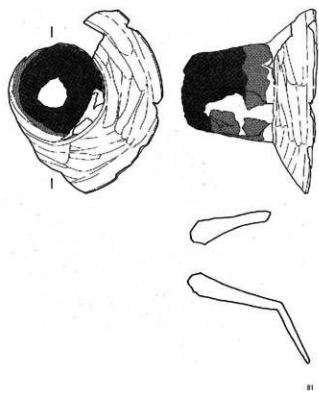


0 (1:4) 10cm

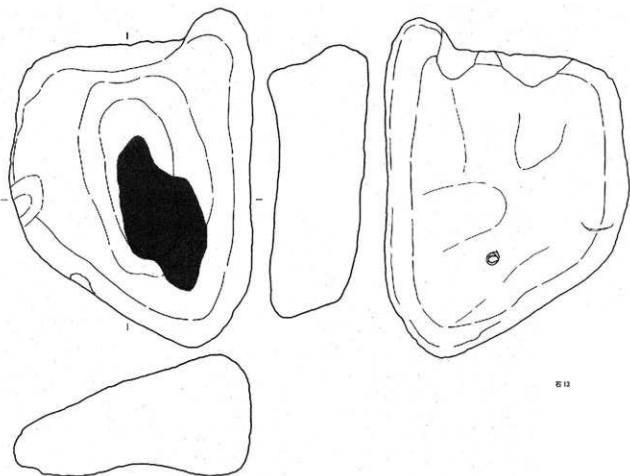
第2-28圖 竪穴建物跡7号 出土遺物(土器②)



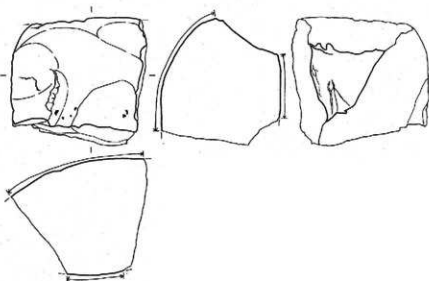
第2-29圖 竪穴建物跡7号 出土遺物(土器・土製品)



第2-30圖 竪穴建物跡7号 出土遺物(土製品)



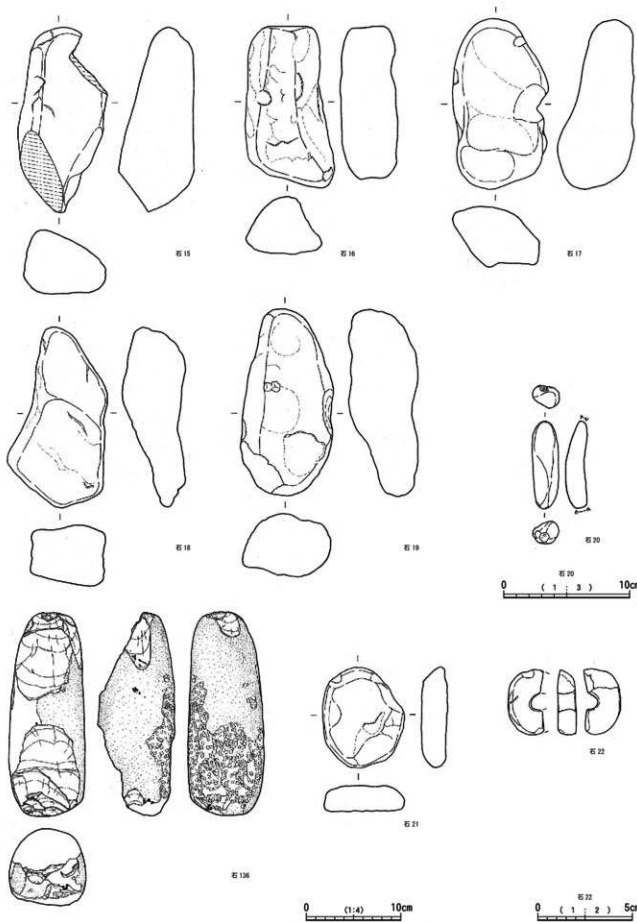
石13



石14

第2-31 圖 竪穴建物跡7号 出土遺物(石器①)

0 1:4 10cm



第2-32圖 竪穴建物跡7号 出土遺物(石器②)

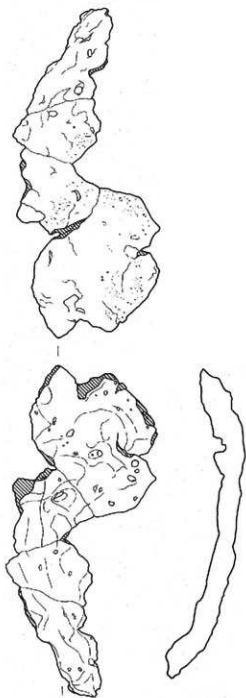


圖 1



圖 2

圖 2



圖 2-33 圖 聖火環跡跡7号 出土器物(磁器器・磁塊)

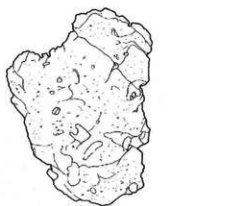


图1

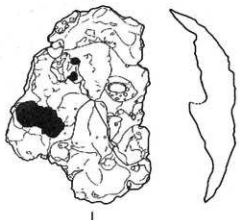


图2

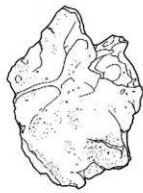
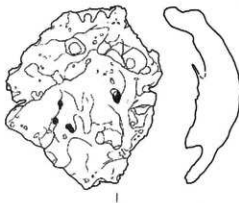
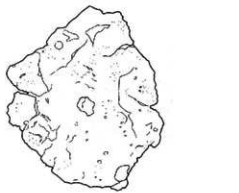
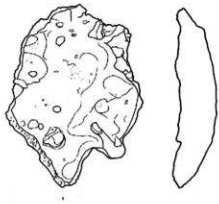


图5



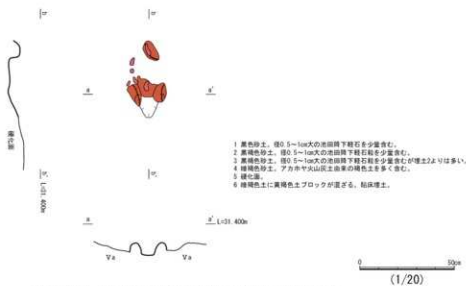
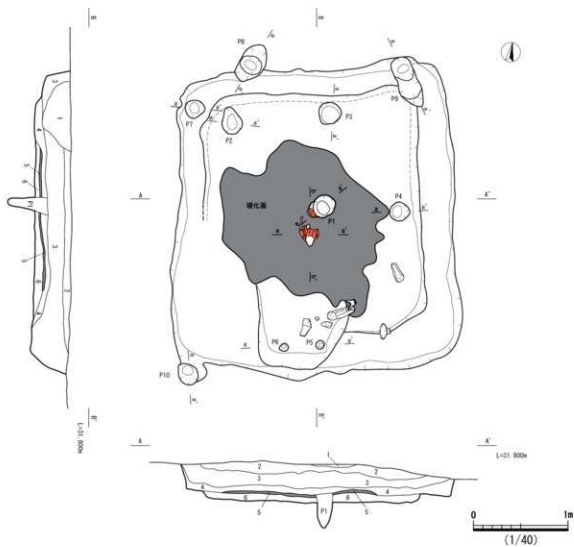
第2-34图 竖穴墓物跡7号 出土遺物(鉄器)

表2-13 竪穴建物跡7号出土土器

図番号	遺物番号	床面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 27	55	○	甕	口縁部-胴部	C	—	31.4	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外-白い 内-黒	石・長・白・ 黒・小	
	56	○	甕・壺	胴部-底縁	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外-白い 内-浅黄緑	黒・小	
	57	○	鉢	完形	—	19.5	25.7	18.4	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外-明赤褐色 内-明赤褐色	石・長・白・ 黒	
	58	○	鉢	完形	—	5.0	7.0	5.0	工具ナデ	工具ナデ	外-黒 内-黒	石・白・小	
	59	○	高杯	脚部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外-黒 内-白い	黒・黒・小	
	60	○	埴	完形	—	5.3	5.2	—	工具ナデ	工具ナデ	外-黒 内-黒	黒・黒・小	
	61	○	埴	胴部-底縁	—	—	—	—	指ナデ	工具ナデ 指ナデ	外-黒 内-白い	褐色胎	
2 28	62	○	甕	口縁部-胴部	C	—	30.9	—	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外-黒 内-黒	白・小・ ほか	
	63	○	鉢	完形	—	20.0	26.6	11.8	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外-黒 内-黒	石・白・小・ ほか	
	64	○	甕	口縁部-胴部	C	—	31.2	—	工具ナデ	工具ナデ	外-黒 内-黒	石・白・小・ ほか	
	65	○	甕	口縁部-胴部	D	—	32.6	—	工具ナデ	工具ナデ	外-明赤褐色 内-白い	石・長・黒・ 小	
	66	○	甕	口縁部-胴部	C	—	30.0	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外-白い 内-黒	石・白・小・ ほか	
	67	○	甕	完形	D	26.2	25.7	8.0	工具ナデ ミガキ	工具ナデ 指ナデ	外-浅黄緑 内-白い	黒・黒・小・ ほか	脚部高: 0.3cm
	68	○	甕	口縁部-胴部	D	—	30.6	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外-黒 内-黒	石・黒・小・ ほか	
2 29	69	○	甕	口縁部-胴部	D	—	19.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外-黒 内-白い	石・長・黒・ ほか	
	70	○	甕	脚部	—	—	—	6.1	工具ナデ	工具ナデ	外-白い 内-黒	石・白・黒・ ほか	脚部高: 1.0cm
	71	○	壺	口縁部-胴部	—	—	12.8	—	工具ナデ	工具ナデ	外-黒 内-黒	石・白・黒・ ほか	
	72	○	壺	口縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外-明赤褐色 内-黒	石・白・ ほか	
	73	○	高杯	杯蓋	—	—	12.1	—	工具ナデ	工具ナデ	外-明赤褐色 内-浅黄緑	石・白・小・ ほか	
	74	○	高杯	脚部	—	—	—	16.8	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外-明赤褐色 内-明赤褐色	石・白	輪の口部転出品 の可能性あり
	75	○	埴	口縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ ミガキ	外-浅黄緑 内-浅黄緑	石・白・黒	
2 30	76	○	甕	胴部-底縁	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	指ナデ	外-黒 内-黒	石・長・白・ ほか	
	77	○	その他	仕切り	—	—	—	—	指押さえ	指押さえ	外-灰黄 内-灰黄	黒・黒・黒・ ほか	
	78	○	輪の口部	完形	—	(長さ) 14.1	(内径) 2.7	(厚み) 2.0	ナデ	ナデ	外-白い 内-白い	黒・小・ ほか	専用品
	79	○	輪の口部	完形	—	13.0	2.6	1.9	ナデ	ナデ	外-黒 内-黒	白・小・ ほか	専用品
	80	○	輪の口部	完形	—	11.1	2.1	1.4	ナデ	ナデ	外-明赤褐色 内-明赤褐色	石・白・小	専用品
2 31	81	○	輪の口部	完形	—	8.6	2.2	1.6-0.6	工具ナデ	工具ナデ	外-黒 内-黒	石・長・黒	転用品 (高杯脚)
	82	○	輪の口部	完形	—	8.1	2.5	1.2-0.6	ナデ ミガキ	ナデ	外-黒 内-白い	長・脚・角	転用品 (高杯脚)
	83	○	輪の口部	完形	—	10.5	3.0	1.6-1.1	工具ナデ	ナデ	外-明赤褐色 内-明赤褐色	石・長・黒	専用品
	84	○	輪の口部	発出口	—	5.2	1.9	0.8	ナデ	ナデ	外-白い 内-赤褐色	石・白・黒・ 小	転用品 (高杯脚)

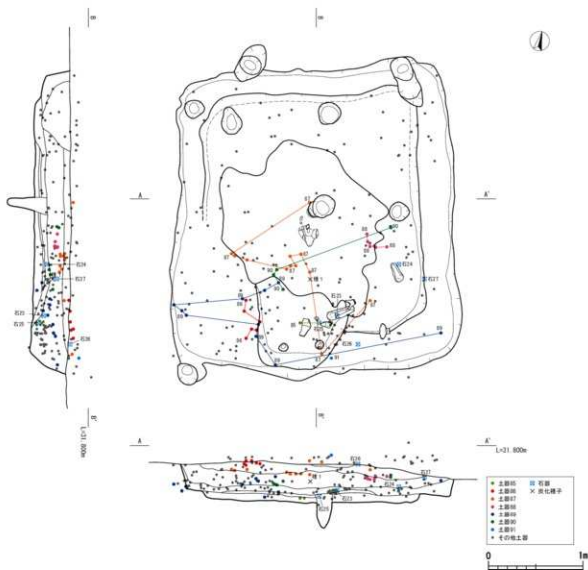
表2-14 竪穴建物跡7号出土石器

図番号	遺物番号	床面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 31	石13	○	金床石	完形	35.9	26.0	12.9	16290.0	花崗岩	焼物、埋付着。製造削片付着
	石14	○	金床石	破損	(17.6)	(9.5)	6.0	2950.0	変成岩	製造削片・磨削付着
	石15	○	棒状鏡	完形	19.7	9.0	8.3	1590.0	ホルンフェルス	
	石16	○	棒状鏡	完形	16.9	8.9	6.1	1420.0	ホルンフェルス	
	石17	○	棒状鏡	完形	18.0	10.0	7.9	1700.0	ホルンフェルス	
	石18	○	棒状鏡	完形	19.0	10.2	6.4	1490.0	ホルンフェルス	
	石19	○	棒状鏡	完形	19.8	9.6	7.1	1750.0	緑岩	
	石20	○	鏡石	完形	7.0	2.1	1.6	35.3	頁岩	
2 32	石136	○	鏡石	破損	21.7	8.2	8.4	1990.0	頁岩	
	石21	○	鏡	完形	10.6	8.6	7.0	330.0	凝灰岩	
	石22	○	輝石製品	破損	3.4	(1.8)	1.0	(1.9)	輝石	有孔



- 1 黒色砂土。径0.5～1cm次の池田降下粒石を少量含む。
- 2 黄褐色砂土。径0.5～1cm次の池田降下粒石を少量含む。
- 3 黒褐色砂土。径0.5～1cm次の池田降下粒石を少量含むが埋土よりは多い。
- 4 黄褐色砂土。アサキや丸山泥土由来の褐色土を多く含む。
- 5 緑化層。
- 6 緑褐色土に黄褐色土ブロックが混ざる。粘床埋土。

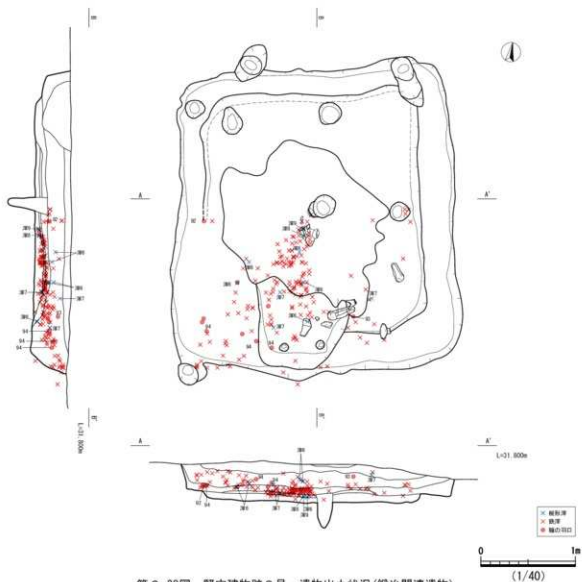
第2-35図 竪穴建物跡8号・竈の羽口設置想定箇所拡大



第2-37図 竪穴建物跡8号 遺物出土状況(土器・石器・炭化種子) (1/40)

表2-15 竪穴建物跡8号出土土器

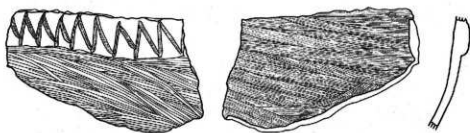
図番号	遺物番号	床面	部種	部位 (大眼部位)	分類	部高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 39	85	○	壺	胴部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外:黄褐色 内:白っぽい	石・黒・灰・小	
	86		壺	口縁部-胴部	D	—	29.5	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ 胎ナデ	外:白っぽい 内:白っぽい	白・小・黒	
	87		壺	胴部	—	—	—	—	工具ナデ	胎ナデ	外:黄褐色 内:白っぽい	石・白・小	
	88		壺	胴部-底部	—	—	—	4.8	ミガキ	ナデ	外:胎 内:胎	石・白・小・黒	
	89		壺	完形	—	7.9	5.6	1.8	ミガキ	胎ナデ	外:白っぽい 内:白っぽい	石・黒・小	
	90		壺	胴部-底部	—	—	—	4.9	工具ナデ	工具ナデ	外:胎 内:胎	石・長・白・黒・小	
	91		壺	底部	—	—	—	2.5	工具ナデ	工具ナデ	外:胎 内:胎	石・黒・小	
2 40	92	○	輪の引口	完形	—	(長さ) 10.7	(内径) 2.9	(厚み) 1.3-0.8	ミガキ ナデ	ナデ	外:黄褐色 内:白っぽい	長・黒	転用品(高坏脚)
	93		輪の引口	(抜出口破損)	—	10.6	3.4	1.5	ナデ	ナデ	外:白っぽい 内:白っぽい	黒・白・黒・小	専用品
	94		輪の引口	抜出口	—	4.7	2.9	1.5	ナデ	ナデ	外:胎 内:胎	石・白・小	



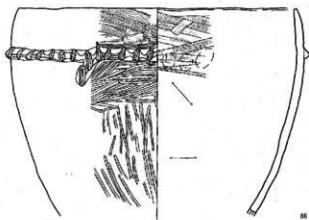
第2-38図 竪穴建物跡8号 遺物出土状況(鍛冶関連遺物)

表2-16 竪穴建物跡8号出土石器

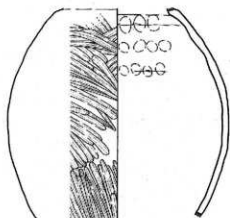
図 番号	遺物 番号	素材	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 41	523	○	砥石	完形	32.2	9.6	9.65	4550.0	砂岩	鍛造削片付着
	524	○	棒状錐	完形	22.7	10.25	7.7	2380.0	砂岩	
	525	○	棒状錐	完形	11.2	6.5	4.3	500.0	ホルンフェルス	
	526		砥石	破損	(2.05)	7.5	4.5	(100.0)	細粒砂岩	
	527		錐	完形	9.8	9.2	4.7	460.0	ホルンフェルス	



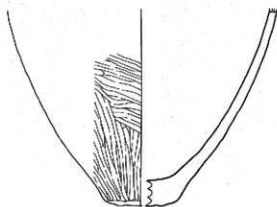
85



86



87



88



89



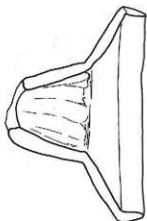
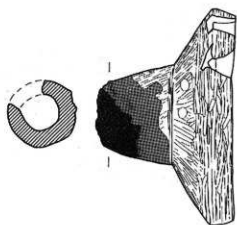
90



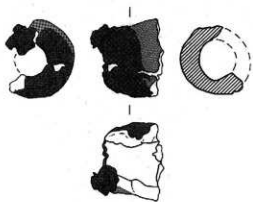
91

0 (1:4) 10cm

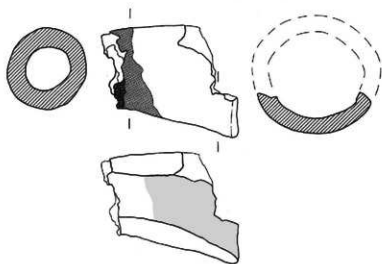
第2-39圖 豎穴建物跡8号 出土遺物(土器)



32



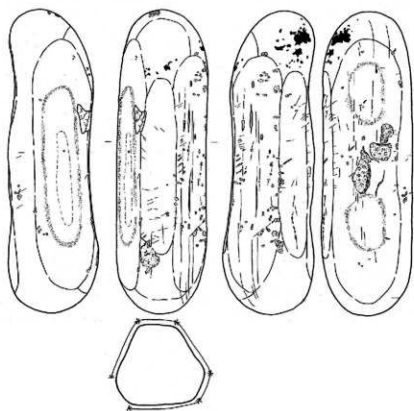
34



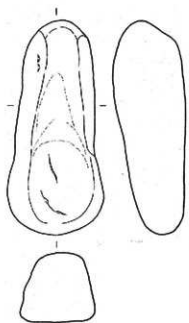
33

0 (1 : 3) 10cm

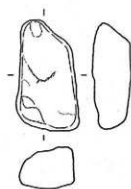
第2-40 圖 竪穴建物跡8号 出土遺物(土製品)



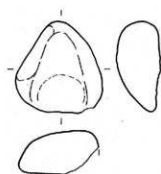
石23



石24



石25



石27

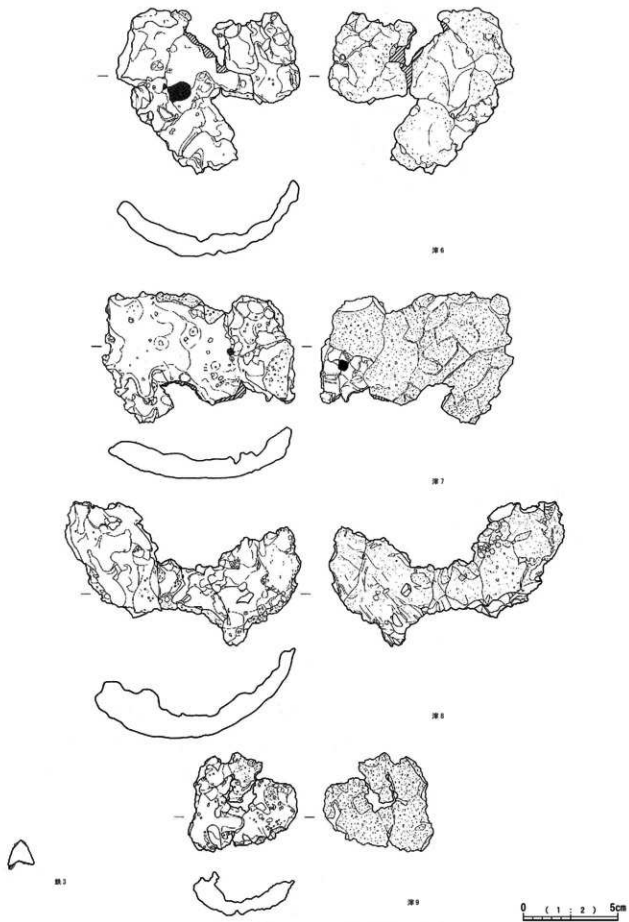
0 (1:4) 10cm



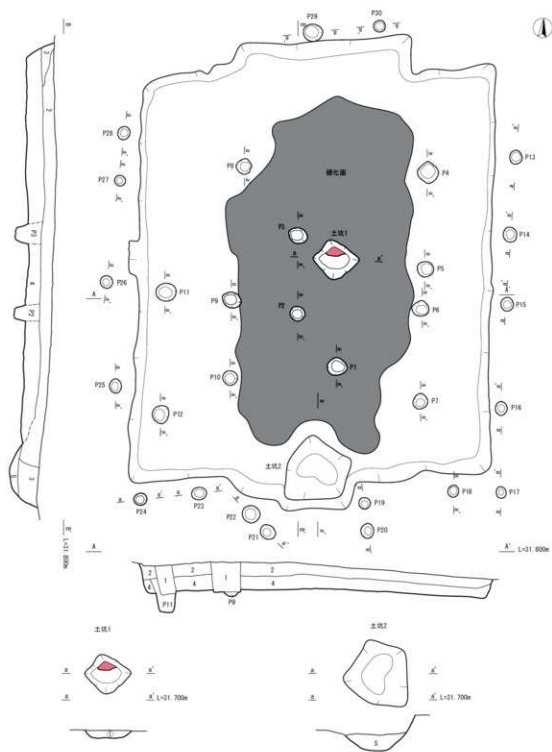
石26

石26
0 (1:3) 10cm

第2-41 圖 竪穴建物跡8号 出土遺物(石器)



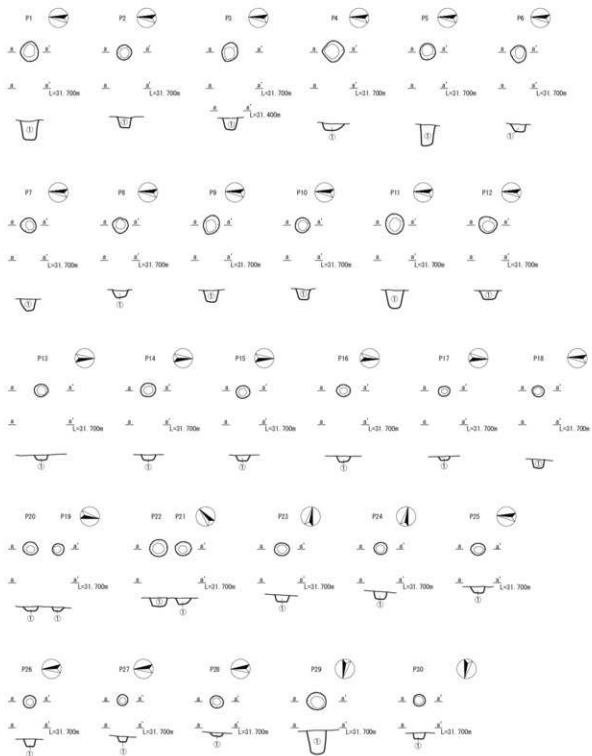
第2-42 圖 竪穴建物跡8号 出土遺物(鉄製品・鉄滓)



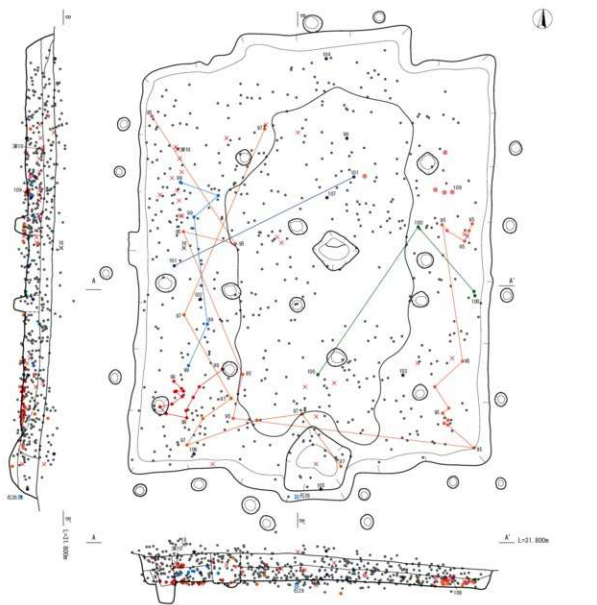
1. 黒褐色土。池田降下積石を少量含む。
2. 緑褐色土。池田降下積石を若干含む。
3. 黒褐色土を基礎とし、池田降下積石を若干含む。アカホヤ火山灰土も若干含む。
4. 緑褐色土。池田降下積石を多く含む。アカホヤ火山灰土を下層に多く含む。
5. 黒褐色土を基礎とし、下層に土層及びVa層土を多く含む。池田降下積石を若干含む。

第2-43図 竪穴建物跡9号

0 2m
(1/50)



第2-44図 竪穴建物跡9号 柱穴

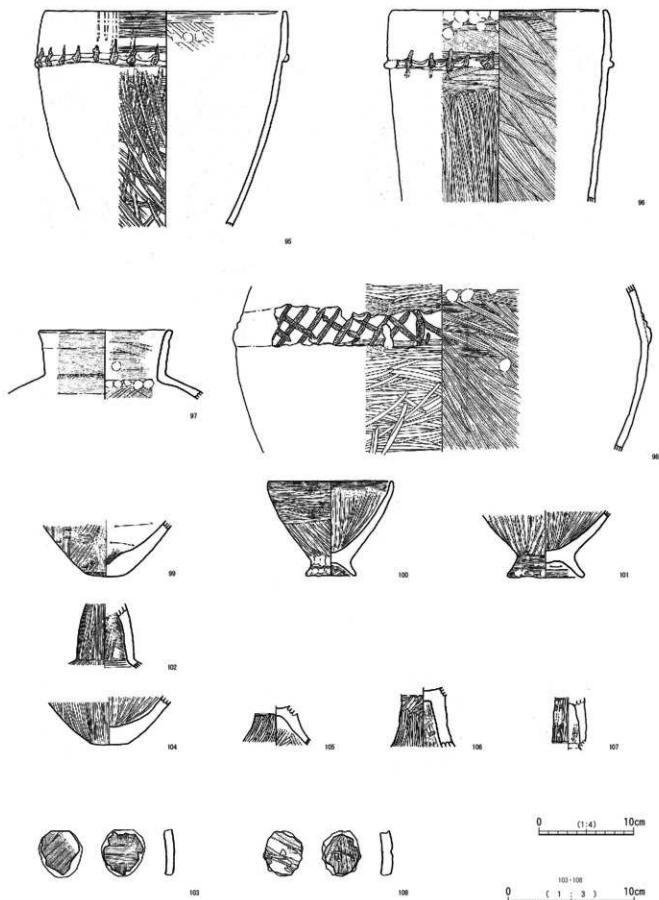


- | | |
|---------------|----------|
| ● 土器片 | ● 木炭物土器 |
| ● 土器片-102-107 | ■ 石碓 |
| ● 土器片7 | ● 磁石瓦口 |
| ● 土器片6 | × 磁器 |
| ● 土器片9 | × 炭化物・雜質 |
| ● 土器片10 | |
| ● 土器片11 | |

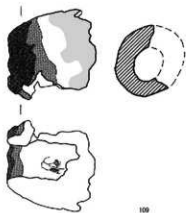
0 2m

第2-45圖 竪穴建物跡9号 遺物出土狀況

(1/50)



第2-46 圖 豎穴建物跡9号 出土遺物(土器)



109



110

0 (1 : 3) 10cm

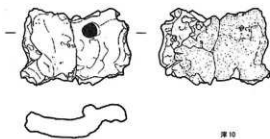


111

0 (1-4) 10cm



112



113

0 (1 : 2) 5cm

第2-47图 竖穴建物跡9号 出土遺物(土製品・石器・鉄製品・鉄滓)

表2-17 竪穴建物跡9号出土土器

図 番号	遺物 番号	底 面	器種	部位 (次級部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 46	95	○	甕	口縁部-胴部	D	—	23.5	—	工具ナデ	工具ナデ	外: 焼 内: 焼	石・白・ ほか	
	96	○	甕	口縁部-胴部	D	—	22.6	—	工具ナデ	工具ナデ	外: 黒焼 内: 土に近い・黄焼	石・白	
	97	○	甕	口縁部-胴部	—	—	13.2	—	工具ナデ	工具ナデ	外: 赤赤焼 内: 明赤焼	石・黄・白・ 小	
	98	○	甕	胴部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外: 土に近い・黄焼 内: 明焼	石・白・ 黒・小	
	99	○	甕	底面	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ 指ナデ	外: 赤赤焼 内: 焼	石・黄・白・ 黒・小	
	100	○	鉢	完形	—	10.0	13.0	5.3	工具ナデ	工具ナデ	外: 黄焼 内: 黄焼	石・白・小・ ほか	
	101	○	鉢	胴部-脚部	—	—	—	7.8	工具ナデ	工具ナデ	外: 黄焼 内: 黄焼	石・白・小・ ほか	
	102	○	高坏	脚柱部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ ミガキ	外: 明焼 内: 土に近い・焼	石・長・白・ 小	
	103	○	土製品	完形	—	—	—	—	工具ナデ	ハケ目 工具ナデ	外: 黄焼 内: 土に近い・焼	石・黒・小・ ほか	
	104		甕	底面	—	—	—	3.6	ミガキ	工具ナデ	外: 土に近い・黄焼 内: 土に近い・焼	石・白・小	
	105		高坏	脚部	—	—	—	—	ミガキ	指ナデ 工具ナデ	外: 赤赤焼 内: 土に近い・焼	石・長・黄・ 白・小	
	106		高坏	脚柱部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外: 明赤焼 内: 焼	石・黄・白・ 黒・小	
	107		高坏	脚柱部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外: 土に近い・焼 内: 土に近い・焼	石・小・ほか	
	108		土製品	完形	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外: 土に近い・焼 内: 土に近い・焼	石・長・小	
2-47	109	○	輪の羽口	排出口	—	(長さ) 6.9	(内径) 2.1	(厚み) 2.2-1.5	ナデ	ナデ	外: 土に近い・黄焼 内: 土に近い・黄焼	石・黒・小・ ほか	

表2-18 竪穴建物跡9号出土石器

図 番号	遺物 番号	底 面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 47	石28	○	磨礫石	完形	7.9	7.8	5.4	609.9	ホルンフェルス	
	石29		礫	完形	8.5	7.4	4.2	350.8	砂岩	

竪穴建物跡 10号 (第2-48・49図)

竪穴建物跡 10号は、H・134・35区Va層から検出された。1辺約5.5mのほぼ正方形を呈し、検出面から底面までの深さは約60cmである。南側は中世以降の黒色土を主体とする埋土の土壌による攪乱を受けているが、残存部分から推察する限りでは南側の張り出しは無いと考えられる。建物の軸はやや北西側に傾く。底面全体に水平な貼床面が形成されており、貼床面の厚さは平均12cmである。

竪穴建物跡 10号の中央部には長軸約80cm、短軸約65cmの楕円形の土坑が検出されており、土坑内には焼土も確認されており、炉跡と考えられる。また、図面には記載されていないが、調査記録によると、中央部と南側壁面のちょうど中間の位置の貼床面上面に、別な焼土も確認されている。この位置には、後述する炉壁と考えられる焼けた粘土塊等も出土しており、この位置にも炉があった可能性が高い。なお、炉跡や柱穴は、記録や写真では貼床面から検出されているが、実測図は底面段階のものであり、計測値は本来の数値よりも小さな数値となっている。柱穴は16基検出されており、北西角・南西角・南東角の角部に3基(P1・3・4)、西側中央壁面に1基(P2)、西壁から約80cmと東壁から約50cmの位置に、対をなすような柱穴4基(P5～8)、中央土坑周辺に小型の柱穴8基(P9～16)となっている。図面上では、底面から描かれているが、写真等を確認すると、貼床面上面を確認できることから、どれも貼床面から掘込まれている柱穴である。柱穴の埋土は大きく3種類の色調に分けられ、柱穴の配置により埋土が異なる傾向が見られる。また、16基中11基の柱穴埋土中に焼土粒が含まれているのが特徴として挙げられる。

竪穴建物跡 10号の埋土は、貼床面上位は、黒褐色土の単一埋土であり、レンズ状堆積は見られない。

出土遺物 (第2-50図)

遺物の出土状況は、遺構の南側からの出土が北側と比較して密である。貼床面で出土している遺物も多いが、遺構内の広い範囲に散在して出土している状況が見られる。

土器・土製品 (第2-51・52図)

110～119は、その出土状況から、竪穴建物跡 10号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

110は完形に復元できた甕である。口径26.0cm、底径10.9cm、器高32.0cmを測る。胴部内面天井部中央は大きく張り出し、脚部高は3.7cmを測る。遺構の南壁付近に集中して出土しているが、炉跡と西壁の中間付近でも少量が出土している。出土位置は貼床面である。口縁部端部を指つまみながら土器の成形をおこなったと考えられ、口縁部端部の内外面には指押さえの痕跡が遺る。外面口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。胴部も

口縁部と同じ工具で、横・斜め方向の工具ナデが施されている。川久保遺跡の古墳時代の甕は、貼付突帯部分の調整のみ横方向に施した資料が多いが、110はそのような器面調整は施されていない。胴部下端には、脚部を接合したときに補強として貼り付けられた粘土が確認できる。脚部上位～中位にかけては、斜め方向の工具ナデが施されている。胴部の工具ナデと比べると、幅の狭い工具を用いているようである。脚部下位は横方向の工具ナデが施されている。内面口縁部は指押さえによる成形の後、横・斜め方向の工具ナデを施している。胴部上位には斜め・横方向の工具ナデが施されている。工具の幅に違いが見られる。胴部中には横方向の工具ナデが施されている。胴部下位には横・斜め方向の工具ナデが施されているが、明瞭ではない。脚部内面は横方向の工具ナデが施されている。基本的に内面調整に使用されている工具は、外面の器面調整に使用されている工具よりも幅が広い。

110は貼付突帯部分と、脚部内面上面に見られる突出部分に甕の変化の様相の中でも、新しい様相が見られるが、口縁部の形状は古い様相を呈しているのが特徴である。

111は口縁部資料である。遺構の南東角部、柱穴P13の西側に隣接して、貼床面から出土している。外面口縁部は単位幅が不鮮明な横方向の工具ナデが施されている。内面は斜め方向の工具ナデが施され、突帯内面部分には指押さえが並ぶ。

112は口縁部資料である。口縁部は粘土を貼り付けることにより肥厚させている。遺構の中央部と南西角部の中間付近で、貼床面から出土している。外面口縁部上位は単位幅が不明瞭な工具ナデ、口縁部下半は指ナデが施されている。内面口縁部上位は横方向の工具ナデ、口縁部下半は斜め方向の短い長さの工具ナデが密に施されている。

113は甕の胴部から脚部資料である。底径9.2cmを測る。遺構の南東部、柱穴P10の東側から集中して、貼床面で出土している。外面胴部は縦・斜め方向、脚部は指ナデが施されている。胴部内面は斜め方向、底面では横方向の指ナデが施されている。脚部内面には横方向の工具ナデが施されており、脚部天井部分には指押さえが行われている。

114は丸底甕の胴部から底部資料である。底部はわずかながら平坦面を持ち、底径2.6cmを測る。遺構の北壁付近で、貼床面よりも下位の貼床埋土中から出土している。外面は幅2～3mm程の幅の細いミガキと、その下位に幅7mm程の幅の広いミガキが施されている。底部は摩滅が著しく調整痕が確認できない。内面胴部は縦方向の工具ナデが施されている。底面付近には指押さえが行われている。

115は甕・壺もしくは鉢の底部資料である。底径は6.9cmを測る。遺構の南西部、柱穴P12の北側に隣接して、貼床面よりも下位の貼床埋土中から出土している。外面底部付近は縦方向の指ナゲが、底部には横方向の工具ナゲが施されている。内面は横方向の工具ナゲが施され、底面には指押さえが行われている。

116は完形に復元できた鉢である。口径27.4cm、底径11.0cm、器高17.2cmを測る。遺構の北西部付近から集中して出土しており、1点のみが跡の東側で出土している。この1点も含めて、全ての破片が貼床面から出土している。外面口縁部は幅3～5mmの横方向の工具ナゲを施した上から、指押さえの痕跡が確認できる。胴部上位は横・斜め方向の工具ナゲが施されている。胴部中位には縦方向の工具ナゲ及び、縦方向のミガキが施されている。胴部下位から脚部上位にかけては横方向の工具ナゲが施されている。脚部中位には斜め方向の工具ナゲが施されており、部分的には指押さえの痕跡も確認できる。脚部下位には横方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部には、横方向の工具ナゲを施した後、特徴的な工具ナゲを施している。基本的には横位または、左上から右下方向へ下がる斜位方向に施されており、他の器面調整よりも強く施されているため、文様のようにも見える。胴部上半には横・斜め方向の工具ナゲが施されている。胴部下半には縦方向の工具ナゲが施されている。脚部には横方向の工具ナゲが施されている。

117は完形に復元できた高坏である。口径11.9cm、底径9.8cm、器高11.4cmを測る。口縁部が外傾し、布留式土器を意図したような坏部形態であるが、脚筒部は充実で、脚筒部にかけては、なだらかに開く形状を呈する。遺構の北側で散在して出土しているが、全ての破片が貼床面から出土している。外面坏部には、横・斜め方向のミガキが施されている。脚部ではミガキの方向は縦方向になり、脚筒部を見ても横方向の工具ナゲの上から、縦方向のミガキが施されていることが確認できる。全体的に丁寧なミガキが施されているが、光沢を持つのは脚筒部のみである。内面坏部上位は単位不明瞭な横方向のナゲを施した後に、横方向のミガキを施している。坏部下位では斜め方向の工具ナゲの後に、横・斜め方向のミガキが施されている。坏部破損部分では、明瞭に接合痕跡が確認でき、脚部の上に平坦な台座を成形し、その上に坏部を乗せ、接合部分の内外面で粘土を貼り付け補強していることが分かる。外面の粘土で補強した部分は、立ち上がりが垂直気味になっている。脚部上位から中位にかけては、斜め方向の工具ナゲが施されている。脚部下位には横方向の工具ナゲが施されている。土器の色調は、坏部内面が橙色、外面が赤褐色、脚部内面が黒色と、色調に特徴がある土器である。

118は高坏の坏部から脚部の資料である。口縁部及び

脚部端部は欠損している。尹跡の南側で貼床面よりも下位の貼床埋土中から出土している。外面坏部下位は斜め方向のミガキが、坏部下端は横方向の工具ナゲが施されている。脚部上位は縦方向のミガキ、脚部下半は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナゲが施されている。坏部内面は縦・横方向のミガキが施されている。脚部内面は縦方向の工具ナゲが短い長さで密に施されている。

119は高坏の脚部である。底径は15.0cmを測る。遺構の南西部、柱穴P12の東側に隣接して、貼床面から出土している。外面脚部上端は横方向の工具ナゲが施されている。脚筒部は縦方向のミガキ、脚筒部は横・縦・斜め方向のミガキが、筒部と裾部の境目には横方向の工具ナゲが施されている。脚筒部には横方向の工具ナゲが施されている。坏部底面にはミガキが施されている。脚部内面天井部分には指押さえが行われている。脚部内面には単位幅が不明瞭な横方向の工具ナゲが施されており、脚筒部内面ではその後に、縦方向の工具ナゲが施されている。脚筒部には幅7mm程度の横方向の工具ナゲが施されている。

120～125は、その出土状況から、堅穴建物跡10号廃絶後に産棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

120は完形に復元できた口縁部がわずかに内湾する雙D類である。口径30.2cm、底径8.0cm、器高34.7cm、脚部高1.9cmを測る。遺構の南西部と東壁付近に散在して出土している。東壁付近で出土した3点はいずれも口縁部直下の胴部片であり、5cm程度の破片は全てが接合し、1つの大きな胴部片となることから、東壁付近に移動後に割れたと考えられる。南西部に散在する破片は、口縁部・胴部・脚部と多岐にわたり、東壁付近で出土した胴部片とも接合する。東壁付近で出土した3点と、南西部で出土した破片のうち、最も東より出土した脚部1点は貼床面から出土しているが、その他は全て貼床面から浮いた状態で出土している。土器表面積の半分以上の資料が貼床面から浮いた状態で出土していることから、確実に堅穴建物跡10号に帰属するとは言い難く、完形に復元できることから一括廃棄された可能性が考えられる。外面口縁部上端は横方向の工具ナゲが、口縁部は斜め方向の工具ナゲが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は斜め方向の工具ナゲを施した後に、縦・斜め方向のミガキを施している。脚筒部は横・斜め方向の工具ナゲを施しており、胴部と脚部の境目には指押さえが巡る。内面は全体的に丁寧な指ナゲが施されている。脚部内面は斜め・横方向の工具ナゲが施されている。

121は口縁部がほぼ直行する雙C類の口縁部から胴部上位の資料である。口径20.7cmを測る。遺構の南西部、貼床面から約10cm浮いた状態で出土しており、流れ込

みと考えられる。口縁部上位は横方向の工具ナデが施される。口縁部下位は横・斜め方向の工具ナデや横方向のミガキが施されており、その上から斜め方向の刻み痕が並び、突帯を貼り付けた痕跡の可能性が考えられる。胴部上位には幅1mm程の細い横方向のミガキが施されている。胴部中位以下には、幅3mm程の縦方向の工具ナデが施されている。この工具ナデはミガキに類似しているが、光沢は持たない。内面口縁部上位には横方向の工具ナデが施される。口縁部下位から胴部上位にかけては、幅1～1.3cm程の横方向の工具ナデが施されている。胴部中位以下には幅3mm程の縦方向のミガキが施されている。

122は口縁部が外傾する甕D類の口縁部から胴部上位の資料である。遺構の西壁付近、柱穴P9の北側から出土している。貼床面と貼床面から約15cm浮いた状態で出土しているが、遺物カード・台帳等に「床着」等の記載が無かったため、判断が難しく、破片の少なさからは流れ込みの可能性が高い。外面口縁部上位は横方向の工具ナデが施されている。口縁部は斜め方向の指ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向のミガキや工具ナデが施され、突帯はその後に貼り付けられている。胴部には縦・横方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上端には横方向の工具ナデが施されており、その上から指押さえが行われている。口縁部から胴部にかけては、横方向の指ナデが施されており、指押さえも行われている。

123は甕の胴部から底部の資料である。底径は7.5cm、脚部高0.5cmを測る。遺構の東側に散在して、貼床面より10～18cm程度浮いた状態で出土しており、流れ込みと考えられる。外面胴部中位から下位までは、縦方向のミガキが施されている。胴部下端は、縦方向の工具ナデ、底部付近には斜め方向の工具ナデが施されている。縦方向の工具ナデは縦方向のミガキに先行して施されており、この縦方向の工具ナデとミガキは同じ幅で施されているため、同じ工具が使用されている可能性が考えられる。脚部には粘土を薄く伸ばして貼り付けていたと考えられ、幅1mm程度の細かいミガキが施されているのが確認できる。脚端部はその粘土が剥落し、下地に連続した指押さえの痕跡が確認できるが、本来は脚部全面に細かなミガキが施されていたと推測される。内面胴部から底部にかけては、縦・斜め方向のミガキが施されている。底部付近ではミガキの幅が5mm程度であることが確認できるが、胴部では不明瞭である。ただし、器面は平滑であることから、全面にミガキが施されていると考えられる。脚部内面は工具ナデが施されている。

124は高坏の坏部の資料である。口縁部付近が欠損している。遺構の西側と南壁付近に広く散在して出土しており、脚部片は貼床面で出土しているが、坏部の多くは

貼床面から10～20cm程度浮いた状態で出土しており、流れ込みと考えられる。外面は斜め方向の工具ナデの後に、横・斜め方向のミガキが施されている。坏部下端では、横方向の工具ナデを施した後に、横方向のミガキが施されている。ミガキの密度は上位ほど疎であり、光沢感はない。光沢が見られるのは坏部下位の一部分のみである。内面は横・斜め方向の工具ナデの後に、横・斜め方向のミガキが施されている。ミガキは上位と下位で密であり光沢が見られる、中位はやや疎であり、光沢はごく一部のみで確認できる。底部は縦方向のミガキが施されている。

125は高坏の脚部資料である。当初、出土位置・胎土や断面の色調から124と同一個体と考えられていたが、坏部とのバランスや、接合する部分が無いことから、ここでは別個体として扱う。外面脚部上端には、横方向の工具ナデが確認でき、その後縦方向のミガキを施しているようである。内面上位には絞り痕が確認できる。下位には斜め方向の工具ナデが施されている。

126は小型の脚部である。遺構の中央部付近、やや西よりの位置で、破片2点が1.3m程離れた状態で出土している。貼床面から浮いた状態で出土しており、流れ込みと考えられる。内外面ともに工具ナデの後に、各方向のミガキが施されている。

127～129は輪の羽口である。

127は排出口・送風口ともに一部破損しているが、全体の形状が復元可能な専用品の輪の羽口である。長さ12.9cm、排出口径2.3cm、厚さ1.9～1.0cm、器壁の厚さは1.9～0.6cmを測る。排出口の被熱によって広い部分では全体の1/3程が2次焼成を受けている。排出口の周縁部は被熱が激しく気泡ができており、ガラス質化もしくはガラス質化した鉄滓が付着している。被熱の受け具合から、この輪の羽口はほぼ水平に設置されていたと考えられる。送風口は楕円形を呈する。遺構の北西角部付近と南壁中央部付近で、それぞれ貼床面から出土している。排出口部分の小破片と、送風口を含め全体の8割程度を占める大きな破片の2点に分かれるが、送風口部分を含む大破片は南壁中央部付近からの出土である。

128も排出口・送風口ともに一部破損しているが、全体の形状が復元可能な専用品の輪の羽口である。長さ12.0cm、排出口径2.9cm、器壁の厚さ1.4～0.6cmを測る。排出口の被熱によって広い部分では全体の2/5程が2次焼成を受けている。排出口の周縁部は被熱が著しく気泡ができており、排出口の下面および、側面の一部にはガラス質化した鉄滓が付着している。被熱の受け具合から、この輪の羽口は、わずかにではあるが斜めに傾けた状態で設置されていたと考えられる。遺構の南壁中央部付近と、柱穴P16の位置で、それぞれ貼床面および、貼床面と同じ高さから出土している。127と同様に、排出

口部分の小破片と、送風口を含め全体の8割程度を占める大きな破片の2点に分かれるが、送風口部分を含む大破片は南壁中央部付近からの出土であり、127と128の大部分はほぼ同じ場所で隣接して出土している状況が見取れる。

129は轆の羽口の排出口資料である。被熱を受けた範囲の境目付近で破損しており、全体の形状は不明である。残存する長さは7.1cm、排出口径1.9cm、器壁の厚さは2.1～1.5cmを測る。器壁の厚さは場所によって厚さにムラが生じている。排出口から被熱を受けており、排出口の周縁部は被熱が激しく気泡ができています。排出口の下面と考えられる部分には鉄滓が付着している。排出口の上面と考えられる部分は、被熱により器面が剥落しており、剥落した器面の内側に被熱を受けているのが確認できる。また剥落した器面には、ガラス質化した鉄滓の付着も確認できるため、器面が剥落した後もしばらく使用し続けたことが分かる。器面が被熱の受け具合から、この轆の羽口は、ほぼ水平に設置されていたと考えられる。遺構の西壁付近の南寄り位置で、貼床面から出土している。

石器(第2-53図)

石30は碾器である。南西角部で、貼床面から浮いた状態で出土しており、流れ込みと考えられる。

鉄滓(第2-53図)

竈穴建物跡10号からは70点の鉄滓が出土し、全て鍛冶滓であると考えられる。分布は遺構の南西部に最も多く、次いで南壁中央付近、少量ではあるが遺構の中央部炉跡周辺でも出土している。その全てが貼床面から出土しており、竈穴建物跡10号に帰属する可能性が高い。また、南壁中央付近では、焼けた粘土塊が複数点、こちらも貼床面から出土しており、これらは炉壁の可能性が考えられる。この場所では焼土も確認されていることから鍛冶炉の存在が考えられる。

鍛冶滓の総重量は596.6gを量る。内訳は、鉄塊が62.4g、椀形滓が306.6g、スラグが93.9gである。椀形滓が多く出土しているのが特徴であり、1点のみであるが表面がガラス化したもの(18.7g)も確認できる。70点のうち6点を図化している。

滓11～15は椀形滓である。

滓11は椀形滓の底面の一部と、立ち上がり部分の資料である。厚みは約7mmと薄く、推定される底径は約7cmと小さい。鉄塊等の付着は見られず、スラグ主体で20.0gと非常に軽量である。南側の焼土で貼床面から出土している。

滓12は6点の椀形滓なかで唯一、上面の大半が鉄分で覆われており、鉄塊も付着している。また一部の鉄塊は上面にまで沈んでいる。厚みは平均で1.2cmを測り、非常に重量感があり、78.8gを量る。傾き・部位等は不明

である。南側の焼土で貼床面から出土している。

滓13は椀形滓の上部縁辺部の資料である。傾きは不明である。厚みは縁辺部で約1cm、残存部下面で約7mmを測る。スラグ主体で13.3gと非常に軽量である。

滓14は部分的に少量の鉄分が付着している椀形滓である。厚みは平均で約8mmを測る。傾き・部位は不明である。重量は15.6gを量る。南西部で貼床面から出土している。

滓15は上面に一部ではあるが、薄く鉄分が付着する椀形滓である。厚みは平均9mmを測る。傾き・部位は不明である。重量は18.7gを量る。南西部で貼床面から出土している。

滓16はスラグ塊である。長さ5.6cm、幅2～3cm程度の塊で、周縁部に大きく破損した痕跡が見られないため、これで一つの塊と考えられる。厚みは1～1.5cm程度を測る。上面は曲線的で光沢を持ち、下面には土が付着している。左側面には厚さ5mm程度の薄いスラグ塊が付随する。重量は16.8gを量る。南東部で貼床面から出土している。

竈穴建物跡10号では、微細な遺物の採取の為に実施した貼床面上面埋土のふり調査の結果、鉄滓片・鍛冶滓片・鉄滓粒等の微量な鍛冶関連遺物が出土した。点で取り上げた大型の鉄滓の分布と、微量な鍛冶関連遺物の分布はほぼ重なり、炉壁(焼土塊)・椀形滓・鉄滓・微量な鍛冶関連遺物の4つが出土しており、轆の羽口2点の出土位置が隣接している焼土の位置に鍛冶炉があった可能性が最も高い。また、南西部に関しても、鉄滓と微量な鍛冶関連遺物が集中して出土しており、轆の羽口1点および、椀形滓も出土していることから、鍛冶炉があった可能性が考えられる。いずれにせよ竈穴建物跡10号では、鍛冶(小鍛冶)が行われていたと考えられる。

竈穴建物跡11号(第2-54図)

竈穴建物跡11号は、I・J35区Va層から検出された。東西軸約3.7m、南北軸約3.6mとほぼ正方形を呈する。南側に小規模な張り出しを持ち、張り出し部を含めた南北軸の長さは約4.0mである。建物の軸の方向は北東側に隣接する竈穴建物跡9号とほぼ同軸であるが、大きさは一回り小さい。検出面から底面までの深さは40～50cmである。底面全体に水平な貼床面が形成されており、貼床面の厚さは平均20cmである。遺構の中央部には焼土、炭化物範囲、硬化面が確認されている。焼土は直径約20cmの円形状に検出された。その周囲には直径約50cmのやや歪みではあるが円形の範囲に炭化物が集中して出土している。焼土はこの炭化物集中範囲の南東側に偏って検出されており、炉跡と考えられる。炭化物集中の範囲には、広く炭化物が散在する範囲が確認されており、その範囲は長軸約1.8m、短軸約1.2mの歪な楕

円形を呈する。貼床面の上面には南北方向に長く硬化面が確認されており、長軸約3.0m、短軸約1.5mの歪な楕円形の範囲で広がっている。この硬化面は炭化物の範囲や焼土の下位に滲り込んでおり、焼土域使用の過程で徐々に炭化物が堆積していった可能性が考えられる。柱穴は遺構の中央部から南側にかけて8基確認されている。ただし、検出面は底面であり、貼床面上面では確認されていない。

竪穴建物跡11号の遺構埋土を見ると、埋土2・3が西側から流入していることが分かる。また地形も西側(北西側)の標高が高くなっているため、西側から土が流入することは自然であり、竪穴建物跡11号は自然堆積により埋まったと考えられる。

出土遺物(第2-55図)

多くの遺物が出土しており、取り上げ総点数は514点である。しかしながら、実測対象とした土器の多くが、竪穴建物跡11号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込みの可能性が高い遺物であった。土器の他には、高坏を転用した轆の羽口が1点、刀子と考えられる鉄製品が1点、石器が1点、その他鉄滓が出土している。

土器・土製品(第2-56・57図)

130～134は、その出土状況から、竪穴建物跡11号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

130は甕の口縁部から胴部下位までの資料である。突帯は施されず、丸底甕と考えられる。口径は13.4cmを測る。遺構の中央部と北壁の中間付近から北壁の間にまどまって、貼床面から出土している。外面口縁部上端は斜め方向の工具ナデが施されている。口縁部は縦方向の工具ナデが施されている。胴部は横・斜め方向の工具ナデを施した後に、幅5mm程度の縦方向のミガキに近い工具ナデを丁寧に施している。内面口縁部上端は横方向の工具ナデを1条施している。口縁部から胴部にかけては、斜め方向の工具ナデを施した後に、胴部上位には、部分的に単位の細かい横・斜め方向の工具ナデを施している。胴部中程には縦方向の工具痕が線状に残るが、消失気味であり、最初期の調整痕の残りであると考えられる。この縦方向の工具痕は部分的には、上位の単位の細かい工具痕により消されている。

130の外面全面には煤が付着しており、この付着炭化物の放射性炭素年代測定(AMS測定)をおこなったところ(第3分冊自然科学分析参照)、確率の高い2σ暦年校正年代は325calAD-410calAD(88.8%)となった。おおよそ4世紀前半～5世紀前半の値である。

131は甕・壺の胴部中程から底部の資料である。遺構の中央部よりやや北東の位置に集中して出土しており、1点のみが跡の南側で出土している。出土した14点の破片のうち、2点のみ貼床面から浮いた状態で出土しているが、残りの破片はが跡の南側で出土している1点を

含めて、全て貼床面で出土している。外面は縦方向の工具ナデが施されている。内面は摩滅が著しく、器面の剥落が目立つが、部分的に横方向の工具ナデが確認できる。

132は高坏の坏から脚部の資料である。口径は11.5cmを測る。遺構の中心部付近で3点の破片が集中して、貼床面及び、貼床面直上の炭化物を多く含む埋土中から出土している。口唇部は横方向のナデが施されている。外面坏部上位は横方向の工具ナデ、坏部下位は横・斜め方向の工具ナデが施されている。坏部内面上位は横方向の工具ナデ、坏部下位は斜め方向の工具ナデを施している。

133は埴の胴部から底部資料である。炉跡と東壁の間のやや炉跡寄り位置から出土している。わずかに貼床面から浮いた状態で出土しているため、竪穴建物跡11号に帰属する可能性も考えられる資料である。外面は全体的に丁寧なミガキが施されており、光沢を持つ。屈曲部に施されるミガキの幅はやや広い。胴部上位にはミガキの上に斜め方向の工具痕が残る。内面胴部は横方向の、底部付近では斜め方向の工具ナデが施されている。内面胴部上位には絞り痕が残る、また、粘土の接合痕も残る。

134は円盤形土製品の可能性がある資料である。直径約3.4cm、厚さ8mmを測る。遺構の中心部、炭化物を多く含む埋土4の直上で出土しており、竪穴建物跡11号に帰属する可能性も考えられる資料である。

135～151は、その出土状況から、竪穴建物跡11号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

135甕の口縁部から胴部上半の資料である。突帯は施されない。口径は18.5cmを測る。遺構の北西部、検出面で破片が1点のみ出土しており、流れ込みと考えられる。外面口唇部から口縁部にかけては横方向の工具ナデが施されている。胴部には横方向の工具ナデが施され、その後横方向のミガキが施されている。内面口縁部には横方向の工具ナデの後に、横・斜め方向のミガキが施されている。胴部上位にはケズリが施された後に、横方向の工具ナデが、その下位には指ナデが施されている。布留式土器を模した資料である。

136は口縁部から胴部上位の資料である。突帯は施されない。口径は21.1cmを測る。遺構の中央部と南壁の中間付近、検出面直下で破片が1点のみ出土しており、流れ込みと考えられる。外面口縁部は斜め方向の指ナデが、胴部はナデの後に縦方向のミガキが施されている。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが1条施されている。口縁部から胴部にかけては、幅1.5～1.8cm程の幅広い工具による斜め方向の工具ナデが施され、胴部中位ではその後縦方向のミガキが施されている。

137は口縁部が外反する甕D類の口縁部から胴部上端の資料である。遺構中央部よりわずかに北側の埋土中から出土している。1点のみの出土であり、貼床面から約15cm浮いた状態で出土していることから、流れ込みと考えられる。外面口縁部上端は横方向のナデ、口縁部中位は縦方向の単位幅不明瞭な工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には、横方向の工具ナデが施された後に、突帯が貼り付けられている。胴部には縦方向の工具痕が残る。内面は斜め方向の工具ナデが施されている。

138は甕の胴部から脚部資料である。底径は10.7cmを測る。脚部内面天井部中央は張り出さず、脚部高は1.9cmを測る。遺構の中央部よりやや南側から2点の破片が、約60cm離れて、埋土中及び検出面直下で出土している。流れ込みと考えられる。胴部下位にはミガキが施されており、胴部下端にはミガキの下地に工具ナデが確認できる。胴部と脚部の境目には、上位のミガキと同じ工具を使用したと考えられる幅細の斜め方向の工具ナデが間隔を空けて施されている。その下位には指押さえが列状に並ぶ。脚部には横方向のナデが施されている。内面は斜め・横方向の工具ナデが施されており、底面には指押さえが行われている。脚部内面はナデが施されている。

139は甕の脚部資料である。底径は7.7cmを測る。脚部内面天井部中央はわずかに凹み、脚部高は1.6cmを測る。遺構の南西角部付近の検出面直下で、破片が1点のみ出土しており、流れ込みと考えられる。外面は横方向の工具ナデが施されている。脚部内面天井付近にはミガキが、その下位には斜め・横方向の工具ナデが施されている。

140は甕の胴部から底部資料である。底径は8.2cmを測る。平底を呈するが、中央部分はわずかに凹む。遺構の中央部と西壁の中間付近で、貼床面から約15cm浮いた状態で破片が1点のみ出土しており、流れ込みと考えられる。外面は縦・横方向の工具ナデ・ナデが施されている。内面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。

141は甕の胴部から底部資料である。底径は6.6cmを測る。平底気味であるが、脚部高0.2cm、幅0.7cmの脚を持つ。遺構の中央部と北壁の間に散在して破片が5点出土しているが、そのうち3点は検出面からの出土であり、流れ込みと考えられる。外面は縦方向の工具ナデが施されている。脚部は粘土を貼り付けた痕跡が残る。内面は斜め方向の工具ナデ・指ナデが施され、指押さえも行われている。

142は甕・壺の底部資料である。底径は4.5cmを測る。平底気味であるが、脚部高0.2cm、幅0.7cmの脚を持つ。遺構の中央部よりやや南西の位置で、検出面直下から破片が1点のみ出土しており、流れ込みと考えられる。外面胴部下位は幅6mm程の斜め方向の丁寧な工具ナデを施

している。底部には単位幅が不明瞭な斜め・横方向の工具ナデが施されている。内面には横方向のミガキが施されており、底面付近には指押さえが巡る。

143は高坏の坏部の資料である。口径は25.0cmを測る。遺構の中央部付近・北壁付近・西壁付近と広く散在しており、また検出面や埋土中からの出土であるため、流れ込みと考えられる。外面坏部上端は横方向の工具ナデの後に、部分的に斜め方向の工具ナデが施されている。坏部上位から下位にかけては、横・斜め方向のミガキが施されている。坏部下端ではミガキが横方向に施されている。坏部中位には接合痕が残る、接合痕の上下では器壁の厚さが異なり、上位の器壁が厚い。坏部内面上端は横方向の工具ナデが施されている。坏部上位から下位にかけては、横・斜め方向のミガキが、坏部底面には縦方向のミガキが施されている。内面でも中位に接合痕が確認できる。

144は高坏の坏部下位から脚部までの資料である。遺構の南西部から破片が1点出土している。出土位置が貼床面と検出面の中間付近の埋土中であり、廃棄もしくは流れ込みと考えられる。坏部外面は斜め方向のミガキが施されている。坏部と脚部の境目には横方向のミガキが施されており、坏部と脚部の接合後の処理と考えられる。脚部上端は斜め方向、その下位には縦方向のミガキが施されている。一部のミガキは脚部部にまで及んでいる。脚部部には横方向の工具ナデが施された後に、横方向のミガキが施されている。坏部内面には横方向のミガキが施されている。脚部内面天井部分には指押さえが巡る。また、天井部分から縦方向にひび割れが確認できる。脚部部は縦方向の指ナデが、脚部部下端には斜め方向の工具ナデが施されている。また、脚部部下端には指押さえが巡る。脚部部には横方向のミガキが施されている。

145は高坏の脚柱部の資料である。遺構の中心部付近、貼床面から約10cm浮いた状態で破片が1点のみ出土しており、廃棄もしくは流れ込みと考えられる。坏部外面には幅5mm程の縦方向のミガキが施されている。脚部には幅2mm程の縦方向のミガキが施されている。坏部内面にはナデの後に横方向のミガキが施されている。脚部内面には縦方向の工具ナデが施されている。

146は脚柱部の資料である。脚柱部下位には等間隔(120°に1か所ごと)に3か所穿孔が施されており、穿孔は外面から内面に向かって行われている。遺構の中央部と北壁の中間付近、貼床面から約10cm浮いた状態で、破片が1点のみ出土しており、廃棄もしくは流れ込みと考えられる。外面は縦方向のミガキが施されている。内面には単位幅が不明瞭な縦方向の工具ナデが施されている。

147は脚柱部の資料である。遺構の西側で出土してい

る。出土位置が遺構内にレンズ状に堆積している埋土2の直上であるため、廃棄もしくは流れ込みと考えられる。外面脚柱部には幅2mm程の縦方向の工具ナデが施されている。ミガキに類似するが光沢を持たない。脚柱部下端から脚柱部上端にかけては横方向の工具ナデが施されている。脚部内面には縦方向の工具ナデが施されている。

148は高坏の脚部の資料である。遺構の中央部よりやや南西側で出土している。出土位置が遺構内にレンズ状に堆積している埋土2の直上であるため、廃棄もしくは流れ込みと考えられる。外面は幅4mm程の縦方向の工具ナデを施しており、指押さえが部分的に行われている。内面脚部上半部は縦・斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、部分的に横方向のハケ目を施している。内面脚部下位には横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。

高坏の脚部144～148の5点は、残存状況がよく似ており、一括廃棄等の可能性も考え出土状況を再確認した。その結果、5点全てが遺構の西側で出土しているが、散在して出土している状況であり、一括廃棄資料とは言えない状況であった。

149は埴の胴部から底部資料である。わずかに平坦面を持ち、底径は2.2cmを測る。遺構の南側で集中して、検出面から出土している。廃棄もしくは流れ込みと考えられる。外面は丁寧なナデが施されている。内面は幅6mm程の横・斜め方向の工具ナデが施されている。

150は埴の胴部資料である。底部は欠損している。遺構の南側で2点の破片が離れて、検出面に近い位置で出土しており、流れ込みと考えられる。外面口縁部下端は横方向の工具ナデが施されている。胴部は屈曲部を境に、上位は横・斜め方向の工具ナデ、下位は横方向のミガキが施され、屈曲部付近には指押さえが巡る。内面口縁部下端には斜め方向の工具ナデが施されている。胴部上半には横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施され、胴部上位ではその上から指押さえが密に巡る。胴部下半では斜め方向の工具ナデとミガキが施されている。

151は高坏の脚部を転用した輪の羽口である。排出口が破損しており、送風口も一部のみの残存である。残存部分で長さ8.9cm、内径2.9cm、器壁の厚さは1.1cmを測る。被熱の受け具合から、この輪の羽口は斜めに傾けた状態で設置されていたと考えられる。遺構の中央部と西壁の中間付近で、埋土2中から出土しているため、流れ込みと考えられる。

石器(第2-57図)

石31は磨礫石である。遺構の中央部よりやや西側で出土している。出土層位が遺構内にレンズ状に堆積している埋土2の直上であるため、廃棄もしくは流れ込みと考えられ、同じく周囲で出土した高坏の脚部部と同

じような出土状況であるため、古墳時代の遺物として扱う。

石32は礫である。被熱を受け赤色化し、上面の一部に煤が付着している。遺構埋土中一括取り上げ資料である。

鉄製品・鉄滓(第2-57図)

鉄5は刀子の刃部片である。遺構内一括取り上げ遺物である。

竪穴建物跡11号からは2点29.6gの鉄滓が出土している。椀形滓とスラグに分類されるものである。ともに検出面に近い位置で出土しており、流れ込みと考えられる。

炭化木(第3分冊 自然科学分析参照)

竪穴建物跡11号では5点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から竪穴建物跡11号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し検出を行い、1点の炭化木について放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した(11号炭1)。分析の結果、確率の高い2 σ 暦年代範囲を見ると、343calAD-430calAD(91.9%)となった。おおよそ4世紀中頃～5世紀前半の範囲と言えよう。この炭化材は榎樹同定もっており、スダジイと同定されている。

竪穴建物跡12号(第2-58図)

竪穴建物跡12号は、H33区Va層で検出された。長軸約5.0m、短軸約4.7mの隅丸形状を呈する。検出面から底面までの深さは約40～45cmである。貼床は底面から約10cmの厚さでほぼ水平に形成されている。建物の軸は北北西方向に傾き、隣接する竪穴建物跡13号と同軸方向を向いている。遺構の中央部には北西側から南東側へかけ、長さ約1.7m、幅約1.0mの範囲で炭化物の広がり確認され、その炭化物の範囲の下位、遺構のほぼ中央部からは長軸約40cm、短軸約30cmの楕円形状の焼土が検出されており、炉跡と考えられる。また、炭化物の範囲の南東側半分を囲むように、硬化面も検出されている。硬化面は南東壁際で検出された土坑周辺まで広がっている。南壁付近では土坑が1基検出されている。1辺が約90cmの隅丸形状を呈し、壁に接するように掘られている。貼床面の高さから土坑の底面までの深さは約20cmであり、底面よりも深く掘られている。土坑の埋土を見ると、遺構築設以降に流入した土で構成されており、遺構使用時には関与していた可能性が高い。柱穴は中央の炉跡を囲むように四方に4基検出されている。4基ともに貼床上面で検出されており、P2を除くと、形状・大きさ・深さが類似している。P2は埋土に一部硬化した箇所が見られた。遺構の埋土はレンズ状堆積をしており、竪穴建物跡12号は自然堆積により埋まったと考えられる。

出土遺物(第2-59図)

遺物は遺構全体に散在して出土しているが、東側ではやや遺物の出土量が少ない。南側の土坑内やその周辺からは土器が集中して出土しているが、底面から出土しているのは小破片のみであり、大きな破片等は土坑の埋土中から出土している。

土器(第2-60図)

152～156は、その出土状況から、堅穴建物跡12号に帰属する可能性が高い土器群である。

152は口縁部が外傾する雙B類の口縁部から胴部上位の資料である。口径23.6cmを測る。炉跡の南東側、炭化物範囲内で、貼床面から出土している。外面口縁部は斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施し、口縁部下位には部分的に横方向のミガキを施している。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。突帯下位にも横方向のミガキが施されている。胴部には斜め・縦方向の工具ナデを施した後に、横・縦方向のミガキを部分的に施している。内面は斜め・横方向の工具ナデが施されている。

153は口縁部がやや外傾する雙C類の口縁部から胴部上位の資料である。口径29.8cmを測る。遺構の西壁中央部付近で、貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向、口縁部から胴部にかけては斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には、突帯幅とほぼ同じ幅で横方向の工具ナデが施されており、その後、突帯が貼り付けられている。内面も口縁部上端は横方向の工具ナデが施され、口縁部から胴部にかけては斜め方向の工具ナデが施されている。外面の工具ナデと比較して、内面の工具ナデは工具幅が不明瞭である。突帯内面部分には、やや上下するが指押さえが列状に並ぶ。

154は完形に復元できた鉢である。口径24.2cm、底径7.7cm、器高14.9cmを測る。土坑のやや北側、硬化面からまとまって出土している。外面口唇部及び口縁部上端には、横方向の工具ナデが施されている。胴部は斜め方向の工具ナデを施した後、縦方向の工具ナデを施している。さらに部分的には、縦方向の工具ナデの後に、幅1～2mm程度の縦方向のミガキが施されている。脚部には横方向の工具ナデが施され、部分的には指押さえの痕跡が残る。内面口縁部上端には、1条の横方向の工具ナデが施されている。胴部には斜め・横方向の工具ナデが施されている。底部には連続した指押さえの痕跡が残る。

155は高杯の坏部資料である。口径13.5cmを測る。柱穴P4の周辺でまとまって、貼床面から出土している。外面坏部上半は斜め方向の工具ナデを施した後、横方向のミガキが施されている。坏部中位には横・斜め方向の工具ナデが確認できる。坏部下位には工具ナデの後に、横方向のミガキが施されている。内面坏部上半は、斜め方向の工具ナデの後に、横方向のミガキが施されている。坏部下半は横方向のミガキが施されている。内外面

ともに工具ナデを施した後、ミガキを施していると考えられる。また内外ともに接合痕が確認できる。

156は増の口縁部から胴部上端の資料である。口径11.5cmを測る。炉跡のやや北東部で貼床面から出土している。外面は口縁部から胴部にかけて、横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施され、口縁部中位にはその上から横・斜め方向のミガキが施されている。内面口縁部上半には横方向の工具ナデ、口縁部下半には斜め方向のミガキが施されている。ミガキの一部が工具ナデにより消されているため、施文の順番はミガキ→工具ナデと考えられる。

157～165は、その出土状況から、堅穴建物跡12号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器および土製品である。

157は口縁部がほぼ直行する雙C類の口縁部から胴部下位までの資料である。口径27.0cmを測る。南壁付近の土坑で、埋土上面から出土していることから、流れ込み遺物と考えられる。外面口縁部上半には、工具のスジ状の痕跡の目立つ横方向の工具ナデが、口縁部下半には横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデが施され、その後突帯が貼り付けられている。胴部は横方向の工具ナデを施した後に、主として胴部中位以下では斜め・縦方向の工具ナデを施している。内面口縁部上半には、横方向の工具ナデが施されている。口縁部下半から胴部にかけては、単位幅が不明瞭な工具ナデが斜め方向に施されている。器面の仕上げは丁寧である。

158は高杯の坏部の資料である。口径19.5cmを測る。遺構の東側中央部付近で、検出面に近い位置から出土しており、流れ込み遺物と考えられる。内外面ともに幅5～10mm程の工具ナデにより丁寧な調整が施されている。ミガキと比較して光沢がなく、工具ナデによる筋状の痕跡が多く残るが、器面は平滑であり、砂粒も沈みこんでいる。また、内外面ともに接合痕が部分的に残る。

159は高杯の坏部の資料である。口径15.6cmを測る。遺構の東側中央部付近で、検出面に近い位置から出土している。外面坏部上半は横方向の工具ナデが施されているが、下地に丁寧なミガキが確認できる。坏部下半は幅の細い工具ナデと、部分的にミガキが施されている。内面坏部上半は横方向の工具ナデ、坏部下半は横方向の丁寧なミガキが施されている。

160は増の口縁部から胴部の資料である。口径9.7cmを測る。遺構の北西部で、最も新しく流れ込んだ埋土1の中から出土しており、流れ込み遺物と考えられる。外面口縁部上端は、横方向のハケ目が施されている。口縁部は、丁寧な横方向の工具ナデが施されている。胴部は、横・斜め方向のミガキが施されている。外面の器面調整は全体的に丁寧で平滑であるが、ミガキ調整による光沢

感は少ない。内面口縁部上半は、横方向のナデ、口縁部下半は横方向のミガキが施されている。胴部は、横方向の工具ナデが施されているが、粘土帯の痕跡を消しきっておらず痕跡が残る。

161～165は円盤形土製品である。他の堅穴建物跡から単体で出土する例は見られたが、単体であったため偶然円形に割れた土器片の可能性も考えられていたが、堅穴建物跡12号からは5点が出土しており、またそのうち2点は同じ土坑内埋土中から出土しているため、円盤形土製品として取り扱う。

161・162は土坑内埋土中から、163～165の3点は遺構埋土中からの一括取上げ遺物である。163は遺構の北東部から、164は南西部から出土している。

石器(第2-60図)

石33は台石である。最大長19.5cm、最大幅14.2cm、最大厚8.1cmを測り、重量2.81kgを量る。上面には敲打痕が多く確認でき、下面にも若干ではあるが敲打痕が確認できる。鉄分の付着等は見られない。炉跡と西壁の間付近で、貼床面から出土している。

鉄製品・鉄滓・鍛造剥片ほか(第2-61図)

鉄6は有茎の腸状柳葉鐵で、左右に細長い逆刺部を1段もつ。茎部は逆刺部の先端付近で欠損している。茎部は断面方形で、厚さ5mm程である。鐵身の両面に木質が付着している。炉跡の南西側の硬化面範囲内で、貼床面より10cm程度浮いた状態で出土している。

鉄製品としては、他に鉄器片と考えられる棒状の塊も出土しているが、詳細は不明である。

鉄滓は3点出土しており、総重量は73.1gである。そのうち2点を図化している。滓17は椀形滓と考えられる一括取上げ遺物である。上面に鉄分が多く付着し、厚みを持ち、61.4gを量る。

滓18は椀形滓である。椀形滓の側縁部分と考えられ、一部に鉄分が付着している。

炭化材(第3分冊 自然科学分析参照)

堅穴建物跡12号では、貼床面から出土した炭化物1点を遺物として取り上げている。この炭化物については、放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。分析の結果、2σ暦年代範囲を見ると231calAD-346calAD(95.4%)となった。おおよそ3世紀前半～4世紀中頃の値である。

堅穴建物跡13号(第2-62図)

堅穴建物跡13号は、H・I33区Va層で検出した。堅穴建物跡12号と隣接し、同軸方向を向いている。大きさは1辺が約6.15mの隅丸正方形を呈し、隣接する堅穴建物跡12号よりも一回り大きい。検出面から底面までの深さは30～45cm程度であり、底面から約20cmの厚さで貼床が形成されている。貼床は全面に形成されておら

ず、壁際は幅0.15m～1.0m程度で貼床の北東側がぐるりと巡る。この一段高い底面の範囲は北東側が最も広く幅約1.0m、南西側が最も狭く15～60cm程度、北西側が40～60cm程度、南東側が50～70cm程度であり、この一段高い底面はほぼ同じ高さで形成された貼床面とともに床面を形成する。遺構の中央部には、直径約50cmの円形の焼土を伴う土坑が検出され、炉跡と考えられる。埋土中には炭化物も確認されている。また、炉跡の直上及び周辺の直径約1.5mの範囲には、炭化物を多く含む黒色土が堆積している。炉跡の周囲は、不定形ながら、炉跡から約1.5m四方の範囲で硬化面が広がっている。この硬化面からは広い範囲で炭化物の散見が見られた。南南東の壁際には土坑が1基検出されている。長軸約90cm、短軸約75cmの楕円形を呈し、貼床面からの深さは約20cmである。土坑内には土器片が複数出土しているが、全て流れ込みと考えられる。

堅穴建物跡13号から柱穴は6基検出されており、全て遺構内貼床面からの検出である。P1～P4までが硬化面の範囲内で、P5が北側角部付近、P6がP3付近の硬化面範囲のすぐ外側で検出されている。P1・P2は浅く貼床面からの深さは10～15cm程度である。P3・P4の深さは貼床面から25～30cm程度である。P3の埋土中には壁の脚部が出土しており、柱を抜き取った後に、土器を埋納、廃棄、もしくは流れ込んだものと考えられる。P4の底面は硬化面が確認されている。

出土遺物(第2-63図)

遺物の出土は集中せず、遺構内全体に散在して出土している。しかしながら、建物の縁辺部である一段高い底面部分での遺物の出土は少なく、貼床の範囲での出土が多い。土坑の東側には円形に棒状礫が出土している。若干高低差が見られるが、全て一段高い底面および、貼床面からの出土である。

土器(第2-64図)

166～171は、その出土状況から、堅穴建物跡13号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

166は口縁部が直行する甕C類の口縁部から胴部上端の資料である。口径は20.3cmを測る。遺構の北東角部付近、貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向、口縁部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には、横方向の工具ナデを施した後、突帯が貼り付けられている。胴部上位には横・斜め方向の工具ナデを施した後、縦方向の幅4mm程度の工具ナデが施されている。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部から胴部にかけては指ナデが施されている。胴部には部分的に工具ナデも確認できる。

167は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部下半の資料である。炉跡内から集中して出土している。口径

は29.2cmを測る。外面口縁部は横方向のナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後、突帯を貼り付けている。突帯の囲み部は指による押圧施文がなされており、指紋の痕跡が残る。胴部は縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上半は、横・斜め方向の工具ナデが施されている。口縁部下半から突帯部裏側付近は、指押さえが口縁部に平行に施されている。突帯貼り付け時に添えられた指の痕跡の可能性が考えられる。胴部は斜め方向の丁寧なナデが施されており、器面は平滑に整えられている。

168は甕の胴部中程から脚部の資料である。底径は10.7cmを測る。脚部内面天井中央部分はわずかに張り出し、脚部高は1.5cmを測る。遺構の南西部に位置する柱穴P3の埋土中から出土しており、柱を抜き取った跡に、土器を埋納、廃棄、もしくは流れ込んだものと考えられる。外面胴部は縦方向の工具ナデを施した後、縦方向のミガキを施している。ミガキは密ではなく、部分的には下地の工具ナデが確認できる。胴部と脚部の境目には細かい指押さえが列状に並ぶ。脚部には横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面胴部には縦方向の工具ナデが施されており、胴部下位では部分的に、縦方向の工具ナデの上から横方向の工具ナデが施されている。底面付近は摩滅により調整痕が確認できない。脚部内面には横方向の工具ナデが施されている。

169は甕、もしくは鉢の胴部下半から脚部の資料である。底径は5.6cmを測る。脚部内面天井中央部分は張り出し、脚部高は0.6cmを測る。柱穴P4の直上、貼床面と同じ高さから出土している。外面胴部は縦・横方向、脚部は横方向の工具ナデが施されている。内面胴部は縦・横方向の工具ナデが施されている。脚部内面は指ナデが施されている。

170は甕、もしくは鉢の脚部資料である。底径は6.0cmを測る。出土位置は不明であるが、貼床面から出土している。外面は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されており、脚部上位には指押さえが並ぶ。内面胴部底面には斜め方向の工具ナデが施されている。脚部内面には横方向の工具ナデが施されている。

171は高坏の坏部資料である。口径は14.7cmを測る。柱穴P2の南東部から集中して、貼床面から出土している。外面口唇部は横方向のナデが、口縁部は横方向のハケ目が施されている。胴部上半は縦方向のミガキの後、横方向のミガキが施されている。胴部下半は斜め・横方向のミガキが施されている。

内面口縁部上端は、横方向のハケ目が施されている。口縁部から胴部上半にかけては、横・斜め方向のミガキが施されており、一部は上位の横方向のハケ目の上に施されている。胴部下半は縦・横方向のミガキが施されている。ミガキの工具幅は2～3mm程度のものと、1mm程

度のものの2種類が確認できる。

172～180は、その出土状況から、堅穴建物跡13号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

172は口縁部が外反する甕C類の完形に復元できた資料である。突帯は施されていない。口縁部と胴部の境目には、稜がある箇所と稜が無い箇所が見られる。口径15.2cm、底径7.2cm、器高14.8cmを測る。脚部内面天井中央部分は張り出し、脚部高は0.3cmである。遺構の西壁中央部付近よりも、やや北側の位置で貼床面から20cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部上位は横方向の工具ナデが施されている。口縁部下位から胴部上位にかけては、横方向の工具ナデを施した後、縦・斜め方向のミガキが施されている。胴部中位から胴部下端にかけては縦方向のミガキが施されている。脚部は器面の剥落が激しく調整痕を確認できない。この脚部剥落部分に関しては、脚部の延長部分が貼り付けられていた可能性が考えられる。内面口縁部上半は横・斜め方向の工具ナデが、口縁部下半は横方向のミガキが施されている。胴部中位は斜め方向、胴部下位では縦方向のミガキが施されている。脚部内面は指ナデが施されている。

173は甕の脚部資料である。底径9.8cmを測る。脚部中央部分は破損しているが、推定される脚部高は2.5cmである。遺構の南壁中央部付近で、検出面より出土している。外面は幅5mm程度の横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面底面付近は幅1.5cm程度の横方向の工具ナデが施されている。脚部内面は幅5mm程度の縦・横方向の工具ナデが施されている。

174は壺の口縁部資料である。口径13.7cmを測る。平面位置としては柱穴P1の直上、堅穴建物跡の検出面で出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデを施した後、部分的に縦方向のミガキを施している。口縁部下位ではさらにミガキの上から縦方向の工具ナデを施している。内面は横方向の工具ナデを施している。

175は壺の胴部上半の資料である。遺構の南西部、柱穴P6の北東で貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。内外面ともに摩滅が著しく、部分的に横方向の工具ナデや指押さえが確認できる。

176は壺の胴部から底部片である。厚みのある丸底を呈し、底部の厚さは2.0cmを測る。検出面から出土している。外面胴部は縦方向、底部は横方向の工具ナデが施されている。内面は斜め方向の工具ナデが施されている。

177は完形に復元できた鉢形のミニチュア土器である。平底を呈する。口径4.2cm、底径1.8cm、器高3.6cmを測る。柱穴P6の東側に隣接して、貼床面より10cm程度浮いた状態で出土している。内外面ともに工具ナデが施されており、外面には全面に指押さえが行われている。

178は高坏の脚柱部である。炉跡よりやや北北東の位置で、貼床面より10cm程度浮いた状態で出土している。外面は横・縦方向の丁寧な工具ナデが施されている。内面は縦方向の工具ナデが施されている。

179は埴の胴部から底部資料である。遺構の南壁中央部付近、検出面から出土している。外面胴部上位は単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデ、胴部中位は横方向のミガキが施されている。胴部下半から底部にかけては、単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデを施した後に、幅5mm程度の横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面は胴部以下に破損が無いため、特に胴部上半の観察は難しいが、指ナデが施されているようである。

180は埴の胴部から底部資料である。柱穴P3の南側で、貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。外面胴部上半は横方向の工具ナデ、胴部下半と胴部上半の一部には指ナデが施されている。内面は胴部以下に破損が無いため、特に胴部上半の観察は難しいが、横方向の工具ナデが確認できる。

石器(第2-65-66図)

南東壁際より円形に配置されたような配置で11点の棒状礫が貼床面および、一段高い床面から出土している。そのうち石34～石42の9点を図示し、残り2点は計測のみを行った。石材は全てホルンフェルスであり、重量は1.4kg～2.4kgと幅があるが、そのうち5点が1.7～1.8kgであり、形状もよく似ている。石37は大きく欠損しているが、他の棒状礫に大きな欠損は見られない。被熱を受けたり、煤が付着しているものは見られないが、石34の表面には鉄錆が付着している。

石137・石138は棒状礫である。

鉄製品(第2-66図)

鉄製品は鉄鏝が1点出土している。

鉄7は全長10cmを測る完形の圭頭鏝である。刃部の形は左右対称で、厚みは均一である。鏝肩部と茎部の境で錆膨れを起こし、剥離するように折れ曲がっている。鏝肩部に木質が付着している。貼床上面から5cm程度上位で出土したため、流れ込みの可能性が高い。

堅穴建物跡13号の貼床面上面の埋土をふるい掛けした結果、鉄片の出土が見られた。しかしながら、鍛造剥片等は出土しておらず、堅穴建物跡13号で鍛錬鍛冶(小鍛冶)が行われていた可能性は低い。

炭化物・炭化木・炭化種子(第3分冊 自然科学分析参照)

堅穴建物跡13号では20点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から堅穴建物跡13号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し検討を行い、2点の炭化物について放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。分析の結果、確率の高い2σ 暦年代範囲を見ると、4calAD-79calAD(88.3%)と、210calAD-333calADとなり、おおよそ1世紀初頭～1世紀後半と3世紀初頭

～4世紀前半の値となっている。遺物の出土状況からも、堅穴建物跡13号は古墳時代の遺構の可能性が高いため、年代の古い試料は流れ込みの可能性が高い。

堅穴建物跡14号(第2-67～69図)

堅穴建物跡14号は、JK32・33区V層から検出された。堅穴建物跡の中では最も南側で検出された建物跡である。建物の向きは堅穴建物跡10号・12号・13号と同じであり、軸がやや北西に傾く方向を向いている。1辺が約6.9mとほぼ隅丸正方形を呈し、南側には幅1.1m、奥行き0.5mの張り出しを持つ。南東角部に攪乱を受けているほか、数カ所で攪乱を受けている。遺構内は、柄鏡形の掘り込みを持ち、周囲よりも1段深く掘り込まれている。柄鏡の長さは約4.9m、幅は柄の部分約0.9m、鏡の部分約2.9mである。検出面からの深さは、この柄鏡形の部分で底面まで約50cm、周囲の一段高い底面部分で20～40cmである。柄鏡形の東側と北西側周囲には、幅10～15cm、深さ約10cmの溝状の掘り込みが巡っている。全周では無く、北側と南西側には掘り込みはない。

堅穴建物跡14号では硬化面が2面確認されており、新しい上位硬化面は部分的に2カ所、古い下位硬化面は、柄鏡形の掘り込み全体に広がって検出されている。下位硬化面はVx(噴砂シラス)層上面に形成されていることから、地山が硬化して硬化面となったのではなく、埋土10(にぶい黄褐色土)を充填して、貼床を形成したことが分かる。南側には土坑1が掘られているが、この土坑1が埋められた後に、上面に下位硬化面が形成されている。下位硬化面がにぶい黄褐色土を主体とするのに対して、上位硬化面は暗褐色土を主体としている。土坑2は、この上位硬化面の上面から掘り込まれており、一部は下位硬化面を掘り込んでいる。

堅穴建物跡14号の遺構の中央部には焼土を伴う土坑が検出されており、炉跡と考えられる。直径約36cmの範囲で、厚さ約3cmの赤褐色砂質土が堆積している。炉跡の周囲には長軸約1.3m、短軸約0.95mの略楕円形の範囲で炭化物が広がっており、特に炭化物が多く堆積するピットが3カ所検出された。そのうちの1基の炭化物を取り除いて検出したものが炉跡であり、残りの2カ所は炭化物が厚く堆積していた(炭化物ピット1・2)。炉跡及び炭化物ピットは下位硬化面上面から掘り込まれている。柱穴は、柄鏡形の掘り込みの四方を囲むように、ほぼ四角形に4基配置されているものが検出された。遺構の内外に他の柱穴は検出されていない。遺構の埋土は埋土1～3がレンズ状に堆積していることから、堅穴建物跡14号は自然堆積により埋まったと考えられる。

出土遺物(第2-70図)

遺物は遺構の西側から中央部にかけて大量の土器片の

出土が見られた。傾斜して出土している状況からも、後に廃棄されたものと考えられる。また、その他の多くの土器も床面より浮いた状態で出土したものが多く、土坑1の上面、下位硬化面の直上からは、甕と高坏の脚部が出土している。上位硬化面に覆われる形で出土していることから、堅穴建物跡14号使用開始に近い時期の土器と考えられる。また、蛇紋岩製装飾品、鉄鏝、炭化種子等も出土している。

土器(第2-71~74図)

181~186は、その出土状況から、堅穴建物跡14号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

181は甕の脚部資料である。底径6.5cm、脚部高0.6cmを測る。遺構中央部下位硬化面から出土している。外面は工具ナデが施され、胴部下端には指押さえが2列並ぶ。内面は指ナデが施されている。

182は甕の胴部上位の資料である。遺構南側で上位硬化面から出土している。外面胴部上端は横方向の工具ナデが施されている。胴部上位は横方向のミガキを施した後に、斜め方向のミガキが施されている。その下位には縦方向のミガキが施されており、胴部中位ではこの縦方向のミガキの上から、縦方向の工具ナデが施されている。この工具ナデは幅1cm程の工具ナデの中に1mm程のスジ状の痕跡が残り、光沢を持つ調整である。内面は横・斜め方向の工具ナデ、斜め方向の指ナデが施されており、胴部上位には指押さえが多く行われている。

183は鉢の口縁部資料と考えられる資料である。口径12.4cmを測る。遺構の中央部付近で下位硬化面から出土している。外面は横方向の工具ナデ、内面は横・縦方向の工具ナデが施されている。

184は高坏の口縁部から胴部上半の資料である。口径15.0cmを測る。柱穴P3に隣接して床面から出土している。外面は横方向の工具ナデ、内面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。

185は高坏の脚部資料である。遺構の北西角部付近で床面から出土している。外面脚筒部は横方向の工具ナデを施した後に、縦方向のミガキを施している。脚筒部と裾部の境目には細かなミガキが連続して施されている。脚筒部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面脚筒部上半は指ナデ、下半は縦方向の幅1~2mm程度の工具ナデが施されている。脚筒部と裾部の境目には粘土が貼り付けられており、指ナデが施されている。

186は高坏の脚部資料である。遺構の中央部より、やや北東の位置で下位硬化面から出土している。外面は横方向の工具ナデが施されており、部分的にその上から縦方向の工具ナデが施されている。内面は指ナデが施されている。

187~231はその出土状況から、堅穴建物跡14号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

187は口縁部が外反する甕B類の口縁部から胴部上位までの資料である。突帯は施されない。口径22.0cmを測る。検出面から出土している。外面口縁部口縁部は横方向の工具ナデが、胴部上位には縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部から胴部上位にかけては、各方向の工具ナデが施されている。

188は口縁部が外傾する甕D類の口縁部から胴部下位までの資料である。刻目等を施さない突帯が施されている。口径27.2cmを測る。遺構の中央部より、やや南東の位置で床面から20cm以上浮いた状態で出土している。外面口縁部は斜め方向の工具ナデ、胴部には各方向の工具ナデが施されている。工具ナデの幅は、口縁部で1cm程度、胴部で6~7mm程度である。内面は口縁部から胴部下位付近まで、斜め方向の工具ナデが施されている。突帯内面部分には指押さえが行われている。

188の突帯下位には煤が付着しており、この付着炭化物の放射性炭素年代測定(AMS測定)をおこなったところ(第3分冊自然科学分析参照)、2 σ 暦年校正年代は405calAD-538calAD(95.4%)となった。おおよそ5世紀初頭~6世紀中頃の範囲と言えよう。

189は甕の口縁部から胴部中程までの資料である。突帯は施されない。口径20.8cmを測る。遺構の中央部と西壁の中間付近から南側にかけて散在して、床面から20cm以上浮いた状態で出土している。外面口縁部上端は、単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデが、口縁部から胴部にかけては単位幅が不明瞭な縦・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部中位以下では、工具ナデの上から部分的に幅5~6mmの縦方向のハケ目が施されている。内面口縁部上端は単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデが、口縁部から胴部には単位幅が不明瞭な斜め方向の工具ナデが施されている。

190は口縁部が外傾する甕B類の口縁部資料である。口径19.6cmを測る。遺構の中央部付近から北東部にかけて散在して出土している。最も小さな1辺のcm程度の破片が、炉跡の南東部で下位硬化面から出土しているが、他の破片は床面から浮いた状態で出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部には斜め方向の様々な幅の工具ナデが施されている。内面口縁部上端も横方向の工具ナデが、口縁部には横・斜め方向の工具ナデが施されている。内外面の口縁部上位には粘土塊が貼り付けられており、内面では粘土塊部分の器面調整は、周囲よりも幅の狭い工具により工具ナデが施されていることが確認できる。

191は口縁部がほぼ直行する甕C類の口縁部から胴部上位までの資料である。口径25.7cmを測る。遺構の中央部よりやや南側の位置で、床面から20cm以上浮いた状態で出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデ

が、口縁部には斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面とその直下には横方向の工具ナデが施され、その後突帯が貼り付けられている。胴部上位には単位幅が不明瞭な斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部から胴部上位にかけては、横・斜め方向の工具ナデが施されている。

192は口縁部がわずかに内湾する甕D類の口縁部から胴部上位の資料である。口径26.2cmを測る。遺構の中央部と西壁の中間付近で、床面から30cm以上浮いた状態で出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部には横方向の工具ナデが施されている。非常に丁寧に調整が施されているため、工具の境目は確認できない。突帯貼り付け部分の上下の器面には横方向の工具ナデが施され、突帯はその上から貼り付けられている。胴部上位には縦方向の工具ナデが施されており、複数の幅の工具痕が確認できる。内面口縁部上端は横方向の、口縁部から胴部にかけては斜め方向の工具ナデが施されている。突帯内面部分には指押さえが並び、胴部にも指押さえが行われている。

193は完形に復元できた口縁部がわずかに内湾する甕D類である。口径30.8cm、底径9.3cm、器高29.6cmを測る。脚部内面天井から胴部には張り出し、脚部高は1.5cmを測る。遺構の中央部と西壁の中間付近や南側で、床面よりも20cm以上浮いた状態で出土している。外面口縁部から突帯下位にかけては、横方向の工具ナデが施されている。しかしながら、調整の痕跡は薄く、部分的には消失している。胴部は縦方向の幅5mm程度の工具ナデ及び、横・斜め方向のナデが施されている。工具ナデは口縁部と同じく痕跡が薄い。胴部下位から脚部にかけては横方向の幅～10mm程度の工具ナデが施されているが、部分的には斜め方向の工具ナデも確認できる。全体的に見ると脚部付近の調整は明瞭に残るが、それよりも上位の調整はナデ消し、または使用による摩耗、もしくはその両方により調整の痕跡が不明瞭である。口唇部は横方向のナデが施されている。内面口縁部から胴部中程にかけては、斜め方向のナデが施されている。ナデの単位幅は不明瞭であり、調整をナデ消している可能性も考えられる。胴部中程から下部にかけては、横・縦方向の工具ナデが施されている。横方向の調整は明瞭に残るが、縦方向の調整は口縁部に向かうにつれ痕跡が薄くなる。脚部内面は横方向のナデが施されている。

194は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部上半の資料である。口径21.2cmを測る。遺構の南西部で、床面から20cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデ、口縁部の斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデが施された後に、突帯が貼り付けられている。

胴部には斜め方向の工具ナデが施された後に、幅3mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。ミガキに類似するがミガキよりも粗く施され、光沢を持たない。内面口縁部上位は斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されており、指押さえが2列並ぶ。口縁部下半から胴部上端にかけては、横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部には単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデが施され、部分的には縦方向の幅の細い工具ナデが施されている。

195は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部中程までの資料である。口径は32.6cmを測る。遺構の中央部と西壁の中間付近で、床面から20cm以上浮いた状態で出土している。外面口縁部は単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデが施されており、指押さえも行われている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は縦・斜め方向の工具ナデを施した後に、縦・斜め方向のミガキを施している。内面口縁部上端は縦方向の単位幅が不明瞭な丁寧な工具ナデを施しており、指押さえも行われている。口縁部から胴部上位にかけては、斜め方向の丁寧な工具ナデが施されている。胴部中位には単位幅が不明瞭な斜め方向の工具ナデの後に、同じく斜め方向の工具ナデが施されている。

196は外面が剥離した甕の口縁部資料である。遺構の北壁中央部付近で、検出面に近い位置で出土している。内面は横・斜め方向の工具ナデが施された後に、部分的に縦方向のミガキが施されている。

197は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部下半までの資料である。口径は25.8cmを測る。遺構の中央部より、やや南西部を中心に西壁中央部付近から南東部に分布して出土している。床面から20cm程浮いた状態で出土しているが、中央部付近で出土している破片は、ほぼ同じ高さ集中して出土している。外面口縁部上端は横・斜め方向の工具ナデが施されている。この工具ナデはミガキとはほぼ同質で、非常に丁寧に施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後、突帯を貼り付けている。胴部上半は横方向の工具ナデを施した後、幅5mm程度の非常に丁寧な縦方向のナデが施されている。この縦方向の工具ナデは胴部中位まで施されており、胴部下半に施される縦方向の工具ナデに重なる。外面の調整は光沢を持つ箇所も見られ、胎土中の砂粒がよく沈み込んでいる。内面口縁部から胴部上位にかけては、斜め・横方向の丁寧な工具ナデが施されている。胴部中位は縦方向の丁寧な工具ナデが施され、部分的にはその上から斜め・横方向の丁寧な工具ナデが施されている。胴部下半は縦方向の工具ナデが施されている。

198は口縁部が内湾するD類の口縁部から胴部中位ま

での資料である。口径は23.8cmを測る。遺構の南東部から集中して、床面から30cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。突帯には刻目ではなく、指押さえが施されており、指紋がはっきりと残っている。胴部は縦・斜め方向の工具ナデが施されている。内面は全体的に横・斜め方向の工具ナデが施されており、また口縁部上端から胴部中位まで、指押さえがほぼ等間隔で6列並び、接合部分と考えられる。

198の胴部には少量であるが煤が付着しており、この付着炭化物の放射性炭素年代測定（AMS測定）をおこなったところ（第3分冊自然科学分析参照）、2σ暦年校正年代の2つの結果の範囲で409calAD-538calADとなった。およそ5世紀初頭～6世紀中頃の値である。

199は壺の胴部から底部の資料である。底部は平底を呈する。底径4.6cmを測る。遺構の中央部から南側へかけて、下位硬化面より15cm程度浮いた状態で出土しているものが多い。一部は遺構の北東角部付近からも出土しており、こちらは検出面からの出土である。外面口縁部下端には横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部上位には斜め方向の工具ナデが施されている。胴部中位から底部にかけては、縦方向のミガキと丁寧な工具ナデが施されている。2つの調整が混在しているため、丁寧な工具ナデが確認される部分は、器面が摩滅した可能性も考えられる。また、底部付近には部分的に器面をケズリ取った様な痕跡が確認できる。内面口縁部下端から胴部上端にかけては幅約5mmの斜め・横方向の工具ナデが施されている。胴部上半には幅約1cmの横方向の工具ナデが、胴部下半には縦方向の工具ナデが施されている。底面には単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデが施されている。

200は壺の胴部下位から脚部の資料である。底径は8.6cm、脚部高は1.7cmを測る。平底気味の底部に脚を貼り付けた接合痕がはっきりと確認できる資料である。遺構の中央部付近から西側で南北に広く散在して出土している。最も大きな破片である底部片は遺構の中央部、下位硬化面から出土しているが、接合した細かな底部片は、検出面近くで出土している。胴部下位片で最も大きな1辺10cm程度のものは、南西角部に近い位置で検出面直下から出土している。その他の胴部下位の破片は1辺5cm程度のもので、これも検出面に近い位置で出土している。胴部下位には縦方向の工具ナデが、胴部と脚部の境には横方向の工具ナデが施されている。脚部には全面に指ナデが施され、指押さえも密に行われている。内面胴部下位には単位幅が不明瞭な斜め方向の工具ナデが施されている。底部には幅約7mmの工具ナデが施されている。脚部内面は横方向の工具ナデが施されている。脚

端部には指押さえが並ぶ。

201は壺の胴部下端から脚部の資料である。底径11.2cm、脚部高1.5cmを測る。遺構埋土中一括取上げ資料である。外面胴部下端には縦方向の幅の細い工具ナデが施される。脚部には横方向の工具ナデが施され、脚部上位には指押さえが並ぶ。内面胴部は摩滅が著しいが、ナデが行われているようである。脚部内面は斜め・横方向の工具ナデが施されている。

202は壺の胴部下位から脚部の資料である。底径5.6cm、脚部高0.9cmを測る。遺構の中心部と柱穴P4の中間付近で、検出面に近い位置で出土している。外面は幅6mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。内面はへら状工具による縦方向のケズリを行った後に、横・斜め方向の工具ナデが施されている。脚部内面は指ナデが施されている。

203は壺の胴部下位から底部の資料である。底部端部は欠損しているが、貼り付けられた粘土から、脚が貼り付けられていた可能性が考えられる。遺構の中央部付近で、床面から20cm程度浮いた状態で出土している。外面胴部は縦方向の工具ナデが、脚部は横方向の工具ナデが施されている。内面胴部は縦方向の工具ナデが施されている。

204は壺の脚部資料である。底径3.6cm、脚部高0.2cmを測る。遺構の中央部と西壁の中間付近で、検出面直下から出土している。外面は単位幅が不明瞭な斜め方向の工具ナデが施されている。内面は摩滅が著しいが、ナデが確認できる。

205は壺の口縁部から肩部の資料である。外傾する口縁は口径15.8cmを測る。遺構の西壁中央付近や南側から散在して、床面から20cm以上浮いた状態で出土している。外面口縁部上位は横方向、中位から下位にかけては縦方向のミガキが施されている。肩部は横方向のミガキが施されている。内面口縁部は横方向のミガキが施されている。肩部上位は横・斜め方向の工具ナデが施され、その下位には短い長さの工具ナデが密に施されている。肩部中位には幅2～3mm程度の横・斜め方向の工具ナデが施されている。この工具ナデはミガキに類似するが光沢は持たない。

206は壺の口縁部から肩部の資料である。わずかに外傾する口縁は口径9.8cmを測る。遺構の中央部付近から西壁中央付近に散在して、床面から20cm以上浮いた状態で出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。肩部は斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデ、口縁部下半は斜め方向のナデが施されている。肩部は横方向の工具ナデが施されているが、不明瞭な箇所が多い。内面の残存部下端には縦方向のへらナデの痕跡がわずかながら確認できる。

207 は壺の口縁部から肩部の資料である。突帯には格子目状の刻目が施されている。外反する短い口縁部の口径は 15.0cm を測る。遺構の中央部付近から、やや南西部にかけて床面から浮いた状態で出土しており、検出面直下出土のものも見られる。外面口縁部は横方向の工具ナデが、肩部には横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面には横方向の工具ナデが施されている。

208 は壺の口縁部資料である。口径 13.3cm を測る。遺構の中央部と北東角部の中間付近と、北西角部付近から 2 つの破片が離れた状態で出土している。北西角部付近の資料は口縁部が欠損した口縁部下位片であり、床面から 30cm 程度浮いた状態で、他方は口縁部片であり下位硬面化面から出土している。外面口縁部上端は横方向のミガキが施されている。口縁部は斜め方向の工具ナデを施した後に、縦方向のミガキを施しているが、口縁部下端にはミガキは施していない。内面口縁部は横・斜め方向の工具ナデを施した後に、横方向のミガキを施している。胴部には斜め方向の工具ナデが施されている。

209 は壺の口縁部資料である。口径 14.3cm を測る。遺構の中央部と西壁の中間付近から集中して、床面より 15 ~ 25cm 程度浮いた状態で出土している。外面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面は横方向の工具ナデが施されているが、部分的には摩滅が著しい。

210 は壺の口縁部資料である。口径 11.4cm を測る。遺構の南西部、西壁に近い位置で、床面から 10cm 程度浮いた状態で出土している。口唇部は横方向の工具ナデが施されている。外面口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。

211 は壺の肩部から胴部上半の資料である。胴部最大径が 46.6cm の大型の土器である。突帯が施されていたと考えられるが剥落している。肩部には横・斜め方向のミガキが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横・斜め方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けていたと考えられる。突帯の上下には細かな横方向のミガキが施されている。胴部上半には縦方向の工具ナデの後に、横・斜め方向の工具ナデが非常に丁寧に施されている。内面は器面の摩滅・剥落が激しいが、器面調整はミガキや丁寧な工具ナデが確認できる。

212 は丸底壺の肩部から底部までの資料である。底部はやや平底気味になる。胴部最大径は 23.1cm である。遺構の西壁中央部に集中して、検出面直下で出土している。肩部は横・斜め方向の工具ナデが、胴部は縦方向の工具ナデが施されている。内面肩部には横方向のハケ目もしくは、工具ナデが施されている。胴部から底面にかけては、縦・斜め方向のハケ目もしくは、工具ナデが施されている。内面上位には器面に摩滅・剥落が確認できる。

213 は壺の胴部下位から底部の資料である。底部は平坦部を持つ。遺構の中央部と西壁の中間付近、床面から 30cm 程度浮いた状態で出土している。外面胴部下位には縦方向のミガキが施されている。内面胴部下位には横方向の工具ナデが施されており、底面付近には指押さえが巡る。

214 は壺の底部資料である。平坦面を持ち底径は 2.5cm を測る。床面よりも上位の埋土中から出土した一括取上げ資料である。内外面ともに斜め・横方向の工具ナデが施されている。

215 は壺の底部資料である。底径 3.1cm を測る。遺構の南側で、床面から 20cm 以上浮いた状態で出土している。外面は斜め・横方向の、内面は斜め方向の工具ナデが施されている。

216 は壺の底部資料である。遺構の南西部で、床面よりも上位の埋土中から出土した一括取上げ資料である。外面は縦方向のハケ目、内面は斜め方向の工具ナデが施されている。

217 は完形に復元できた鉢である。口径 18.9cm、底径 4.5cm、器高 11.5cm を測る。遺構の中央部と北東角部の中間付近、および中央部からやや南西の位置で、床面から 20 ~ 30cm 程度浮いた状態で出土している。外面口縁部は横方向、胴部は縦・斜め方向、底部付近は斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。胴部は横・斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されており、底部付近には指押さえが 1 列巡る。

218 は鉢の口縁部から胴部中程までの資料である。口径 22.4cm を測る。遺構の中央部とその周辺、および北東角部付近から出土している。中央部付近で出土した破片は、床面から出土しているが、口縁部小片と胴部小片である。北東角部付近から出土した破片は、床面から 10cm 程度浮いた状態で出土しており、全て口縁部片であり、1 辺 8cm 程度の大きめのものも含まれる。外面は横方向の工具ナデが施され、部分的にはその上から縦方向の短い長さの工具ナデが施されている。内面は横方向の工具ナデが施されている。内面胴部下半には部分的に器面の剥落が見られる。

219 は鉢の口縁部から胴部中程までの資料である。口径 16.6cm を測る。遺構の中央部と西壁の中間付近で、床面より 20cm 以上浮いた状態で出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部から胴部にかけては、縦方向の工具ナデが施された後に、胴部には縦方向のミガキが施されている。縦方向の工具ナデの一部は、口縁部上端の横方向の工具ナデに重なる。口唇部は横方向のミガキが施されている。内面口縁部は横方向、胴部は縦・斜め方向の工具ナデが施されている。

220 は鉢の口縁部から胴部資料である。口径 7.7cm を

測る。遺構の北西部で、床面から15cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部は上から、横方向の工具ナデ、横方向のミガキ、縦方向のミガキ、横方向の工具ナデが施されている。内面は口縁部上端に横方向のミガキが施され、その下位は横方向にケズリが行われている。胴部下半は斜め方向の工具ナデが施された後に、部分的に斜め方向のミガキが施されている。また口縁部中位には指押さえが1列巡る。

221は鉢の口縁部から胴部の資料である。口径8.6cmを測る。遺構の西壁中央付近で、検出面から出土している。外面は横・縦方向の工具ナデが施されている。内面は横・斜め方向の工具ナデを施し、ごく一部には工具ナデの上からミガキが施されている。内面下半には横方向のミガキが施されている。

222は高坏の坏部資料である。口縁部端部は欠損している。遺構の北東角部で、検出面直下から出土している。外面は幅4mm程度の縦方向の工具ナデと、横方向の工具ナデが施されている。内面は単位幅が不明瞭な行軍ナデと、幅4mm程度の工具ナデが斜め方向に施されている。

223は高坏の坏部下位の資料である。遺構の北東角部付近で、床面よりも10cm程度浮いた状態で出土している。外面は横・斜め方向の工具ナデが、内面は横方向の工具ナデが施されている。

224は高坏の脚部資料である。遺構の中央部より、やや南東の位置で、床面より10cm程度浮いた状態で出土している。外面脚部上端は横方向の細かい工具ナデが施されている。脚部は幅4～5mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。内面は各方向の工具ナデが施されている。

225は高坏の脚部資料である。外面から内面への穿孔が確認できる。検出面近くで出土した一括取上げ資料である。外面は各方向の工具ナデが施されている。内面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。

226は完形に復元できた埴である。口径11.8cm、器高13.7cmを測る。遺構の中央部付近、西側から南側にかけて、床面から約15cm浮いた状態で出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部には丁寧な縦方向の工具ナデが、頸部には横方向のミガキが施されている。胴部上位には丁寧な縦方向のミガキ、胴部中位には横方向の工具ナデとミガキ、胴部下半から底部にかけては、横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデ、胴部下半には斜め方向の工具ナデが施されている。頸部には横方向の工具ナデが施されている。胴部上位には斜め方向の工具ナデが施されており、頸部付近には口縁部を接合したときの痕跡と考えられる指押さえが列状に行われている。胴部中位には横方向の工具ナデが、胴部下位には幅が狭く長さの短い斜め方向の工具ナデと斜め方向の工具ナデが施されてい

る。底面付近には指押さえが巡る。

227・228は埴の口縁部資料である。共に遺構の南東部、床面よりも上位の埋土中から出土した一括取上げ資料である。

227の口径は8.5cmを測る。外面口縁部上半は横・斜め方向の工具ナデが、口縁部下半は縦方向のミガキが施されている。

228の口径は6.4cmを測る。外面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半は縦方向の細かい工具ナデが施されている。内面は横方向の工具ナデが施されている。

229は埴の胴部から底部の資料である。遺構の中央部と北東角部の中間付近で、検出面近くで出土している。外面胴部上半は横方向の工具ナデが、胴部中位には横方向のミガキが、胴部下位から底部にかけては横・斜め方向のミガキが疎に施されている。底部には指押さえが行われている。内面は横方向の工具ナデが施されている。

230は埴の胴部中位から底部の資料である。遺構の南壁中央部付近で、検出面直下で出土している。外面は横・斜め方向の工具ナデ、内面は縦・横方向のハケ目が施されている。

231は完形に復元できた手づくね土器である。底部は平坦面を持つ。口径4.8cm、底径1.1cm、器高3.1cmを測る。遺構の西壁付近、やや北寄りの位置で、検出面直下から出土している。内外面ともに指押さえが密に行われている。

石器(第2-75図)

石43は棒状礫である。遺構の南西角部付近で、貼床の無い床面から出土している。

石44は棒状礫である。遺構の中央部よりやや北東側で、検出面から出土している。

石45は礫である。全体的に被熱を受けており、赤色化している。遺構の中央部よりやや西側で、貼床面から15cm程度浮いた状態で出土している。

石139は礫石である。

鉄製品・鉄滓(第2-75図)

鉄8は小型の矛頭鏃である。基部は断面方形で欠損している。

鉄9は器種不明品で、下端部が外側に開いている。腸快鏃の逆刺部片の可能性が考えられる。

堅穴建物跡14号からは1点、250gの鉄滓が出土した。

滓19は製鉄炉の炉壁である。内面には鉄塊が付着し、その内側のガラス質の部分は1.5cm程度の厚みを持つ。外面には炉材が付着するが、スス痕は確認できない。一括取上げ遺物であり、流れ込みと考えられる。

装飾品(第2-75図)

堅穴建物跡14号からは大珠が1点出土している。上位硬面から出土している。

装6は穿孔前の未製品と考えられる。長さ1.4cm、幅

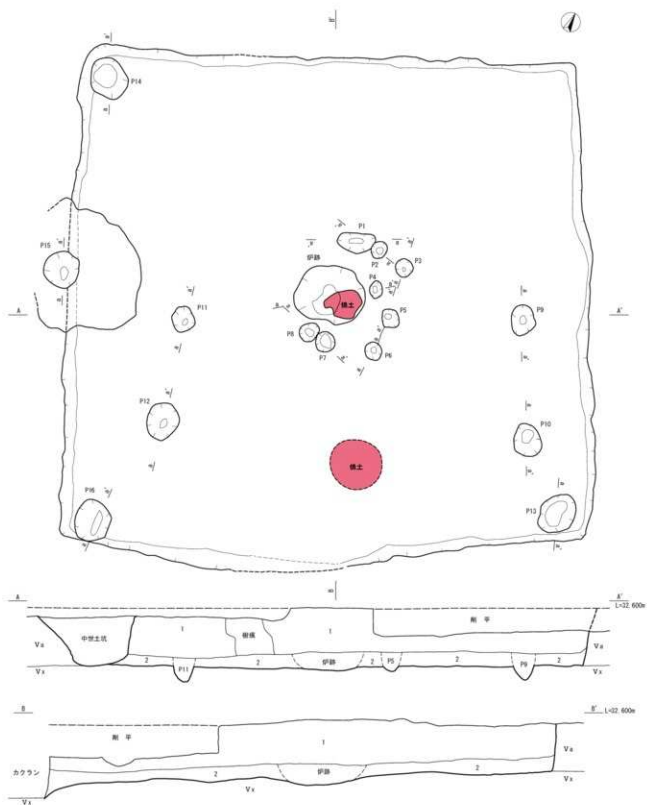
0.7cm、厚さ0.3cmを測り、重量は0.3gを量る。蛇紋岩製であり、明るい緑色の色調を呈する。

炭化種子 (第3分冊自然科学分析参照)

竪穴建物跡14号からは炭化種子が出土しており、種実同定の結果、モモの種子であった。

ガラス玉 (第3分冊 自然科学分析参照)

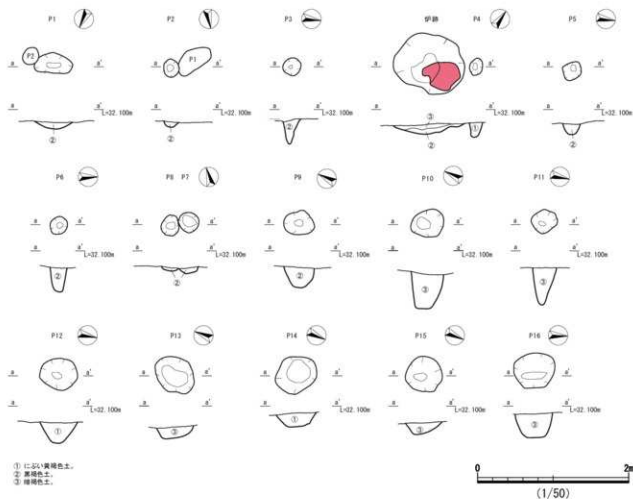
竪穴建物跡14号の貼床面埋土のふるい掛けを実施した結果、青緑色のガラス小玉を1点検出した。ガラス小玉は破損した状態で検出されたが、破片の量は1個体分出土している。実体顕微鏡観察の結果、気泡が多く観察され、いずれも孔に対して平行に伸びた気泡ないし気泡列であり、ガラスを管状に引き伸ばした後、管を切って製作する引き伸ばし法(管切り法)により製作されたと考えられる。蛍光X線分析の結果、この青緑色ガラス小玉はアルカリ珪酸塩ガラスであり、化学組成の特徴からアルミナソーダ石灰ガラスに属すると考えられる。



1 埴土。1~10cm程度の赤褐色下粒石を含む。Va層と由来の埴土の砂粒を下部に含む。
 2 褐色土。硬くしまる。Va層土のアカサヤ火山灰土が硬化している。粘保埴土。

0 1m
 (1/40)

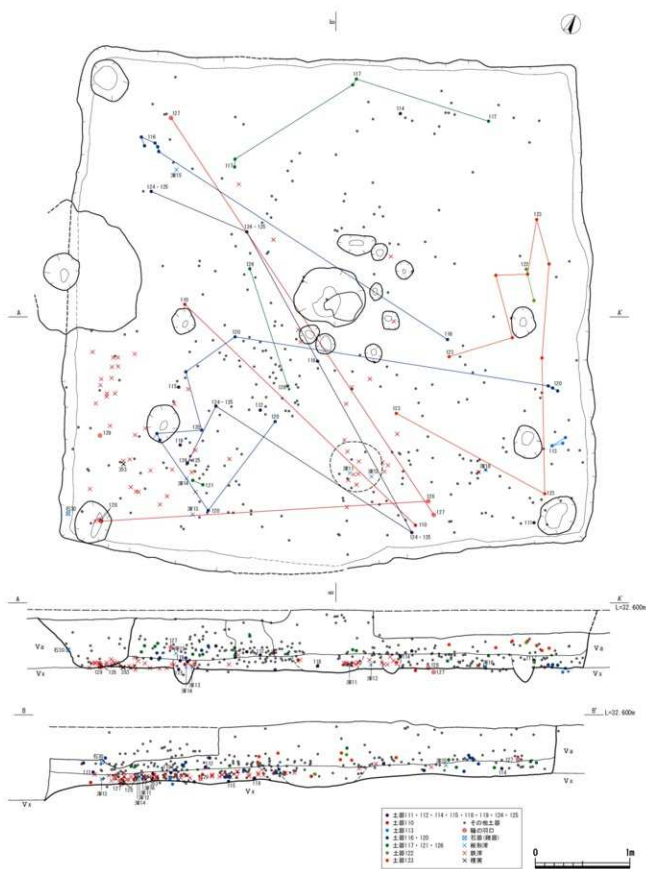
第2-48図 竪穴建物跡10号



第2-49図 竪穴建物跡10号 柱穴

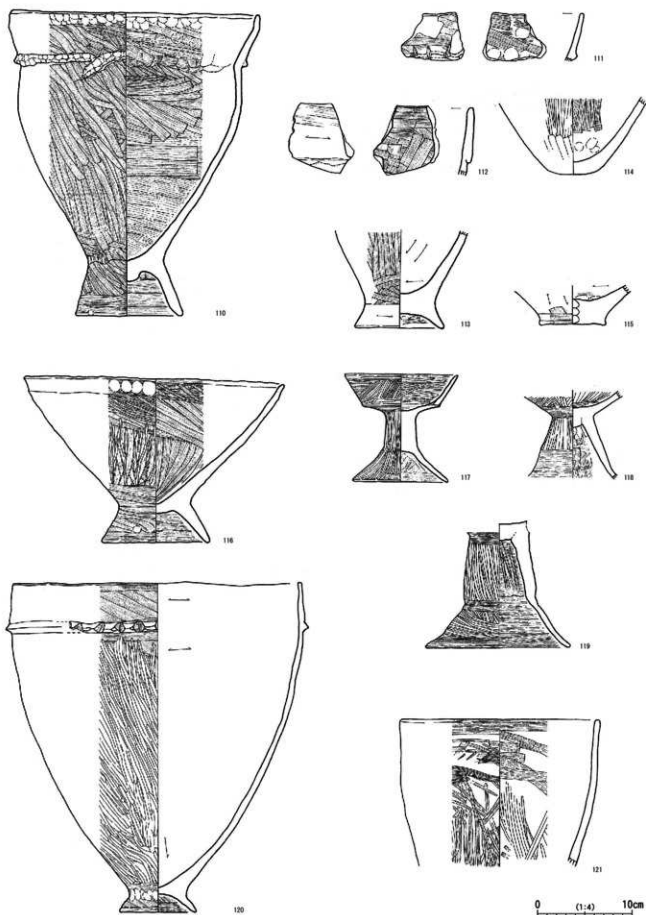
表2-19 竪穴建物跡10号柱穴観察表

柱穴番号	位置	直径 (cm)	深さ (cm)	埋土色調	埋土特徴
1	中央	40-20	5	黒褐色	
2	中央	17	5	黒褐色	1-2mmの焼土粒含む
3	中央	18	25	黒褐色	1mm程度の焼土粒含む
4	中央	16	15	黒褐色	
5	中央	17	10	黒褐色	1mm程度の焼土を多く含む
6	中央	17	25	黒褐色	1mm程度の焼土を多く含む
7	中央	20	5	黒褐色	1-2mmの焼土粒含む
8	中央	20	5	黒褐色	1-2mmの焼土粒含む
9	縁切部	25	20	黒褐色	2-5mmの焼土粒を多く、池田降下軽石を少量含む
10	縁切部	27	35	暗褐色	1-2mmの焼土粒、1-6mmの池田降下軽石含む
11	縁切部	25	40	暗褐色	1-2mmの焼土粒含む
12	縁切部	34	20	にぶい黄褐色	1-2mmの焼土粒、下位に増砂シラス含む
13	南東壁跡	37	10	暗褐色	1-2mmの焼土粒含む
14	北西壁跡	38	15	にぶい黄褐色	1-6mmの池田降下軽石、下位に増砂シラス含む
15	西壁跡	37	12	暗褐色	下位に増砂シラスを含む
16	南西壁跡	38	25	暗褐色	3-10mmの池田降下軽石、下位に増砂シラス含む

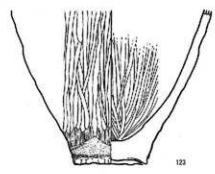
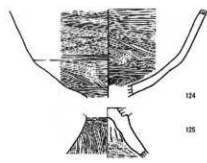
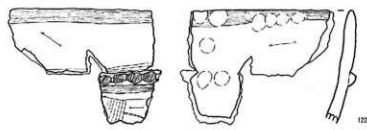


第2-50図 壁穴建物跡10号 遺物出土状況

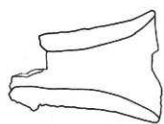
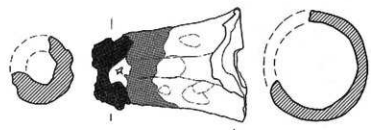
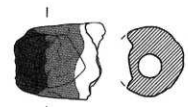
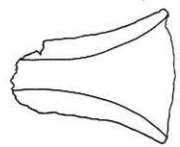
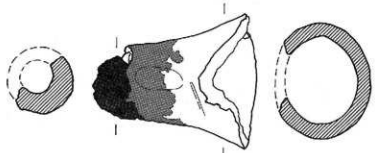
(1/40)



第2-51圖 竪穴建物跡10号 出土遺物(土器・土製品)

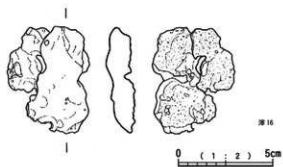
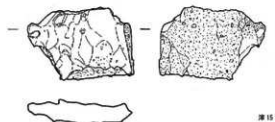
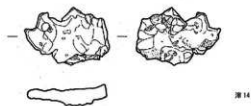
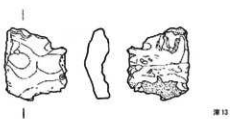
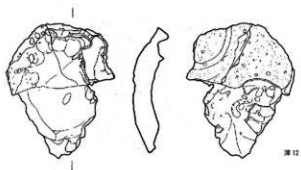
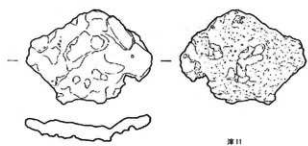
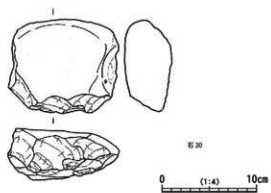


0 (1:4) 10cm



0 (1:3) 10cm

第2-52图 竖穴建物跡10号 出土遺物(土器)



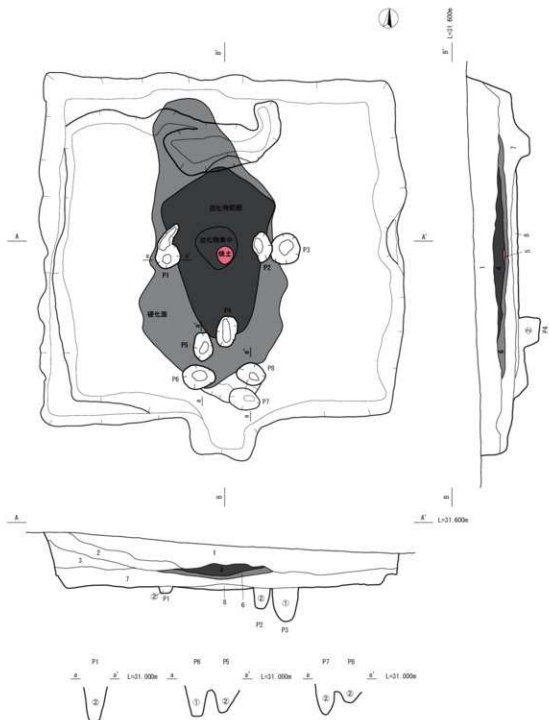
第2-53 図 建物跡 10号 出土遺物(石器・鉄滓)

表2-20 竪穴建物跡10号出土土器

図 番号	遺物 番号	形状	器種	部位 (次級部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考
2 51	110	○	甕	底部	—	32.9	26.0	10.9	工具ナデ	工具ナデ	外:黒褐色 内:ぶい焼	石・白・黒・ 注か	胴部高:3.7cm
	111	○	甕	口縁部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:ぶい焼 内:ぶい焼	石・白・小	
	112	○	甕	口縁部	—	—	—	—	工具ナデ 指ナデ	工具ナデ	外:ぶい焼 内:ぶい焼	石・長・小・ 注か	
	113	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	9.2	工具ナデ	指ナデ	外:ぶい焼 内:焼	石・白・黒	
	114	○	甕	胴部-底部	—	—	—	2.6	ミガキ	工具ナデ	外:ぶい焼 内:ぶい焼	石・白・小・ 注か	
	115	○	甕・壺・鉢	底部	—	—	—	6.9	工具ナデ	工具ナデ	外:ぶい焼 内:ぶい焼	石・白・小・ 注か	
	116	○	鉢	底部	—	17.2	27.4	11.0	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:焼 内:焼	石・白・黒	
	117	○	高坏	底部	—	11.4	11.9	9.8	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ ミガキ	外:赤褐色 内:焼・黒	石・黒・小・ 注か	
	118	○	高坏	胴部-脚部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	ミガキ 工具ナデ	外:焼 内:明黄褐色	石・白・小	
	119	○	高坏	脚部	—	—	—	15.0	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外:ぶい焼 内:洗黄褐色	白・黒・小	
	120		甕	底部	D	34.7	30.2	8.0	工具ナデ ミガキ	指ナデ 工具ナデ	外:焼 内:ぶい焼	石・黒・小・ 注か	胴部高:1.9cm
121		甕	口縁部-胴部	C	—	20.7	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:ぶい焼 内:焼	石・角・小		
2 52	122		甕	口縁部-胴部	D	—	—	—	工具ナデ ミガキ・指 ナデ	工具ナデ 指ナデ	外:焼 内:焼	石・白・黒・ 小	
	123		甕	胴部-底部	—	—	—	7.5	ミガキ 工具ナデ	ミガキ 工具ナデ	外:ぶい焼 内:ぶい焼	石・白・ 黒・小	胴部高:0.5cm
	124		高坏	胴部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:焼 内:焼	石・白・小	
	125		高坏	脚部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:焼 内:焼	石・白・小	
	126		不明	脚部	—	—	—	7.5	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:焼 内:ぶい焼	黒・小・ 注か	
	127	○	輪の羽口	底部	—	(長さ) 12.9	(内径) 2.3	(厚み) 1.9-0.6	ナデ	ナデ	外:焼 内:ぶい焼	黒・白・黒・ 小	
	128	○	輪の羽口	底部	—	12.0	2.9	1.4-0.6	ナデ	ナデ	外:明赤褐色 内:ぶい焼	石・長・黒・ 小	
129	○	輪の羽口	挿出口	—	7.1	1.9	2.1-1.5	ナデ	ナデ	外:ぶい焼 内:焼	石・長・角・ 小		

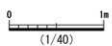
表2-21 竪穴建物跡10号出土土器

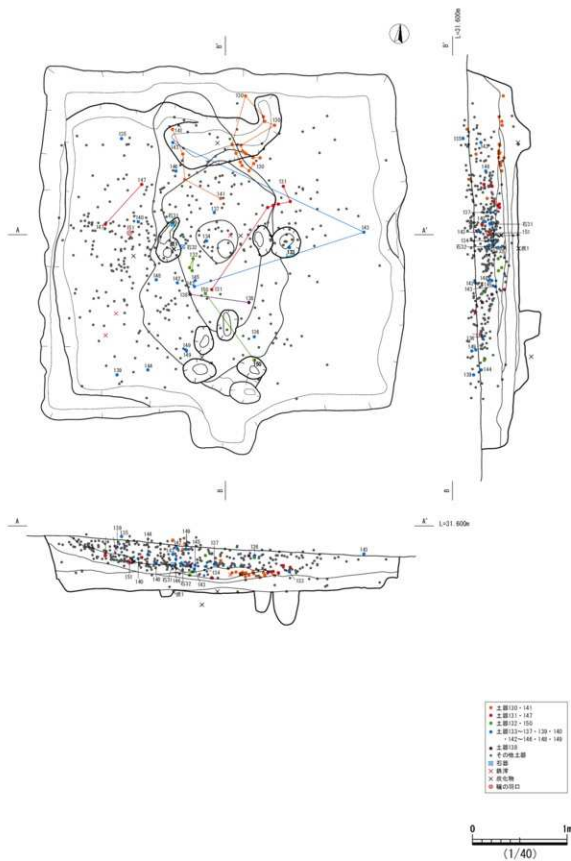
図 番号	遺物 番号	形状	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2-53	530		甕	破損	10.9	11.8	5.5	820.9	砂岩	



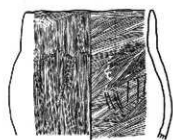
- 1 粘性のある暗褐色土。
 - 2 粘性のある黒褐色土。池田降下軽石やアカヤ火山灰層を含む。また炭化物を多く含む。
 - 3 粘性のある暗褐色土。アカヤ火山灰層を含む。
 - 4 やや粘性のある黒褐色土。炭化物を非常に多く含む。
 - 5 褐色土。砂土。
 - 6 粘性の弱い黄褐色土。炭化物層。
 - 7 粘性の弱い黄褐色土。1~5cmの池田降下軽石を含む。軽石の埋土。
 - 8 粘性の弱い黄褐色土。
- ① 褐色土。
 - ② 暗褐色土。

第2-54図 竪穴建物跡11号

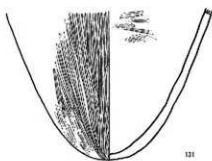




第2-55圖 竪穴建物跡11号 遺物出土状況



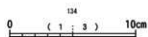
130



131



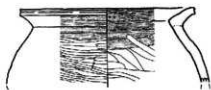
134



132



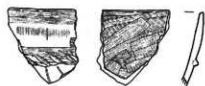
133



135



136



137



138



139



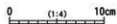
140



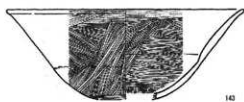
141



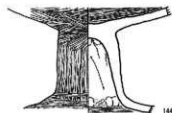
142



第2-56圖 竪穴建物跡11号(土器)



143



144



145



146



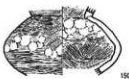
147



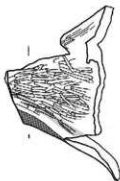
148



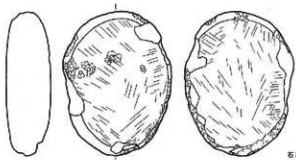
149



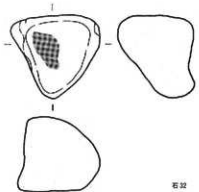
150



151



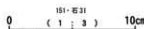
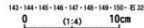
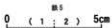
石31



石32



鐵5



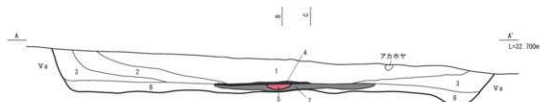
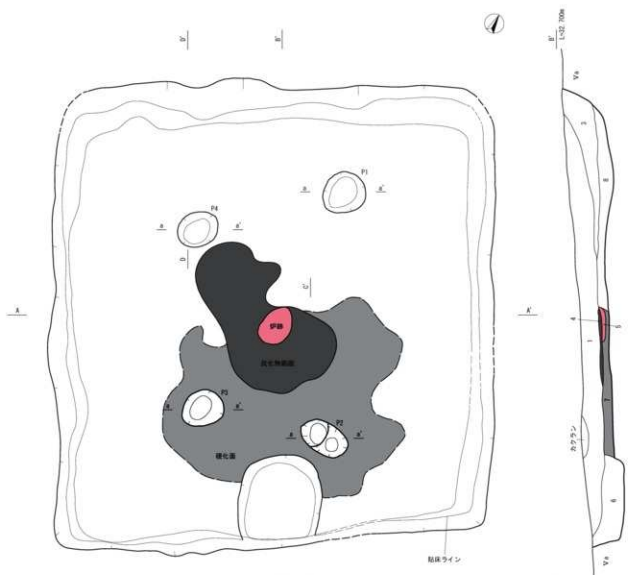
第2-57圖 竪穴建物跡11号 出土遺物(土器・石器・鉄製品)

表 2-22 竪穴建物跡11号出土土器

図 番 号	遺物 番 号	坯 面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 1 南	130	○	(丸底) 甕	口縁部-胴部	—	—	13.4	—	工具ナデ	工具ナデ	外にぶい・黄 内: 黄	白・黒・小	
	131	○	甕・壺	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外: 黄 内: 黄	白・白・黒・ 小	
	132	○	高杯	杯部-脚部	—	—	11.5	—	工具ナデ	工具ナデ	外: 黄 内: 黄	白・黒・白・ 黒・小	
	133	○	壇	胴部-底部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外: 明赤焼 内: 明赤焼	白・白・黒・ 小	
	134	○	土製品	完形	—	—	—	—	ナデ ミガキ	ナデ	外にぶい・黄 内: 黄	白・黒・白・ 黒	直径: 3.4cm 厚さ: 0.8cm
	135		甕	口縁部-胴部	—	—	18.5	—	工具ナデ ミガキ	ミガキ・ナデ 工具ナデ	外にぶい・黄 内: 黄	白・白・黒・ 小	
	136		甕	口縁部-胴部	—	—	21.1	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外にぶい・黄 内: ぶい・黄焼	白・白・黒・ 小	
	137		甕	口縁部	D	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外: 黄 内: ぶい・黄焼	白・黒・小・ 注か	
	138		甕	胴部-脚部	—	—	—	10.7	工具ナデ 工具ナデ	工具ナデ	外にぶい・黄 内: ぶい・黄	白・白・黒・ 小	脚部高: 1.9cm
	139		甕	脚部	—	—	—	7.7	工具ナデ	ミガキ 工具ナデ	外: 黄 内: 黄	白・白・黒・ 黒	脚部高: 1.6cm
	140		甕	胴部-底部	—	—	—	8.2	工具ナデ	工具ナデ	外: 明赤焼 内: 黄	白・黒・白・ 黒・小	
	141		甕	胴部-底部	—	—	—	6.6	工具ナデ	工具ナデ	外にぶい・黄 内: ぶい・黄	白・白・黒・ 小	脚部高: 0.2cm
142		甕・壺	胴部-底部	—	—	—	4.5	工具ナデ	ミガキ	外にぶい・黄焼 内: 黄	白・黒・白・ 小	脚部高: 0.2cm	
2 1 北	143		高杯	杯部	—	—	25.0	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外: 明赤焼 内: 黄	白・黒	
	144		高杯	杯部-脚部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	ミガキ・ナデ 工具ナデ	外: 黄 内: ぶい・黄焼	白・白・黒・ 小	
	145		高杯	脚柱部	—	—	—	—	ミガキ	ミガキ 工具ナデ	外: 黄 内: ぶい・黄	白・黒・白・ 注か	
	146		高杯	脚柱部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外にぶい・黄 内: ぶい・黄	白・黒・白・ 黒	
	147		高杯	脚柱部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外にぶい・黄 内: ぶい・黄	白・黒・白・ 黒	
	148		高杯	脚柱部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ ハケ目	外にぶい・黄焼 内: ぶい・黄焼	白・黒・白・ 黒・小	
	149		壇	胴部-底部	—	—	—	2.2	工具ナデ	工具ナデ	外にぶい・黄 内: 黄	白・白・小・ 注か	
	150		壇	胴部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外: 黄 内: ぶい・黄焼	白・黒・白・ 黒・小	
151	○	輪の羽口	透風口	—	(長さ) 8.9	(内径) 2.9	(厚み) 1.1	—	ミガキ	ナデ	外: 明赤 内: ぶい・黄焼	白・黒・白・ 小	

表 2-23 竪穴建物跡11号出土土器

図 番 号	遺物 番 号	坯 面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 1 北	石31		磨盤石	完形	11.4	8.6	3.5		砂岩	
	石32		織	完形	8.0	8.2	3.9	340.0	安山岩	焼熱・覆付着



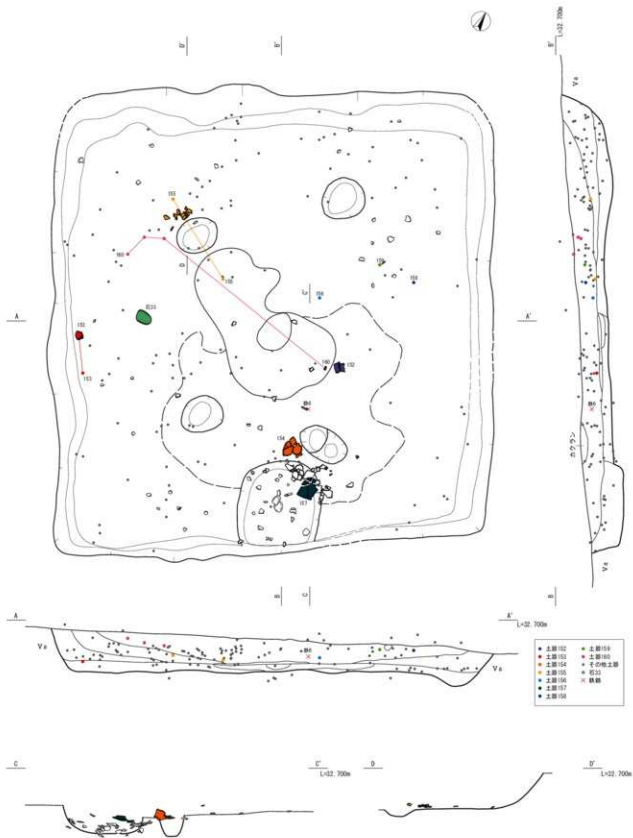
- 1 暗褐色土、1m程のアカホヤ火山灰土と池田降下礫石を少量含む。
- 2 暗褐色土、礫土よりも概らくアカホヤ火山灰土をやや多く含む。
- 3 黒褐色土。
- 4 黒褐色土、灰化物を多量含む。
- 5 割合暗褐色土、礫土。
- 6 黒褐色土。
- 7 暗褐色土、1m程の黒色土を少量、3m程の黄褐色土を含む。礫化層。
- 8 暗褐色土、3m程度のアカホヤ火山灰土を含む。



- ① 黒褐色土。
- ② 暗褐色土、礫化している。
- ③ 暗褐色土、礫土定よりも礫化が弱い。
- ④ 暗褐色土。

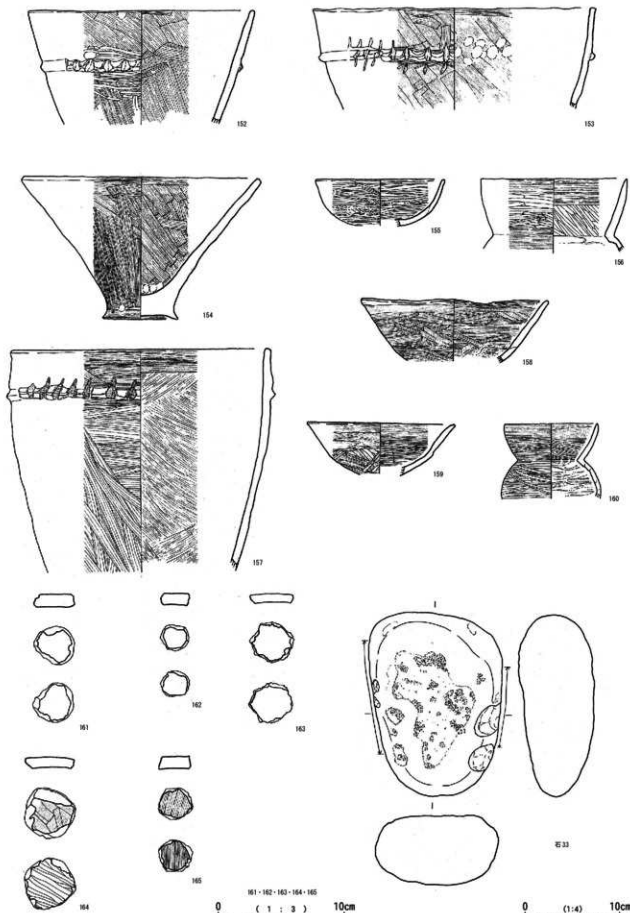


第 2-58 図 竪穴建物跡12号



第2-59図 竪穴建物跡12号 遺物出土状況

0 1m
(1/40)



第2-60圖 竪穴建物跡12号 出土遺物(土器・石器)

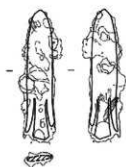


図 16



図 17

0 (1 : 2) 5cm

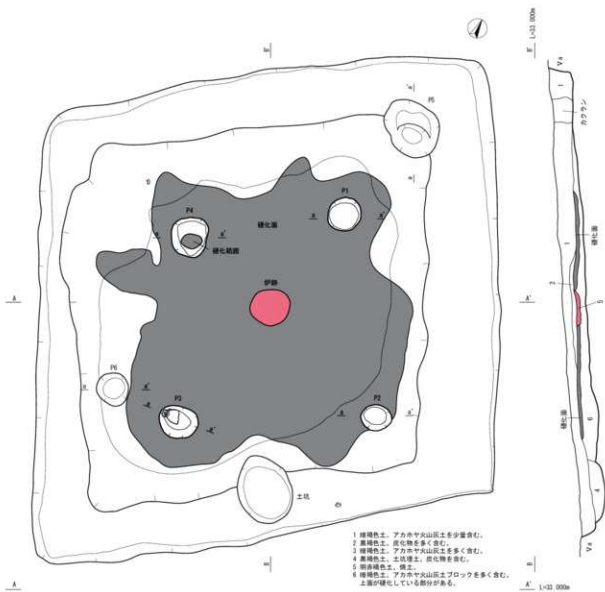
第2-61圖 竪穴建物跡12号 出土遺物(鉄製品・鉄滓)

表 2-24 竪穴建物跡12号出土土器

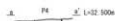
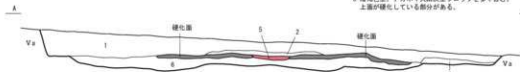
図 番号	遺物 番号	形 状	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 60	152	○	甕	口縁部-胴部	B	—	23.6	—	工具ナゾ ミガキ	工具ナゾ	外:明赤褐色 内:黄褐色	石・長・白・ 黒か	
	153	○	甕	口縁部-胴部	C	—	29.8	—	工具ナゾ	工具ナゾ	外:にぶい・緑 内:にぶい・緑	石・黒・小	
	154	○	鉢	完形	—	14.9	24.2	7.7	工具ナゾ ミガキ	工具ナゾ ミガキ	外:にぶい・緑 内:明褐色	石・白・小	
	155	○	高杯	杯部	—	—	13.5	—	工具ナゾ ミガキ	工具ナゾ ミガキ	外:明褐色 内:緑	石・小	
	156	○	埴	口縁部-胴部	—	—	11.5	—	工具ナゾ ミガキ	工具ナゾ ミガキ	外:黄褐色 内:黄褐色	白・黒・小	
	157		甕	口縁部-胴部	C	—	27.0	—	工具ナゾ	工具ナゾ	外:にぶい・緑 内:緑	石・長・白・ 小	
	158		高杯	杯部	—	—	19.5	—	工具ナゾ	工具ナゾ	外:明赤褐色 内:にぶい・緑	石・白・黒	
	159		高杯	杯部	—	—	15.6	—	工具ナゾ ミガキ	工具ナゾ ミガキ	外:にぶい・緑 内:明赤褐色	石・白・小・ 黒か	
	160		埴	口縁部-胴部	—	—	9.7	—	ハケ目・ミガキ 工具ナゾ	ミガキ 工具ナゾ	外:黄褐色 内:黄褐色	石・黒・小	
	161		土製品	完形	—	—	—	—	ナゾ	ナゾ	外:黄褐色 内:にぶい・黄褐色	石・小・ 黒か	土坑埋土中出土
	162		土製品	完形	—	—	—	—	ナゾ	ナゾ	外:黄褐色 内:にぶい・黄褐色	黒・白・黒・ 小	土坑埋土中出土
	163		土製品	完形	—	—	—	—	ナゾ	ナゾ	外:灰褐色 内:にぶい・緑	石・黒・白・ 黒	直径:3.0cm 厚さ:0.7cm
	164		土製品	完形	—	—	—	—	ナゾ	ケズリ ナゾ	外:黒 内:にぶい・黄褐色	石・白・黒・ 小	直径:4.0cm 厚さ:0.8cm
	165		土製品	完形	—	—	—	—	ナゾ	ナゾ ミガキ	外:灰褐色 内:緑	石・白・黒・ 小	直径:2.6cm 厚さ:1.0cm

表 2-25 竪穴建物跡12号出土土器

図 番号	遺物 番号	形 状	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2-60	石33		台石	完形	19.5	14.2	8.1	2810.0	砂岩	



- 1 雑褐色土。アカホヤ火山灰土を少量含む。
- 2 黒褐色土。炭化物を多く含む。
- 3 雑褐色土。アカホヤ火山灰土を多く含む。
- 4 雑褐色土。土質硬土。炭化物を多く含む。
- 5 黒多褐色土。硬土。
- 6 雑褐色土。アカホヤ火山灰土ブロックを多く含む。上面が硬化している部分がある。

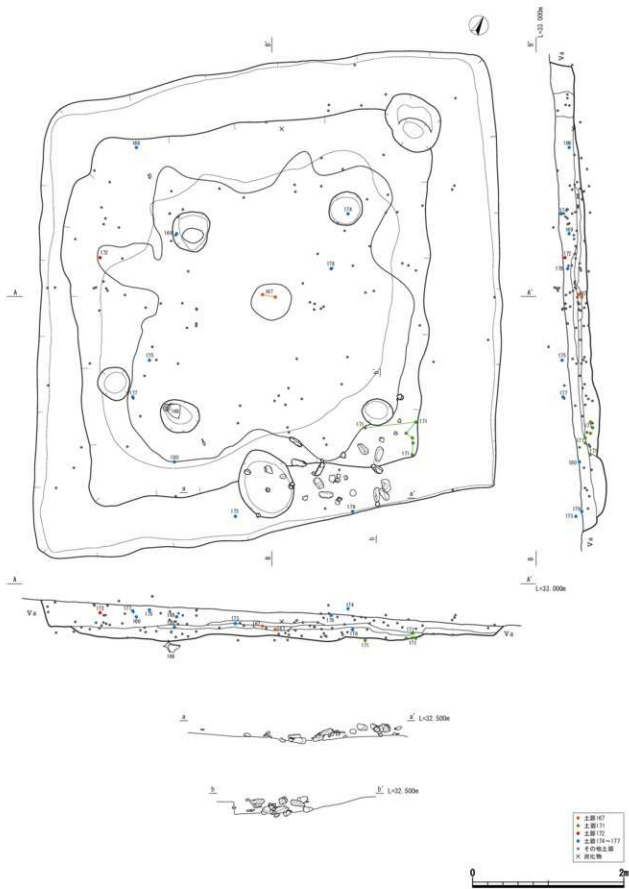


- ① 雑褐色土。アカホヤ火山灰土を少量含む。
- ② 黒褐色土。アカホヤ火山灰土を多量含む。
- ③ 黒褐色土。アカホヤ火山灰土を多量含む。

第2-62図 竪穴建物跡13号 貼床面

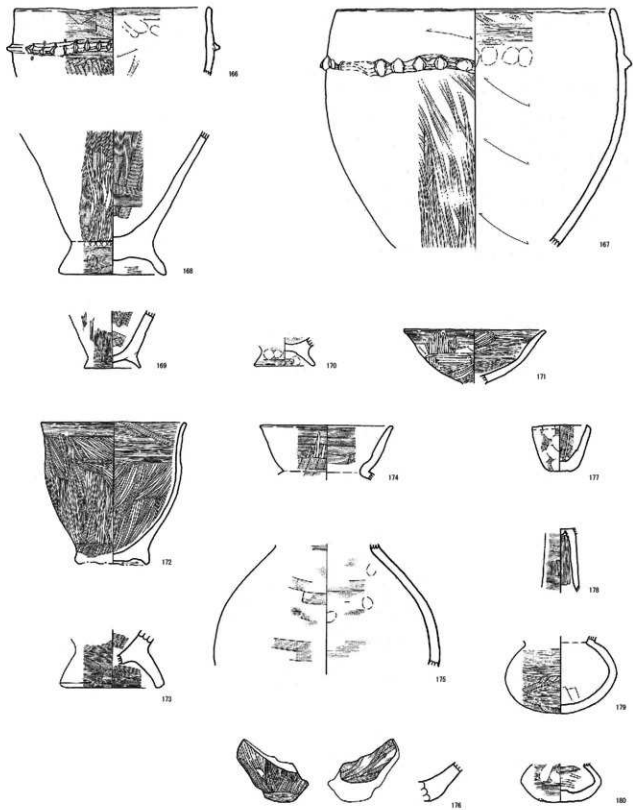


(1/50)



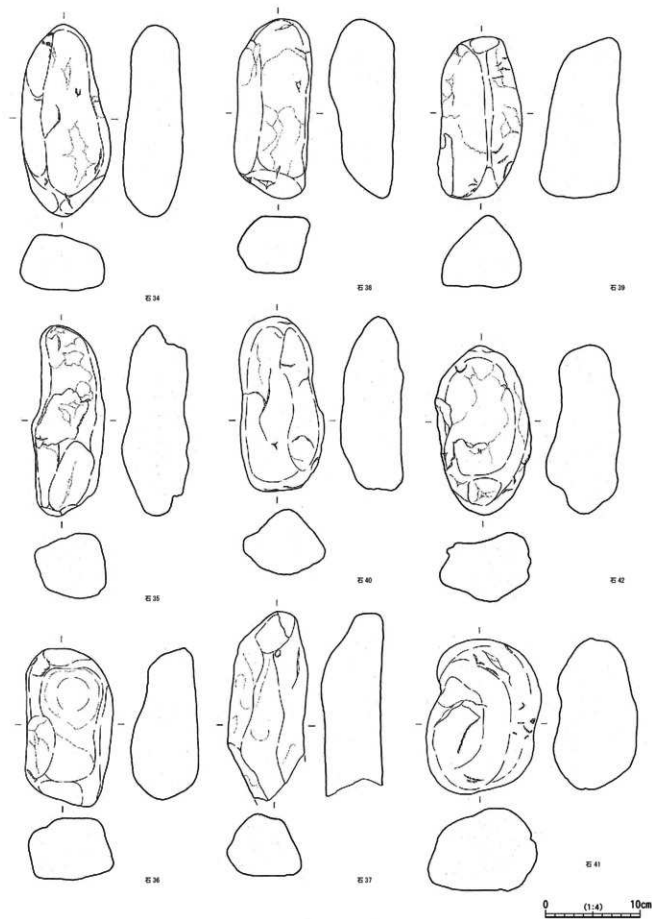
第 2-63 圖 豎穴建物跡 13 号 遺物出土狀況

(1/50)



0 (1:4) 10cm

第2-64圖 豎穴建物跡13号(土器)



第2-65圖 竪穴建物跡13号 遺物出土(石器)



図 137

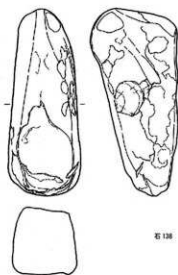


図 138

0 (1:4) 10cm

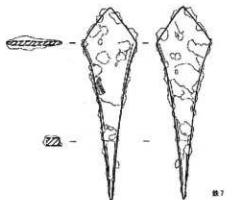


図 7

0 (1:2) 5cm

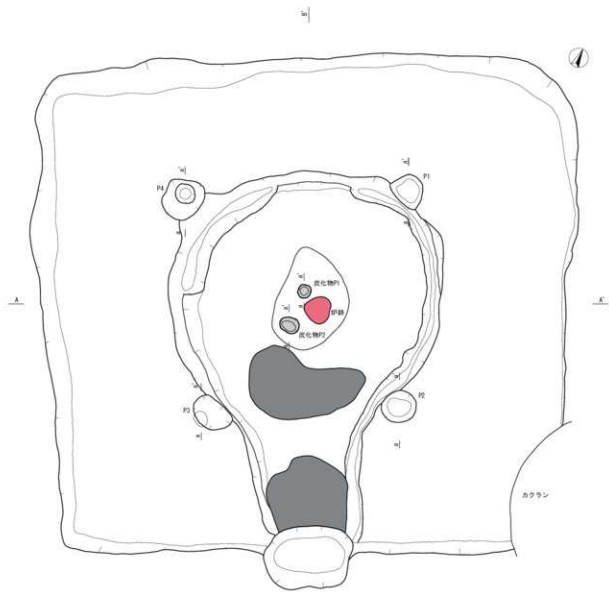
第2-66 図 竪穴建物跡 13号 出土遺物(石器・鉄製品)

表2-26 竪穴建物跡13号出土土器

図番号	遺物番号	床面	器種	部位 (次級部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考	
2 64	166	○	甕	口縁部-胴部	C	—	20.3	—	工具ナデ	工具ナデ 指ナデ	外:にぶい 内:磨	石・白・黒・ 小		
	167	○	甕	口縁部-胴部	D	—	29.2	—	指ナデ	工具ナデ 指ナデ	外:にぶい 内:にぶい	石・黒		
	168	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	10.7	—	工具ナデ ミガキ	外:にぶい 内:にぶい	石・白・黒・ 小	脚部高:1.5cm	
	169	○	甕・鉢	胴部-脚部	—	—	—	5.6	—	工具ナデ	工具ナデ 内:明赤焼	外:にぶい 内:にぶい	石・白・黒・ 注1	脚部高:0.6cm
	170	○	甕・鉢	脚部	—	—	—	6.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい 内:にぶい	石・白・白・ 黒	脚部高:1.6cm
	171	○	高坏	坏部	—	—	—	14.7	—	工具ナデ ミガキ	外: 内:磨	石・白・黒		
	172	○	甕	完形	C	14.8	15.2	7.2	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:磨 内:磨	石・白・黒・ 小	脚部高:0.3cm
	173	○	甕	脚部	—	—	—	9.8	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい 内:にぶい	石・白・黒・ 注1	脚部高:12.5 cm
	174	○	甕	口縁部	—	—	—	13.7	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:磨 内:にぶい	石・白・黒・ 小	
	175	○	甕	胴部	—	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい 内:にぶい	石・白・黒・ 小	
	176	○	甕	胴部-底部	—	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:磨 内:磨	石・白・黒・ 注1	
	177	○	鉢	完形	—	3.6	4.2	1.8	—	工具ナデ	工具ナデ	外:磨 内:磨	石・白・白・ 注1	ミコチニア土器
	178	○	高坏	脚柱部	—	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:浅黄焼 内:浅黄焼	石・白・小・ 注1	
	179	○	甕	胴部-底部	—	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	指ナデ	外:磨 内:磨	石・白・白・ 黒・小	
180	○	甕	胴部-底部	—	—	—	—	—	工具ナデ 指ナデ	工具ナデ	外:にぶい 内:にぶい	石・白・黒・ 注1		

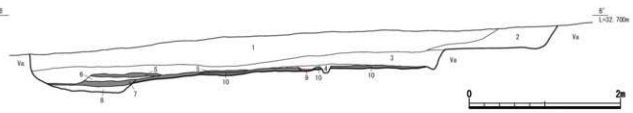
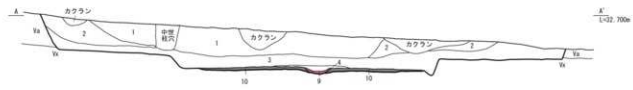
表2-27 竪穴建物跡13号出土土器

図番号	遺物番号	床面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 65	石34	○	棒状織	完形	20.4	9.4	6.1	1720.0	ホルンフェルス	
	石35	○	棒状織	完形	20.1	7.7	7.0	1580.0	ホルンフェルス	
	石36	○	棒状織	完形	16.4	9.2	7.2	1720.0	ホルンフェルス	
	石37	○	棒状織	破損	20.9	8.4	6.5	1520.0	ホルンフェルス	最大長・重量は残存部で計測
	石38	○	棒状織	完形	19.1	7.9	6.9	1620.0	ホルンフェルス	
	石39	○	棒状織	完形	17.0	8.5	8.4	1720.0	ホルンフェルス	
	石40	○	棒状織	完形	18.5	9.9	6.9	1430.0	ホルンフェルス	
	石41	○	棒状織	完形	16.3	12.2	8.8	2400.0	ホルンフェルス	
	石42	○	棒状織	完形	17.9	9.8	7.4	1760.0	ホルンフェルス	
	2 66	石137	○	棒状織	完形	19.9	9.4	7.0	1930.0	ホルンフェルス
	石138	○	棒状織	完形	19.1	9.1	7.8	1830.0	ホルンフェルス	

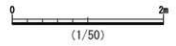


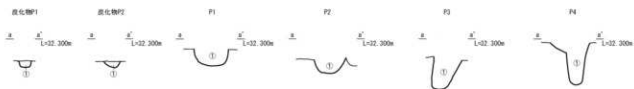
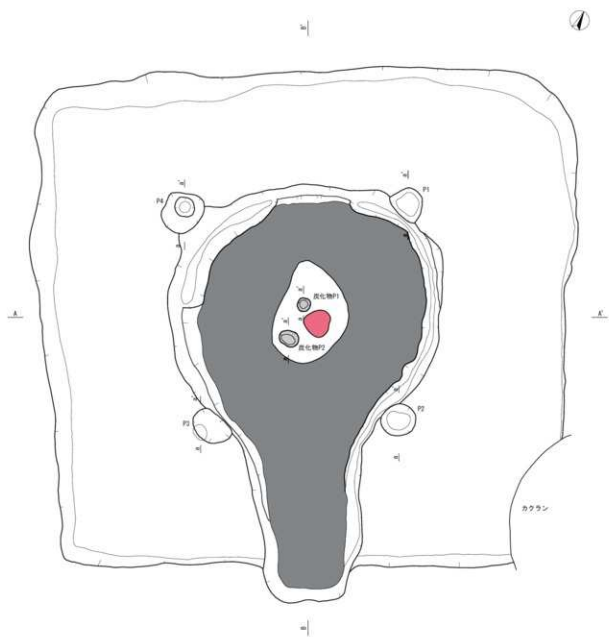
- 1 黒褐色土。本跡降下軽石を少量含む。
- 2 暗褐色土。アカホヤ火山灰土を含む。
- 3 褐色土。アカホヤ火山灰土を多く含む。
- 4 灰化物堆積。
- 5 暗褐色土硬化面。土層硬化面。

- 6 暗褐色土。
- 7 比較的暗褐色土硬化面。下位硬化面。
- 8 比較的暗褐色土。やや砂質。
- 9 明赤褐色土。
- 10 比較的暗褐色土。基本的には7と同じであるがやや砂質。



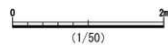
第2-67図 竪穴建物跡14号 上位硬化面

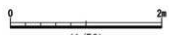
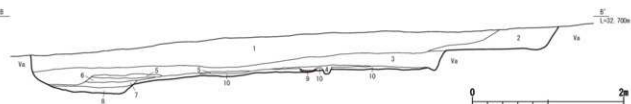
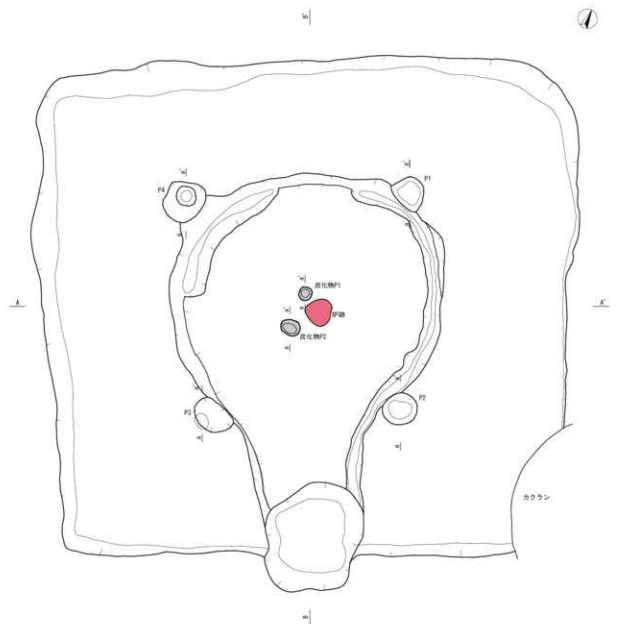




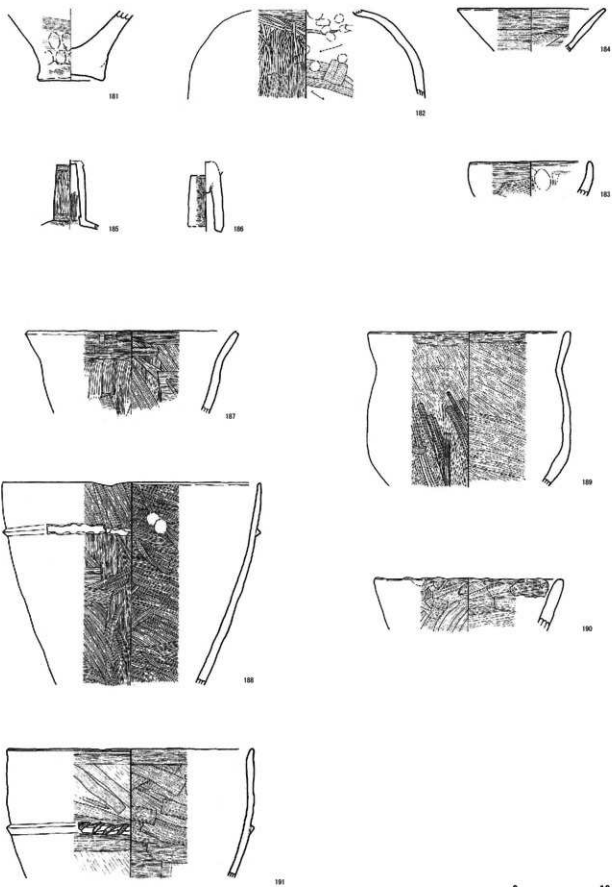
① 褐色土、アカホヤ火山灰土を多く含む。遺構埋土31に類似。

第2-68図 竪穴建物跡14号 下位硬化面

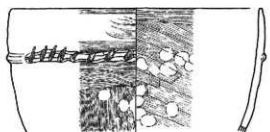




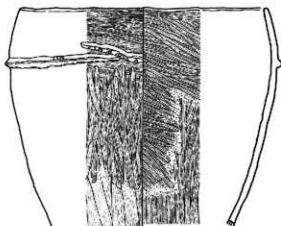
第2-69図 竪穴建物跡14号 底面



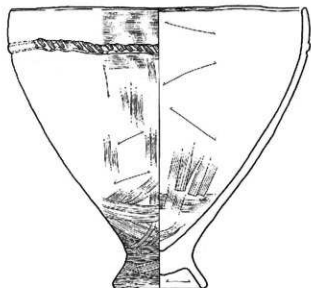
第2-71圖 豎穴建物跡14号 出土遺物(土器①)



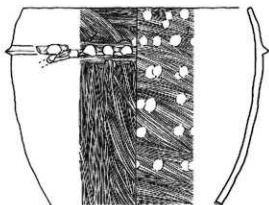
192



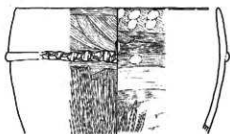
197



193



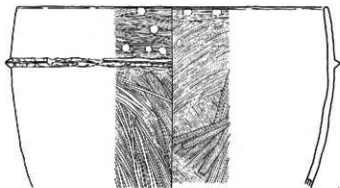
198



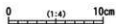
194



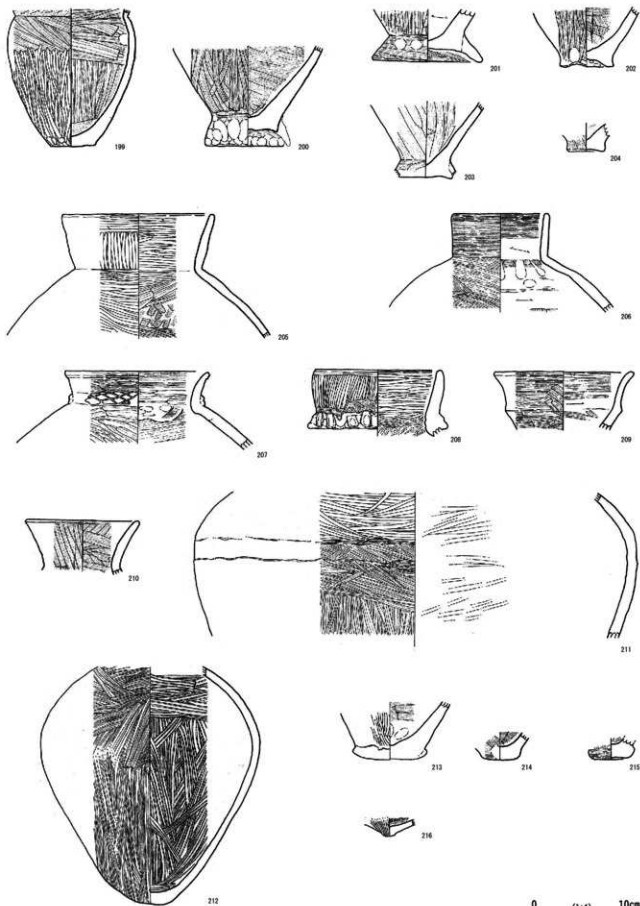
196



195

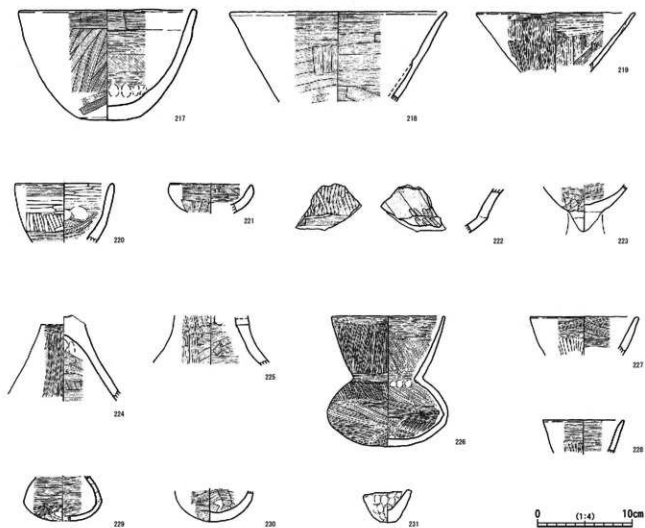


第2-72图 竖穴建物跡14号 出土遺物(土器②)

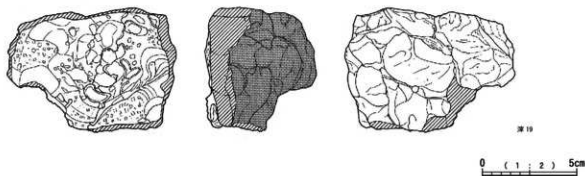
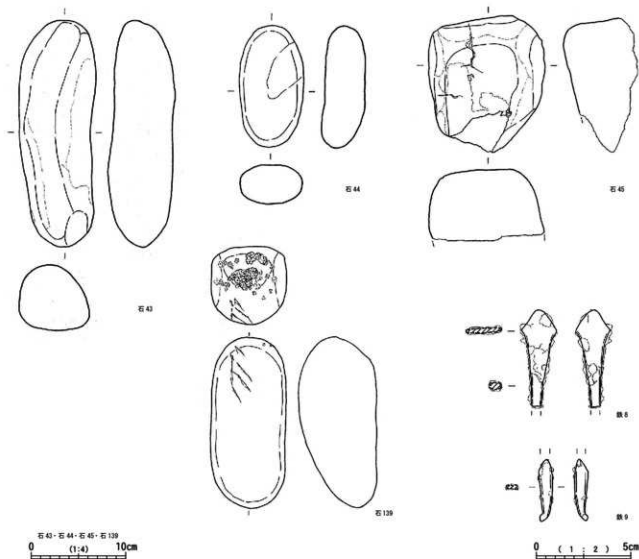


第2-73圖 豎穴建物跡14号 出土遺物(土器③)

0 (1:4) 10cm



第2-74圖 竪穴建物跡14号 出土遺物(土器)



第2-75圖 竪穴建物跡14号 出土遺物(石器・鉄製品・鉄滓・裝飾品)

表2-28 竪穴建物跡14号出土土器1

図 番 号	遺物 番号	形 式	器 種	部 位 (次 要 部 位)	分 類	部 高 (cm)	口 径 (cm)	底 径 (cm)	外 面 調 整	内 面 調 整	色 調	胎 土	備 考
2 1 71	181	○	甕	脚部	—	—	—	6.5	工具ナゲ	指ナゲ	外:浅黄緑 内:ぶいぬ	石・輝・白・ 黒・小	脚部高:0.6cm
	182	○	甕	胴部	—	—	—	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ	外:ぶいぬ 内:ぬ	石・白・黒・ 小	
	183	○	鉢	口縁部	—	—	12.4	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぶいぬ 内:ぬ	石・輝・白・ 黒・小	
	184	○	高坏	口縁部-胴部	—	—	15.0	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぬ 内:ぬ	石・白・黒・ 小	
	185	○	高坏	脚部	—	—	—	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ	外:明赤褐 内:ぶいぬ	石・白・黒・ ほか	
	186	○	高坏	脚部	—	—	—	—	工具ナゲ	指ナゲ	外:ぬ 内:浅黄緑	石・輝・白・ 黒・小	
	187		甕	口縁部-胴部	Ⅱ	—	22.0	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ	外:ぬ 内:ぶいぬ	石・長・白・ 黒・小	
	188		甕	口縁部-胴部	Ⅲ	—	27.2	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぬ 内:ぬ	石・白・黒・ 小	
	189		甕	口縁部-胴部	—	—	20.8	—	工具ナゲ ハケ目	工具ナゲ	外:ぬ 内:ぬ	石・白・黒・ 小	
	190		甕	口縁部	—	—	19.6	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぬ 内:ぬ	石・白・黒・ 小	
	191		甕	口縁部-胴部	C	—	25.7	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:灰黄褐 内:ぶいぬ	石・白・黒・ ほか	
2 1 72	192		甕	口縁部-胴部	D	—	26.2	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外: 内:		
	193		甕	完形	D	29.6	30.8	9.3	工具ナゲ 指ナゲ	工具ナゲ	外:ぶいぬ 内:ぶいぬ	石・輝・黒・ 小	
	194		甕	口縁部-胴部	D	—	21.2	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぶいぬ 内:ぶいぬ	石・白・黒・ ほか	
	195		甕	口縁部-胴部	D	—	32.6	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ	外:ぬ 内:ぬ	石・白・黒・ 小	
	196		甕	口縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナゲ ミガキ	—	外:不明 内:ぬ	石・輝・白・ 黒・小	
	197		甕	口縁部-胴部	D	—	25.8	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぬ 内:ぬ	石・白・黒・ ほか	
	198		甕	口縁部-胴部	D	—	23.8	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぬ 内:ぬ	石・白・黒・ 小	
2 1 73	199		甕	胴部-底部	—	—	—	4.6	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ	外:ぶいぬ 内:ぶいぬ	小・ほか	
	200		甕	胴部-底部	—	—	—	8.6	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぶいぬ 内:ぶいぬ	石・白・黒・ ほか	胴部最大径:1.7cm
	201		甕	胴部-底部	—	—	—	11.2	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぶいぬ 内:ぶいぬ	石・輝・黒・ ほか	胴部最大径:1.5cm
	202		甕	胴部-底部	—	—	—	5.6	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぬ 内:ぬ	石・白・黒・ 小	胴部高:0.9cm
	203		甕	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぶいぬ 内:ぶいぬ	石・輝・白・ 黒・小	
	204		甕	脚部	—	—	—	3.6	工具ナゲ	ナゲ	外:ぬ 内:ぬ	石・長・白・ 黒	胴部高:0.2cm
	205		甕	口縁部-胴部	—	—	15.8	—	ミガキ 工具ナゲ	ミガキ 工具ナゲ	外:ぬ 内:ぶいぬ	石・白・黒・ 小	
	206		甕	口縁部-胴部	—	—	9.8	—	工具ナゲ	工具ナゲ ハラナゲ	外:ぬ 内:浅黄緑	輝・黒・小	
	207		甕	口縁部-胴部	—	—	15.0	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:浅黄緑 内:浅黄緑	石・輝・白・ 黒・小	
	208		甕	口縁部	—	—	13.3	—	ミガキ 工具ナゲ	ミガキ 工具ナゲ	外:ぬ 内:ぬ	石・白・黒・ 小	
	209		甕	口縁部	—	—	14.3	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぬ 内:ぬ	白・黒・小・ ほか	
	210		甕	口縁部	—	—	11.4	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外: 内:		
	211		甕	胴部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナゲ	ミガキ 工具ナゲ	外:ぬ 内:ぬ	石・白・黒・ ほか	胴部最大径:46.6cm
	212		甕	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナゲ	ハケ目	外:ぬ 内:ぶいぬ	石・白・黒・ 小	胴部最大径:23.1cm
	213		甕	胴部-底部	—	—	—	3.5	ミガキ	工具ナゲ	外:ぶいぬ 内:ぶいぬ	石・白・黒・ 小	
	214		甕	底部	—	—	—	2.5	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぬ 内:ぬ	輝・白・黒・ 小	
	215		甕	底部	—	—	—	3.1	工具ナゲ	工具ナゲ	外:ぶいぬ 内:ぶいぬ	石・白・黒・ 小	
	216		甕	底部	—	—	—	—	ハケ目	工具ナゲ	外:ぶいぬ 内:ぶいぬ	石・白・小・ ほか	

表2-29 竪穴建物跡14号出土土器2

図 番 号	遺物 番 号	床 面	器 種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考
2 74	217		鉢	完形	—	11.5	18.9	4.5	工具ナツ	工具ナツ	外:橙 内:橙	石・黒・白・ 小	
	218		鉢	口縁部-胴部	—	—	22.4	—	工具ナツ	工具ナツ	外:橙 内:橙	石・黒・黒・ 小	
	219		鉢	口縁部-胴部	—	—	16.6	—	工具ナツ ミガキ	工具ナツ	外:にぶい橙 内:橙	石・黒・黒・ 白・黒	
	220		鉢	口縁部-胴部	—	—	7.7	—	工具ナツ ミガキ	工具ナツ ミガキ	外:橙 内:橙	石・白・黒・ 小	
	221		鉢	口縁部-胴部	—	—	8.6	—	工具ナツ	工具ナツ ミガキ	外:にぶい橙 内:にぶい橙	黒・白・黒・ 小	
	222		高坏	坏部	—	—	—	—	工具ナツ	工具ナツ	外:にぶい橙 内:にぶい橙	石・白・黒・ 小	
	223		高坏	坏部	—	—	—	—	工具ナツ	工具ナツ	外:にぶい橙 内:にぶい橙	石・黒・小・ ほか	
	224		高坏	脚部	—	—	—	—	工具ナツ	工具ナツ	外: 内:にぶい橙	石・白・黒・ 小	
	225		高坏	脚部	—	—	—	—	工具ナツ	工具ナツ	外: 内:にぶい橙	石・白・黒・ 小	穿孔あり
	226		埴	完形	—	13.7	11.8	—	工具ナツ ミガキ	工具ナツ	外:にぶい橙 内:にぶい橙	石・黒・小	
	227		埴	口縁部	—	—	8.5	—	工具ナツ ミガキ	工具ナツ	外:にぶい橙 内:にぶい黄褐色	白・黒・小・ ほか	
	228		埴	口縁部	—	—	6.4	—	工具ナツ	工具ナツ	外:浅黄褐色 内:浅黄褐色	白・黒・小・ ほか	
	229		埴	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナツ ミガキ	工具ナツ	外:にぶい橙 内:にぶい黄褐色	石・白・黒	
	230		埴	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナツ	ハケ目	外:橙 内:橙	白・黒・小・ ほか	
231		手づくね	完形	—	3.1	4.8	1.1	指押さ文	指押さ文	外:オリーブ褐色 内:オリーブ褐色	黒		

表2-30 竪穴建物跡14号出土石器

図 番 号	遺物 番 号	床 面	器 種	保存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 75	石43	○	棒状磯	完形	24.0	7.4	6.9	2260.0	砂岩	
	石44		棒状磯	完形	12.9	6.8	4.2	520.0	凝灰岩	
	石139		巖石	完形	18.0	8.0	8.3	1880.0	砂岩	
	石45		磯	破損	14.3	12.3	(7.6)	(1280.0)	安山岩	焼熱・着色化、一部に煤付着

中央部及び中央北側の竪穴建物跡群(第2-76図)

川久保遺跡の31区と32区の境には高低差1m程の斜面が存在しており、遺跡の中央部付近(D~G区)では、その斜面より東側方向へ、方形の平坦気味な張り出し地形が存在している。その張り出し部には、ほぼ同じ方向を向く4基の竪穴建物跡が検出されており、また、張り出し部の北側には6基の方形竪穴建物跡と、1基の円形竪穴建物跡、2基の竪穴状遺構が検出されている。中央部とその北側の竪穴建物跡群の特徴としては、東側(川側)の竪穴建物跡群と比較して、切り合い関係を持つ建物跡が増え、特に北側では近い距離で検出されていることが挙げられる。

竪穴建物跡15号(第2-77~80図)

竪穴建物跡15号は、調査区の北側B33・34区Va層で検出された。長軸(南北軸)約4.6m、短軸(東西軸)約4.3mの隅丸形状を呈する。長軸はやや西側に傾く。南側には張り出しを持ち、張り出しを含めると南北軸は約5.0mとなる。遺構北西部と東側は部分的に現代の攪乱を受けている。検出面から底面までの深さは25~40cmであり、その上に厚さ15~25cmの貼床がほぼ平坦に形成されている。中心部よりやや南側の位置に直径約30cmの範囲で焼土が確認されており、炉跡と考えられる。周辺に明確な炭化物の集中範囲などは検出されていない。また、中央部から南北、そして東側へ硬化面が確認されている。

竪穴建物跡15号の柱穴は遺構内から35基、遺構周辺から23基検出されている。遺構内の柱穴は貼床面上面から検出されているものが多い。柱穴の埋土は褐色土、にぶい黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土の4種類に別れ、その分布は第2-90a図のようになった。これを見ると、褐色土埋土の柱穴(P18、P10、P16)は、暗褐色土埋土の柱穴(P27、P17、P19)に切られており、褐色土埋土の柱穴がより古いことが分かる。また、にぶい黄褐色土埋土の柱穴(P8)も、暗褐色土埋土の柱穴(P9)に切られており、にぶい黄褐色土埋土の柱穴は、暗褐色土埋土柱穴よりも古いことが分かる。にぶい黄褐色土埋土の柱穴は、その埋土の色調から、褐色土埋土の柱穴に近い時期の柱穴と考えられる。北東部からは黒褐色土埋土の柱穴が3基検出されている。黒褐色土は古代の遺構の埋土によく見られる埋土であるが、P25が貼床面から検出されており、さらにその上位には遺構埋土が堆積していたことから、古墳時代の柱穴と考えられる。埋土の色調からすると、最も新しい埋土の柱穴と考えられよう。以上の様に、竪穴建物跡15号の柱穴は、少なくとも2時期(古:褐色土・にぶい褐色土、新:暗褐色土・黒褐色土)に分けられ、切り合い関係にある柱穴P18とP19、P18もしくはP16とP17、P10とP27はそれぞれ同じような特徴を持ち、少なくとも1回は建て替えが行われた可能性

が考えられる。柱穴を柱穴の最小径と、柱穴の深さで分類したものが第2-90図である。単純に最小径=柱穴の太さとはならないであろうが、建物跡の中央のP1や、南側のP32、東側のP28、また建物跡周囲の角部や中央部にも、最小径の大きな柱穴が並んでいることが確認できた。さらに柱穴の深さに関しては、削りされVa層面ではしか検出されなかった遺構周囲の柱穴を除き、遺構内の柱穴のみの結果ではあるが、やはり中央のP1や、壁際の柱穴が深くなっていることが分かる。一覧表等では柱穴として掲載しているが、P32の西側部分、P7、P35は、その形状等から土坑の可能性が考えられる。

出土遺物(第2-81図)

遺物の出土量は少なく、実測対象となるような遺物はさらに少なかった。土器は1個体の複数の破片が出土することも無く、全て口縁部片、胴部片と、接合しない破片単位で出土している。

土器(第2-82図)

232・233は、その出土状況から、竪穴建物跡15号に帰属する可能性が高い土器である。

232は口縁部の資料である。炉跡から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデを施した後に、指押さえが並ぶ。口縁部は各方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には、横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けていると考えられる。内面は斜め方向の指ナデが施されている。

233は埴の口縁部の資料である。口径13.1cmを測る。南側土坑の西側に隣接して、貼床より出土している。外面口縁部上端は横方向のミガキ、口縁部には縦方向の工具ナデが施されている。ミガキと工具ナデの工具幅は5mm程度と同じであるが、工具ナデは光沢を持たない。

234・235は、その出土状況から、竪穴建物跡15号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

234は口縁部がほぼ直行する壺C類の口縁部の資料である。口径20.8cmを測る。遺構の中央部と北壁の中間付近で、検出面から貼床面から20cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部上位は単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデを施した後に、幅2~3mm程度の斜め方向の工具ナデを施している。口縁部中位以下は、この斜め方向の工具ナデの上から、幅1cm程度の斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部は横方向の粗い工具ナデが施されている。内面突帯部分は横方向の指ナデが施されている。

235は高坏の坏部資料である。口径19.2cmを測る。遺構の中央部と北東角部の中間付近で、検出面から出土している。口唇部は横ナデが施されている。外面坏部上端は横方向の工具ナデが施されている。坏部は幅2mm程度

と幅8mm程度の2つの斜め方向の工具ナデが施されている。幅の細い工具ナデはミガキに類似するが光沢を持たない。内面環部上端は横方向の工具ナデが施されている。端部の工具痕ほぼスジ状の痕跡が強く残る。環部には幅8mm程度と幅2mm程度の2つの斜め方向の工具ナデが施されている。内外面ともに同じ工具を使用していると考えられる。

石器(第2-83図)

石46は軽石製品である。遺構の北壁中央部付近、貼床面よりも下位、貼床埋土中から出土している。

石47～石51は棒状礫である。石47のみ南側土坑の検出面、貼床面と同じ高さで出土しているが、他は全て貼床面よりも浮いた状態で出土している。石51以外は全て南側土坑及び、その周囲から出土しており、石51のみ北北西のやや離れた位置で出土している。

竪穴建物跡16号(第2-84～87図)

竪穴建物跡16号はC33区Va層から検出した。竪穴建物跡17号を切って検出されているため、竪穴建物跡17号よりも新しい遺構であることが分かる。長軸(東西軸)約5.0m、短軸(南北軸)約4.1mの西壁の南側半分が張り出すやや歪な隅丸長方形を呈する。張り出し部分を含めると、長軸は約5.6mとなる。川久保遺跡の古墳時代竪穴建物跡は、長軸を南北方向にとる構造の建物が多いが、この建物跡は東西軸を長軸としている。検出面から底面までの深さは25～30cm程度であり、底面から10～20cm程度の厚さで、ほぼ平坦な貼床が形成されている。遺構の中央部には直径約40cm、深さ約5cmの焼土を伴う土坑が検出されており、炉跡と考えられる。土坑は3基検出されており、炉跡の南側には直径約90cm、深さ約30cmの土坑1が検出されている。土坑1の底面は平坦に成形されている。炉跡の東側には、長軸約70cm、短軸約55cm、深さ約45cmの楕円形の土坑2が検出されている。土坑2はその大ききから土坑としているが、炉跡を挟んで、ほぼ等距離に検出された柱穴P1の存在から、柱穴である可能性も考えられる。遺構の南東角付近には、長軸約45cm、短軸約35cm、深さ約10cmの楕円形の土坑3が検出されている。炉跡の周囲には硬化面が不定形状に広がる。南は土坑1、西はP1、北は少なくともP3・P4付近、東側は貼床を構築しない、一段高い底面の際まで広がっている。

竪穴建物跡16号の柱穴は遺構内に12基、壁面に4基、遺構の周囲にも多数の柱穴が検出されている。柱穴の埋土は遺構周辺の南側と東側から検出された数基を除くと、ほぼ全ての柱穴の埋土が同じ暗褐色土で構成されている。そのため遺構周辺で検出された柱穴はその帰属の判断が難しい。また、遺構内の柱穴も竪穴建物跡16号と17号の貼床面の高さがほぼ等しいため、こちらも帰属の

判断が難しい。P1は硬化面と接して検出されている竪穴建物跡16号の柱穴である。土坑2と対をなし、建物の主柱穴となる可能性が考えられる。P3～P5は竪穴建物跡16号と同じ向きに直線的に並び、また径や深さも同等であるため、竪穴建物跡16号に帰属するものと考えられる。P8は遺構内で検出された柱穴としては、最も最小径の大きな柱穴である。深さは約10cmとやや浅いが、その検出位置が竪穴建物跡17号の中心であることから、竪穴建物跡17号に帰属する可能性が考えられるが、竪穴建物跡16号の硬化面がこのP8を避けるように広がっているのが気にかかる点である。P13～P16の4基の柱穴は、竪穴建物跡16号の壁面から検出されており、壁面を切っているため、その帰属は竪穴建物跡16号である可能性が非常に高い。周囲には建物跡に接するようにP17～P21の5基の柱穴が検出されている。その中でもP19は竪穴建物跡17号の検出面から掘り込まれており、竪穴建物跡16号に帰属すると考えられる。

出土遺物(第2-88-89図)

遺物の出土量は少なく、実測対象となる遺物はさらに少なかった。また、実測した遺物で竪穴建物跡16号に帰属する可能性が高い土器は無かった。

土器(第2-90図)

236・237は、その出土状況から、竪穴建物跡16号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

236は口縁部から胴部上位の資料である。口径18.5cmを測る。炉跡の南南東で、検出面近くから出土している。口縁部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部には斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部から胴部上端にかけては、横・斜め方向の工具ナデが、胴部には斜め方向の工具ナデが施されている。

237は甕の胴部上半の資料である。口縁部が欠損しており、突帯部分よりも下位の資料であるため、分類は不可である。遺構の南東部で、検出面から出土している。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部には横方向の工具ナデを施した後に、斜め方向の工具ナデを施している。内面は横方向の工具ナデが施されている。

竪穴建物跡17号(第2-84～87図)

竪穴建物跡17号はC33区Va層から検出した。その中心部及び北側と東側の大部分を含めた範囲を、竪穴建物跡16号に切られた状態で検出されている。形状は隅丸方形を呈すると考えられるが、北西角部が想定される箇所からは検出されていない。建物の向きはわずかに東側に傾く。残存部での計測1辺約5.3mを測る。検

出面から底面までの深さは20～25cm程度であるが、部分的には底面が大きく丸める箇所も見られる。底面から約15cmの厚さで貼床が形成されている。硬化面は確認されていない。ただし、P13の周辺から硬化面がブロック状に堆積して検出されていることから、建物の中心部には硬化面が形成されていた可能性も考えられる。また、竪穴建物跡17号の中心部と想定される付近の竪穴建物跡16号の埋土中から、焼土がブロック状に堆積して検出されていることから炉跡の存在も想定される。

竪穴建物跡16号で記載した柱穴を除くと、遺構内からは2基、壁面から1基の柱穴が検出されている。竪穴建物跡16号・17号の周囲からは36基の柱穴が検出されている。その中でもP25～P45の21基に関しては、その検出位置から、竪穴建物跡17号に帰属すると考えられる。

出土遺物(第2-88・89図)

遺構の大部分を竪穴建物跡16号に切られていることもあり、遺物の出土量は少なく、実測対象となる遺物はさらに少なかった。また、実測した遺物で竪穴建物跡17号に帰属する可能性が高い土器は無かった。石器は磨石が2点出土しており、そのうち1点は貼床面から出土している。

土器(第2-90図)

238～240は、その出土状況から、竪穴建物跡17号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

238は口縁部が内湾する甕C類の口縁部から胴部上位の資料である。口径24.5cmを測る。遺構の南側で検出面近くから出土している。外面口縁部は斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。口縁部下端から胴部上位にかけては、横方向の工具ナデが施されており、部分的にはその上から斜め方向の工具ナデが施されている。内面は斜め・横方向の工具ナデが施されている。

238の胴部には少量であるが煤が付着しており、この付着炭化物の放射性炭素年代測定(AMS測定)をおこなったところ(第3分冊自然科学分析参照)、確率の高い2σ暦年校正年代で337calAD-417calAD(81.7%)となった。おおよそ4世紀中頃～5世紀前半の範囲と言えよう。

239は完形の埴であり、割れてはいるが欠損箇所はない。口径8.8m、器高9.3cmを測る。外面の口縁部と胴部の境には接合痕が顕著に残る。遺構の南東角付近で、検出面直下から出土している。外面口縁部は横方向の丁寧な工具ナデを施した後に、斜め方向のミガキを施している。胴部は斜め方向の工具ナデを施した後に、横方向のミガキを施している。ミガキは下位に行くほど工具幅が広くなる。底部付近は指ナデが施されている。内面口縁部は横方向の工具ナデが施されているが、下位に行く

ほど単位幅が不明瞭になる。胴部上端には横方向の粗い工具ナデが施され、その下位には斜め方向の工具ナデが施されている。胴部中位には工具の打ち込み痕が巡る。胴部下位から底面にかけては、部分的に粗い指ナデが施されているが、器面調整の無い箇所も見られる。

240は埴の胴部から底部の資料である。遺構の南側で検出面から出土している。内外面ともに斜め・横方向の工具ナデが施されており、内面には指押さえも行われている。

石器(第2-90図)

石52は砥石である。東壁付近で貼床面からわずかに浮いた状態で出土している。表面全体に使用痕が確認できる。

石53・石54は磨石である。

石53は遺構の北東角付近で、貼床面から出土している。表面と背面に敲打痕および擦痕が確認できる。側面にはわずかに敲打痕が確認できる程度である。

石54は東壁付近で、検出面直下から出土している。敲打痕は左側面以外の各面、擦痕は全面に確認できる。

石140は砥石である。

竪穴建物跡18号(第2-91・92図)

竪穴建物跡18号はC34区Va層で検出した。南北軸約3.5m、東西軸3.5～3.8mの隅丸形状を呈するが、東壁の中央部は大きく抉れる形状を呈している。また、南側には1辺の長さが約0.5mの張り出しを持ち、張り出し部を含めた南北軸の長さは4.0mである。検出面から底面までの深さは約30cmであるが、遺構の西側面1/3の底面は1段高くなっており、検出面から底面までの深さは5～10cm程度となる。底面までの深さは南側に行くほど遺構の上面に削平を受けており浅くなる。遺構の中央部には焼土が検出されている。直径約40cmの浅い土坑状になり、約4cmの赤色化した埋土が堆積しており、炉跡と考えられる。炭化物の範囲は確認されていない。硬化面は炉跡の北側で部分的に確認されている。貼床とした埋土5は、しまりがない埋土であり、他の建物跡の貼床面と比較して硬化が弱い埋土であった。しかしながら、炉跡が形成されていること、埋土5の上面から掘り込まれている柱穴が検出されていることから貼床であると考えた。埋土5を貼床として南側の張り出し部の手前の土層断面を見ると、土坑の様な掘り込みが確認できる。この部分には遺物が集中しており、張り出し部の手前に直径35cm程の土坑があった可能性が考えられる。また、北側や東側では、埋土5を盛ることにより、床面に5～10cm程度の段差を設けている様である。柱穴は遺構内から6基、遺構の周辺で18基検出されている。

出土遺物(第2-93図)

遺物は遺構の南側と南西側に多く出土しており、北側

や東側は散在している程度である。金床石や砥石など、鍛冶に関連すると考えられる石器が貼床面から出土しているのが特徴である。

土器(第2-94図)

241～243は、その出土状況から、堅穴建物跡18号に帰属する可能性が高い土器群である。

241は口縁部が外反する甕B類の口縁部から胴部上位の資料である。口径31.4cmを測る。遺構の南西部付近で、貼床面から出土している。外面口縁部上位は横方向の工具ナデが、下位は縦方向の工具ナデが施されている。縦方向の工具ナデの上からは部分的に斜め・横方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部上位には各方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上位から中位にかけては、横方向の工具ナデが施されている。口縁部下位から胴部上位にかけては、斜め・縦方向の工具ナデが施されている。

242は口縁部が外反する甕B類の口縁部から胴部上位の資料である。遺構の中心部で1点、張り出し部で2点の計3点の破片が接合している。張り出し部で出土した口縁部片1点は、貼床面よりも下位、貼床埋土中から出土しているが、残り2点は貼床面よりも10cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分とその下位の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。残存部下端には斜め方向の工具ナデが確認できる。内面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。

243は甕の脚部資料である。底径7.2cm、脚部高0.9cmを測る。遺構の南側、張り出し部の手前であったと考えられる土坑内から、まとまって出土している。外面は斜め方向の工具ナデが施されており、指押さえも行われている。内面底面付近と、脚部内面には横方向の工具ナデが施されており、脚部内面端部には指押さえが巡る。

244・245は、その出土状況から、堅穴建物跡18号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

244は口縁部がほぼ直行する甕D類の口縁部から胴部中程までの資料である。口径25.8cmを測る。焼土と北東角部の中間付近、南西部付近、南側土坑付近の3カ所に分かれて、検出面から出土している。外面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下位は横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横・斜め方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。この突帯貼り付け部分の器面に施される工具ナデの形状通りに突帯が貼り付けられているため、工具ナデが突帯を貼り付けるガイド的な役割を果たしていると考えられる。胴部上位には横方向の、その下位には単位幅が不明瞭な斜め方向の工具ナデが施されている。胴部

中位には縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部には横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯部分の内面には指押さえが密に並ぶ。胴部は斜め方向の指ナデが施されている。

245は甕の口縁部直下から胴部上半の資料である。西壁中央部付近で、遺構検出面から出土している。外面口縁部は横・斜め方向の工具ナデを施した後に、幅4～5mm程度の工具ナデを横・斜め方向に施している。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部には横・斜め方向の工具ナデを施している。内面には横方向の工具ナデおよび、指ナデが施されている。内外面ともに摩滅している。

石器(第2-94図)

石器は3点が出土している。3点ともに貼床面から出土していることから、堅穴建物跡18号に帰属する可能性が高いと考えられる。

石55は金床石である。南側土坑で貼床面と同じ高さから出土している。鍛造剥片の付着が見られる。

石56は砥石である。遺構の南西部、西壁に近い位置で、貼床面から出土している。

石57は棒状礫と考えられる石器である。遺構の南側で検出された土坑状の凹みの落ち際で、貼床面から出土している。

堅穴建物跡19号(第2-95・96図)

堅穴建物跡19号はCD33区Va層から検出した。遺構の南東角部を堅穴建物跡20号によって切られており、北東部分に中土坑、南東部分に古代土坑等があり攪乱を受けている。長軸(南北軸)約5.4m、短軸(東西軸)約4.6mの形状の整った長方形を呈する。長軸はほぼ南北方向を向き、堅穴建物跡20号と同じ方向を向いている。検出面から底面までの深さは約5cmと浅く、上位の大部分を削平されている。埋土2はアカホヤ火山灰土を主体とし、貼床を形成する埋土の特徴を持つことから、堅穴建物跡19号には貼床が形成されていた可能性が考えられる。炉跡・焼土跡・炭化物範囲・硬化面は確認されておらず、削平された可能性も考えられる。遺構に属すると考えられる柱穴は遺構内に12基検出されており、全て埋土は同じ暗褐色土を呈している。削平が著しく、貼床面が残存していなかったため、遺構内遺物の出土量は少なく、堅穴建物跡20号を含めて、取上げた遺物は4点のみであり、実測対象となるような遺物は無かった。

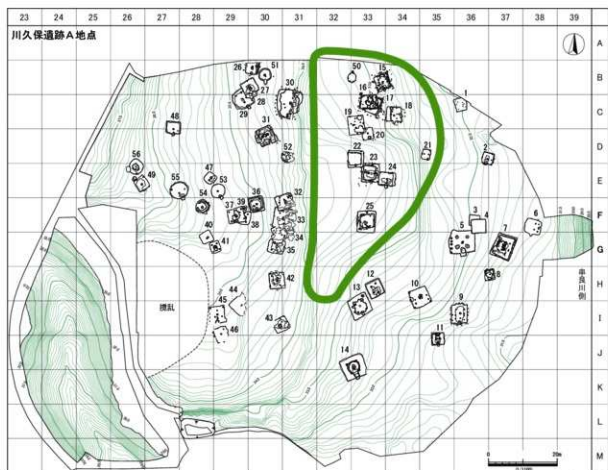
堅穴建物跡20号(第2-95・97図)

堅穴建物跡20号はD33区Va層で検出した。遺構の北西部で堅穴建物跡19号を切っているが、北西部は近世の土坑等の攪乱を受けている。また、北東角部もわずかではあるが、中世の土坑により切られている。長軸

(南北軸)3.4 m、短軸(東西軸)3.3 mのほぼ隅丸正方形を呈し、竪穴建物跡19号と同軸方向を向く。検出面から底面までの深さは、5 cm以下であり、竪穴建物跡19号と同じく遺構上部は著しい削平を受けている。南側に長軸0.9 m、短軸0.7 mの略楕円形状の土坑が検出されており、深さは約15cmである。貼床埋土と考えられる埋土2を切って掘られている。土坑の位置と埋土から竪穴建物跡20号に付属する土坑であると考えられる。遺構に属すると考えられる柱穴は遺構内に7基、遺構周囲に3基検出されており、埋土は全て同じ暗褐色土を呈している。竪穴建物跡19号と同じく遺構上面の削平が著しく、貼床面が残存していなかったため遺構内遺物の出土量は少なく、竪穴建物跡19号を含めて取上げた遺物は4点のみであり、実測対象となるような遺物は無かった。

竪穴建物跡21号(第2-98図)

竪穴建物跡21号はD35区南西部Va層から検出した。長軸(南北軸)約3.2 m、短軸(東西軸)2.6 mの隅丸長方形を呈し、南西角部は中世の古道跡により切られている。検出面から底面までの深さは20～25cm程度であり、東側が深くなる形状をしている。遺構の南東部角付近に焼土跡と、その周囲に炭化物範囲が確認されており、炉跡と考えられる。硬化面は確認されておらず、遺物量の少なから、貼床面よりも下位の貼床埋土部分を検出したと考えられる。そのため、焼土跡と炭化物範囲も堆積の薄さから、下位部分のみを検出したと考えられる。柱穴は遺構の中央部の東から西にかけて3基検出されている。3基ともに底面から検出されている。遺物は土器小片1点のみが取上げられている。

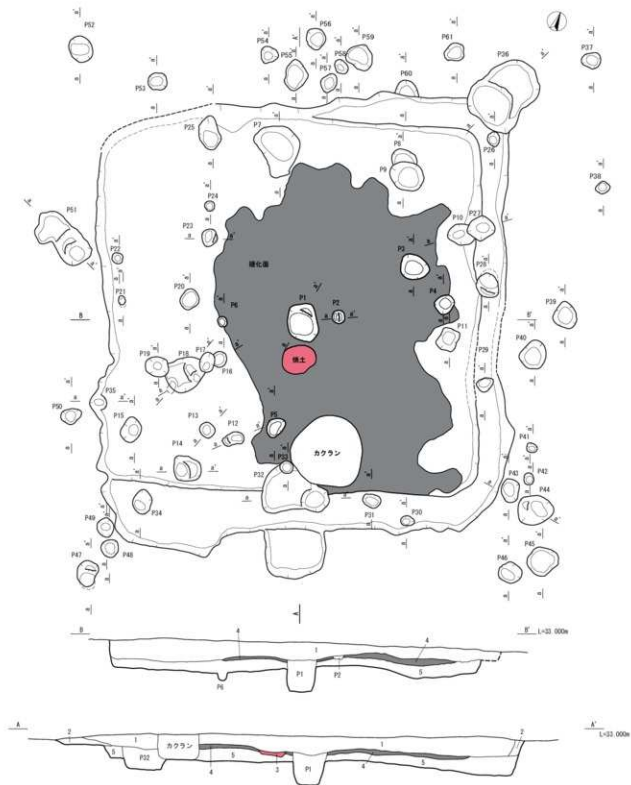


第2-76図 中央部及び中央北側の竪穴建物跡群

Va層コングラ

表2-31 川久保遺跡A地点古墳時代竪穴建物跡一覧2 中央部および中央北側検出竪穴建物跡群

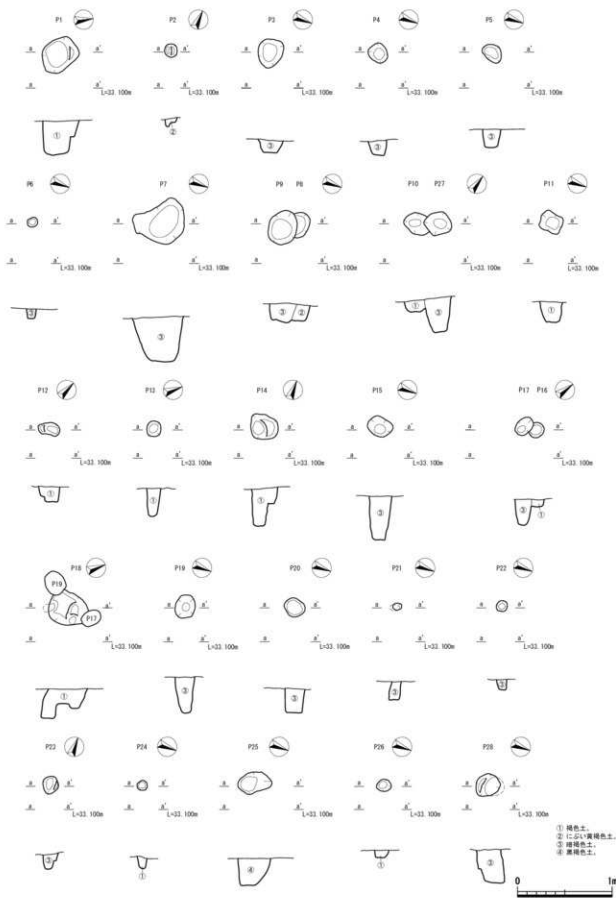
図 番号	遺構 番号	K	検出層	形状	大きさ (m)		長軸の 向き	貼床	9割 礎土	硬化面	張り 出し	調査時 遺構番号	備考
					長軸	短軸							
2-83	15	E33-34	Va	方形	4.6	4.3	北北西- 南南東	○	○	○	○	S826	
2-91	16	C33	Va	長方形	5.0	4.1	東-西	○	○	○	なし	S820	17号より新しい
2-91	17	C33	Va	方形	—	5.3	東南東- 西北西	○	△	△	なし	S831	16号より古い
2-98	18	C34	Va	方形	3.5	3.5	南-北	○	○	○	○	S832	
2-103	19	C033	Va	長方形	5.4	4.6	南-北	△	不明	不明	なし	S835	上面を敷しく削平
2-104	20	B33	Va	方形	3.4	3.3	南-北	△	不明	不明	なし	S834	上面を敷しく削平
2-105	21	B35	Va	長方形	3.2	2.6	南-北	△	○	不明	なし	S837	
2-106	22	B33	Va	方形	4.9	4.7	南-北	○	なし	なし	なし	S87	23号より新しい
2-111	23	E33	Va	方形	5.5	5.3	南-北	○	○	○	○	S81	22-24号より古い
2-121	24	E33-34	Va	長方形	5.3	4.1	東-西	○	○	なし	なし	S82	23号より新しい
2-126	25	F33	Va	長方形	6.4	5.5	南-北	○	○	○	○	S83	年代測定



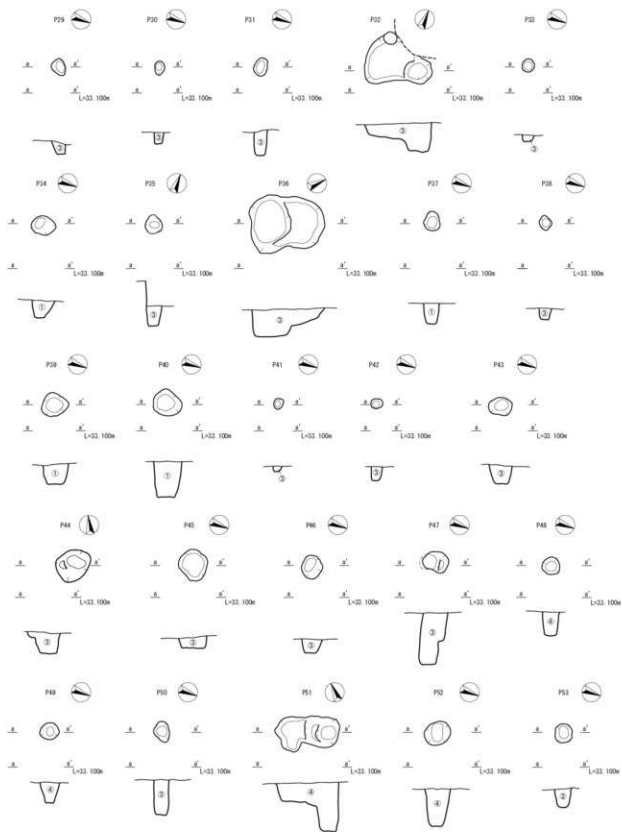
- 1 礎様色土、やや粘りあり、しまりなし。
- 2 黄緑色土、やや粘りあり、しまりなし。明黄褐色のアカホヤ火山灰土が混入。
- 3 棕色土、粘りなし、しまりなし。礎土。
- 4 黄緑色土、やや粘りあり、硬くしまっている。明黄褐色のアカホヤ火山灰土が混入。礎化層。
- 5 礎様色土、やや粘りあり、しまりなし。礎土より明黄褐色のアカホヤ火山灰土がより多く混入。

0 1m
(1/40)

第2-77図 竪穴建物跡15号



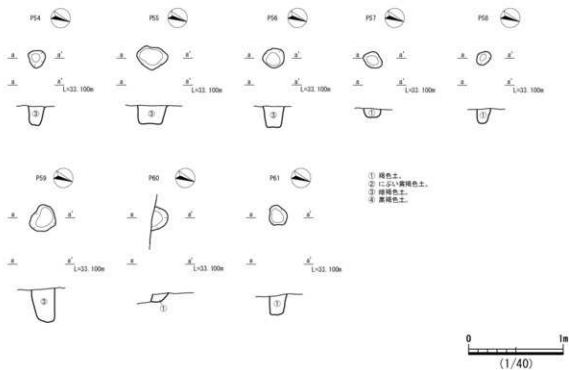
第2-78图 竖穴建物跡15号 柱穴①



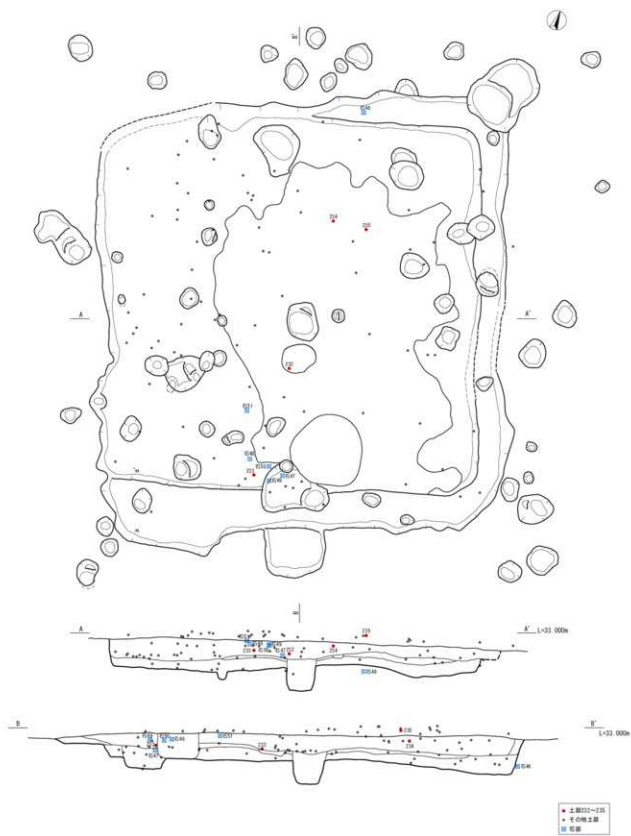
① 黄色土。
 ② 浅褐色土。
 ③ 黄色土。
 ④ 深褐色土。

第2-79图 竖穴建物跡15号 柱穴②

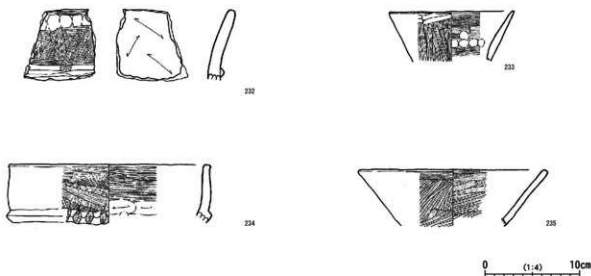
0 1m
 (1/40)



第2-80図 竖穴建物跡15号 柱穴③



第2-81図 竪穴建物跡15号 遺物出土状況



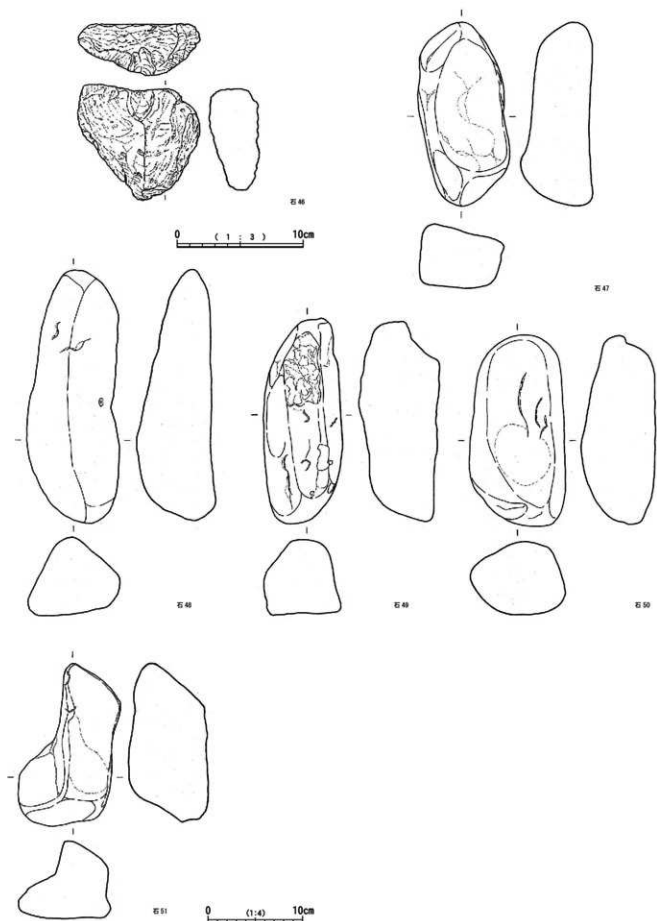
第2-82 図 竪穴建物跡15号出土遺物(土器)

表2-32 竪穴建物跡15号出土土器

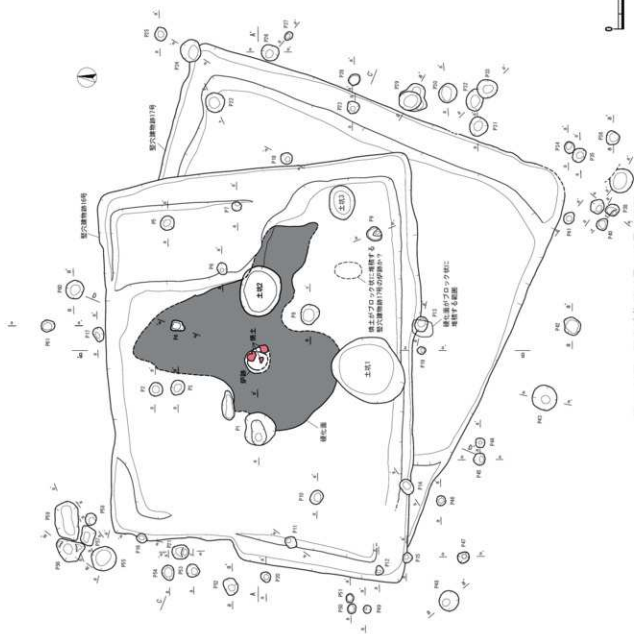
図 番号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 82	232	○	甕	口縁部	—	—	—	—	工具ナデ	指ナデ	外:橙 内:橙	石・白・小・ 注込	
	233	○	埴	口縁部	—	—	13.1	—	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙	白・黒・小・ 注込	
	234		甕	口縁部	C	—	20.8	—	工具ナデ	工具ナデ	外:浅黄橙 内:浅黄橙	石・白・小・ 注込	
	235		高坏	坏部	—	—	19.2	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい、橙 内:明黄橙	石・白・黒・ 小	

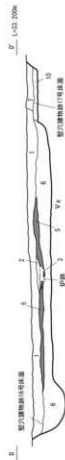
表2-33 竪穴建物跡15号出土石器

図 番号	遺物 番号	床 面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 83	石46	○	軽石製品	完形	9.1	9.6	4.1	50.0	軽石	
	石47	○	棒状磯	完形	19.5	9.1	7.3	1980.0	ホルンフェルス	
	石48		棒状磯	完形	26.6	9.75	8.2	2650.0	ホルンフェルス	
	石49		棒状磯	完形	21.2	8.3	8.3	2230.0	ホルンフェルス	
	石50		棒状磯	完形	20.2	10.2	7.7	2300.0	ホルンフェルス	
	石51		棒状磯	完形	16.8	9.8	8.3	1630.0	ホルンフェルス	



第2-83 圖 竪穴建物跡 15号出土遺物(石器)



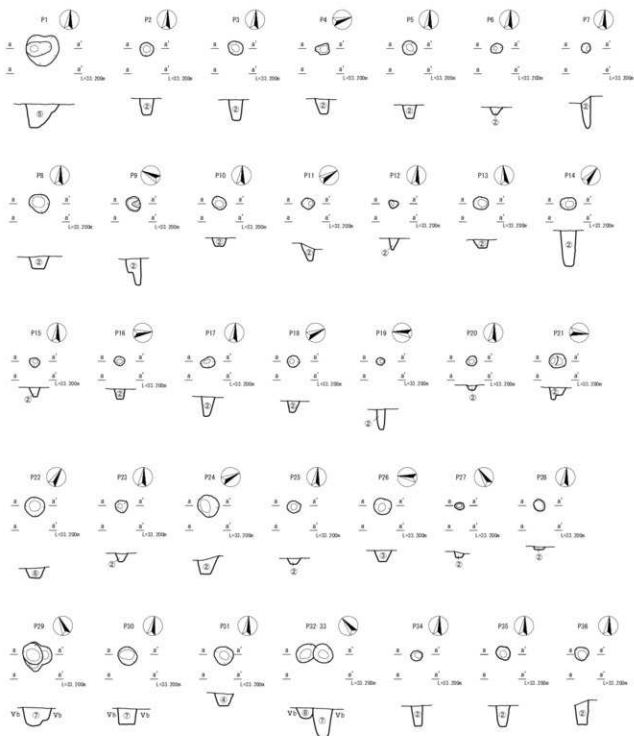


- 1 黒褐色土、硬質凝結のアカホヤ山成土をプロット部に少量含む。
- 2 黒褐色土、伊勢を中心として凝結している。
- 3 黒褐色土、粘土プロット。
- 4 黒褐色土、粘土質褐色のアカホヤ山成土をプロット部やや多く含む。硬軟面。
- 5 粘土質褐色土、硬質凝結のアカホヤ山成土をプロット部多く含む。
- 6 褐色土、黒褐色土のアカホヤ山成土をプロット部少量含む。
- 7 褐色土、硬質凝結土。
- 8 褐色土、硬質凝結土。
- 9 同褐色土、やや粘質あり。
- 10 同褐色土、やや粘質あり。



(1/50)

第2-85図 整穴建築物16号・17号 断面



① 反硝性土、やや粘性あり、しまりなし。黄褐色のアカネや火山灰土ブロックを少量含む。

② 緑褐色土、やや粘性あり、しまりなし。

③ 黄褐色土、やや粘性あり、しまりなし。

④ にごり黄褐色土、やや粘性あり、しまりなし。

⑤ 反硝性土、やや粘性あり、しまりなし。

⑥ 緑色土、やや粘性あり、しまりなし。

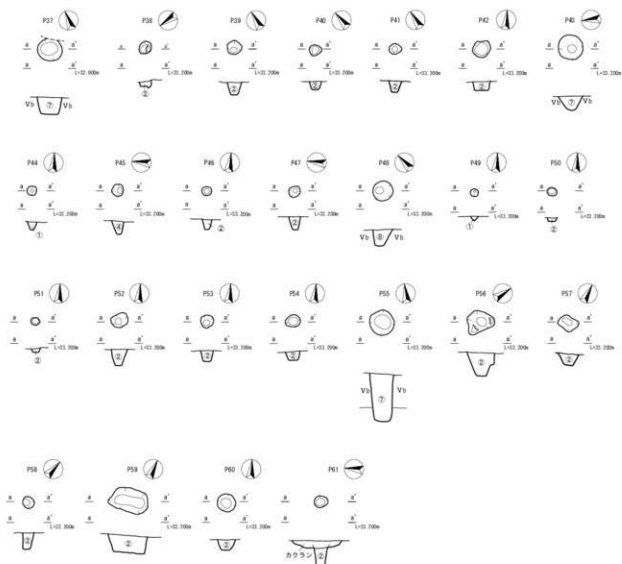
⑦ 黄褐色土、しまり弱い、粘性なし。

⑧ 黄褐色土。



(1/50)

第2-86図 竪穴建物跡16号・17号 柱穴①

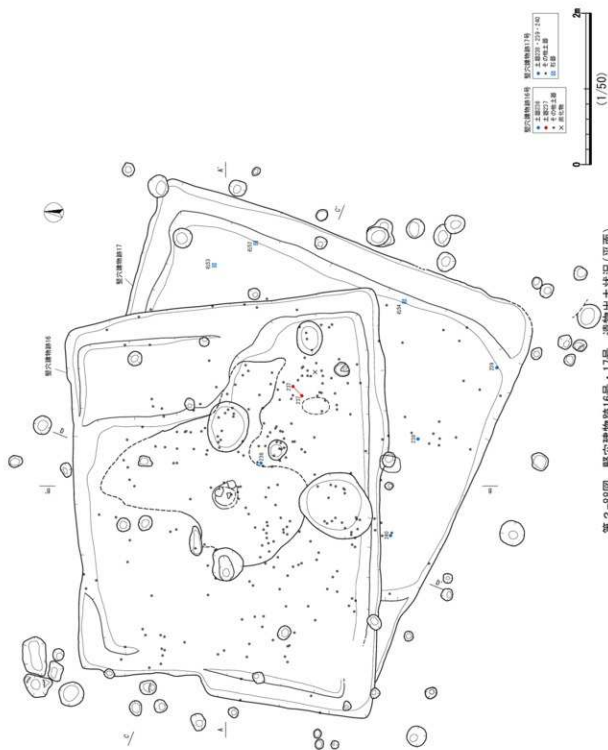


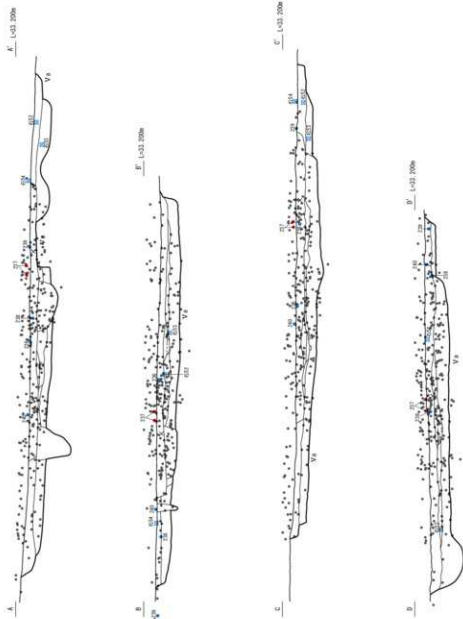
- ① 灰褐色土、やや粘性あり、しまりなし、明黄褐色のアカネヤ火山灰土ブロックを少量含む。
 ② 暗褐色土、やや粘性あり、しまりなし。
 ③ 黒褐色土、やや粘性あり、しまりなし。
 ④ 濃い黄褐色土、やや粘性あり、しまりなし。
 ⑤ 灰黄褐色土、やや粘性あり、しまりなし。
 ⑥ 褐色土、やや粘性あり、しまりなし。
 ⑦ 暗褐色土、しまり悪い、粘性なし。
 ⑧ 暗褐色土。



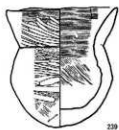
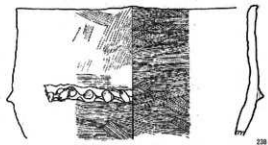
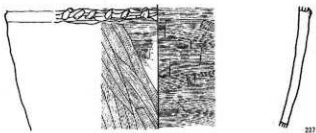
(1/50)

第2-87図 竪穴建物跡16号・17号 柱穴②

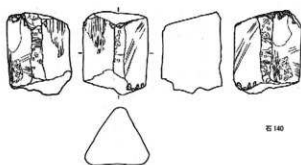
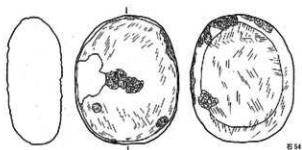
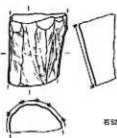
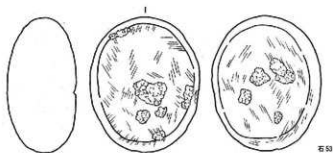




第 2-89 圖 竪穴建物跡 16 号・17 号 遺物出土狀況 (断面)



0 (1:4) 10cm



0 (1:3) 10cm

第2-90图 竖穴建物跡16号・17号 出土遺物(土器・石器)

表 2-34 竪穴建物跡16号出土土器

図 番号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 90	236		甕	口縁部-胴部	—	—	18.5	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:橙 内:橙	石・白・黒・ 小	
	237		甕	胴部	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:橙 内:にじい橙	石・白・小・ 黒	

表 2-35 竪穴建物跡17号出土土器

図 番号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 90	238		甕	口縁部-胴部	C	—	24.5	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:灰緑 内:橙	石・白・黒・ 小	
	239		甕	完形	—	9.3	8.8	—	工具ナゲ ミヤキ	工具ナゲ	外:橙 内:橙	石・黒・白	
	240		甕	胴部-底面	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:橙 内:橙	石・黒・白・ 黒	

表 2-36 竪穴建物跡17号出土土器

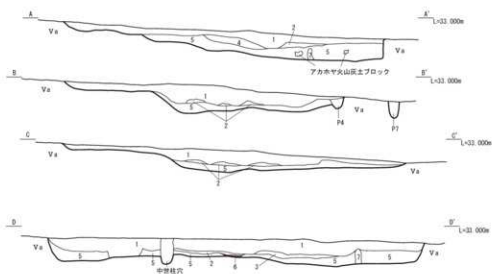
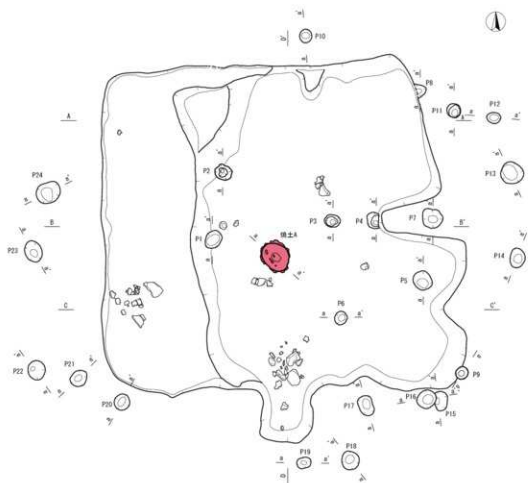
図 番号	遺物 番号	床 面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 90	石52		砥石	欠損	5.7	4.55	(2.8)	86.8	砂岩	
	石53	○	磨礬石	完形	10.65	8.6	5.5	632.0	凝灰岩	
	石54		磨礬石	完形	10.1	8.2	4.45	487.0	凝灰岩	
	石140		砥石	破損	(6.4)	5.2	4.8	—	砂岩	

表 2-37 竪穴建物跡18号出土土器

図 番号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 94	241	○	甕	口縁部-胴部	C	—	31.4	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:橙 内:橙	石・白・小・ 黒	
	242	○	甕	口縁部-胴部	B	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:にじい・赤陶 内:橙	石・黒・白・ 小	
	243	○	甕	胴部	—	—	—	7.2	工具ナゲ	工具ナゲ	外:橙 内:橙	石・黒・小・ 黒	断面高:0.9cm
	244		甕	口縁部-胴部	D	—	25.8	—	工具ナゲ	工具ナゲ 指ナゲ	外:灰黄緑 内:黄緑	石・小	
	245		甕	口縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ ナゲ	外:橙 内:橙	石・黒・白・ 小	

表 2-38 竪穴建物跡18号出土土器

図 番号	遺物 番号	床 面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 94	石55		金床石	破損	23.8	14.3	9.4	5300.0	砂岩	製造削片付着
	石56		砥石	完形	24.5	15.1	2.2	1350.0	砂岩	
	石57		棒状砥	破損	15.7	6.5	6.0	930.0	コンシフェルス	

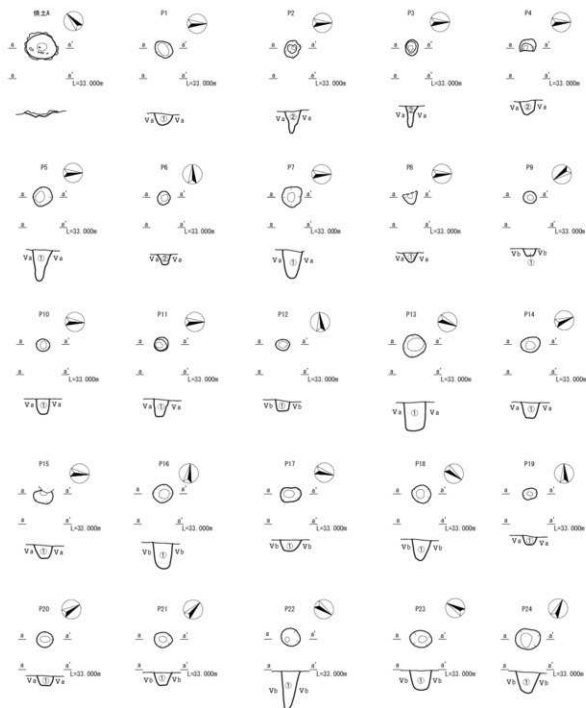


- 1 雑色土、表層下軽石を少量含む。
- 2 黒褐色土。
- 3 雑色土、軽石混。
- 4 雑褐色土、アカホヤ火山灰土ブロックを大量に含む。
- 5 雑褐色土、アカホヤ火山灰土ブロックを含む。
- 6 黄土。
- 7 暗褐色砂質土。



(1/50)

第2-91図 竪穴建物跡18号

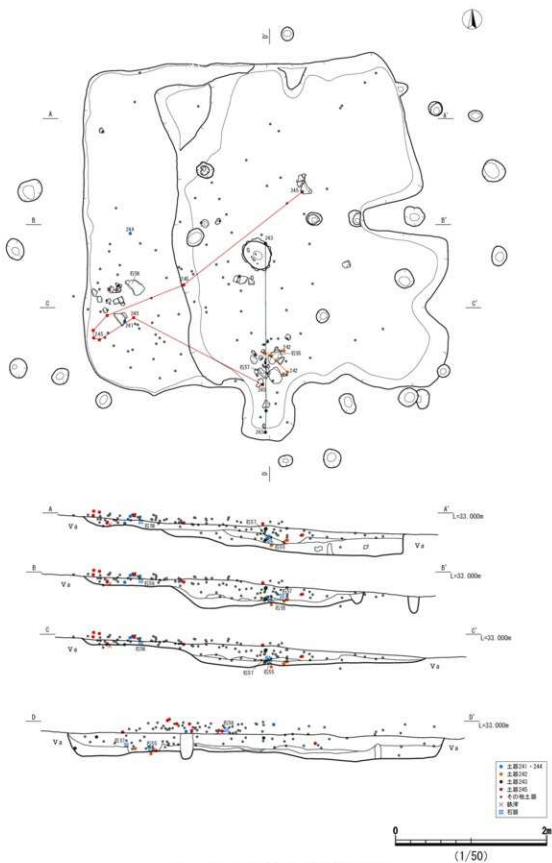


① 埋藏土。
② 褐色土。

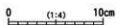
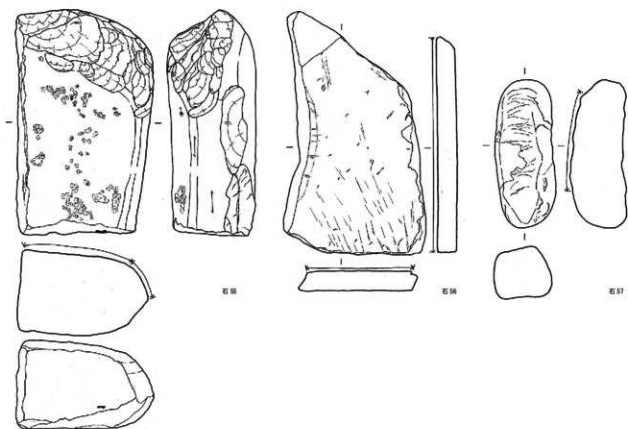
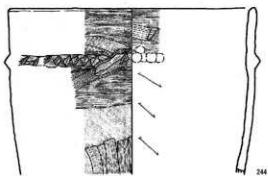
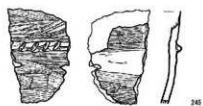
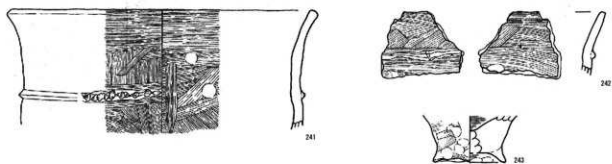


(1/50)

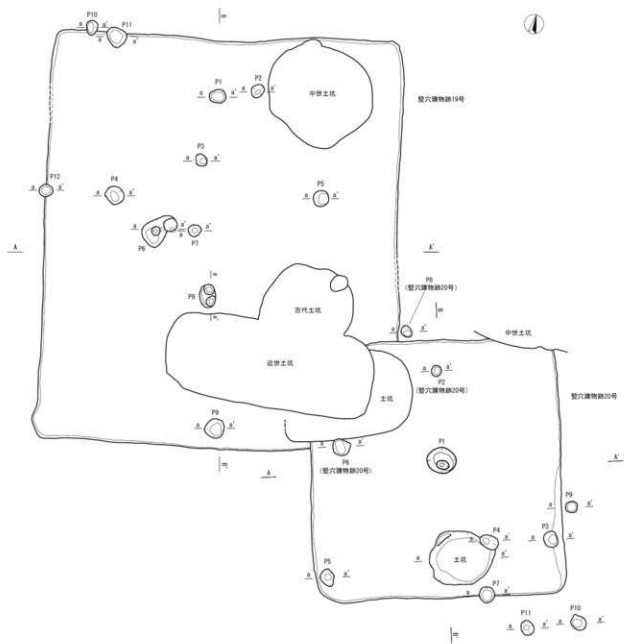
第2-92图 竖穴建物跡18号 焼土・柱穴



第 2-93 図 竪穴建物跡18号遺物出土状況



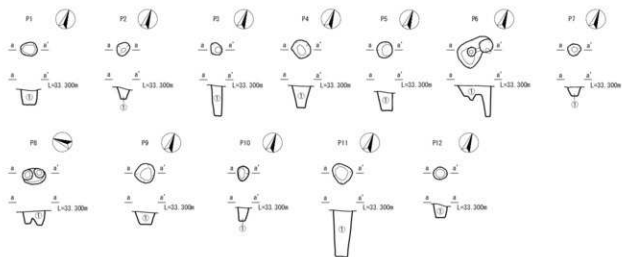
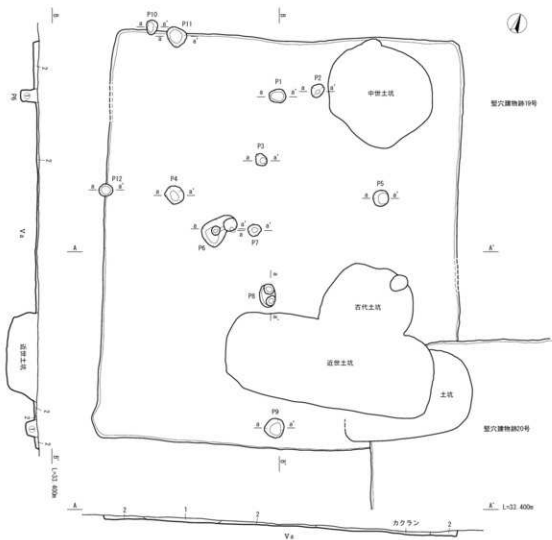
第2-94图 竖穴建物跡18号 出土遺物(土器・石器)



第 2-95 圖 竖穴建物跡 19 号・20 号

0 2m

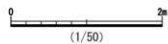
(1/50)

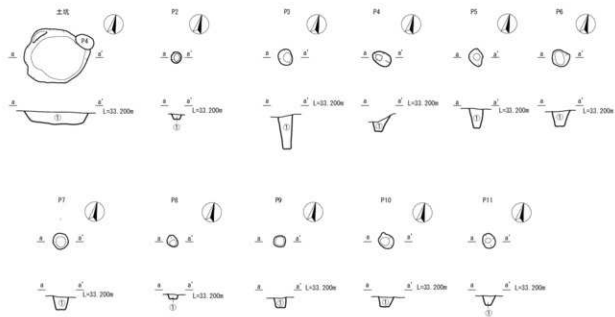
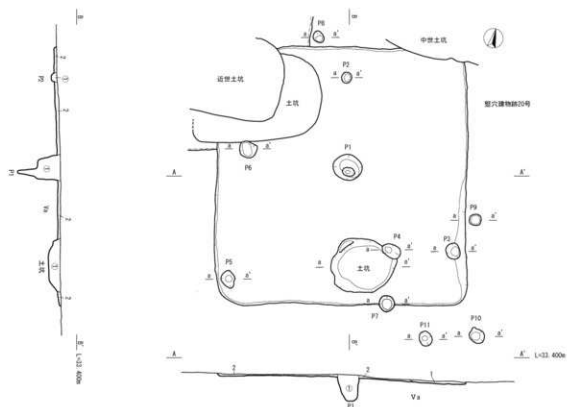


1 やや粘性のある黒褐色土。アカホヤ山灰土ブロックを少量含む。
 2 に近い黄褐色土。アカホヤ山灰土に黒褐色土が少量混ざる。

① 埴輪色土。

第2-96図 竪穴建物跡19号





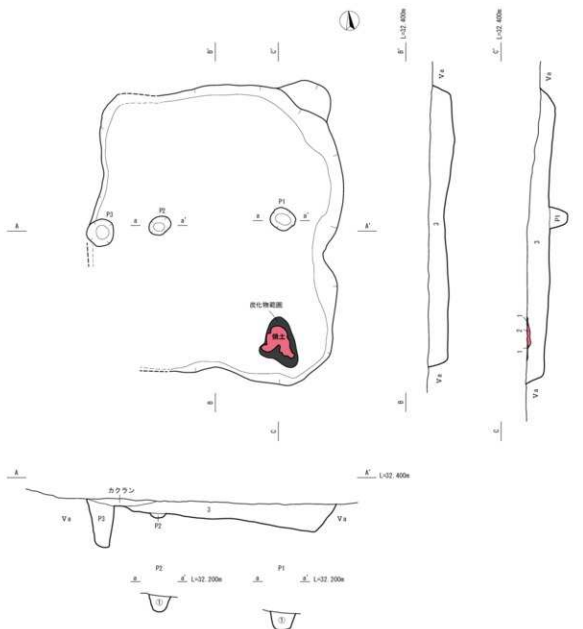
1 輪郭のある黒色土。アガヤや火山灰土でロウを多く含む。
 2 に近い黄褐色土。アガヤや火山灰土に黄褐色土が少量混ざる。

① 埋納色土。

第 2-97 図 竖穴建物跡 20 号



(1/50)



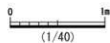
1 黄褐色土、炭化物多く含む。

2 緑色土、硬くしまる。焼土。

3 暗褐色土、やや粘質。底面鋪下礫石と1~5cm程度のアカホヤ火山灰土ブロックを多く含む。
下部はごく僅少砂質が強い。

① 褐色土、砂質。

第2-98図 竪穴建物跡21号



竪穴建物跡 22号(第2-99図)

竪穴建物跡 22号はD・E33区Va層から検出した。遺構の南東角部が竪穴建物跡 23号の北西角部を切った状態で検出されている。長軸(南北軸)約4.9m、短軸(東西軸)約4.7mの方形を呈する。切り合いながら検出された竪穴建物跡 22号～24号の3基の建物の軸は、全てほぼ南北(東西)を向いている。検出面から底面までの深さは約30cmである。底面から15～20cm程度の厚さで貼床が形成されている。壁沿いの部分は西側中央部付近を除き底面が一段高く造られている。一段高い底面の幅は北側で約50cm、東側で60～70cm程度、南側で約70cm、西側で約40cmである。検出面からの深さは約20cmであり、貼床面とほぼ同じ高さであり、この部分はそのまま床面となるが、貼床面と比較すると貼床面が若干盛り上がった形状をしている。炉跡・焼土跡・炭化物の範囲や硬化面は検出されていない。南側には床面と貼床面にまたがるように、直径約60cm、深さ約20cmの土坑が検出されている。埋土の上面は床面および、貼床面と同じ高さに掘えられており、竪穴建物使用時には土坑は埋まっていたと考えられる。

竪穴建物跡 22号の柱穴は貼床面に6基(P1～6)、貼床面と床面の境部分に7基(P7～13)、床面に7基(P14～20)、壁際に3基(P21～23)、遺構周辺に23基(P24～46)の計46基が検出されている。埋土はすべて同じ黒褐色土である。柱穴を最小径と深さで見ると、貼床の範囲内では径の小さな柱穴が多く、径のある程度大きな柱穴は床面(P16・19・20)、壁際(P21・23)、遺構周辺などで検出されている。遺構の中央部付近で検出されたP1・2に関しては、貼床の範囲内では特に深く掘込まれており、径は小さいが主柱穴に近い役割の柱穴であったと考えられる。北側の貼床面と床面の境付近には最小径や深さの類似した柱穴(P7～10・17)が並び、遺構の南側と比較すると、柱穴の数が多いことが分かる。また、遺構の東側では最小径が小さく、浅い掘り込みの柱穴が集中して検出されており(P5・6・12・13・18)、上屋を支える柱ではなく、遺構内構造物があった可能性も考えられる。遺構周辺の柱穴は上面が削平されているため、単純に遺構内の柱穴と比較することはできないが、全方位で壁面とほぼ平行に柱穴が並んで検出されている。

竪穴建物跡 22号の遺構埋土の堆積状況を見ると、西側からの土の流入が確認できる。東壁沿いの一部には、遺構廃絶後に溝状に掘込まれたような痕跡も確認できる。

出土遺物(第2-100図)

遺物は遺構全体から散在して出土しており、その量は少ない。また、復元できる個体や、大型の破片の出土も少ない。遺構の南東部や西側で少量ではあるが貼床面か

ら鉄片が出土しているが、輪の羽口等の出土は見られない。なお、竪穴建物跡 22号～24号に関しては、鍛冶関連建物跡と考えられる竪穴建物跡 7号・8号の調査より先行して調査を行っているため、貼床面等での埋土採取は行っていない。

土器(第2-101図)

246～253は、その出土状況から、竪穴建物跡 22号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

246は口縁部から胴部上位の資料である。遺構の北東部で、貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナゲが、口縁部には斜め方向の工具ナゲが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部には車幅が不明瞭な横方向の工具ナゲを施している。

247は口縁部が外傾する甕B類の口縁部資料である。口縁部を肥厚させている。遺構の東側および北東部で、貼床面から出土している。外面口縁部上位から中位にかけては縦方向の工具ナゲが、口縁部下位には横方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部上半は斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナゲが施されている。内面口縁部中位以下には、口縁部を肥厚させるため粘土が貼り付けられており、痕跡が線状に残り、その部分には指押さえが列状に並ぶ。また、粘土貼り付け部分には縦方向の工具ナゲが施されている。

248は口縁部資料である。遺構の東壁中央部付近で、床面から出土している。外面口縁部上位には横方向の工具ナゲが、中位には斜め方向の指ナゲが、下位には横方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナゲが、下半は横方向の指ナゲが施され、突帯内面部分と、その上位には指押さえが並ぶ。

249は口縁部資料である。遺構の東側で、床面から出土している。内外面ともに工具ナゲが施されている。

250は甕もしくは壺の底部資料である。底径5.6cmを測る。貼床面(床面)一括取上げ資料である。内外面ともに摩滅が著しいが、外面底部には斜め方向の工具ナゲが施されている。

251は壺の口縁部資料である。遺構の北東角部付近で、床面から出土している。内外面ともに横・斜め方向の工具ナゲが施されている。

252は高杯の坏部資料である。口径20.3cmを測る。遺構の中央部と東壁の中間付近で、貼床面から出土している。外面は横方向の工具ナゲを施した後に、斜め・横方向のミガキを施している。内面は横・斜め方向の工具ナゲが施されている。

253は完形に復元できた埴である。底部は平ら面を持つ。口径11.2cm、底径5.0cm、器高12.5cmを測る。外面口縁部上位は横方向の工具ナゲ、口縁部中位は縦・斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナゲ、口縁部下位から胴部

上端を含めた頸部には、横方向の工具ナデがそれぞれ施されている。胴部上位は斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデ、胴部中程は横方向の単位不明瞭な工具ナデが施されている。胴部下位から底部にかけては横・斜め方向のミガキが施されている。内面口縁部上位は横方向の工具ナデ、口縁部中程から下位にかけては、斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。胴部には斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。底部には指押さえが行われている。

254～256は、その出土状況から、竪穴建物跡22号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

254は甕の脚部資料である。端部は欠損している。遺構北側中央部で、検出面から出土している。外面は縦方向の工具ナデが施されており、胴部下端ではその上から幅2～3mm程度の縦・斜め方向の工具ナデが施されている。内面胴部下端には縦方向の工具ナデが、脚部内面には横方向の工具ナデが施されている。

255は高坏の脚部資料である。検出面一括取上げ資料である。外面は摩滅が著しく器面調整はほとんど確認できない。内面は縦方向の工具ナデが施されている。

256は高坏の脚部資料である。端部は欠損している。埋土中一括取上げ資料である。外面はミガキが、内面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。

石器(第2-102図)

石58は軽石製品である。遺構の北西角部付近で、床面から出土している。最大長20.9cm、最大幅16.2cmを測る。直径約8mmの穿孔が1箇所あり、貫通している。その他にも複数の未貫通の穿孔や、溝および平坦面が確認できる。加工は行われているが、用途は不明である。

石59は礫である。遺構の南東部で、床面より約10cm浮いた状態で出土している。表面に痕痕が確認できる。

炭化物・炭化木・炭化種子(第3分冊 自然科学分析参照)

竪穴建物跡22号では21点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から竪穴建物跡22号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し検討を行い、2点の炭化物について放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した(22号炭1, 22号炭2)。分析の結果、2σ暦年代範囲を見ると332calAD-418calAD(94.9%)と、335calAD-416calAD(94.9%)となり、4世紀中頃～5世紀前半の値を示している。また、炭2については、樹種同定も行っており、ツバキ属と同定されている。

竪穴建物跡22号からは炭化種子も出土しており、種実同定を行ったが結果は得られなかった。

竪穴建物跡23号(第2-103図)

竪穴建物跡23号はE33区Va層から検出した。北西角部を竪穴建物跡22号に、東壁付近の南側半分を竪穴建

物跡24号に切られており、この3基の竪穴建物跡のなかでは最も時期が古いと考えられる建物跡である。長軸(南北軸)5.5m、短軸(東西軸)5.3mとほぼ正方形を呈する。検出面から底面までの深さは約30cmであり、壁際には全周に一段高い底面が造られており、この部分では検出面からの深さは約10cmとなる。この一段高い底面の壁からの幅は、西側が30～50cm程度、南北が50～70cm程度、東側が約1mと西側が狭く、東側が広くなっている。本遺跡では一段高い底面を設けるほとんどの建物で、貼床面と一段高い底面を同じ高さに揃え、全体的に水平に近い一体化した床面を形成している。しかしながら、竪穴建物跡23号では、炉跡や硬化面を伴う貼床面が一段高い底面より上位に造られており、一段高い底面＝床面とはならない。遺物の出土状況を見ても、炉跡や硬化面を伴う貼床面よりも下位には、ほとんど遺物が出土しておらず、貼床面を検出したと考えられる。

竪穴建物跡23号の遺構の中心部には長軸(南北軸)約60cm、短軸(東西軸)約45cmの楕円形の坑土が検出されており、炉跡と考えられる。炉跡の周囲には、長軸(東西軸)約2.3m、短軸(南北軸)約2.0mの歪な長方形に硬化面が検出されている。遺構外の南側には幅約80cm、奥行約50cmで張り出し状のシミが検出されている。貼床面以上は削平されているため、このシミ状の痕跡は、張り出し部の底面であった可能性が考えられる。柱穴は全て検出面および検出面と同等の高さの遺構周辺で検出されており、炉跡の東西両側にやや大きめの柱穴が1基ずつ(P1・P2)、硬化面西側の境目に1基(P3)、貼床面に17基(P4～P20)、壁際に5基(P21～P25)、遺構外に5基(P26～P30)の計30基が検出されている。P7～P10は貼床面で検出されているが、柱穴が掘られている場所はどれも底面と一段高い底面との境目付近であり、貼床を構築する以前に柱を設置していた可能性も考えられる。P1・P2はその位置・径・深さから主柱穴と考えられるが、その周囲にも深さ約35cmの柱穴(P3・P4・P9)が直線上に並んでいる。また、北壁中央部付近には浅い柱穴(P13～P16)が集中して検出されている。

出土遺物(第2-104～107図)

遺物は全て検出面＝貼床面で出土している。遺構内で出土した遺物の9割近くが、炉跡の南側で出土している。

土器(第2-108～110図)

257～287はすべて検出面＝貼床面で出土した土器である。

257は口縁部が外傾する甕C類の口縁部から胴部中程までの資料である。口径34.0cmを測る。貼床面一括取上げ資料である。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部には縦・斜め方向の工具ナデを施した後に、斜め方向のミガキを施している。突帯貼り付け部分の器面に

は横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。突帯の下位、もしくは上位の一部には沈線が施されており、この沈線に沿うように突帯が貼り付けられていることから、この沈線には突帯を貼り付ける目的な役割があったと考えられる。なお、垂れ下がる突帯の端部は欠損しているが、沈線の位置から本来の突帯の範囲が想定できる。胴部には縦・斜め方向の工具ナデを施した後、縦方向のミガキが施されている。ミガキの一部は突帯下位で折り返し、下方向に向かうものも見られる。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが施されている。この工具ナデは部分的にはハケ目のようにも見え、指押さえも行われている。口縁部上端の一部には、粘土を貼り付けている箇所も確認できる。口縁部下半から胴部にかけては、斜め方向の工具ナデが施されている。胴部ではこの斜め方向の工具ナデの上から、縦方向のミガキが施されている。外面胴部のミガキと同じ工具で施されていると考えられるが、外面のミガキがある程度同じ方向に施されているのに対し、内面のミガキは特徴的な施され方をしている。

258 は完形に復元できた甕であり、口縁部が内湾する甕D類である。口径30.0cm、底径8.6cm、器高33.9cm、脚部高2.9cmを測る。炉跡の南南東側で集中して、貼床面から出土している。外面口縁部は横方向の指ナデが施されており、口縁部下位では部分的に横方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は横・斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、縦・斜め方向のミガキを施している。胴部と脚部の境目には横方向のミガキが施されている。脚部には横方向の工具ナデが施されている。口縁部上端と突帯下位には指押さえが並ぶ。内面口縁部上位には横方向の工具ナデが施されている。口縁部中位から下位にかけては、斜め方向の工具ナデが施されている。胴部には横・縦方向の指ナデが施されており、部分的には工具ナデも施されている。脚部内面には横方向の工具ナデが施されている。口縁部上位、底面付近、脚部上位には指押さえが巡る。

258 の胴部には少量であるが炭が付着しており、この付着炭化物の放射性炭素年代測定（AMS測定）をおこなったところ（第3分冊自然科学分析参照）、2σ 暦年校正年代の2つの結果の範囲で255calAD-391calADとなった。おおよそ3世紀中頃～4世紀末の範囲である。

259 は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部中位までの資料である。口径31.0cmを測る。炉跡の北側および、遺構の北西角部付近で貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部には横方向の工具ナデを施した後に、斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。一部の工具ナデ

は斜め方向にも施されており、この調整の向きは、垂れ下がる突帯の向きと平行である。胴部には横方向の工具ナデを施した後、特徴的なスジ状の痕跡を持つ斜め方向の工具ナデを施している。内面口縁部上端には横方向の工具ナデが、口縁部には横方向の工具ナデを施した後、斜め方向の工具ナデが施されている。胴部には縦方向の工具ナデが施されている。

260 は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部上位の資料である。口径40.4cmを測る。炉跡の南側や遺構の南東部の南壁付近で、貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部には斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には段差が設けられており、一段下がった部分に突帯が貼り付けられている。突帯に施されている布目痕は上面・平坦面・下面で布目の方向が異なり、この幅が工具の幅と考えられ、平坦面の幅でみると約8mmである。胴部上位には、縦・斜め方向の工具ナデが施されている。口唇部は横方向の工具ナデが施されている。口縁部には横・斜め方向の工具ナデが施されており、この工具ナデは口縁部の工具ナデよりも、より丁寧に施されている。

261 は甕の胴部中位から脚部の資料である。底径10.4cm、脚部高2.2cmを測る。炉跡の南側、遺構内張り出し部分、南壁付近、東壁付近と遺構内に広く散在して、貼床面から出土している。外面胴部は斜め方向の工具ナデが施されている。工具ナデは脚部との境目では横方向に施される。胴部中位には部分的に、横・斜め方向のミガキが施されている。脚部は横方向の工具ナデが施されている。ごくわずかに斜め方向の工具ナデも確認できる。また指押さえも行われている。内面胴部から底部にかけては、横・斜め方向の工具ナデが施されている。

262 は甕の胴部下位の資料である。下部は脚部接合面が外れた形で欠損している。炉跡と南西角部の中間付近に集中して、貼床面から出土している。外面胴部は縦方向のミガキと、斜め・横方向の工具ナデが施されている。内面は縦方向のミガキが施されている。

263 は完形に復元できた丸底甕である。口縁部は外傾し、底部はやや平底気味の形状を呈する。口径20.0cm、器高30.0cmを測る。炉跡の南側に集中して、貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部には縦方向の工具ナデが施されており、工具ナデは頸部に工具を打ち込んだ後、口縁部方向に施されている。胴部上位は縦・横方向の工具ナデが、胴部中位は横・斜め方向の工具ナデが施されている。下位に行くほど工具の幅が狭くなり、調整の密度にも違いが見られる。胴部下位には縦方向のミガキが施されている。底部は摩滅が著しく調整は不明瞭である。内面口縁部上半には単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデが施され

ている。口縁部下半から胴部下位にかけては、横方向の工具ナデが施されている。底面には指押さえが巡る。

264は外形に復元できた丸底甕である。口縁部は外傾する。口径17.2cm、器高23.9cmを測る。炉跡の南側に集中して、貼床面から出土している。外面口縁部上位は横方向の工具ナデが、口縁部は斜め方向の工具ナデを施した後、部分的に縦方向の工具ナデを施している。胴部から底部にかけては幅7mm程度の縦・斜め方向のミガキが施されている。内面口縁部上位は横方向の工具ナデが施されており、工具のスジ状の痕跡がはっきりと残る。口縁部中位は横方向の工具ナデが施されている。上下に施される工具痕と違い、工具痕の痕跡が弱く、単位幅は不明瞭である。口縁部下位から胴部上端にかけては、口縁部上位と同様な横方向の工具ナデが施されており、工具のスジ状の痕跡が明瞭に残る。胴部から底部にかけては横方向の工具ナデを施した後に、縦方向のミガキが施されている。外面のミガキよりも幅の狭い工具が使用されており、ミガキの幅は4mm程度である。

265は丸底甕と考えられる口縁部から胴部中位までの資料である。口縁部はわずかに外傾する。口径18.9cmを測る。焼土の南側や遺構の西側で、貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向のハケ目の後に、横方向のミガキを施している。口縁部は縦方向の工具ナデを施した後に、縦方向の指ナデと考えられる調整を施している。口縁部と胴部の境目には横方向の工具ナデを施し、胴部には縦方向のミガキと、縦方向の丁寧な工具ナデを施している。胴部の調整は同じ工具を用いていると考えられるが、光沢に差が出ている。また、器面は平滑であるが、調整痕の観察は難しい。内面口縁部上位は横方向のハケ目だが、口縁部中位は横方向の指ナデが、口縁部下位から胴部上端にかけては、横方向の工具ナデが施されている。口縁部と胴部の境目には、部分的に粘土が貼り付けられ、指ナデが施されており、指押さえも行われている。胴部中位は指ナデが施されている。

266は甕もしくは壺の口縁部資料である。口縁部は外傾し、突帯は施されない。炉跡の南側で貼床面から出土している。

内外面ともに横・斜め方向の工具ナデが施されている。

267は壺の口縁部から胴部下位の資料である。口縁部はわずかに外傾する。口径9.8cmを測る。炉跡の南側に集中して、貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部は斜め方向の工具ナデを施した後、部分的に斜め方向のミガキを施している。ミガキは口縁部下端では横方向に施される。胴部には幅3～4mm程度の縦方向のミガキが施される。内面口縁部は横・斜め方向の工具ナデが、胴部上位には斜め方向の工具ナデが施され、胴部中程から下位には横方向のミガキが施されている。

268は壺の口縁部から胴部上位までの資料である。口縁部は外傾する。口径13.6cmを測る。炉跡の南側の貼床面および、柱穴P5の上面から出土している。外面口縁部上端は斜め・横方向の工具ナデが、口縁部には斜め方向の工具ナデの後に、幅6mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。胴部には各方向の工具ナデが入り乱れるように施されており、複数の工具を使用したと考えられ、幅の異なる調整痕が確認できる。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半は横方向の工具ナデを施した後、斜め方向の工具ナデが施されている。内面胴部は外面と同様に、各方向の工具ナデが施されている。胴部上位には接合痕が確認できる。

269は壺の口縁部下端から胴部中位までの資料である。残存部で見え限り、口縁部は直行気味に立ち上がる。270と同一個体と考えられる。炉跡の南側に集中して貼床面から出土している。外面口縁部下端は縦方向の工具ナデが施されている。胴部上端には横・斜め方向の幅3mm程度の工具ナデが施されている。胴部には縦方向のミガキが施されている。工具の幅は胴部上端と同様の幅である。内面口縁部下端から胴部上端にかけては、斜め方向の単位幅が不明瞭なナデが施されている。胴部上端には絞り痕と考えられる痕跡が巡る。胴部上位には横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部中程には、単位不明瞭な横方向のナデの後に、横・斜め方向のミガキに類似する工具ナデが施され、その下位には横・斜め方向の光沢感のあるミガキが施されている。ミガキに類似する工具ナデは下位のミガキとの対比で工具ナデとしたが、光沢感がないだけで非常にミガキに近い調整である。

270は壺の胴部下半から底部の資料である。269と同一個体と考えられる。269と同じ炉跡の南側に集中して、貼床面から出土している。外面は縦方向の工具ナデが施されているが、一部はミガキのようにも見え、内面胴部下半には横方向の工具ナデの後に、横方向のミガキが施されている。下地の工具ナデの上から薄く粘土を貼り付け、その上にミガキを施している箇所も見られる。また、丁寧な工具ナデを施している箇所も見られ、その部分には光沢がない。胴部下端から底部にかけては横方向の工具ナデが施されている。

271は丸底甕もしくは壺の胴部中位から底部の資料である。底部は平底気味である。炉跡の南側に集中して、上位貼床面から出土している。外面は胴部中位から底部まで、縦方向のミガキを施した後、密ではないが全面に縦方向の工具ナデを施している。工具ナデが施されている部分は、ミガキの光沢が消失している。内面胴部中位は幅7mm程度の横・斜め・縦方向の工具ナデが施されている。工具ナデは単位幅内のスジ状の痕跡の太さや凹凸に差違が見られる。胴部下位には幅4mm以下の斜め・縦・

横方向の工具ナデが施されている。底部には各方向のミガキが不規則に施されている。

272は丸底甕もしくは壺の胴部中位から底部の資料である。胴部中程の割れ口は粘土帯の端部で破損しており、擬口縁を呈している。炉跡の南側および、遺構内張り出し部手前で貼床面から出土している。外面胴部中位は横・斜め方向の工具ナデが、胴部下位から底部にかけては、横・斜め方向のミガキが施されている。内面胴部中位は幅1cm程度の横方向の工具ナデが施されている。胴部下位は幅5mm程度の斜め方向の工具ナデが施されている。底部は胴部下位と同様の工具で、横・斜め方向の工具ナデが施されている。

273は丸底甕もしくは壺の胴部下半から底部の資料である。平底を呈し、器壁が非常に厚い。内外面ともに非常に丁寧に調整を施している。遺構の西側で貼床面から出土している。外面胴部中位は横・斜め方向のミガキを施した後に、縦方向のミガキを施している。胴部下位から底部にかけても縦方向のミガキが施されているが、胴部と底部の境目付近では、その上から横方向のミガキが施されている。内面は各方向のミガキが施されている。外面のように最終的にミガキの方向を揃えるような事はしていない。

274は丸底甕もしくは壺の胴部下位から底部の資料である。炉跡の南側、遺構の北側および北壁付近、遺構の東壁付近および南東部に広く散在して貼床面から出土している。一部は東壁中央付近の一段高い底面部分から出土しているが、この部分は堅穴建物跡24号により切られている部分と重なるため、沈み込んだ可能性が考えられる。外面には縦方向の工具ナデおよび、一部に縦方向のミガキが施されている。内面は摩滅および、器面の剥落が著しく器面調整の詳細は不明である。

275は丸底甕もしくは壺の胴部下半から底部の資料である。炉跡の南側、遺構の南西部、遺構の南東部に散在して貼床面から出土している。外面は胴部下半から底部まで、横方向の工具ナデを施した後、幅5mm程度の縦方向のミガキを施している。内面は底面を除き、幅5mm程度の縦方向のミガキが施されている。底面の調整は不明瞭である。

276は壺の底部資料である。貼床面一括取上げ資料である。外面は斜め方向のミガキが施されている。内面もミガキが施されているが、外面のミガキよりもやや粗く施されており、スジ状の工具痕が残る部分も見られる。内面は器面の剥落が激しい。

277は小型の鉢である。底部の一部欠損しているが、ほぼ形状を復元できた資料である。口径9.2cmを測る。遺構の南東部で貼床面から出土している。外面は縦・斜め方向の工具ナデが施されている。内面胴部は横方向の工具ナデを施した後に、縦方向の工具ナデを施してい

る。内面口縁部には粘土を貼り付け、指押さえにより伸ばした痕跡が残る。

278は鉢である。こちらも底部が一部欠損しているが、ほぼ形状を復元できた資料である。口径8.1cmを測る。炉跡の南西側に集中して、貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部から胴部下位までは、縦方向の工具ナデが施されているが、部分的には粘土が貼り付けられ、粘土が貼り付けられた部分にはナデおよび、横方向の工具ナデが施されている。底部には横・斜め方向の工具ナデが施されている。口唇部には横方向の工具ナデが施されている。口縁部から胴部中位までは、斜め方向の工具ナデが、胴部下位には横方向の工具ナデが施されている。

279は鉢の口縁部から胴部上半と考えられる資料である。口径9.9cmを測る。炉跡の南側で貼床面から出土している。外面は指ナデが施されており、指押さえが多く行われている。内面は斜め・横方向の工具ナデが施されている。

280は高杯の坏部資料である。口縁端部は欠損している。炉跡内および、その周辺、さらには炉跡と遺構の南東角部との中間付近で貼床面から出土している。外面は斜め・横方向のミガキが施されている。内面は横・斜め方向のミガキと、斜め・横方向の工具ナデが施されている。

281・282・283は高杯の脚部資料である。全て貼床面一括取上げ資料である。281と283は同一個体の可能性がある。

281の外面はミガキが施されている。内面脚柱部は縦方向のケズリを行った後に、斜め方向の工具ナデを施しており、ケズリの工具痕が残る。内面脚根部は斜め方向の工具ナデが施されている。

282の外面脚柱部上端と下端には、横方向の工具ナデが施されている。脚柱部および脚根部には縦方向のミガキが施されている。内面坏部底面はナデが施されている。脚柱部内面上半は縦方向の工具ナデが、下半はナデが施されている。

283の外面坏部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。外面脚部は縦方向のミガキが施されている。内面坏部はナデが施されている。脚部内面は斜め方向の工具ナデを施した後に、間隔を空けて縦方向の工具ナデが施されている。

284は完形に復元できた埴である。口径5.4cm、器高6.5cmを測る。底部の器壁が厚いのが特徴である。遺構の東壁中央付近、柱穴P10の南側に隣接して貼床面から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデが、胴部は各方向のミガキが施されている。完形品であるため内面調整の詳細は不明であるが、確認可能な範囲では指ナデが施されている。内外面ともに粘土の接合痕跡が顕

著である。

285は胴部の長い埴である。口縁端部が欠損している。遺構の西壁付近で貼床面から出土している。外面胴部上位から中位にかけては、縦方向のミガキが施されている。胴部下位から底面付近にかけては横方向の工具ナデが施されている。底部はミガキが施されている。内面は横方向の指ナデが施されている。

286は埴の胴部から底面にかけての資料である。遺構の北西部で貼床面から出土している。外面胴部は縦・横方向のミガキが、底部は斜め方向のミガキが施されている。内面は縦方向の工具ナデが施されており、胴部と底部の接合面付近には指押さえが巡る。

287は埴の胴部から底面にかけての資料である。貼床面一括取上げ資料である。外面胴部は斜め方向のナデが施されている。底部は横・斜め方向の工具ナデやナデが施された後に、部分的に斜め方向のミガキが施されている。内面はナデが施されており、胴部中位には爪痕が残る。

石器(第2-111図)

石60は金床石である。最大長15.8cm、最大幅15.2cm、最大厚9.5cmを測り、重量は3.9kgを量る。表面には敲打痕とともに鍛造剥片の付着が見られ、金床石として使用された可能性が高い。被熱して赤化しており、一部には煤の付着も確認できる。また、擦痕も確認できる。遺構の北側、柱穴P8の南側で貼床面から出土している。

石61は礫石器である。炉跡の南西側で貼床面から出土している。

石62は礫石である。遺構の南西部で貼床面から出土している。

石63・64は棒状礫である。石63は大きく欠損している。石63は柱穴P8の上面で、石64は南壁中央部付近の貼床面から出土している。

鉄滓(第2-111図)

堅穴建物跡23号からは3点、総重量82.6gの鉄滓が出土しており、そのうち2点を図化している。

滓20・滓21は鉄塊系遺物である。ともに44.1g、33.1gと重量のある鉄滓であり、小割したような形状を呈している。滓20は微弱な鉄の反応があるが、滓21はほとんど反応がない。滓20は遺構北壁中央部付近で、柱穴P3埋土中から出土している。滓21は埋土中一括取上げ遺物である。

炭化種子(第3分冊 自然科学分析参照)

堅穴建物跡23号からは3点の炭化種子が出土しており、種実同定の結果、コナラ属とモモの種子であった。

堅穴建物跡24号(第2-112図)

堅穴建物跡24号はE33・34区V層から検出した。北西部角で堅穴建物跡23号を切っている。長軸(東西軸)

約5.3m、短軸(南北軸)約4.1mの長方形を呈する。南側には幅1m、奥行き80cmの張り出しがある。また、南東角部付近は東壁中央部のすぐ南部分と、南側の張り出しの東側に幅50～70cm程度の凹みを作り、こちらも張り出しの様な構造を形成している。検出面から底面までの深さは20～25cm程度であり、底面から5～10cm程度の厚さで貼床が形成されている。東側と北東側の一部には一段高い底面が設けられており、貼床面はこの一段高い底面と同じ高さで形成されている。遺構の中央部には柱穴が1基検出されており、そのすぐ南には長軸(東西軸)約30cm、短軸(南北軸)約25cmのやや歪な形状の焼土が検出されており、炉跡と考えられる。炉跡の周辺には1m四方の範囲で黒色土が広がる。黒色土の範囲は東側に広く、西側にはほとんど広がらない。南北方向は同程度に広がっている。黒色土の厚みはほとんどなく、貼床面上面に薄く堆積している。黒色土範囲の北側を除く3方には硬化面が広がる。この硬化面は遺構の中央部より北側には広がらず、長軸(東西軸)約2.5～3m、短軸(南北軸)約1～1.5mの歪な長方形に広がり、黒色土の下位でも確認されている。遺構の南側、張り出し部分の手前には長軸約80cm、短軸約55cmの土坑が掘られている。遺構の向きよりも長軸がわずかに東にずれている。貼床面からの深さは約15cmであり、この土坑を埋めて貼床面が形成されている。硬化面の広がりが土坑の際で止まっていたため、この土坑が建物使用時には土坑として存在していた可能性を考え、土層を精査したが、土坑の埋土と貼床の埋土は同じであった。柱穴は遺構の中央部に1基、貼床面に5基、一段高い底面(底面)に10基、壁際に6基、建物跡の周囲に15基検出されている。

出土遺物(第2-113図)

遺物は貼床面の範囲内で多く出土しているが、貼床面の範囲内でも北東部分からはほとんど遺物の出土が見られなかった。また、一段高い底面から遺物の出土もほぼ無い。遺物出土状況図で以上の範囲にある点はほぼ検出面出土遺物である。炉跡の東側には大型の土器が集中して貼床面から出土している。遺構の中央部から西側にかけての遺物の出土状況は、貼床面よりも高い位置で水平に出土している状況が見られる。

土器(第2-114・115図)

288～300は、その出土状況から、堅穴建物跡24号に帰属する可能性が高い土器群である。

288は口縁部が外傾する甕B型の口縁部から胴部上位の資料である。口径30.4cmを測る。炉跡の東側に集中して貼床面から出土している。外面口縁部から胴部上位にかけては、単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデが施されている。胴部には幅3mm程度の斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部から胴部上位にかけては、横・斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。

胴部中位には斜め方向のナデが施されている。

289 は口縁部が外傾する壘B類の口縁部から胴部上位の資料である。口径25.0cmを測る。炉跡の東側に集中して出土しているほか、南側張り出し部分の手前でも出土している。全て貼床面からの出土である。内外面ともに口唇部から口縁部上端にかけては、口縁部上端に横方向の工具ナデを施した後に、指押さえが行われている。外面口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部には幅3mm程度の斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部から胴部上端にかけては斜め方向の工具ナデが、胴部には横方向の工具ナデが施されている。

290 は口縁部がわずかに外傾する壘B類の口縁部から胴部上位の資料である。口径20.0cmを測る。炉跡の南側と南東側張り出し部の南壁付近で、それぞれ貼床面から出土している。外面口縁部上端はスジ状の痕跡がはっきりとした横方向の工具ナデが施されている。口縁部は単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデが施されている。この工具ナデは上端の工具ナデと比較してスジ状の痕跡が不明瞭で、器面は平滑に調整されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は幅3～4mmの縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上半にはスジ状の痕跡がはっきりとした横方向の工具ナデが施されている。口縁部下半から胴部にかけては、スジ状の痕跡が不明瞭な横・斜め方向の工具ナデが施されており、その後、胴部では部分的に縦・横方向のミガキが施されている。また、指押さえも行われている。

291 は口縁部が内湾しつづつ、口縁部上端で直行気味になる壘D類の口縁部から胴部下半までの資料である。口径は29.6cmを測る。炉跡の東側と、南壁中央部付近(南側土坑の東側)、南西角部付近の3箇所に集中が見られ、また張り出し部手前や遺構の西側からも出土が見られ、遺構内に広く散在しているが、全て遺構の南側半分からの出土である。また、炉跡の東側と、南壁中央部付近以外は、貼床面より高い位置で浮いた状態で出土している。

291 の原位置は、貼床面から出土している炉跡の東側もしくは、南壁中央部付近と考えられる。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部は縦・斜め・横方向の工具ナデを施した後、調整痕をナデ消している。突帯貼り付け部分の器面には斜め方向の工具ナデを施した後、横方向のハケ目を施し、突帯を貼り付けている。工具ナデの痕跡はナデ消している。胴部には、幅5mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。ミガキとは異なるが、丁寧に調整が施されており、器面の砂粒は沈み込んでいる。工具ナデの痕跡が不明瞭な箇所もある

ため、ナデ消している可能性も考えられる。突帯下部から胴部中位の範囲は部分的に欠落するが、ほぼ全周で煤が付着している。一部は突帯上部から口縁部でも煤の付着が見られるが、全周はしない。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部は横・斜め方向の工具ナデを施した後、横方向のナデが施されている。突帯内面部分は縦方向の工具ナデを施した後、横方向のナデが施されている。胴部中位から下位にかけては、外面と同じく幅5mm程度の縦方向の工具ナデが丁寧に施されている。内面も調整痕が不明瞭な箇所が多く見られ、ナデ消しが施されている可能性がある。

292 は口縁部が内湾する壘D類の口縁部から胴部上位の資料である。口径41.8cmを測る。柱穴P1の東側と、遺構の北西部で出土している。遺構の北西部では貼床面から出土している。外面口縁部上位はスジ状の痕跡が目立つ横方向の工具ナデが施されている。口縁部中位から下位にかけては、横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部上位は斜め方向の工具ナデが施されている。内面は横・斜め方向の工具ナデを施している。部分的には幅の狭い斜め方向の工具ナデが施されている。

293 は壘の口縁部から胴部中位までの資料である。口径は19.9cmを測る。口縁部から胴部上半にかけては、吹きこぼれの痕跡が確認できる。遺構の北西部に集中して貼床面から出土している。口唇部には横方向のナデが施されている。外面口縁部は、縦・斜め方向の工具ナデが施されている。この調整は、口縁部と胴部の境目に工具ナデを打ち込み、段差をつけ、口縁方向に引き上げる手法で施されている。胴部は斜め・横方向の工具ナデが施されている。内面口縁部は縦・斜め方向の工具ナデを施した後、横方向の工具ナデが施されている。胴部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面の工具ナデは外面と比較して凹凸が大きい。内外面ともに器面調整は丁寧である。外面はより平滑であり、内面は工具ナデの痕跡が明瞭であり、胎土中の砂粒・鉱物等の混和材は胎土中に沈み込んでいる。

294 は壘の胴部下位から脚部資料である。底径7.4cm、脚部高0.7cmを測る。南壁中央部付近で貼床面から出土している。外面は斜め・縦方向の工具ナデが施されている。底部は指押さえが密に行われており、この指押さえにより深くびれを成形している。さらに、この底部は著しく歪み、水平を保てないことから、脚部を接合する予定であった資料である可能性が考えられる。内面は斜め方向の工具ナデが施されている。

295 は壘の胴部下位から脚部の資料である。底径7.2cmを測る。外面底部を含めた内外面に煤の付着が見られる。

炉跡の東側で貼床面から出土している。

外面胴部下位は斜め方向の単位不明の工具ナデが施されている。底部は横・斜め方向の工具ナデが施され、その上に指押さえの痕跡が確認できる。

胴部下位から底面にかけては、斜め方向の単位不明瞭な工具ナデを施した後に、幅1cm程度の斜め方向の工具ナデが施されている。脚端部にはへら状工具で刻目が施されている。脚部内面には横方向の工具ナデが施されている。

296は甕または壺の胴部下半から底部資料である。平底を呈し、底径は5.7cmを測る。遺構の南東部と南西角部から出土しており、南東部では貼床面からの出土である。外面は幅約1cmの縦方向の工具ナデを施した後に、幅約5mmの縦方向の工具ナデが施されている。内面はナデが施されているが、底面には厚さ1cm程度の粘土が貼り付けられている。この粘土が貼り付けられている部分は器面調整が施されていないため、胎土に含まれる混和材は読み込まず器面に見えている。

297は高坏の脚部である。底径10.2cmを測る。南側張り出し部の手前で貼床面から出土している。脚部外面上半は縦方向のミガキが、下半は幅2～3mmの工具ナデが施されている。脚部内面上位から中位にかけては、幅2～3mmの横・斜め方向の工具ナデが、下位は横方向の工具ナデが施されている。

298は成形に復元できた丸底の埴である。口径7.8cm、器高13.8cmを測る。炉跡の東側に集中して、全て貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、胴部は斜め方向の工具ナデが、屈曲部から底部は横・斜め・縦方向の工具ナデが施されている。特に屈曲部付近では、丁寧な工具ナデの結果、部分的にミガキの様な光沢が見られる。また、部分的には工具ナデの下に細かな繊維状のスジが確認できることから、横・斜め方向の繊維状のハケ目を施した後、縦・斜め方向の幅6～7mm程度の工具ナデを施し、仕上げとして口縁部及び屈曲部付近に横方向の工具ナデを施したと考えられる。内面は屈曲部から底部にかけては工具ナデが施されている。他の部分にはナデが施されており、胴部には指押さえが2列並ぶ。

299は成形に復元できた長胴の埴である。口径8.2cm、器高11.2cmを測る。口唇部および内外面の口縁部上端と、外面胴部と底部の境目に赤色顔料が塗布されている。炉跡の東側で貼床面から出土している。外面口縁部から胴部にかけては縦方向のミガキが、底部は横方向のミガキが施されている。内面口縁部は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。胴部には横・斜め方向の指ナデが施されている。

300は成形に復元できた埴である。口縁部はほぼ直行し、口径5.1cm、器高6.9cmを測る。遺構の中央部付近で

貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデを、口縁部は横方向の工具ナデを施した後に、斜め方向の工具ナデを施している。胴部から底部にかけては斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが施されている。口縁部下半は横方向のミガキに類似した工具ナデが施されている。胴部から底面にかけては斜め・横方向の指ナデが施されている。

301～310はその出土状況から、堅欠建物跡24号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

301は口縁部がほぼ直行する甕D類の口縁部から胴部下位までの資料である。口径25.0cmを測る。遺構の北西部で貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部上半には横方向の工具ナデが施されている。胴部下半には縦・斜め方向の工具ナデや、縦方向の指ナデが施されている。内面口縁部上位から中位にかけては横方向の工具ナデが、口縁部下位から胴部下位にかけては斜め方向の工具ナデが施されている。

302は甕の胴部中位から脚部の資料である。底径7.8cm、脚部高0.3cmを測る。遺構の南西部で貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。外面胴部から脚部にかけては、単位幅が不明瞭な斜め・横方向の工具ナデが施されている。脚部にはその上から縦・斜め方向の工具ナデが施されている。内面は縦・横方向の工具ナデが施されている。

303は甕の胴部下位の資料である。遺構の南西部で貼床面から15cm程度浮いた状態で出土している。外面は縦・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部下端には粘土が貼り付けられており、その上に斜め・横方向の工具ナデが施され、指押さえも行われている。内面は縦・斜め方向の工具ナデが施されている。底部付近は粘土が貼られ、底部付近の器壁は厚く成形されている。

304は壺の胴部上半の資料である。南側土坑の周辺と、遺構の西側で貼床面より10cm程度浮いた状態で出土している。外面は斜め方向の幅7mm程度のハケ目を施した後、縦方向の幅7mm程度の工具ナデが施されている。内面は斜め方向の工具ナデが施されており、口縁部との境目に近いと考えられる上位には連続した指押さえが巡る。

305は壺の胴部上半の資料である。遺構の南西角部付近に集中して、検出面に近い位置で出土している。外面の口縁部との境目付近は横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部は横方向の工具ナデを施した後に、縦・斜め方向の丁寧な工具ナデが施されている。この工具ナデはミガキに類似しているが、光沢はない。内面は横・

斜め方向の工具ナデを施した後に、胴部中程では部分的に縦方向のミガキが施されている。

306は壺の胴部中程から底部の資料である。遺構の北西部で貼床面から15cm程度浮いた状態で出土している。外面は斜め・縦方向の工具ナデが施されている。内面胴部中位は斜め方向の工具ナデが、胴部下位から底部にかけては、幅5mm程度の横方向の工具ナデが施されており、この工具ナデにより底部付近の器面に凹凸が生まれている。

307は高坏の坏部資料である。検出面一括取上げ資料である。外面は斜め方向のミガキが施されている。下面は接合部分であり、接合前の胎土調整の工具ナデの痕跡が確認できる。内面は斜め方向の工具ナデを施した後に、側面には斜め方向のミガキが施されている。

309は埴の口縁部資料である。外面口縁部上半は横・斜め方向の工具ナデ、口縁部下半は縦・斜め方向の工具ナデが施されている。口縁部下位には赤色顔料の塗布が確認できる。内面は斜め方向のナデが施されている。

310は埴の底部資料である。遺構の南西角部付近で、貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。外面は横・斜め方向のミガキが、内面は工具ナデが施されている。

石器(第2-116図)

石65は台石である。一部欠損しているが、残存部分で最大長28cm、最大幅14.5cm、最大厚6.1cmを測り、重量は2536gを量る。2つの大きな破片が接合し、1点は南側土坑の北側壁面に沿うように土坑埋土=貼床面埋土中から、もう1点は南東角部付近の一段高い底面から出土している。

石66は砥石である。破損しているが、全面に痕痕が確認できる。縁辺部には最打痕が多く残る。遺構の南側で検出された土坑内の底面から出土している。

石67は棒状礫である。南側土坑の南際で貼床面から出土している。

鉄滓

竪穴建物跡24号からは、直径1cm程度の丸みを帯びた鉄塊が1点出土している。重量は0.9gである。遺構の中央部よりやや西側で、遺構埋土中から出土しており、流れ込み遺物と考えられる。

竪穴建物跡25号(第2-117図)

竪穴建物跡25号はF33区Va層から検出した。

長軸(南北軸)約6.4m、短軸(東西軸)約5.5mの隅丸長方形を呈する。張り出しは持たない。検出面から底面までの深さは45cm程度であり、底面から10cm程度の厚さで貼床が形成されている。遺構の周縁部には一段高い底面が造成されており、検出面からの深さは30~40cm程度であり、壁からの幅は北側で幅100cm程度、東

側で40~50cm程度、南側で90~130cm程度、西側で90cm程度となり、東側の幅のみが狭くなっている。この一段高い底面と貼床面は同じ高さに形成されており床面となっている。遺構の中心部より、やや南西にずれた位置には長さ110cm程度、幅20~30cm程度の南北に長い埴土と、その北側半分を取り巻くように炭化物を含む黒色土が検出されており、炉跡と考えられる。炉跡の南側から西側にかけては硬化面が広がり、南側の一段高い底面にまで及んでいる。柱穴は貼床面に9基、貼床面の際に3基、一段高い底面に5基検出されている。

出土遺物(第2-118図)

遺物は遺構内全体から出土しているが、遺構の南側半分からの出土がやや多い。勾玉と管玉が貼床面から出土している。

土器(第2-119図)

311は完形に復元できた壺である。口径22.8cm、底径6.8cm、器高20.5cm、脚部高1.9cmを測る。遺構南側の一段高い底面部分に集中して出土している。1か所だけに集中して出土している状況である。外面口縁部上端は横方向のハケ目が施されている。口縁部には斜め方向の工具ナデが施されているが、不明瞭であり、ナデ消しが施されている可能性がある。突帯貼り付け部分の器面には横方向のハケ目を施した後に、突帯を貼り付けている。突帯下位から胴部下半にかけては、幅4mm程度の縦・斜め方向の工具ナデが施されている。比較的丁寧な調整が施されており、特に胴部中位から下位にかけては、ナデ調整を重複させることにより光沢が生じている。脚部は横方向のナデを施した後、指擦さえが行われており、列状に並ぶ。口唇部はナデが施されている。内面口縁部上端は外面と同じく横方向のハケ目が施されている。口縁部から胴部上半には、斜め方向の工具ナデが施されている。この工具ナデは口縁部ではハケ目に、胴部では縦方向の工具ナデにより調整痕が消されている。胴部下半には縦方向の工具ナデが施されている。外面と同じく比較的丁寧に調整が施されており、外面ほどではないが一部に光沢を持つ。脚部内面は横方向のナデが施されている。

312は口縁部から胴部上位の資料である。口径17.0cmを測る。遺構の南側から東側にかけて、貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。胴部上位は横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面は全体的に斜め方向の工具ナデが施されている。

313は壺の胴部下位から脚部の資料である。脚端部は欠損している。炉跡の北側で貼床面から出土している。外面胴部は幅2~3mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。脚部は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、斜め方向の工具ナデを施している。内面は縦

方向の工具ナデを施した後、斜め方向の工具ナデを施している。

314は高坏の坏部の資料である。口径は20.0cmを測る。

口径部は横方向のナデが施されている。柱穴P2の上面や遺構南側の貼床面から出土している。外面口縁部は横方向のハケ目が施された後、斜め・縦方向のミガキが施されている。胴部上半は横・斜め方向の工具ナデが施された後、斜め・縦方向のミガキが施されている。胴部中位には接合箇所粘土を貼り付けた突帯状の屈曲部があり、横方向のミガキやナデが施されている。箇所によっては丁寧なミガキやナデにより、粘土の段差を消しているが、7～8割近い箇所では、粘土の段差をそのまま突帯状に残している。段差を消さない点では、やや粗雑と言えるが、ミガキは重複して丁寧にやられており光沢が生じている。胴部下半は横方向の工具ナデが施された後、縦方向のミガキが施されている。内面口縁部から胴部上半にかけては、横方向の工具ナデを施した後、斜め方向のミガキが施されている。接合（屈曲）部以下は、横方向のミガキが施されている。

315は高坏の坏部資料である。口径14.9cmを測る。貼床面一括出土遺物である。外面は単位幅が不明瞭な横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面は横方向の工具ナデが施されている。内外面ともに著しく摩滅している。

316は高坏の脚部資料である。外面は縦・横方向のミガキが、内面は縦方向の工具ナデが施されている。

317は器形に復元できた増である。口径6.7cm、器高7.3cmを測る。底部に線刻のような沈線が施されている。遺構北壁付近で一段高い底面から出土している。外面口縁部上半は横・斜め方向の工具ナデが、口縁部下半は斜め方向のミガキが施されている。胴部は横・斜め方向のミガキを施した後、縦方向のミガキが施されている。屈曲部には横方向のミガキが施されている。底部は主に縦方向のミガキが施されているが、部分的には横方向のミガキも施されている。内面口縁部は横方向のナデが施されている。胴部は完形品であるため調整の確認が困難であった。底部は縦方向のミガキが施されている。

318は増の口縁部から胴部までの資料である。口径6.2cmを測る。南西壁付近と北東壁付近で、それぞれが一段高い底面から出土している。外面には全体的に非常に丁寧なミガキが施されており、口縁部上半は横方向、口縁部下半は斜め方向、頸部は横方向、胴部は斜め方向、底部付近では横方向に調整が施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半は横方向の工具ナデを施した後、斜め方向の工具ナデを施している。胴部上半には斜め方向のナデが施されている。頸部付近には接合痕が残り、指押さえが巡る。胴部下半は横方向の工具ナデが施されている。

319は増の胴部から底部の資料である。底部は平底を呈し、底径3.8cmを測る。外面は横・斜め方向の工具ナデが施されているが、摩滅が著しく観察が困難であった。内面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。

320は増の胴部から底部の資料である。遺構の西側で貼床面から出土している。外面胴部は幅3mm程度の工具ナデが施されている。底部には横方向のミガキが施されている。内面は横方向の工具ナデが施されている。

321～330は、その出土状況から、堅穴建物跡25号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

321は口縁部から胴部上位の資料である。西壁付近で検出面直下から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には、横・斜め方向の短い長さの工具ナデが施された後に、突帯が貼り付けられている。胴部には横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。内面口縁部上半は横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部以下は単位幅が不明瞭な工具ナデが施された後に、部分的に幅3mm程度の横方向の工具ナデが施されている。

322は壺の口縁部資料である。柱穴P3の上位で貼床面から15cm程度浮いた状態で出土している。外面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面も横・斜め方向の工具ナデが施されているが、外面よりも工具の幅が狭い工具痕が確認できる。屈曲部には指押さえが行われている。

323は甕もしくは鉢の胴部下位から脚部の資料である。底径9.3cmを測る。遺構の南西側と東側で貼床面より15～20cm程度浮いた状態で出土している。外面胴部は幅4～5mm程度の斜め方向の工具ナデが施されている。脚部には横方向の工具ナデが施されている。内面も胴部には幅4～5mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。底面および脚部内面には横方向の工具ナデが施されている。

324は壺の口縁部資料である。口径12.0cmを測る。遺構埋土中一括取上げ資料である。内外面ともに横方向の工具ナデが施されており、外面口縁部下位には指押さえが行われている。

325は壺の口縁部資料である。口径12.8cmを測る。遺構の南東側で一段高い底面より10cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部上位は横方向の工具ナデが、中位から下位にかけては縦方向の幅3mm程度の工具ナデが、口縁部下端から頸部にかけては横方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半から頸部にかけては、幅3mm程度の横方向の工具ナデが施されている。内面は摩滅している。

326は甕もしくは壺の胴部下位から底部資料である。底部は平坦面を持ち、底径3.4cmを測る。遺構埋土中一

括取上げ資料である。外面胴部は幅3～4mm程度の縦・斜め方向の工具ナデが施されている。底部は斜め方向の工具ナデが施されている。内面胴部は斜め・縦方向の工具ナデを、底部付近は横方向の工具ナデが施されている。

327は鉢の口縁部から胴部にかけての資料である。遺構の北壁付近と南壁付近で貼床面および一段高い底面から15～20cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデを施している。口縁部から胴部にかけては、斜め方向の工具ナデを施した後に、幅4mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上端は横方向の工具ナデを、口縁部から胴部にかけては、斜め方向の工具ナデが施されている。

328は不明資料である。遺構の南西角部付近と南壁中央部付近で、貼床面で15～20cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデを施している。胴部は横・斜め方向の工具ナデを施した後に、斜め方向のミガキが施されている。内面口縁部は横方向の工具ナデが、胴部は斜め方向のナデが施されている。

329は高坏の脚部資料である。遺構の中心部と南壁の中間付近の検出面に近い位置から出土している。外面は縦・横方向のミガキが、内面は横方向の工具ナデが施されている。

330は埴の胴部から底部の資料である。遺構の北東角部付近に集中して、貼床面および一段高い底面より10～15cm浮いた状態で出土している。外面胴部上位から中位にかけては斜め方向のミガキが、胴部下位から底部にかけては横方向のミガキが施されている。内面胴部上位は単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデが、それ以下には斜め・横方向の工具ナデが施されている。

石器(第2-120図)

石68は金床石である。遺構埋土中一括取上げ資料である。表面および裏面に敲打痕が確認できる。

石69は台石である。西壁付近で一段高い底面から10cm程度浮いた状態で出土している。表面に敲打痕が確認できる。

石70は磨敲石である。遺構埋土中一括取上げ資料である。

鉄製品・鉄滓(第2-120図)

鉄10は小型の刀子である。刃部は薄く細身で、切先付近が反り返る。また、側面から見ると刃部が緩やかに折れ曲がっている。茎部は方形に成形され、柄の一部である木質が残っている。茎部の厚みは3～5mmで、間は明瞭に確認できない。

鉄11は長さ4.5cm、幅2.8cm、厚み1.5cmの鉄塊である。重量感があり、表面には亀裂が走っている。平面は台形に近いが断面は不正形で、鉄器として形を整えた痕跡は確認できない。鉄器素材の可能性もある。

竪穴建物跡25号からは、2cm大の鍛冶滓が1点出土している。重量は2.0gであり、細かな気泡が多く確認できる。

炭化物・炭化種子(第3分冊 自然科学分析参照)

竪穴建物跡25号では多数の炭化物を遺物として取り上げている。その中から竪穴建物跡25号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し検討を行い、2点の炭化物について放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。分析の結果、2ヶ所年代範囲で243calAD-358calAD(90.3%)と、336calAD-422calAD(95.4%)となり、おおよそ3世紀中頃～4世紀中頃と、4世紀中頃～5世紀前半の2つの異なった値が得られた。

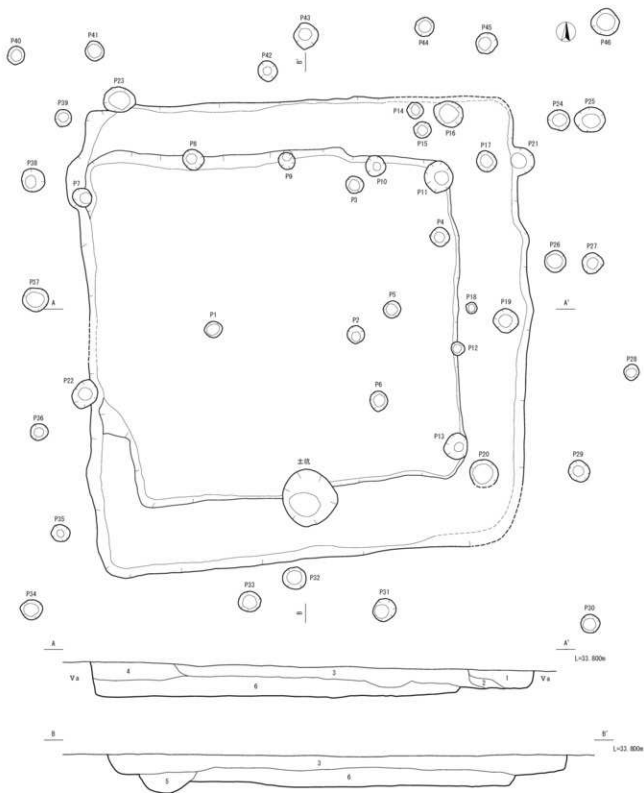
竪穴建物跡25号からは、2点の炭化種子が出土しており、種実同定の結果、2点ともモモの種子であった。

装飾品(第2-120図)

竪穴建物跡25号からは2点の装飾品が、遺構北側の貼床面から隣接した状態で出土している。

装7は赤めのう製の勾玉である。長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ0.8cmを測り、重量は3.3gを量る。

装8は碧玉製の管玉である。長さ2.9cm、幅0.5cm、厚さ0.5cmを測り、重量は1.4gを量る。

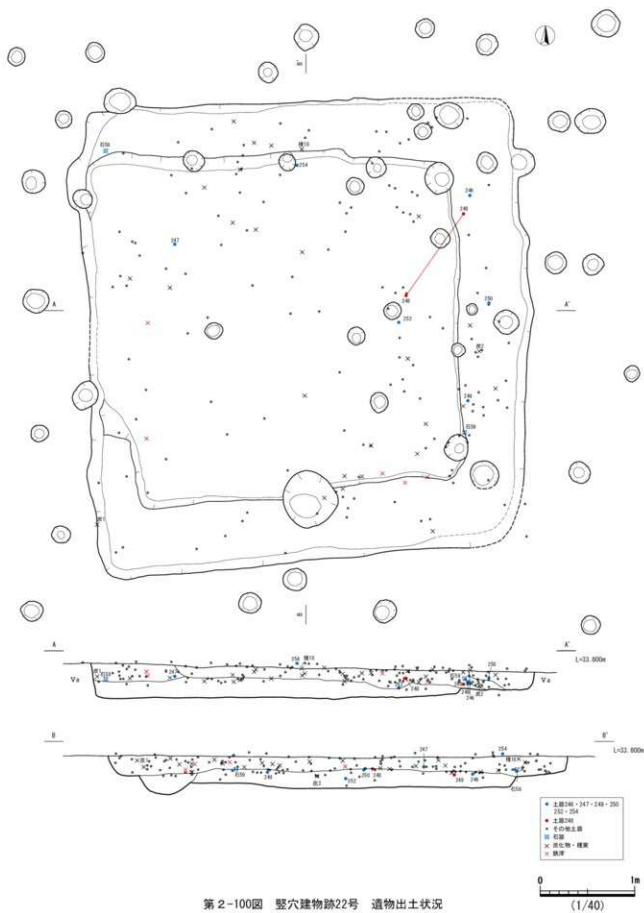


- 1 黒褐色土。
- 2 黒褐色土+アカホヤ火山灰土の混ざり。
- 3 オリーブ褐色土、堅く硬い。
- 4 黒褐色土、堅くしまっている。
- 5 暗オリーブ褐色土、粘性あまりない、硬くしまる。
- 6 埋土にVa層のアカホヤ火山灰土がブロック状に混じる。床面と考えられる部。

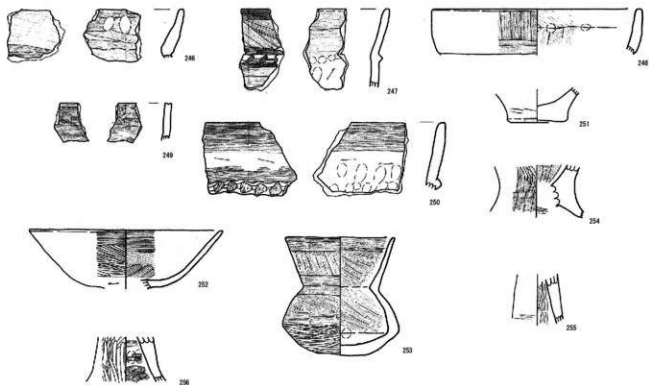
0 1m

第2-99図 竪穴建物跡22号

(1/40)



第2-100圖 竪穴建物跡22号 遺物出土状況

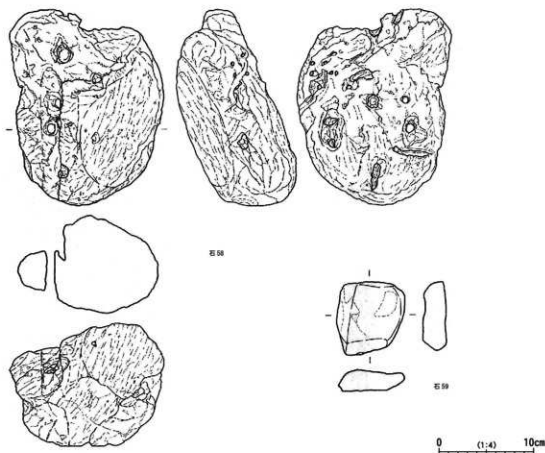


0 (1:4) 10cm

第2-101 圖 豎穴建物跡 22 号 出土遺物(土器)

表 2-39 豎穴建物跡 22 号 柱穴觀察表

柱穴番号	柱穴検出面	最大径 (cm)	最小径 (cm)	深さ (cm)	埋土	柱穴番号	柱穴検出面	最大径 (cm)	最小径 (cm)	深さ (cm)	埋土
1	貼床面	19	13	(40)	黒褐色土	24	(検出面)	23	14	31	黒褐色土
2	貼床面	18	10	46	黒褐色土	25	(検出面)	30	19	32	黒褐色土
3	貼床面	20	10	25	黒褐色土	26	(検出面)	22	16	12	黒褐色土
4	貼床面	20	10	28	黒褐色土	27	(検出面)	22	11	27	黒褐色土
5	貼床面	18	11	12	黒褐色土	28	(検出面)	16	11	28	黒褐色土
6	貼床面	18	12	11	黒褐色土	29	(検出面)	22	11	14	黒褐色土
7	床面 (貼床面)	19	12	32	黒褐色土	30	(検出面)	20	13	22	黒褐色土
8	床面 (貼床面)	22	11	20	黒褐色土	31	(検出面)	23	14	35	黒褐色土
9	床面 (貼床面)	18	11	32	黒褐色土	32	(検出面)	24	16	28	黒褐色土
10	床面 (貼床面)	21	9	34	黒褐色土	33	(検出面)	22	14	21	黒褐色土
11	床面 (貼床面)	35	15	51	黒褐色土	34	(検出面)	24	16	13	黒褐色土
12	床面 (貼床面)	14	9	10	黒褐色土	35	(検出面)	20	8	41	黒褐色土
13	床面 (貼床面)	28	10	6	黒褐色土	36	(検出面)	19	11	36	黒褐色土
14	床面	17	10	32	黒褐色土	37	(検出面)	28	18	18	黒褐色土
15	床面	18	11	28	黒褐色土	38	(検出面)	24	10	40	黒褐色土
16	床面	28	18	42	黒褐色土	39	(検出面)	17	11	12	黒褐色土
17	床面	21	12	20	黒褐色土	40	(検出面)	17	11	25	黒褐色土
18	床面	11	8	10	黒褐色土	41	(検出面)	19	13	31	黒褐色土
19	床面	26	13	32	黒褐色土	42	(検出面)	20	10	13	黒褐色土
20	床面	30	20	43	黒褐色土	43	(検出面)	25	14	37	黒褐色土
21	検出面	30	15	43	黒褐色土	44	(検出面)	19	11	16	黒褐色土
22	検出面	27	12	40	黒褐色土	45	(検出面)	21	11	20	黒褐色土
23	検出面	30	20	16	黒褐色土	46	(検出面)	30	19	27	黒褐色土



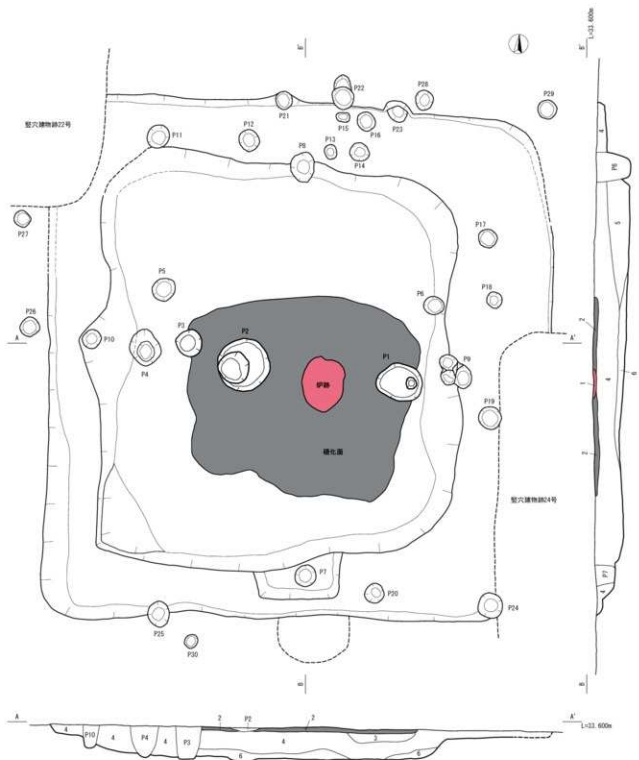
第2-102図 竪穴建物跡22号出土遺物(石器)

表2-40 竪穴建物跡22号出土土器

図番号	遺物番号	床面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考
2 101	246	○	甕	口縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ 指ナゲ	外:にぶい・橙 内:にぶい・橙	石・白・黒・ ほか	
	247	○	甕	口縁部	B	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ 指ナゲ	外:にぶい・橙 内:にぶい・橙	石・白・黒・ 小	
	248	○	甕	口縁部	—	—	—	—	工具ナゲ 指ナゲ	工具ナゲ 指ナゲ	外:黄褐色 内:黄褐色	石・白・黒・ 小	
	249	○	甕	口縁部	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:灰褐色 内:にぶい・橙	石・黒・白・ 黒・小	
	250	○	甕・壺	底部	—	—	—	5.6	工具ナゲ	工具ナゲ	外:にぶい・黄 内:灰オリーブ	石・黒・黒・ 小	
	251	○	壺	口縁部	—	—	—	—	工具ナゲ	—	外:にぶい・黄褐色 内:にぶい・黄褐色	石・長・黒・ 小	内外面ともに摩滅が激しい
	252	○	高坏	坏部	—	—	20.3	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ	外:明褐色 内:橙	石・白・小	
	253	○	埴	完形	—	12.5	11.2	5.0	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ	外:黄褐色 内:黄褐色	白・黒・ ほか	
	254		甕	脚部	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:にぶい・黄 内:灰オリーブ	石・黒・黒・ 小	
	255		高坏	脚柱部	—	—	—	—	ナゲ	工具ナゲ	外:にぶい・黄褐色 内:にぶい・黄褐色	石・小・白・ 黒	
	256		高坏	脚部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナゲ	外:にぶい・橙 内:にぶい・黄褐色	石・白・小・ ほか	

表2-41 竪穴建物跡22号出土石器

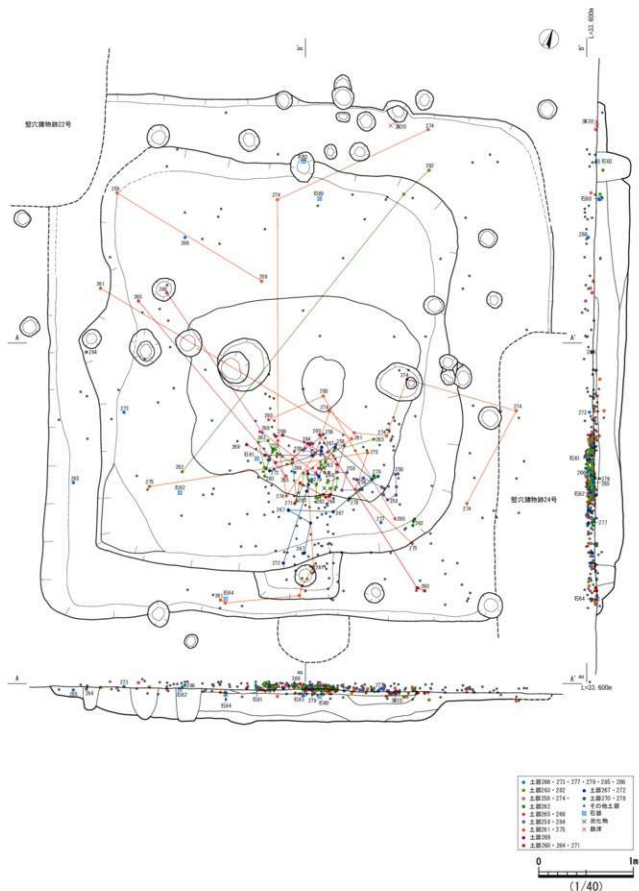
図番号	遺物番号	床面	器種	現存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 102	石58		軽石製品	完形	20.9	16.2	12.7	480.0	軽石	貫通孔・木貫通孔あり
	石59		礫	完形	7.6	7.05	2.6	30.0	砂岩	表面に磨痕あり



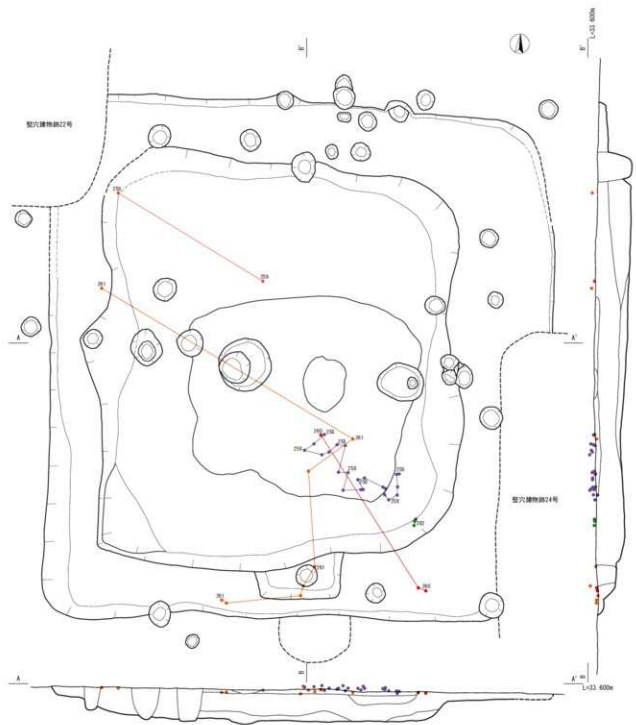
- 1 雑土。
- 2 緑化層であり、黒褐色土を基調にアカホヤ火山灰土ブロックや黒色土が混ざる。
- 3 灰サリ層。黒くしまり、アカホヤ火山灰土ブロックが多く混ざるため全体的に色調は明るい。
- 4 灰サリ層。黒土に比べてアカホヤ火山灰土ブロックが入らない粘状埋土。
- 5 黒褐色土。少量ではあるがアカホヤ火山灰土ブロックが入る。2-3cmのオレンジもしくは白色のバミスがわずかに、また10cm以上の地層下層石がごくわずかに混ざる。
- 6 雑土に地山であるV1層、V2層、V3層が混ざる。V1層、V2層が混ざるので全体的に砂質でやわらかく色調は明るい。

第2-103図 竪穴建物跡23号

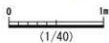
0 1m
1:11,600



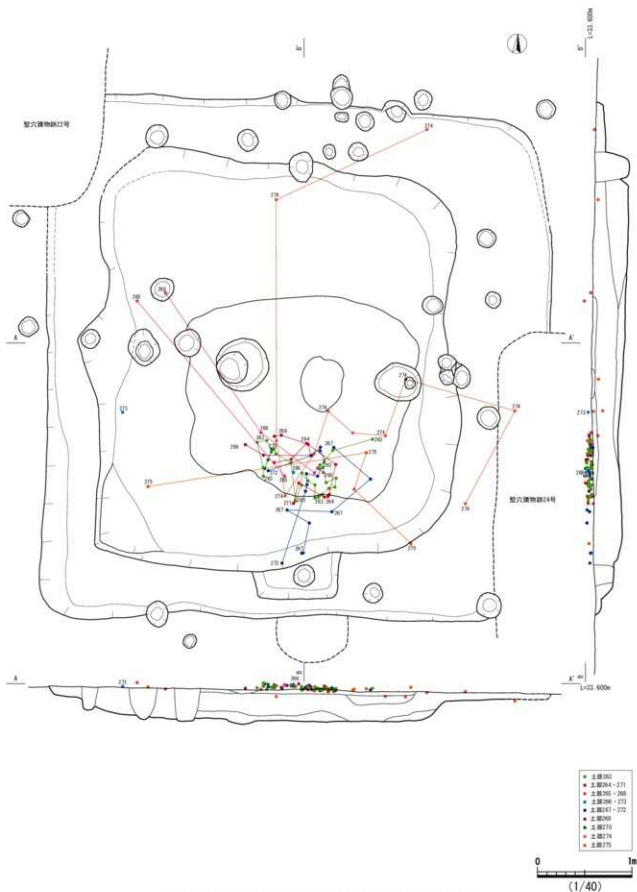
第 2-104 圖 豎穴建物跡23号 遺物出土狀況(全遺物)



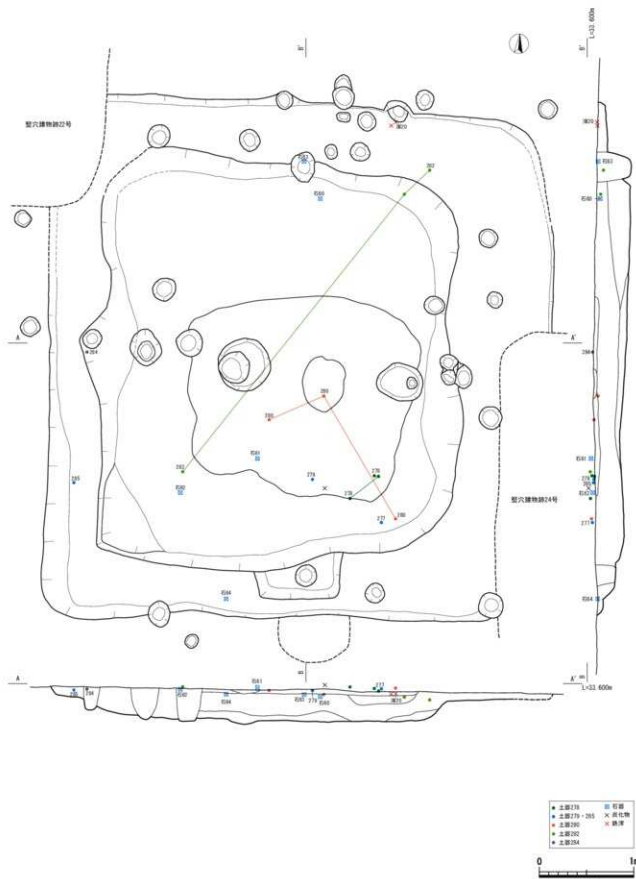
第 2-105 圖 豎穴建物跡23号 遺物出土狀況(莖)



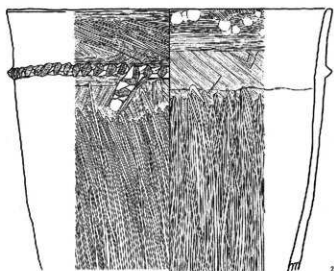
- 土器210
- 土器216
- 土器260
- 土器261
- 土器262



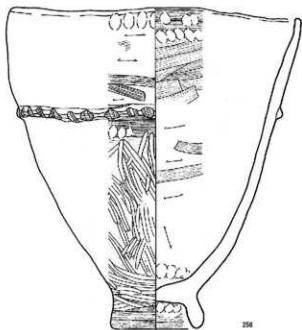
第2-106圖 豎穴建物跡23号 遺物出土狀況(丸底甕・壺)



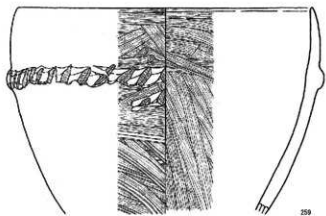
第 2-107 図 雙穴建物跡23号 遺物出土状況(その他)



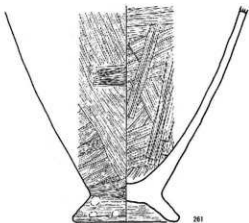
257



258



259



260



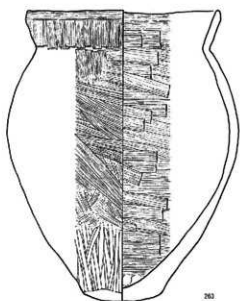
261



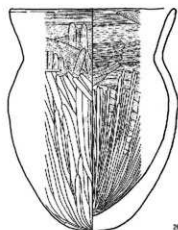
262

0 (1:4) 10cm

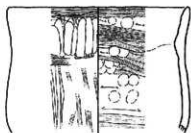
第2-108 图 竖穴建物跡 23号 出土遺物(土器①)



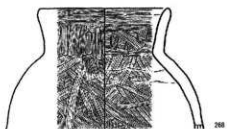
263



264



265



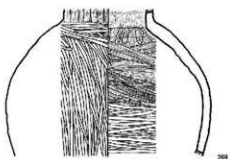
266



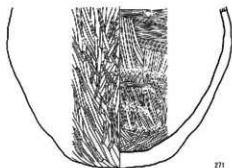
266



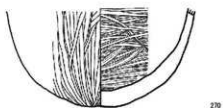
267



268



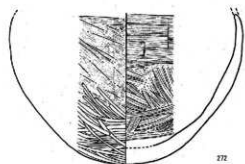
271



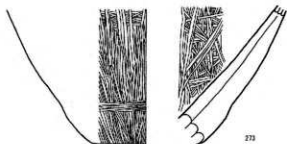
270

0 (1:4) 10cm

第2-109 圖 竪穴建物跡 23 号 出土遺物 (土器②)



272



273



274



275



276



277



278



279



280



281



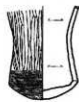
282



283



284



285



286

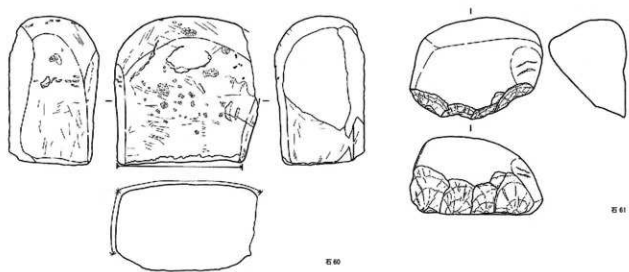


287

0 (1:4) 10cm

(285-286-287)
0 (1:3) 10cm

第2-110图 竖穴建物跡23号 出土遺物(土器③)

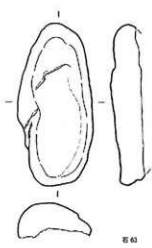


石 59

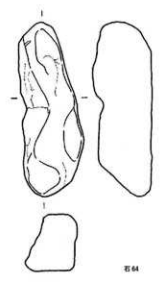
石 61



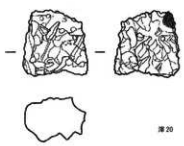
石 62



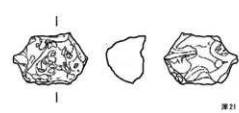
石 63



石 64



石 20



石 21



第2-111 図 竪穴建物跡 23 号 出土遺物 (石器・鉄滓)

表2-42 竪穴建物跡23号出土土器

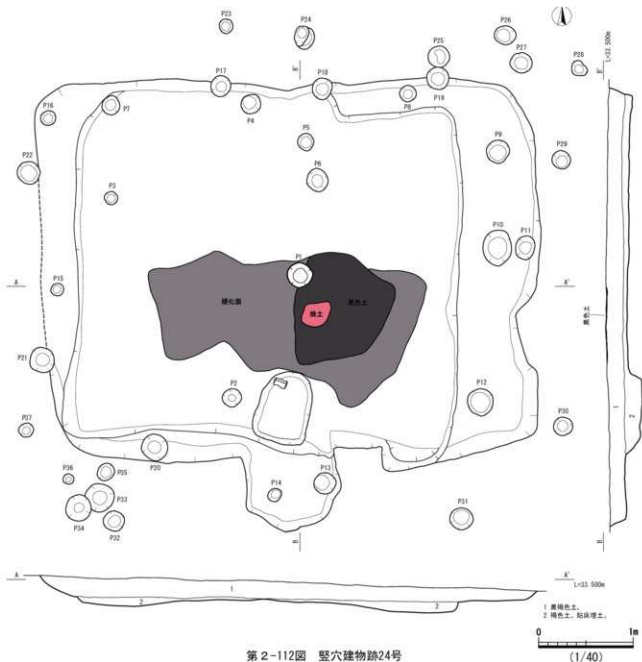
図 番 号	遺物 番号	床 面	器 種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口徑 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 108	257	○	甕	口縁部-胴部	C	—	34.0	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:深い黄 内:深い黄	白・黒・小・ ほか	
	258	○	甕	完形	D	33.9	30.0	8.6	工具ナデ ミガキ	工具ナデ 指ナデ	外:深い赤褐 内:深い赤褐	白・ほか	器高:2.9cm
	259	○	甕	口縁部-胴部	D	—	31.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外:深い黄褐 内:深い黄褐	石・長・白・ 黒・小	
	260	○	甕	口縁部-胴部	D	—	40.4	—	工具ナデ	工具ナデ	外:深い黄褐 内:深い黄褐	石・白・黒・ 小	
	261	○	甕	胴部-底部	—	—	—	10.4	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外:深い黄 内:深い黄	石・白・小・ ほか	器高:2.2cm
	262	○	甕	胴部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外:黄 内:深い黄	石・白・黒・ 小	
2 109	263	○	丸底甕	完形	—	36.0	20.0	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:浅黄褐 内:浅黄褐	長・白・白・ 小	
	264	○	丸底甕	完形	—	23.9	17.2	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:深い黄褐 内:深い黄褐	石・白・黒・ 小	
	265	○	丸底甕	口縁部-胴部	—	—	18.9	—	ハケ目・ミガキ 工具ナデ・ナデ	ハケ目 工具ナデ	外:深い黄褐 内:深い黄褐	石・黒・白・ 小	
	266	○	甕・壺	口縁部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:深い黄 内:深い黄	石・白・小	
	267	○	壺	口縁部-胴部	—	—	9.8	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:黄 内:黄	石・黒・小	
	268	○	壺	口縁部-胴部	—	—	13.6	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:黄 内:黄	石・黒・白・ 小	
	269	○	壺	口縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:黄 内:黄	石・白・黒・ 小	270と同一個体
	270	○	壺	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:黄 内:黄	石・白・黒・ 小	269と同一個体
	271	○	壺・壺	胴部-底部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ ミガキ	外:深い黄 内:深い黄	石・白・小	
	272	○	壺・壺	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:深い黄 内:黄	石・白	
2 110	273	○	壺・壺	胴部-底部	—	—	—	—	ミガキ	ミガキ	外:黄 内:明赤褐	石・長・白・ 小	
	274	○	壺・壺	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	—	外:深い赤褐 内:灰青カーブ	石・長・白・ 黒・小	
	275	○	壺・壺	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	ミガキ	外:深い黄褐 内:深い黄褐	石・長・白・ 小	
	276	○	壺	底部	—	—	—	—	ミガキ	ミガキ	外:黄 内:浅黄褐	石・白・小・ ほか	
	277	○	鉢	口縁部-胴部	—	—	9.2	—	工具ナデ	工具ナデ	外:深い黄 内:黄	石・黒・白・ ほか	
	278	○	鉢	口縁部-底部	—	—	8.1	—	工具ナデ	工具ナデ	外:黄 内:黄	石・長・白・ 小	
	279	○	鉢	口縁部-胴部	—	—	9.9	—	指ナデ	工具ナデ	外:黄褐 内:深い黄	石・黒・白・ 黒・小	
	280	○	高坪	坪部	—	—	—	—	ミガキ	ミガキ	外:深い黄 内:深い黄	石・白・小・ ほか	
	281	○	高坪	脚部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外:浅黄褐 内:浅黄褐	石・長・白・ ほか	
	282	○	高坪	脚部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外:黄 内:黄	石・白・小・ ほか	
	283	○	高坪	脚部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:深い黄 内:浅黄褐	石・白・黒・ 小	
	284	○	埴	完形	—	6.5	5.4	—	工具ナデ ミガキ	指ナデ	外:黄 内:黄	長・黒	
	285	○	埴	胴部-底部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	指ナデ	外:黄 内:深い黄	石・黒・白・ 小	
	286	○	埴	胴部-底部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外:黄 内:黄	石・白・黒・ 小	
287	○	埴	胴部-底部	—	—	—	—	ナデ・工具ナデ ミガキ	ナデ	外:明黄 内:深い黄褐	石・黒・小・ ほか		

表2-43 竪穴建物跡23号出土土器

図 番 号	遺物 番号	床 面	器 種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 111	560	○	金床石	破損	15.8	(15.2)	9.5	3900.0	砂岩	網造剥片付着
	561	○	礫岩	完形	10.7	14.1	8.3	1520.0	砂岩	
	562	○	礫石	完形	6.1	4.4	4.2	—	砂岩	
	563	○	棒状礫	破損	17.0	8.0	(3.3)	9670.0	ホルンフェルス	
	564	○	棒状礫	完形	18.5	6.3	6.3	1940.0	ホルンフェルス	

表 2-44 豎穴建物跡23号柱穴觀察表

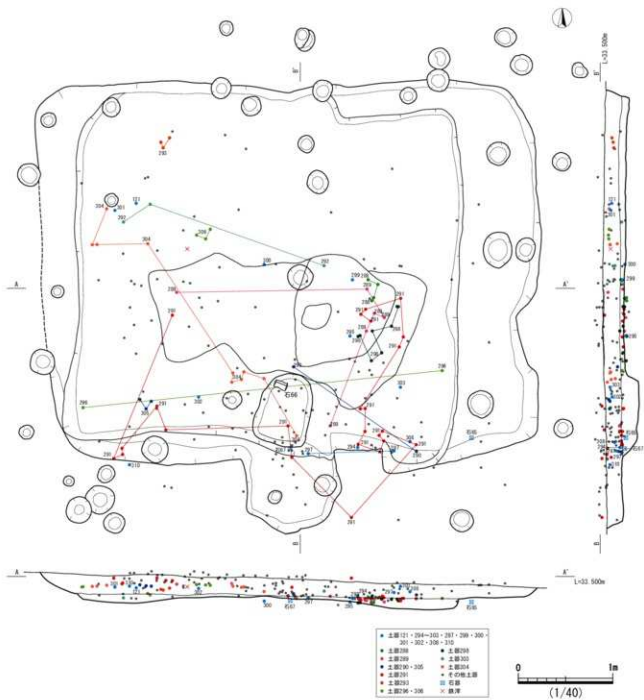
柱穴番号	柱穴輪出面	最大径 (cm)	最小径 (cm)	深さ (cm)	埋土
1	胎床面	50	40	20	黒褐色土
2	胎床面	55	19	52	黒褐色土
3	胎床面	27	16	34	黒褐色土
4	胎床面	32	11	34	黒褐色土
5	胎床面	25	16	19	黒褐色土
6	胎床面	22	14	10	黒褐色土
7	胎床面	22	13	20	黒褐色土
8	床面 (胎床面)	26	13	36	黒褐色土
9	床面 (胎床面)	20	12	35	黒褐色土
10	胎床面	20	11	24	黒褐色土
11	床面	24	14	14	黒褐色土
12	床面	22	12	12	黒褐色土
13	床面	13	7	5	黒褐色土
14	床面	20	11	10	黒褐色土
15	床面	14	8	10	黒褐色土
16	床面	18	12	15	黒褐色土
17	床面	20	14	28	黒褐色土
18	床面	16	8	27	黒褐色土
19	床面	23	16	35	黒褐色土
20	床面	20	8	20	黒褐色土
21	輪出面	18	12	23	黒褐色土
22	輪出面	23	15	40	黒褐色土
23	床面	20	10	5	黒褐色土
24	輪出面	26	13	28	黒褐色土
25	輪出面	23	12	50	黒褐色土
26	(輪出面)	20	12	10	黒褐色土
27	(輪出面)	18	12	14	黒褐色土
28	(輪出面)	18	10	15	黒褐色土
29	(輪出面)	20	14	40	黒褐色土
30	(輪出面)	14	9	7	黒褐色土



第 2-112 号 竖穴建物跡24号

表 2-45-1 竖穴建物跡24号柱穴觀察表 1

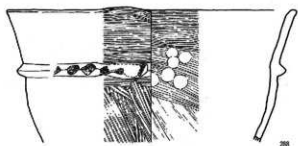
柱穴番号	柱穴輪出面	最大径 (cm)	最小径 (cm)	深さ (cm)	埋土
1	黏床面	27	15	26	黑褐色土
2	黏床面	20	8	20	黑褐色土
3	黏床面	14	8	15	黑褐色土
4	黏床面	21	14	36	黑褐色土
5	黏床面	17	11	27	黑褐色土
6	黏床面	23	11	38	黑褐色土
7	床面	19	10	13	黑褐色土
8	床面	17	10	7	黑褐色土
9	床面	25	17	22	黑褐色土
10	床面	30	20	26	黑褐色土
11	床面	20	13	28	黑褐色土
12	床面	27	20	14	黑褐色土
13	床面	24	16	50	黑褐色土
14	床面	15	9	23	黑褐色土
15	床面	15	8	11	黑褐色土
16	床面	17	9	22	黑褐色土
17	輪出面 (埋跡)	20	10	43	黑褐色土
18	輪出面 (埋跡)	21	13	53	黑褐色土
19	輪出面 (埋跡)	24	15	31	黑褐色土
20	輪出面 (埋跡)	27	15	43	黑褐色土
21	輪出面 (埋跡)	25	14	41	黑褐色土
22	輪出面 (埋跡)	24	16	39	黑褐色土



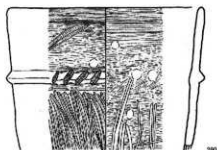
第 2-113 图 竖穴建物跡 24 号 遺物出土状況

表 2-45-2 竖穴建物跡 24 号柱穴觀察表 2

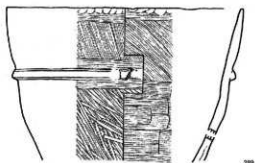
柱穴番号	柱穴検出面	最大径 (cm)	最小径 (cm)	深さ (cm)	埋土
23	(検出面)	15	8	17	黒褐色土
24	(検出面)	20	10	20	黒褐色土
25	(検出面)	22	9	28	黒褐色土
26	(検出面)	22	12	40	黒褐色土
27	(検出面)	24	14	45	黒褐色土
28	(検出面)	16	8	20	黒褐色土
29	(検出面)	20	10	18	黒褐色土
30	(検出面)	20	11	25	黒褐色土
31	(検出面)	24	17	24	黒褐色土
32	(検出面)	22	13	41	黒褐色土
33	(検出面)	30	14	15	黒褐色土
34	(検出面)	25	10	41	黒褐色土
35	(検出面)	19	11	12	黒褐色土
36	(検出面)	10	7	7	黒褐色土
37	(検出面)	16	7	6	黒褐色土



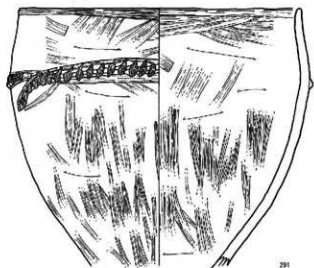
288



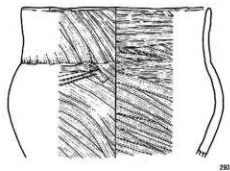
290



289



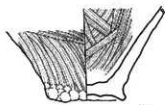
291



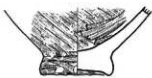
292



293



294



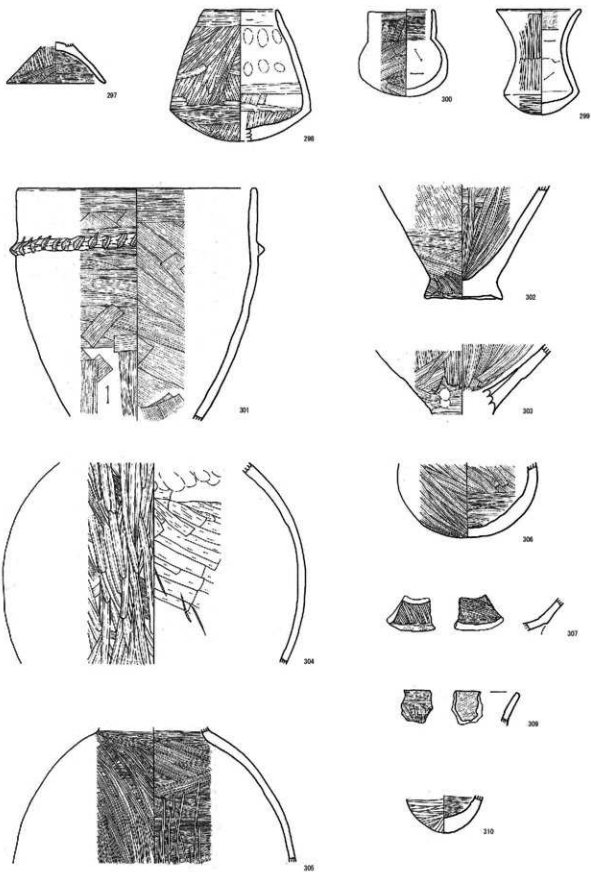
295



296

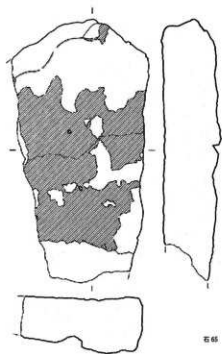
0 (1:4) 10cm

第2-114 圖 竪穴建物跡 24 号 出土遺物(土器①)

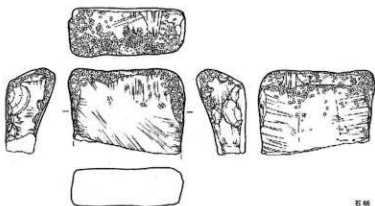


第2-115 圖 豎穴建物跡 24 号 出土遺物(土器②)

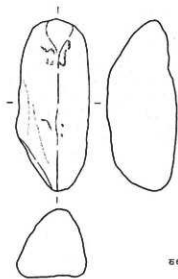
0 (1:4) 10cm



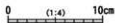
石65



石66



石67



第2-116圖 豎穴建物跡24号出土遺物(石器)

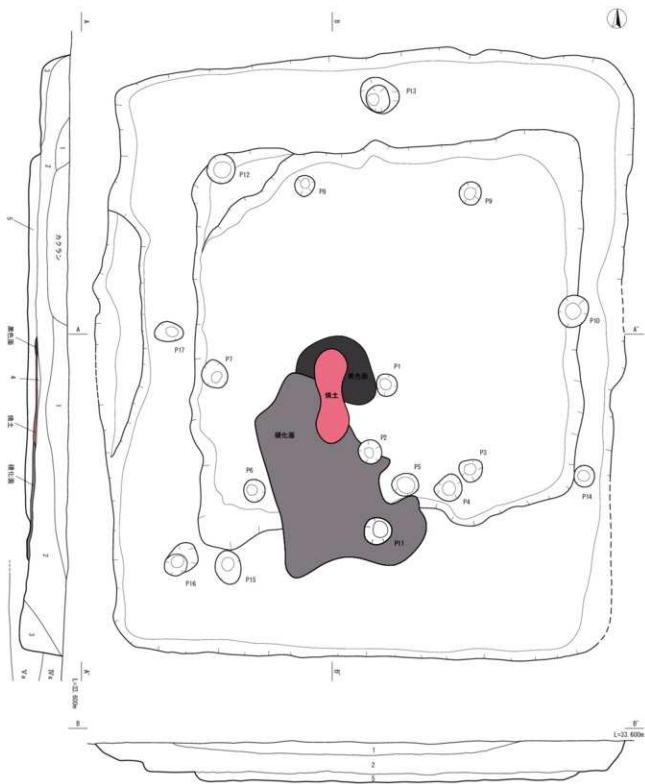
表2-46 竪穴建物跡24号出土土器

図 番 号	遺物 番 号	正 面	器 種	部位 (次級部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 114	288	○	甕	口縁部-胴部	B	—	30.4	—	工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:橙	石・黒・小・ ほこ	
	289	○	甕	口縁部-胴部	B	—	25.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:橙	石・長・白・ 黒・小	
	290	○	甕	口縁部-胴部	B	—	20.9	—	工具ナデ	工具ナデ ミガキ	外:橙 内:にじみ・黄緑	石・白・黒・ 小	
	291	○	甕	口縁部-胴部	D	—	29.6	—	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	外:にじみ・橙 内:橙	石・白・黒・ 小	
	292	○	甕	口縁部-胴部	D	—	41.8	—	工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:にじみ・黄緑	石・白・黒・ 小	
	293	○	甕	胴部-胴部	—	—	19.9	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にじみ・橙 内:橙	石・白・白・ 黒	
	294	○	甕	胴部-胴部	—	—	—	7.4	工具ナデ	工具ナデ	外:にじみ・橙 内:橙	石・白・黒・ 小	胴部高0.7cm
	295	○	甕	胴部-胴部	—	—	—	7.2	工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:にじみ・橙	石・黒・黒・ 白・小	胴部高10.6cm
296	○	甕・傘	胴部-底部	—	—	—	—	5.7	工具ナデ	ナデ	外:橙 内:橙	石・長・小	
2 115	297	○	高坏	脚部	—	—	—	10.2	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:橙	石・黒・小・ ほこ	
	298	○	埴	完形	—	13.8	7.8	—	工具ナデ	ナデ 工具ナデ	外:橙 内:にじみ・黄緑	石・白・黒・ 小	
	299	○	埴	完形	—	11.2	8.2	—	ミガキ	工具ナデ 指ナデ	外:明黄緑 内:明黄緑	石・長・黒・ 白・小	
	300	○	埴	完形	—	6.9	5.1	—	工具ナデ	工具ナデ 指ナデ	外:黄緑 内:黄緑	長・黒・ ほこ	
	301		甕	口縁部-胴部	D	—	25.0	—	工具ナデ 指ナデ	工具ナデ	外:橙 内:橙	石・白・黒	
	302		甕	胴部-胴部	—	—	—	7.8	工具ナデ	ナデ	外:にじみ・橙 内:橙	石・黒・白・ 小	胴部高10.3cm
	303		甕	胴部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:にじみ・橙	石・黒・白・ 小	
	304		傘	胴部	—	—	—	—	ヘケ具 工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:橙	石・白・黒・ 小	
	305		傘	胴部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ ミガキ	外:にじみ・橙 内:にじみ・黄緑	石・白・黒・ 小	
	306		傘	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:明黄緑	石・長・黒・ 白・黒	
	307		高坏	坏蓋	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ ミガキ	外:橙 内:明緑	石・白・小・ ほこ	
	309		埴	口縁部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:にじみ・橙	石・小・ ほこ	
	310		埴	底部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外:橙 内:にじみ・橙	石・白・小	

※308欠番

表2-47 竪穴建物跡24号出土石器

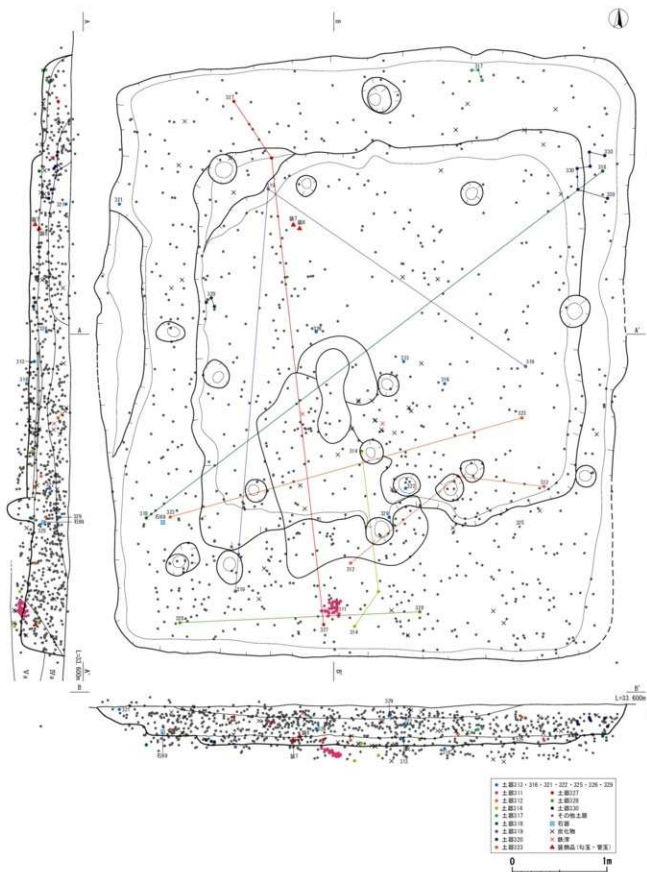
図 番 号	遺物 番 号	正 面	器 種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 116	石65	○	台石	破損	(28.0)	14.5	6.1	(259.0)	磨結硬火岩	
	石66	○	砥石	破損	(8.8)	12.5	4.6	(830.0)	砂岩	
	石67	○	棒状磯	完形	18.2	7.60	7.2	1410.0	ホルンフェルス	



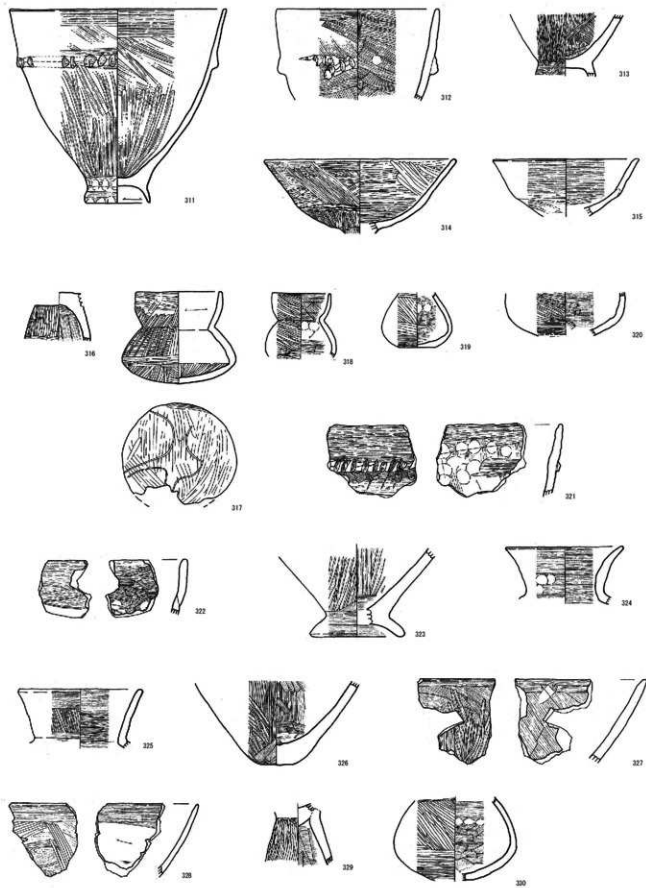
- 1 緑褐色土。埴土との混ざり、1~2cm程度の軽石を全体的に多く含む。
- 2 黄褐色土。埴土との混ざり、1~2cm程度の軽石を全体的に多く含む。
- 3 十分な緑褐色土。しまりや中あり。
- 4 黒褐色土。しまり強い。
- 5 黄褐色土に緑褐色土が混ざる。アカホヤや火山灰土ブロックも多く混ざる。

第2-117図 竪穴建物跡25号

0 1m
(1/40)

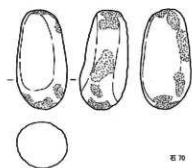


第2-118図 竪穴建物跡25号 遺物出土状況



0 (1:4) 10cm

第2-119 圖 豎穴建物跡 25 号 出土遺物(土器)

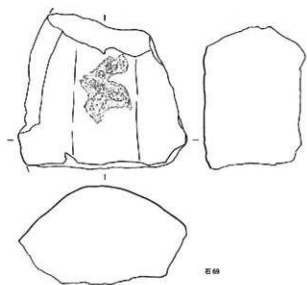


石 70



石 68

石 68・石 69・石 70
(1:4) 10cm



石 69

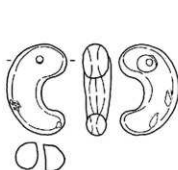


圖 7

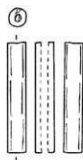


圖 6

0 (1:1) 2cm

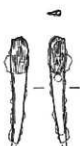


圖 10

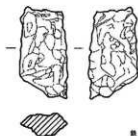


圖 11

0 (1:2) 5cm

第2-120圖 竪穴建物跡25号 出土遺物(石器・鉄製品・裝飾品)

表2-48 竪穴建物跡25号出土土器

図番号	遺物番号	床面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考	
2 119	311	○	甕	完形	—	28.5	22.8	6.8	工具ナデ	工具ナデ	外:緑 内:緑	長・白・黒	胴部高:1.9cm	
	312	○	甕	口縁部-胴部	—	—	17.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外:緑 内:緑	石・白・黒・小		
	313	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:二色(赤・黒) 内:緑	石・白・黒・小		
	314	○	高坏	坏部	—	—	20.0	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:明赤陶 内:緑	石・黒・白・黒		
	315	○	高坏	坏部	—	—	14.9	—	工具ナデ	工具ナデ	外:緑 内:二色(赤・黒)	白・小・注か		
	316	○	高坏	脚部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外:緑 内:二色(赤・黒)	石・白・黒・注か		
	317	○	埴	完形	—	7.3	6.7	—	工具ナデ ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	外:緑 内:緑	石・黒・黒		
	318	○	埴	口縁部-胴部	—	—	6.2	—	ミガキ	工具ナデ ナデ	外:明赤陶 内:明赤陶	石・注か		
	319	○	埴	胴部-底部	—	—	—	3.8	工具ナデ	工具ナデ	外:明赤陶 内:二色(赤・黒)	黒・白・小・注か		
	320	○	埴	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:明赤陶 内:緑	石・注か		
	321			甕	口縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナデ ナデ	外:緑 内:緑	石・黒・白・黒・小		
	322			甕	口縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナデ ナデ	外:明赤陶 内:明赤陶	石・黒・小・注か		
	323			甕・鉢	胴部-脚部	—	—	—	—	工具ナデ ナデ	外:浅黄陶 内:浅黄陶	小・注か		
	324			甗	口縁部	—	—	12.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外:緑 内:緑	石・白・小・注か	
	325			甗	口縁部	—	—	12.8	—	工具ナデ	工具ナデ	外:浅黄陶 内:浅黄陶	石・白・小・注か	
	326			甕・甗	胴部-底部	—	—	—	3.4	工具ナデ	工具ナデ	外:二色(赤・黒) 内:緑	石・長・黒・小	
	327			鉢	口縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	外:二色(赤・黒) 内:二色(赤・黒)	石・白・黒・小	
	328			不明	口縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ナデ	外:明赤陶 内:緑	石・黒・黒・注か	
	329			高坏	脚部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外:緑 内:二色(赤・黒)	石・黒・注か	
	330			埴	胴部-底部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外:明赤陶 内:緑	小・注か	

表2-49 竪穴建物跡25号出土石器

図番号	遺物番号	床面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 120	石68		金床石	破損	(11.8)	10.9	4.7	(620.0)	砂岩	
	石69		台石	破損	(16.1)	17.8	10.4	(270.0)	凝灰岩	
	石70		磨盤石	完形	18.2	7.6	7.2	1410.0	雲山岩	

西側の竪穴建物跡群(第2-121図)

前述のとおり川久保遺跡の31区と32区の境には高低差1m程の斜面が存在しており、その斜面をちょうど標高34mのラインが通っている。そのラインの西側の緩やかな斜面には多くの遺構が検出されている。標高34mラインより約20m西側の範囲では、南北方向に帯状の密な状態で方形竪穴建物跡が広がっており、その西側には円形の竪穴建物跡が複数集中して検出されている。さらにその西側には方形竪穴建物跡が数基散在している。G～J 27・28区に関しては、現代の建物が建っていた場所であり、基礎工事等により大きく攪乱を受けており、包含層は残存していなかった。

竪穴建物跡26号(第2-122図)

竪穴建物跡26号は、調査区北側B30区Va層で検出した。遺構の北側は調査区外へと広がっている。大きさは東西軸約4.0m、南北軸の残存部分で約3.5mである。南北軸の長さは不明であり、長軸の向きは分からないが、建物はほぼ方位に沿って建てられている。検出面から底面までの深さは40～45cmである。張り出しは確認されていない。遺構内には土坑が4基検出されている。土坑1は大きさが長軸約50cm、短軸約45cmの不定形状を呈し、深さは中央部が一段下がる形状をしており約20cmである。形状から柱穴の可能性も考えられる。土坑2は土坑1のすぐ南側に作られており、長軸約70cm、短軸約50cmの略楕円形を呈している。深さは約10cmと浅く、上位には施土が検出されており、炉跡である可能性も考えられるが、炭化物は見られていない。土坑3は東側から検出された土坑であり、直径約70cmの円形を呈し、深さは約25cmである。東側から検出された溝状遺構を切る形で検出されている。土坑4は南側中央部で検出されており、ほぼ壁に接して作られている。一边が約60cmの隅丸形状を呈し、深さは約15cmである。

竪穴建物跡26号の東側には東壁と平行に溝状遺構が検出されている。北側は竪穴建物跡と同じく調査区外へと続いているが、南側は南壁手前で収束している。幅は北側が広く約55cm、南側に向かうにつれ幅が狭くなり、南側では約30cmとなる。深さは約10cmである。遺構の周辺からは竪穴建物跡26号に属すると考えられる柱穴が5基検出されており、全て同じ暗褐色土を埋土としている。明確な貼床面が確認されておらず、中央の柱穴と考えられる土坑1や、炉跡の可能性のある土坑2は遺構の底面から掘り込まれている。そのため、竪穴建物跡26号には貼床は形成されなかったと考えられる。遺構の埋土は自然堆積の様相を示しているが、埋土3の上面には硬面が確認されている。

出土遺物(第2-123図)

遺物は口縁部が外反もしくは外傾する甕が主体的に出

土しているのが特徴である。甕以外の器種の出土量は少ない。また、ほとんどの遺物が底面から浮いた状態で出土している。

土器(第2-124・125図)

331は、その出土状況から竪穴建物跡26号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

331は口縁部から胴部上位の資料である。口径25.6cmを測る。南側土坑のすぐ北側と、東壁際の底面から出土している。内外面とも口縁部は横方向の工具ナデを施している。口縁部以下は摩滅が著しく調整の観察が困難であるが、横・斜め方向のナデを施しているようである。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。突帯内面部分は押指さえが巡る。

332～338はその出土状況から、竪穴建物跡26号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

332は口縁部から胴部にかけての資料である。東壁中央部付近で、底面より10cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデを施している。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は横方向の工具ナデを施した後に、斜め方向の工具ナデを施している。

333は口縁部から胴部下位までの資料である。口径18.8cmを測る。中央柱穴のP1と東壁の中間付近で、底面より20cm程度浮いた状態で出土している。口唇部にはナデを施している。外面口縁部には斜め方向のナデを施した後に、部分的にミガキが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は斜め方向のナデが施されている。内面口縁部上端は横・斜め方向の工具ナデが施されている。口縁部は斜め方向の工具ナデを施した後に、口縁部から胴部上位にかけて、幅3mm程度の溝の深い工具ナデを施している。胴部中位以下には斜め・縦方向の工具ナデが施されている。胴部中位には粘土の接合痕が明瞭に残り、その上に押指さえが行われている。

334は口縁部が外傾する甕D型の口縁部から胴部中位までの資料である。口径32.2cmを測る。遺構の北東部から南側にかけて広く分布して出土しているが、分布の中心は北東部である。底面から20cm以上浮いた状態で出土している破片が大部分を占める。外面口縁部には横方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部には縦方向の工具ナデが施された後に、胴部中位では縦方向のミガキが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半から胴部にかけては斜め方向の指ナデが施されている。胴部中位以下は摩滅が著しいが、部分的に縦方向のミガキが確認できる。口

縁部には内外面から土器の器面を打ち欠いて穿孔を空けている。

334 は全体的に煤が付着しており、この付着炭化物の放射性炭素年代測定（AMS測定）をおこなったところ（第3分冊自然科学分析参照）、2σ 暦年校正年代で251calAD-382calAD（95.4%）となった。およそ3世紀中頃～4世紀後半の範囲である。

335 はほぼ直行する甕C類の口縁部から胴部上位の資料である。南側土坑の北側に隣接して、底面から10cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部には横方向の工具ナデを施しており、部分的にはその上から指ナデが施されている。口縁部は横方向のナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面胴部は横方向のナデを施している。内面口縁部上端は横方向の工具ナデを施している。口縁部は摩滅が著しいが横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯内面部分には指押さえが並ぶ。胴部には横方向のナデが施されている。

336 は高坏の脚部資料である。南西角部付近の検出面直下から出土している。

337 は高坏の脚柱部の資料である。東壁付近で底面から、わずかに浮いた状態で南北に帯状に出土している。外面は縦方向のミガキが、内面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。

338 は完形に復元できた手づくね土器である。口径4.8cm、器高2.9cmを測る。北東部で、底面より10～20cm浮いた状態で出土している。内外面ともに指押さえが密に行われている。

339～342 および石71は、堅穴建物跡26号埋土中から出土した遺物であるが、出土位置が不明な一群である。

339 は口縁部が外反する甕C類の口縁部から胴部下位までの資料である。

340 は口縁部が外傾する甕B類の口縁部から胴部下位までの資料である。口径30.2cmを測る。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部上端には横方向の工具ナデが、それ以下には横・斜め方向のナデが施されている。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部から胴部上位にかけては、斜め・横方向の工具ナデが施されている。胴部中位以下は横方向のナデが施されている。突帯内面部分には指押さえが並ぶ。

341 は口縁部がわずかに内湾する甕D類の口縁部から胴部中程までの資料である。口径27cmを測る。外面口縁部は横方向の工具ナデを施している。胴部上端は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。胴部にはナデが施されているようであり、部分的には斜め方向の工具ナデが確認できる。内面口縁部上位は横方向の工具ナデが施されている。口縁部下位から胴部にかけては、

各方向のナデが施されている。突帯内面部分には指押さえが並ぶ。

342 は甕・壺の胴部上位から底部までの資料である。

石器（第2-125図）

石71は棒状礮である。上面の一部にわずかながら痕跡が確認できる。

炭化物・炭化木・炭化種子（第3分冊 自然科学分析参照）

堅穴建物跡26号では2点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から堅穴建物跡26号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し検討を行い、1点の炭化物について放射性炭素年代測定（AMS測定）を実施した（26号炭1）。分析の結果、確率の高い2σ 暦年校正範囲で211calAD-339calAD（92.3%）となり、およそ3世紀前半～4世紀中頃の値である。土器334の付着炭化物の分析結果と近い値となっている。

堅穴建物跡27号（第2-126-127図）

堅穴建物跡27号はB29・30区からVa層で検出した。堅穴建物跡28号・29号と切り合っており、両堅穴建物跡を切っていることから、3基の堅穴建物跡の中で最も新しい建物跡であることが分かる。3基はほぼ同じ方向を向き、張り出しを持つという共通した特徴を持つ堅穴建物跡である。大きさは、長軸（北西-南東）約4.5m、短軸約3.8mの隅丸長方形を呈し、南東部中央に張り出しを持つ。張り出しを含めると短軸は約3.3mとなる。検出面から底面までの深さは約55cmであり、底面から約25cmの厚みで、ほぼ水平な貼床を形成している。建物跡の中央には長軸約100cm、短軸約60cmの歪な楕円形状の土坑が作られており、長軸は北西-南東を軸とし、建物跡の短軸側の壁面と平行する。土坑の深さは10～15cmであり、中心部より南側には焼土が検出されている。また、南側から西側にかけては、部分的に黒く焼けた様な痕跡が検出されている。土坑内からは遺物の出土は見られなかった。土坑の南側半分の周囲には焼土域が広がり、この焼土域の存在からも、土坑は炉跡として使用されたと考えられる。炉跡の周囲には硬化面が広がり、特に東側から南東側、そして南西側へと広がっており、南側は炉跡に向かって方形に凹む形状を呈している。硬化面は厚いところでは5cm程度の厚さで硬化が見られた。柱穴は3基検出されており、全て貼床面上面から検出されている。P1は炉跡の東側の近い位置にあり、焼土域はP1を避けるように東側には広がっていない。長軸約27cm、短軸約24cmの略楕円形を呈し、深さ約22cm、柱穴の最小径は約15cmを測る。P2は北西壁中央の壁際に掘られており、直径約22cmの略円形を呈し、深さは約65cmと深く、底部に行くほど狭くなる形状をしており、最小径は約5cmと小さい。P3は北西壁の北側角部に近い位置に掘られており、直径約18cmの円形を呈

し、深さは約25cmであり、P2と同じく底部が狭くなる形状をしており、最小径は約8cmである。柱穴の埋土は3基とも同じ暗褐色土を主体とする埋土である。

竪穴建物跡27号～29号に堆積している埋土は、基本的には貼床埋土、硬化面埋土を含めて暗褐色土を呈しており、火山灰、軽石や炭化物の混入の割合により細分されている(表2-51)。竪穴建物跡27号の埋土の堆積状況を見ると、レンズ状堆積は見られず、人為的に埋められた可能性も考えられる。

表2-50 竪穴建物跡27号～29号暗褐色埋土一覧

埋土	色調	アカホヤ	池田軽石	炭化物
1	暗褐色	△	△	▲
5	暗褐色	○	○	
8	暗褐色	○		
9	暗褐色	▲		
11	暗褐色			◎
12	暗褐色	▲		
13	暗褐色		○	

◎多い ○含む △少ない ▲わずか

出土遺物(第2-128・129図)

遺物は遺構全体に満遍なく出土しており、口縁部が外傾もしくは外反する甕B類が主体的に出土している。遺構の西側角部には流れ込み、もしくは廃棄されたと考えられる遺物が集中して出土している状況が見られる。石器は砥石が2点出土している。鉄洋も4点出土しているが、うち3点は流れ込みである。

土器(第2-130～132図)

343～352は、その出土状況から、竪穴建物跡27号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

343は口縁部が外傾する甕D類の口縁部から胴部中程度までの資料である。口径29.2cmを測る。遺構の南側に集中して、貼床面から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。胴部上位は斜め方向の工具ナデが、胴部中位は横・斜め方向のナデが施され、部分的に縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部は横方向の工具ナデが、胴部は横方向のナデが施されている。

343の外面には全体的に煤が付着しており、この付着炭化物の放射性炭素年代測定(AMS測定)を行った(第3分冊自然科学分析参照)。分析の結果、2σ暦年校正年代で251calAD-382calAD(95.4%)となった。おおよそ3世紀中頃～4世紀後半の値である。

344は口縁部が外傾する甕B類の口縁部から胴部上位の資料である。遺構中心部と南南東部の要り出しとの中間付近で、貼床面および、貼床面よりも下位の貼床埋土中から出土している。外面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部は横方向の工具ナデが、胴部

は横方向のナデが施されている。

345は口縁部が外傾する甕D類の口縁部から胴部上位の資料である。出土位置。外面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。外面胴部は横・斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、横方向の工具ナデを施している。その下位には縦方向のミガキが施されているが、一部のミガキは光沢を持たない。内面口縁部は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施され、指押さえが並ぶ。突帯内面部分は横方向にケズリが行われている。胴部は斜め方向のナデが施されている。

346は口縁部から胴部資料である。口径30.8cmを測る。貼床面よりも下位の貼床埋土中から出土した一括遺物である。外面口縁部上半は横方向の工具ナデが、下半は斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上半は斜め・横方向の工具ナデが、下半は横方向の指ナデが施されている。

347は甕の胴部中位から脚部の資料である。底径11.0cm、脚部高4.0cmを測る。遺構の東側から南西側にかけて分布し貼床面から出土している。さらに竪穴建物跡29号からも出土しており、こちらも貼床面からの出土である。竪穴建物跡29号の貼床面でも出土していることから、切り合う3基の遺構の中で最も古い遺構である竪穴建物跡29号に帰属する遺物とも考えられるが、竪穴建物跡29号で出土している破片は、最も小さい底部片が1点のみであり、他の底部片及び、胴部から脚部にかけての大型の破片等は竪穴建物跡27号から出土している。胴部外面は縦方向の工具ナデが施されているが、上から幅が5mm、3mm、7～10mmと工具の幅が異なり、胴部下端では工具が器面に打ち込まれている。脚部上半は縦方向の工具ナデが、下半は横方向の工具ナデが施されている。内面胴部には斜め方向の指ナデが施されており、胴部下位には部分的に斜め方向のキズ状の工具痕が残る。胴部中位と下位の境目付近には指押さえが並ぶ。脚部内面は斜め・横方向の工具ナデが施されている。

348は臺の肩部資料である。遺構の南側で貼床面から出土している。外面は斜め方向の工具ナデを施した後に、幅3～4mm程度の縦方向の工具ナデを施している。内面は各方向の工具ナデが施されている。

349は小型の鉢である。口径7.3cm、底径2.7cm、器高6.1cmを測る。中央土坑の埋土中から出土している。外面は縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部から胴部上位にかけては横方向の指ナデが施されており、その上から指押さえが巡る。胴部中位から底面までは斜め方向の工具ナデが施されている。

350は高坏の坏部資料である。貼床面よりも下位、貼床埋土中から出土した一括遺物である。外面坏部上端は幅7mm程度の横方向の工具ナデが施されている。この工具ナデは光沢を持ち、ミガキに近い調整であり、工具の

スジ状の痕跡も明瞭である。その下位には斜め・横方向のミガキが施されている。内面坏部上端は横方向のミガキが施されている。その下位には斜め・横方向のミガキと斜め方向の幅4mm程度の工具ナデが施されている。

351は埴の口縁部資料である。遺構の中心部と北東壁の中間付近で、貼床面から出土している。

352は埴の口縁部資料である。口径8.6cmを測る。貼床面よりも下位、貼床埋土中から出土した一括遺物である。口唇部はナデが、口縁部上半は横方向の工具ナデが施されている。口縁部下半は斜め方向の工具ナデを施した後に、幅1mm程度の斜め方向の工具ナデが施されている。この工具ナデはミガキに類似するが光沢を持たない。内面は斜め・横方向の工具ナデが施されている。

353～357はその出土状況から、竅穴建物跡27号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

353は壺もしくは甕の資料である。遺構の中心部と西角部との中間付近、貼床面から10cm程度浮いた位置から検出面にかけて、ややまとまって出土している。外面突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は縦・斜め方向の工具ナデを施した後に、胴部中心はミガキを施している。内面胴部上位から中位にかけては斜め方向の指ナデが、胴部中心には横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、斜め方向のミガキを施している。内面突帯部分には指押さえが2列並び、その間に一部ミガキが施されている。

354は鉢もしくは甕の胴部中心から底部にかけての資料である。破損部分端部が先細りの形状を呈しているため器種を鉢と判断した。遺構の中心部と西角部との中間付近、貼床面から10cm程度浮いた位置から検出面にかけて、ややまとまって出土しており、その出土状況は353の出土状況に類似している。外面は全体的に斜め・横方向の指ナデが施されており、上位にはその上から横・斜め方向のミガキが施されている。また縦方向の工具ナデも確認できるが、一部は指ナデによりナデ消されている。底部には指押さえが巡る。内面は斜め方向の指ナデが施されており、底面には指押さえが行われている。

355は完形に復元できた高坏である。口径16.5cm、底径9.8cm、器高13.3cmを測る。遺構の中心部と西角部との中間付近で、貼床面から10cm程度浮いた位置から検出面にかけて、まとまって出土している。355の出土状況も、353・354の出土状況と類似しており、このことから、ほぼ同時期に流れ込んだ、もしくは廃棄された可能性が考えられる。外面は全体的にミガキが施されている。坏部内面もミガキが施されている。脚部内面はナデが施されており、部分的に工具ナデも施されている。

356は高坏の坏部下位から脚部上位の資料である。遺

構の中心部と北東壁の中間付近で、貼床面から出土している。外面は幅2～3mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。ミガキに類似するが光沢を持たない。坏部内面は指ナデが、脚部内面は縦方向の工具ナデが施されている。

357は高坏の脚部資料である。脚部端部は欠損している。遺構の北東側から、南角部まで散在して出土しており、1点は竅穴建物跡28号からも出土している。出土位置は全て貼床面から10cm以上浮いた状態で出土している。なお、竅穴建物跡28号から出土している破片が一辺2cm程度と最も小さいため、竅穴建物跡27号に帰属する可能性が高い。外面脚部には斜め方向のミガキが施されており、脚筒部と裾部の境目にはそれらのミガキとは逆の斜め方向に短いミガキが連続して施されている。脚筒部内面は粗い斜めの工具ナデが、脚筒部内面には横方向のナデが施されている。

石器(第2-133・134図)

石72は砥石である。遺構の北側で貼床面から出土している。表面と側面に光沢を持ち、擦痕が確認できる。

石73は砥石である。埋土中一括取上げ資料であり、流れ込みの可能性が高い。

鉄滓等

竅穴建物跡27号～29号の検出面では、鉄滓が複数出土しており、鍛冶関連遺構の可能性も考慮して調査を進めた。その結果、竅穴建物跡27号の埋土中から4点の鉄滓を検出したが、3点は貼床面よりも10cm以上浮いた状態で出土している。残り1点は柱穴P1の上面から出土しているが、極小片であり、1点のみであるため、流れ込みの可能性が高い。

炭化物・炭化木(第3分冊 自然科学分析参照)

竅穴建物跡27号では4点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から竅穴建物跡27号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し検討を行い、1点の炭化物について放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した(27号炭1)。27号炭1は遺構の中央部よりやや北よりの位置で、貼床面から出土している。分析の結果、確率の高い2 σ 暦年代範囲で232calAD-349calAD(94.4%)となり、おおよそ3世紀前半～4世紀中頃の値となっている。

また出土した炭化木の樹種同定も行っており、クワ属とサカキと同定されている。

竅穴建物跡28号(第2-126・127図)

竅穴建物跡28号はB・C29・30区Va層で検出した。北西部分を竅穴建物跡27号に切られており、また南東部分では竅穴建物跡29号を切った状態で検出されている。大きき・形状の詳細は不明であるが、残存している東西軸は約3.4mを測る。南南東部分には張り出しを持

つ、検出面から底面までの深さは15～25cmであり、中央部分が10cmほど深くなっている。貼床面は検出面から約15cmの深さで検出されている。竪穴建物跡27号に遺構の中央部分を含めて切られているため、中央部分の様相は不明であるが、中央部分から南側及び東西方向に硬化面の広がり確認されている。硬化面は東側により広く広がっているようである。張り出し部分手前の硬化面の切れ目から張り出し部分の範囲では貼床が検出されていない。張り出し部分および、その手前側では平面では確認できていないが、断面では貼床が途切れ、土坑状の掘り込みが確認できるため、張り出し部分とその北西側にかけて、土坑が掘られていた可能性が考えられる。残存している範囲内では柱穴は確認されていない。

出土遺物(第2-128・129図)

竪穴建物跡27号に遺構の北側半分を切られているが遺物の出土量は多く、特に貼床面から多くの甕が出土しているのが特徴である。また、張り出し部から棒状甕がまとまって出土している。

土器(第2-130～132図)

358～366はその出土状況から、竪穴建物跡28号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

358は口縁部が外傾する甕B類の口縁部から胴部下位までの資料である。口径31.4cmを測る。遺構の中央部付近から南側へ列状に分布し、一部は竪穴建物跡29号の範囲にも広がっている。竪穴建物跡28号内では、貼床面と張り出し部の土坑内から出土している。竪穴建物跡29号では検出面から出土している。このことから、358は竪穴建物跡28号に帰属すると考えられる。外面口縁部は横方向の工具ナゲが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横・斜め方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。突帯はこの工具ナゲの向きに沿って貼り付けられている。胴部には縦・斜め方向の工具ナゲが施された後に、幅1～2mm程度の縦方向のミガキが施されている。この幅の細いミガキは逆「U」字状に施され、2つのミガキの頂点を合わせることを意識して施されていることが分かる調整であり、文様・装飾を意識している可能性も考えられる。内面口縁部は横方向の工具ナゲが施されている。突帯内面部分は指押さえを列状に密に行っている。胴部には斜め方向の工具ナゲを施した後、胴部下位では外面と同じ幅1～2mm程度のミガキが施されているが、外面ほど丁寧に施されておらず、逆「U」字状の頂点が合っていない箇所も確認できる。

358の外面には全体的に煤が付着しており、この付着炭化物の放射性炭素年代測定(AMS測定)を行った(第3冊自然科学分析参照)。分析の結果、確率の高い2σ暦年校正年代で248calAD-358calAD(88.5%)となった。おおよそ3世紀中頃～4世紀中頃の値である。

359は口縁部が外傾する甕D類の口縁部から胴部上位

にかけての資料である。遺構の南南東の壁に近い位置で、貼床面から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナゲが、口縁部は横方向の指ナゲと斜め方向の工具ナゲが施されている。突帯には横方向の工具ナゲが施されている。胴部には各方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部上位から中位にかけては、横方向の工具ナゲが施されている。口縁部下位から突帯内面部分にかけては、指押さえが並ぶ。胴部には横方向のナゲが施されており、斜め方向の工具痕が残る。

360は口縁部が外傾する甕D類の口縁部から胴部上位の資料である。口径34.4cmを測る。竪穴建物跡27号の南側半分の広い範囲と、竪穴建物跡28号の南東角部付近で出土している。出土量は竪穴建物跡27号の方が多いが、竪穴建物跡27号では貼床面から10cm以上浮いた状態で出土しているのに対し、竪穴建物跡28号では貼床面から出土している。また、竪穴建物跡27号での出土状況は、遺構の南東側と南西側に分布のまとまりがあり、竪穴建物跡28号の破片に近い南東側のまとまりは、貼床面から5cm程度浮いたものが見られるのに対し、南西側のまとまりは、検出面から出土しているものが多い。竪穴建物跡28号に帰属する遺物と判断した。外面口縁部は横方向の工具ナゲが、口縁部は斜め方向の工具ナゲと、斜め・横方向の指ナゲが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は縦方向の単位幅が不明瞭な工具ナゲが施されている。

361は口縁部が外傾する甕D類の口縁部から胴部上位の資料である。口径26.5cmを測る。遺構の壁際に沿うように西側から東側まで散在して出土しており、竪穴建物跡27号からも破片1点が出土している。出土位置は貼床面であり、竪穴建物跡27号出土の1点のみ貼床面から15cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部は斜め・縦方向の指ナゲが施されており、口縁部上部の一部分のみ工具ナゲが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は縦方向の工具ナゲが施されている。内面は指ナゲが施されており、部分的に工具ナゲも施されている。口縁部上部には指押さえが並ぶ。

362は口縁部上部がほぼ直行する甕D類の口縁部から胴部中位までの資料である。口径32.6cmを測る。遺構の南東角部で貼床面から出土している。竪穴建物跡27号からも破片1点が出土しているが、こちらは貼床面から5cm程度浮いた状態で出土している。口縁部は横方向の工具ナゲを施した後に、縦方向の粗い工具ナゲを施している。外面口縁部上半は横方向の工具ナゲが、口縁部下半は斜め方向の工具ナゲが施されている。胴部上部は横方向の工具ナゲが、胴部上位は縦方向の工具ナゲが、胴部中位は斜め方向のナゲが施されている。内面は全体的

に丁寧な横方向の工具ナデが施されている。口縁部上位には指押さえが巡る。

363は口縁部が内湾する雙D類の口縁部から胴部中位までの資料である。口径27.5cmを測る。遺構の南側で貼床面から出土している。平面での出土位置は実測が行われている。調査時の記録から貼床面出土としたが、計測値で比較すると、貼床面から10cm程度上位に点が落ちる。外面口縁部から胴部上端にかけては横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。胴部は縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが施されている。工具ナデ下端は調整痕が1本の沈線状となっている。口縁部下半から胴部にかけては横・斜め方向の指ナデが施されており、部分的に工具ナデが確認できる。突帯内面部分には指押さえが2列巡る。

363の外面には全体的に煤が付着しており、この付着炭化物の放射性炭素年代測定(AMS測定)を行った(第3分冊自然科学分析参照)。分析の結果、確率の高い2σ暦年校正年代で237calAD-350calAD(93.9%)となった。おおよそ3世紀中頃～4世紀中頃の値である。

364は口縁部がほぼ直行する雙D類の口縁部から胴部中位までの資料である。遺構の東西に広く分布し貼床面から出土している。竪穴建物跡27号からも破片1点が出土している。外面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半は横方向のナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けているが、突帯の下位には横方向の工具ナデは確認できない。胴部は斜め・縦方向のナデが施されている。内面口縁部上端は単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデが、口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯内面部分とその下位は、横方向の工具ナデが施されている。胴部上位には工具痕が多く見られ、横方向の短い長さの工具ナデが施されている。胴部中位には幅7mm程度の斜め方向の工具ナデが施されている。

365は雙の胴部中位から脚部までの資料である。脚部は破損している。遺構の東南壁付近、竪穴建物跡27号に隣接して出土しており、竪穴建物跡27号からも出土している。貼床面から出土しているのは竪穴建物跡28号の破片のみであり、竪穴建物跡27号からは貼床面から浮いた状態で出土している。外面胴部は縦方向の工具ナデが施されている。脚部付近は横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面胴部は横・斜め方向の工具ナデを施した後に、部分的に斜め方向のミガキを施している。

366は雙もしくは鉢の胴部下位から脚部の資料である。底径7.4cm、脚部高0.7cmを測る。遺構の東壁付近で貼床面から出土している。平面での出土位置は実測がおこなわれている。366も362と同じく、調査時の記録は貼床面出土であるが、計測値で見ると、貼床面より10cm

程度上位に点が落ちている。外面は斜め・横方向の工具ナデが、内面は斜め方向の工具ナデが施されている。

367～369はその出土状況から、竪穴建物跡28号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

367は口縁部が外反する雙B類の口縁部から胴部である。口径26.0cmを測る。遺構の南側で、貼床面から10cm以上浮いた状態で出土している。外面口縁部は縦方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、口縁部上端と下端に横方向の工具ナデを施している。胴部上端には横方向の工具ナデが施されている。胴部上端の工具ナデは突帯を貼り付ける前に施されているため、突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けたと考えられる。内面口縁部上位は横方向の工具ナデが、口縁部中位から胴部上位にかけては、斜め方向の指ナデが施されている。

368は甕もしくは鉢の胴部下位から脚部の資料である。底径8.5cm、脚部高1.1cmを測る。遺構の南側で検出面直下から出土している。外面胴部は斜め・横方向の工具ナデが施されている。脚部には横方向の工具ナデが施されており、指押さえが巡る。内面胴部および脚部には、斜め方向の工具ナデが施されている。

369は完形に復元できた手づくね土器である。口径6.2cm、器高3.6cmを測る。遺構の東壁付近で、貼床面からわずかに浮いた状態で出土している。貼床面からの距離がわずかであるため、竪穴建物跡28号に帰属する可能性を持つ遺物である。外面は部分的に指押さえが行われている以外は器面調整を施していない。器面は凹凸が著しく接合痕が残る。内面は横方向の工具ナデが施されており、外面と比較すると、きちんと器面調整が行われている。内外面で片側のみは被熱を受けており、器面が灰色に変色している。

石器(第2-133・134図)

石74～石77は4点とも砂岩製の棒状礫である。石74がやや大きい。石75・石76を含めた3点は、長さ・幅・厚みがほぼ同じである。

石74は遺構の東壁付近で、貼床面から出土している。表面と側面の上半分には擦痕が確認できる。

石75～石77は3点ともに張り出し部にあつたと考えられる南側土坑部分から出土しており、石76は土坑底面から出土している。

竪穴建物跡29号(第2-126・127図)

竪穴建物跡29号はB・C29・30区Va層で検出した。竪穴建物跡27号・28号に北側角部を含めた北東部分を切られた状態で検出されており、3基の竪穴建物跡の中では最も古い建物跡である。大きさは長軸(北東-北西軸)約6.0m、短軸(北西-南東軸)約5.8mの隅丸方形

状を呈し、南東部分には張り出しを持ち、張り出し部分を含めると北西-南東軸は約6.5mである。検出面から底面までの深さは約40cmであり、底面から15～20cmほどの厚さで貼床が形成されている。遺構の中央よりも50cmほど南東側（張り出し側）に、直径約40cmのやや歪な円形の土坑が検出されている。貼床面上面から検出されており、深さは約20cmであり、埋土には5cm程度の焼土ブロックが多く含まれている。また、わずかではあるが炭化物も含まれていることから、この土坑は炉跡と考えられる。遺構の南東部分、張り出しの手前には、長軸約0.9m、短軸約0.6mの楕円形の土坑が検出されている。深さは15cm弱と浅いが、埋土中からは土器片と、15cm程の長さの長方形の礫が複数出土している。硬化面は貼床面の範囲に広く広がっており、北西側で壁までの距離が約80cmとやや離れ、南東側で約20cmと壁の近くまで硬化面が形成されている。硬化面の厚さは、厚い部分で約5cmである。柱穴は5基検出されており、検出面が確認できた柱穴は全て貼床面上面から検出されている。P1は建物跡中央で検出された柱穴である。直径約25cmの略円形を呈し、上部で攪乱を受けているが、貼床面の高さから想定される深さは約65cmである。硬化面は、この柱穴P1を避けるように形成されている。P2は北西壁近く、硬化面の切れ目に形成された柱穴であり、約15cm中央部側に柱穴P3が隣接している。約25cmの略円形を呈し、深さは約35cmを呈する。P3はP2に隣接し、硬化面範囲内に形成されている。直径約20cm、深さ約25cmと、P1と比較して一回り小さく浅いが、最小径はP1よりも大きい。P4はP1から北東に約85cm離れた硬化面範囲内から検出されており、直径約16cm、深さ約45cmを呈する。P5は南東角部近くの壁際の硬化面範囲内から検出された柱穴であり、直径約22cm、深さ約25cmを呈する。

出土遺物（第2-128-129図）

遺構の大部分が残存している割には、実測対象遺物は少ない。遺物の分布は遺構の南側にやや多く分布している状況である。

土器（第2-130～132図）

370～378は、その出土状況から、竪穴建物跡29号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

370は口縁部がわずかに外反する甕C類の口縁部から胴部中位までの資料である。口径は30.2cmを測る。遺構の中心部より南に1.7m程の位置で、貼床面から出土している。口縁部はミガキが施されている。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部には斜め方向の工具ナデが施された後に、斜め方向のミガキが施されている。胴部は斜め方向の工具ナデが施された後に、斜め・縦方向のミガキが施されている。内面口縁部上半は横方向のミガキが、下半は斜め方向の指ナデを施した後に、部分的に斜め方向のミガキが施されている。突帯内面部分に

は指押さえが2列巡る。胴部は横方向の指ナデが施されている。

371は口縁部がほぼ直行する甕D類の口縁部から胴部中位の資料である。口径31.6cmを測る。竪穴建物跡29号貼床面一括出土遺物である。外面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は斜め方向の工具ナデを施した後に、幅3mm程度の縦方向の工具ナデを施している。内面口縁部上端は横方向の工具ナデを施し、その下位には指押さえが巡る。口縁部下位から胴部にかけては、横方向の指ナデを施した後に、部分的に幅3mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。

372は甕もしくは壺の脚部資料である。底径10.0cm、脚部高2.8cmを測る。遺構の南東壁付近で貼床面から出土している。外面は全体的に指押さえが行われている。内面は斜め方向の工具ナデが施されており、端部付近には指押さえが巡る。

373は甕もしくは壺の底部片と考えられる資料である。底部は底面と側面の2か所で、粘土の貼り付け痕跡が明瞭に残り、底径5.1cmを測る。遺構の中心部よりやや南側、東側および竪穴建物跡27号で、貼床面から出土している。外面胴部下端は横方向の指ナデが施され、底部には指押さえが行われている。内面は斜め方向の指ナデが施されている。

374は壺の胴部から底部資料である。底径6.9cmを測る。竪穴建物跡27号との際や遺構の南南東側で貼床面から出土している。外面胴部は縦・斜め方向の工具ナデを施した後に、斜め・横方向のミガキを施している。底部は指ナデが施され、器面は平滑に仕上げられている。内面胴部は横方向のミガキや工具ナデが施されている。底面付近では工具ナデは部分的に縦方向に施され、底面には指押さえが密に行われている。

375は丸底の鉢である。底部は破損している。張り出し部の手前にある土坑内に集中して出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデが、胴部には斜め方向のミガキが、底部付近では横方向のミガキが施されている。内面口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。口縁部には粘土の接合痕が顕著に残っている。胴部上位には横方向の丁寧なナデが施されている。胴部中位から下位にかけては横方向の工具ナデが施された後に、中位では部分的に斜め方向のミガキが施されている。底部付近では工具ナデの方向が斜め方向に変化している。

376は高坏の脚部の資料である。底径9.0cmを測る。坏部内面には赤色顔料が付着している。張り出し部手前にある土坑内の底面および、遺構西角部付近の貼床面で出土している。外面脚部は縦方向のミガキが施されている。脚部は横方向の工具ナデと縦方向のミガキが施さ

れている。内面はナデと横方向の工具ナデが施されている。

377 は完形に復元できた埴である。口径 11.0cm, 器高 12.0cm, 底部はわずかに平坦面を持ち底径 2.0cm を測る。遺構の中心部よりやや南側で、貼床面より出土している。平面での出土位置は実測がおこなわれている。外面口縁部と胴部下端は横方向の工具ナデが、胴部には縦・斜め方向のミガキが施されている。底部は横・縦方向のミガキが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが、下半は横方向のミガキが施されている。胴部は斜め方向の指ナデが施されており、胴部下端にはわずかに工具ナデの痕跡が残る。

378 は埴の胴部から底部資料である。底部はわずかに平坦面を持つ。遺構の南角部付近に集中して、貼床面から出土している。外面胴部は横方向の工具ナデを施した後に、横方向のミガキを施している。ミガキは胴部上位で幅 1～2mm 程度と細く、胴部中位では幅 3mm 程度と太くなり、胴部下位でまた細くなる。底部には工具ナデが施されている。内面は横方向の指ナデが施され、底面付近には部分的に横方向の工具ナデが施されている。内面には接合痕が残る、接合痕の上には指押さえが行われている。

379 ～ 387 はその出土状況から、竪穴建物跡 29 号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

379 は甕の胴部下半から脚部上端の資料である。遺構の中心部と張り出し部の間に散在して、貼床面から 10cm 程度浮いた状態および検出面から出土している。外面胴部は縦方向の工具ナデが、脚部は斜め方向の工具ナデが施されている。内面胴部は斜め・横方向の工具ナデと指ナデが施されている。脚部内面は横方向の工具ナデが施されている。

380 は甕もしくは壺の脚部資料である。底径 7.4cm を測る。内面脚部中央天井部分は張り出し、脚部高 0.4cm を測る。張り出し部手前の土坑の上位、検出面に近い位置で出土している。外面は横・斜め方向の工具ナデが施されており、脚端部には指押さえが行われている。内面の底面には指押さえが行われている。脚部内面には指ナデが施されている。

381 は丸底甕の底部と考えられる資料である。遺構の南側で検出面から出土している。外面はナデが施され、部分的には斜め方向の工具ナデが確認できる。内面は指ナデが施されている。

382 は高坏の坏部資料である。口径 29.4cm を測る。遺構の南西部、西北西部および竪穴建物跡 27 号から出土している。出土位置は検出面に近いものが多い。内外面ともに坏部上端に横方向の工具ナデを施し、その下位には横・斜め方向のミガキを施している。

383 は高坏の脚筒柱部資料である。遺構の北西部で、貼床面より 10cm 程度浮いた状態で出土している。外面坏部下端は横方向のミガキが密に施されている。脚部は縦方向のミガキが施されている。内面脚筒部上半は縦方向のナデが、下半は縦方向の工具ナデが施されている。脚筒部内面は横・斜め方向のミガキが施されている。

384 は高坏の脚柱部資料である。遺構の南側の 2 カ所に分かれて、貼床面から 20cm 程度浮いた状態で、検出面から出土している。外面は横・斜め方向の工具ナデが、内面は縦方向の工具ナデが施されている。

385 は高坏の脚柱部資料である。遺構の西角部付近で、検出面から出土している。外面は縦方向のミガキが、内面は縦・横方向のナデが施されている。

386 は埴の口縁部資料である。口径 7.7cm を測る。遺構の南側で、貼床面より 10cm 程度浮いた状態で出土している。口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部は縦方向のミガキが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが、下半は縦・横方向の指ナデが施されている。

387 は埴の口縁部資料である。口径 12.0cm を測る。内外面口縁部上端に赤色顔料が塗布されている。竪穴建物跡 27 号～ 29 号の一括取上げ資料である。外面口縁部上端は横方向の、その下位には縦方向の非常に丁寧な工具ナデが施されている。内面は横方向の丁寧な工具ナデが施されている。

石器 (第 2 - 133・134 図)

石 78 は軽石製品である。遺構の南側で、貼床面から出土している。

石 79 は敲石である。張り出し部手前にある土坑状の回みから出土している。上面と右側面に敲痕が確認できる。

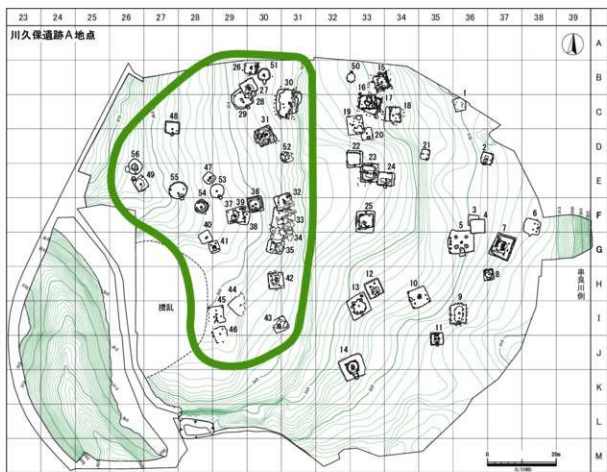
石 80 ～ 石 83 は棒状礫である。

石 80 は石 79 と同じく、張り出し部手前にある土坑状の回みから出土している。

石 81 は遺構の中心部と張り出し部手前にある土坑状の回みの中間付近で、貼床面から出土している。

石 82 は遺構の南西角部付近で、貼床面から出土している。

石 83 は遺構の中心部付近で、貼床面から 10cm 程度浮いた状態で出土している。他の棒状礫と比較すると小型である。



第2-121図 西側の竪穴建物跡群

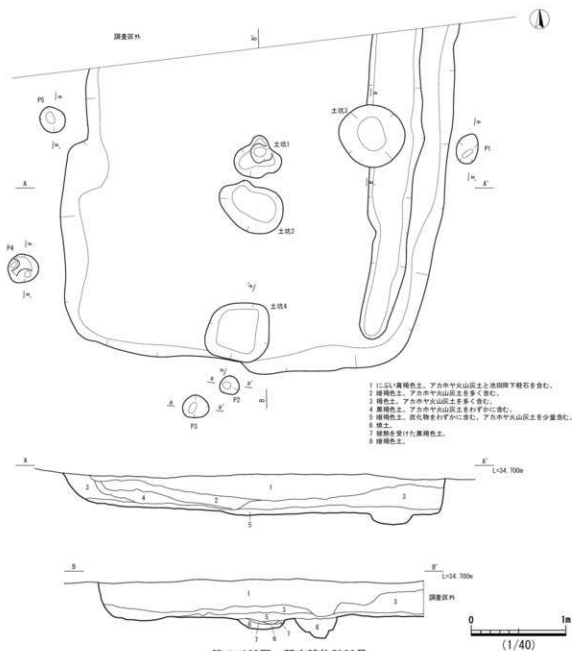
Va層コンタ図

表2-51-1 川久保遺跡A地点古墳時代竪穴建物跡一覧3 西側核出竪穴建物跡群

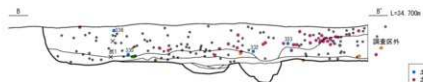
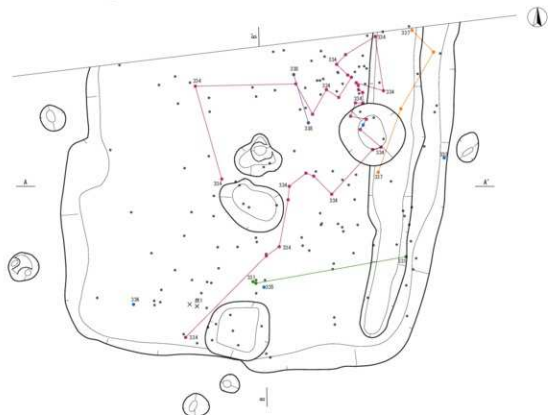
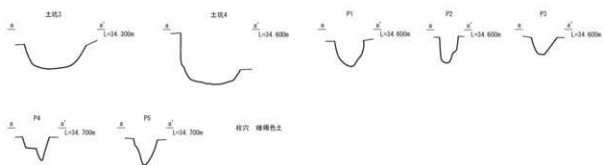
図番号	遺構番号	K	検出層	形状	大きさ (m)		長軸の向き	陥床	戸跡地上	煉瓦面	基り出し	調査時遺構番号	備考
					長軸	短軸							
2-122	26	B30	Va	不明	4.0	0.5	不明	なし	○	なし	なし	S071	
2-126	27	B29-30	Va	長方形	4.5	3.8	北西-南東	○	○	○	○	S065	28・29号より新しい
2-126	28	B30	Va	不明	3.4	不明	不明	○	不明	○	○	S068	27号より古い 29号より新しい
2-126	29	B29-30	Va	方形	6.0	5.8	北東-南西	○	○	○	○	S067	28・29号より古い
2-135	30	B31	Va	長方形	8.4	7.2	南-北	○	○	○	○	S073-74	
2-143	31	C00	Va	方形	5.7	5.3	北北東-南南西	○	○	○	○	S0621&2	
2-149	32	F30-31	Va	長方形	5.1	4.4	北東-南西	○	○	○	なし	S077	33号より新しい
2-153	33	F30-31	Va	方形	6.0	5.5	南-北	○	○	○	不明	S078	32・34号より古い
2-156	34	F30-31	Va	長方形	6.8	4.5~4.8	北東-南西	○	なし	○	不明	S079	33・35号より新しい
2-159	35	G30	Va	長方形	5.0	3.8	東-西	○	○	○	なし	S080	34号より古い
2-162	36	F30	Va	方形	4.5	4.6	南-北	○	○	○	なし	S061	
2-165	37	F29-30	Va	長方形	4.8	4.1~4.5	東-西	○	○	○	なし	S058	38号より新しい
2-165	38	F29	Va	長方形	3.6~4.0	3.3	南-北	○	○	なし	不明	S060	39号より新しい
2-165	39	F29	Va	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	S059	38号より古い
2-170	40	G28	Va	方形	3.5	3.5	北西-南東	○	なし	不明	なし	S095	

表2-51-2 川久保遺跡A地点古墳時代竪穴建物跡一覧3 西側核出竪穴建物跡群

図番号	遺構番号	DC	核出層	形状	大きさ (m)		長軸の向き	取壊	少路堆土	礎石面	裏り出し	調査時遺構番号	備考
					長軸	短軸							
2-173	41	G28-29	Va	長方形	4.0	3.6	北北西-南南東	○	○	なし	なし	SH91	
2-180	42	H00	Vb	方形	4.7	4.6	南-北	○	○	○	なし	SH100	
2-183	43	I30-31	Vb	長方形	4.5	4.0	北東-南西	○	○	○	なし	SH104	
2-187	44	H129	Va	不明	(5.0)	(4.7)	北北西-南南東	○	○	なし	不明	SH84	
2-190	45	I28-29	Va	長方形	5.0	4.5	南-北	なし	○	△	なし	SH93	
2-193	46	I129	Va	長方形	4.2	3.9	北北西-南南東	なし	○	○	なし	SH92	
2-194	47	E28-29	Va	方形	3.1	3.1	北東-南西	○	○	○	なし	SH95	
2-197	48	C027	Va	長方形	4.2	3.6	東-西	○	○	○	○	SH84	
2-200	49	E26-27	Va	方形	3.8	3.8	北北西-南南東	○	○	○	○	SH49	



- 1 ①に②黄褐色土。ア方中や山尻土と表田跡下軽石を含む。
- 2 雑褐色土。ア方赤や山尻土を多く含む。
- 3 褐色土。ア方赤や山尻土を多く含む。
- 4 雑褐色土。ア方赤や山尻土を若干含む。
- 5 雑褐色土。炭化物をわずかに含む。ア方赤や山尻土を少量含む。
- 6 黄土。
- 7 雑褐色土。黄褐色土。
- 8 雑褐色土。

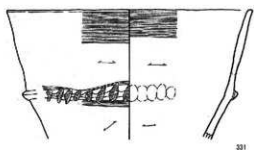


- 土器110・115・112・113
- 土器114
- 土器111
- 土器113
- 土器113
- 土の地土器
- 瓦片



第2-123図 竪穴建物跡26号 土坑・柱穴(断面) 遺物出土状況

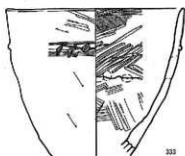
(1/40)



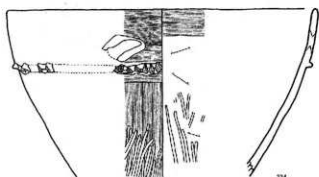
331



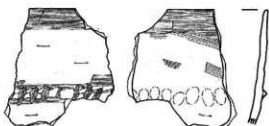
332



333



334



335



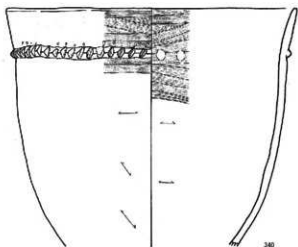
336



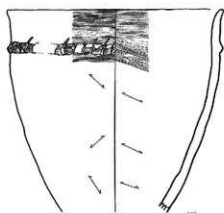
337



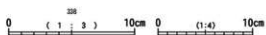
338



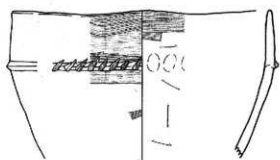
340



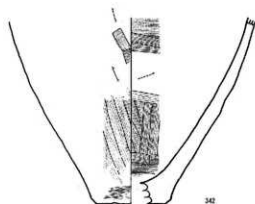
339



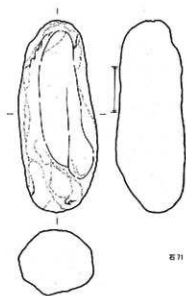
第2-124图 竖穴建物跡26号 出土遺物



341



342



71



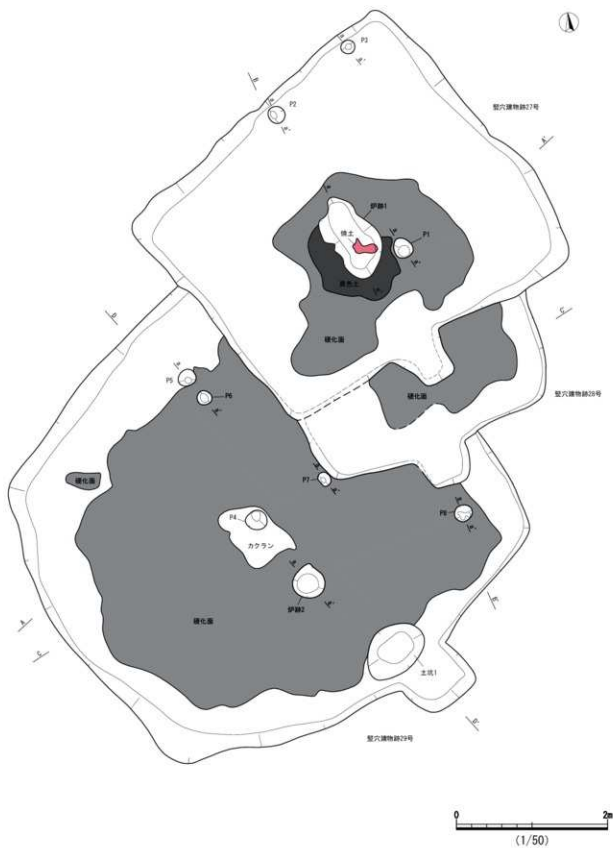
第2-125 圖 竖穴建物跡 26 号 出土遺物

表2-52 竪穴建物跡26号出土土器

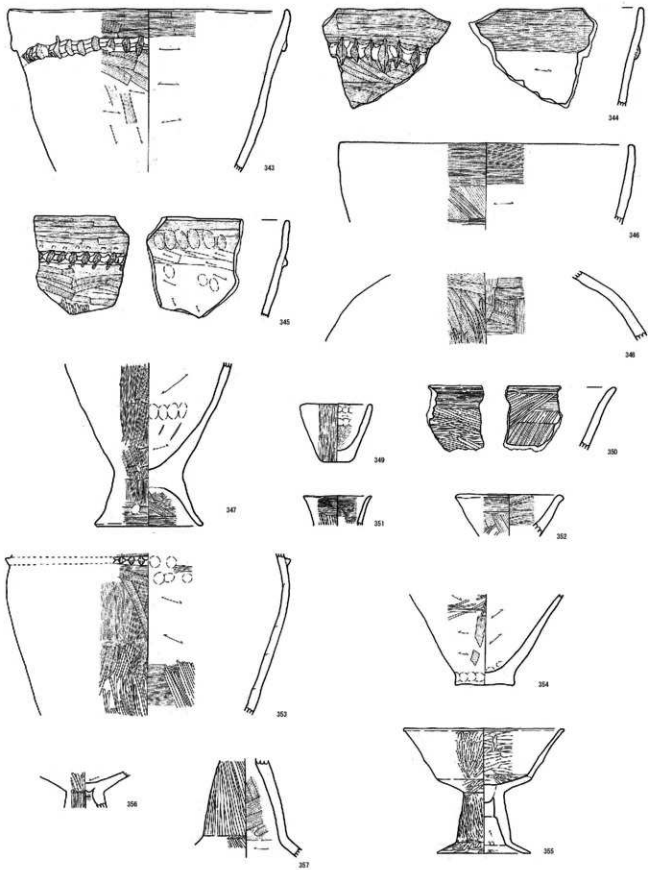
図 番号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 124	331	○	甕	口縁部-胴部	—	—	25.6	—	工具ナゲ ナゲ	工具ナゲ ナゲ	外:緑 内:緑	石・黒・小	
	332		甕	口縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ 指ナゲ	外:にぶい赤褐 内:にぶい緑	石・白・小・ 黒	
	333		甕	口縁部-胴部	—	—	18.8	—	工具ナゲ ミガキ・ナゲ	工具ナゲ	外:緑 内:緑	石・黄・白・ 黒・小	
	334		甕	口縁部-胴部	D	—	32.2	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ ミガキ	外:にぶい赤褐 内:にぶい赤褐	白・黒・小	
	335		甕	口縁部-胴部	C	—	—	—	工具ナゲ ナゲ	工具ナゲ ナゲ	外:緑 内:緑	石・白・黒・ 小	
	336		高坏	胴部	—	—	—	9.4	ナゲ ミガキ	ナゲ ミガキ	外:緑 内:緑	石・黒・黒	
	337		高坏	胴柱部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナゲ	外:緑 内:にぶい緑	石・白・ 黒	
	338		手づくね	完形	—	2.9	4.8	—	指押さえ	指押さえ	外:明赤褐 内:明赤褐	石・黒・白	
	339		甕	口縁部-胴部	C	—	23.0	—	ナゲ	ナゲ	外:にぶい黄褐 内:緑	緑粒	
340		甕	口縁部-胴部	B	—	30.2	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:にぶい緑 内:にぶい緑	石・黒・白・ 小		
2 125	341		甕	口縁部-胴部	D	—	27.0	—	工具ナゲ ナゲ	工具ナゲ ナゲ	外:緑 内:緑	石・白・黒・ 小	
	342		甕・壺	胴部-底部	—	19.6	—	8.0	工具ナゲ ミガキ・ナゲ	ナゲ	外:緑 内:にぶい緑	石・小・ 黒	

表2-53 竪穴建物跡26号出土石器

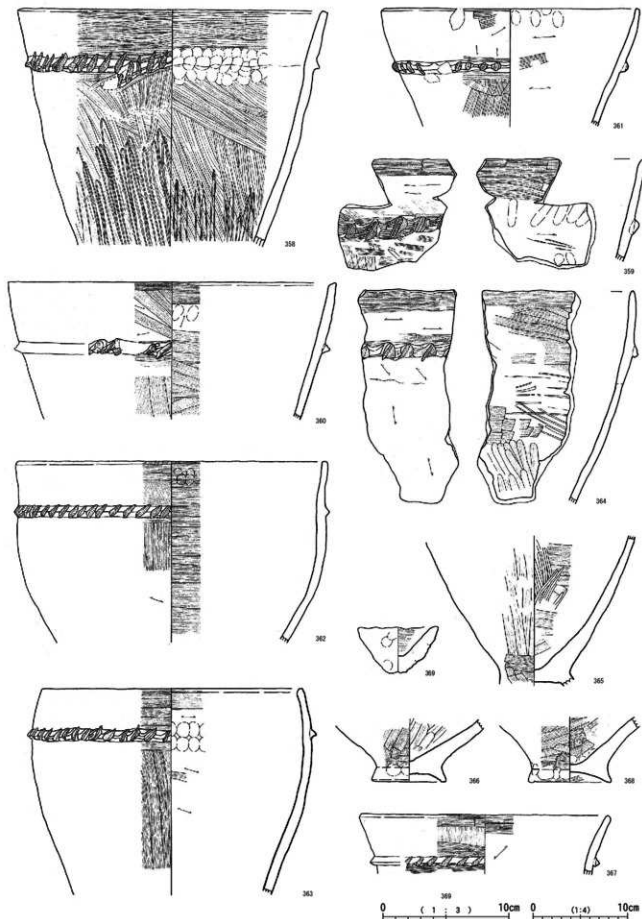
図 番号	遺物 番号	床 面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2-125	471		棒状鏝	完形	20.4	8.2	7.4	1899.0	黄鉄岩	



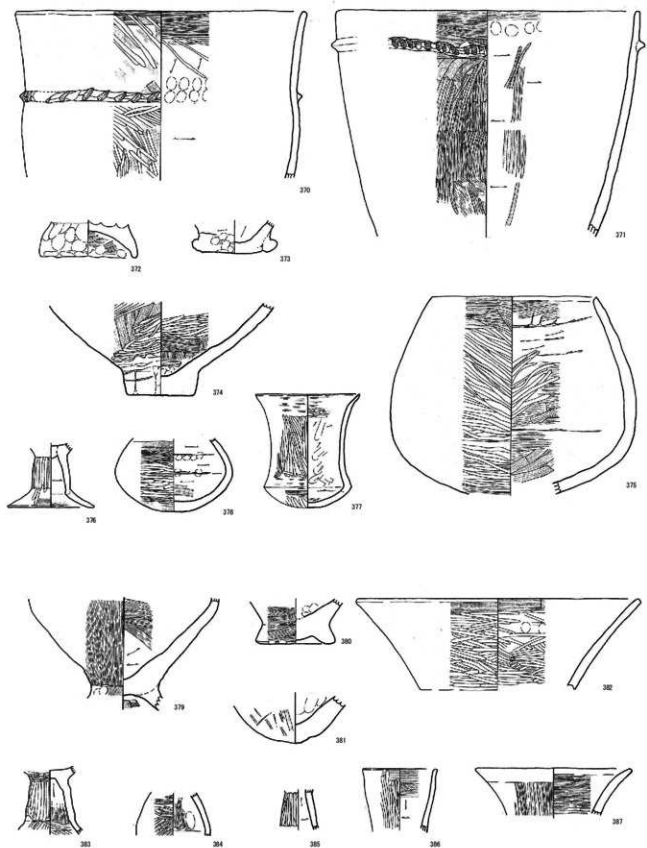
第2-126図 竪穴建物跡27号～29号 平面



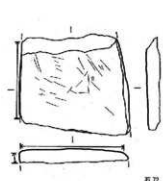
第2-130圖 竪穴建物跡27号 出土遺物(土器)



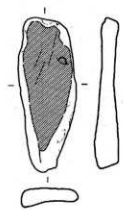
第2-131 圖 竪穴建物跡 28 号 出土遺物(土器)



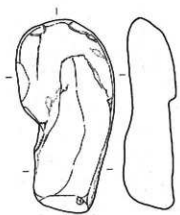
第2-132 圖 竪穴建物跡 29号 出土遺物(土器)



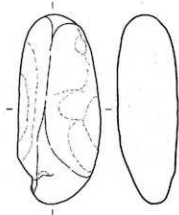
石72



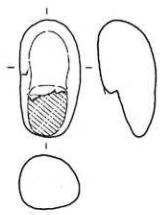
石73



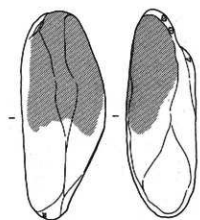
石76



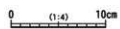
石78



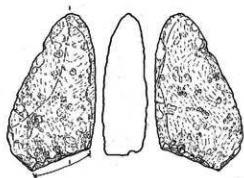
石77



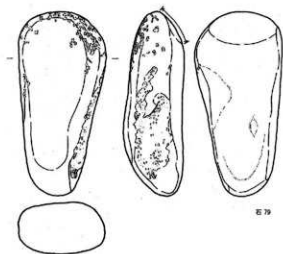
石74



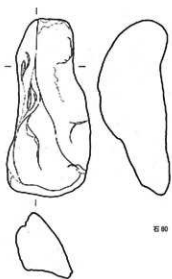
第2-133图 竖穴建物跡27号・28号 出土遺物(石器)



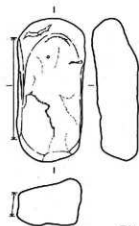
石 76



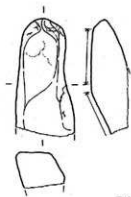
石 79



石 80



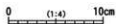
石 81



石 82



石 83



第2-134 圖 竪穴建物跡 29 号 出土遺物(石器)

表2-54 竪穴建物跡27号出土土器

図 番 号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考
2 130	343	○	甕	口縁部-胴部	D	—	29.2	—	工具ナゲ ナゲ	工具ナゲ ナゲ	外:黒 内:黒	石・白・黒・ 小	
	344	○	甕	口縁部-胴部	D	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ ナゲ	外:にじいれ 内:にじいれ	白	
	345	○	甕	口縁部-胴部	D	—	—	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ ナゲ	外:にじいれ 内:にじいれ	白・小	
	346	○	甕	口縁部-胴部	—	—	30.8	—	工具ナゲ	工具ナゲ 指ナゲ	外:黄緑 内:黄緑	石・白・黒・ 小	
	347	○	甕	口縁部-胴部	—	—	—	11.0	工具ナゲ	指ナゲ 工具ナゲ	外:にじいれ 内:にじいれ	石・小	
	348	○	甕	胴部	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:黒 内:にじいれ	石・黒・白・ 黒・小	
	349	○	鉢	底部	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ 指ナゲ	外:黒 内:黒	石・長・白	
	350	○	高杯	杯部	—	—	—	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ ミガキ	外:明赤陶 内:明赤陶	石・長・白	
	351	○	埴	口縁部	—	—	7.2	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ ミガキ	外:にじいれ 内:にじいれ	小・白・黒	
	352	○	埴	口縁部	—	—	8.6	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:黒 内:にじいれ	白	
	353		甕・壺	胴部	—	—	—	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ ミガキ	外:黒 内:黒	石・白・小	
	354		甕・鉢	胴部-底部	—	—	—	6.0	ミガキ 工具ナゲ	指ナゲ	外:明赤陶 内:明赤陶	石・白・黒・ 小	
	355		高杯	底部	—	13.3	16.5	9.6	ミガキ 工具ナゲ	ミガキ 工具ナゲ	外:明赤陶 内:明赤陶	石・白・黒・ はか	
	356		高杯	杯部-胴部	—	—	—	—	工具ナゲ	指ナゲ 工具ナゲ	外:黄緑 内:にじいれ	石・白・黒・ 小	
357		高杯	胴部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナゲ	外:明赤陶 内:黒	白		

表2-55 竪穴建物跡28号出土土器

図 番 号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考
2 131	358	○	甕	口縁部-胴部	B	—	31.4	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ ミガキ	外:黒 内:明赤陶	石・白・小	
	359	○	甕	口縁部-胴部	D	—	—	—	工具ナゲ 指ナゲ	工具ナゲ 指ナゲ	外:にじいれ 内:にじいれ	白・小	
	360	○	甕	口縁部-胴部	D	—	34.4	—	工具ナゲ 指ナゲ	工具ナゲ 指ナゲ	外:にじいれ 内:にじいれ	石・白・黒・ 小	
	361	○	甕	口縁部-胴部	D	—	26.5	—	工具ナゲ 指ナゲ	指ナゲ 工具ナゲ	外:にじいれ 内:黒	石・小	
	362	○	甕	口縁部-胴部	C	—	32.6	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:黒 内:にじいれ	白	
	363	○	甕	口縁部-胴部	D	—	27.5	—	工具ナゲ	工具ナゲ 指ナゲ	外:黒 内:にじいれ	石・長	
	364	○	甕	口縁部-胴部	D	—	—	—	工具ナゲ ナゲ	工具ナゲ	外:にじいれ 内:にじいれ	石・長・小	
	365	○	甕	胴部-胴部	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ ミガキ	外:にじいれ 内:にじいれ	黒・小	
	366	○	甕・鉢	胴部-胴部	—	—	—	7.4	工具ナゲ	工具ナゲ	外:明赤陶 内:にじいれ	石・長・小	胴部高:9.7cm
	367		甕	口縁部-胴部	B	—	26.0	—	工具ナゲ	工具ナゲ 指ナゲ	外:にじいれ 内:にじいれ	石・白・黒・ 小	
	368		甕・鉢	胴部-胴部	—	—	—	8.5	工具ナゲ	工具ナゲ	外:黒 内:にじいれ	黒・小・ はか	胴部高:1.1cm
369		手づくね	底部	—	3.6	6.2	—	指押さえ	工具ナゲ	外:にじいれ 内:にじいれ	白・小		

表2-56 竪穴建物跡29号出土土器

図番号	遺物番号	表面	器種	部位 (大付部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 132	370	○	甕	口縁部-胴部	C	—	30.2	—	工具ナゲ ミガキ 工具ナゲ	ミガキ 工具ナゲ	外:にぶい・黄褐色 内:黄褐色	石・小・ 黒・小	
	371	○	甕	口縁部-胴部	D	—	31.6	—	工具ナゲ	工具ナゲ 胎ナゲ	外:にぶい・黄褐色 内:褐色	白・小	
	372	○	甕・壺	脚部	—	—	—	10.0	指押さえ	工具ナゲ	外:褐色 内:褐色	石・白・小	
	373	○	甕・壺	底部	—	—	—	5.1	胎ナゲ	胎ナゲ	外:にぶい・黄褐色 内:にぶい・褐色	石・黒・白・ 黒・小	
	374	○	壺	胴部-底部	—	—	—	6.9	ミガキ 工具ナゲ	ミガキ 工具ナゲ	外:赤褐色 内:明赤褐色	石・黒・小	
	375	○	鉢	口縁部-胴部	—	—	17.3	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ ミガキ	外:にぶい・黄褐色 内:にぶい・黄褐色	石・黒・小	
	376	○	高杯	脚部	—	—	—	9.0	ミガキ 工具ナゲ	ナゲ 工具ナゲ	外:にぶい・褐色 内:にぶい・褐色	石・小	
	377	○	埴	完形	—	12.0	11.0	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ ミガキ	外:褐色 内:褐色	白・小・ 黒・小	
	378	○	埴	胴部-底部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナゲ	胎ナゲ 工具ナゲ	外:黄褐色 内:明褐色	長・白・小	
	379	○	甕	胴部下平-脚部	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ ナゲ	外:にぶい・褐色 内:にぶい・褐色	石・白・黒・ 小	
	380	○	甕・壺	脚部	—	—	—	7.4	工具ナゲ	指押さえ	外:にぶい・黄褐色 内:にぶい・褐色	石・長・小	
	381	○	壺	底部	—	—	—	—	工具ナゲ ナゲ	胎ナゲ	外:にぶい・黄褐色 内:にぶい・褐色	石・黒・黒・ 小	
	382	○	高杯	杯部	—	—	29.4	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ ミガキ	外:にぶい・黄褐色 内:にぶい・黄褐色	白・小	
	383	○	高杯	脚柱部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナゲ ミガキ	外:にぶい・褐色 内:にぶい・褐色	白・小	
	384	○	高杯	脚柱部	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:褐色 内:褐色	石・長・白・ 黒	
	385	○	高杯	脚柱部	—	—	—	—	ミガキ	ナゲ	外:褐色 内:明赤褐色	白・黒	
	386	○	埴	口縁部	—	—	7.7	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ 胎ナゲ	外:にぶい・褐色 内:にぶい・褐色	石・黒・白・ 黒・小	
387	○	埴	口縁部	—	—	12.0	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:灰白 内:黄褐色	石・白・小	赤色顔料散布	

表2-57 竪穴建物跡27号出土石器

図番号	遺物番号	表面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 133	石72	○	砥石	破損	8.0	8.2	11.0	123.0	凝灰岩	
	石73	○	砥石	完形	16.4	6.2	2.9	340.0	頁岩	

表2-58 竪穴建物跡28号出土石器

図番号	遺物番号	表面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 133	石74	○	棒状礮	完形	22.1	8.8	7.5	2060.0	砂岩	
	石75	○	棒状礮	完形	20.7	10.5	6.6	1750.0	砂岩	
	石76	○	棒状礮	完形	20.1	8.8	6.4	1710.0	砂岩	
	石77	○	棒状礮	破損	12.4	6.5	5.9	680.0	砂岩	

表2-59 竪穴建物跡29号出土石器

図番号	遺物番号	表面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 134	石78	○	軽石製品	破損	12.5	7.0	3.6	80.0	軽石	
	石79	○	礮石	完形	19.5	9.3	6.2	1650.0	砂岩	
	石80	○	棒状礮	完形	18.9	8.7	7.0	1390.0	ホルンフェルス	
	石81	○	棒状礮	完形	15.2	7.3	5.0	887.0	砂岩	
	石82	○	棒状礮	破損	12.4	6.2	4.1	418.0	砂岩	
	石83	○	棒状礮	完形	14.1	3.5	3.5	220.0	砂岩	

竪穴建物跡 30号 (第2-135~138図)

竪穴建物跡 30号はB・C31区Va層で検出した。大きさは長軸(南北軸)8.4m、短軸(東西軸)7.2mを呈する。南東角部が削平を受けており、やや歪な形状を呈しているが、元々は隅丸長方形であったと考えられる。検出面から底面までの深さは最大で約55cmであり、遺構の中心部と南側が深くなっている。竪穴建物跡 30号は南北方向に帯状に攪乱を受けており、攪乱の一部はこの底面にまで達している。底面から20~30cmの厚さで貼床が形成されている。遺構の中央からは焼土と炭化物を含む炉跡と、炉跡に切られた土坑1が検出されている。大きさは炉跡がわずかに大きいが、ともに直径約50cmの円形を呈している。また、南側にも土坑2が検出されており、長軸約100cm、短軸約80cmの不定形状を呈し、深さは約20cmである。土坑2の南側の壁際は、一段高くなっており、わずかに外側に張り出しているようであるが、東側半分が攪乱を受けている。硬化面は東西両壁際部分を除き、遺構の全面に広がっている。柱穴は遺構内に4基、遺構周辺から17基検出されている。遺構内からはP1とP2が中央部からやや西よりの部分で検出され、P3とP4が張り出しとされる部分から検出されている。遺構の周辺から検出された柱穴は、遺構の縁辺部を取り囲むように配置されている。P20に関しては、削平を受けている部分から検出されているため、元々は遺構内の柱穴であったと考えられる。東側からは柱穴が検出されていないが、これも削平の影響が考えられる。

竪穴建物跡 30号の貼床面を除去し、底面を検出したところで、新たに土坑が2基、柱穴が3基、そして隅丸長方形に近い形状で巡る溝状の遺構が検出された。また、土坑2の南側が一段高くなり広がることが確認された。土坑は中心部から2m程北側の位置に土坑3、土坑3より南南西方向に2m程の位置に土坑4が検出されている。どちらの土坑も溝状遺構を切る形で検出されている。土坑3は長軸約100cm、短軸約90cmの不定形状を呈し、深さは約20cmである。土坑4は直径約55cmの略円形を呈する小型の土坑であり、柱穴よりやや大きい程度大きさであるが、底面が広いことから土坑とした。深さは約10cmである。P22は溝状遺構よりも内側、中心部よりもやや西側の位置で検出されている。P23・P24は溝状遺構の中で検出されており、溝状遺構を切る形で検出されている。P25・P26は溝状遺構の外側で検出されている。P26の断面図を見ると、2基の柱穴である可能性が高い。貼床下から検出された柱穴はP23が深さ約55cm、P24が深さ約75cm、P26が深さ約55cmと、貼床面から検出された柱穴よりも深いものが見られる。貼床下から検出された柱穴の埋土は全て同じ暗褐色土である。

竪穴建物跡 30号の貼床面下で検出された溝状遺構は、竪穴建物跡と比べると、南北軸がやや西側に傾く。形状

は北側の東西角部が隅丸方形状に、南側は角部を作らず曲線的に成形されている。また、南側中央部は土坑2によって切れ、その他、前述のとおり複数の土坑と柱穴により遺構の一部を切られており、少なくとも土坑・柱穴よりは古い遺構であることが分かる。また、溝内の埋土(褐色土)は、貼床の埋土(暗褐色土)と色調が異なり、貼床以前に埋められた、もしくは埋まったことが分かる。

出土遺物 (第2-139・140図)

遺物は遺構内全体から出土しているが、南側から出土している遺物の密度が、北側よりも若干濃い。貼床面からは口縁部が外傾する甕B類と、長胴の埴が出土している。石器は土坑2内から多く出土している。

土器 (第2-141図)

388~391はその出土状況から、竪穴建物跡 30号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

388は口縁部が外傾する甕C類の口縁部から胴部上半までの資料である。口径20.7cmを測る。外面口縁部上端は横方向の工具ナゲが、口縁部は斜め方向の工具ナゲが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。突帯下位には横方向の工具ナゲが施されているが、その上から幅の細い工具で施された縦方向の工具ナゲと、原体不明の刻みのような痕跡、さらには指押さえが確認できる。胴部上半には縦・斜め方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部には横・斜め方向の工具ナゲが施されている。突帯部分付近から下位には、斜め・横方向の工具ナゲが施されている。突帯内面部分とその下位には、指押さえが並ぶ。

389は口縁部が外傾する甕C類の口縁部から胴部上位の資料である。遺構の西側から南側にかけて、散在して出土しており、一部は土坑2の埋土中からも出土している。検出面近くで出土しているものもあるが、大部分は貼床面または、底面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナゲが、口縁部には斜め・横方向の工具ナゲが施されている。突帯貼り付け部分とその上下の器面に横方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部上位には部分的に斜め方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部には縦・横・斜め方向の工具ナゲが、突帯部分付近から下位は、横方向のナゲが施されている。内面突帯部分付近には指押さえが施されている。

390は口縁部がわずかに外反する甕C類の口縁部から胴部上位の資料である。口径18.6cmを測る。土坑2の底面および埋土中から、まとまって出土している。外面口縁部は横・斜め方向の工具ナゲが施されているが、口縁部上端の工具ナゲは、ハケ目に近い。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。突帯は刻目を持たず、ハケ目に近い工具ナ

ナゲが施されている。胴部上位には縦方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部には横方向の工具ナゲが施されており、口縁部下半では、その上から指押さえ、もしくは指ナゲが列状に複数回おこなわれている。指押さえの下位の屈曲部では、ナゲ調整により屈曲が作られており、その際に部分的に指押さえの痕跡を切っている。胴部上位には沈線状の痕跡が残る。

391は長胴の増である。底部のみ欠損している。口径は11.2cmを測る。土坑2の埋土中にとまって出土している一群と、遺構の中央部から南側に散在している一群の2つのグループがあり、散在しているグループは貼床面から浮いた状態で出土している。破片の出土状況を細かく見っていくと、口縁部片は全て土坑2埋土中から出土している。それに対し、底部付近の破片は全て貼床面よりも上位で浮いた状態で出土している。また、最も大きな約10cm四方の胴部片1点や、次に大きな約5cm四方の胴部片3点は全て土坑2埋土中からの出土である。外面口縁部は横方向のミガキを施した後に、斜め方向のミガキを施している。胴部は縦方向のミガキが、胴部下端から底部にかけては横方向のミガキが施されている。内面口縁部は横方向のミガキが施されている。胴部上半は横・斜め方向の工具ナゲを施した後に、各方向のミガキが施されている。胴部下半は横・斜め方向の工具ナゲを施した後に、幅1～2mm程度の短い長さの斜め方向の工具ナゲが施されている。胴部下端には横方向のミガキが施されている。胴部下部には絞り痕と考えられる縦方向のズグが多く確認でき、指押さえも多く、器面の凹凸が多い。

392～398はその出土状況から、壑穴建物跡30号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

392は口縁部が外傾する壺B類の口縁部から胴部の資料である。遺構の中央部付近、土器集中の西側に隣接して、検出面に近い位置で出土している。外面口縁部上半には横方向の工具ナゲが、口縁部下半は斜め方向のナゲが施されている。口縁部には吹きこぼれの痕跡が残り、口縁部上位から突帯部分まで延びている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部上位には斜め方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部には横方向の工具ナゲが、突帯部分付近から下位の胴部上位には、斜め方向の工具ナゲが施されている。突帯部分には指押さえが並ぶ。

393は口縁部が外傾する壺B類の口縁部から胴部上位の資料である。突帯は貼り付けられていない。外面全体に煤が付着しているのが特徴である。遺構の北東側、硬化面範囲の際で、検出面近くから出土している。外面口縁部上半は横方向の工具ナゲが施されている。口縁部には縦・斜め方向の工具ナゲが施されており、口縁部と胴

部の境に工具本体を打ち込むことにより、屈曲部を形成している。胴部上位には斜め・縦方向の工具ナゲが施されているが、一部には幅の狭い斜め方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部は横・斜め方向の単位幅が不明瞭なナゲが施されている。胴部には外面と同じ原体で施されたと考えられる斜め・横方向の工具ナゲが施されている。その後、口縁部と胴部の境や、胴部の一部に指押さえを多く行っている。口縁部と胴部の境の指押さえは列状に並ぶ。

394は壺の口縁部から胴部下位までの資料である。口径16.5cmを測る。土坑2の北側、395の西側で貼床面より15cm程度浮いた状態でとまって出土している。外面口縁部上半は横方向の工具ナゲが施されている。部分的には指押さえが施されている。口縁部下半は縦方向の工具ナゲが施されている。胴部上位にも縦方向の工具ナゲが施されており、こちらは頸部で工具を止めることにより、口縁部と胴部の境を明確に作り出している。胴部中位は横方向の工具ナゲを施した後に、縦方向のミガキを施している。内面口縁部は横方向の工具ナゲを施した後に、斜め方向の工具ナゲを部分的に施している。胴部は横方向の工具ナゲを施した後に、斜め方向のミガキを施している。

395は口縁部が大きく外反する鉢の口縁部から胴部の資料である。胴部下位のミガキの方向から見て、脚部付近まで残存していると考えられる。土坑2の北側で貼床面より10cm程度浮いた状態でとまって出土している。内外面ともに丁寧な工具ナゲ、またはミガキが施されている。器面の平滑具合から見て、全面ミガキと捉えて良いと考えられる。口縁部付近ではミガキの幅がやや狭く、胴部に向かうにつれ、やや幅広となっていく。内面のミガキは、ほぼ横方向で揃っている。

396は高坏である。脚端部が欠損している以外は器形を復元できる個体である。脚部はエンタシス状を呈している。口径14.0cmを測る。外面坏部上端は横方向の工具ナゲが、坏部は横・斜め方向の工具ナゲが、頸部は横方向の工具ナゲが施されている。脚筒部には縦方向のミガキを施した後に、縦・斜め方向の工具ナゲを施している。脚筒部には縦・斜め方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部上位には横方向の工具ナゲ、口縁部中位には縦・斜め方向の工具ナゲ、口縁部下位には横方向の工具ナゲが施されている。脚筒部内面は縦・斜め方向の工具ナゲの後に、部分的に幅2mm程度の工具ナゲを縦・斜め方向に施している。脚筒部内面は横方向の工具ナゲが施されている。

397は完形に復元できた増である。底部は平坦部を持ち、口径8.8cm、底径2.8cm、器高9.0cmを測る。南側の張り出し部と、北東角部付近に離れた状態で出土している。出土位置はどちらも貼床面より10cm程度浮いた状

態で出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部は縦方向のミガキが施されている。頸部には幅1~2mm程度の工具ナデもしくはミガキが施されている。胴部上半には縦方向のミガキが、胴部下半には横方向のミガキが、底部には縦・横方向のミガキが施されている。内面は全体的に横・斜め方向の工具ナデが施されている。底部中央は凹み、わずかに工具ナデの痕跡が確認できる。

398は完形に復元できた埴である。口径7.8cm、器高6.8cmを測る。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、胴部は縦方向の工具ナデが、胴部下端は横方向の工具ナデが施されている。底部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上端は斜め方向の工具ナデが、口縁部から胴部上位にかけては、横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部上位までの工具ナデは工具の凹凸が明瞭に確認できる。胴部中程から下位は、斜め方向の工具ナデが施されており、部分的には指押さえが施されている。胴部中程から下位の工具ナデは単位幅が不明瞭であり、凹凸もはっきりしない。

石器(第2-142図)

石84は砥石である。柱穴P2の西側で、貼床面から出土している。表裏両面と左側面に使用痕が残り、部分的には使用痕も確認できる。

石85と石86は軽石製品である。石85は東壁の立ち上がり部分で、底面から出土している。石86は使用による平坦面を持つ。土坑2の底面から出土している。石87~石90は棒状礫である。石87は土坑2の埋土中から出土している。石88は土坑2の東側に隣接して、底面から出土している。石89は張り出し部の西側で、底面から出土している。石90は土坑2の埋土中から出土している。石91は礫である。南側の張り出し部分で埋土中から出土している。

竪穴建物跡31号(第2-143-144図)

竪穴建物跡31号はC・D30区Va層で検出した。検出時はその平面形状から3基程度の竪穴建物跡の重なりを想定して調査を実施したが、調査の結果、複雑な形状を呈する1基の竪穴建物跡であることが確認された。長軸(東西軸)約5.7m、短軸(南北軸)約5.3mを呈し、西側・南側・南東角部に張り出しを持つ。検出面から底面までの深さは40~60cmである。貼床は底面から5~20cmの厚さで、ほぼ水平に形成されている。遺構の中央部には焼土を伴う土坑が貼床面から検出されており、炉跡と考えられる。直径約45cmの円形を呈し、深さは約8cm、焼土は底面から約4cmの厚さが焼土で、その上に炭化物を含む黒褐色土が堆積している。炉跡の東西両側には大型の柱穴が2基、貼床面から検出されている。P1は直径約75cmの略円形を呈し、深さ約35cm、最小径約15cmであ

る。P2は直径約75cmの略円形を呈し、深さ約45cm、最小径約15cmである。

遺構内からは5基の柱穴が確認されている。炉跡の北側にはP3・P4が、P1の南西にP5、北壁に付近にP6、東壁付近にP7が検出されている。遺構外からは2基の柱穴が確認されており、ともに南東角部付近で検出されている。硬化面の広がりは不明であるが、土層断面図からは2基の大型の柱穴の北側と、南東部の張り出し部分で硬化面が検出されていることが分かる。

竪穴建物跡31号の貼床の埋土はアカホヤ火山灰土(黄褐色土)の混ざる暗褐色土と、その硬化面で構成されており、その下位には部分的にアカホヤ火山灰土の堆積が見られる。しかしながら、南東角部の張り出し部分のみは、貼床の下位に黒褐色土が堆積している。調査時は、この埋土の違いと竪穴建物跡31号の平面形状の複雑さから、増築の可能性も考えられたが、この黒褐色土の上位にも周辺と同じように貼床面が形成されていることから、時期を隔てた増築の可能性は低い。貼床面よりも上位の埋土の堆積状況はレンズ状堆積を示しており、竪穴建物跡31号は、自然堆積により埋まったと考えられる。

出土遺物(第2-145図)

遺物は遺構内全体に散在して出土している状況であり、遺物の集中は見られない。復元できる土器の出土はなく、遺物の大きさも小さい。そのような中で、流れ込みではあるが壺型土製品が1点出土している。

土器・土製品(第2-146図)

399・400はその出土状況から、竪穴建物跡31号に帰属する可能性が高い土器群及び土製品である。

399は口縁部が外傾する甕D類の口縁部資料である。遺構の北壁中央部付近で、貼床面から出土している。外面口縁部上半は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが、口縁部下半は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。内面口縁部上半は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。口縁部下半以下は斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。内面胴部には指押さえが多く施されている。

400は甕の胴部下半から脚部までの資料である。底径6.8cm、脚部高1.5cmを測る。遺構の中央部から南西部にかけて散在して、貼床面から出土している。外面は縦方向の工具ナデが施され、脚部には指押さえが施されている。内面胴部は横・縦方向の工具ナデが施されている。脚部内面には指押さえが施されている。

401~403はその出土状況から、竪穴建物跡31号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

401は口縁部が外傾する甕C類の口縁部から胴部上位の資料である。口径39.6cmを測る。竪穴建物跡31号出

土一括資料である。外面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半は縦方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。突帯直下は横方向の工具ナデが、胴部上位には縦方向、その下位には横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。

402は壘形土製品である。遺構の東壁中央部付近で、検出面直下で出土している。

403は円盤形土製品である。遺構内一括取上げ資料である。

石器(第2-146図)

石92～石94は棒状礫である。3点ともに遺構内出土一括資料である。

装飾品(第2-146)

堅穴建物跡31号からは勾玉が1点出土している。遺構埋土中出土であり、流れ込みと考えられる。

装りは長さ1.1.5cm、幅0.78cm、厚さ0.3cmを測り、重量は0.2gを量る。蛇紋岩製であり、明オリブ灰色の色調を呈する。穿孔部に玉擦れ痕が残る。

炭化種子(第3分冊自然科学分析参照)

堅穴建物跡31号では、貼床面から1点の炭化種子(バレオ・ラボNo.2019-38)を取り上げている。この炭化種子について種実同定を行ったところ、コナラ属破片と同定された。表面が滑らかで皸もないため、イチイガシ以外のコナラ属アカガシ亜属の可能性が考えられている。

堅穴建物跡32号～35号(第2-147図)

堅穴建物跡32号・33号・34号・35号の4基の堅穴建物跡は、南北に連なる形で重複して、E・F・G30・31区から検出されている。北側から順に32号・33号・34号・35号の順に並んでおり、建物の向きは32号・34号が長軸を北東-南西方向に向けており、33号・35号が長軸を南北方向もしくは東西方向に向けている。切り合いは堅穴建物跡32号が33号を切っており、33号と34号の境界は、攪乱などの影響によりはっきりとはしないが、34号の硬化面の広がり方や土層断面から見ると、34号が33号を切っている。34号と35号の境界もはっきりとはしないが、土層断面で見ると、34号が35号を切っており、堅穴建物跡33号・35号が古く、32号・34号が新しいということになる。33号・35号の新旧関係、32号・34号の新旧関係は不明であるが、建物の長軸が同じ方向を向くことから、同時期である可能性も考えられる。全体的にこれらの建物跡は、遺構の東側に広く攪乱の影響を受けている。

堅穴建物跡32号(第2-149図)

堅穴建物跡32号はE・F30・31区から検出した。大きさは長軸(北東-南西軸)5.1m、短軸(北西-南東軸)4.4mを呈し、遺構の南角部分が堅穴建物跡33号を切っ

ている。遺構の東角部が大きく攪乱の影響を受けているが、隅丸長方形を呈していると考えられる。張り出しは検出されていない。検出面から底面までの深さは最大で約65cmであり、底面から約30cmの厚さで貼床が形成されている。遺構の中央部には土坑と炉跡が隣接して検出されている。土坑は長軸約80cm、短軸約60cmの楕円形状を呈し、貼床面からの深さは約50cmである。位置から考えて、中央柱穴の可能性も考えられる。炉跡は土坑に隣接し、直径約50cmの土坑に隣接する部分が直線的になる歪な円形状を呈している。深さは約5cmと浅く、焼土は土坑とはわずかに距離をおいて堆積している。硬化面は遺構の北角部に広く広がり、南西壁側は一部に硬化面が方形状に突出するのみで、約1m程度の幅で硬化面がない範囲が広がる。また南東壁側、一部に硬化面が突出しているが、約70cmの幅で硬化面のない範囲が広がっている。柱穴は遺構内に7基検出されており、硬化面範囲内の中央部付近に1基、北側に4基、遺構の西側の硬化面範囲のすぐ外側の際に2基となっている。

出土遺物(第2-148・150図)

遺物は遺構の全体から出土しており、極端な偏りは見られない。遺構北東部の硬化面直上からは、ある程度の量の遺物が集中して出土している状況が見られた。

土器(第2-151図)

404～411はその出土状況から、堅穴建物跡32号に帰属する可能性が高い土器群である。

404は口縁部が外傾する壘B類の口縁部から胴部下位までの資料である。口縁部は胴部と比較してわずかに肥厚している。口径29.4cmを測る。遺構北東部の土器が集中して出土した範囲の硬化面上面(貼床面)から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。胴部上位から中位にかけては斜め・横方向の丁寧な指ナデが施されている。胴部下位は縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上半は横・斜め方向の工具ナデが施されている。口縁部下半から底面にかけては斜め方向の丁寧な指ナデが施されている。

405は口縁部がわずかに外傾する壘D類の口縁部から胴部上位の資料である。口径44.0cmを測る。遺構北東部の土器が集中して出土した範囲の硬化面上面(貼床面)から出土している。外面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半は斜め方向の指ナデが施されている。胴部は斜め方向の指ナデが施されている。内面は斜め方向の工具ナデが施されている。口縁部上端には斜め方向の工具ナデに先行して横方向の工具ナデが施されており、部分的に残存している。突帯内面部分には指押さえが施されている。

406は高坏の坏部から脚部の資料である。遺構の北側で貼床面から出土している。外面坏部下端は横・斜め方向のミガキが施されている。屈曲部には横方向の工具ナ

ナデが施されている。脚筒部には縦方向のミガキが、脚筒部には横方向の工具ナデが施されている。内面坏部底面には縦方向のミガキが施されている。脚筒内面には縦方向の工具ナデが施されている。

407 は高坏の脚筒資料である。遺構の南側にまとまって、硬化面上面(貼床面)から出土している。外面脚筒部上半は縦方向のミガキが施されている。下半にはナデを施した後に縦方向のミガキが施されている。脚筒部内面上半は斜め方向のナデが、下半は横方向の工具ナデが施されている。

408 は高坏の脚筒資料である。遺構の中心部で、炉跡および土坑の周辺から散在して、硬化面上面(貼床面)から出土している。内外面ともに縦方向の工具ナデが施されている。

409 は高坏の脚筒資料である。遺構北東部の土器が集中して出土した範囲の硬化面上面(貼床面)から出土している。外面は幅3mm程度の縦方向の工具ナデが、内面は縦方向のナデが施されている。

410 は埴の口縁部から胴部中位までの資料である。口径8.9cmを測る。遺構北東部の土器が集中して出土した範囲の硬化面上面(貼床面)から出土している。外面口縁部上半は横方向のミガキが、下半は斜め方向のミガキが施されている。胴部上位は斜め方向のミガキが、胴部中位は斜め・横方向のミガキが施されている。内面口縁部上半は縦方向の、下半は横方向のミガキが施されている。胴部上位は横・斜め方向のミガキが、胴部中位は斜め方向のナデが施されている。

411 は、その出土状況から、堅穴建物跡32号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

411 は口縁部から胴部上位の資料である。口径20.3cmを測る。遺構の西角部で、検出面から出土している。外面口縁部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には、指押さえを施した後に突帯を貼り付けている。胴部には横方向の工具ナデが施されている。

石器(第2-152図)

石95は砥石である。上面および右側が破損しているが、その部分を除き、最大長25.7cm、最大幅14.6cm、最大厚1.1cmを測り、重量は670gを量る。北壁付近で貼床面から出土している。薄い板状の砂岩製であり、表裏両面を砥石として使用しており、擦痕が残る。表面の一部には敲打痕も確認できる。さらに左側面の一部にも使用痕が確認できる。

石96は磨礫石である。遺構の南東壁面から出土している。表面に擦痕と左側面に擦痕があり、また左側面には敲打痕も確認できる。

石97は磨礫石である。遺構の北東壁付近で、硬化面上面(貼床面)から出土している。表面と上面の一部に擦

痕、上面と下面に敲打痕が見られる。

石96と石97は、ともに貼床面からの出土であるため、古墳時代の遺物として掲載した。

石98は棒状礫である。表面から上面、そして裏面にかけては擦痕も確認できる。遺構北東部の土器が集中して出土した範囲の硬化面上面(貼床面)から出土している。

石99は棒状礫である。北壁付近で貼床面から出土している。

炭化材(第3分冊自然科学分析参照)

堅穴建物跡32号では3点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から堅穴建物跡32号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し検討を行い、1点の炭化物について放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。しかしながら、分析の結果2σ暦年代範囲で768calBC-536calBD(95.4%)となったため、この資料は縄文時代の炭化物の流れ込みと判断した。樹種はマツ属複雑管束亜属であった。

堅穴建物跡33号(第2-153図)

堅穴建物跡33号はF30・31区から検出した。大きさは長軸(南北軸)6.0m、短軸(東西軸)5.5mを呈し、遺構の北側を堅穴建物跡32号に、南側を堅穴建物跡34号に大きく切られている。東側に大きく攪乱の影響を受けているが、隅丸形状を呈していると考えられる。張り出しは検出されていないが、南側を大きく堅穴建物跡34号に切られているため、張り出しの有無は不明である。検出面から底面までの深さは約10cmと非常に浅いが、これは堅穴建物跡33号が周囲の遺構よりも深く掘削の影響を受けていたことに起因し、本来の建物の底面の深さは堅穴建物跡34号や35号とあまり変わらないと考えられる。底面から約5cmの厚さで貼床が形成されている。遺構の中央には長軸約80cm、短軸約35cm、深さ約10cmの楕円形状の炉跡が検出されている。硬化面は炉跡の南側に、東西約3m、南北約1.5mの狭い範囲に広がっている。堅穴建物跡33号は、堅穴建物跡34号に切られている可能性が高く、硬化面の範囲の南側の際が堅穴建物跡33号の残存範囲と考えられる。柱穴は遺構内に4基検出されており、硬化面範囲内に2基、遺構の北側に2基である。堅穴建物跡34号との境界部分には、炭化物が集中して出土する範囲が広がり、その部分の底面は、両側の堅穴建物跡の底面よりも深い。また、両側の硬化面を切るような形で形成されているため、堅穴建物跡34号よりも後に造られた土坑である可能性も考えられる。

出土遺物(第2-148・154図)

遺物は遺構の全体から出土しているが、北側半分からの出土量がやや少ない。

土器 (第 2-155 図)

413・414はその出土状況から、竪穴建物跡 33号に帰属する可能性が高い土器群である。

413は頸部がわずかにくびれ、口縁部が直立して立ち上がるが、口縁部上端でわずかに外傾する、甕C類の口縁部から脚部上端部までの資料である。口径 28.8 cmを測る。遺構の中央部と西壁の中間付近に集中して、貼床面や検出面から出土している。

414は高坏の脚部資料である。炉跡の北側で貼床面から出土している。外面は横方向の工具ナデを施した後に、横・斜め方向のミガキを施している。内面は縦方向の工具ナデを施している。

415～417はその出土状況から、竪穴建物跡 33号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

415は口縁部が内傾する甕D類の口縁部から胴部上位の資料である。口径 31.4 cmを測る。遺構の中央部と西壁の中間付近で、検出面から出土している。口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は縦方向の工具ナデが施されている。

416は幅広突帯を持つ壺の胴部資料である。遺構の西北部で検出面から出土している。内外面に横方向の工具ナデを施している。

417は高坏の坏部下位から脚部の資料である。遺構の西壁付近で、検出面から出土している。外面坏部下端はミガキが施されている。脚部は横・斜め方向の工具ナデを施した後に、部分的に縦方向のミガキが施されている。坏部内面はミガキが施されている。脚部内面は縦方向のケズリを行った後に、斜め方向のミガキを施している。

石器 (第 2-155 図)

石 100は棒状礫である。炉跡のすぐ北側で貼床面から出土している。胴部の中央に幅 2～3 cmの痕跡が一周巡っており、紐状のものを巻いて使用していた使用痕である可能性が考えられる。

石 101は棒状礫である。柱穴 P3の上面で出土している。

石 102は棒状礫である。柱穴 P3の東側で検出面直下から出土している。使用痕は確認できないが、鉄片の付着が2か所で確認できる。

竪穴建物跡 34号 (第 2-156 図)

竪穴建物跡 34号はF・G30・31区から検出した。大きさは長軸(北東-南西軸)約 6.8 m、短軸(北西-南東軸) 4.5～4.8 m程度を呈すると考えられるが、東側に大きく擾乱の影響を受け、南北を隣接した竪穴建物跡 33号・35号と切り合っており、遺構の際のはっきりしないた

め、張り出しの有無は不明だが、形状は長方形を呈すると考えられる。検出面から底面までの深さは、最大で約 40 cmであり、底面から約 15 cmの厚さで貼床が形成されている。土坑・炉跡は検出されていない。切り合う4基の竪穴建物跡のなかで炉跡が検出されていないのは、竪穴建物跡 34号のみであり、建物の中央部は擾乱の影響をほぼ受けていないため、炉跡は元々存在していなかった可能性が高い。硬化面は遺構の中央部から南西側へ大きく広がっていることは確認できるが、擾乱を受けている北東側は不明である。柱穴は遺構内の硬化面範囲内に3基、南角部付近から1基検出されている。

出土遺物 (第 2-148・157 図)

遺物は遺構内全体から出土している。

土器 (第 2-158 図)

418～424はその出土状況から、竪穴建物跡 34号に帰属する可能性が高い土器群である。

418は口縁部が外傾する甕B類の口縁部から胴部中位までの資料である。遺構の北側で貼床面から検出面まで出土している。外面口縁部上半は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが、下半は縦方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は縦方向の工具ナデが施されている。

419は口縁部が外傾する甕B類の口縁部から胴部上位の資料である。口径 33.4 cmを測る。遺構の北側で貼床面から出土している。外面口縁部は横・斜め方向の工具ナデを施している。突帯下位には横方向の工具ナデが、胴部には縦方向の指ナデが施されている。突帯部分の上下には指押しえが巡る。内面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。胴部上端は斜め方向の工具ナデが、その下位には横方向の指ナデが施されている。突帯内面部分には横方向の指ナデが施されている。

420は口縁部が外傾する甕B類の口縁部から胴部中位の資料である。口径 26.8 cmを測る。遺構の中心部からやや南側の位置で、貼床面から出土している。外面口縁部は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。突帯下位には横方向の指ナデが施されている。胴部には幅 6 mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。胴部には縦・斜め方向の工具ナデおよび、縦方向の指ナデが施されている。口縁部と突帯内面部分には指押しえが並ぶ。

421は口縁部が外傾する甕B類の口縁部から胴部中位の資料である。口径 32.0 cmを測る。遺構の中心部とその南北で、貼床面から出土している。外面口縁部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部上位は横方向の工具ナデを施した後に、斜め方向の工具ナデと、縦・斜め方向のミガキが施されている。内面は横方向お工具ナ

デが施されており、突帯内部分には間隔を空けて指押さえが並ぶ。

422 は甕の胴部下位から脚部である。底径 9.4cm、脚部高 1.8cm を測る。遺構の東側および南東部で、貼床面から出土している。外面胴部は器面の剥落が激しいが、部分的に工具ナデが確認できる。脚部は斜め方向の工具ナデが施されている。内面胴部は縦方向の指ナデが施されている。脚部内面は横方向の工具ナデが施されている。

423 は丸底甕もしくは壺の肩部から底部の資料である。長胴の土器であり、残存部のみで器高は 33.8cm を測る。遺構南東部の土器が集中して出土した範囲の貼床面から出土している。外面胴部は斜め方向の工具ナデを施した後に、幅 5～6mm の縦方向の工具ナデを施している。底部付近は斜め方向の工具ナデが施されている。内面胴部は横・斜め方向の工具ナデが、底面付近は斜め方向の工具ナデが施されている。

424 は高坏の脚部資料である。遺構の南側で貼床面から出土している。内外面ともに縦方向の工具ナデが施されている。

425・426 は堅穴建物跡 33 号と 34 号の境界部分の炭化物集中箇所の底面から出土した土器群である。

425 は高坏の脚部資料である。外面は縦方向のミガキが、内面は縦方向の指ナデと工具ナデが施されている。

426 は埴の胴部から底部の資料である。外面は斜め・横方向のミガキが施されている。内面口縁部下端は横方向の工具ナデが、胴部は横方向の指ナデが施され、部分的には斜め方向の工具ナデが施されている。

石器 (第 2 - 158 図)

石 103 は棒状礫である。堅穴建物跡 33 号と 34 号の境界部分の炭化物集中箇所の底面から出土している。

堅穴建物跡 35 号 (第 2 - 159 図)

堅穴建物跡 35 号は G30・31 区から検出した。大きさは長軸(東西軸) 5.0 m、短軸(南北軸) 3.8 m を呈し、遺構の北側を堅穴建物跡 34 号に切られている。遺構の東側から南側にかけて部分的に攪乱の影響を受けているが、周囲の 3 基の堅穴建物跡と比べると、攪乱の影響は少ない。隅丸長方形形状を呈し、北側を堅穴建物跡 34 号に切られているため、張り出しの有無は不明である。検出面から底面までの深さは最大で約 30cm であり、底面から約 5～10cm の厚さで貼床が形成されている。遺構の中央部には、長軸(南北軸) 約 85cm、短軸(東西軸) 約 60cm、貼床面からの深さ約 10cm の楕円形状の炉跡が検出されている。硬化面は炉跡の周囲に南北に約 3m、東西にも約 3m の幅で不定形状に広がっており、堅穴建物跡 34 号に切られている北側は詳細不明であるが、東西方向では壁まで達せず、幅 70cm 程度で硬化面の無い範囲が広がる。南側でも一部では壁付近まで硬化面が広がるが、南

西部では 1m 程度の幅で硬化面のない範囲が確認できる。柱穴は遺構内に 3 基、いずれも硬化面の範囲外で検出されている。

出土遺物 (第 2 - 148・160 図)

遺物は遺構内全体から出土しているが、炉跡の南側でやや多く出土している。また南壁付近では出土量が少ない。

土器 (第 2 - 161 図)

428 はその出土状況から、堅穴建物跡 35 号に帰属する可能性が高い土器である。外傾しつつ立ち上がる口縁部が、口縁部上端で直行する甕 D 型の口縁部から胴部中位までの資料である。口径 25.7cm を測る。炉跡の南側および北西側で出土しているが、南側で出土した一群が貼床面から出土しているのに対し、北西部で出土している一群は検出面で出土しているため、土器の原位置は炉跡の南側であると考えられる。外面は横方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部以下は斜め方向の工具ナデが施されている。

429～431 は、その出土状況から、堅穴建物跡 35 号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

429 は高坏の脚部である。遺構埋土中一括取り上げ遺物である。

430 は完形に復元できた鉢である。口径 23.0cm、底径 9.8cm、器高 13.1cm を測る。遺構埋土中一括取り上げ資料である。外面口縁部は横方向の工具ナデが、胴部は斜め方向の工具ナデが施されており、口縁部と胴部の境目では、その工具ナデの上から縦方向の指ナデが施されており、工具ナデがナデ消されている。胴部では工具ナデの上からミガキが疎に施されている。胴部下端から脚部にかけては、横方向の工具ナデを施した後に、脚部上位では斜め方向の指ナデが施されており、工具ナデがナデ消されている。

431 は埴の胴部から底部の資料である。炉跡の南側で貼床面よりもわずかに浮いた状態で、遺構の南東部で検出面から出土している。外面は横・斜め方向のミガキが施されている。内面は横方向の工具ナデが施されている。

堅穴建物跡 36 号 (第 2 - 162 図)

堅穴建物跡 36 号は F30 区 Va 層から検出した。大きさ・形状は 1 辺が約 4.5m の隅丸方形形状を呈する。検出面から底面までの深さは約 56cm であり、底面から 20～25cm 程度の厚さで貼床面が形成されている。遺構の周縁部には検出面から約 35cm の深さで、一段高い底面が形成され、貼床面はこの一段高い底面と同じ高さで形成されている。遺構の中央部には長軸約 52cm、短軸約 46cm、深さ約 10cm の底面に焼土をともなう土坑が検出されてお

り、伊跡と考えられる。遺構の中央部からやや南西の位置には、長軸約52cm、短軸約44cm、深さ約8cmの浅い土坑を検出しており、土坑の埋土は伊跡の埋土と類似している。遺構の南側には楕円形の凹みが掘られている。硬化面は貼床面の上面が硬化しており、硬さ以外は貼床面と同じ埋土である。遺構の南側から西側にかけて、やや広めに広がっている。柱穴は貼床面の四隅に近い位置に4基検出されている。張り出しは持たない。

出土遺物(第2-163遺)

遺物は遺構全体から出土しているが、周縁部からの出土はやや密度が薄い状況である。

土器(第2-164遺)

432～434はその出土状況から、堅穴建物跡36号に帰属する可能性が高い土器群である。

432は完形に復元できた口縁部が外傾する甕B類である。口径32.6cm、底径9.1cm、器高34.5cm、脚部高2.5cmを測る。遺構の中央部から南側にかけて貼床面から出土している。外面口縁部から胴部上端にかけては横方向の工具ナデが施されている。胴部には横・縦方向の指ナデや、斜め方向の工具ナデを施した後に、幅3～4mm程度の縦方向の工具ナデが施されており、一部は光沢を持ちミガキ調整となっている。脚部は横方向の工具ナデが施されている。内面口縁部から胴部上端にかけては横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部には縦方向の工具ナデを施した後に、幅3mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。外面と同じくこちらも一部は光沢を持ち、ミガキ調整となっている。脚部内面は指ナデが施されている。

433は口縁部が外傾する甕B類の口縁部から胴部中位までの資料である。口径21.3cmを測る。遺構の南東部で貼床面および検出面から出土している。外面は器面の剥落が激しく、また器面に煤および炭化物が多く付着しているため、器面調整が不鮮明な箇所がある。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部は斜め方向のナデが施されている。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部中位以下は横方向のナデが施されている。突帯内面部分には指押しさが並ぶ。

434は完形に復元できた口縁部が外傾する甕B類である。口径31.0cm、底径8.8cm、器高31.4cm、脚部高2.1cmを測る。貼床面出土遺物である。外面口縁部は凹凸が明瞭な丁寧な横方向の工具ナデが施されている。口縁部と胴部の境目には縦方向の工具ナデを打ち込み、段差を設けることで、くびれを作り出している。この縦方向の工具ナデの上部は斜め方向の工具ナデによりナデ消されている。胴部は縦・斜め方向の丁寧な工具ナデが施されており、部分的には光沢を持つ。脚部は縦方向の工具ナデを施した後に、横方向の工具ナデが施されている。内面

口縁部は凹凸が明瞭な横方向の工具ナデが施されており、その上から指ナデが施されている。胴部上端は斜め方向の工具ナデが、胴部中位から下位にかけては斜め・縦方向のハケ目が施されている。胴部下位ではハケ目の上から、幅1～2mm程度の縦方向のミガキが施されている。内面胴部中位から下位にかけては、部分的に摩滅・摩耗が著しい箇所が見られる。脚部内面は横方向の工具ナデが施されている。

434は全体的に煤が付着しており、この付着炭化物の放射性炭素年代測定(AMS測定)をおこなったところ(第3分冊自然科学分析参照)、確率の高い2σ暦年校正年代で241calAD-357calAD(91.6%)となった。おおよそ3世紀中頃～4世紀中頃の値である。

435～439はその出土状況から、堅穴建物跡36号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

435は甕の胴部資料である。遺構南側の凹みの上面で出土している。外面胴部中位は縦方向のハケ目が、胴部下位は縦・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部と脚部の境目には横方向の指ナデが施されており、指押しさも施されている。内面胴部中位は斜め方向のハケ目が、胴部下位は斜め方向の工具ナデが施されている。底面は指押しさが多く施されている。

436は壺の口縁部から頸部の資料である。口径14.0cmを測る。遺構の中心部よりやや南東側で、貼床面から5cm程度浮いた状態で出土している。外面口唇部はナデが施されている。口縁部は横方向の工具ナデを施した後に、口縁部上半は横方向の指ナデが、下半は縦方向の工具ナデが施されている。頸部には斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、斜め方向のミガキを疎に施している。内面は横方向の工具ナデが施されているが、頸部は器面の剥落が著しい。

437は鉢の口縁部から胴部中位の資料である。口径23.7cmを測る。遺構埋土中一括取上げ資料である。外面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。胴部には斜め方向の工具ナデを施した後に、幅5～7mm程度の斜め方向の工具ナデを疎に施している。内面口縁部は横方向の工具ナデを施している。胴部には横・斜め方向の工具ナデを施した後に、部分的に幅4～5mm程度の斜め方向の工具ナデを施している。

438は甕または壺の胴部から底部の資料である。土坑とその西側で埋土中および検出面から出土している。外面は縦・斜め方向のミガキが施されている。内面胴部中位は斜め方向のミガキが、下位は指ナデが施されている。

439は完形に復元できた鉢である。口径24.5cm、底径6.6cm、器高14.4cmを測る。遺構の中央部よりやや南側の位置で、貼床面から約20cm浮いた状態で出土してい

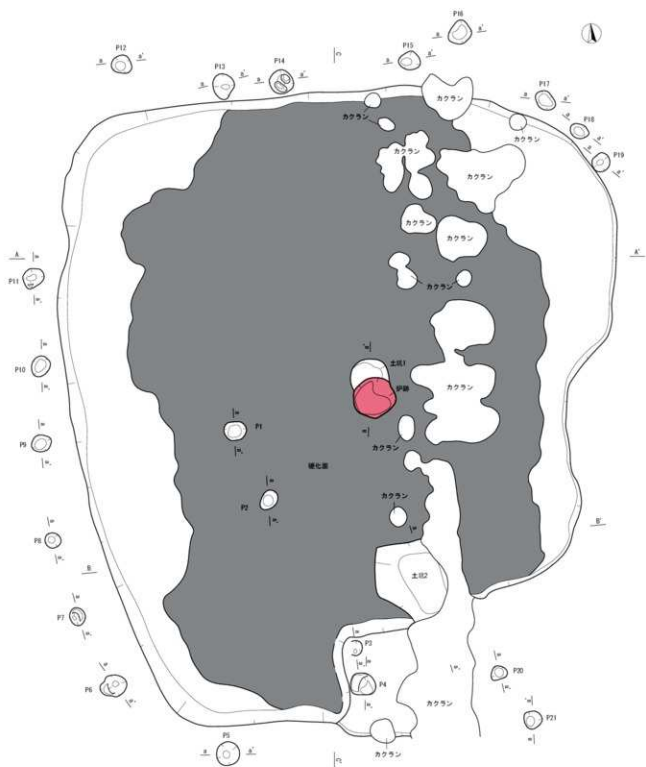
る。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、胴部は斜め方向の工具ナデが、脚部は横方向の工具ナデが施されている。脚端部は摩滅しており、調整が不明である。胴部と脚部の境目には指押さえが巡る。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部から胴部中位にかけては、横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、口縁部には斜め方向の工具ナデを間隔を空けて施している。胴部中位以下には丁寧な斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、指ナデを施している。脚部内面には丁寧な斜め方向の指ナデと横方向の工具ナデが施されている。

石器(第2-164図)

石104は軽石製品である。遺構の北壁中央部付近で貼床面から出土している。表裏面に溝状の袈りが確認できる。

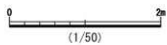
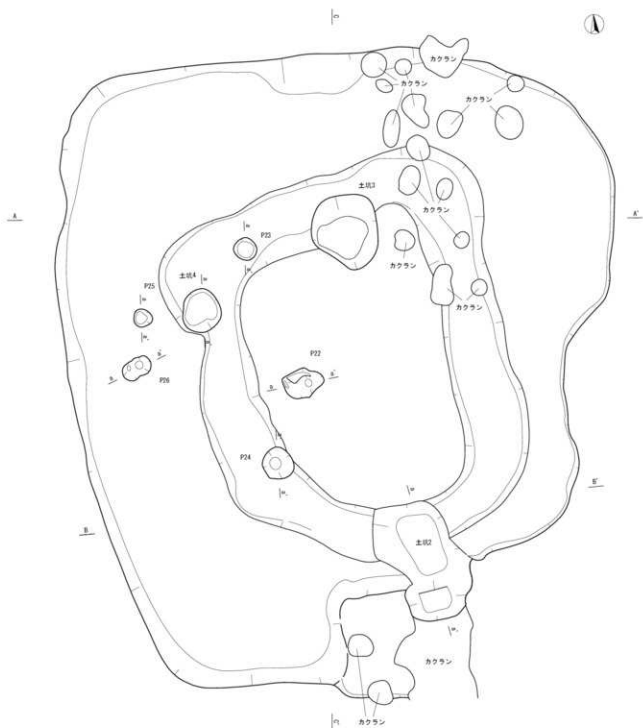
炭化物ほか

竪穴建物跡36号の埋土については、洗い出しを行ったが、炭化種子等は検出されなかった

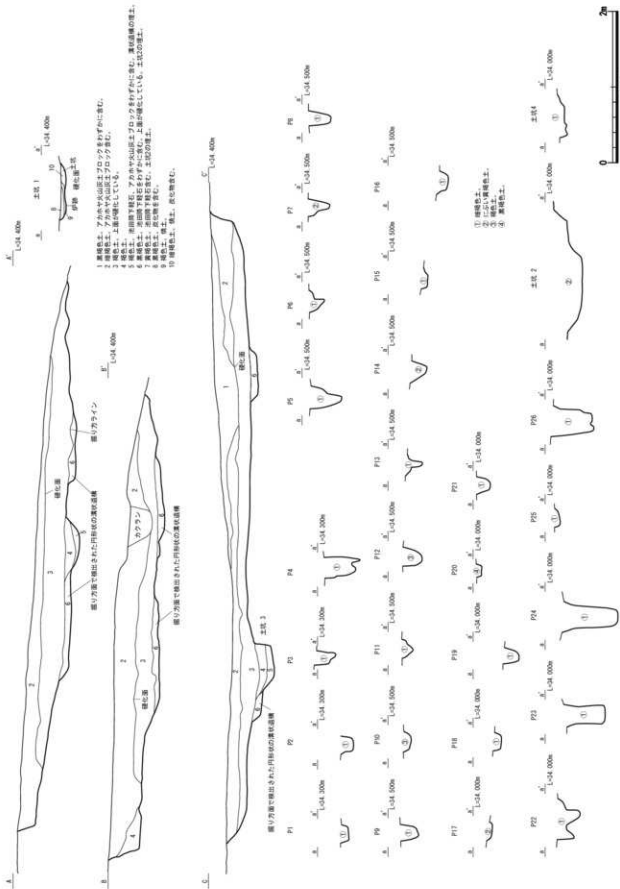


第2-135図 竪穴建物跡30号 貼床面

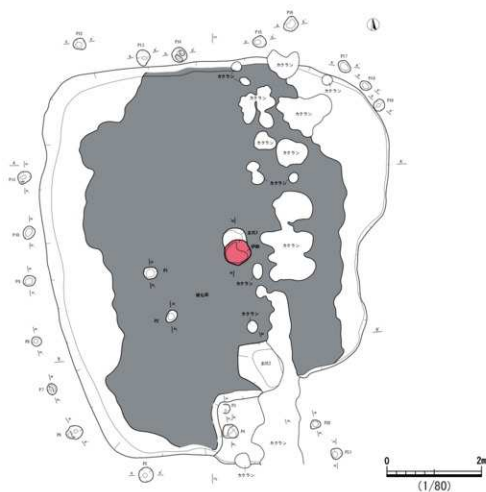
0 2m
(1/50)



第2-136図 竪穴建物跡30号 底面



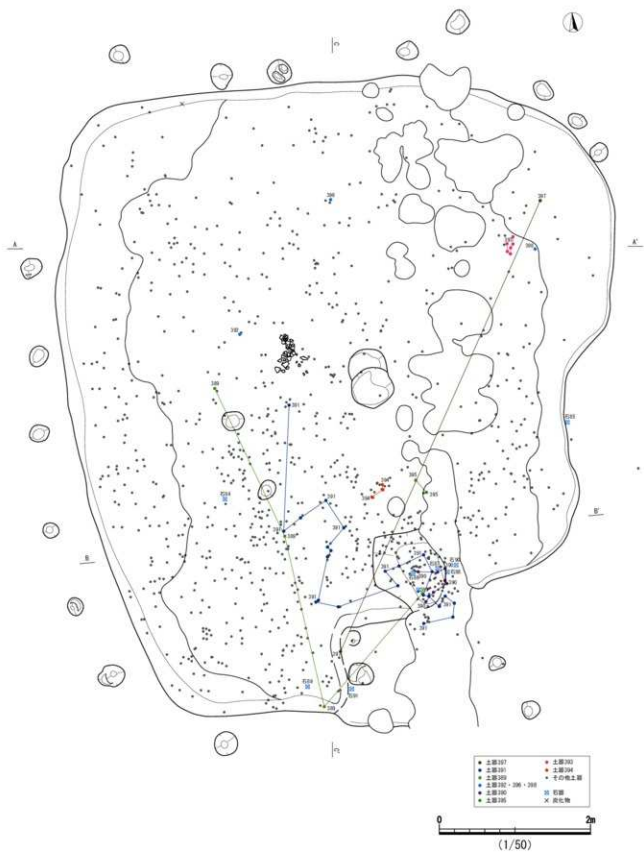
第2-137図 竪穴建物跡30号 断面・土坑・柱穴



第2-138図 竪穴建物跡30号 柱穴埋土分類

表2-60 竪穴建物跡30号柱穴観察表

番号	埋土	平面形状	径	最小径	深さ	番号	埋土	平面形状	径	最小径	深さ
P1	暗褐色土	略楕円形	30-25	15	10	P14	にぶい黄褐色土	楕円形	30	8	20
P2	暗褐色土	略楕円形	25-20	15	18	P15	暗褐色土	略楕円形	28-25	10	8
P3	にぶい黄褐色土	楕円形	20	5	25	P16	暗褐色土	楕円形	30	15	12
P4	黒褐色土	略楕円形	35-30	12	40	P17	にぶい黄褐色土	略楕円形	30-23	12	8
P5	暗褐色土	楕円形	30	10	45	P18	暗褐色土	略楕円形	25-18	10	10
P6	暗褐色土	略楕円形	35-30	8	20	P19	暗褐色土	楕円形	25	8	20
P7	にぶい黄褐色土	楕円形	25	5	30	P20	黒褐色土	略楕円形	22-18	12	8
P8	暗褐色土	楕円形	20	8	30	P21	暗褐色土	楕円形	25	15	20
P9	暗褐色土	略楕円形	28-23	12	25	P22	暗褐色土	不定形	55-35	10	30
P10	褐色土	略楕円形	28-23	12	19	P23	暗褐色土	楕円形	30	20	55
P11	暗褐色土	略楕円形	30-25	8	15	P24	暗褐色土	楕円形	40	15	25
P12	暗褐色土	略楕円形	28-23	12	25	P25	暗褐色土	楕円形	25	15	8
P13	暗褐色土	略楕円形	33-30	6	20	P26	暗褐色土	略楕円形	40-25	10	55

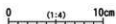
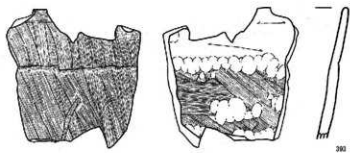
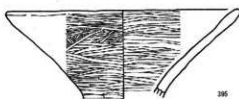
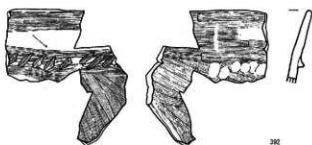
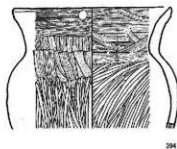
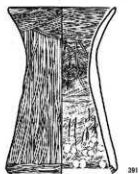
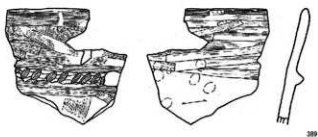
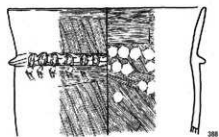


第 2-139 图 竖穴建物跡30号 遺物出土状況(平面)

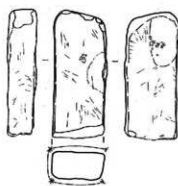


第2-140圖 聖穴墓跡跡30号 遺物出土状況(断面)

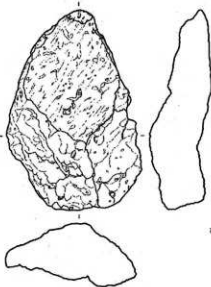
(1/50)



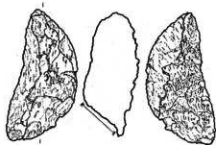
第2-141 圖 竪穴建物跡 30 号 出土遺物(土器)



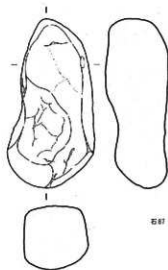
石84



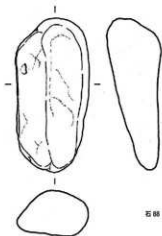
石85



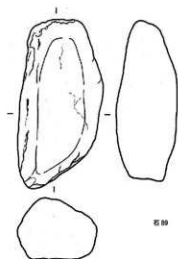
石86



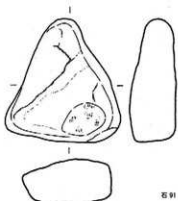
石87



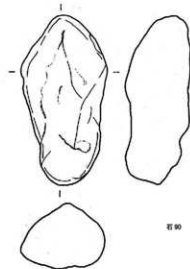
石88



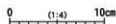
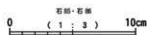
石89



石91



石90



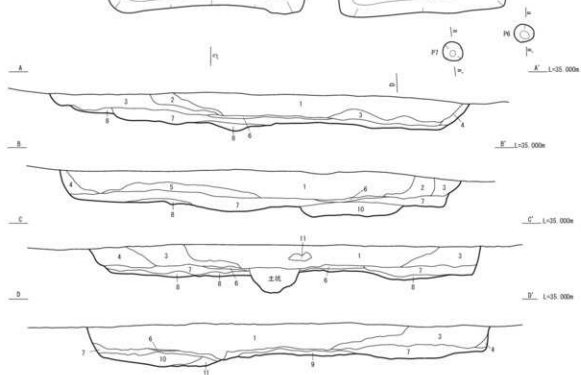
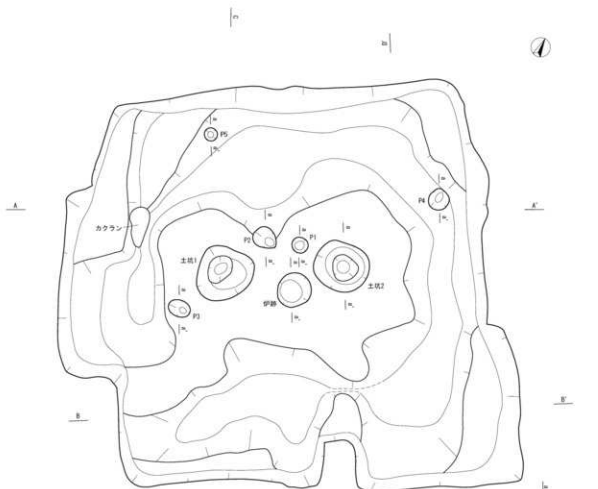
第2-142 圖 竪穴建物跡 30号 出土遺物(石器)

表2-61 竪穴建物跡30号出土土器

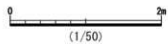
図 番 号	遺物 番 号	床 面	器種	部位 (次級部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考
2 141	388	○	甕	口縁部-胴部	C	—	20.7	—	工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:橙	石・白・小・ ほこ	
	389	○	甕	口縁部-胴部	C	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ ナデ	外:橙 内:橙	石・白・部・ 小	
	390	○	甕	口縁部-胴部	C	—	18.6	—	工具ナデ	工具ナデ ナデ	外:にぶい・橙 内:にぶい・橙	石・黒・ ほこ	
	391	○	甕	口縁部-胴部	—	—	11.2	—	ミガキ	ミガキ 工具ナデ	外:にぶい・橙 内:にぶい・橙	石・白・小・ ほこ	
	392		甕	口縁部-胴部	B	—	—	—	工具ナデ ナデ	工具ナデ	外:橙 内:橙	石・黒・小・ ほこ	
	393		甕	口縁部-胴部	B	—	—	—	工具ナデ ナデ	工具ナデ	外:橙 内:橙	石・白・部・ 小	
	394		甕	口縁部-胴部	—	—	16.5	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:黄緑 内:浅黄緑	石・長・白・ ほこ	
	395		鉢	口縁部-胴部	—	—	24.5	—	ミガキ	ミガキ	外:明赤褐 内:明赤褐	石・白・小・ ほこ	
	396		高坏	坏部-脚部	—	—	14.9	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:橙 内:橙	石・黒・白・ 部・小	
	397		甕	完形	—	9.0	8.8	2.8	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:浅黄緑 内:橙	石・白・部 小	
398		甕	完形	—	6.8	7.8	—	工具ナデ	工具ナデ	外:黄緑 内:黄緑	石・黒・部・ 小		

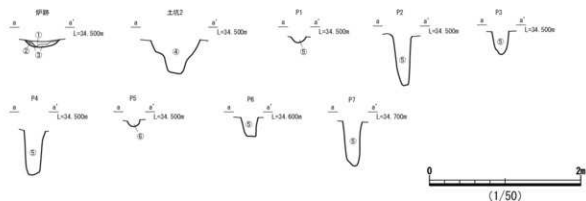
表2-62 竪穴建物跡30号出土石器

図 番 号	遺物 番 号	床 面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 142	石84	○	砥石	破損	13.5	5.8	3.0	450.0	砂岩	
	石85	○	軽石製品	完形	15.8	10.3	4.4	130.0	軽石	
	石86	○	軽石製品	破損	10.3	5.0	4.1	30.0	軽石	
	石87	○	棒状織	完形	18.0	9.2	7.2	1630.0	ホルンフェルス	
	石88	○	棒状織	完形	17.9	8.9	6.5	1400.0	ホルンフェルス	
	石89	○	棒状織	完形	16.3	7.8	5.7	990.0	ホルンフェルス	
	石90	○	棒状織	完形	18.0	9.1	7.0	1470.0	ホルンフェルス	
	石91		織	完形	13.0	12.2	5.1	1051.0	砂岩	



第2-143図 竪穴建物跡31号





第2-144図 竪穴建物跡31号 伊跡・土坑・柱穴

竪穴建物跡土

- 1 雑褐色土。ややしまりあり。アカホヤ火山灰土。池田降下軽石が少量まざる。
- 2 濃い黄褐色土。V層がまざる。
- 3 雑褐色土。アカホヤ火山灰土が少量。池田降下軽石が少量まざる。
- 4 雑褐色土。アカホヤ火山灰土が少量。池田降下軽石が少量まざる。
- 5 雑褐色土。アカホヤ火山灰土ブロックを含む。
- 6 雑褐色土。硬化面。
- 7 雑褐色土。アカホヤ火山灰土と黄褐色の1~2cm次のブロックが多くまざる。
- 8 明褐色土。黄褐色土が少量まざる。
- 9 明褐色土。黄褐色土が少量まざる。
- 10 黄褐色土。
- 11 濃い黄褐色土。V層がまざる。

柱穴埋土

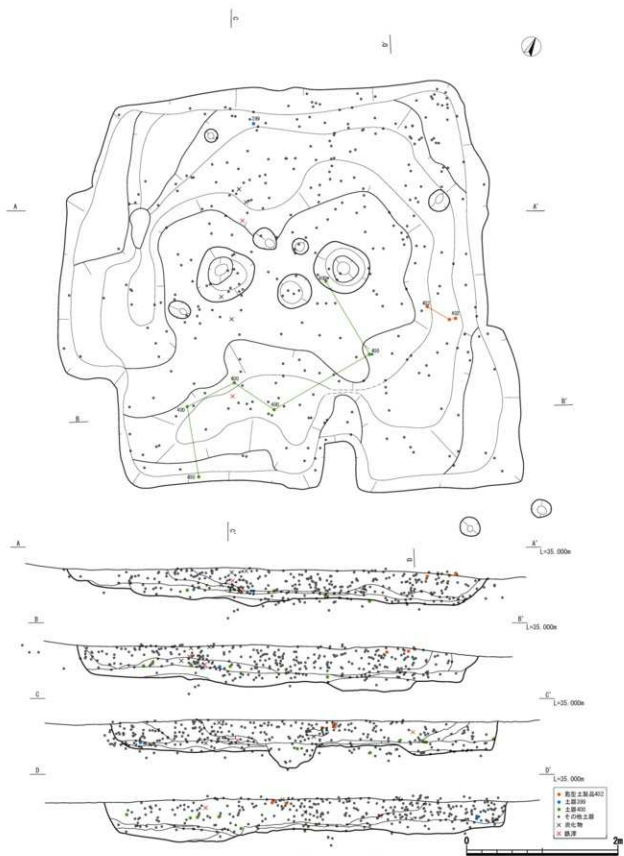
- ① 雑褐色土。1cm以下の灰化物を少量。5cm以下の池田降下軽石を少量含む。
- ② 明褐色土。硬土。
- ③ 埋土上にV層がまざる。
- ④ 明褐色土にアカホヤ火山灰土が少量まざる。黄褐色土の硬化ブロックをわずかに含む。5cm以下の池田降下軽石を少量含む。
- ⑤ 雑褐色土。
- ⑥ 雑褐色土。

表2-63 竪穴建物跡31号出土土器

図番号	遺物番号	断面	器種	部位(欠損部位)	分類	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
2 146	399	○	甕	口縁部	D	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい 内:洗灰物	石・輝・小・ 注①	
	400	□	甕	胴部-胴部	—	—	—	6.8	工具ナデ	工具ナデ	外:明洗物 内:にぶい物	石・白	胴部高:1.5cm
	401		甕	口縁部-胴部	C	—	39.6	—	工具ナデ	工具ナデ	外:明 内:明物	石・白・小・ 注①	
	402		土製品	—	—	—	—	—	ミガキナデ	ナデ	外:にぶい物 内:にぶい物	石・輝・白・ 黒・小	壺型土製品
	403		土製品	完形	—	—	—	—	工具ナデ	ナデ	外:にぶい物 内:にぶい物	石・長・輝・ 白・小	円腹形土製品

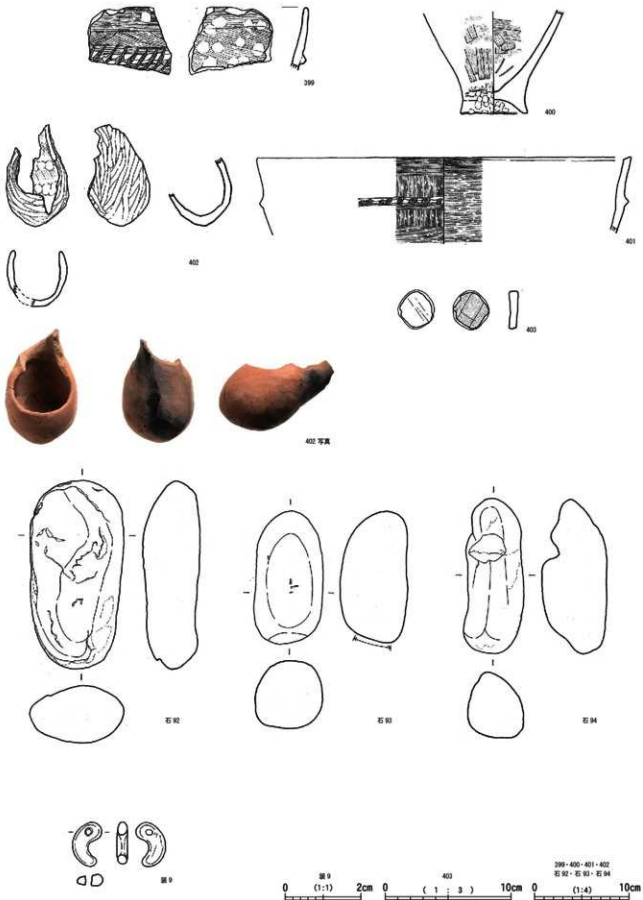
表2-64 竪穴建物跡31号出土石器

図番号	遺物番号	断面	器種	残存状況	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
2 146	石92		棒状礫	完形	19.5	10.5	6.2	1850.0	ホルンフェルス	
	石93		棒状礫	完形	14.1	7.4	7.2	1190.0	砂岩	
	石94		棒状礫	完形	16.3	6.4	6.8	1003.0	ホルンフェルス	

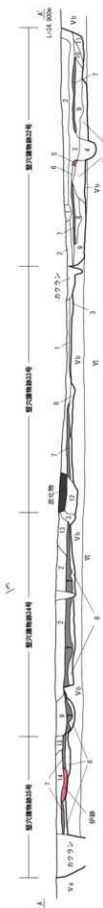
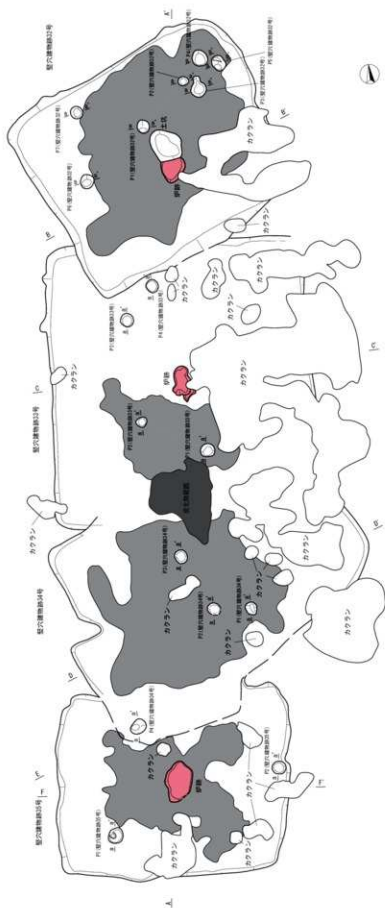


第2-145圖 竪穴建物跡31号 遺物出土狀況

(1/50)



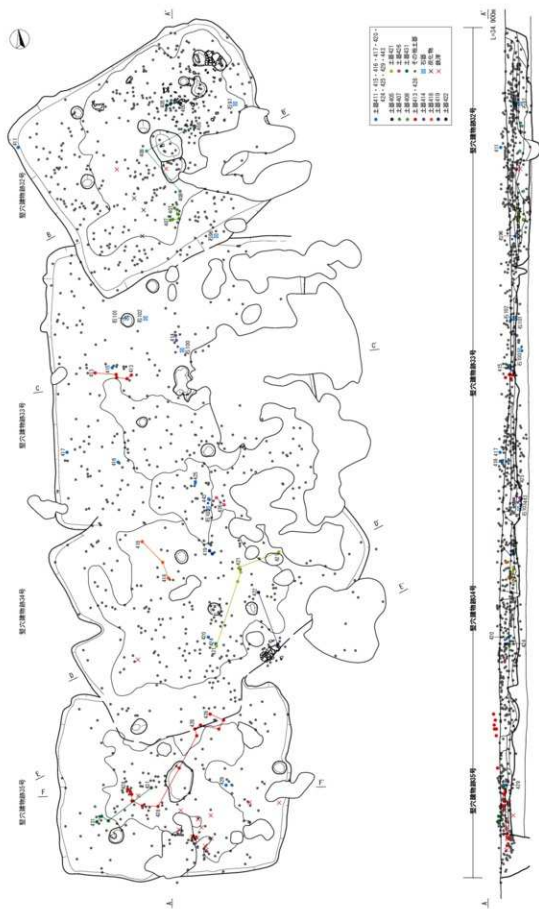
第2-146圖 竪穴建物跡31号 出土遺物(土器・土製品・石器・裝飾品)



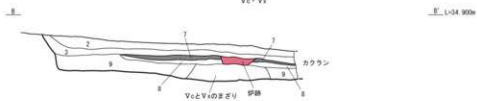
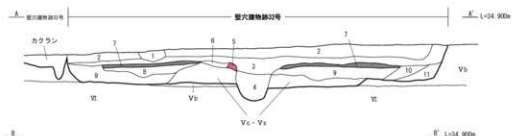
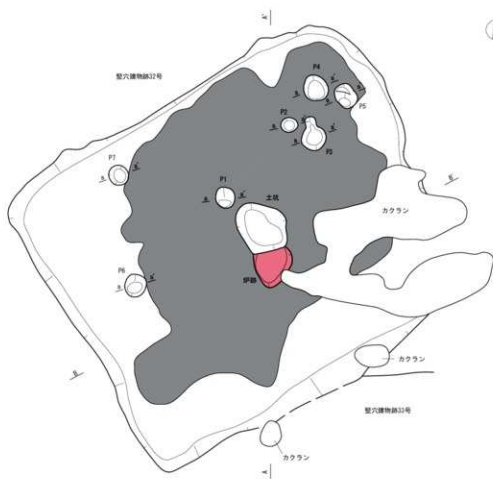
- 1 土間瓦葺敷土、アサギや小山丘を多く含む、洪積層下層近底層。
- 2 埋め土、アサギや小山丘を少量含む層近底層。
- 3 埋め土、ややしまりがある。
- 4 埋め土。
- 5 埋め土。
- 6 埋め土、硬化層。
- 7 埋め土、硬化層、礎土より数層が深い。
- 8 埋め土。
- 9 埋め土。
- 10 埋め土。
- 11 埋め土、礎石埋まり層にしてる。
- 12 埋め土、洪積層下層近底層をわずかに含む。
- 13 埋め土、アサギや小山丘を多く含む層近底層をわずかに含む。
- 14 埋め土、アサギや小山丘を多く含む層近底層をわずかに含む。



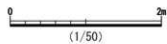
第2-147図 竪穴建物跡32号～35号



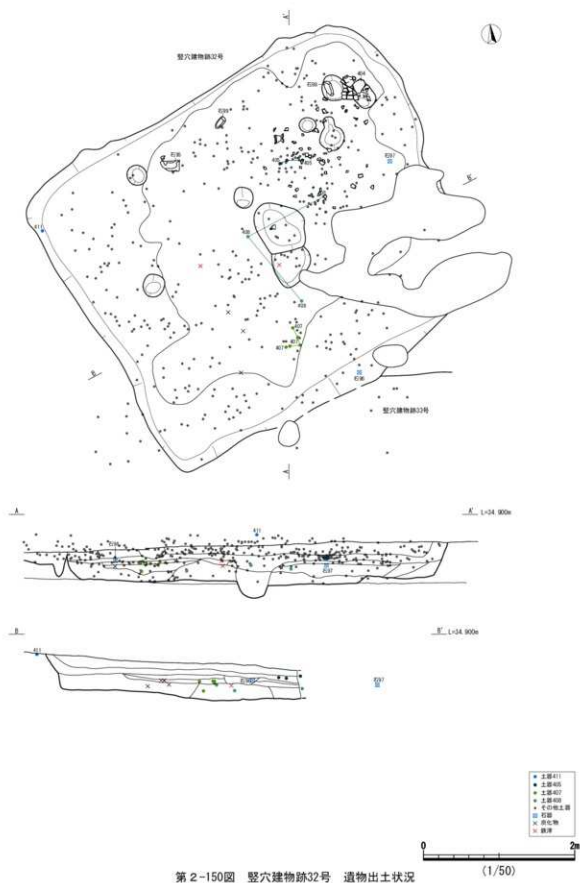
新2-148図 整穴遺物部32号～35号 遺物出土状況



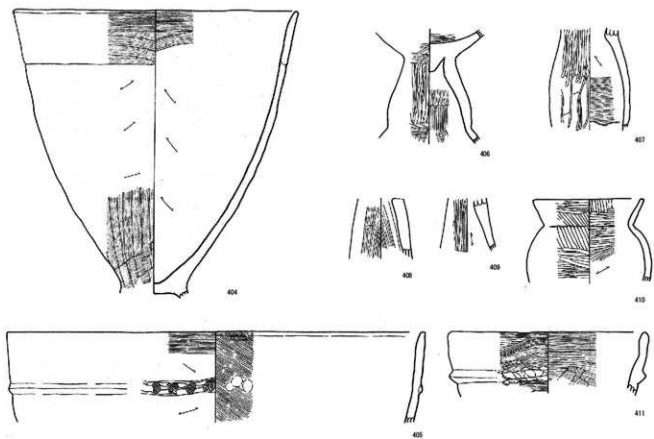
- ① 暗褐色土、黄褐色砂子をわずかに含む。
 ② 暗褐色土。
 ③ 黄褐色土。



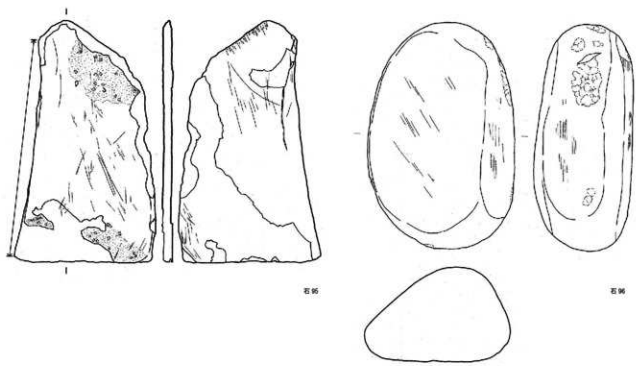
第2-149図 竪穴建物跡32号



第 2-150 図 豎穴建物跡32号 遺物出土状況

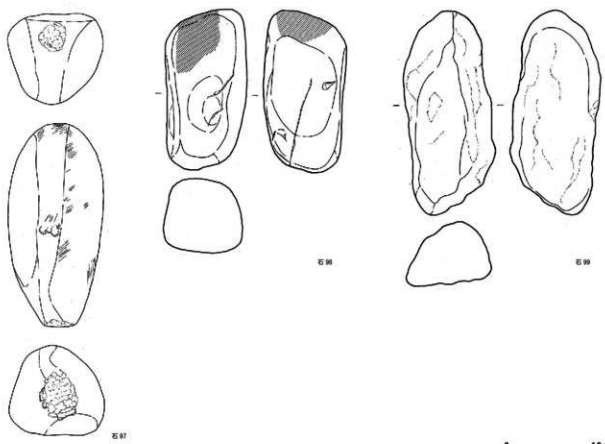


第2-151 図 竖穴建物跡 32号 出土遺物(土器)



石 95

石 96



石 97

石 98

石 99



第2-152图 整穴建物跡32号出土遺物(石器)

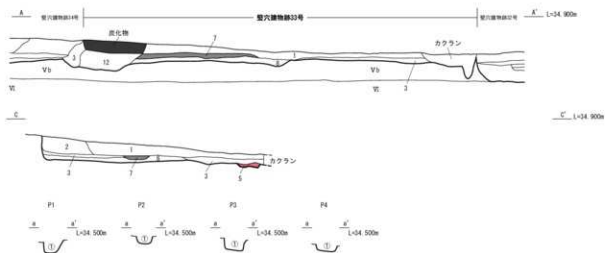
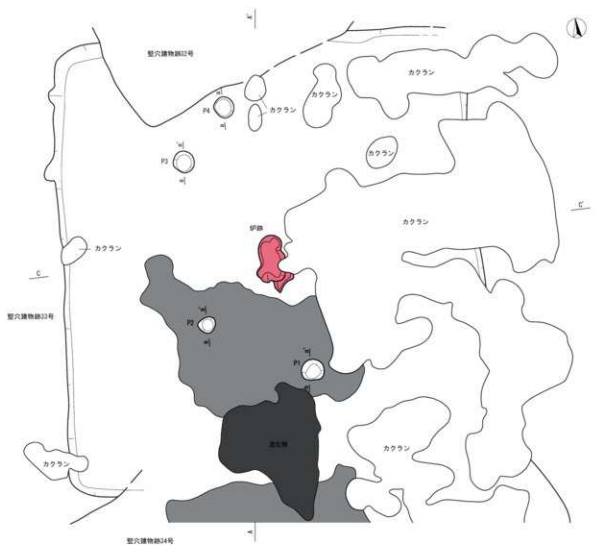
表2-65 竪穴建物跡32号出土土器

図番号	遺物番号	床面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考
2 151	404	○	甕	口縁部-胴部	B	—	29.4	—	工具ナゲ 指ナゲ	工具ナゲ 指ナゲ	外:赤褐色 内:赤褐色	石・白・小	
	405	○	甕	口縁部-胴部	D	—	44.0	—	工具ナゲ 指ナゲ	工具ナゲ	外:にぶい褐色 内:にぶい褐色	石・白・黒・小	
	406	○	高坏	环部-胴部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナゲ	ミガキ 工具ナゲ	外:黒 内:黒	石・長・白・黒・小	
	407	○	高坏	脚部	—	—	—	—	ミガキ ナゲ	指ナゲ 工具ナゲ	外:黒 内:にぶい褐色	石・白・黒・小	
	408	○	高坏	脚部	—	—	—	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:にぶい褐色 内:黒	石・長・黒・白・黒	
	409	○	高坏	脚部	—	—	—	—	工具ナゲ	ナゲ	外:にぶい褐色 内:にぶい褐色	石・白・黒・小	
	410	○	埴	口縁部-胴部	—	—	8.9	—	ミガキ ナゲ	ミガキ ナゲ	外:にぶい褐色 内:にぶい褐色	石・白・黒・小	
	411	○	甕	口縁部-胴部	—	—	29.3	—	工具ナゲ	工具ナゲ	外:にぶい褐色 内:にぶい褐色	石・黒・白・黒・小	

※412欠番

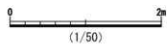
表2-66 竪穴建物跡32号出土石器

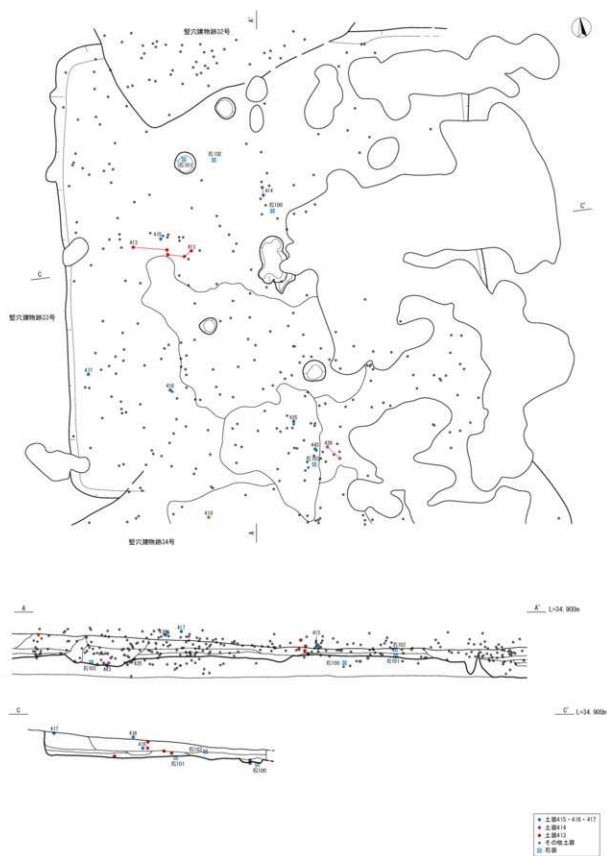
図番号	遺物番号	床面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 152	505	○	砥石	完形	25.7	14.6	1.1	670.0	砂岩	
	506	○	磨礫石	完形	12.0	7.8	5.2	621.0	凝灰岩	
	507	○	磨礫石	完形	10.8	5.1	4.6	378.0	砂岩	
	508	○	棒状礫	完形	17.0	8.7	2.9	1920.0	砂岩	
	509	○	棒状礫	完形	21.5	9.2	6.7	1950.0	凝灰岩	



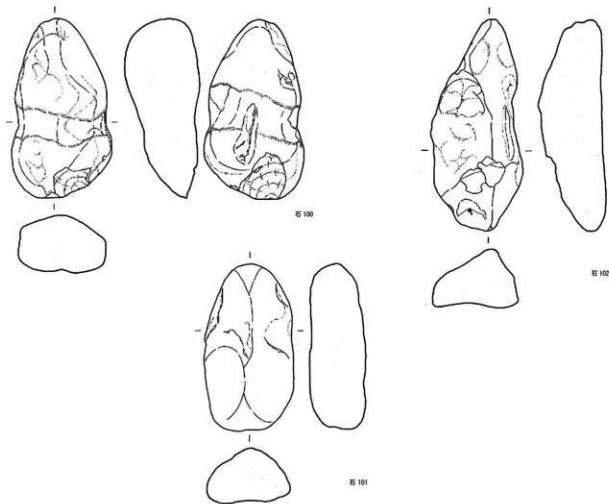
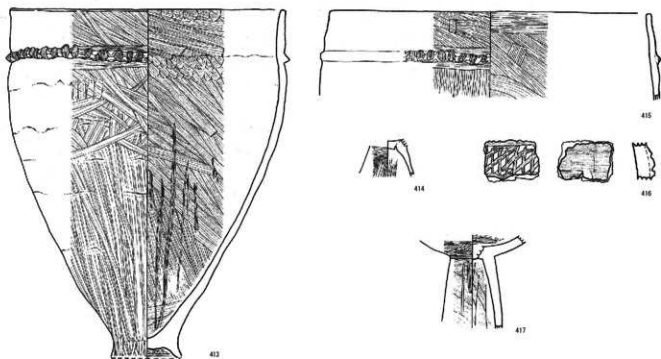
① 暗褐色土、黄褐色粘土をわずかに含む。

第 2-153 図 竪穴建物跡33号



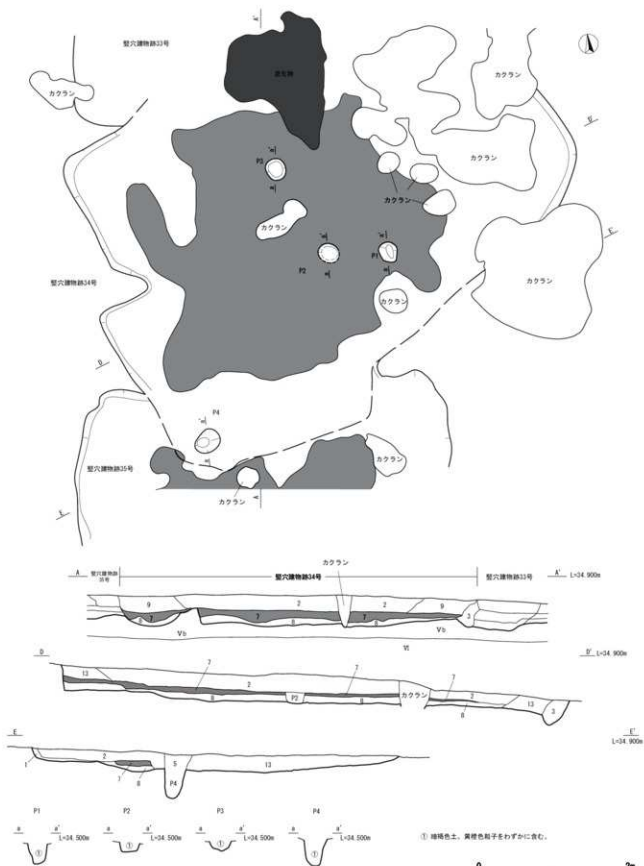


第2-154圖 豎穴建物跡33号 遺物出土狀況



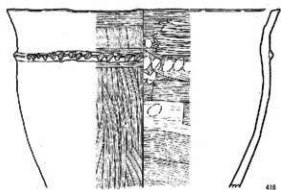
0 (1:4) 10cm

第2-155 圖 竪穴建物跡 33 号 出土遺物(土器・石器)

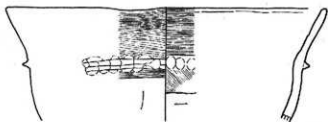


第2-156図 竪穴建物跡34号

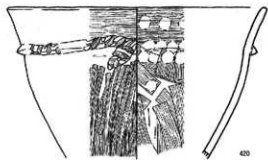
0 2m
(1/50)



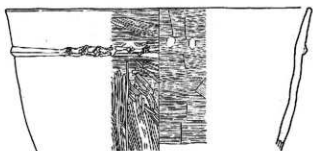
418



419



420



421



422



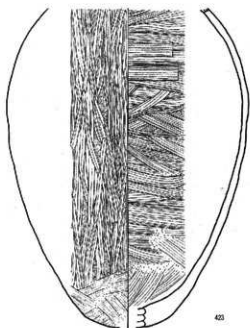
424



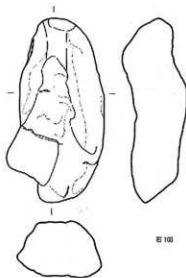
425



426



423



E 100

0 (1:4) 10cm

第2-158图 竖穴建物跡34号 出土遺物(土器・石器)

表2-67 竪穴建物跡33号出土土器

国 番号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考
2 155	413	○	甕	完形	C	37.0	39.2	7.4	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外・黒褐色 内・赤い黄褐色	石・黒・白・ 黒・小	
	414	○	高坏	脚部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外・黒 内・赤い黄褐色	石・黒・白・ 黒・小	
	415	○	甕	口縁部-胴部	D	—	31.4	—	工具ナデ	工具ナデ	外・赤褐色 内・赤い黄褐色	石・黒・白・ 黒・小	
	416	○	甕	胴部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外・赤褐色 内・赤い黄褐色	石・黒・白・ 黒・小	
	417	○	高坏	坏部-脚部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	ミガキ 工具ナデ	外・赤褐色 内・赤い黄褐色	石・黒・白・ 黒・小	

表2-68 竪穴建物跡34号出土土器

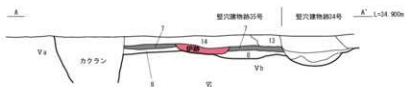
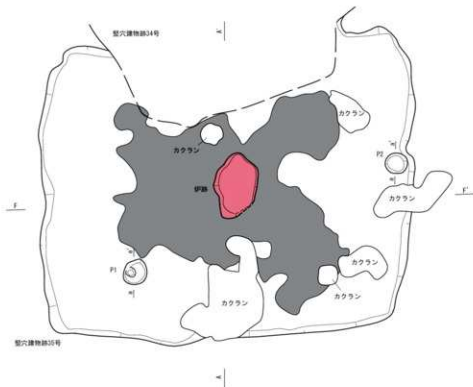
国 番号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考	
2 158	418	○	甕	口縁部-胴部	B	—	28.6	—	工具ナデ	工具ナデ	外・赤い赤褐色 内・赤い黄褐色	石・白・黒・ 小		
	419	○	甕	口縁部-胴部	B	—	33.4	—	工具ナデ 指ナデ	工具ナデ 指ナデ	外・赤い黄褐色 内・赤い黄褐色	石・白・黒・ 黒・小		
	420	○	甕	口縁部-胴部	B	—	26.8	—	工具ナデ	工具ナデ 指ナデ	外・赤褐色 内・赤褐色	石・白・黒・ 小		
	421	○	甕	口縁部-胴部	B	—	32.0	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外・赤い赤褐色 内・赤い黄褐色	石・黒・白・ 黒・小		
	422	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	9.4	—	工具ナデ	指ナデ 工具ナデ	外・赤褐色 内・黄褐色	石・白・小・ 黒・小	脚部高:1.8cm
	423	○	丸底甕・甕	脚部-底部	—	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外・赤褐色 内・赤褐色	石・白・黒・ 小	
	424	○	高坏	脚部	—	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外・赤褐色 内・赤い黄褐色	石・白・黒・ 小	
	425	○	高坏	脚部	—	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ 指ナデ	外・黒褐色 内・赤い黄褐色	石・白・黒・ 小	炭化物集中箇所出土
	426	○	埴	胴部-底部	—	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ 指ナデ	外・明赤褐色 内・黒	石・黒・白・ 黒・小	炭化物集中箇所出土

表2-69 竪穴建物跡33号出土石器

国 番号	遺物 番号	床 面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 155	石100	○	棒状鏝	完形	19.9	10.6	8.0	1910.0	ホルンフェルス	
	石101	○	棒状鏝	完形	17.6	9.5	6.0	1439.0	ホルンフェルス	
	石102	○	棒状鏝	完形	22.5	9.9	7.3	1760.0	ホルンフェルス	断片付着

表2-70 竪穴建物跡34号出土石器

国 番号	遺物 番号	床 面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2-158	石103	○	棒状鏝	完形	19.5	10.3	6.1	1510.0	ホルンフェルス	炭化物集中箇所出土

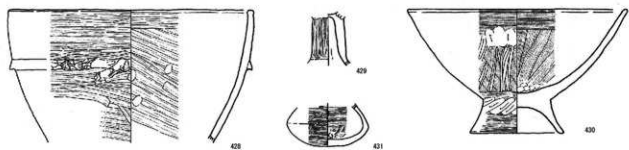


- ① 暗褐色土、黄褐色粘土をわずかに含む。
② 暗褐色土。



(1/50)

第 2-159図 竪穴建物跡35号

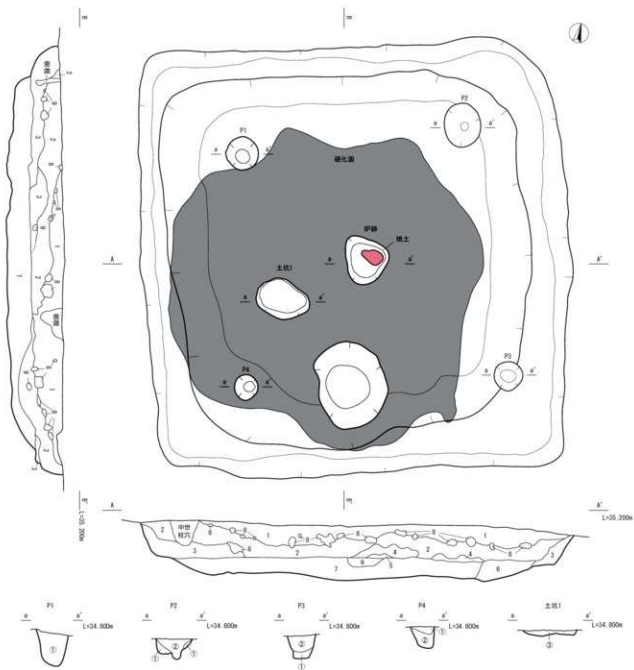


0 (1:4) 10cm

第2-161 図 竪穴建物跡35号 出土遺物(土器)

表2-71 竪穴建物跡35号出土土器

図番号	遺物番号	表面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 161	428	○	甕	口縁部-胴部	D	—	25.7	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい・ 内:にぶい・ 黒	石・長・白・ 小	
	429		高坏	脚部	—	—	—	—	工具ナデ	ナデ	外:にぶい・ 内:にぶい・ 黒	石・黒・小・ ほか	
	430		鉢	兜形	—	13.1	23	9.8	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:にぶい・ 内:黒	石・黒・黒・ 白・小	
	431		埴	胴部-底部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外:にぶい・ 内:にぶい・ 黒	石・長・黒・ 黒	

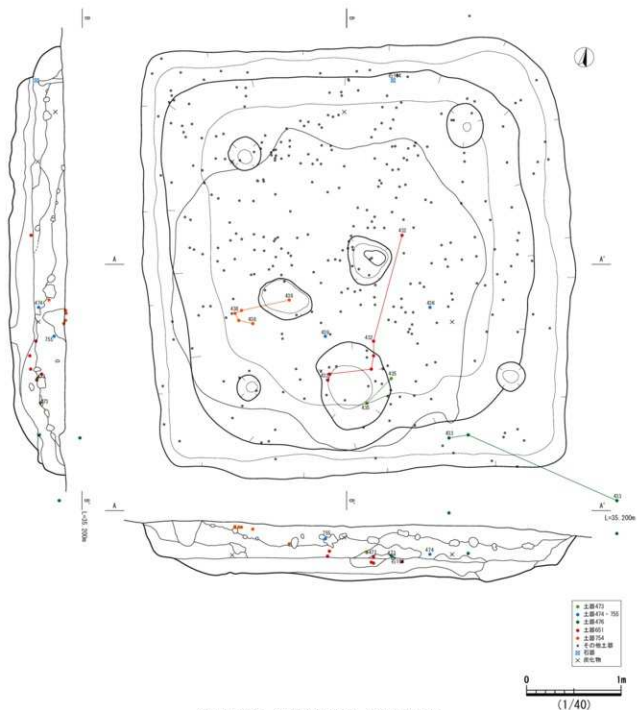


- 1 に近い黄褐色土。
 2 黄褐色土。
 3 黄褐色土。地床層下軽石とアカホヤ山灰土を少量含む。
 4 褐色土。アカホヤ山灰土と黒色土ブロックを少量含む。
 5 黄褐色土。アカホヤ山灰土と黒色土ブロックを少量含む。
 6 黄褐色土。アカホヤ山灰土と黒色土ブロックを含む。
 7 褐色土。部分的に礫化層を挟む。アカホヤ山灰土と黒色土ブロックを少量含む。
 8 褐色土。アカホヤ山灰土 (V4層) ブロック。
 9 黄褐色土。伊勢埴土。

- ① 褐色土。黒色土ブロックを含む。
 ② 黄褐色土。
 ③ 黄褐色土。伊勢の埴土と類似する。



第2-162図 竪穴建物跡36号



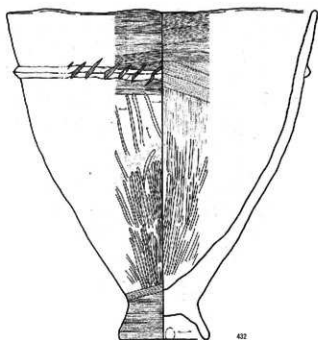
第2-163図 竪穴建物跡36号 遺物出土状況

表2-72 竪穴建物跡36号出土土器

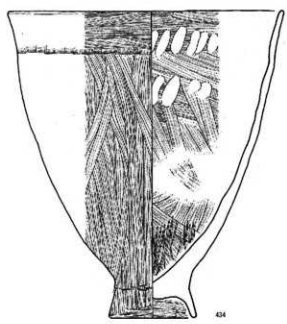
図番号	遺物番号	坯面	器種	部位 (次順部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 形状	内面 形状	色塗	胎土	備考
2-164	432	○	甕	完形	Ⅱ	34.5	32.6	9.1	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:赤褐色 内:赤褐色	石・黒・白・ 黒・小	胴部高:2.5cm
	433	○	甕	口縁部-胴部	Ⅱ	—	21.3	—	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	外:白・黒 内:白・黒	石・白・黒・ 注込	
	434	○	甕	完形	Ⅱ	31.4	31.0	8.8	工具ナデ	工具ナデ ハケ目・ミガキ	外:白・黒 内:白・黒	白・小・ 注込	胴部高:1.9cm
	435	○	甕	胴部	—	—	—	—	ハケ目 工具ナデ	ハケ目 工具ナデ	外:黒 内:黒	石・長・白・ 黒	
	436	○	甕	口縁部-胴部	—	—	14.0	—	工具ナデ・ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:黒 内:黒	石・白・小・ 注込	
	437	■	鉢	胴部-底面	—	—	23.7	—	工具ナデ	工具ナデ	外:黒 内:黒	石・白・黒・ 小	
	438	■	甕・甗	胴部-底面	—	—	—	—	ミガキ	ミガキ 指ナデ	外:黒 内:赤褐色	石・長・白・ 黒・小	
	439	■	鉢	完形	—	14.4	24.5	6.6	工具ナデ	工具ナデ 指ナデ	外:黒 内:白・黒	石・白・小・ 注込	

表2-73 竪穴建物跡36号出土石器

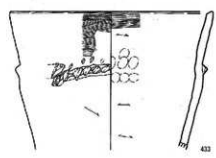
図番号	遺物番号	坯面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2-164	石104	○	輝石製品	完形	10.8	8.7	3.8	83.0	輝石	



432



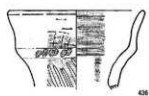
434



433



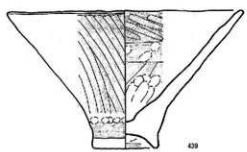
435



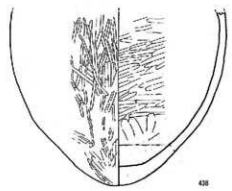
436



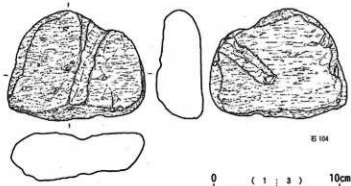
437



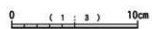
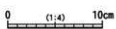
439



438



E 104



第2-164 圖 竪穴建物跡 36 号 出土遺物 (土器・石器)

竪穴建物跡 37号 (第2-165・166図)

竪穴建物跡 37号はF 29区Va層から検出した。東側と南側で竪穴建物跡 38号を、東側で竪穴建物跡 39号を切っている。大きさは長軸(東西軸)約4.8m、短軸(南北軸)4.1～4.5m程度の隅丸長方形を呈する。検出面から底面までの深さは25～35cm程度であるが、一部では底面を掘り下げずマウンド上に残す箇所も見られる。底面から6～18cmの厚さで貼床面が形成されているが、マウンド状の部分は直上に硬化面が形成されている。遺構中央部には焼土をとまらう土坑が検出されており、炉跡と考えられるが、その炉跡は土坑1に切られており、土坑1は土坑に2に切られた状態で検出されている。土坑2の北西側には炭化物が集中して出土している。硬化面は炉跡の周囲に検出されているが、特に北側と南西側に広がっている。南側には土坑3・土坑4が検出されている。柱穴は遺構内の四隅に1基ずつの計4基検出されている。

出土遺物(第2-167・168図)

竪穴建物跡 37号は遺構の残りも良く、検出面から貼床面までの深さも15cm以上あるが、遺物の出土量は少なく、貼床面で出土している遺物も少ない状況である。

土器(第2-169図)

440はその出土状況から、竪穴建物跡 37号に帰属する可能性が高い土器である。器種不明の精製土器の口縁部である。遺構の南東側で貼床面から出土している。内外面ともに横方向の工具ナゲが施されている。

441～446はその出土状況から、竪穴建物跡 37号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

441は口縁部が外反する甕B類の口縁部から胴部中位までの441-1と、胴部下位から脚部の441-2である。口径20.4cm、底径6.9cm、脚部高3.1cmを測る。遺構の東側で検出面から出土している。

441-1の口唇部から外面口縁部上端は、横方向の工具ナゲが施されている。口縁部から胴部上位にかけては、縦方向の工具ナゲが施されている。胴部は縦方向の単位幅が不明瞭な工具ナゲを施した後に、縦方向の1mm程度の沈線が施している。沈線の先端部は「U」字状、または「V」字状に施されている。施文は粗く、部分的にはナゲ消されている。内面口縁部上位は横方向の工具ナゲが、中位は斜め方向の工具ナゲが、下位は斜め方向の指ナゲが施されている。胴部上位には斜め方向の工具ナゲが施されており、その下位には斜め方向の工具ナゲを施した後に、外面と同様の縦方向の沈線を施しているが、施文は外面よりも粗く、部分的には横方向の沈線が乱雑に施されている。また、多くがナゲ消されている。

441-2の外面胴部下位は縦方向の工具ナゲが、脚部は横方向の工具ナゲが施されている。内面胴部は横方向

の指ナゲが施されている。内面脚部は縦・横方向の工具ナゲが施されている。

442は口縁部資料である。遺構の北東部で検出面直下から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナゲが施されている。突帯は指押さえが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナゲが、口縁部下位以下には横方向の指ナゲが施されている。

443は口縁部資料である。口縁部は欠損している。柱穴P1の上位、検出面で出土している。外面口縁部は斜め方向のナゲが施されている。突帯の上下には横方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部には斜め方向の指ナゲが施されており、突帯内面部分には指押さえが並ぶ。

444は甕の胴部中位から脚部の資料である。底径9.6cm、脚部高4.6cmを測る。遺構の中央部、東壁中央部付近、南東角部で、貼床面から約10cm浮いた状態および、検出面から出土している。外面胴部は縦方向のハケ目が施されている。胴部下端から脚部にかけては、横・斜め方向の工具ナゲが施されている。内面胴部中位には横方向の工具ナゲが、胴部下位には縦方向の指ナゲが施されている。脚部内面上半には指ナゲが、下半には横方向の工具ナゲが施されている。

445は甕の胴部下位の資料である。遺構の東側で、貼床面から約10cm浮いた状態および、検出面直下から出土している。外面は摩滅が著しいが、縦方向の粗い工具ナゲが施されている。内面は斜め方向の指ナゲが施されており、部分的に工具ナゲも確認できる。

446は甕もしくは埴の胴部から底部の資料である。底面は平坦面を持ち、底径は4.9cmを測る。外面は工具ナゲを施した後に、指ナゲを施しており、部分的に工具ナゲが残る。内面は指ナゲが施され、指押さえも施されている。部分的には斜め方向の工具痕が確認できる。

石器(第2-169図)

石105は敲石である。遺構の北東角部付近で貼床面から出土している。上面と下面に敲打痕が確認できる。

石106は棒状礫である。土坑3から出土している。

竪穴建物跡 38号 (第2-165・166図)

竪穴建物跡 38号はF 29・30区から検出した。遺構の中央部より東側の多くを竪穴建物跡 37号に切られており、遺構の北側では竪穴建物跡 39号を切っている。東側を竪穴建物跡 37号に切られているが、南西の角部はかろうじて残存しており、長軸(東北東-西南西軸)3.6～4.0m程度、短軸約3.3mの歪な長方形を呈している。建物の軸はわずかに東側に傾いている。検出面から底面までの深さは約30cmであり、底面から約10cmの厚さで貼床面が形成されている。平面図では確認できないが、断面図を見ると、遺構の東側は底面がそのまま壁で立ち

上がるが、北側では一段高い底面を形成しており、貼床面は一段高い底面と同じ高さで成形されている。遺構の中心部には大部分を竪穴建物跡 37 号に切られているが、直径約 90cm、深さ約 10cm の焼土をともなう土坑が検出されており、炉跡と考えられる。遺構の北側には、こちらも竪穴建物跡 37 号に切られているが、幅 40cm 以上、深さ約 14cm の土坑が検出されている。硬化面は検出されていない。柱穴は遺構内に 2 基検出されている。

出土遺物 (第 2-167・168 図)

遺物の出土量は少なく、特に土器は小片のみの出土であった。石器は 3 点出土しているが、全て流れ込みと考えられる。

石器 (第 2-169 図)

石 107 は軽石製品である。遺構の東側で検出面から出土している。下部に加工もしくは使用した平坦面が確認できる。

石 108 は磨礫石である。遺構の南東角部で検出面から出土している。表裏面に擦痕および、敲打痕が確認できるが、裏面の敲打痕は縁辺部のみである。

石 109 は礫である。柱穴 P2 付近で検出面から出土している。表面の一部にわずかながら擦痕が確認できる。

竪穴建物跡 39 号 (第 2-165・166 図)

竪穴建物跡 39 号は F29 区 Va 層から検出した。竪穴建物跡 37 号・38 号に遺構の大部分を切られているため、詳細は不明である。また、後世の土坑 2 基にも遺構の北東角部を切られている。検出面から底面までの深さは約 25cm で、底面から約 7cm の厚さで貼床面が形成されている。貼床面からは柱穴が 1 基検出されている。遺物の出土は土器の小破片 3 点のみであった。

竪穴建物跡 40 号 (第 2-170 図)

竪穴建物跡 40 号は G28 区 Va 層から検出した。遺構の上部はかなり削平されており、検出面から底面までの深さは 5～10cm 程度である。大きさ・形状は 1 辺が約 3.5m の隅丸形状を呈し、軸は北西-南東軸に傾く。遺構の中央部は地山がマウンド状に盛り上がるため、検出面直下で底面が検出されている。遺構の中央部には土坑が 2 基検出されている。土坑 1 は長軸約 0.5m、短軸約 0.4m の楕円形を呈し、深さは約 15cm である。埋土中には炭化物が少量含まれていたが、焼土は確認できておらず、炉跡と認定するには至らなかった。土坑 2 は土坑 1 に隣接して検出されており、土層を見ると、土坑 1 に切られている可能性が高い。土坑 1 と土坑 2 は検出された位置から、竪穴建物跡 40 号に付属する遺構であると考えられる。土坑は埋土 1 に掘り込まれているため、埋土 1 は貼床の埋土であると考えられる。硬化面・張り出しは検出されていない。

出土遺物 (第 2-171 図)

遺構の上部は激しく削平されており、遺構埋土中からの遺物の出土は確認されていない。遺物はすべて検出面で取上げられたものである。

土器 (第 2-172 図)

447 は甕の胴部下位から脚部の資料である。底径 8.6cm、脚部高 2.2cm を測る。東壁中央部に近い位置で検出面から出土している。外面胴部下位は斜め方向のナデが施されている。胴部下端から脚部にかけては横方向の工具ナデが施されている。内面胴部は摩滅が著しい。斜め方向のナデが施されている。脚部内面は横方向の工具ナデが施されており、脚部端ではその上から指押さえが巡る。

448 は壺の頸部から胴部中位までの資料である。南壁中央部付近で検出面から出土している。外面頸部には横・縦方向の工具ナデが、肩部には縦方向の工具ナデが施されている。胴部には横・斜め方向の工具ナデを施した後に、部分的に縦方向のミガキを施している。内面頸部は横方向の工具ナデが、胴部には斜め方向の指ナデが施されている。

竪穴建物跡 41 号 (第 2-173 図)

竪穴建物跡 41 号は G28・29 区から検出した。遺構の上部は現代の溝などで数カ所削平されているが影響は少ない。長軸(北北西-南南東軸)約 4.0m、短軸約 3.6m の隅丸長方形を呈する。検出面から底面までの深さは 30～40cm であり、底面から 10～20cm の厚さで、埋土が平坦に堆積しているため、その面(埋土 3・5 上面)が貼床面と考えられる。遺構の中央部には長軸約 0.9m、短軸約 0.8m、深さ約 10cm の楕円形の炉跡が検出されている。炉跡の底面には、炭化物を多く含む明赤褐色土が堆積しており、その上位にも炭化物を多く含む暗褐色土が堆積している。柱穴は炉跡を囲むように 4 基検出されている。4 基は同程度の大きさとの深さの柱穴である。柱穴は底面で検出されているが、記録では「埋土 3 を掘り下げている途中で、土色の違いが確認できた」とあることから、貼床面から掘り込まれていた可能性が考えられる。硬化面は確認されていない。

竪穴建物跡 41 号の土層断面を見ると、まず、隅丸長方形の形状に 40cm 以上の深さで掘り込み、その後、中央からやや南よりに長軸約 2.0m、短軸約 1.4m の楕円形のマウンドを Va 層のアカホヤ火山灰土及び、そのブロックを主体とする黄褐色砂質土(埋土 5)で形成している。炉跡はそのマウンド部分に掘り込まれている。また、平面図には記録がなかったが、南側壁際と西側の一部にも埋土 5 は確認でき、特に南側の埋土 5 の堆積状況を見ると、南側に土坑が掘られていた可能性も考えられる。中央部のマウンドの周囲は、ほぼ同じ高さで暗褐色土(埋

土3)が充填されており、貼床面を形成している。埋土3は東側で1段高く形成されている様相も見られる。

竪穴建物跡41号の埋土の堆積状況を見ると、埋土2は自然堆積と考えられるが、埋土1中には多量の土器片が出土しており、その出土状況から、遺構が自然堆積で埋まる課程の囲み部分に土器を廃棄したか、土坑を掘り、そこに土器を廃棄したと考えられる。

出土遺物(第2-174～176図)

遺物は遺構中央部と東壁の間に集中して出土している。そのほとんどが貼床面よりも上位に浮いた状態で出土しており、竪穴建物跡41号絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ土器であると考えられる。

土器・土製品(第2-177・178図)

449～451・453・459はその出土状況から、竪穴建物跡41号に帰属する可能性が高い土器群である。

449は口縁部がほぼ直行する甕C類の口縁部から胴部下位までの資料である。その破片の多くが遺構中央部と東壁の間で、貼床面や検出面から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナゲが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部上位は横方向の工具ナゲが、胴部中位から下位にかけては縦方向の工具ナゲが施されている。内面は口縁部から胴部中位まで横方向の工具ナゲが、胴部下位は斜め・縦方向の工具ナゲが施されている。

450は完形に復元できた口縁部がわずかに内湾する甕D類である。口径29.6cm、底径9.6cm、器高35.5cm、脚部高0.5cmを測る。脚部は平底の甕の底部側面に貼り付けられている。遺構中央部から東壁にかけて、貼床面から検出面までで出土している。外面口縁部は横方向の工具ナゲが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部上位は横・斜め方向の工具ナゲが、胴部中位から下位は斜め・縦方向の工具ナゲが施されている。脚部は指押さえが密に施されている。内面は横・斜め方向の工具ナゲが施されている。口縁部上位、底面付近と内面脚端部には指押さえが施されている。

451は甕の胴部下位から脚部の資料である。底径11.5cmを測り、脚部内面中央天井部分は張り出し、脚部高は2.7cmを測る。遺構の中央部と西壁の中間付近で、貼床面から出土している。外面は斜め・横方向の工具ナゲが施されている。内面胴部下位は斜め方向の工具ナゲが施されており、底面付近には指押さえが多く施されている。脚部内面は横方向の指ナゲと横方向の工具ナゲが施されており、指押さえが並ぶ。内面胴部下位には直径6mm程度の鉄片が付着している。

453は口縁部が外反する甕B類の口縁部から胴部上位の資料である。口径22.0cmを測る。突帯は施されていない。遺構の中央部と柱穴P2の北側で、貼床面及び貼床

面から10～20cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部から胴部にかけては横方向の工具ナゲが施されており、口縁部と胴部の境目には斜め方向の短い長さの工具ナゲが施されている。内面口縁部上位は横方向の工具ナゲが、口縁部中位から胴部にかけては、斜め方向の工具ナゲが施されている。口縁部と胴部の境目には指押さえが並ぶ。

459は口縁端部が欠損した甕である。口縁部はわずかに外傾しているが、口縁端部の形状は不明である。底径10.1cm、脚部高2.6cmを測る。主として遺構中央部付近から東壁中央付近にかけて分布しているが、南側でも出土が見られる。出土位置は貼床面と検出面直下と二分される。外面口縁部は斜め方向の工具ナゲが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部上位は斜め方向の工具ナゲが、胴部中位から下位にかけては縦方向の工具ナゲが、脚部には横方向の工具ナゲが施されている。胴部と脚部の境目には指押さえが多く施されている。内面は斜め方向の指ナゲが施されており、部分的に斜め方向の工具ナゲが確認できる。脚部内面には横方向の工具ナゲが施されている。胴部下端には指押さえが巡る。

以下の土器群はその出土状況から、竪穴建物跡41号絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

452は完形に復元できた甕である。口径14.5cm、底径5.7cm、器高16.0cm、脚部高0.9cmを測る。突帯は施されていない。遺構の中央部と東壁中央部の中間付近で、検出面に近い位置などから集中して出土している。内外面ともにミガキが主体的に施されているが、外面脚部は斜め方向の工具ナゲが施されており、脚端部には指押さえが巡る。内面底面付近と、脚部内面は斜め方向の工具ナゲが施されており、脚端部には外面と同じく指押さえが巡る。

454は口縁部が外傾する甕B類の口縁部から胴部中位の資料である。口径34.2cmを測る。遺構中央部と東壁の中間付近と、東壁に隣接した位置で、検出面などから出土している。外面口縁部上位は横方向の工具ナゲが、中位から下位にかけては斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナゲが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部には斜め方向の工具ナゲが施されている。内面は横方向の工具ナゲが施されており、口縁部下半から胴部上位にかけては、指押さえが列状に並ぶ。

455は口縁端部が外傾する甕D類の口縁部から胴部上位の資料である。炉跡のすぐ東側と、東壁に近い位置で検出面直下から出土している。外面口縁部位は横方向のナゲが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナゲを施した後に、突帯を貼り付けている。胴

部は斜め・横方向の工具ナデが施されている。内面は横方向の指ナデが施されている。口縁部上位と突帯内面部分には指押さえが並ぶ。

456は口縁部がわずかに外傾する雙D類の口縁部から胴部中位までの資料である。口径31.6cmを測る。突帯は施されていない。器壁の厚さが5～6mm程度である。炉跡の南側から炉跡と東壁の中間付近にかけて、検出面や検出面直下から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。胴部は横方向の工具ナデを施した後に、縦・斜め方向の工具ナデを施している。内面口縁部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部は斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。

457は完形に復元できた口縁部が直行する雙D類である。口径24.5cm、底径9.6cm、器高23.0cmを測る。脚部内面天井中央部は張り出し、脚部高は1.6cmを測る。炉跡のすぐ西側から遺構中央部と東壁の中間付近にかけて、検出面や貼床面から浮いた状態で出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデが、胴部は斜め・縦方向の工具ナデが施されている。胴部下端は縦方向の短い長さの工具ナデが施されている。脚部は縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部は斜め方向の指ナデが施されているが、部分的には斜め方向のハケ目や工具ナデが確認できる。底面付近には指押さえが巡る。脚部内面下端には横方向の工具ナデが施されており、その上から指押さえが巡る。

458は口縁部が内湾する雙D類の口縁部から胴部下位までの資料である。遺構中央部付近から、遺構中央部と東壁の中間付近にかけて、貼床面から10～20cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデが、胴部上端は横方向の工具ナデが、胴部は斜め方向の指ナデが施されている。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部は横方向の指ナデが施されている。胴部は各方向の工具ナデが施されている。口縁部から胴部まで指押さえが施されているが、突帯内面部分は指押さえが密に巡り、胴部には間隔を空けて、指押さえが3列並ぶ。

460は雙の胴部中位から脚部までの資料である。底径9.5cm、脚部高1.5cmを測る。主として遺構中央部付近から東中央付近にかけて出土しており、検出面や貼床面から浮いた状態で出土している。外面胴部は幅5～6mm程度の縦方向の丁寧な工具ナデが施されている。脚部は横方向の工具ナデが施されている。内面胴部中位は横・斜め方向の工具ナデが、胴部下位は斜め方向の工具ナデを施した後に、縦方向の指ナデが施されている。脚部内面は横方向の工具ナデが施されている。

461は雙の胴部下位から脚部までの資料である。底径8.2cmを測り、脚部内面天井中央部分はやや張り出し、脚

部高は1.8cmを測る。炉跡の北東側で貼床面から10cm以上浮いた状態で出土している。外面胴部は幅3mm程度の縦・斜め方向の工具ナデが施されている。この工具ナデはミガキに類似するが光沢を持たない。脚部には斜め・横方向の工具ナデを施した後に、胴部と同じ工具で縦・斜め方向の工具ナデを部分的に施している。内面胴部は外面胴部と同じ工具を用いて、縦方向の工具ナデを施している。脚部内面は横方向の工具ナデと斜め方向のミガキが施されている。

462は丸底雙の口縁部から胴部下位までの資料である。口径14.4cm、器高17.5cmを測る。東壁中央部に近い位置で検出面から出土している。口唇部から外面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部は斜め方向のミガキが、胴部上位は横方向のミガキが、胴部中位から下位にかけては縦・斜め方向のミガキが、底部は横方向のミガキが施されている。内面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。胴部は横・斜め方向の工具ナデが施されており、底部付近には指押さえが並ぶ。

463は臺の底部資料である。底径4.0cmを測る。遺構中央部と柱穴P2の中間付近で、貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。外面は幅4mm程度の縦方向の工具ナデが、内面は縦・横方向の工具ナデが施されている。

464は完形に復元できた鉢である。底部は平底を呈する。口径18.7cm、底径5.4cm、器高11.3cmを測る。遺構中央部と東壁の中間付近で、貼床面より5cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、胴部は縦方向の工具ナデが、底部は横方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上端も、外面と同じく横方向の工具ナデが施されているが、その後、部分的には斜め方向の工具ナデを施している。胴部上半は斜め方向の工具ナデが、胴部下半は横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面の工具ナデは全体的に調整の単位幅が不明瞭であるが、胴部下位にはこの工具ナデの後に、横・斜め方向の単位幅が明確な工具ナデが部分的に施されている。

465は高坏の脚柱部の資料である。遺構の中央部付近と東壁の中間付近から東壁付近にかけて、貼床面より10cm以上浮いた状態で出土している。外面は横方向の工具ナデを施した後に、縦方向のミガキを施している。坏部内面はミガキが施されている。脚部内面は縦方向の指ナデや横・縦方向の工具ナデが施されている。

466は高坏の脚柱部の資料である。遺構の中心部よりやや南東側で、貼床面から10～20cm程度浮いた状態で出土している。外面坏部と胴部の境目は横方向の工具ナデが施されている。脚柱部は縦方向の指ナデが施されている。脚柱部下端は横方向の工具ナデが施されている。脚筒部内面は上位から中位にかけては縦方向の工具ナデが、下位は横方向の工具ナデが施されている。

467 は高坏の脚柱部の資料である。遺構埋土中一括取上げ資料である。外面は縦方向の工具ナデが、内面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。

468 は円盤形土製品である。遺構埋土中一括取上げ遺物である。

石器(第2-179図)

石 110 は磨礫石である。遺構の中央部付近で、貼床面から出土している。

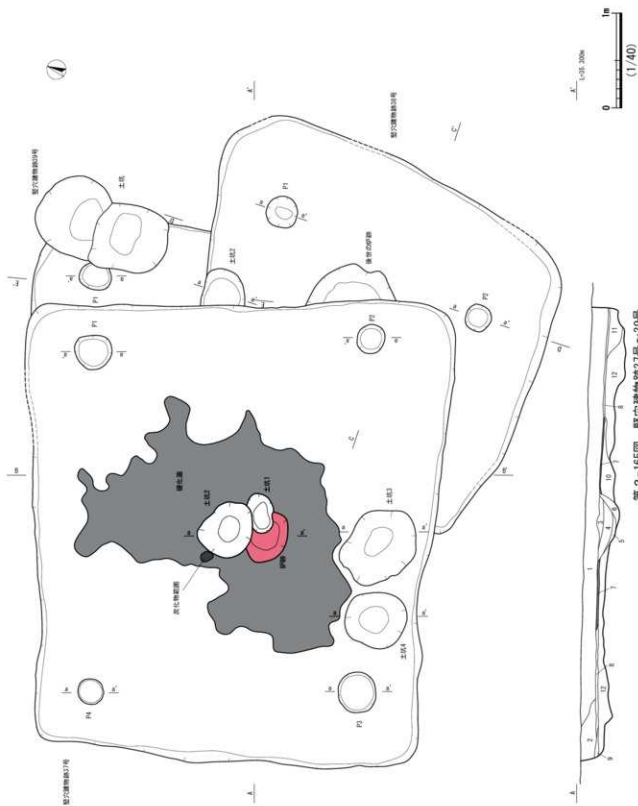
石 111 は磨礫石である。遺構の中央部付近で、貼床面から 15cm 程度浮いた状態で出土している。表裏面に擦痕と敲打痕が、下面に敲打痕が確認できるが、裏面の敲打痕は縁辺部のみを確認できる。

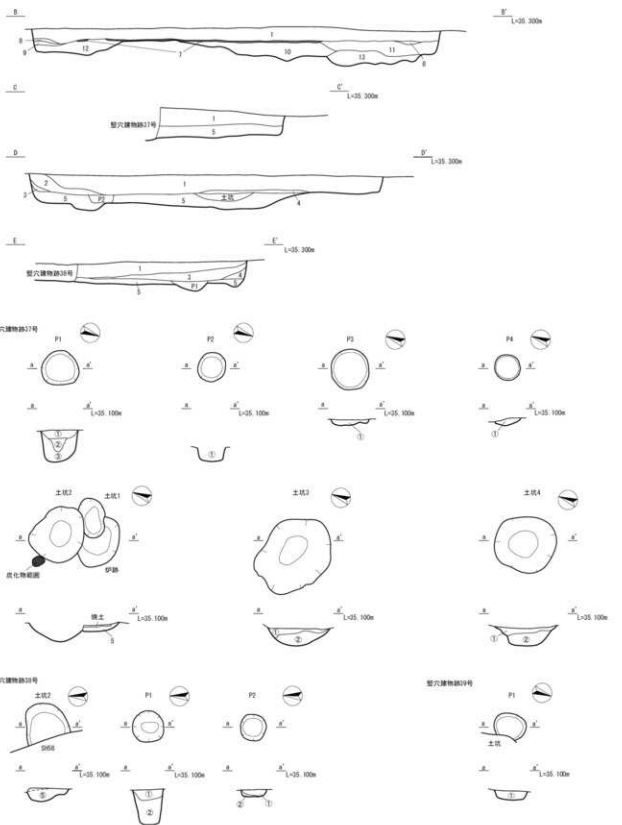
石 112 は磨礫石である。遺構中央部と柱穴 P2 の中間付近で、貼床面より 15cm 程度浮いた状態で出土している。側面に抉りが施されていることから、石錘として再利用された可能性が考えられる。

石 113 は棒状礫である。遺構の南側で遺構埋土中から出土している。

炭化物(第3分冊自然科学分析参照)

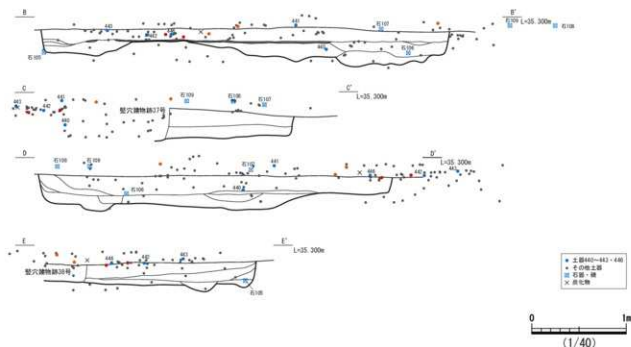
竪穴建物跡 41 号では、貼床面から 1 点の炭化物を遺物として取り上げている。この炭化物については放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。分析の結果、 2σ 暦年代範囲の 2 つの結果の範囲で 394calAD-535calAD となった。おおよそ 4 世紀末～6 世紀中頃の値である。





第2-166图 竖穴建物跡37号~39号 断面・柱穴

0 1m
(1/40)



第2-168図 竪穴建物跡37号～39号 遺物出土状況(断面)

表2-74 竪穴建物跡37号出土石器

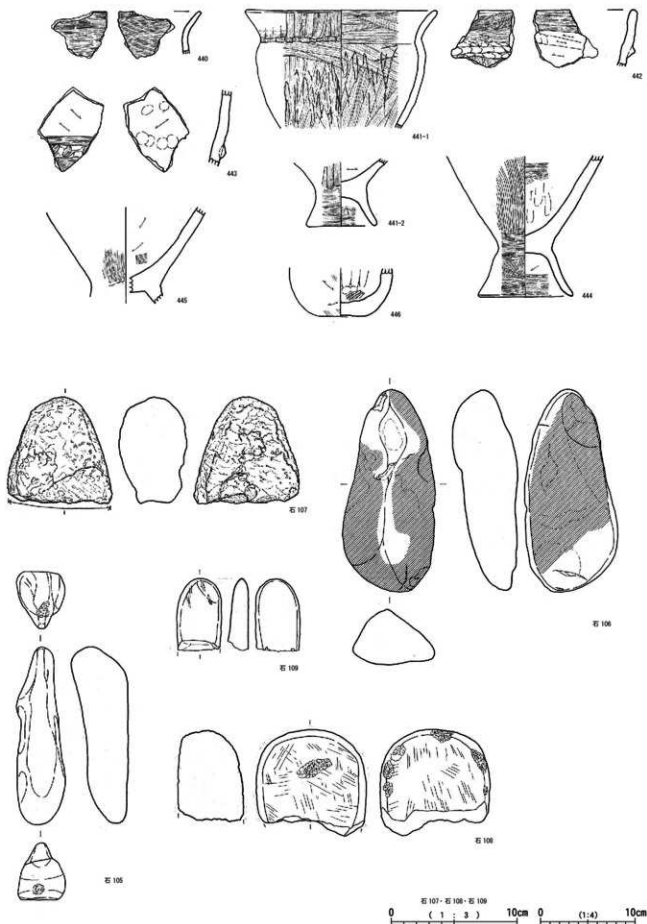
図番号	遺物番号	床面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 169	440	○	不明	口縁部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:埋 内:埋	石・輝・白・小	
	441		甕	口縁部-胴部	片	—	20.4	6.9	工具ナデ 沈線	工具ナデ 沈線	外:埋 内:埋	石・輝・白・小	胴部高:3.1cm
	442		甕	口縁部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい埋 内:にぶい埋	石・輝・白・小	
	443		甕	口縁部	—	—	—	—	粗ナデ	粗ナデ	外:にぶい埋 内:にぶい埋	石・白・黒・小	
	444		甕	胴部-脚部	—	—	—	9.6	ハケ目 工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい埋 内:埋	黒・白・黒・小	胴部高:4.6cm
	445		甕	胴部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:浅黄緑 内:浅黄緑	石・輝・白・小	
	446		壺・埴	胴部-底部	—	—	—	4.9	粗ナデ 工具ナデ	粗ナデ	外:埋 内:埋	石・白・小・ほか	

表2-75 竪穴建物跡37号出土石器

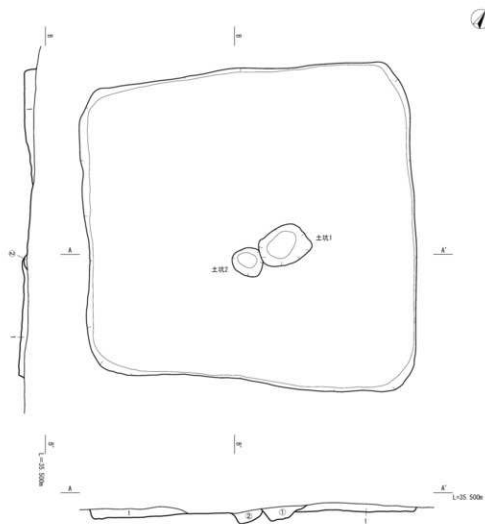
図番号	遺物番号	床面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 169	石105	○	礫石	完形	18.8	5.2	6.1	700.0	ホルンフェルス	
	石106	○	礫状礫	完形	21.3	9.7	6.5	1590.0	ホルンフェルス	

表2-76 竪穴建物跡38号出土石器

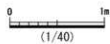
図番号	遺物番号	床面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 169	石107		軽石製品	完形	9.4	8.2	5.4	122.0	軽石	
	石108		磨礫石	破損	(8.4)	6.7	5.3	503.0	磨礫岩	
	石109		礫	破損	(5.7)	3.5	1.7	(53.0)	頁岩	



第2-169圖 竪穴建物跡37～39号 出土遺物(石器)



- 1 褐色土、IV層土とV層土の混土層、ブロック状堆積が顕著。
 ① 褐色土、IV層土とV層土の混土層、炭化物少量含む。
 ② 褐色土、基本的に①と同質だが約50cm程度のVI層ブロックをやや多く含む、炭化物ごく少量含む。



第2-170図 竖穴建物跡40号

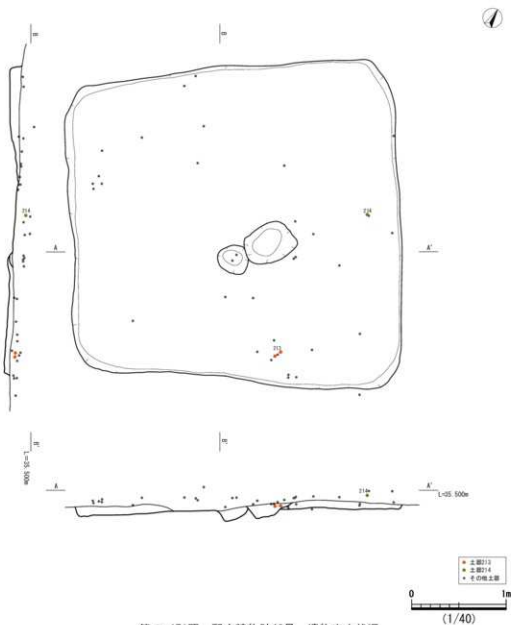
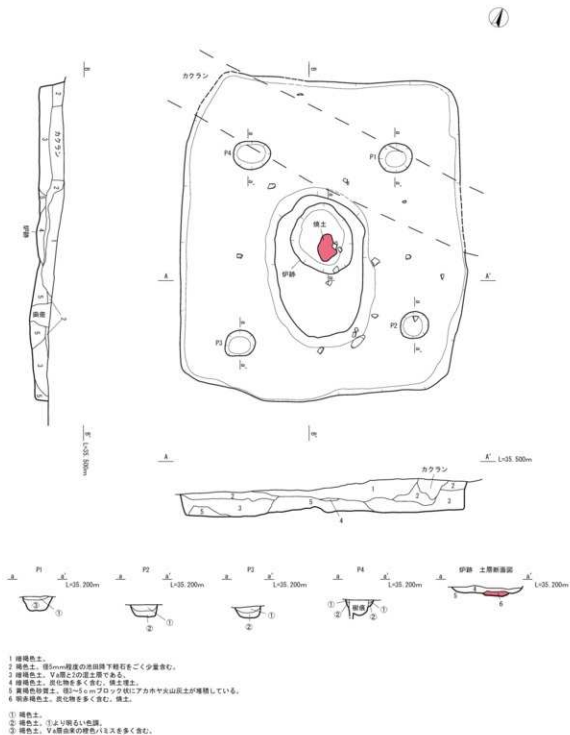


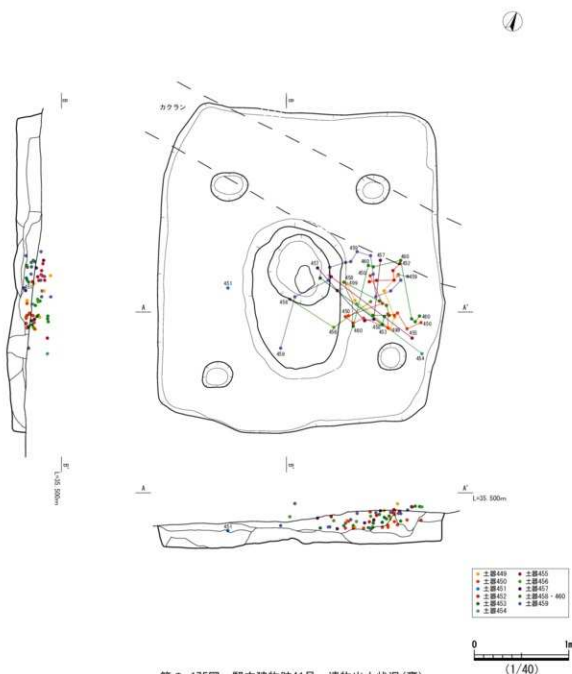
表2-77 竪穴建物跡40号出土土器

図番号	遺物番号	式名	器種	部位 (大形部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	新土	備考
2 172	447		甕	胴部-脚部	-	-	-	8.6	指ナデ 工具ナデ	指ナデ 工具ナデ	外: 濃い・粗 内: 粗	石・白・黒・小	器底高: 2.2cm
	448		甕	胴部-胴部	-	-	-	-	工具ナデ ミガキ	工具ナデ 指ナデ	外: 粗 内: 粗	石・黒・小	

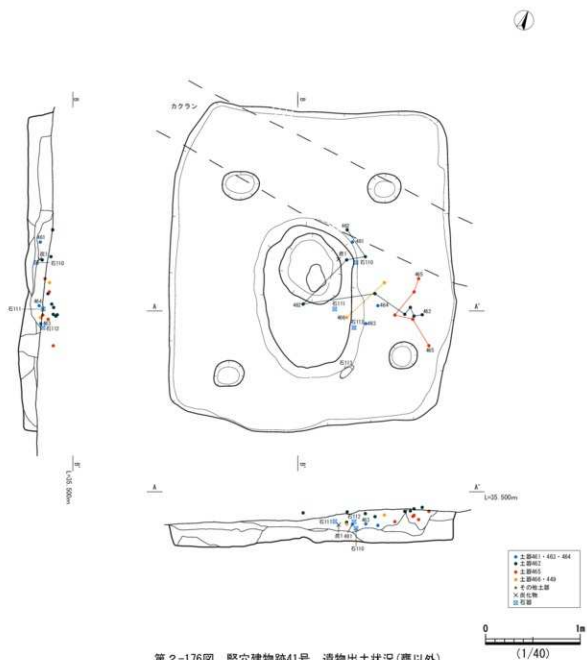


第2-173図 竪穴建物跡41号

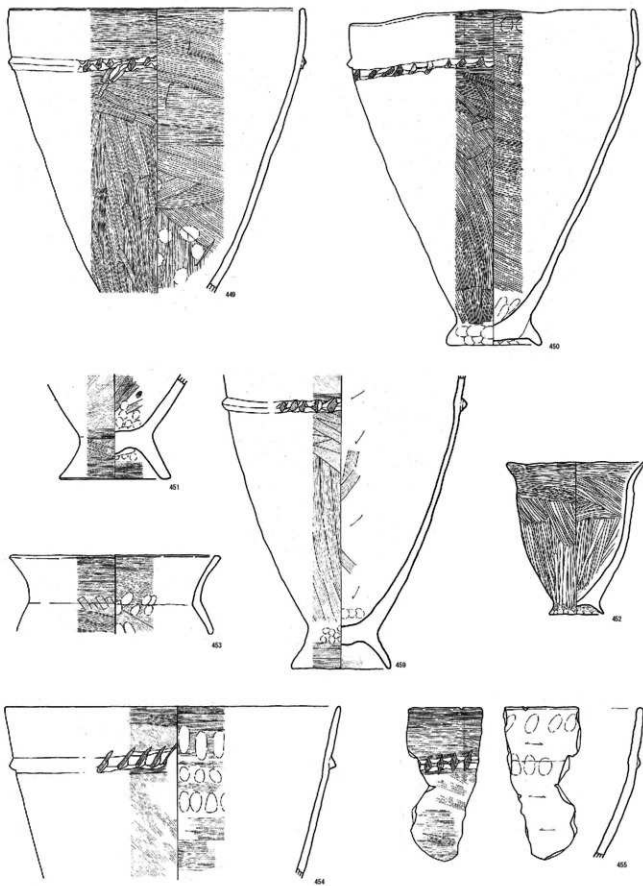
(1/40)



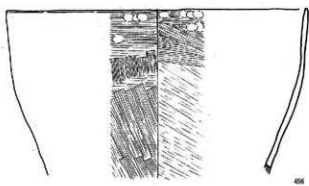
第2-175図 竪穴建物跡41号 遺物出土状況(要)



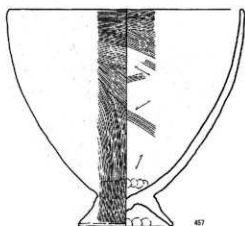
第2-176図 竪穴建物跡41号 遺物出土状況(要以外)



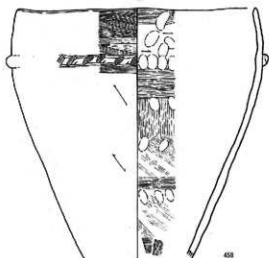
第2-177 圖 竪穴建物跡 41号 出土遺物(土器)



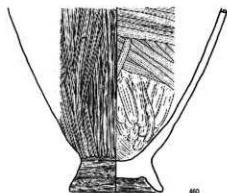
406



407



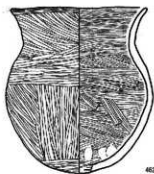
408



409



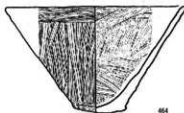
411



412



413



414



415



416



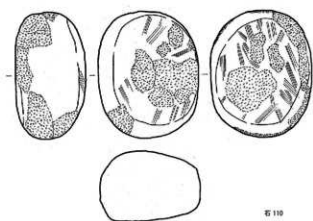
417



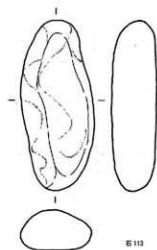
418

0 (1:4) 10cm

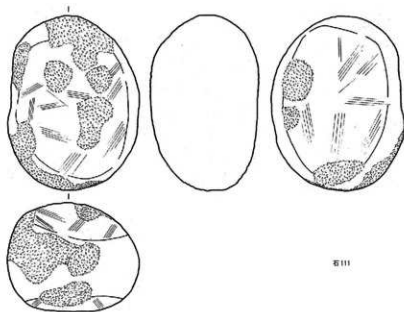
第2-178圖 竪穴建物跡41号 出土遺物(土器・土製品)



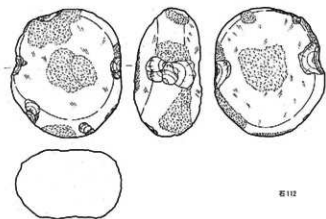
石110



石111



石112



石113

0 (1:4) 10cm

第2-179图 竖穴建物跡41号 出土遺物(石器)

表2-78 竪穴建物跡41号出土土器

図 番 号	遺物 番 号	床 面	器 種	部位 (大付部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考
2 177	449	○	甕	口縁部-胴部	D	—	31.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外:高い楕 内:楕	白・黒・小	
	450	○	甕	完形	D	35.5	29.6	9.6	工具ナデ	工具ナデ	外:高い楕 内:楕	白・黒・小	胴部高:0.5cm
	451	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:浅黄楕 内:高い楕	石・黒・白・ 小	胴部高:2.7cm
	452		甕	完形	—	16.9	14.5	5.7	外:楕 工具ナデ 内:楕	ミガキ 工具ナデ	外:楕 内:楕	石・白・黒・ 小	胴部高:0.9cm
	453	○	甕	口縁部-胴部	—	—	22.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外:高い楕 内:浅黄楕	石・黒・小・ ほか	
	454	甕	口縁部-胴部	B	—	34.2	—	工具ナデ	工具ナデ	外:楕 内:高い楕	白・小・ ほか		
	455	甕	口縁部-胴部	D	—	—	—	工具ナデ	指ナデ	外:高い楕 内:浅黄楕	石・黒・白・ 小		
2 178	456	甕	口縁部-胴部	D	—	31.6	—	工具ナデ	指ナデ 工具ナデ	外:高い楕 内:高い楕	石・白・小・ ほか		
	457	甕	完形	D	23.0	24.5	9.6	工具ナデ	工具ナデ ハケ目	外:高い楕 内:高い楕	石・白・小・ ほか	胴部高:1.6cm	
	458	甕	口縁部-胴部	D	—	25.3	—	工具ナデ 指ナデ	工具ナデ 指ナデ	外:黄楕 内:黄楕	白・黒・小		
	460	甕	胴部-脚部	—	—	—	9.5	工具ナデ	工具ナデ	外:高い楕 内:楕	石・黒・小・ ほか		
	461	甕	胴部-脚部	—	—	—	8.2	工具ナデ	工具ナデ ミガキ	外:高い楕 内:高い楕	石・黒・白・ ほか	胴部高:1.8cm	
	462	丸底甕	口縁部-胴部	—	17.5	14.4	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:高い楕 内:高い楕	石・白・小・ ほか		
	463	甕	底部	—	—	—	4.0	工具ナデ	工具ナデ	外:高い楕 内:高い楕	石・黒・小・ ほか		
	464	鉢	完形	—	11.3	18.7	5.4	工具ナデ	工具ナデ	外:楕 内:高い楕	石・白・黒・ 小		
	465	高坏	脚柱部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	指ナデ 工具ナデ	外:楕 内:高い楕	石・黒・黒・ 小		
	466	高坏	脚柱部	—	—	—	—	工具ナデ 指ナデ	工具ナデ	外:浅黄楕 内:浅黄楕	白・白・黒・ 小		
	467	高坏	脚柱部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:楕 内:高い楕	長・黒・小		
468	土製品	完形	—	—	—	—	ナデ	ナデ	外:明雫 内:高い楕	石・白・小			

表2-79 竪穴建物跡41号出土土器

図 番 号	遺物 番 号	床 面	器 種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 179	石110	○	磨礫石	完形	10.0	7.9	5.5	757.0		
	石111		磨礫石	完形	13.9	10.4	8.6	1582.0		
	石112		磨礫石	完形	10.1	8.7	5.4	608.0		石罫に再利用か
	石113		棒状礫	完形	18.2	7.7	4.8	993.0	ホルンフェルス	

竪穴建物跡 42号(第2-180図)

竪穴建物跡42号はH30区から検出された。Va層が削平されており、Vb層から検出されている。また、H30区周辺は林になっていたため、竪穴建物跡42号の特に中央部から北側は樹痕の影響を大きく受けている。長軸(南北軸)4.7m、短軸(東西軸)4.6mとほぼ隅丸正方形の形状を呈し、検出面から底面までの深さは25～30cm程度であるが、中央部付近は底面がウッド状に盛り底面の上には貼床が形成されているが、その厚さは5～20cmと場所により異なる。また、東側が一段下がる形で床面が形成されている。遺構の中央部には、長軸約0.7m、短軸約0.3mの楕円形状の炉跡が検出されている。炉跡の軸は南西-北東方向を向いており、竪穴建物跡とは異なった方向軸で形成されている。上面に焼土と、それに伴う大量の炭化物が検出されているが、炭化物は北東部で特に多く検出されており、掻き出し部の可能性が考えられる。炉跡の周囲には焼土の広がりが確認されている。この焼土中には炉壁の可能性も考えられる焼土塊も検出されている。炉跡の周囲には4基の柱穴が検出されている。樹痕の影響により上部に攪乱を受けているP1を除く3基の柱穴は、全て貼床面で検出されている。貼床面に形成されている硬化面は、樹痕の影響のため、詳細な範囲は不明であるが、おおよそ中央部から南側にかけて広がっているようである。また、東壁から70cm程度の範囲では、硬化面が検出されており、この範囲は貼床が一段低くなる範囲と重なる。南壁中央部は樹痕の影響を受けているが、周囲の状況から見て、張り出し部が形成された可能性は低い。埋土の堆積状況は、レンズ状堆積を呈しており、建物跡廃棄後は、自然堆積により埋まった可能性が高い。

出土遺物(第2-181図)

遺物は破片の小さなものが多く、完形品の壺が1点出土している以外は大型の遺物は少ない。また、南西角部には土器が集中して出土しているが、出土状況から流れ込みと考えられる。

土器(第2-182図)

469～472はその出土状況から、竪穴建物跡42号に帰属する可能性が高い土器群である。

469は口縁部が外反する甕B類の口縁部資料である。炉跡と東壁の中間付近で、貼床面から出土している。内外面ともに横・斜め方向の工具ナデが施されている。

470は高杯の坏部資料である。口径19.6cmを測る。遺構の南側に集中して、貼床面から出土している。外面坏上位は横方向の工具ナデが施されている。坏部中位から下位は横・斜め方向のミガキに類似した工具ナデが施されている。内面坏部上端は横方向の工具ナデが、坏部上半は縦方向の工具ナデが施されている。坏部下半は外面と同じく、ミガキに類似した工具ナデが施されている。

471は高杯の脚部部である。底径13.5cmを測る。遺構の南西角部で貼床面から出土している。外面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面は幅2mm程度の横・斜め方向の工具ナデが施されている。工具ナデはミガキに類似するが光沢を持たない。

472は埴の口縁部資料である。口径10.9cmを測る。西壁中央付近から貼床面から出土している。内外面ともに口縁部上半は横方向の工具ナデが施されている。口縁部下半は幅2mm程度の横・斜め方向の工具ナデが施されており、外面では一部が口縁部上半に及んでいる。工具ナデはミガキに類似するが光沢を持たない。

473は手づくね土器である。口径5.5cm、器高2.9cmを測る。遺構の南東角部付近で、貼床面から出土している。内外面ともに工具ナデが施されており、その上から指押さえが行われている。

474～478は、その出土状況から、竪穴建物跡42号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

474は口縁部が直行する甕の口縁部資料である。遺構の南壁付近で、貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。外面は横方向の工具ナデを施した後に、横・斜め方向のミガキを施している。内面は斜め方向のミガキが施されている。

475は甕の底部資料である。底径6.9cm、脚部高0.3cmを測る。南壁中央部付近で貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。外面は縦方向の工具ナデが施されている。胴部と脚部の境目と、脚部には指押さえ巡る。内面は縦・斜め方向の工具ナデが施されている。

476は完形に復元できた丸底甕である。口径10.2cm、器高23.0cmを測る。遺構の東壁中央部付近と南壁中央部付近の2カ所から出土している。ほとんどの破片が貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部から肩部上端にかけては横方向のミガキが施されている。肩部から胴部上位にかけては斜め方向のミガキが施されている。胴部中位から底部付近にかけては、縦・斜め方向のミガキが施されているが、胴部中位には部分的に縦方向の工具ナデが施されている。底部には工具ナデが施されている。内面口縁部には横方向のミガキが施されている。肩部から底面にかけては、縦方向の工具ナデが施されている。

477は鉢の口縁部から胴部の資料である。口径23.5cmを測る。外面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。胴部は斜め方向の工具ナデとナデが施されている。胴部下端は横方向の工具ナデが施されている。内面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。胴部は斜め方向の工具ナデとナデが施されており、部分的に指押さえが行われている。

478は埴の口縁部資料である。口径7.0cmを測る。南西

角部付近で検出面から出土している。

石器 (第2-182図)

石114は棒状礮である。西壁中央部付近で、貼床面から出土している。

石115は棒状礮である。炉跡と西壁の中間付近で、貼床面から出土している。表面中央部に使用痕が確認できる。

石116は砥石もしくは小型の台石である。長方形に整形した後で使用されている。遺構の東壁中央部付近で貼床面から約5cm浮いた状態で出土している。

竪穴建物跡43号 (第2-183図)

竪穴建物跡43号は130・31区から検出された。竪穴建物跡42号と同じくV a層が削平されておりV b層から検出されている。また、遺構の西側は近現代の溝や樹痕の影響を広く受けている。建物の向きはやや西側に傾いており、長軸(北東-南西軸)約4.5m、短軸約4.0mの隅丸長方形を呈し、検出面から底面までの深さは10～15cm程度であり、底面から約15cmの厚さで、ほぼ平坦な貼床面が形成されている。遺構の中央部には直径約20cmの円形の範囲に焼土が貼床面から検出されている。焼土域に隣接した南西側には、長軸約1.2m、短軸約1.0m、深さの約10cmの楕円形の土坑が検出されている。土坑内からは埴4点や、ミニチュア土器が数点出土しており、炭化物の集中も見られた。炭化物の集中は遺構の東側でも広く確認されており、東側の炭化物集中域では2～5cm大の炭化物が多く検出され、炭化木も出土している。硬化石は焼土域の周辺で確認されているが、特に東側に広がっていた。遺構内では複数の柱穴が確認されたが、すべて検出面から掘り込まれている黒色土を基調とする中世の柱穴であった。

出土遺物 (第2-184図)

遺物は土坑内から高坏などがまとまって出土しているほか、貼床面から出土した遺物も多い。石器では棒状礮が4点貼床面から出土している。

土器 (第2-185・186図)

479～487は土坑内から出土した遺物である。

479は完形に復元できた鉢である。口径11.4cm、底径5.6cm、器高7.9cmを測る。土坑底面および土坑内から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナゲが施されている。胴部上位は縦方向の工具ナゲが、胴部中位から底部にかけては斜め方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部は横方向の工具ナゲが施されている。胴部は斜め・縦方向の工具ナゲが施されており、底部付近には指押さえが行われている。

480は高坏の坏部資料である。口径23.2cmを測る。土坑底面および土坑内から出土している。外面坏部上端は横方向の工具ナゲが、坏部は斜め方向のミガキが施され

ている。内面坏部上端は横方向の工具ナゲが施されている。坏部上位は横・斜め方向の工具ナゲが、幅の異なる工具を用いて施されている。坏部中位は斜め方向の工具ナゲが施されている。

481は高坏の坏部資料である。口径21.3cmを測る。外面坏部上位は横方向の工具ナゲが施されている。坏部中位は斜め方向の工具ナゲを施した後に、幅2～3mm程度の横・斜め方向の工具ナゲが施されている。坏部下位は指ナゲを施した後に、中位と同じ幅の細い工具や工具ナゲが部分的に施されている。内面坏部上位は横方向の工具ナゲが、坏部は各方向の工具ナゲが施されている。

482は高坏の脚部資料である。底径14.0cmを測る。外面坏部と脚部の境目には横方向の工具ナゲが施されている。脚部は幅3～4mm程度の縦方向の工具ナゲが、脚端部には横方向の工具ナゲが施されている。内面坏部底面付近は工具ナゲが施されている。内面脚部は横方向の工具ナゲが施された後に、脚部下位には横方向のミガキが施されている。

483は高坏の坏部下位から脚部の資料である。外面坏部は横方向のミガキが、脚部は縦方向のミガキが施されている。内面坏部は横方向のミガキが、脚部内面は縦・横方向の工具ナゲが施されている。

484は高坏の脚柱部の資料である。外面脚柱部上端と下端には横方向のミガキが施されている。脚部には横・斜め方向の工具ナゲが施されている。内面脚柱部には縦方向の工具ナゲが、脚柱部下端には横方向の工具ナゲが施されている。

485は埴の胴部から底部の資料である。底部は丸底を呈する。外面は横・斜め方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部と胴部の境目は横方向の工具ナゲが施されている。胴部は破損が無いので、内部の観察は困難であるが、底面付近には工具ナゲが施されている。

486は完形に復元できた手づくね土器である。口径6.0cm、器高3.0cmを測る。内外面ともに指押さえが行われている。

487は完形に復元できた手づくね土器である。口径5.0cm、器高3.7cmを測る。外面は横方向の指ナゲ、縦方向の工具ナゲが施されており、指押さえが行われている。内面は横方向の指ナゲと、斜め方向の工具ナゲが施されている。

488～497はその出土状況から、竪穴建物跡43号に帰属する可能性が高い土器群である。

488は口縁部がわずかに外傾する甕C類の口縁部から胴部上位の資料である。遺構の中心部と東壁の中間付近で貼床面から出土している。内外面ともに口縁部上端は横方向の工具ナゲが、口縁部から胴部にかけては斜め方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部下には指押さえが行われている。

489 は口縁部が外傾する雙B類の口縁部から胴部中位までの資料である。口径 21.5cm を測る。主として遺構の北側で出土している。ほぼ全てが貼床面から出土している。口唇部と外面口縁部の一部は横方向の工具ナデが施されている。この横方向の工具ナデが施されている箇所は、薄く粘土が貼り付けられており、内外面ともにその部分のみ改めて器面調整が施されている。外面口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯下位は横方向の工具ナデが施されており、突帯貼り付け部分の器面に横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けた可能性が考えられる。胴部は縦方向のミガキが施されている。内面口縁部から胴部上位にかけては、斜め・縦方向の工具ナデが施されている。口縁部上端には粘土が貼り付けられており、横方向の工具ナデが施されている。胴部中位には斜め方向のナデが施されている。

490 は口縁部がほぼ直行する雙D類の口縁部から胴部中位までの資料である。口径 20.7cm を測る。遺構の北東角部付近と、遺構中心部と北東壁の中間付近から北東壁にかけての2カ所から出土しており、どちらの場所も貼床面から出土している破片が多い。また、遺構中心部と北東壁の中間付近で出土した破片の中には、硬化面の下位から出土した破片も1点確認されている。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。胴部上端は横方向の工具ナデが、胴部には斜め方向の工具ナデを施した後に、幅 2～4mm 程度の縦方向の工具ナデを施している。内面は斜め・縦方向の工具ナデが施されており、口縁部には指押さえが行われている。

491 は口縁部が直行する雙C類の口縁部から胴部下位までの資料である。口径 16.8cm を測る。遺構の中心部と東角部の中間付近にまとまって、貼床面から出土している。内外面ともに口縁部は横方向の工具ナデが施されている。外面胴部上端は横方向の工具ナデが、胴部は横・斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。内面口縁部下端から胴部は斜め方向の工具ナデが施されている。

492 は雙の胴部下位から脚部の資料である。底径 7.5cm、脚部高 0.9cm を測る。貼床面一括取上げ資料である。外面胴部は縦・斜め方向の工具ナデが、脚部は横方向の工具ナデが施されている。内面胴部は縦方向の工具ナデが、脚部内面は横方向の工具ナデが施されている。

493 は雙の胴部下位から脚部の資料である。底径 8.5cm、脚部高 1.1cm を測る。外面胴部は斜め・縦方向の工具ナデが、脚部は横方向の工具ナデが施されており、脚部には指押さえが巡る。内面胴部には斜め方向の工具ナデが、脚部内面には横方向の工具ナデが施されており、脚部内面端部には指押さえが巡る。

494 は鉢の口縁部から胴部中位までの資料である。口

径 19.4cm を測る。遺構の東角部に近い位置にまとまって、貼床面から出土している。外面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半から胴部は斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部から胴部上位は横方向の工具ナデが、胴部中位は縦方向の工具ナデが施されている。

495 は高杯の坏部である。口径 13.0cm を測る。土坑に隣接して西南西の位置で貼床面から出土している。外面坏部上位は横方向の工具ナデが、中位から下位にかけては幅 2mm 程度の縦方向の工具ナデが施されている。内面坏部上位は横方向の工具ナデが、中位から下位は斜め方向の工具ナデが施されている。

496 は高杯の坏部資料である。口径 25.6cm を測る。貼床面一括取上げ資料である。外面坏部上端は横方向の工具ナデが施されている。坏部上位から中位にかけては、斜め・横方向の工具ナデを施した後に、幅 4mm 程度の斜め方向の工具ナデが施されている。坏部下位は横方向の工具ナデが施されている。内面坏部上端は横方向の工具ナデ、坏部上位から中位にかけては斜め方向の工具ナデが、坏部下位は横方向のナデが施されている。

497 は壺の底部と考えられる資料である。丸底を呈する。貼床面一括取上げ資料である。内外面ともに縦方向の工具ナデが施されており、内面底面付近には指押さえが行われている。

498～500 はその出土状況から、堅欠建物跡 43 号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

498 は口縁部が外傾する雙B類の口縁部から胴部上位の資料である。口径 26.8cm を測る。遺構東壁中央部付近で検出面および、その直下から出土している。外面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は斜め方向の工具ナデを施した後に、幅 3～4mm 程度の縦方向の工具ナデを施している。この工具ナデはミガキに類似するが光沢を持たない。内面口縁部上位は横方向の工具ナデが施されており、部分的には斜め方向のハケ目が確認できる。口縁部中位から下位にかけては斜め方向の工具ナデ、またはナデが施されている。胴部は斜め方向のハケ目や工具ナデが施されている。

499 は口縁部が外反する雙B類の口縁部資料である。遺構の北西部で、検出面直下から出土している。外面口縁部上端は横・斜め方向の工具ナデが施されている。口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。内面は横・斜め方向の指ナデが施されている。

500 は埴の胴部から底部資料である。攪乱一括資料である。外面胴部は斜め方向のミガキが、底部は横方向のミガキが施されている。内面は斜め・横方向の工具ナデ

が施されている。

石器(第2-186図)

石117～石120は棒状硬である。

石117は北西壁際で貼床面から出土している。

石118～石120は貼床面一括取上げ資料である。

炭化木・炭化種子(第3分冊自然科学分析参照)

竪穴建物跡43号では数点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から竪穴建物跡43号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し検討を行い、1点の炭化物について放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。分析の結果、確率の高い2σ暦年代で321calAD-397calAD(77.6%)となった。おおよそ4世紀前半～4世紀末の値である。この炭化材は樹種同定もされており、スダジイと同定されている。

竪穴建物跡43号の貼床面からは1点の炭化種子を取上げており、種実同定を行ったところ、モモ(完形)と同定された。食用や祭祀用に用いられた後、竪穴建物跡内に堆積した可能性などが考えられている。

竪穴建物跡44号(第2-187図)

竪穴建物跡44号は、H・129区Va層から検出した。東側から南側にかけては、現代の攪乱を受け大きく削平されている。また、北側は中世の遺構の影響を受けている。そのため正確な大きさは不明であるが、残存部分での計測値は、南北5.0m、東西4.7mである。検出面から底面までの深さは20～25cm程度であり、底面から約10cmの厚さで、ほぼ水平な貼床面が形成されている。硬化面は確認されていない。遺構の中央部付近と考えられる位置には焼土を伴う土坑が、貼床面から検出されており、炉跡と考えられる。長軸約0.7m、短軸約0.3mの不定形状を呈し、深さは約6cmと浅い。硬化した焼土と黒色土を埋土としているが、炭化物の出土は記録されていない。

出土遺物(第2-188図)

遺物は遺構の北西部に多く出土しており、攪乱を受けている南東部に行くほど分布が薄くなっている。出土した土器のほとんどが小破片であり、実測対象となる遺物は4点のみであった。

土器(第2-189図)

501はその出土状況から、竪穴建物跡44号に帰属する可能性が高い土器群である。高坏の口縁部資料であり、遺構の西側で、貼床面から出土している。口唇部は横方向の工具ナデが施されている。外面は横・斜め方向のミガキが、内面は横方向の工具ナデが施されている。

502～504はその出土状況から、竪穴建物跡44号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

502は口縁部が外反する甕B類の口縁部資料である。

遺構の中心部と北西壁の中間付近で、貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。外面口縁部上半は横方向の工具ナデが施されている。口縁部下半は斜め方向の指ナデが施されており、一部は口縁部上半に及んでおり、突帯上位には横方向の工具ナデが施されている。

503は甕の胴部下部から脚部資料である。底径9.2cm、脚部高1.6cmを測る。遺構の北西角部付近で、検出面から出土している。外面胴部下部は縦方向の工具ナデが施されている。胴部下端から脚部にかけては、横方向の工具ナデが施されている。内面胴部は斜め方向の工具ナデが施されている。脚部内面は部分的に斜め方向の工具ナデが確認でき、端部には指押さえが並ぶ。

504は高坏の脚部資料である。遺構の北西壁中央部付近で、貼床面から10cm程度浮いた状態で出土している。外面はナデと横方向の工具ナデが、内面は横方向の工具ナデが施されている。

ガラス玉(第3分冊 自然科学分析参照)

竪穴建物跡44号の貼床面埋土のふり掛けを実施した結果、黄色のガラス小玉を1点検出した。ガラス小玉は破損した状態で検出され、残存状況は1/2強程度である。実体顕微鏡観察の結果、気泡が多く観察され、いずれも孔に対して平行に伸びた気泡ないし気泡列であり、ガラスを管状に引き伸ばした後、管を切って製作する引き伸ばし法(管切り法)により製作されたと考えられる。蛍光X線分析の結果、この黄色ガラス小玉はアルカリ珪酸塩ガラスであり、化学組成の特徴からアルミナソーダ石灰ガラスに属すると考えられる。なお、含有量としては鉛がかなり多く検出されており、黄色顔料に由来すると考えられ、実体顕微鏡観察により黄色顔料の存在が確認されている。

竪穴建物跡45号(第2-190図)

竪穴建物跡45号は129区Va層で検出した。遺構の西側には現代の水道管が埋設されており、また南西側には近現代の井戸があったため、大きく攪乱を受けている。また全体的にも遺構の上面を削平されており、残りは悪い。残存部分での計測で、長軸(南北軸)約5.0m、短軸約4.5m、隅丸長方形形状を呈していると考えられるが、東南角部には張り出しが形成されている。検出面から底面までの深さは約10cmである。遺構の中央部には焼土を伴う土坑が検出され、炉跡と考えられる。炉跡は長軸約0.5m、短軸約0.4mの隅丸方形に近い形状を呈している。深さは約7cmと浅い。炉跡の南側には長軸約0.9m、短軸約0.25m、深さ約5cmの南北に細長い土坑1が検出されている。この土坑の埋土は非常にしまり、上面は硬化面を形成している。遺構の南側中央部、壁面に近い位置には土坑2が検出されている。南側に攪乱を受けているため、形状は不明であるが、東西軸約1.15m、残

存部分の計測で南北軸が0.75m、深さは約20cmを測る。土坑の西側の埋土中からは、土器が集中して出土しているが、土坑の底面から浮いた状態で出土しており、また一部は土坑の上面に露出した状態で出土している。遺構内からは5基の柱穴が検出されている。炉跡の周囲には、炉跡を囲むように三角形の柱穴が配置されている。また、北東角部と北西角部から1基ずつ柱穴が検出されている。炉跡、硬化面を伴う土坑1、南側の土坑2、柱穴の全てが遺構の底面で検出されており、竪穴建物跡45号には貼床は確認されていない。

出土遺物(第2-191図)

遺物の出土量は少ない。土坑2の埋土中と検出面から土器が集中して出土したが、全て底面から浮いた状態で出土している。石器も含めて底面から出土した遺物は土器小片のみである。

土器(第2-192図)

505～508は、その出土状況から、竪穴建物跡45号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

505は口縁部が外傾する小型の甕日類もしくは鉢の口縁部から脚部の資料である。脚端部が欠損している。口径20.2cmを測る。土坑2の土器集中箇所と土坑の底面からは浮いた状態で出土している。外面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半は横方向のナデが施されている。突帯の上位には横方向の工具ナデが部分的に施されている。突帯貼り付け部分の器面には、横方向の工具ナデを施した後に指ナデが施されており、その指ナデの形状に合わせて突帯を貼り付けている。胴部は斜め方向のナデが施されている。脚部には指押さえが巡る。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部から胴部にかけてはナデが施されているが、器面が摩耗しており器面調整の確認は困難であった。脚部内面には横方向の工具ナデが施されている。

506は高坏の坏部である。口径24.0cmを測る。土坑2の土器集中箇所と土坑の底面からは浮いた状態で出土している。内外面ともに胴部の屈強部・接合部付近より丁寧な器面調整を施しており、丁寧なミガキが施された結果、この部分に光沢が生じているのが特徴である。外面口縁部は斜め・横方向のハケ目、縦・および、斜め・横方向の工具ナデを施した後に、部分的には調整痕をナデ消している。胴部中位は横方向の工具ナデを施した後、調整痕を丁寧にナデ消している。ナデ消した範囲は若干光沢を持っている。胴部下位は横方向の工具ナデが施されている。内面口縁部は横方向のハケ目を施した後に、調整痕をナデ消している。ただし、外面のような光沢は持たない。胴部中位は幅5mm程度のミガキが施されている。光沢の有無は混在しているが、器面は平滑であり、混和材は沈み込み、丁寧な処理がなされている。中

程下部の接合部付近では、幅1～2mmの工具により密な工具ナデが施されており、部分的には暗文のような施し方となっている。

507は高坏の坏部資料である。口径14.7cmを測る。検出面一括取上げ資料である。内外面ともに坏部上位は横方向の工具ナデが、坏部中位以下には横方向のミガキが施されている。

508は蓋の底部資料である。東南角部の張り出し部分で検出面直下から出土している。外面は縦方向の工具ナデが、内面は斜め方向の指ナデが施されており、内面は部分的に工具ナデも確認できる。

石器(第2-192図)

石121は砥石である。検出面から出土している。いわゆる天草石と呼ばれる細粒砂岩製である。4面全てに擦痕が残る。部分的には敲打痕も確認できる。表面と側面には比較的太い擦痕が多く見られ、鉄を対象とした砥石であった可能性が考えられる。

石122は棒状礫である。検出面から出土している。

石123は棒状礫である。土坑2埋土中から出土している。

竪穴建物跡46号(第2-193図)

竪穴建物跡46号は1・J29区Va層で検出した。遺構の西角部は近現代の井戸、南西部は現代の溝により、それぞれ擾乱を受けており、東角部周辺は上面に削平を受けているため、遺構の残りは悪い。残存部分の計測で長軸約4.2m、短軸約3.9mの隅丸長方形形状を呈するが、東側に一部張り出しのようなものを持つ。検出面から底面までの深さは10～20cmである。遺構の中央部に焼土を伴う土坑が検出されており、炉跡と考えられる。炭化物範囲・硬化面等は検出されていない。また、炉跡は底面から検出されており、貼床は確認されていない。柱穴は遺構内に2基、遺構周辺に3基検出されている。遺物は出土していない。

竪穴建物跡47号(第2-194図)

竪穴建物跡47号はE28・29区Va層で検出した。北北東側に擾乱の影響を受けている。1辺が約3.1mのはほぼ隅丸正方形形状を呈するが、南角部が一部内側に凹む形状をしている。検出面から底面までの深さは15～20cm程度であり、底面から5～10cm程度の厚さで貼床が形成されている。貼床面は平坦ではなく、中心部(炉跡付近)がやや盛り上がる形状をしている。遺構の中心部よりやや北北東側に、焼土を伴う長軸約0.65m、短軸約0.5mの楕円形の土坑が検出されており、炉跡と考えられる。炉跡の東側には南北に硬化面が広がる。柱穴は炉跡の南南西側0.5mの位置に1基検出されている。柱穴内からは土器片が3点出土したが、小破片であったため詳細は

不明である。炉跡、柱穴ともに埋土2の上面で検出されていることから、埋土2が貼床面であると考えられる。

出土遺物(第2-195図)

大量の遺物が出土しているが、ほとんどが検出面および、検出面よりも上位で出土している。また小破片が多い。遺構の南側には遺物の集中が見られるが、こちらも多くは検出面もしくは、貼床面よりも上位で出土しており、実測した掲載土器は全て検出面で出土した遺物である。貼床面で出土した遺物が少ないのに対し、建物の南北軸よりも東側では底面から詳細不明な土器の小破片が多く出土している。

土器(第2-196図)

509～513はその出土状況から、竪穴建物跡17号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

509は口縁部が外反する甕B類の口縁部から胴部上半の資料である。口径24.8cmを測る。遺構の東側で検出面から出土している。内外面ともに口縁部上半は横方向の工具ナデが、どの下位には斜め方向の指ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。

510は口縁部が外傾する甕B類の口縁部から胴部上位の資料である。口径30.2cmを測る。遺構の北西部と遺物集中箇所2の2カ所で検出面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部は縦方向の指ナデを施した後に、口縁部下位には斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は斜め方向の工具ナデを施した後に、指ナデを施しており、完全にはナデ消されなかった工具ナデの痕跡がうっすらと残る。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。胴部には横方向の強い指ナデが施されており、器面が凹む。突帯内面部分には指押さえが並ぶ。

511は完形に復元できた口縁部が内湾する甕D類である。底部は平底の底部に、さらに粘土土を貼り付けて形成している。器裡突帯が口縁部直下と、胴部中程にそれぞれ1条ずつ貼り付けられている。口径30.4cm、底径5.5cm、器高28.6cmを呈する。外面口縁部上端には横方向の工具ナデが、口縁部下位は斜め方向の工具ナデが施されている。上部の突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。突帯の上下には部分的に沈線が施されており、沈線の施されている箇所と横方向の工具ナデの範囲が重なるため、突帯上関わるガイドライン的な意味を持つ可能性が考えられる。胴部上位には縦・斜め方向の工具ナデが施されている。また、この部分には粘土帯の接合痕や、その上下に指押さえの痕跡が確認できる。胴部中位には横方向

の工具ナデが施され、その上から突帯が貼り付けられている。突帯は指押さえにより凹凸が付けられている。胴部下位には縦・斜め方向の工具ナデが、底部付近には斜め方向の工具ナデが施されている。貼り付けられた底部には、幅1mm程度のミガキと単位不明瞭な工具ナデが施されている。内面口縁部上位には横方向の工具ナデが施されており、その上から部分的に指押さえが行われている。口縁部下位から胴部中位にかけては、斜め方向の工具ナデを施した後、部分的に横方向の工具ナデを施している。胴部下半は縦・斜め方向の工具ナデが、底部には横方向の工具ナデが施されている。

512は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部中位の資料である。口径29.2cmを測る。遺構の北東部から南東部にかけて散在して、検出面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデを施している。口縁部は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、口縁部下半には斜め方向の工具ナデを強く施している。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、部分的に斜め方向の工具ナデを強く施している。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部は斜め方向の工具ナデが、胴部は縦方向の工具ナデが施されている。

513は口縁部が大きく外反する壺の口縁部から頸部の資料である。遺構東角部付近の遺物集中箇所2で検出面直下から出土している。外面口縁部上半は横方向の工具ナデが施されている。口縁部下半は幅2mm程度の横方向の工具ナデが施されているが、部分的には光沢を持つミガキとなる。頸部上半は横方向の工具ナデが、その下位には斜め方向のナデが施されている。内面は横方向の工具ナデを施した後に、部分的に幅4～6mm程度の工具ナデが施されている。内面頸部は剥落が著しい。

竪穴建物跡48号(第2-197図)

竪穴建物跡48号はC・D27区Va層で検出した。長軸(東西軸)約4.2m、短軸(南北軸)約3.6mの隅丸長方形を呈し、南側に張り出しを持つ。張り出し部を含めると南北軸は約4.2mとなる。遺構の向きは、ほぼ東西軸と等しい。検出面から底面までの深さは35～50cmであり、底面から約5cmの厚さで貼床が形成されているが、南側では貼床が徐々に厚くなり、検出面の高さにまで立ち上がっている。遺構の中央部よりもやや南側には、焼土を伴う長軸約0.4m、短軸約0.3m、深さ約7cmのやや歪な円形の土坑が検出されており、炉跡と考えられる。検出面は貼床面である。炭化物は確認されていない。南側の張り出し部の手前には、長軸約0.55m、短軸約0.4m、深さ約25cmの楕円形の土坑が検出されている。検出面は壁際に向かって立ち上がる貼床上面である。柱

穴は南東部に小型のものが1基のみ検出されている。遺構の周囲にはピットが複数検出されていたが、全て樹痕と判断されている。硬化面は北側及び東西の壁際を除く貼床全面で検出されており、南側では検出された遺構の縁まで硬化面の広がりが確認されている。

出土遺物(第2-198図)

南側で検出された土坑内から土器が集中して出土しており、接合すると完形の鉢514や、甕もしくは壺の底部737となった。甕の破片は大きく、意図的に埋められたと考えられる。また、737の破片は遺構内には他にみられず、こちらも意図的に廃棄された可能性が考えられる。

土器(第2-199図)

514～516はその出土状況から、竪穴建物跡48号に帰属する可能性が高い土器群である。

514は完形で復元できた口縁部が外傾する鉢である。口径26.2cm、底径11.8cm、器高20.1cmを測る。南側の土坑内からまとまって出土している。外面口縁部上位は横方向の工具ナデが、中位から下位にかけては斜め方向の工具ナデを施した後に、部分的に縦方向の工具ナデを施している。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けていると考えられ、突帯下位では工具ナデの向きに合わせて突帯を貼り付けていることが確認できる。胴部は斜め方向のナデを施した後に、縦方向のミガキを施している。胴部と脚部の境目は横方向の工具ナデが施されている。脚部は横方向の工具ナデを施した後に、脚部上半には横方向のミガキが施されている。内面口縁部上位は横方向の工具ナデが施されている。口縁部中位以下は斜め方向のナデが施されており、胴部ではその上から縦方向のミガキが施されている。内面のミガキは外面のミガキほど密には施されない。脚部内面は横方向の工具ナデが施されている。

515は丸底甕もしくは壺の底部資料である。南側の土坑内からまとまって、514と共に出土している。内外ともに被熱を受け器面は劣化しており、器面調整は部分的にしか確認できない。外面は縦方向の工具ナデが、内面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。

516は高坏の坏部資料である。口径12.5cmを測る。張り出し部分の床面から出土している。外面坏部上位は横方向の工具ナデが、坏部中位から下位にかけては、縦方向のミガキが施されている。坏部の屈曲部分には細かなミガキが連続して施されている。内面坏部上位は横方向の工具ナデが、中位から底面にかけては、横方向のミガキが施されている。

517はその出土状況から、竪穴建物跡48号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。甕の胴部から脚部資料である。底径8.2cm、脚部高0.6cmを測る。遺構の北東部で検出面直下から出土している。外

面胴部は横方向の工具ナデを施した後に、縦方向のミガキが施されている。脚部は横方向の工具ナデが施されている。内面胴部は斜め方向の工具ナデが施されている。

竪穴建物跡49号(第2-200図)

竪穴建物跡49号はE26・27区Va層で検出した。南東角部に一部現代の耕作の擾乱を受けているが、形状はほぼ原型を留めていると考えられる。1辺が約3.8mのほぼ隅丸正方形を呈し、南南東側に張り出しを持つ。張り出しは幅約1.0m、奥行き約0.4mであり、竪穴建物跡の底面よりも一段高くなっている。遺構の上面は大きく削平を受けており、検出面から底面までの深さは5～10cm程度と浅い。しかしながら、硬化面が検出されていることから、元々貼床の厚さは薄かったと考えられる。硬化面の存在から、検出面が貼床面であると考えられる。北西側には竪穴建物跡49号に隣接して土坑が1基検出されている。南北約1.2m、東西約1.3mの不整形上を呈し、深さは約30cmである。竪穴建物跡49号との境界部分には、長軸約0.4m、短軸約0.3m、深さ約15cmの楕円形の掘り込みが確認されている。この土坑の埋土は竪穴建物跡50号の貼床や柱穴の埋土と同じであるため、両遺構は近い時期に作られたと考えられる。遺構の中央部には長軸約0.5m、短軸約0.35mの楕円形形状の柱穴が検出されている。2段掘りになっており、最深部の深さは約45cmである。土坑の周囲には南側と西側に焼土を伴う土坑が検出されており、断面を見ると土坑に切られているような形状をしている。元々は炉跡があった場所に、後から柱穴を掘り込んだと考えられる。その他にも2基の柱穴が、それぞれ北側角部と東側角部から検出されている。検出面は貼床面である。中央柱穴P1の周囲には硬化面が検出されている。硬化面は南側へ広がり、西側角部・張り出し部手前・東側へは広がりが確認されなかった。貼床・土坑・柱穴の全ての埋土が、同じ暗灰黄色粘質土で構成されており、埋土の区別はできなかった。

出土遺物(第2-201図)

遺構の上面に削平を受けているが、貼床面の残存状況が良好な遺構の西側を中心に遺物の出土が見られる。逆に残りの悪い遺構の東側では遺物の出土は少なかった。

土器(第2-199図)

518～521は、その出土状況から、竪穴建物跡49号に帰属する可能性が高い土器群である。

518は口縁部が外傾する甕B類もしくは鉢の口縁部資料である。中央柱穴に隣接して西側で、貼床面から出土している。外面は横・斜め方向の工具ナデを施した後に、縦・横方向のミガキが施されている。ミガキは密には施されず、隙間から下の工具ナデが確認できる。内面口縁部上半は横方向の工具ナデを施した後に、横方向のミ

ガキが施されている。口縁部下半は斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。

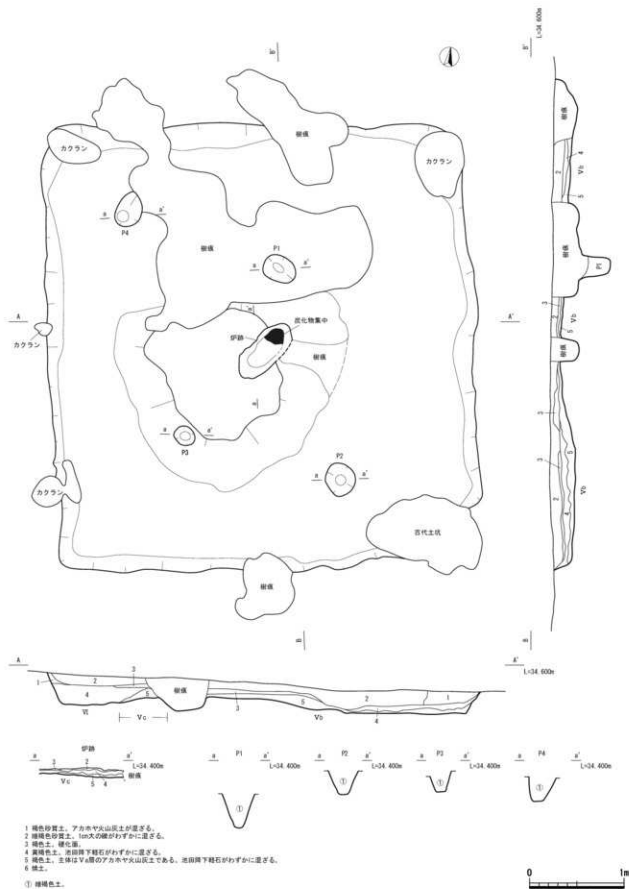
519 は甕の口縁部から胴部上位の資料である。口縁端部は欠損している。遺構の北北西側の硬化面範囲外で、貼床面から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデを施した後、部分的に斜め方向のミガキや工具ナデが施されている。胴部上端は横方向の工具ナデが、胴部には縦方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。内面は横・斜め方向の工具ナデが施されており、突帯内面部分の上下には指押さえが並ぶ。

520 は甕の胴部から脚部資料である。底径 13.0cm、脚部高 4.0cmを測る。中央柱穴を挟み、その南北の貼床面から出土している。胴部外面は斜め方向のミガキが施されている。脚部は縦方向のミガキが、脚部下端は横方向の工具ナデが施されている。内面胴部は縦・横方向の長さの短い工具ナデが施されており、部分的には横方向のミガキが確認できる。脚部内面は横・斜め方向の工具ナデが施されており、部分的に横方向のミガキが確認できる。

521 は高坏の坏部から脚部資料である。中央柱穴に隣接して南西側で、貼床面から出土している。外面は横・縦方向の工具ナデが施されている。内面坏部は横方向のミガキが、脚部内面は斜め方向の工具ナデが施されている。

装飾品(第 2-199 図)

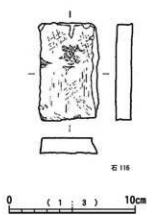
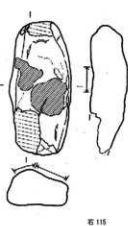
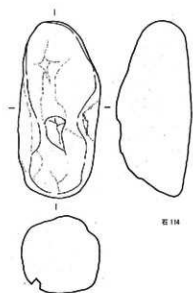
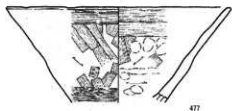
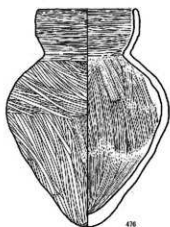
装 10 は土製の勾玉である。遺構の北側の硬化面範囲内で、貼床面から出土している。長さ 1.9cm、幅 0.8cm、厚さ 0.9cmを測り、重量は 1.4gを量る。下部が欠損している。





第2-181図 竪穴建物跡42号 遺物出土状況

0 1m
(1/40)



第2-182 図 竪穴建物跡 42 号 出土遺物(土器・石器)

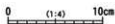
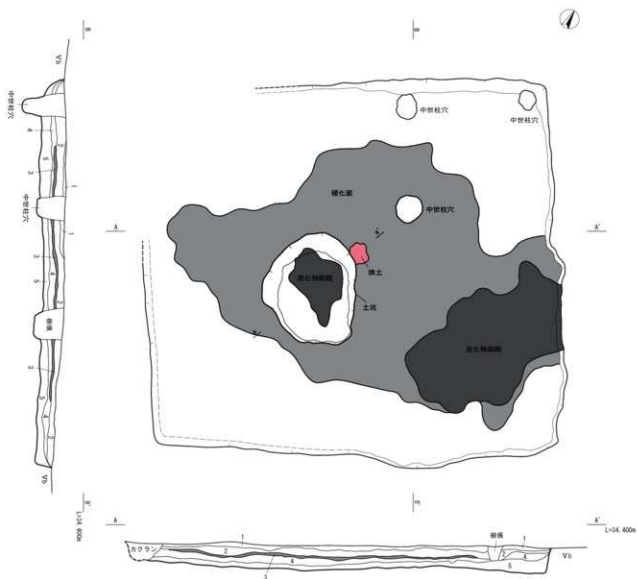


表2-80 竪穴建物跡42号出土土器

図 番 号	遺物 番 号	表 面	器 種	部位 (穴附部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 182	469	○	甕	口縁部	B	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:に深い橙 内:明褐色	石・白・黒・ 小	
	470	○	高坏	坏部	—	—	19.6	—	工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:橙	石・白・小	
	471	○	高坏	脚部	—	—	—	13.5	工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:橙	石・白・黒・ 小	
	472	○	埴	口縁部	—	—	10.9	—	工具ナデ	工具ナデ	外:浅黄緑 内:浅黄緑	石・白・小・ ほか	
	473	○	手づくね	完形	—	2.9	5.5	—	工具ナデ	工具ナデ	外:に深い黄緑 内:に深い橙	石・小・ ほか	
	474		甕	口縁部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	ミガキ	外:に深い黄緑 内:明黄緑	石・黒・小	
	475		甕	底部	—	—	—	6.9	工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:赤褐色	石・白・小・ ほか	総高さ0.3cm
	476		壺	完形	—	23.0	10.2	—	ミガキ 工具ナデ	ミガキ 工具ナデ	外:橙 内:に深い黄緑	石・白・黒・ 小	
	477		鉢	口縁部一部	—	—	23.5	—	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	外:橙 内:橙	石・白・黒・ 小	
478		埴	口縁部	—	—	7.0	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:橙 内:橙	石・黒・ ほか		

表2-81 竪穴建物跡42号出土石器

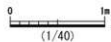
図 番 号	遺物 番 号	表 面	器 種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 182	石114	○	棒状鏝	完形	18.7	8.5	8.2	1970.0	ホルンフェルス	
	石115	○	棒状鏝	完形	14.1	6.6	4.2	540.0	ホルンフェルス	
	石116		砥石	完形	7.7	4.7	1.3	104.0	砂岩	

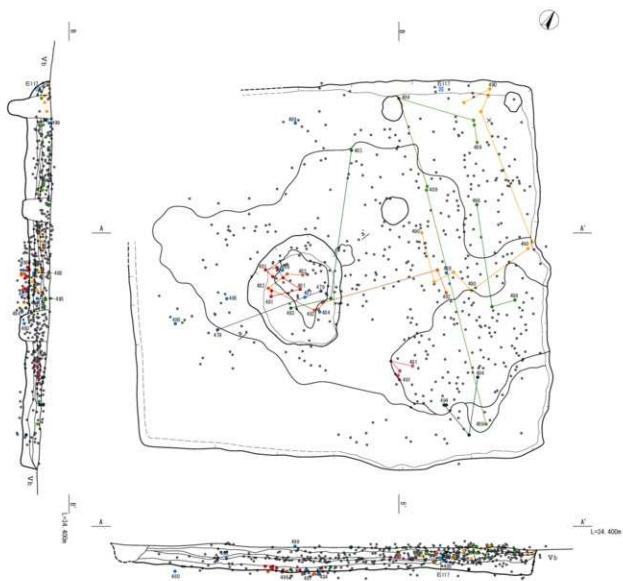


- 1 緑褐色土。
- 2 緑褐色土。アカ色や火山灰土が見える。下部で何かが壊れた痕跡が見える。
- 3 褐色土。硬化床。
- 4 緑色土。石灰層土。
- 5 黄褐色土。

- ① 緑褐色土。2～5cm位の層がわずかに見える。
- ② 緑褐色土。5～10cm程度の明る褐色の緑土ブロックが見える。

第2-183図 竪穴建物跡43号

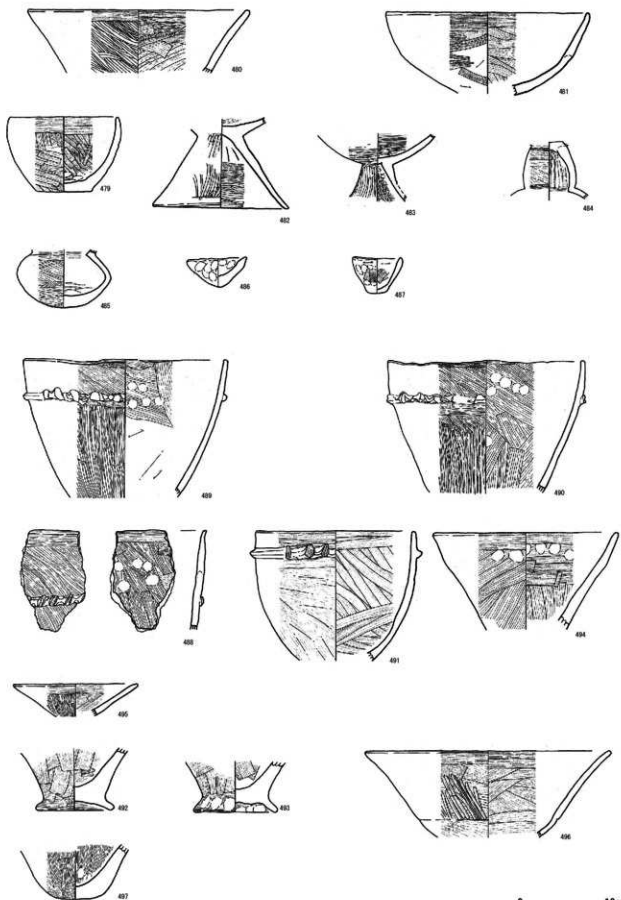




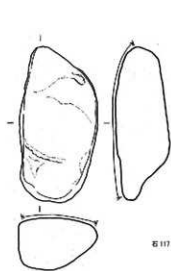
- 土層400・404・406・407・408
・ 402・409
- 土層470 ● 土層401
- 土層402 ● 土層404
- 土層403 ● 土層409
- 土層405 ● 平砂地土層
- 土層409 ■ 瓦葺(神狹溝)
- 土層400 × 瓦片物

0 1m
(1/40)

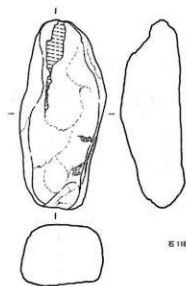
第2-184圖 竪穴建物跡43号 遺物出土状況



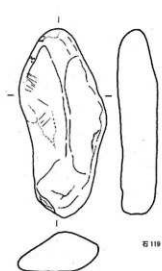
第2-185 圖 竪穴建物跡 43号 出土遺物(土器)



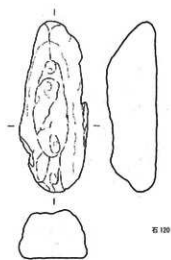
石 117



石 118



石 119



石 120



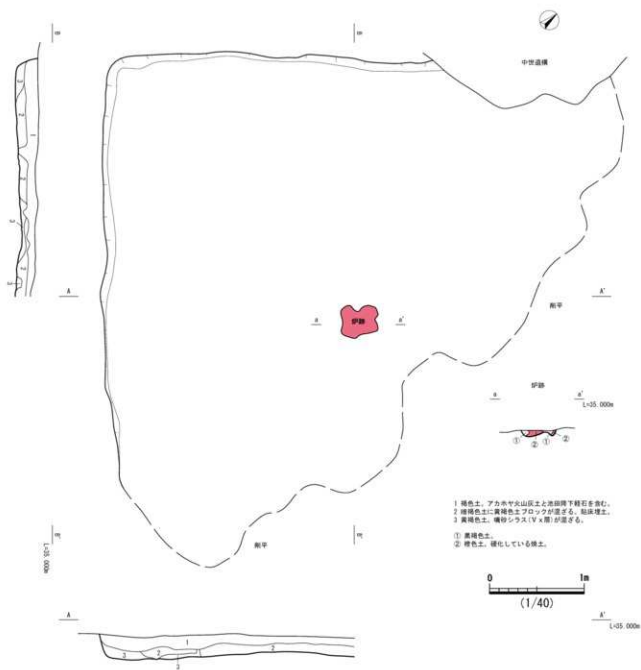
第2-186 図 竪穴建物跡 43 号 出土遺物(土器・石器)

表2-82 竪穴建物跡43号出土土器

図 番号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 185	479	○	鉢	完形	—	7.9	11.4	5.6	工具ナデ	工具ナデ	外にふい裏焼 内にふい裏焼	石・白・黒・ 小	土坑内
	480	○	高杯	坏部	—	—	23.2	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外にふい焼 内にふい焼	石・白・黒・ 小	土坑内
	481	○	高杯	坏部	—	—	21.3	—	工具ナデ 細ナデ	工具ナデ	外・明赤焼 内にふい焼	石・白・黒・ 小	土坑内
	482	○	高杯	脚部	—	—	—	14.0	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外・浅黄焼 内にふい裏焼	石・白・黒・ 小	土坑内
	483	○	高杯	坏部-脚部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外にふい裏焼 内にふい裏焼	石・白・黒・ 小	土坑内
	484	○	高杯	脚柱部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外・明焼 内・明焼	石・白・黒・ 小	土坑内
	485	○	埴	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外にふい裏焼 内にふい裏焼	石・黒・白・ 黒・小	土坑内
	486	○	手づくね	完形	—	3.0	6.0	—	指押さえ	指押さえ	外・焼 内・焼	灰・黄・黒	土坑内
	487	○	手づくね	完形	—	3.7	5.0	—	細ナデ 工具ナデ	細ナデ 工具ナデ	外にふい裏焼 内にふい裏焼	灰・黒	土坑内
	488	○	甕	口縁部-胴部	C	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外にふい焼 内・焼	石・黒・白・ 黒・小	
	489	○	甕	口縁部-胴部	D	—	21.5	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外にふい裏焼 内にふい裏焼	石・黒・小・ はか	
	490	○	甕	口縁部-胴部	D	—	20.7	—	工具ナデ	工具ナデ	外にふい裏焼 内・明赤焼	石・黒・小・ はか	
	491	○	甕	口縁部-胴部	—	—	16.8	—	工具ナデ	工具ナデ	外・明焼 内・浅黄焼	石・白・黒・ はか	
	492	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	7.5	工具ナデ	工具ナデ	外・焼 内・灰黄焼	石・白・黒・ 小	脚部高0.9cm
	493	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	8.5	工具ナデ	工具ナデ	外にふい裏焼 内にふい焼	石・黒・白・ 黒・小	脚部高1.1cm
	494	○	鉢	口縁部-胴部	—	—	19.4	—	工具ナデ	工具ナデ	外にふい焼 内にふい焼	石・長・白・ 小	
	495	○	高杯	坏部	—	—	13.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外・浅黄焼 内・浅黄焼	石・黒・白・ 黒・小	
	496	○	高杯	坏部	—	—	23.6	—	工具ナデ	工具ナデ	外・焼 内・明赤焼	石・黒・白・ 小	
497	○	甕	底部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外・焼 内・明赤焼	石・白・黒・ 小		
2 186	498	○	甕	口縁部-胴部	D	—	26.8	—	工具ナデ ハケ目	工具ナデ	外・明赤焼 内・黒焼	石・黒・小	
	499	○	甕	口縁部	—	—	—	—	工具ナデ	細ナデ	外にふい焼 内にふい焼	石・白・黒・ 小	
	500	○	埴	胴部-底部	—	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	外・明焼 内・明赤焼	石・白・黒・ はか	

表2-83 竪穴建物跡43号出土石器

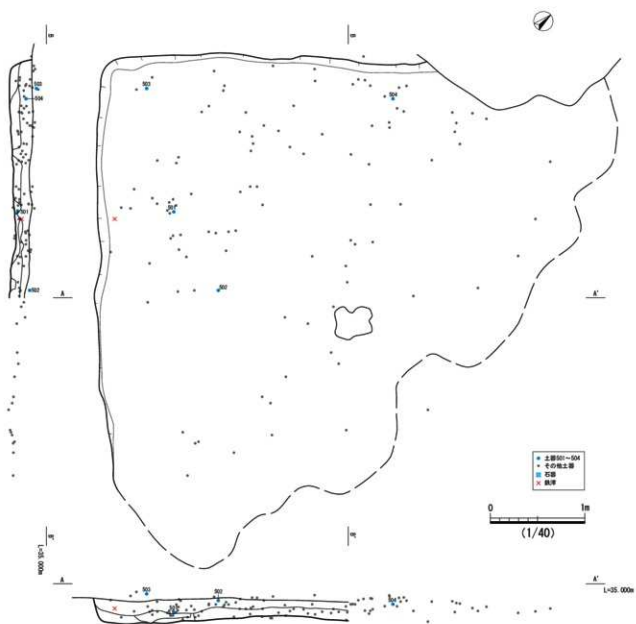
図 番号	遺物 番号	床 面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 186	石117	○	棒状鏡	完形	16.3	8.3	5.7	1150.0	ホルンフェルス	
	石118	○	棒状鏡	完形	19.9	8.9	6.5	1760.0	ホルンフェルス	
	石119	○	棒状鏡	完形	19.9	9.3	4.6	958.0	砂岩	
	石120	○	棒状鏡	完形	18.1	7.4	5.4	969.0	ホルンフェルス	



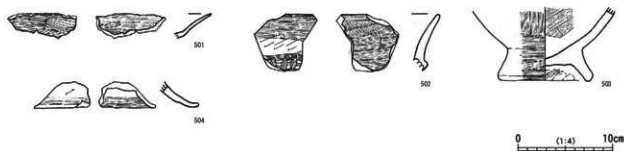
第2-187図 竪穴建物跡44号

表2-84 竪穴建物跡44号出土土器

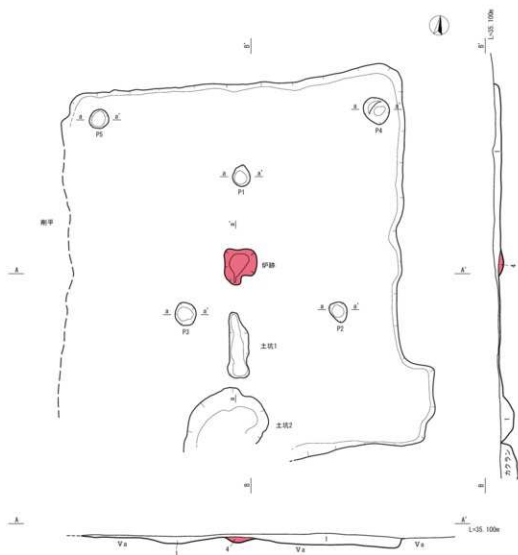
図番号	遺物番号	平面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考
2-189	501	○	高杯	口縁部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外: 黄 内: 黄	石・黄・白・ 黒・小	
	502		甕	口縁部	B	—	—	—	工具ナデ 指ナデ	工具ナデ	外: 白・黄 内: 白・黄	石・白・小	
	503		甕	胴部一部	—	—	—	9.2	工具ナデ	工具ナデ	外: 白・黄 内: 明赤桃	石・白・黒・ 小	
	504		高杯	脚部	—	—	—	—	工具ナデ ナデ	工具ナデ	外: 浅黄 内: 浅黄	石・小	



第2-188図 竪穴建物跡44号 遺物出土状況

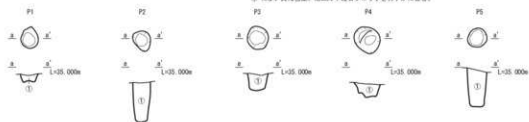


第2-189図 竪穴建物跡44号 出土遺物(土器)



- 1 に近い黄褐色土。池田層下軽石をわずかに含む。
- 2 に近い黄褐色土。炭化物を少量含む。池田層下軽石をわずかに含む。硬化面。
- 3 灰褐色土。炭化物をわずかに含む。
- 4 緑色土。積土。

① に近い黄褐色土。池田層下軽石ブロックをわずかに含む。



第2-190図 竪穴建物跡45号

(1/50)

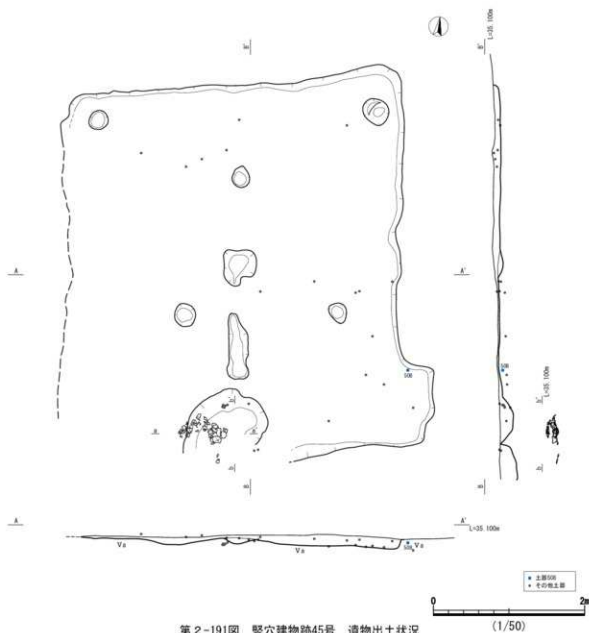
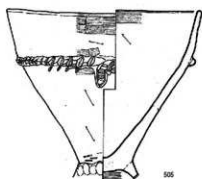


表2-85 竪穴建物跡45号出土土器

図番号	遺物番号	床面	器種	部位 (矢印部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 192	505	---	鉢・甕	口縁部-胴部	---	---	20.2	---	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	外:橙 内:橙	石・白・黒・ 小	
	506	---	高坏	坏部	---	---	24.0	---	工具ナデ ハケ目	工具ナデ ミガキ	外:橙 内:橙	石・白・黒・ 小	
	507	---	高坏	坏部	---	---	14.7	---	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:赤褐 内:赤褐	石・白・黒・ 小	
	508	---	壺	底部	---	---	---	---	工具ナデ	工具ナデ	外:白~1層 内:浅黄緑	石・黒・白・ 小	

表2-86 竪穴建物跡45号出土石器

図番号	遺物番号	床面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 192	石121	---	砥石	完形	20.2	8.3	5.2	1160.0	砂岩	
	石122	---	棒状鏝	完形	16.4	10.8	6.6	1640.0	ホルンフェルス	
	石123	---	棒状鏝	完形	18.2	9.7	6.7	1740.0	砂岩	



505



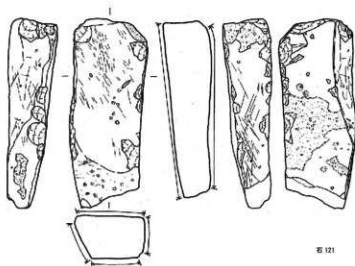
506



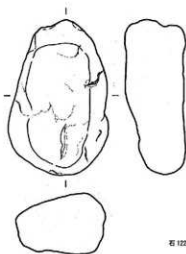
507



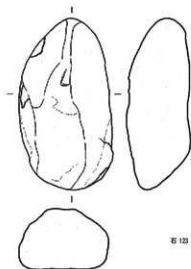
508



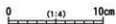
石 121



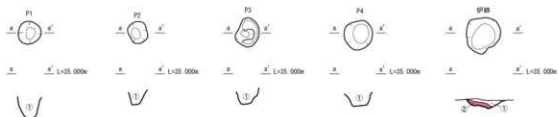
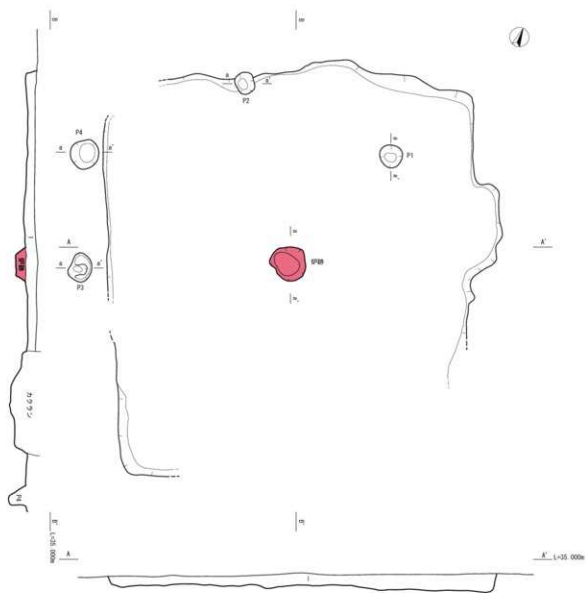
石 122



石 123



第2-192図 竪穴建物跡45号 出土遺物(土器・石器)



1 に近い黄褐色土。流石層下粘土をわずかに含む。

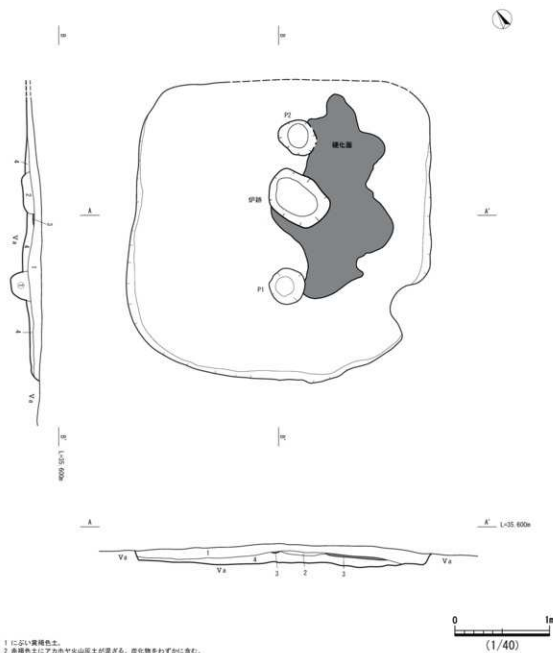
① 黄褐色土。灰白色物をわずかに含む。

② 褐色土。粘土。

第 2-193 図 竪穴建物跡46号

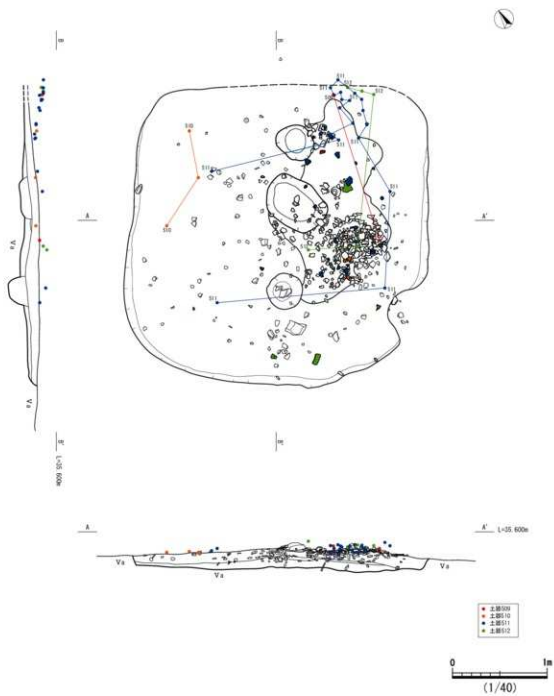


(1/40)

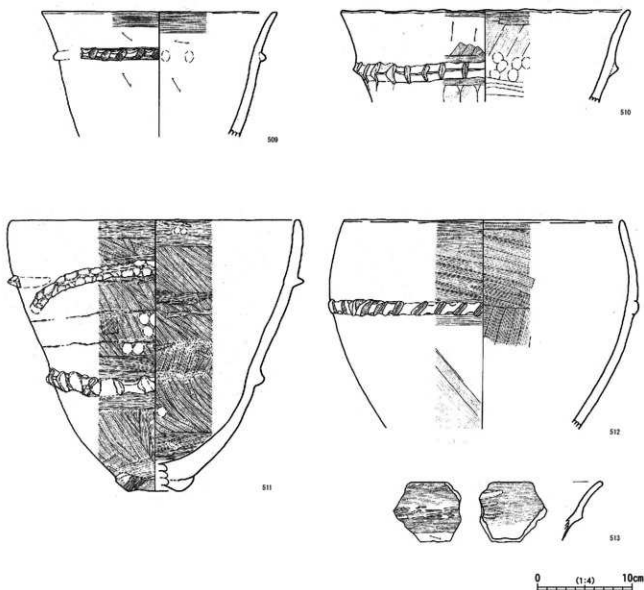


- 1 に近い黄褐色土。
 2 赤褐色土に多少赤灰色山灰土が混ざる。炭化物をわずかに含む。
 3 に近い黄褐色土に黒褐色土が混ざる。硬化層。
 4 に近い黄褐色土に黒褐色土が混ざる。流石降下層石を少量含む。
- ① 黄褐色土。

第2-194図 竪穴建物跡47号



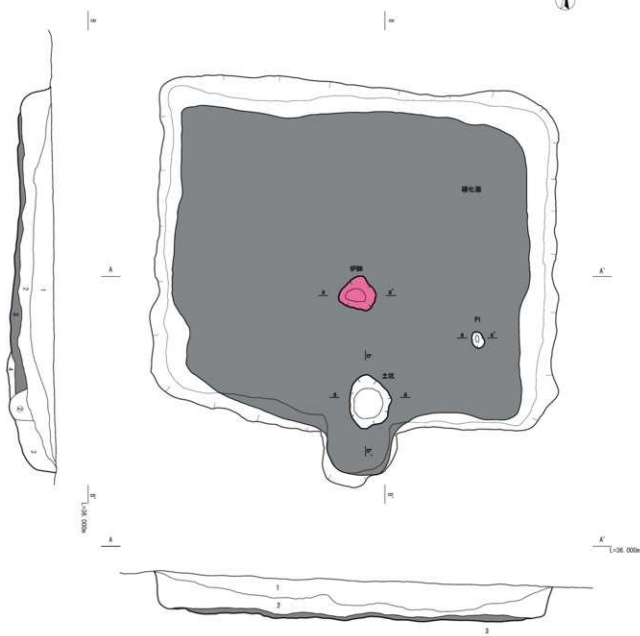
第2-195圖 竪穴建物跡47号 遺物出土状況



第2-196 図 竪穴建物跡47号 出土遺物(土器)

表2-87 竪穴建物跡47号出土土器

図 番号	遺物 番号	断面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 196	509		甕	口縁部-胴部	B	—	24.8	—	工具ナデ 指ナデ	工具ナデ 指ナデ	外:橙 内:にぶい黄褐色	石・長・白・ 黒	
	510		甕	口縁部-胴部	B	—	30.2	—	工具ナデ 指ナデ	工具ナデ 指ナデ	外:橙 内:橙	石・小・ ほか	
	511		甕	完形	—	26.6	30.4	6.5	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:にぶい赤褐色 内:にぶい黄褐色	石・白・黒・ 小	
	512		甕	口縁部-胴部	D	—	29.2	—	工具ナデ	工具ナデ	外:橙 内:橙	石・小・ ほか	
	513		甕	口縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:にぶい橙 内:にぶい橙	石・白・小・ ほか	



- 1 褐色土、2~4cm程のアカホヤ火山灰土ブロック、池田層下砂層が少量混ざる。
- 2 褐色土、1~2cm程のアカホヤ火山灰土ブロック、池田層下砂層が少量混ざる。
- 3 明褐色土、アカホヤ火山灰土ブロックを多量に含む、礫化層。
- 4 褐色土、アカホヤ火山灰土ブロックがわずかに混ざる。



- ① 赤褐色土、砂土。
- ② 褐色土。



第2-197図 竪穴建物跡48号

(1/40)

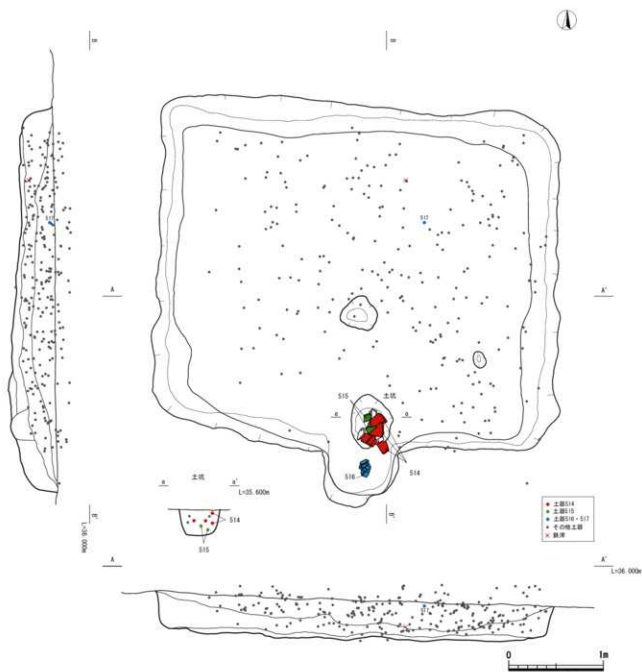
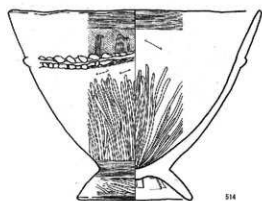


表2-88 竪穴建物跡48号出土土器

図番号	遺物番号	平面	器種	部位 (穴部部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	粘土	備考
2-199	S14	○	鉢	完形	—	20.1	26.2	11.8	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外・明褐色 内: 灰褐色	黒・小	
	S15	○	甕・壺	底部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外: 灰褐色 内: 褐色	石・黒・白・ 黒・小	
	S16	○	高杯	坏部	—	—	12.5	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外・褐色 内: 褐色	石・白・黒・ 小	
	S17		甕	胴部-脚部	—	—	—	8.2	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外: 灰褐色 内: 褐色	石・白・ 黒・小	脚部高0.6cm



514



515



517



516



518



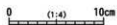
519



520



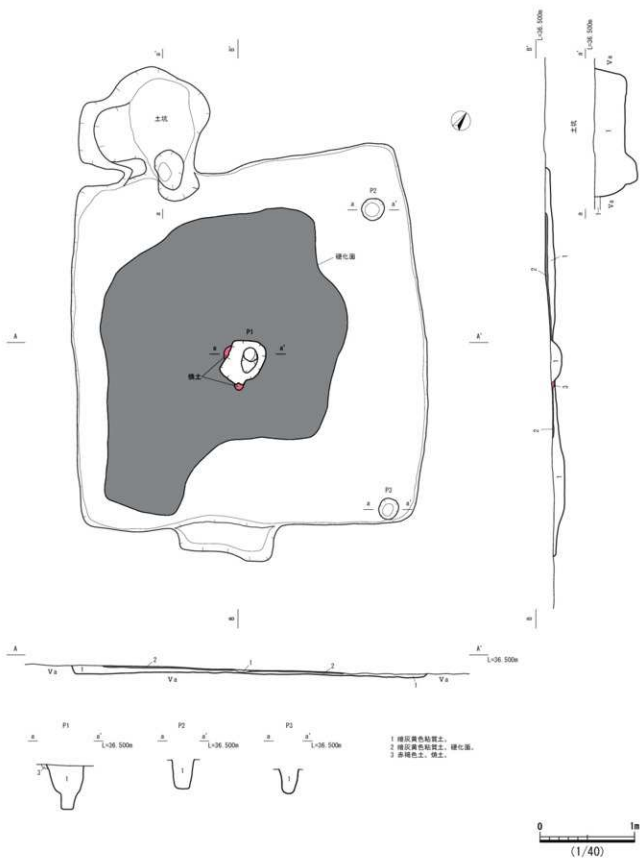
521



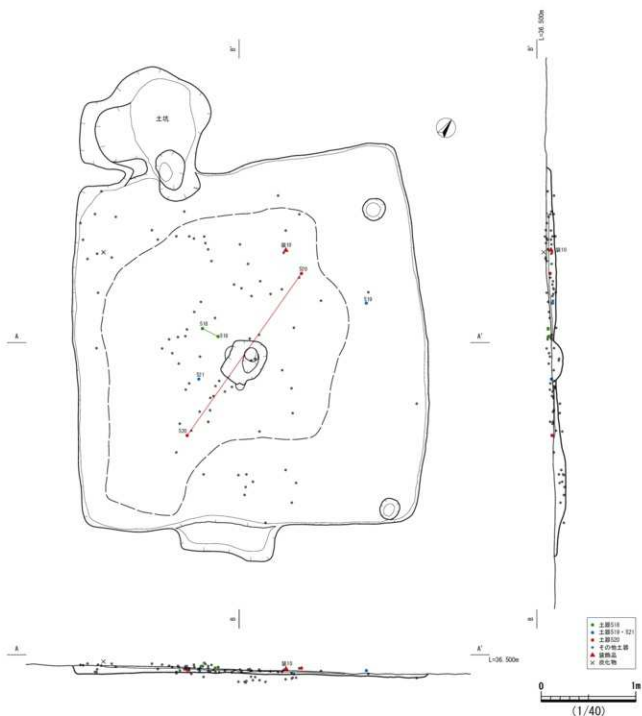
520



第2-199圖 竪穴建物跡48号・49号 出土遺物(土器・裝飾品)



第 2-200 圖 竪穴建物跡 49 号



第2-201図 竪穴建物跡49号 遺物出土状況

表2-89 竪穴建物跡49号出土土器

図 番 号	遺物 番 号	床 面	器 種	深 度 (穴 底 部 位)	分 類	器 高 (cm)	口 径 (cm)	底 径 (cm)	外 面 調 整	内 面 調 整	色 調	粘 土	備 考
2 199	518	○	甕・鉢	口縁部	—	—	—	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ ミガキ	外:にぶい曜 内:曜	石・白・小・ 注か	
	519	○	甕	口縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナゲ ミガキ	工具ナゲ	外:曜 内:明赤曜	白・小・ 注か	
	520	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	13.0	ミガキ 工具ナゲ	ミガキ	外:赤曜 内:明赤曜	石・白・小	胴部高:4.8cm
	521	○	高坪	坪部-脚部	—	—	—	—	工具ナゲ	ミガキ 工具ナゲ	外:曜 内:曜	石・長・角・ 白・小	

(2) 円形竪穴建物跡 (第2-202 図)

川久保遺跡の古墳時代は方形竪穴建物跡が主体であるが、北側中央部(C30～33区)から南西方向(E・F27～29区)にかけて、帯状に7基の円形竪穴建物跡の検出が見られた。

竪穴建物跡50号(円形竪穴建物跡1号 第2-203 図)

竪穴建物跡50号はB32・33区Va層から検出した。大きさは長軸(南北軸)2.9m、短軸(東西軸)2.5mを測り、東側がやや直線的に成形されているが、略楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは約10cmと浅く、遺構の上部は削平されている。遺構の北側には不定形の深さ約10cmの浅い土坑が1基検出されている。埋土が隣接し切り合うP1の埋土と同じであるため前後関係は不明であり、また、遺構に付属するかどうか不明である。炉跡・焼土跡・炭化物範囲・硬化面はいずれも検出されていない。柱穴は複数基確認されたが、遺構に伴う可能性が高いものは9基であった。壁面に作られたものが5基、遺構内のものが4基である。平面形状は様々であるが、深さを見ると壁面に作られた柱穴は35～50cmと深く、遺構内の柱穴は浅い。また、遺構内の柱穴でもP4は深い。最小径は方形竪穴建物跡と比較して小さく、遺構の面積が小さいことと比例して、細い柱で建物を建てていたと考えられる。遺物の出土は少なく、どれも古墳時代土器と考えられる胴部小破片のみが出土している。

竪穴建物跡51号(円形竪穴建物跡2号 第2-204 図)

竪穴建物跡51号はB30区Va層から検出した。直径約3.7mの円形を呈し、南側には幅約0.9m、奥行き約1.1mの張り出しを持つ。張り出し部を含めると遺構の長軸は南北軸となる。検出面から底面までの深さは約50cmで、底面から約25cmの厚さで平坦な貼床が形成されている。壁面は底面から検出面まで緩やかに立ち上がる形状をしている。遺構の中央部には長軸約0.6m、短軸約0.4の略楕円形の土坑が検出されており、その内部には柱穴と考えられる小ピットが検出されている。土坑内からは焼土は検出されておらず、炉跡とは考えられない。そのため、この遺構は柱穴と判断した。柱穴P1の下位からは壘の底部が出土している。P1の南側にはP2が、遺構周辺からはP3が検出されている。埋土は全て同じ暗褐色土であるが、P3の遺構への所属は疑わしい。建物の円形部分は、壘を除くほぼ完全に硬化面が広がっている。円形部分と同じ高さで貼床面が形成されている張り出し部分には硬化面は確認されていない。硬化面の厚さは約6cmである。そのちょうど中間、硬化面上面から3cm程の位置に赤褐色の鉄分を含んだような薄い層があり、硬化面はその層により上下2枚に分かれる。

出土遺物(第2-205 図)

遺物は遺構内全体から出土している。

土器(第2-206 図)

522～525はその出土状況から、竪穴建物跡51号に帰属する可能性が高い土器群である。

522は壘の胴部資料である。遺構の南側および張り出し部分で、大部分が貼床面から出土している。外面に施されている突帯の下部は、ヘラ状工具や爪等で擦り付けられている。胴部上半は横・斜め方向のハケ目や工具ナデが施されている。胴部下半は広範囲が煤に覆われているため、器面調整は判然とはしないが、縦方向の工具ナデが施されている。部分的には幅2mm程度の縦方向のミガキがまばらに施されている。内面には緩い稜が形成されており、稜の直下には指押さえが確認でき、指押さえにより稜を形成したと考えられる。内面調整は横方向のハケ目の後に、縦方向の工具ナデを施している。外面同様に、幅2mm程度の縦方向のミガキが、まばらに施されている。

523は壘の脚部で資料である。底径9.5cmを測る。遺構の北壁付近で貼床面から、南西壁付近で検出面から出土している。外面胴部下端は斜め方向のナデが施されている。脚部は横方向の工具ナデが施されており、脚部上位から中位にかけては指押さえが密に行われている。内面胴部はナデが施されている。脚部内面は斜め・横方向の工具ナデが施されている。

524は壘の口縁部から頸部の資料である。口縁部は欠損しており、口縁部と頸部の境目には刻目突帯が施されている。遺構の北東部で貼床面から出土している。外面口縁部には横方向のナデが施されており、突帯上位には指押さえが行われている。頸部上位には横方向のハケ目とその下位には横方向のナデが施されており、指押さえも行われている。内面は横・斜め方向のナデが、頸部下端には縦方向の工具ナデが施されている。

525は鉢である。口縁部から胴部下半までの資料である。口径32.6cmを測る。遺構の北東部で貼床面から、南西壁付近で検出面から出土している。口縁部から胴部上半にかけて粘土を貼り付け、特に口縁部は粘土帯によりわずかに肥厚し、丁寧な整形により段差を形成している。口縁部の肥厚帯には部分的に斜め方向の工具ナデが施されている。粘土貼り付け範囲の下位には、縦・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部下半は器面調整が不明瞭になり、器面も平滑である。内面口縁部上端は横方向のハケ目が施されている。その下位には横方向のミガキを施した後に、斜め方向のミガキが施されている。内面のミガキは非常に丁寧に施されているのが特徴である。胴部中位のミガキがやや疎になる部分も、光沢が無いだけで器面は平滑である。外面の広い範囲に煤の付着が見られる土器である。

526・527はその出土状況から、堅穴建物跡51号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

526は壺の胴部下半から脚部にかけての資料である。底径7.2cm、脚部高1.0cmを測る。脚部の断面に接合痕跡が残存しており、胴部から連続して底部を成形し、そこに脚部を貼り付けていることが観察できる。遺構内埋土中一括取上げ資料である。内面胴部下半には幅3～4mm程度の縦方向のミガキが密に施されている。脚部には幅6mm程度の横方向の縦線状の工具ナゲが丁寧に施されている。また一部に指押さえが行われている。胴部の縦ミガキが脚部の横ナゲの被っているため、脚部の調整が先に施されたことが分かる。内面は幅9mm程度の縦方向の工具ナゲが丁寧に施されており、一部には光沢も見られる。脚部の内面には横方向のナゲおよび、幅3～4mm程度のミガキが施されている。

527は完形に復元できた手づくね土器である。わずかではあるが底部に平坦面を持ち、口径5.3cm、底径1.1cm、器高3.1cmを測る。遺構内埋土中一括取上げ資料である。外面は指ナゲが、内面はナゲが施されている。

石器(第2-206図)

石124は軽石製品である。遺構内埋土中一括取上げ遺物である。

石125は棒状礫である。遺構内埋土中一括取上げ遺物である。

堅穴建物跡52号(円形堅穴建物跡3号 第2-207図)

堅穴建物跡52号はD31区Va層から検出した。遺構の東側や、その他にも部分的に攪乱を受けている。北西側は硬化面が遺構の上端となって検出されているため、遺構上面の削平が他の部分よりも著しかったと考えられる。想定される形状は楕円形であり、直径3.2m程度の大きさであると考えられる。検出面から底面までの深さは15～20cm程度であり、底面から6～10cm程度の厚さで貼床面が形成されている。硬化面は北側と西側では壁面付近まで広がっていることが確認できる。柱穴は遺構内に2基検出されている。炉跡・張り出しは検出されていない。

出土遺物(第2-208図)

遺物は貼床面から4点出土しているが、どれも土器小片である。

堅穴建物跡53号(円形堅穴建物跡4号 第2-209図)

堅穴建物跡53号はE29区Va層から検出された。直径約4.1mの円形を呈し、南東側に幅約1.0m、奥行き約0.7mの張り出しを持つ。検出面から底面までの深さは50～55cm程度で、縁辺部はやや浅く30～40cm程度である。底面から20～30cm程度、縁辺部で10cm程度の厚

さで貼床が形成されている。張り出し部の手前には長軸0.85m、短軸0.65m、深さ約15cmの楕円形の土坑が検出されている。検出面は貼床上面である。遺構の中央部には柱穴が1基検出されている。炭化物を含むがわずかな量であり、焼土が確認されていないことから、建物の中央柱穴跡と判断した。検出面は貼床面である。貼床上面はつまりはあるが、硬化は部分的にしか確認されていない。

出土遺物(第2-210・211図)

張り出し部の手前で大量の土器が集中して出土している。土器は幅約1.5m、奥行き約0.9mの範囲で、10cm程度の厚さで貼床面直上から重なった状態で出土している。壺や高坏の大型の破片がまとまって出土していることから、流れ込みでは無く、人為的に廃棄されたものと考えられる。土器集中部以外での土器の出土は散在的である。張り出し部でも貼床面直上から、ある程度の量の土器が出土しているが、小破片の出土が多い。

土器(第2-212～214図)

528～540はその出土状況から、堅穴建物跡51号に帰属する可能性が高い土器群である。

528は完形に復元することができた口縁部が外傾する壺B類である。丸底壺に脚部を付加する技法を用いて成形されている。口径24.2cm、底径7.7cm、器高31.4cm、脚部高0.3cmを測る。張り出し部手前の土器集中および、遺構の南側で貼床面から出土している。外面口縁部上位は横方向の工具ナゲが、口縁部中位から下位にかけては、縦方向の単位幅が不明瞭な工具ナゲが施されている。口縁部中位には指押さえが巡り、この指押さえにより器面が少し凹むことで、相対的に口縁部上位がわずかに膨らむ器形を呈する。突帯貼り付け部分の器面には横方向のハケ目を施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は縦方向の工具ナゲが施されている。外面胴部には部分的に摩滅が激しい箇所が見られ、外面脚部は摩滅が激しいため、器面調整は不明である。内面口縁部は横方向の工具ナゲが、口縁部下端は斜め方向の工具ナゲが施されている。胴部は縦・斜め方向の工具ナゲが施されている。突帯内面部分とその下位には、指押さえが2列巡る。内面胴部下位は摩滅が著しい。脚部内面は横方向の工具ナゲが施されている。

529は口縁部が外傾する壺B類の口縁部から胴部中位までの資料である。口径27.8cmを測る。張り出し部手前の土器集中で貼床面から出土している。外面口縁部は横方向のハケ目を施した後に、縦方向の工具ナゲが施されている。工具ナゲを施す際に口縁部と胴部屈曲部の境目で工具ナゲを打ち込み段差をつけている。胴部上半は横方向の工具ナゲを施した後に、その工具ナゲをナゲ消しているようである。胴部下半は縦方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部は横方向のハケ目が施されている。

る。胴部は横方向の工具ナデを施した後に、外面同様、その調整痕をナデ消している。

530 は口縁部が外傾する甕B類の口縁部から胴部下位までの資料である。口径32.0cmを測る。張り出し部手前の土器集中で貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は斜め方向の工具ナデが施されており、口縁部から胴部中位にかけて、複数列の指押さえが巡る。

531 は完形に復元できた口縁部がわずかに外傾する甕B類である。口径は34.4cmを測るが、口縁部は大きく歪んだ形状をしている。器高は51.0cmを測り、本遺跡で出土した古墳時代の土器の中でも最大の大きさとなる。寸胴な口縁部から胴部に対して、脚部は外面の見た目で、わずかに約4cm程度の高さしか持たず、脚部高は2.4cmである。口縁部から胴部上半にかけては煤の付着が確認できるが、煤の範囲は全周ではない。張り出し部手前の土器集中で貼床面から出土している。外面口縁部は目の細かい横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向のハゲ目を施した後に、突帯を貼り付けている。突帯は始点と終点が上下にずれて貼り付けられている。胴部上位は横・斜め方向の工具ナデが、その下位にも同じく横・斜め方向の工具ナデが施されているが、工具の幅が変わり、調整の雰囲気が変わる。また、調整が確認できない箇所も見られる。外面胴部中位上半は横方向の工具ナデが施されているが、器面が摩滅しており調整痕が消失している箇所が見られる。胴部中位下半は被熱により器面が摩滅・剥離しており、調整痕は消失または不明瞭である。赤色化が著しく、器面に泥和材が露出し、ザラついている。この赤色化や摩滅の著しい範囲は、煤の付着範囲と重なることはほぼない。外面胴部下位は縦方向の工具ナデが、脚部は横方向の工具ナデが施されている。胴部と脚部の境目には指押さえが並ぶ。胴部下位も場所によっては、摩滅・赤色化が見られる。対して脚部には摩滅・赤色化は見られず、調整痕もはっきりと残存している。内面口縁部は目の細かい横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯部分あたりから胴部上半にかけては横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面胴部中位は外面ほどではない(器面の剥離や、泥和材の露出は見られない)が、器面に摩滅が見られ、赤色化が確認でき、調整痕が消失もしくは不明瞭である。内面胴部下位も胴部中位と同程度の器面の摩滅が見られ、調整痕が消失もしくは不明瞭であるが、赤色化は見られない。脚部内面は横方向の工具ナデが施されている。

532 は口縁部がわずかに外傾する甕B類の口縁部から

胴部下半までの資料である。口径32.4cmを測る。張り出し部手前の土器集中で貼床面から出土している。口唇部は部分的に内外面ともに調整後に粘土を貼り付け、薄く工具ナデで引き伸ばしている。丁寧にナデを施す箇所と、雑に施す箇所が見られる。ひび割れ等の補修の可能性が考えられる。外面口縁部上端は上述の粘土を貼り付ける前に横方向のハゲ目を施し、貼り付け時には横方向のナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向のハゲ目を施した後、器面を溝状に凹ませ突帯を貼り付けている。突帯よりも5mm程度上位からは、幅1~3cm程度で粘土が貼り付けられ横ナデにより薄く伸ばされ整形されている。その後、粘土貼り付け部分上位に縦・斜め・横方向の工具ナデを施し、その末端が粘土貼り付け箇所と接することで段差が生じている。突帯下位には横方向のハゲ目と斜め方向の工具ナデが施されている。胴部下半には幅5~8mm程度の縦・斜め方向の工具ナデを施した後、その工具ナデをナデ消している。内面口縁部は幅5~8mm程度の横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部中位は基本的には幅3cm程度の横方向のハゲ目が施されている。胴部下半には幅5~8mm程度の横・斜め方向の工具ナデが施されている。

533 は口縁部がわずかに外傾する甕C類の口縁部から脚部の資料である。口径30.2cmを測る。張り出し部手前の土器集中で貼床面から出土している。外面は斜め・横方向の丁寧な指ナデが施されている。内面は工具ナデを施した後に、斜め・横方向の丁寧な指ナデを施し、工具ナデをナデ消しており、部分的には工具ナデが確認できる。胴部には指押さえが3列巡る。

534 は甕である。

535 は口縁部が直行する甕C類の口縁部から胴部中位までの資料である。口径29.6cmを測る。張り出し部手前の土器集中で貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが、中位は斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部には斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部は横方向の工具ナデが、胴部は斜め方向の工具ナデが施されている。

536 は口縁部が内湾する甕C類の口縁部から胴部中位の資料である。口径21.9cmを測る。張り出し部手前の土器集中で貼床面から出土している。外面口縁部は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横・斜め方向の工具ナデを施した後に、工具ナデの向きに沿うように突帯を貼り付けている。胴部上位は斜め方向の工具ナデと、その下位は横方向の工具ナデが部分的に施されている。胴部上位から中位にかけては横方向のナデを施した後に、中位では縦方向のミガキが疎に施されている。内面口縁部上位と突帯

内面部分付近には、横方向の工具ナデが施されている。その他の部分には横方向の指ナデが施されている。

537 は口縁部がわずかに内傾する雙C類の口縁部から胴部上位の資料である。口径 28.4cm を測る。張り出し部手前の土器集中で貼床面から出土している。外面口縁部上端は目の細かい横方向の工具ナデ、もしくはハケ目が施されている。突帯付近は口縁部上端の調整痕よりも凹凸が強く、明瞭な横方向のハケ目が施されている。工具の幅もやや広い。胴部には丁寧な横方向のナデが施されている。内面は外面と同様な調整が同様な場所に施されており、口縁部上端の調整はその下位の調整と比べて工具の幅が狭く、施され方は浅い。

538 は完形に復元できた口縁部が大きく内湾する雙D類である。口径 23.0cm、底径 8.5cm、器高 35.4cm、脚部高 2.4cm を測る。張り出し部手前の土器集中および、その北側で貼床面から出土している。外面口縁部には縦・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯部分には段差が見られ、突帯を貼り付ける前に指押さえのような行為が行われていたと考えられる。胴部上位には幅 2mm 程度の丁寧な工具ナデが施されている。粘土帯の接合痕も確認でき、その下位には指押さえも行われている。工具ナデの原体は胴部下位のミガキを施したものと同一可能性がある。胴部中位から下位にかけては縦・横方向の工具ナデが施されており、胴部下半ではその上から部分的に縦方向のミガキが施されている。脚部上位には縦方向の工具ナデが、脚部中位には横方向の工具ナデが、脚部下位には横方向のミガキがそれぞれ施されている。口唇部には縦・横方向の工具ナデが、口縁部には縦・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯内面部分には横方向の工具ナデが施されている。胴部上位から胴部中位にかけては、単位が不明瞭な工具ナデが施されており、調整方向は斜めや横方向に施しているようである。胴部下位から内面底部にかけては、横方向の工具ナデを施した後に、縦方向の工具ナデが施されているが、縦方向の工具ナデは底部にまでは及ばない。脚部内面には横方向の工具ナデが施されており、指押さえも行われている。脚部端部は横方向のミガキが施されている。

539 は雙の胴部中位から脚部までの資料である。底径 9.5cm、脚部高 0.8cm を測る。張り出し部手前の土器集中で貼床面から、遺構の西側で貼床面から 20cm 程度浮いた状態で出土している。外面胴部は縦・斜め方向の工具ナデが施されている。脚部は横方向の工具ナデが施されており、脚端部には指押さえが並ぶ。内面胴部中位には縦・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部下位には横・斜め方向の工具ナデが施されている。脚部内面には横方向の工具ナデが施されており、指押さえも行われている。

540 は雙の胴部から脚部資料である。張り出し部手前

の土器集中で貼床面から出土している。外面胴部中位は摩擦が著しいが、縦方向の工具ナデが確認できる。胴部下位は縦・横方向の工具ナデが施されている。内面胴部中位も摩擦が激しく、器面調整は不明である。胴部下位は斜め方向の丁寧なナデが施されている。

541 ~ 547 はその出土状況から、堅欠建物跡 53 号座席後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器群である。

541 は口縁部がわずかに外傾する雙B類の口縁部から胴部中位の資料である。口径 29.6cm を測る。張り出し部手前の土器集中とその北側で、貼床面から 20cm 程度浮いた状態で出土している。外面口縁部上半は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが、口縁部下半から胴部にかけては、斜め・縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが、下半は斜め方向の工具ナデが施されている。胴部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。

542 は雙の胴部中位から脚部の資料である。底部径 8.2cm、脚部高 2.4cm を測る。中央土坑の南側と遺構の北東部で、貼床面から 10cm 程度浮いた状態と、検出面直下で出土している。内外面ともに器面の摩擦が著しく、外面胴部の器面調整は不明であり、胴部下端にわずかにナデが確認できる。外面脚部は横方向の工具ナデが施されており、胴部と脚部の境目には指押さえが巡る。内面胴部も部分的に工具ナデが確認できるのみである。脚部内面も摩擦しているが、横方向の工具ナデが施されている。

543 は壺の頸部から胴部下位までの資料である。遺構の中央部から南東側にかけて、貼床面より 10cm 程度浮いた状態や、検出面から出土している。外面頸部は縦方向のミガキが施されている。外面脚部から胴部は縦方向のミガキを施した後に、斜め方向のミガキを施している。内面頸部は幅 3 ~ 4mm 程度の横方向のミガキが施されている。肩部には指押さえが巡り、指押さえを境に、肩部から胴部上位には幅 5 ~ 6mm 程度の横方向のミガキを施した後に、部分的に幅 3mm 程度の横方向のミガキが施されている。胴部中位には縦方向のミガキを施した後に、横方向のミガキが施されている。胴部下位は横方向のミガキが施されているが、部分的に下地に縦方向のミガキが確認できる。

544 は高坏の坏部である。口径 16.9cm を測る。遺構の中央部から北東側にかけて、貼床面から 5 ~ 25cm 程度浮いた状態で出土している。外面坏部上位は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが、中位は縦方向の工具ナデが、下位は斜め方向のナデが施されている。内面は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されており、坏部中位には指押さえが密に 2 ~ 3 列巡る。

545 は高坏の坏部である。口径 24.6cm を測る。遺構埋

土中一括取上げ遺物である。外面坏部上位は横方向の工具ナデと、その下位に横方向のナデが施されている。坏部中位は斜め・横方向のミガギが施されている。坏部下位は斜め方向の工具ナデが施されているが、屈曲部の接合部分はミガギが施されている。内面坏部上位は横方向のミガギと、その下位は斜め方向の工具ナデが施されている。中位から下位にかけては横・斜め方向の工具ナデが施されている。

546 は高坏の脚部である。底径 15.6cm を測る。遺構の中心部と東壁の中間付近と、遺構の南西側で、貼床面から約 10cm 浮いた状態と、検出面直下で出土している。外面脚筒部は縦方向のミガギが、脚筒部下端は斜め方向のミガギが施されている。外面脚部上半は斜め方向のミガギが、下半は横方向のミガギが施されている。内面は横・斜め方向のミガギが施されており、脚筒部上端にわずかに横方向の工具ナデが確認できる。

547 は埴の胴部上位から底部の資料である。遺構の南西側で検出面直下や検出面から出土している。外面胴部上位は横方向の工具ナデが、中位から下位にかけては縦方向のミガギが胴部下端は斜め方向のミガギが、底部は横方向のミガギがそれぞれ施されている。内面胴部上位から中位にかけては、横方向の工具ナデが、下位は斜め方向の工具ナデが、底面付近は縦方向の工具ナデが施されている。内面胴部中位と底面付近には指押さえが並ぶ。

石器 (第 2-214 図)

石 126 は棒状礎である。張り出し先端部分で底面から出土している。

炭化材・炭化種実 (第 3 分冊自然科学分析参照)

竪穴建物跡 53 号では数点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から竪穴建物跡 54 号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し検討を行い、中央柱から出土した 1 点の炭化材について放射性炭素年代測定 (AMS 測定) を実施した。分析の結果、確率の高い 2 σ 暦年代の範囲で 239calAD-351calAD (93.2%) となった。おおよそ 3 世紀中頃～4 世紀中頃の値である。

竪穴建物跡 54 号では貼床面の埋土の洗い出しを行っており、炭化種実としてオニグルミ、カラスザンショウ、イネザンショウ、イネが検出されている。また、貼床面埋土からはコナラ属が検出されている。さらに栽培種としては、イネの穎 (基部) が検出されている。

竪穴建物跡 54 号 (円形竪穴建物跡 5 号 第 2-215 図)

竪穴建物跡 54 号は F 28 区 Va 層から検出した。南側の一部に現代の溝による削平を受けている。直径は約 3.8m の円形を呈し、南南東に幅約 0.65m、奥行き約 0.65m の張り出しを持つ。張り出し部を中心として、建物の南側半分がやや膨らむ形状を呈している。検出面か

ら底面までの深さは 20～30cm 程度であり、底面から厚さ 5～10cm 程度で貼床が形成されている。遺構の中央部には直径約 0.6m、深さ約 10cm の土坑が貼床面から検出されている。土坑内には焼土や炭化物は検出されていないが、遺構の北側には焼土及び炭化物の集中が検出されている。柱穴は遺構外に 1 基検出されている。硬化面は遺構内のほぼ全体に広がるが、北北西側の一部には貼床面が検出されており、それに伴い硬化面も検出されていない。硬化面の下位には円形の溝状遺構が検出されている。溝状遺構は遺構の壁に沿って形成されており、西側の一部が途切れる形状を呈している。溝状遺構の幅は南東側が広く最大で約 70cm であり、両端部が先細り 20～40cm 程度になる。深さは約 10cm である。

出土遺物 (第 2-216 図)

遺物は遺構内全体に散在して出土している。溝状遺構内からの遺物の出土は少なく、特筆すべき遺物は加工面のある軽石製品 1 点のみである。

土器 (第 2-217 図)

548～552 はその出土状況から、竪穴建物跡 54 号に帰属する可能性が高い土器群である。

548 は口縁部が外傾する雙 B 類の口縁部から胴部中位までの資料である。口径 29.6cm を測る。中央土坑の西側で貼床面から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデが施されている。突帯にも横方向の工具ナデが施されている。胴部上端には横方向の工具ナデが施されている。胴部は斜め・縦方向のナデが施された後に、胴部中位には縦方向のミガギが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半から胴部上端にかけては縦方向の工具ナデが施されており、縦方向の工具ナデの下位には指押さえが巡る。胴部には縦・斜め方向のナデが施されている。

548 は器面に煤が付着しており、この付着炭化物の放射性炭素年代測定 (AMS 測定) をおこなったところ (第 3 分冊自然科学分析参照)、確率の高い 2 σ 暦年校正年代で 333calAD-416calAD (79.5%) となった。おおよそ 4 世紀中頃～5 世紀前半の値である。

549 は丸底甕の胴部上位から底部の資料である。中央土坑内を含め、遺構内に広く散在し出土している。検出面から出土している破片もあるが、大半は貼床面から出土していることから、竪穴建物跡 54 号に帰属する可能性が高いと判断した。外面胴部は横・斜め方向のナデを施した後に、胴部上半に部分的に横・斜め方向のミガギが施されている。内面胴部上位は横・斜め方向の工具ナデが、中位から下位は横方向のナデが施されている。

550 は完形に復元できた丸底甕である。口径 10.4cm、器高 13.6cm を測る。ほぼ完形品の状態で張り出し部分の貼床面から出土している。外面は斜め方向のミガギが、内面はナデが施されている。

551は丸底壺の胴部上位から底部の資料である。こちらは割れた状態ではあるが、550と同じく張り出し部分の貼床面から出土している。また、遺構の北西側の貼床面、遺構の南側や西側の検出面からも出土している。外面胴部は横・斜め方向の工具ナゲが、底部は縦方向の工具ナゲが施されている。肩部内面は縦方向のナゲが、胴部は横・縦方向の工具ナゲが施されており、胴部には指押さえも行われている。

552はその出土状況から、堅穴建物跡54号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器である。口縁部がわずかに内湾する甕D類の口縁部から胴部中位までの資料である。中央土坑の南側で貼床面から10cm程度浮いた状態で出土しているほか、遺構の北側や遺構周辺で、検出面直下や検出面と同レベルから出土している。外面口縁部は横方向の工具ナゲを施した後に、横方向の指ナゲが施されている。工具ナゲの一部はナゲ消されずに残る。胴部は斜め・縦方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部下位は横方向の工具ナゲが施されている。胴部は横・斜め方向のナゲや、斜め・縦方向の工具ナゲが施されている。口縁部には指押さえが多く行われている。

石器(第2-217図)

石127は棒状礫である。遺構の東北東の壁面付近で、貼床面から出土している。

石128は軽石製品である。溝状遺構埋土中一括取上げ遺物である。溝状遺構の埋土中からの出土なので、硬化面よりも下位での出土となる。

堅穴建物跡55号(円形堅穴建物跡6号 第2-218図)

堅穴建物跡55号はE27・28区Va層から検出した。東側に一部擾乱を受けている。長軸約5.3m、短軸約5.0mの楕円形状を呈し、南南東側に幅約1.0m、奥行き約0.6mの張り出しを持つ。検出面から底面までの深さは約50cmであり、底面から15～20cm程度の厚さで貼床が形成されている。貼床面の上面は硬化しており、硬化面を形成している。遺構の中心部よりやや南側の位置には焼土を伴う直径約40cm、深さ約8cmの土坑が検出されており、炉跡と考えられる。また中心部より東北東側には焼土が確認されているが、こちらは貼床面よりも上位の埋土中で検出されており、堅穴建物跡55号廃絶後に形成されたと考えられる。張り出し部の手前には、長軸約1.5m、短軸約0.8mの土坑状の凹みが検出されているが、深さは約5cmと浅い。柱穴は西側に1基のみ検出されている。貼床面よりも上位の埋土はレンズ状堆積を呈していることから、堅穴建物跡57号は自然堆積により埋まったと考えられる。

出土遺物(第2-219図)

遺物は遺構内全体から多く出土しているが、貼床面か

ら出土している遺物は少なく、多くは遺構埋土中および検出面から出土している。張り出し部の手前の土坑状の凹みの上面には土器が集中して出土しているが、小破片が多く、詳細は不明である。

土器(第2-220・221図)

553～556はその出土状況から、堅穴建物跡55号に帰属する可能性が高い土器群である。

553は甕の胴部下位から脚部の資料である。底径10.0cm、脚部高5.1cmを測る。脚部は断面に接合痕が明瞭に残る。外面胴部は横方向の工具ナゲを施した後に、縦方向のミガキを確に施している。部分的には縦方向の面取りの工具ナゲが施されている。脚部は横・斜め方向の工具ナゲを施した後に、縦方向の面取りの工具ナゲが施されている。内面胴部は斜め方向の工具ナゲが、脚部内面は各方向の丁寧な工具ナゲが施されている。

554は甕の胴部下位から脚部の資料である。底径9.7cm、脚部高3.2cmを測る。内外面ともに非常に丁寧な器面調整が施されている。外面はミガキが施されている。内面胴部は斜め方向の丁寧な工具ナゲが施されており、部分的には光沢を持つ。脚部内面は各方向の丁寧なナゲが施されており、部分的には光沢を持つ。

555は口縁部がほぼ直行する壺の口縁部から頸部の資料である。口径20.1cmを測る。遺構の南側にまともな貼床面から出土している。外面口縁部は斜め方向のミガキを施した後に、口縁部上端と下位に横方向のミガキを施している。口縁部と頸部の境目には斜め・横方向の工具ナゲが施されている。頸部には縦方向の工具ナゲが施されている。内面口縁部は横方向の工具ナゲを施した後に、斜め方向のミガキを施している。頸部には斜め方向の工具ナゲが施されている。

556は埴の口縁部資料である。口径8.1cmを測る。外面の口縁部上端に赤色顔料が塗布されている。遺構の東側で貼床面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナゲが施されている。口縁部は縦方向のミガキが施されており、一部は口縁部上端に及ぶ。内面口縁部上半は横方向の工具ナゲが、下半は縦方向の工具ナゲが施されている。

557～576はその出土状況から、堅穴建物跡55号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器である。

557は口縁部が外反する甕B類の口縁部から胴部上位までの資料である。口径22.8cmを測る。遺構埋土中一括取上げ遺物である。外面口縁部上位は横・斜め方向の工具ナゲが施されている。口縁部中位から下位にかけては、横・斜め方向の指ナゲが施されており、下位には部分的に斜め方向の工具ナゲが施されている。胴部には縦方向の単位幅が不明瞭な工具ナゲが施された後に、胴部上位は横・斜め方向のミガキが施されており、胴部中位

にも部分的に斜め方向のミガキが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが、下半は単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデが施されている。胴部は横方向のナデが施されている。口縁部と胴部の境目の屈曲部や胴部には、指押さえが並ぶ。

558は口縁部が外傾する甕B類の口縁部から胴部中部の資料である。口径25.0cmを測る。遺構の北西側で検出面から出土している。外面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部は斜め方向の工具ナデが施されている。胴部上位は横方向の工具ナデが施された後に、部分的に横方向のミガキが施されている。胴部中部は斜め・縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが施されている。口縁部上半は斜め方向の工具ナデが、口縁部下半から胴部にかけては横方向の工具ナデが施されている。口縁部と突帯内面付近では工具ナデの上から部分的に横方向のミガキが施されている。胴部中部では横方向の工具ナデの上から縦方向の工具ナデが施されている。

559は口縁部が外傾する甕C類の口縁部から胴部上端の資料である。遺構の北西側で検出面から出土しており、558と隣接し同じような出土状況を呈している。口縁部の内外面にかけて粘土を貼り付け、部分的に肥厚させており、粘土を貼り付けた部分には不明瞭な痕跡が残る。外面口縁部は横・斜め方向の工具ナデと、縦・横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されており、場所による器面調整の違いが激しい。胴部上端は横方向の工具ナデが、胴部は縦・斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。内面口縁部上端は横方向のスジ状の痕跡がはっきりした工具ナデが1条施されている。口縁部から胴部にかけては単位幅が不明瞭な横方向の工具ナデが非常に丁寧に施されている。粘土を貼り付けた部分は器面調整がやや希薄である。

560は口縁部が外傾する甕C類の口縁部から胴部上端の資料である。遺構の中心部付近で、貼床面から10～20cm程度浮いた状態で出土している。内外面ともに横・斜め方向の工具ナデが施されている。

561は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部中部の資料である。口径28.8cmを測る。外面口縁部は横方向の工具ナデを施した後に、斜め方向の工具ナデを施している。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は縦方向のハケ目が施されている。内面口縁部から胴部上端にかけては、横方向の工具ナデが、胴部は縦方向の工具ナデが施されている。

562は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部中部の資料である。口径28.2cmを測る。遺構の中心部付近で、貼床面より20cm程度浮いた状態で検出面で出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデを施した後に、斜

め・縦方向の順番で工具ナデを施し、最後に口縁部下端に横方向の工具ナデを1条施している。胴部は斜め・縦方向の工具ナデが施されており、調整は下位に行くほど薄くなる。内面は横・斜め方向の工具ナデが施されている。

563は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部中部の資料である。口径30.0cmを測る。外面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半から胴部にかけては、器面の凹凸の激しい斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は幅4～5mm程度の斜め・横方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上端は横方向の工具ナデが、口縁部は幅3～5mm程度の横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部は斜め方向の工具ナデを施した後に、幅4～5mm程度の縦方向の工具ナデを施しており、一部は口縁部まで及ぶ。

564は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部中部までの資料である。口径25.6cmを測る。外面口縁部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。胴部は斜め・横方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半から胴部上位にかけては、横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。胴部中部には単位幅が不明瞭な縦方向の工具ナデと、その下位に縦方向の工具ナデが施されている。内面には粘土帯の後継合が多く残り、その上下には指押さえが並ぶ。

565は甕の胴部から脚部の資料である。

566は甕の胴部下位から脚部の資料である。底径9.2cm、脚部高1.8cmを測る。外面胴部は横方向の工具ナデが、胴部と脚部の境目は縦方向の工具ナデが施されている。胴部には指ナデが並ぶ。脚部は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、斜め・横方向の工具ナデを施している。内面胴部は斜め方向の長さの短い工具ナデを施している。脚部内面は横方向の工具ナデが施されている。脚部内面には指ナデが巡る。

567は甕の脚部資料である。底径9.0cm、脚部高2.3cmを測る。外面胴部下端は斜め方向の工具ナデが施されている。胴部と脚部の境目には横方向の工具ナデが施されている。脚部は斜め方向の工具ナデを施した後に、下端に横方向の工具ナデを施している。内面胴部底面はミガキが施されている。脚部内面は横方向の工具ナデが施されている。

568は甕の胴部下位から脚部の資料である。底径6.8cmを測る。遺構の東壁付近で、貼床面から30cm程度浮いた状態で出土している。外面胴部は斜め・横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデを施した後に、斜め方向の工具ナデが施されている。脚部には指押さえが行われている。内面胴部は斜め方向の工具ナデが施されている。

569 は壺の口縁部から頸部の資料である。口径 15.3cm を測る。外面は横方向の工具ナデを施した後に、部分的に横方向のミガキを施している。内面は横・斜め方向のミガキが施されており、ごく一部に工具ナデが確認できる。

570 は壺の胴部下位から底部の資料である。底径 4.1cm を測る。底部は粘土を貼り付けて肥厚させており、底部中央には直径 1.4cm 程度の円形の凹みを丁寧に成形している。遺構の東側で貼床面から 8cm 程度浮いた状態で出土している。外面胴部は斜め方向の長さの短い工具ナデが、脚部は横方向の工具ナデが施されている。内面は斜め・横方向の工具ナデが施されている。

571 は高坏の坏部資料である。口径 24.5cm を測る。遺構の北側から西側にかけて、また張り出し部分において、大部分が検出面や検出面直下で出土している。外面坏部上位は横方向の工具ナデを施している。坏部中位は横・斜め方向の工具ナデが施されており、部分的には坏部上位に及ぶ。坏部下位は横・斜め方向のミガキが施されている。脚部には縦方向の工具ナデが施されている。内面坏部上端には横方向の工具ナデが施されている。坏部中位には横方向のミガキを施した後に、斜め・縦方向のミガキが施され、一部は口縁部上端に及ぶ。坏部下位から底面にかけては、縦方向のミガキが施されている。

572 は高坏の脚部資料である。底径 15.6cm を測る。遺構の南東壁付近で検出面から出土している。外面脚柱部は幅 6mm 程度の縦方向のミガキが、脚裾部では幅 2～3mm 程度の斜め方向のミガキが施されている。脚柱部内面上位から中位にかけては、横・斜め方向の工具ナデが、脚柱部下位は縦方向の工具ナデが施されている。脚裾部内面上位は横方向のミガキが、中位から下位にかけては斜め・横方向の工具ナデが施されている。

573 は高坏の脚部資料である。遺構埋土中一括取上げ遺物である。外面脚柱部幅 4～6mm 程度の縦方向のミガキに類似した工具ナデが、脚柱部下端には横方向の工具ナデが施されている。脚裾部は幅 4mm 程度の縦方向のミガキに類似した工具ナデが施されている。幅の細い工具ナデはミガキによく似るが光沢を持たない。内面脚柱部上半は縦方向の工具ナデが、下半は横方向の工具ナデが施されている。

574 は完形に復元できた埴である。口径 9.4cm、器高 14.1cm を測る。遺構の北側から張り出し部にかけて広い範囲で出土しており、張り出し部手前の凹み部分で貼床面から 5cm 程度浮いた状態で出土しているほか、検出面からも出土している。貼床面からの距離が近いので、竪穴建物跡 55 号に帰属する可能性も考えられる。外面口縁部上端は横方向のミガキが施されている。胴部は縦方向のミガキを施した後に、胴部下半には斜め方向のミガキを施している。胴部下端には 2本の横位沈線文で上下

を区画した中に、斜位沈線文の組み合わせにより縞歯文が施されている。さらに文様の範囲には赤色顔料を塗布している。底部は横方向のミガキが施されている。内面口縁部から胴部中位にかけては横方向のミガキが施されている。胴部下位は指ナデが施されており、指押さえが巡る。底面には横方向の工具ナデが施されている。

575 は埴の口縁部資料である。口径 9.3cm を測る。遺構埋土中一括取上げ資料である。外面口縁部は横方向の工具ナデを施した後に、口縁部中位から下位にかけては、縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上端は横方向のミガキが、口縁部は横方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが施されている。

576 は埴の胴部から底部の資料である。遺構の中央部から東側にかけて、貼床面より 10cm 程度浮いた状態や検出面直下から出土している。外面胴部上位は横方向の丁寧な工具ナデが、胴部中位から底部にかけては、縦方向の丁寧な工具ナデが施されており、胴部下位では部分的に縦方向のミガキが施されている。内面口縁部から胴部上位にかけては横方向のミガキが施されている。胴部中位は横方向の丁寧な工具ナデが、下位は縦方向の工具ナデが施されている。

石器(第 2—222 図)

石器は棒状礫が 6 点出土している。そのうち 1 点が貼床面から出土している。石 129～石 134 は棒状礫である。

石 129 は遺構の東壁付近で貼床面から出土している。

石 130 は遺構中心部付近と張り出し部手前にある凹みの北東側で、貼床面より 20cm 程度浮いた状態と検出面から出土している。

石 131 は遺構の北西壁付近で貼床面より 30cm 程度浮いた状態で出土している。

石 132 は遺構の東側で検出面直下から出土している。

石 133 は遺構の西側で検出面から出土している。

石 134 は遺構の中心部付近で貼床面より 20cm 程度浮いた状態で出土している。

炭化材(第 3 分冊自然科学分析参照)

竪穴建物跡 55 号では 2 点の炭化物を遺物として取り上げている。その中から竪穴建物跡 55 号に帰属する可能性が高い貼床面出土炭化物を抽出し検討を行い、1 点の炭化物について放射性炭素年代測定(AMS 測定)を実施した。分析の結果、確率の高い 2 σ 暦年代範囲で 132calAD-258calAD (83.1%) となった。およそ 2 世紀前半～3 世紀中頃の値である。

竪穴建物跡 56 号(円形竪穴建物跡 7 号 第 2—223 図)

竪穴建物跡 56 号は D・E26・27 区 Va 層で検出した。南西部を後世の土坑に切られているが、やや歪ながら直径約 4.2 m の円形を呈する。上面が削平を受けており残存状況は悪いが、中央部に焼土が検出されており、炉跡

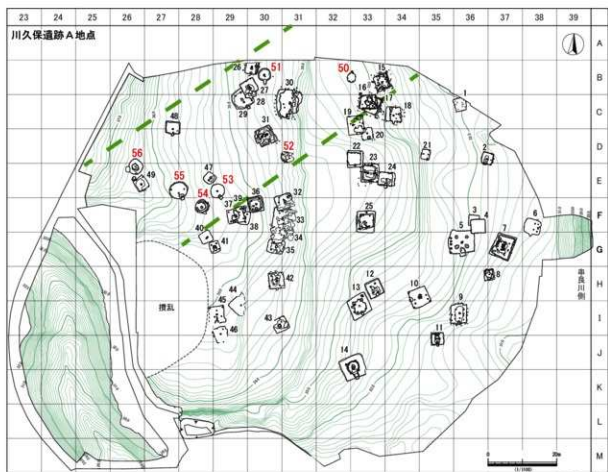
と考えられる。この中央部分は貼床面を持たないが、中央部の周囲は掘り込みがあり、貼床面を形成していると考えられる。検出面から底面までの深さは中央部で約2 cmである。周囲の掘り込み部分で検出面から底面までの深さは約10 cmで、底面から8 cm程の厚さで貼床面が形成されている。硬化面は埴土の南東部に一部検出されている。柱穴は遺構内に2基検出されている。P1は中央部の貼床が無い部分の南端部に、P2は南東部の壁際で検出されている。

出土遺物(第2-224図)

かろうじて中央部の底面や、周囲の貼床面、さらに硬化面が残存しているが、遺構上面に削平を受けているため、遺物の残存状況は悪い。特に炉跡周辺の中央部から西側にかけては、遺物はほとんど出土しておらず、東側にやや遺物が集中する程度である。

石器(第2-225図)

石135は砥石である。遺構の東側壁面に近い位置で、底面から出土している。

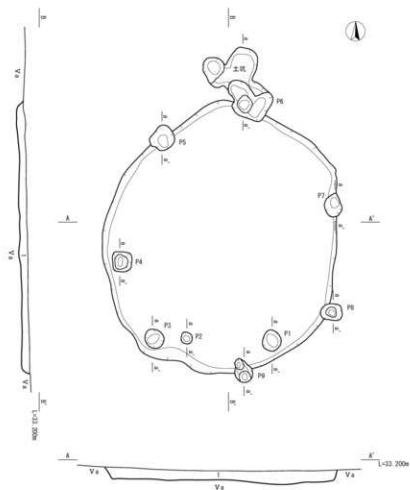


第2-202図 円形竪穴建物跡群

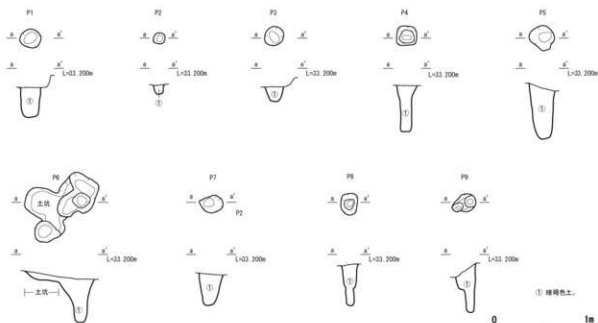
Va層コンタ図

表2-90 川久保遺跡A地点古墳時代竪穴建物跡一覧4 円形竪穴建物跡

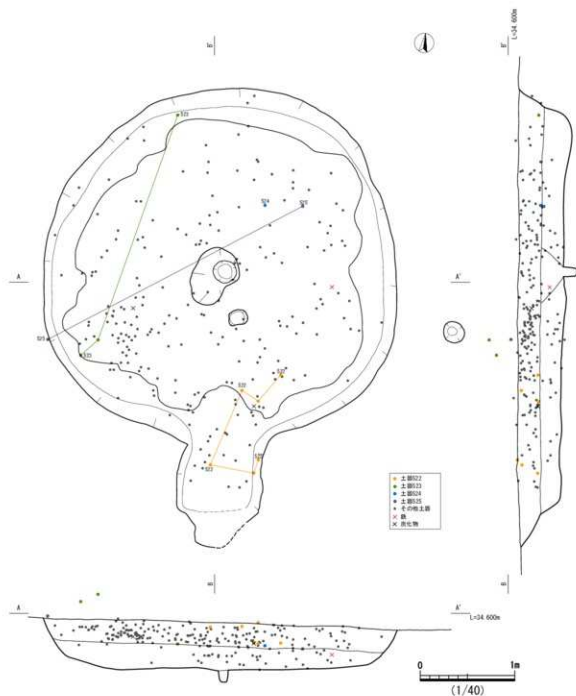
図 番号	遺構 番号	区	検出層	形状	大きさ (m)		長軸の 向き	陥没	砂 埴土	硬化面	張り 出し	調査時 遺構番号	備考
					長軸	短軸							
2-203	50	E32-33	Va	横円形	2.9	2.5	南-北	なし	なし	なし	なし	SH28	
2-204	51	R30	Va	円形	直径3.7		南-北	○	なし	○	○	SH2	
2-207	52	B01	Va	横円形	直径3.2		—	○	なし	○	不明	SH6	
2-209	53	E29	Va	円形	直径4.1		北西- 南東	○	なし	△	○	SH6	
2-215	54	F28	Va	円形	直径3.9		北北西- 南南東	○	○	○	○	SH2	
2-216	55	E27-28	Va	横円形	5.3	5.0	東-西	○	○	○	○	SH5	
2-223	56	NE26-27	Va	円形	直径4.2		—	○	○	○	なし	SH9	



① 褐色土。アカのや火山灰土を多く含む。



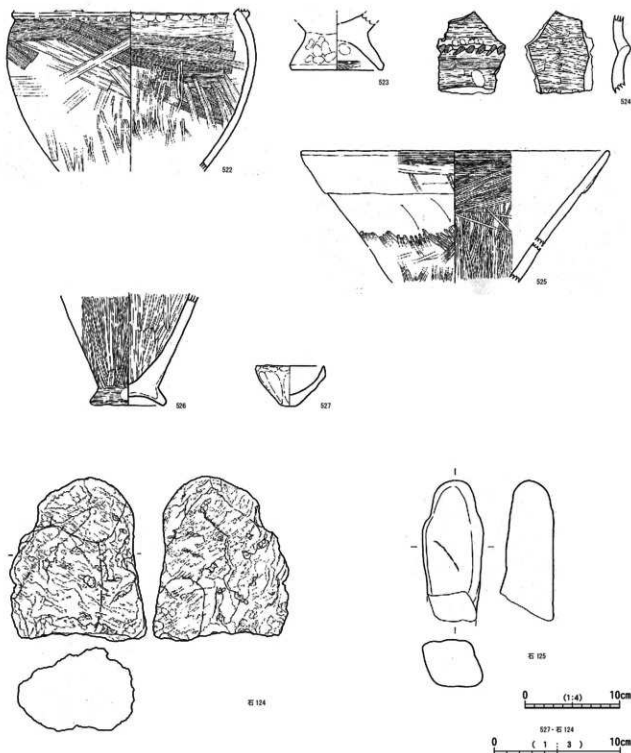
第2-203図 竪穴建物跡50号(円形竪穴建物跡1号)



第2-205図 竪穴建物跡51号(円形竪穴建物跡2号) 遺物出土状況

表2-91 竪穴建物跡51号出土土器

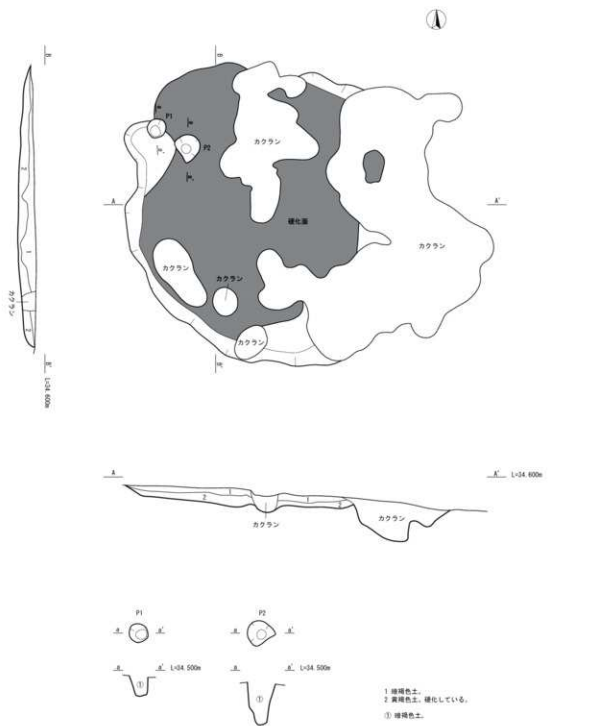
図番号	遺物番号	床面	器種	部位(欠損部位)	分類	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	色調	粘土	備考
2 1 206	S22	○	甕	胴部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ミガキ	外・橙 内・橙	石・白・黒・小	
	S23	○	甕	胴部	—	—	—	9.5	工具ナデ	工具ナデ	外・にぶい・橙 内・にぶい・橙	石・白	
	S24	○	壺	臼縁部-胴部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外・浅黄橙 内・浅黄橙	石・白・黒	
	S25	○	鉢	臼縁部-胴部	—	—	32.6	—	工具ナデ ナデ	ハケ目 ミガキ	外・にぶい・橙 内・にぶい・橙	石・白・黒・小	
	S26		甕	胴部-胴部	—	—	—	7.2	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外・橙 内・橙	白・小	胴部高:1.0cm
	S27		手づくれ	完形	—	3.1	5.3	1.1	指ナデ	ナデ	外・にぶい・黄橙 内・にぶい・黄橙	長・黒・ 短・白	



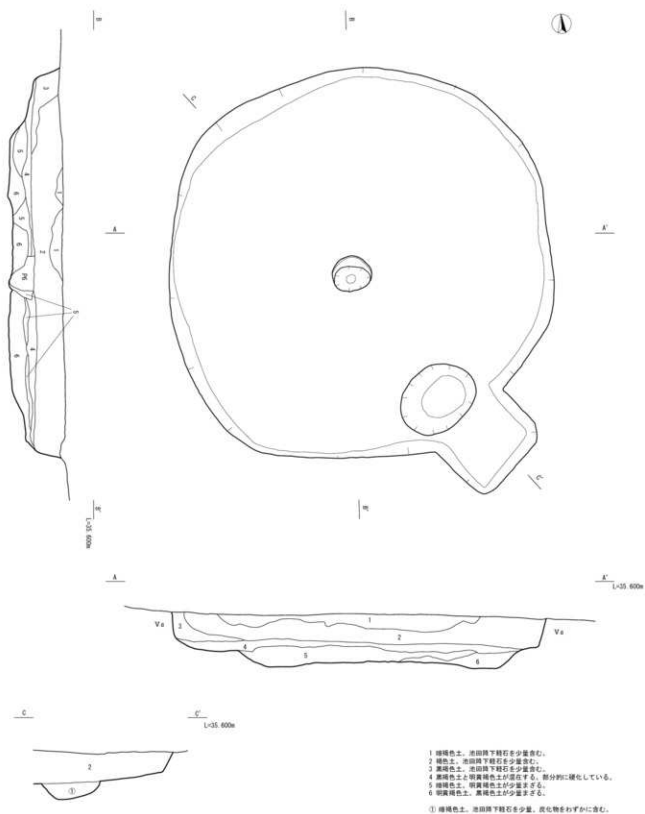
第2-206 図 竪穴建物跡51号(円形竪穴建物跡2号) 出土遺物(土器・石器)

表2-92 竪穴建物跡51号出土石器

図番号	遺物番号	床面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2-206	石124		軽石製品	完形	12.9	10.2	6.4	210.0	軽石	
	石125		棒状礫	破損	(14.9)	6.4	5.7	(706.0)	砂岩	

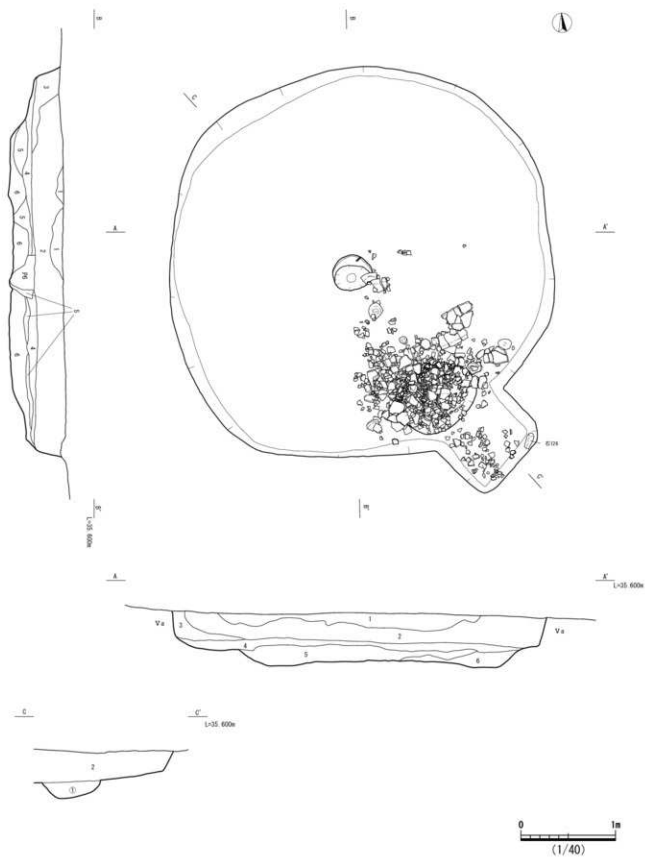


第2-207図 竪穴建物跡52号(円形竪穴建物跡3号)

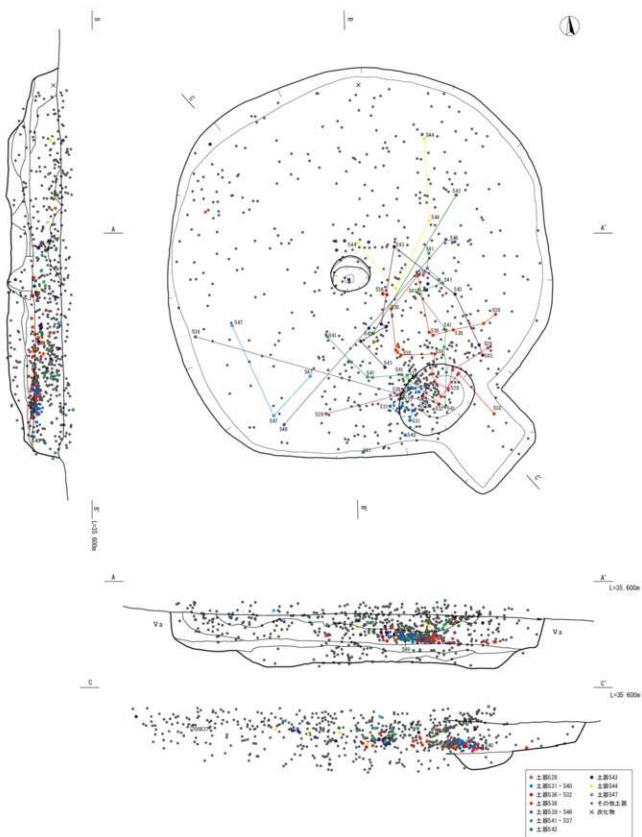


第2-209図 竪穴建物跡53号(円形竪穴建物跡4号)

0 1m
(1/40)

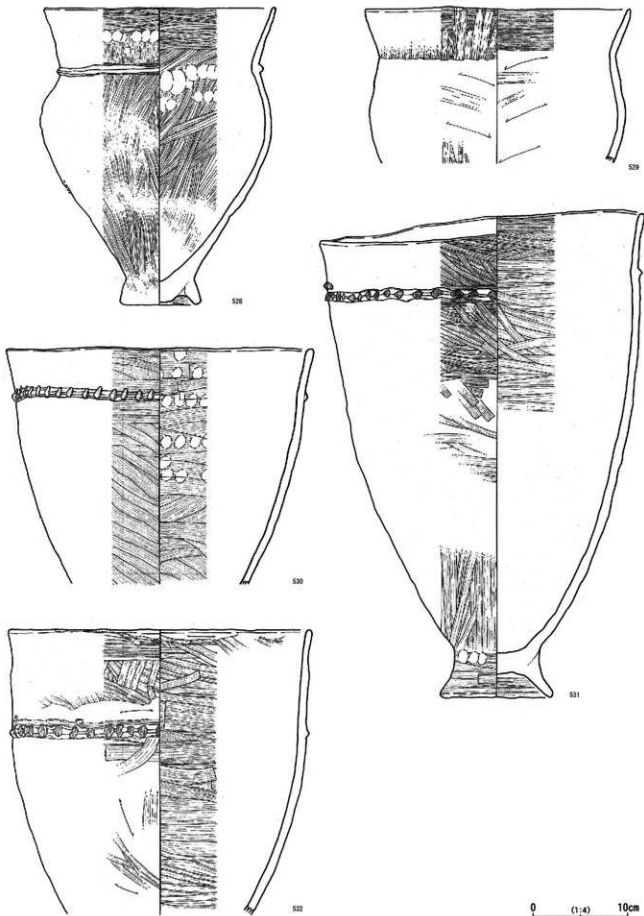


第 2-210 圖 竖穴建物跡 53 号 (円形竖穴建物跡 4 号) 土器集中出土状況

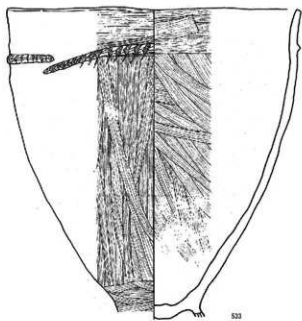


第 2-211 図 竪穴建物跡53号(円形竪穴建物跡 4号) 遺物出土状況

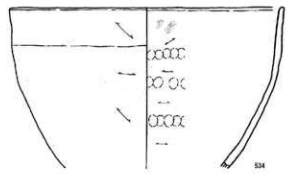
(1/40)



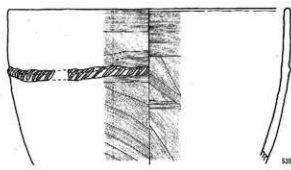
第2-212 圖 竪穴建物跡 53 号 (円形竪穴建物跡 4 号) 出土遺物 (土器①)



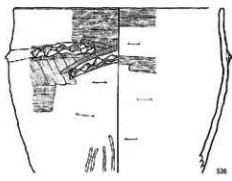
533



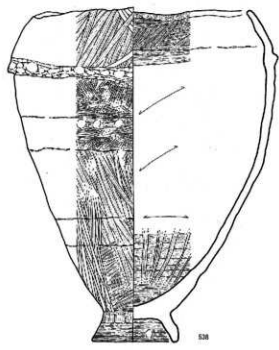
534



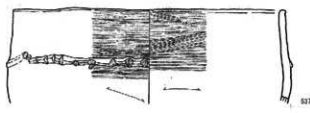
535



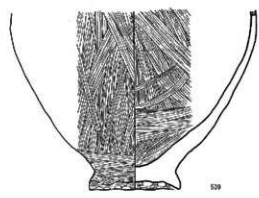
536



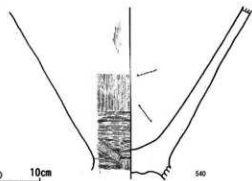
538



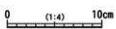
537



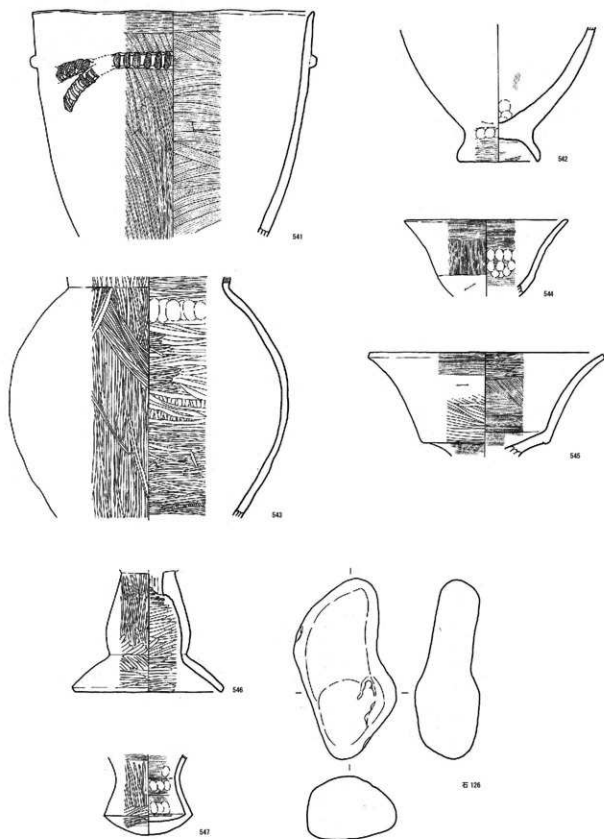
539



540

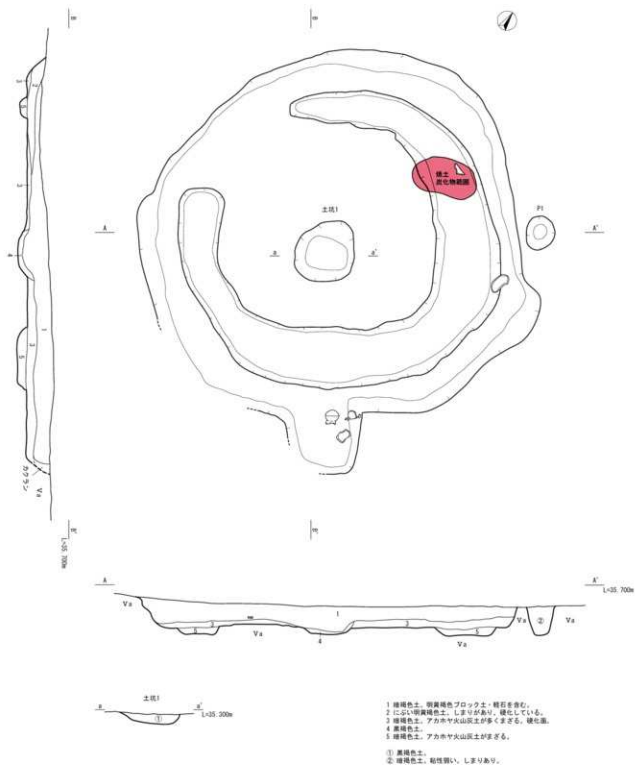


第2-213圖 竪穴建物跡53号(円形竪穴建物跡4号)出土遺物(土器②)

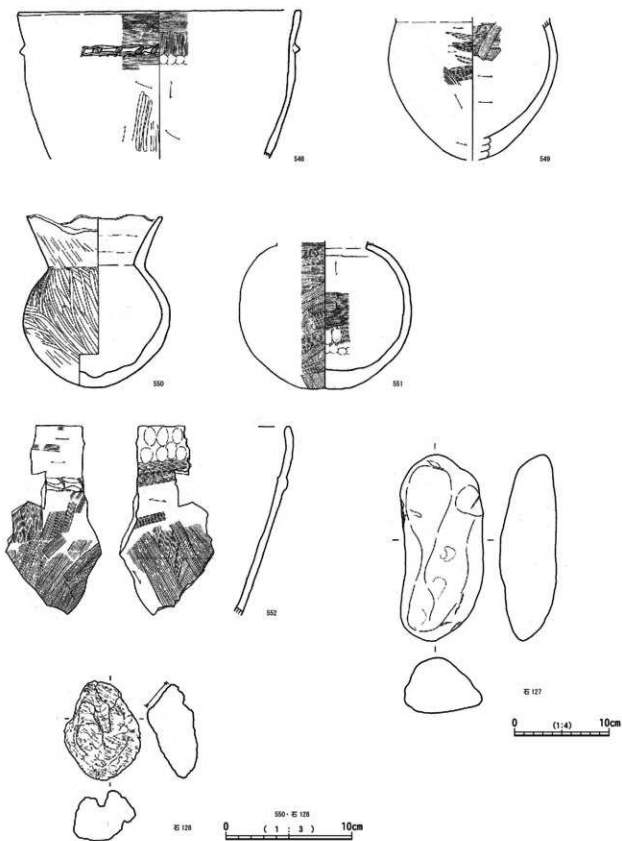


第2-214 圖 竪穴建物跡 53 号 (円形竪穴建物跡 4 号) 出土遺物 (土器・石器)

0 (1:4) 10cm



第2-215図 竪穴建物跡54号(円形竪穴建物跡5号)



第2-217圖 竪穴建物跡54号(円形竪穴建物跡5号) 出土遺物(土器・石器)

表2-93 竪穴建物跡53号出土土器

図番号	遺物番号	床面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2- 212	528	○	甕	完形	—	31.4	24.2	7.7	工具ナデ	工具ナデ	外:緑 内:緑	石・黒・白・ 黒・小	器部高:0.3cm
	529	○	甕	口縁部-胴部	—	—	27.8	—	ハケ目 工具ナデ	ハケ目 工具ナデ	外:緑 内:緑	石・黒・小	
	530	○	甕	口縁部-胴部	C	—	32.0	—	工具ナデ	工具ナデ	外:緑 内:緑	長・白・黒・ 小	
	531	○	甕	完形	C	51.0	34.4	11.5	ハケ目 工具ナデ	工具ナデ	外:二色(赤褐色) 内:二色(赤褐色)	白・黒・小	器部高:2.4cm
	532	○	甕	口縁部-胴部	C	—	32.4	—	ハケ目 工具ナデ	工具ナデ	外:二色(赤褐色) 内:二色(赤褐色)	黒・雲・黒・ 小	
2- 213	533	○	甕	口縁部-胴部	C	—	30.2	—	工具ナデ	工具ナデ	外:明赤褐色 内:明赤褐色	石・黒・白・ 小	
	534	○	甕	口縁部-胴部	D	—	28.6	—	指ナデ	工具ナデ 指ナデ	外:二色(赤褐色) 内:二色(赤褐色)	石・長・小・ 黒	
	535	○	甕	口縁部-胴部	D	—	29.6	—	工具ナデ	工具ナデ	外:二色(赤褐色) 内:二色(赤褐色)	長・白・黒・ 小	540と同一個体の可能性
	536	○	甕	口縁部-胴部	C	—	21.9	—	工具ナデ・ナデ ミガキ	工具ナデ 指ナデ	外:緑 内:緑	石・白・黒・ 小	
	537	○	甕	口縁部-胴部	C	—	28.4	—	工具ナデ ハケ目	工具ナデ ハケ目	外:黄褐色 内:二色(赤褐色)	石・白・黒・ 小	
	538	○	甕	完形	D	35.4	23.0	8.5	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:明赤褐色 内:明赤褐色	石・白・黒・ 小	器部高:2.4cm
	539	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	9.5	工具ナデ	工具ナデ	外:緑 内:緑	石・長・白・ 小	器部高:0.6cm
	540	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	—	工具ナデ	ナデ	外:緑 内:二色(赤褐色)	長・白・黒・ 小	535と同一個体の可能性
2- 214	541	○	甕	口縁部-胴部	C	—	29.6	—	工具ナデ	工具ナデ	外:緑 内:緑	石・白・黒・ 小	
	542	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	8.2	工具ナデ	工具ナデ	外:黄褐色 内:黄褐色	石・白・黒・ 小	器部高:2.4cm
	543	○	甕	胴部-脚部	—	—	—	—	ミガキ	ミガキ	外:緑 内:緑	石・白・黒・ 小	
	544	○	高坏	坏部	—	—	16.9	—	工具ナデ ナデ	工具ナデ	外:緑 内:緑	石・長・白・ 黒	
	545	○	高坏	坏部	—	—	24.6	—	工具ナデ ミガキ	ミガキ 工具ナデ	外:緑 内:二色(赤褐色)	石・黒・小・ 黒	
	546	○	高坏	脚部	—	—	—	15.6	ミガキ	工具ナデ ミガキ	外:緑 内:緑	石・白・黒・ 小	
	547	○	埴	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ	外:緑 内:緑	石・白・小・ 黒	

表2-94 竪穴建物跡53号出土土器

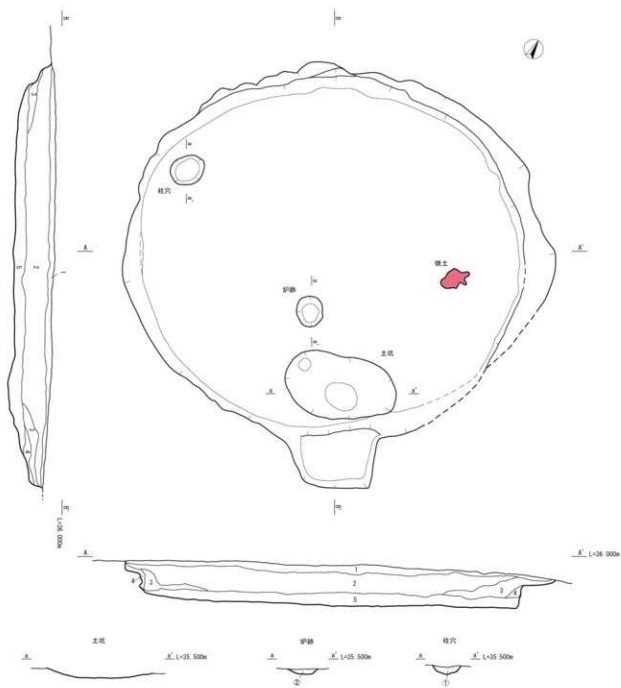
図番号	遺物番号	床面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2-214	石126		棒状鏡	棒状鏡	19.2	11.0	6.8	1360.0	砂岩	

表2-95 竪穴建物跡54号出土土器

図番号	遺物番号	床面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2- 217	548	○	甕	口縁部-胴部	B	—	29.6	—	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ナデ	外:緑褐色 内:明赤褐色	白・小	
	549	○	甕	胴部-底部	—	—	—	—	ナデ ミガキ	工具ナデ ナデ	外:二色(赤褐色) 内:二色(赤褐色)	石・白・小	
	550	○	甕	完形	—	13.6	10.4	—	ミガキ	ナデ	外:緑 内:明赤褐色	石・長・角	
	551	○	甕	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナデ	ナデ 工具ナデ	外:緑 内:緑	石・白・黒・ 小	
	552	○	甕	口縁部-胴部	D	—	—	—	指ナデ 工具ナデ	指ナデ 工具ナデ	外:明赤褐色 内:緑	石・白	

表2-96 竪穴建物跡54号出土土器

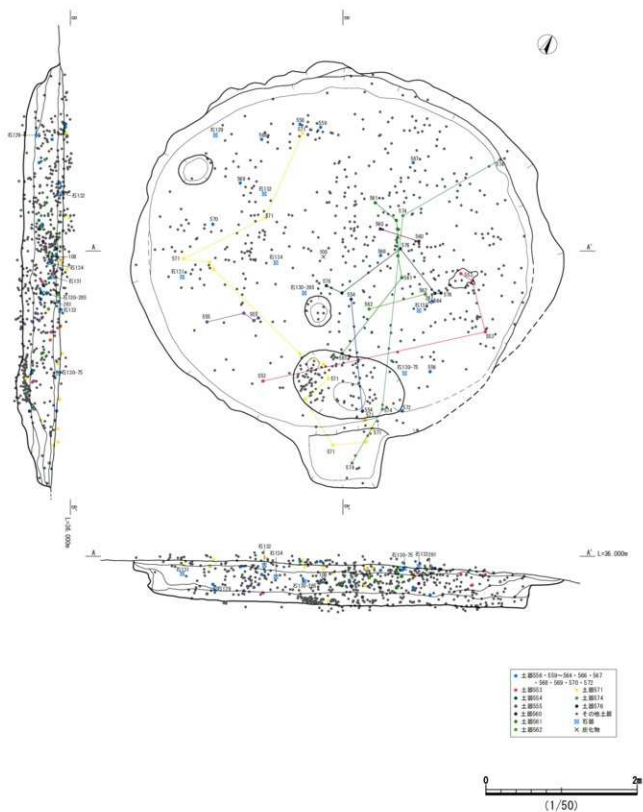
図番号	遺物番号	床面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2-217	石127	○	棒状鏡	完形	19.2	6.0	5.9	1390.0	ホルンフェルス	
	石128	○	棒石製品	完形	7.8	6.0	4.0	30.0	輝石	



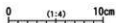
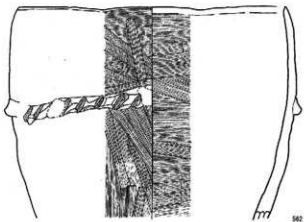
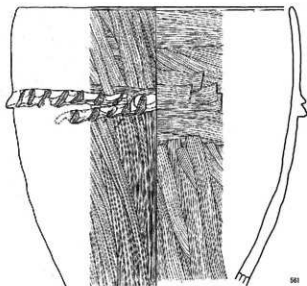
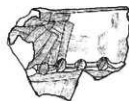
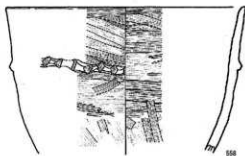
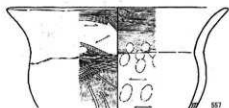
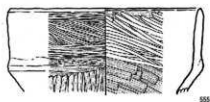
- 1 雑褐色土。
- 2 にごい黄褐色土。アカホヤ火山灰土をブロックで含む。
- 3 黄褐色土。
- 4 黄褐色土。雑褐色土ブロックを含む。
- 5 雑褐色土。アカホヤ火山灰土をブロックで少量含む。礫化層。
- ① 雑褐色土。
- ② 伊跡色土。

第 2-218 図 竪穴建物跡55号(円形竪穴建物跡 6号)

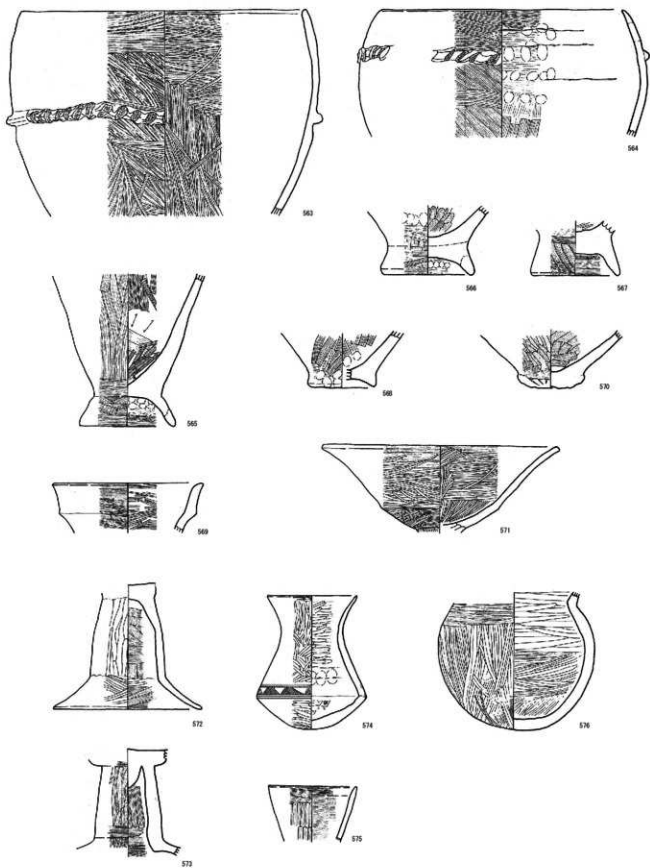
(1/50)



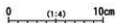
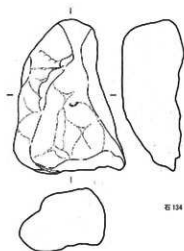
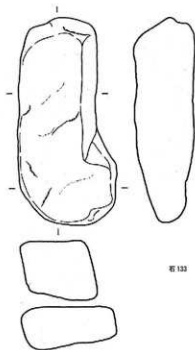
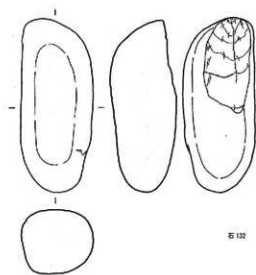
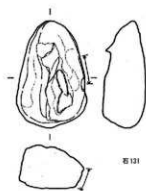
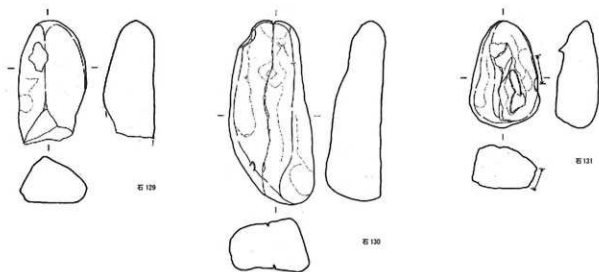
第2-219図 竪穴建物跡55号(円形竪穴建物跡6号) 遺物出土状況



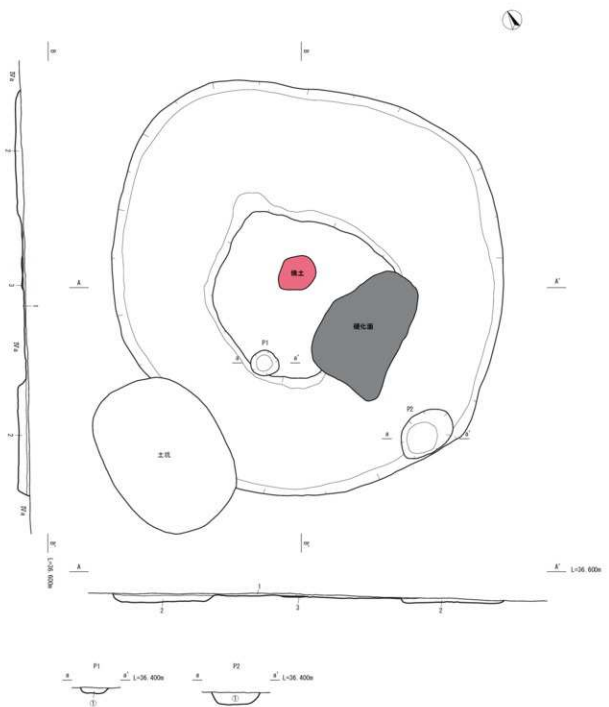
第2-220 圖 豎穴建物跡 55 号(円形豎穴建物跡6号) 出土遺物(土器①)



第2-221 圖 竪穴建物跡 55 号 (円形竪穴建物跡 6 号) 出土遺物 (土器②)



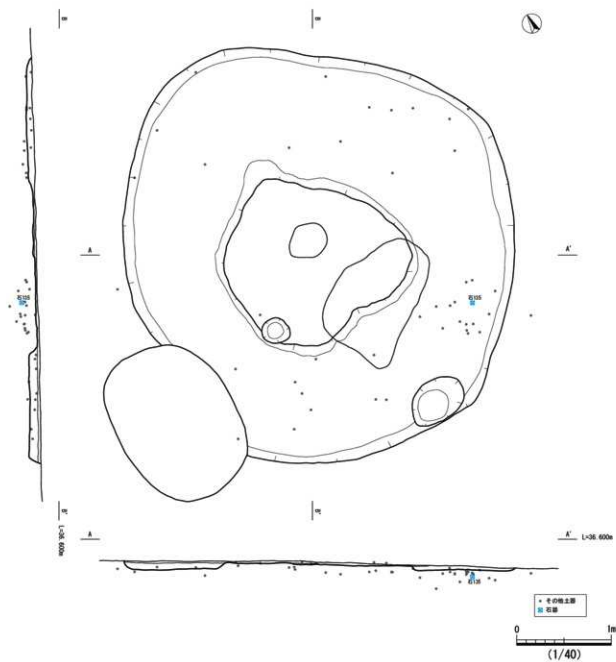
第2-222 図 竪穴建物跡 55 号 (円形竪穴建物跡 6号) 出土遺物 (石器)



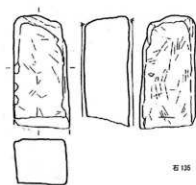
- 1 褐色土。アカホヤ火山灰土ブロックで築る。
 2 緑褐色土。
 3 赤土。
 ④ 緑褐色土。

第 2-223 図 竪穴建物跡 56 号 (円形竪穴建物跡 7 号)

0 1m
 (1/40)



第2-224図 竪穴建物跡56号（円形竪穴建物跡7号）遺物出土状況



第2-225図 竪穴建物跡56号（円形竪穴建物跡7号）出土遺物（石器）

表2-97 竪穴建物跡55号出土土器

図 番号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 220	553	○	甕	胴部-胴部	—	—	—	10.0	工具ナゾ ミガキ	工具ナゾ	外:にぶい・焼 内:にぶい・焼	石・白・小	胴部高:5.1
	554	○	甕	胴部-胴部	—	—	—	9.7	ミガキ	工具ナゾ	外:焼 内:にぶい・黄焼	石・長・白・ 小	胴部高:3.2
	555	○	甕	口縁部-胴部	—	—	20.1	—	ミガキ 工具ナゾ	工具ナゾ ミガキ	外:黄焼 内:黄焼	石・長・黄・ 黒・小	
	556	○	埴	口縁部	—	—	8.1	—	工具ナゾ ミガキ	工具ナゾ	外:にぶい・焼 内:焼	白・小・ ほか	赤色顔料塗布
	557		甕	口縁部-胴部	—	—	22.8	—	工具ナゾ 指ナゾ・ミガキ	工具ナゾ ナゾ	外:焼 内:焼	石・白・ 小	
	558		甕	口縁部-胴部	—	—	25.0	—	工具ナゾ ミガキ	工具ナゾ ミガキ	外:にぶい・焼 内:焼	白・黒・小	
	559		甕	口縁部-胴部	C	—	—	—	工具ナゾ	工具ナゾ	外:にぶい・焼 内:にぶい・黄焼	石・長・黒・ 小	
	560		甕	口縁部-胴部	C	—	—	—	工具ナゾ	工具ナゾ	外:灰緑 内:焼	石・白・小・ ほか	
	561		甕	口縁部-胴部	D	—	28.8	—	工具ナゾ ハケ目	工具ナゾ	外:にぶい・黄焼 内:にぶい・焼	白・黒・小	
	562		甕	口縁部-胴部	D	—	28.2	—	工具ナゾ	工具ナゾ	外:焼 内:焼	黒・ほか	
2 221	563		甕	口縁部-胴部	D	—	30.0	—	工具ナゾ	工具ナゾ	外:にぶい・焼 内:にぶい・焼	石・白・小	
	564		甕	口縁部-胴部	D	—	25.6	—	工具ナゾ	工具ナゾ	外:焼 内:にぶい・焼	白・小・ ほか	
	565		甕	胴部-胴部	—	16.1	—	11.4	工具ナゾ 指ナゾ	工具ナゾ	外:にぶい・黄焼 内:にぶい・黄焼	石・白・ ほか	
	566		甕	胴部-胴部	—	—	—	9.2	工具ナゾ	工具ナゾ	外:焼 内:焼	石・黒・黒・ 小	胴部高:1.8cm
	567		甕	胴部	—	—	—	9.0	工具ナゾ	ミガキ 工具ナゾ	外:にぶい・焼 内:焼	石・白・小	胴部高:2.3cm
	568		甕	胴部-胴部	—	—	—	6.8	工具ナゾ	工具ナゾ	外:にぶい・黄焼 内:にぶい・黄焼	石・黒・小	
	569		甕	口縁部-胴部	—	—	15.3	—	工具ナゾ ミガキ	工具ナゾ ミガキ	外:にぶい・黄焼 内:にぶい・黄焼	石・白・小	
	570		甕	胴部-底部	—	—	—	4.1	工具ナゾ	工具ナゾ	外:にぶい・焼 内:焼	石・長・白・ 小	
	571		高坏	坏部	—	—	24.5	—	工具ナゾ ミガキ	工具ナゾ ミガキ	外:焼 内:焼	石・長・白・ 黒・小	
	572		高坏	胴部	—	—	—	15.6	ミガキ	工具ナゾ ミガキ	外:焼 内:にぶい・黄焼	白・小	
	573		高坏	胴部	—	—	—	—	工具ナゾ	工具ナゾ	外:焼 内:焼	石・長・小・ ほか	
	574		埴	完形	—	14.1	9.4	—	ミガキ	ミガキ 工具ナゾ	外:焼 内:焼	石・小・白・ 焼	赤色顔料塗布・ 施文
	575		埴	口縁部	—	—	9.3	—	工具ナゾ	ミガキ 工具ナゾ	外:にぶい・焼 内:にぶい・焼	石・小	
	576		埴	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナゾ ミガキ	ミガキ 工具ナゾ	外:明赤焼 内:明赤焼	石・白・黒	

表2-98 竪穴建物跡55号出土石器

図 番号	遺物 番号	床 面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 222	石129	○	棒状鏝	破損	112.0	7.2	5.4	160.0	砂岩	
	石130		棒状鏝	完形	19.2	8.6	5.8	1450.0	ホルンフェルス	
	石131		棒状鏝	完形	11.3	7.5	4.5	550.0	安山岩	
	石132		棒状鏝	破損	18.4	7.7	7.0	1610.0	砂岩	
	石133		棒状鏝	完形	22.0	10.6	6.4	2206.0	ホルンフェルス	
	石134		棒状鏝	完形	16.0	11.5	6.6	1530.0	ホルンフェルス	

表2-99 竪穴建物跡56号出土石器

図 番号	遺物 番号	床 面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2-225	石135		破石	破損	(8.9)	4.5	3.6	278.0	砂岩	

(3) 竪穴状遺構(第2-226図)

竪穴状遺構とは、遺構の規模・遺構の形状・遺物の出土状況・大きく攪乱を受けていた等の理由により、調査段階で竪穴建物跡と認定し難かった遺構の一群である。

竪穴状遺構1号(第2-227図)

竪穴状遺構1号は調査区の東側調査区GH38区Va層で検出した。検出時は一辺約3mの隅丸形状の埋土が確認されたため、竪穴建物跡として調査をおこなったが、掘削すると周辺の竪穴建物跡と比較して掘り込みが浅く、床面が平坦ではなく、形状もやや歪であり、遺物もほとんど出土しなかった。以上のことから、他の竪穴建物跡とは性格が異なるため、竪穴状遺構として扱うこととした。遺構の南東側は複数の樹根の影響を大きく受けており、遺構境は不明である。貼床面は確認されておらず、土坑、焼土等も検出されていない。柱穴は複数検出されており、柱穴埋土は古墳時代の遺構埋土に見られる暗褐色土を主体としているが、どれも床面で検出されておらず、竪穴状遺構と柱穴の検出面は同じであり、竪穴状遺構との直接の関連性は不明である。遺物は流れ込みと考えられる土器小片のみが出土している。竪穴状遺構1の埋土中からは2cm大の鉄滓が1点出土しており、鍛冶滓である。重量は3.9gである。流れ込みと考えられる。

竪穴状遺構2号(第2-228図)

竪穴状遺構2号はCD34区Va層から検出した。大きさは長軸(南北軸)約4.1m、短軸(東西軸)約2.8mの長方形を呈するが、全体的に上部を大きく削平されており、特に東側は地形に沿って削平を受けており、埋土1が散在している状況であった。そのため、竪穴状遺構2号は、本来ならば東側に広がる遺構であったと考えられる。検出面から底面までの深さは、西側が最も深く約20cmであり、東側へ向けて徐々に浅くなる。焼土・炭化物範囲・硬化面等は確認されていない。柱穴は3基確認されているが、所属は明確ではない。以上のことから、竪穴建物跡としての認定は困難であった。遺物は出土していない。

竪穴状遺構3号(第2-229図)

竪穴状遺構3号はF34区北西部Va層から検出した。当初はシミ状の痕跡と認識され、ある程度掘り下げられた末に遺構と認定された。大きさは一辺が約2.8mの、南側がやや歪な隅丸形状を呈する。南側には古代の土坑が竪穴状遺構3号を切っている。検出面から底面までの深さは約15cmであり、北東部分が一段高く形成されている。遺構の北西角部に小型の土坑が1基検出されているが、遺物の出土等は見られなかった。焼土跡、炭化物

集中、硬化面、柱穴は検出されていない。遺物は全て遺構埋土中から出土している。

土器(第2-230図)

577～579はその出土状況から、竪穴状遺構4号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器である。

577は甕の口縁部資料である。口縁端部は破損している。外面は斜め方向の工具ナデを施した後に、横方向の工具ナデが施されている。内面は横方向の工具ナデが施されている。

578は甕の胴部から脚部の資料である。底径8.3cm、脚部高0.1cmを測る。外面胴部は斜め方向の単位幅が不明瞭な工具ナデが、脚部は横方向の工具ナデが施されている。内面胴部は縦方向の工具ナデが、脚部内面は丁寧な工具ナデが施されている。

579は壺の肩部から胴部の上位の資料である。外面肩部はミガキが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は斜め方向のミガキを施した後に、一部工具ナデを施している。内面は横方向の工具ナデが施されている。

竪穴状遺構4号(第2-231図)

竪穴状遺構4号はH32区から検出した。IVa層の人力掘削による調査終了後に、Va層上面で検出された。遺構は現代の耕作の影響を受け、東西方向に帯状に3カ所で攪乱を受けている。大きさは一辺が約2.8mの隅丸正方形形状を呈するが、東側にやや張り出す部分が見られる。検出面から底面までの深さは約25cmである。東側角部に一段高まりを持ち、同じく東側の張り出し部はやや凹む。焼土跡、炭化物集中、硬化面、柱穴等は検出されていない。遺物は検出面で土器が集中して出土しているが、検出状況から見て流れ込みであると考えられる。また、底面から少し浮いた状態で鉄製品が1点出土している。

土器(第2-232図)

580～584はその出土状況から、竪穴状遺構4号廃絶後に廃棄、もしくは流れ込んだ可能性の高い土器である。

580は口縁部が直行する甕C類の口縁部から胴部上位の資料である。口径20.0cmを測る。外面口縁部は幅3～5mm程度の横方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は横・縦方向の工具ナデを施した後に、部分的に幅3～4mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。内面は横方向の工具ナデを施した後に、胴部では縦方向のミガキが部分的に施されている。

581は口縁部が内湾する甕D類の口縁部から胴部上位の資料である。口径22.8cmを測る。外面口縁部は単位幅

が不明瞭な斜め方向の工具ナデが施されている。胴部上端は横方向の工具ナデが施されている。胴部は斜め方向の工具ナデを施した後に、部分的に斜め方向のミガキが施されている。内面口縁部から胴部上位にかけては、横方向の工具ナデを施した後に、口縁部上端では斜め方向の工具ナデが施されている。胴部は斜め・縦方向の工具ナデが施されている。突帯内面部分の下位には指押さえが並ぶ。

582は壺の頸部資料である。外面はミガキが、内面は斜め方向の工具ナデを施した後に、横・斜め方向のミガキが施されている。

583は鉢の底部資料である。底径5.2cmを測る。外面胴部は縦方向の工具ナデが、脚部は横方向の工具ナデが施されている。内面は斜め方向の工具ナデが施されている。

584は高坏の坏部資料である。口径20.3cmを測る。外面は横方向の工具ナデを施した後に、斜め方向のミガキを球に施している。内面坏部上位は横方向の工具ナデが、中位は斜め方向の工具ナデが施されている。

竪穴状遺構 5号 (第2-233図)

竪穴状遺構5号は調査区の北側際B30・31区から検出した。遺構の7割以上は調査区外へと延びていると考えられるが、その形状から円形を呈する可能性が高い。

竪穴状遺構 6号 (第2-234図)

竪穴状遺構6号はDE29区Va層から検出した。直径約2.0mの円形を呈する。貼床面を形成せず、傾斜する硬化面が底面まで広がる。遺構の中心部付近に焼土が検出されている。南側には深さ約35cmの土坑が底面から掘り込まれている。柱穴の可能性が考えられるピットも1基検出されている。

出土遺物 (第2-235図)

遺構の中心部付近に大型の礫と小型の礫がそれぞれ1点出土しているが、流れ込みである。遺構埋土中からは目視で分かる程度にベンガラが多く出土し、同じように炭化物が出土している。

炭化種実 (第3分冊自然科学分析参照)

竪穴状遺構6号には赤色顔料が集中して出土した箇所があり、その埋土の洗い出しを行ったところ、炭化種実として、コナラ属が検出された。

竪穴状遺構 7号 (第2-236・237図)

竪穴状遺構8号は串良川へ下る斜面から30mほど内側に入ったEF35区Va層から検出した。大きさは直径6.8m～7.4mのややいびつな円形を呈する。検出時はその形状から、花卉型建物を想定して調査を行ったが、結果的には大型の円形建物跡となった。床面は平坦では

なく、中心部へ向かい緩やかに傾斜するすり鉢の形状であり、貼床面は形成せず、埋土はレンズ状堆積を呈している。遺構の北東際部から中心部に向かい、わずかに凹む範囲が溝状に確認できるが、用途は不明である。遺物はほとんど出土していないが、東側の床面に掘られた土坑内から、ほぼ完形の鉢が1点出土している。この土器が出土した土坑は、埋土の違いから建物跡使用時は埋められていたと考えられる。

出土遺物 (第2-238図)

遺物は流れ込みと考えられる土器小片が多い。

土器 (第2-239図)

585は完形に復てきた鉢である。口径29.0cm、器高17.1cmを測る。土坑から底面から出土している。外面口縁部は横方向の工具ナデが、胴部上半は縦方向の工具ナデが、胴部下半から底部は横方向の工具ナデが施されている。内面口縁部から胴部上位は横方向の工具ナデが、胴部中位は縦方向の工具ナデが胴部下位は横方向の工具ナデが、底部は縦方向の工具ナデが施されている。

586は埴の胴部から底部の資料である。遺構埋土中一括取上げ資料である。外面は幅3～4mm程度の縦・横方向の工具ナデが施されている。内面は縦・横方向の工具ナデが施されている。

鉄滓 (第2-239図)

竪穴状遺構7号からは6点の鉄滓が出土しており、いずれも椀形滓やスラグといった鍛冶滓である。総重量は60.9gを量る。そのうち2点を図化した。出土した鉄滓は全て流れ込みと考えられる。

滓22・滓23はともに椀形滓である。

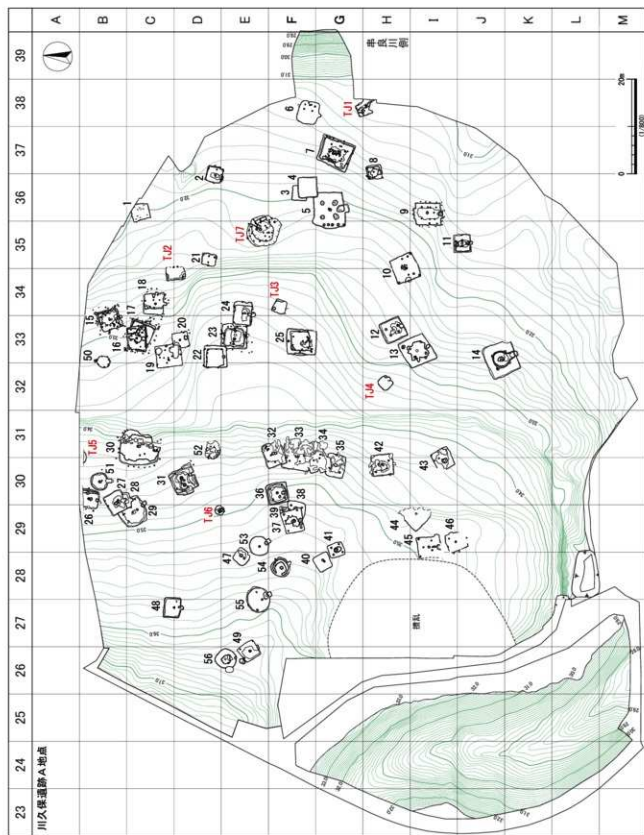
滓22は鉄塊が多く付着し下面にまで達しており、小片のわりに重量感がある。椀形滓の底部付近と考えられる。

滓23は椀形滓の上部部分である。厚みは7mm程度でスラグで構成されている。

装飾品 (第2-239図)

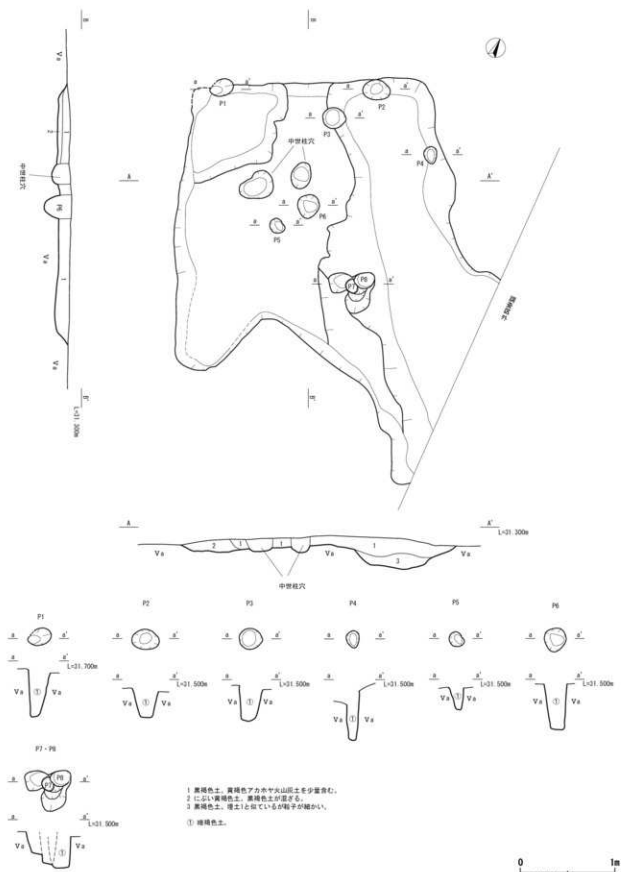
竪穴状遺構7号からは管玉が1点出土している。遺構埋土中出土であり、流れ込みと考えられる。

装11は長さ1.5cm、幅0.45cm、厚さ0.42cmを測り、重量は0.4gを量る。両端部が欠損している。

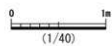


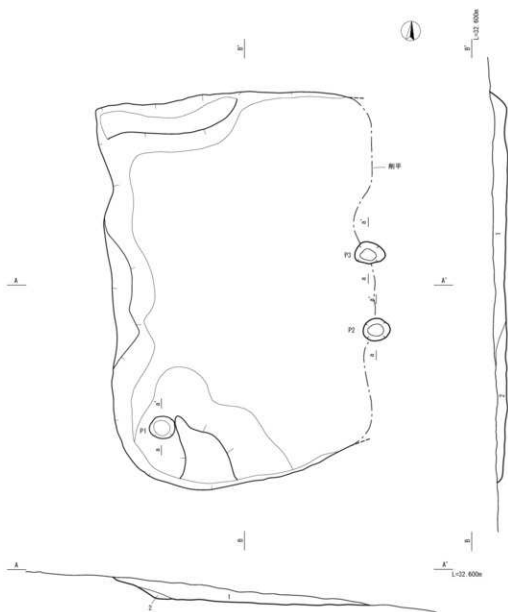
第2-276図 川久保遺跡A地点 竪穴状遺構

Va版コンテンツ図
T.1 竪穴状遺構

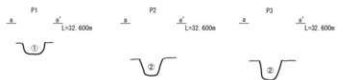


第2-227図 竪穴状遺構1号

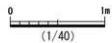




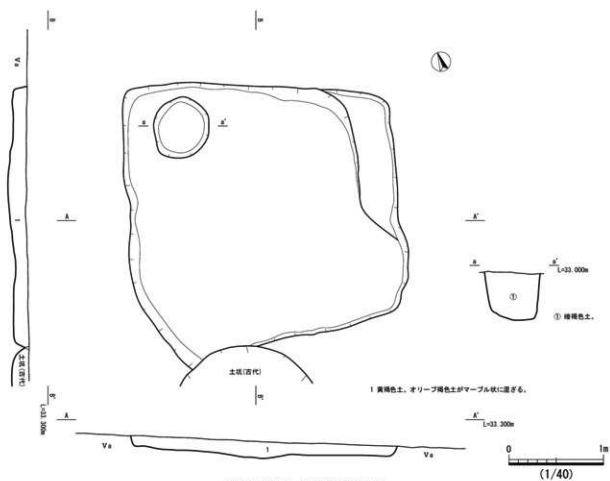
- 1 緑褐色砂質土、炭化物を多く含む。底部下軽石、アカホヤ火山灰土ブロックを含む。
 2 褐色砂質土、埋土より明らかに砂質が強い。



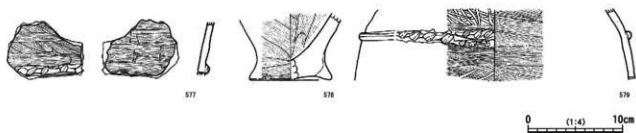
- ① 緑褐色砂質土。
 ② 褐色砂質土。



第2-228図 竪穴状遺構2号



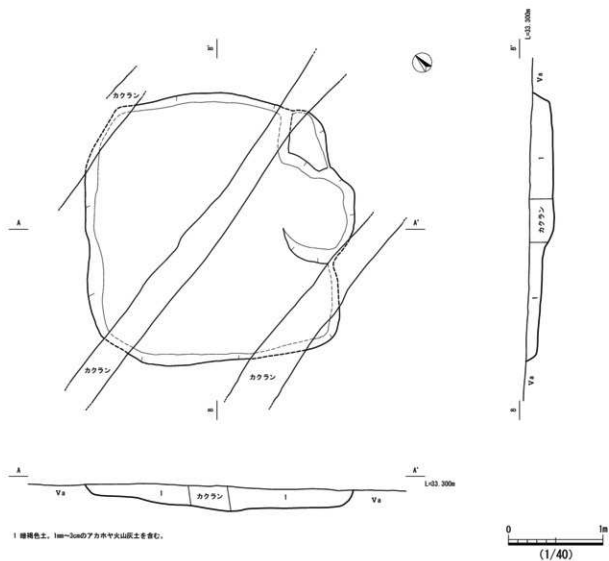
第2-229図 竪穴状遺構3号



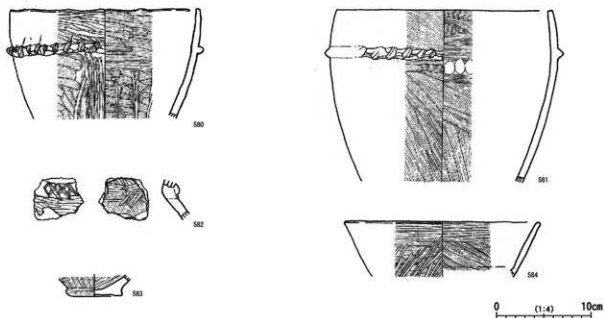
第2-230図 竪穴状遺構3号 出土遺物(土器)

表2-100 竪穴状遺構3号出土土器

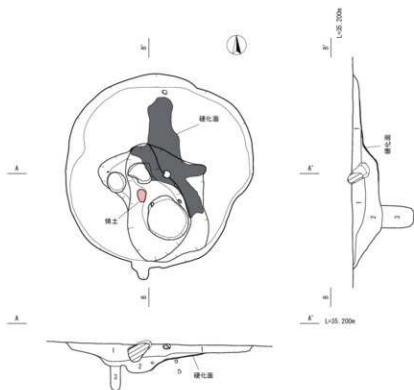
図 番号	遺物 番号	床 面	器種	部位 (穴状部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 230	577		甕	口縁部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外にぶい殻 内にぶい殻	石・白・黒・ 小	
	578		甕	胴部-脚部	—	—	8.3	—	工具ナデ	工具ナデ	外-殻 内-明赤釉	石・黒・白・ 挂か	胴部高:0.1cm
	579		甕	胴部-脚部	—	—	—	—	ミガキ 工具ナデ	工具ナデ	外にぶい黄緑 内にぶい殻	石・白・黒・ 小	



第2-231図 竪穴状遺構4号



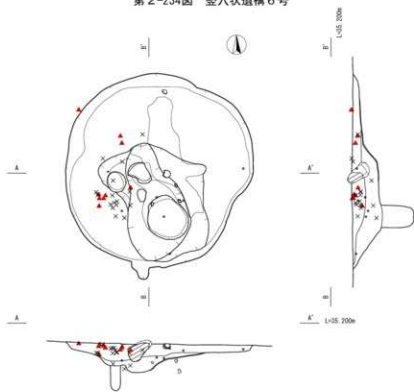
第2-232図 竪穴状遺構4号 出土遺物(土器)



- 1 黒褐色土、アカホヤ火山灰土をわずかに含む。
- 2 黒褐色土、アカホヤ火山灰土を少量含む。
- 3 黒褐色土、アカホヤ火山灰土をわずかに含む。

硬化層
黒褐色土と黒質褐色土の混り。

第2-234図 竪穴状遺構6号

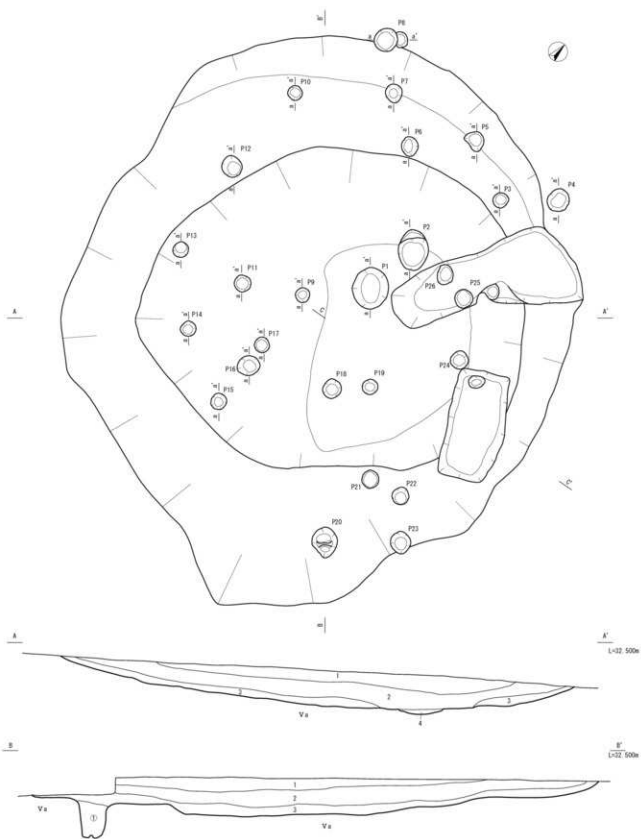


● その他土器
○ 貯蔵器
× 炭化物
▲ ペンガラ

0 1m

(1/40)

第2-235図 竪穴状遺構6号 遺物出土状況



- 1 灰黄褐色土、比較的硬くしる。
 2 黄粘土。
 3 橙灰黄褐色土。
 4 埋土中にアサギや火山灰土ブロックが混入している。

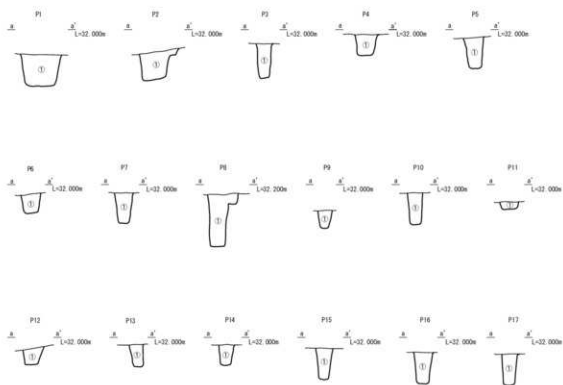
第2-236図 竪穴状遺構7号 平面・断面

(1/50)



C

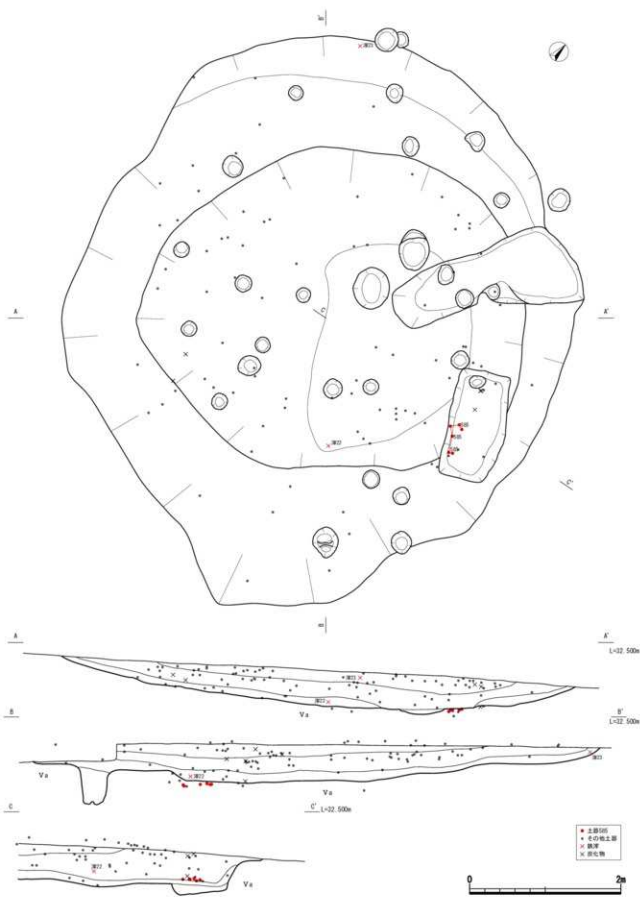
C' 1:32 500m



① 赤褐色土、粘性土に砂土を含有。

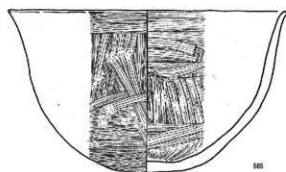


第2-237図 竪穴状遺構7号 断面

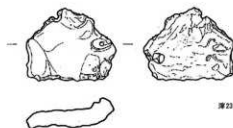
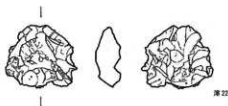


第2-238図 竖穴状遺構7号 遺物出土状況

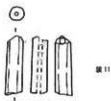
(1/50)



0 (1:4) 10cm



0 (1 : 2) 10cm



0 (1:1) 2cm

第2-239 图 竖穴状遺構7号 出土遺物(土器・鉄滓・裝飾品)

(4) 製鉄関連土坑(第2-240図)

川久保遺跡A地点の南西部には、北北西側から南南東側に向かって延びる谷部が存在する。幅は約25mであり、V字形上面での谷部の深さは5~6mである。古墳時代の地表はそれよりは幾分緩やかであり、谷部の深さは2.5~3m程度となる。その谷部の西側の斜面(J・K32区)から大量の鉄滓とともに4基の土坑と1条の溝状遺構が検出されている。

製鉄関連土坑1(第2-241・242図)

製鉄関連土坑1はK23区で検出された。歪な楕円形状を呈し、東西最大長約2m、南北最大長約1.8mを測る。東側では溝状遺構1と切り合っている。遺構は樹根部分を除くと、おおまかに北側の平坦部分、中央の東西に延びる溝状の部分南東側の平坦部分と樹根を挟み、南西側の凹みから構成されている。遺構の上部では、北側に黒色土の範囲が広がり、その南側に広く橙色の焼土が広がる。掘り下げると中央の溝状の部分からは、炭化物・炉壁・鉄滓が出土した。この遺物出土域の底面は、北側から炭化物と炉壁を主体とする黒色土、中央に真っ赤に焼けた焼土(赤色焼土)、南側に赤色焼土の西側に延びる粘土塊を含む橙色に焼けた焼土(橙色焼土)の、3つの東西に延びる帯で構成されている。底面では、この遺物出土域の南北の平坦部には焼土は広がらず、遺物の出土量も少ない。黒色土帯は長さ約80cm、幅15~20cm程度で東西に延び、多くの炭化物と炉壁、そして少量の鉄滓が出土している。炭化物が大量に帯状に出土しているのは、この黒色土帯のみである。赤色焼土帯は長さ約65cm、幅約20cmで東西に延び、東端部が最も狭い。ごく少量の炭化物・炉壁・鉄滓が出土している。赤色焼土の焼けた範囲の厚さは検出面から10cm程度である。橙色焼土帯は赤色焼土帯の南側に、長さ約60cm、幅約10cmで広がる。赤色焼土のように焼土が厚く堆積せず、表面のみが橙色化している。さらに焼土域としての広がりではないが、同じ色の焼土を含んだ埋土は西側や南西側の凹みまで広がっており、炉壁・粘土塊と少量の鉄塊・炭化物が出土している。

遺構検出面ではホルンフェルスの礫を複数検出したが、これらは遺構の底面から浮いた状態で出土しているため、製鉄関連土坑1との関係は不明である。

出土遺物(第2-243図)

製鉄関連土坑1では製鉄炉の炉壁、製鉄滓が出土した。

炉壁(第2-244~248図)

滓24・25、滓28~滓34は内面に1cm前後の厚いガラス質滓を付着した炉壁である。以下報告する炉壁片はすべて炉の外表、芯部を残していない。炉解体後、炉内から違い、彼らの弱い部分の強土は、溶けて土壌化したと考えられる。大型の炉壁片には全てスサの痕跡が認めら

れる。滓24は17個の破片が接合された炉壁であり、高さは28.0cm、幅30.3cmを測る。底面には地山の砂礫が付着しており、炉底から立ち上がる炉下部の破片であると判断される。炉底から立ち上がる約6cmの部分に縦8.0cm、横9.3cmの不成形の穴があり、穴の縁は炉内側に突き出ており、この部分に送風管が挿入されたものと考えられる。俯視するとこの炉壁は湾曲をみせることから、炉の平面形は円形、楕円形あるいは小判形に復元される。外面は炉底付近にはスサが少なく、上部に横方向、斜め方向に走るスサの痕跡が高い密度で観察されるため、耐火性あるいは強度を高めるために部位によって窯土の質を変えた可能性がある。滓25も炉底付近から立ち上がる部分の破片であるが、地山の砂礫は付着していない。滓28は横長の破片であり、長さ約32cm、幅約13cmである。直線的な破片であることから、滓24と併せて復元される炉の平面形は小判形に絞られる。滓29は縦に長い破片であり、部分的に大きく内側に湾曲している。これは炉内がまだ熱いうちに鉄塊を取り出すべく壊された際、内壁が溶融してアメ状であったために砕けずに湾曲したものと考えられる。滓30、32も変形の程度が著しく、同様の理由によるものと考えられる。

滓35~39は内面に厚さ5mm前後の薄いガラス質滓を付着した炉壁片である。被熱の弱さを示しており、その分土壌化した部分が多いため、全体的に薄い。滓24~31よりは上位に位置したと推定される炉壁片である。

製鉄滓(第2-245・249図)

滓26・27・42・43は炉の内側で生成された炉内滓であり、滓40・41は炉の外側に流れ出した流出滓である。滓26は破面が緻密で、金属質の輝きを呈する製鉄滓である。表面は赤錆を多く吹いているため、鉄分が多いことがわかり、裏面には地山の砂礫が付着している。滓42は内部がややポーラス(多孔質)で、表面が滑沢を呈し瘤状に盛り上がったっており、裏面には地山の砂礫が付着している。排滓孔に近い炉内部で生成した鉄滓である。滓27・43は炉内滓の小片である。滓40は前面に垂直方向の流動痕跡を残しており、砂礫の付着がない。いわゆる「鳥脚状鉄滓」であり、流動した製鉄滓がほぼ垂直に落ちるような段差が、排滓孔と炉前面との間にあったことを示している。滓41は表面に流動状態を残し、裏面に砂礫の付着があることから水平方向に流れた流出滓である。

製鉄関連土坑2(第2-250図)

製鉄関連土坑2はJ・K23区で検出された。複数の土坑が切り合ったような状況で検出されており、北東側の土坑では鉄滓・炉壁が集中して出土しており、周囲に焼土が広がる。鉄滓等の集中は最大30cm以上の厚さで堆積している。東側に隣接する土坑からは少量の炉壁・鉄滓や礫が出土しているが、南側に連なる土坑からは、ほとんど遺物は出土していない。

出土遺物(第2-251図)

製鉄関連土坑2では製鉄炉の炉壁、製錬滓が出土した。本遺構は保存・展示のために、遺構・遺物検出状況を切り取ったために、遺物の取り上げはわずかである。

炉壁(第2-252・253図)

滓44・45は内面に2～5mmの薄いガラス質滓を付着した炉壁である。滓48は1cm前後のガラス質滓を付着した炉壁である。外側に向けて湾曲しており、炉を破壊する際に力が加わって変形したものである。

製錬滓(第2-252・253図)

滓46・47・50は炉底で生成した製錬滓であり、裏面には地山の砂粒を付着している。滓46は10個の破片が接合されている。表面に赤錆が吹き出し、鉄分の多いことが分かり、また砂鉄の粒子が認められる。破面は緻密で、金属質の輝きを呈しており、観察できる気泡は細かい。滓47は4点の破片が接合されており、破片の一つは表皮を失い気泡がみえる。側面に見られる破面は小割面の可能性がある。滓50は下半部の表面に大きな気泡が認められ、流出滓と同じ滑沢面を呈している。上半部が炉内側、下半部が排滓孔にかかる位置で生成されたスラグであり、排滓孔を塞いだために、人為的に掻き出された鉄滓と考えられる。

滓49は炉外流出滓であり、破面にみられる気泡が小さいことから操作温度が比較的低い段階に生成された鉄滓であり、流動性も低かったと推測される。滓の単位が一定方向に流れていないため、排滓孔から出て間もなく人為的に掻き取られたものとみられる。

製鉄関連土坑3(第2-254図)

製鉄関連土坑3はK23区で、製鉄関連土坑1の南東側から検出した。埋土は3層で構成されており、埋土2は焼土が堆積しており、鉄製品1点・鉄片1点・炭化材2点のほか、炭化物が出土している。

鉄製品(第2-255図)

鉄12は有蓋式の三角形鏝である。長三角形の鏝身部は、ふくらのある鋒からナデ角間に入り、間部から茎端部に向けて細くなる。鏝身部の横断面形は、錆化のためにやや変形しているものの菱形とみられ、鏝を有していた可能性がある。全長10.1cm、鏝身部最大幅2.4cmを測る。

(鉄14・15・16は包含層遺物である。)

鉄14・15はいずれも鏝身部の下半を欠いており、有蓋式主頭鏝の鏝身部と考えられる。鉄14は主頭部から幅を減じ、鉄15は主頭の幅が鏝身幅となり、それぞれ平造り、鋳造りである。現存長、幅は鉄14が3.9cm、2.0cm、鉄15が3.5cm、2.1cmを測る。

鉄16は無蓋三角形鏝であり、鋒はややふくらをもつ。二つの小孔が穿たれており、それらの間に残る縦目の木質は矢筈あるいは根括みの痕跡である。現存長、幅は3.9cm、2.2cmを測る。

製鉄関連土坑4(第2-256図)

製鉄関連土坑4はJ・K24区で、製鉄関連土坑2の東側から検出した。

出土遺物(第2-256図)

製鉄関連土坑4では製鉄炉の炉壁、製錬滓、鉄塊が出土した。

炉壁(第2-257図)

滓51・52は内面に1cm程度のガラス質滓を付着した炉壁である。滓51は内面に直径約1cmの球状鉄塊を付着しており、赤錆が多いことから鉄分が多いことがわかる。その裏面は横位に走るスサの痕跡を密にのこしている。滓52も同様の鉄塊や砂鉄がやや膨張したような鉄粒が付着している。

製錬滓(第2-257図)

滓53は炉底で生成した製錬滓であり、裏面には地山の砂粒を付着している。破面は緻密で、金属質の輝きを呈している。全体を赤錆が覆っている。

鉄塊(第2-257図)

滓54は縦3.4cm、横4.7cm、厚さ2.3cmの鉄塊である。付着物がなく、底部付近の炉壁、鉄滓から小割された可能性がある。

溝状遺構1(第2-258図)

溝状遺構1はK23・24で、製鉄関連土坑1の東側から検出した。製鉄関連土坑1の断面を見ると、溝状遺構1が製鉄関連土坑1の東側の隙を切っているが、それ以上西には遺構は延びない。長さ約8.2m、幅0.5～0.6m程であり、南東側にややカーブしながら谷の中心部に向かって延びている。遺構内からは炭化物・鉄滓・焼土粒が出土しており、溝状遺構1が製鉄関連土坑1の際から始まっていることから、製鉄関連土坑と同時期に存在した可能性も考えられる。

(5) 土坑(第2-259図)

古墳時代の土坑は8基が検出されている。1基は焼土と炭化物を含む複数枚の層を持ち、埋土が複雑に堆積する土坑で「焼土土坑」と呼称する。その他の土坑は全て暗褐色土を埋土とするものである。

焼土土坑(第2-260、261図)

焼土土坑はB-C34区Va層から検出した。長軸4.7m、短軸1.3～1.7m程度の東西が丸みを持つ長方形に近い形状を呈し、検出面から底面までの深さは30～60cm程度である。焼土と炭化物が入り交じり、複雑に堆積している。大まかに上位から3面に分けて解説すると、1面目(上面)では南西側を除く遺構のほぼ全面に焼土と炭化物が広がる。一部では炭化材も出土している。2面目では焼土と炭化物の広がりがやや縮小し、全体的に広がっていたものが、東西に分かれて検出された。3面目になると焼土の堆積は東側のみとなり、炭化物の出土量が減る。土坑を囲むように小ピットが検出されている。

土坑1(第2-262図)

土坑1はI36区IVa層から検出した。竪穴建物跡9号から、東南東に4m程の位置である。長軸(南北軸)88cm、短軸(東西軸)64cmの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは、北側で12cm、南側で28cmと、南側が深くなる形状を呈している。埋土は暗褐色土の単一埋土であり、遺物は出土していない。

土坑2(第2-262図)

土坑2はJ37区IVa層から検出した。土坑3と隣り合って検出されている。直径約70cmの円形を呈し、検出面から底面までの深さは10cmであり、わずかながらVa層を掘り込んでいる。埋土は基本的には暗褐色土を呈し、遺物は出土していない。

土坑3(第2-262図)

土坑3はJ37区IVa層から検出した。土坑2と隣り合って検出されている。長軸84cm、短軸62cmの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは20cmである。底面は、ほぼ水平でVa層を5cm程掘り込んでいる。埋土は暗褐色土の単一埋土であり、遺物は出土していない。

土坑4(第2-262図)

土坑4はCD34区Va層から検出した。遺構の東側はわずかではあるが、竪穴建物跡18号に切られている。直径1.6mの円形に近い形状を呈し、検出面からの深さは中心部で55cmである。南側はピット状にさらに凹み、位置的にも竪穴建物跡18号の柱穴の可能性も考えられたが、埋土の分層はできなかった。遺物は出土していない。

土坑5(第2-263図)

土坑5はL32区Va層から検出された。長軸74cm、短軸54cmの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは、最大で39cmを測る。底面は平坦ではなく、やや丸みを帯びるが、壁はほぼ垂直に立ち上がる。南東側の側面には、

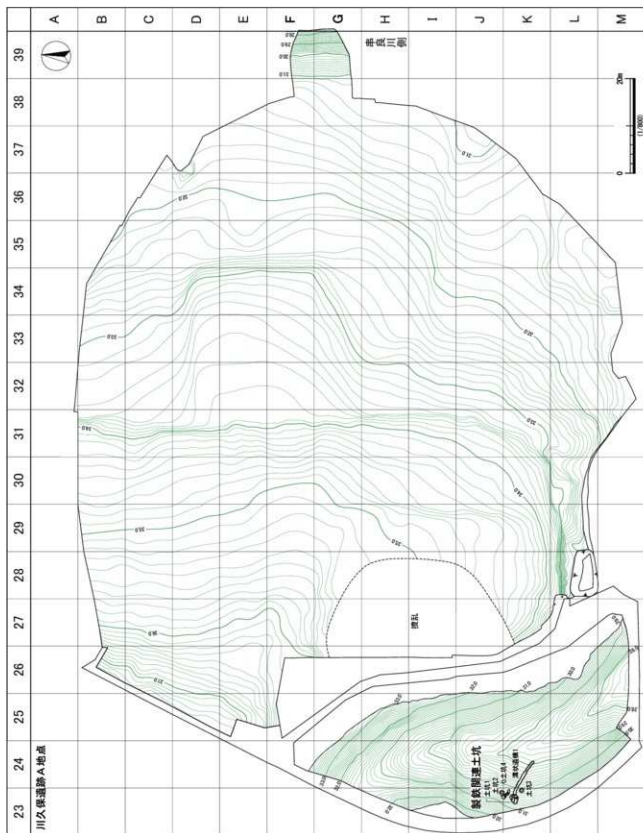
長さ約45cm、幅約15cmの段を形成している。埋土は暗褐色土の単一埋土であり、遺物は出土していない。

土坑6(第2-263図)

土坑6はL32区Va層で検出された。長軸57cm、短軸39cmの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは最大で、32cmを測る。底面はほぼ平坦に掘り込まれている。北側の立ち上がりは急であるが、南側はやや緩やかで、途中からオーバーハング気味に掘り込まれる。底面からは10cm程度大きさの平たい自然石が3点出土している。石材は良質な頁岩であり、底面に敷石のように配置されて出土していることから、人為的に埋められたと考えられる。埋土は暗褐色土の単一埋土である。

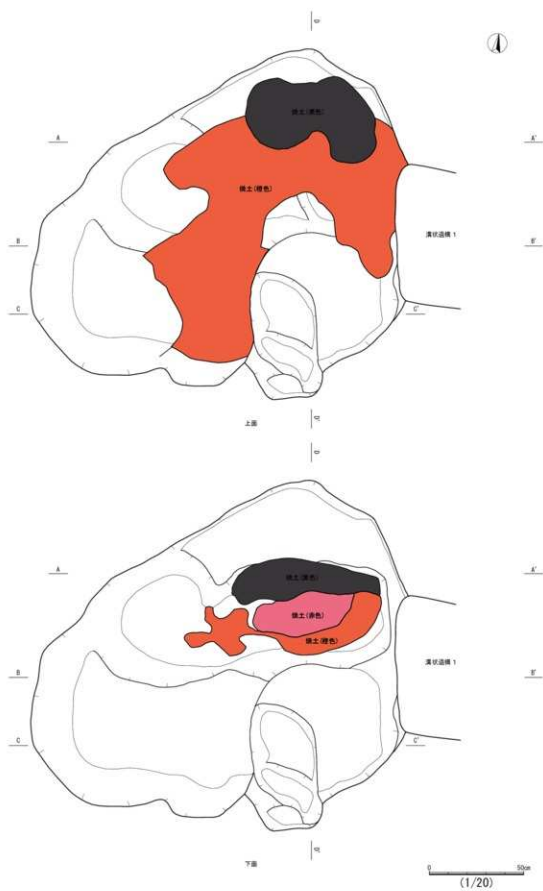
土坑7(第2-263図)

土坑7はB30区IVa層中から出土している。長軸(東西軸)86cm、短軸(南北軸)54cmの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは約8cmと浅く、掘り込みはVa層に達しておらず、IVa層中で完結している。底面は平坦に掘り込まれている。埋土は暗褐色土の単一埋土であり、埋土中からは鉄滓が1点出土している。

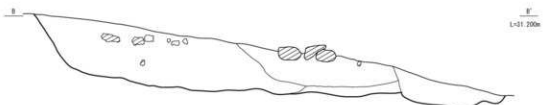
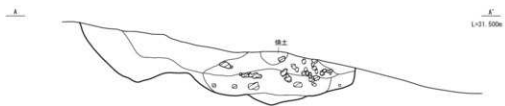
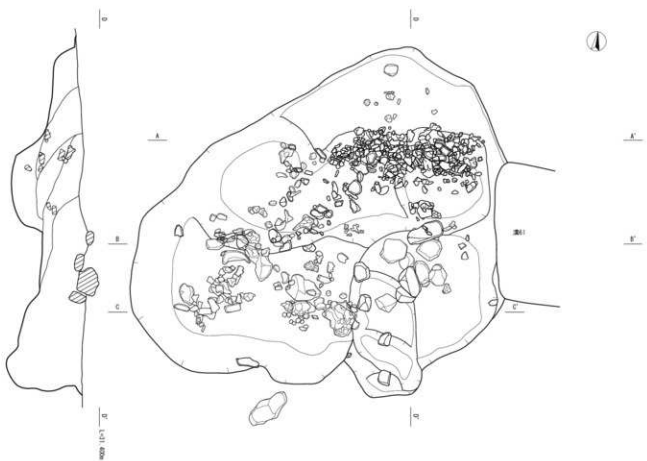


第2-240図 製鉄関連土坑

Va層コンテ図

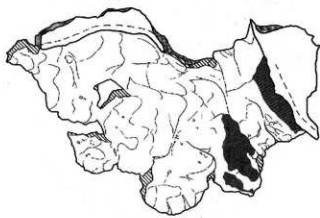
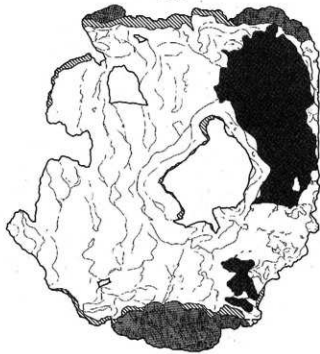


第 2-242 図 製鉄関連土坑 1 焼土範囲ほか(上面・下面)



0 20m
(1/20)

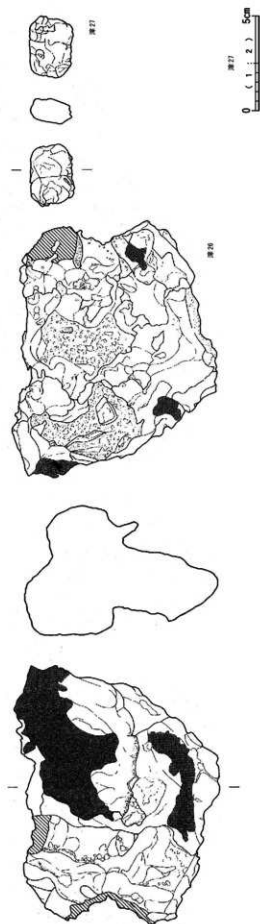
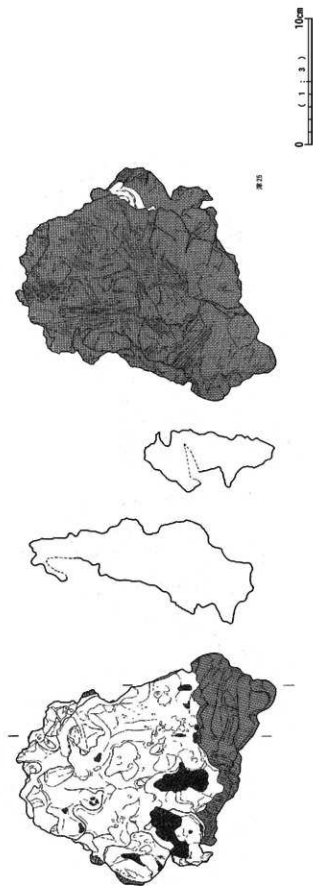
第 2-243 圖 製鉄関連土坑 1 遺物出土状況



244



第2-244 圖 製鉄原土坑1溝 出土遺物1



第2-245 圖 蘇州開運土坑1 出土遺物2



图 218

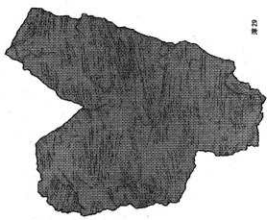
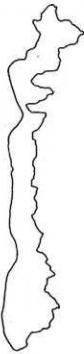
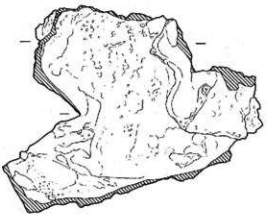
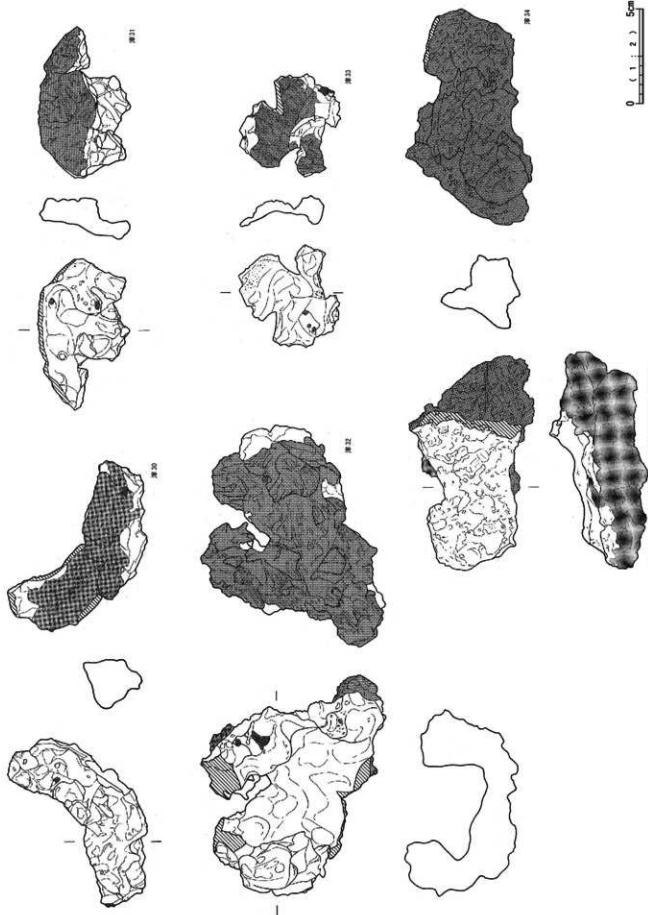


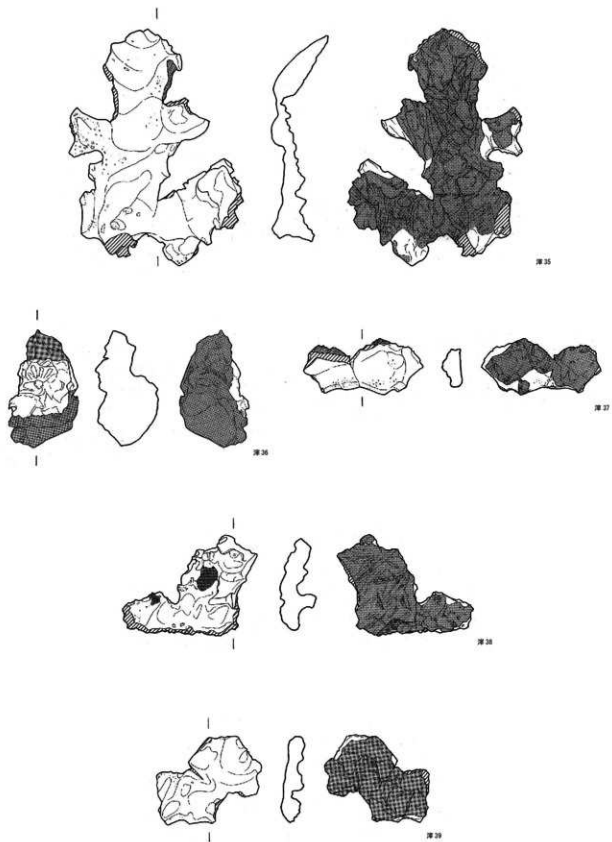
图 220



第2-246 图 裴铁岗遗址土坑1 出土遗物3



第2-247圖 圖 蘇圃埋土坑1出土遺物4



第2-248 圖 製鉄関連土杭1 出土遺物5

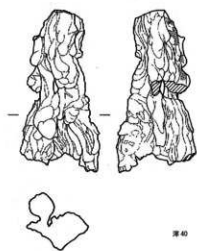


图 60

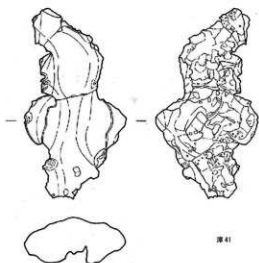


图 61

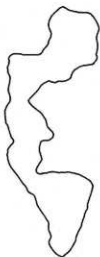


图 62

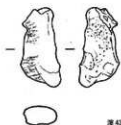
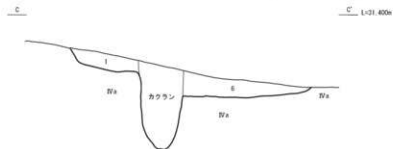
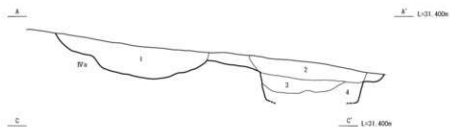
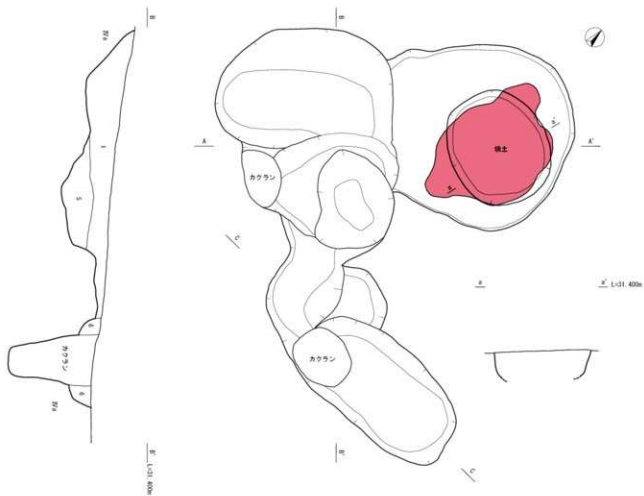


图 63

0 (1 : 2) 5cm

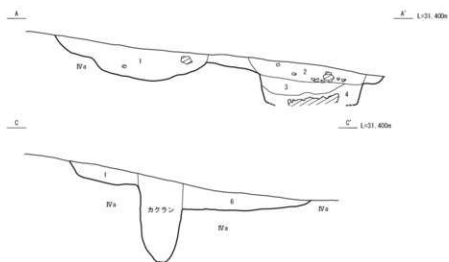
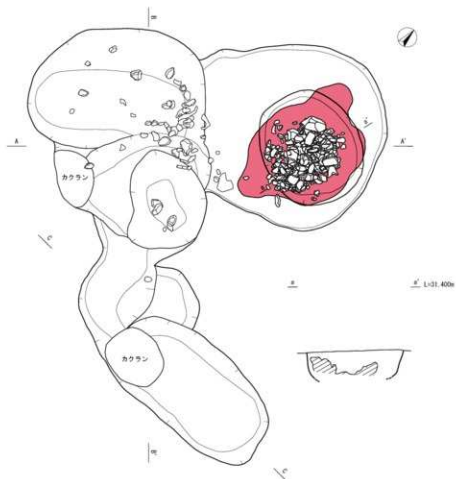
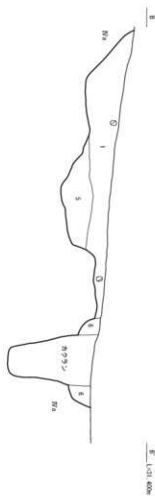
第2-249 图 製鉄関連土杭 1 出土遺物6



- 1 黒褐色土、炭化物・焼土・鉄滓を多く含む。
- 2 緑褐色土、炭化物・焼土・鉄滓を特に多く含む。
- 3 赤色土、粘土質。
- 4 緑褐色土、穴が閉じる。
- 5 に近い黄褐色土、炭化物・焼土を含む。
- 6 緑褐色土、鉄滓をわずかに含む。

第2-250図 製鉄関連土坑2

0 50m
(1/20)



第2-251図 製鉄関連土坑2号 遺物出土状況

0 10m
(1/20)

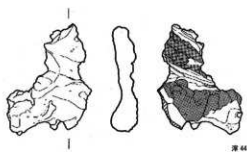


图44

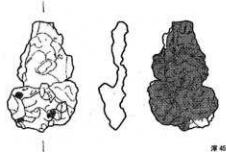


图45



图46

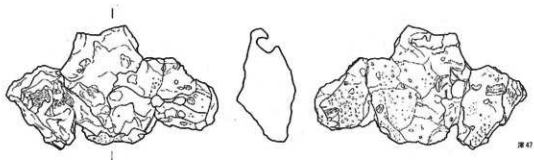
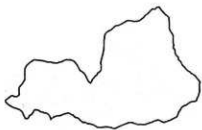
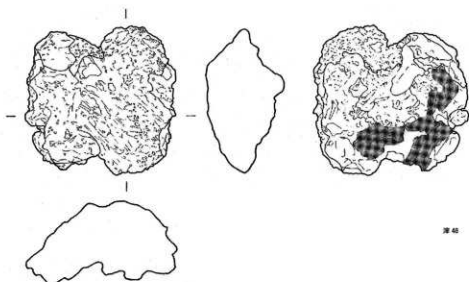


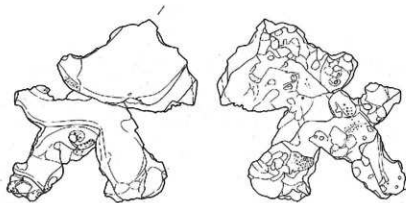
图47

0 (1 : 2) 5cm

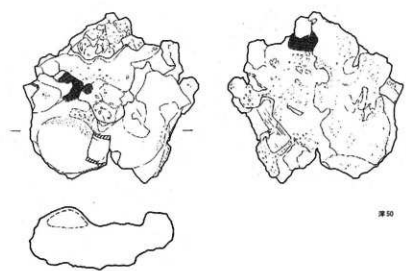
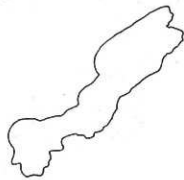
第2-252图 製鉄関連土杭2 出土遺物1



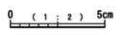
249



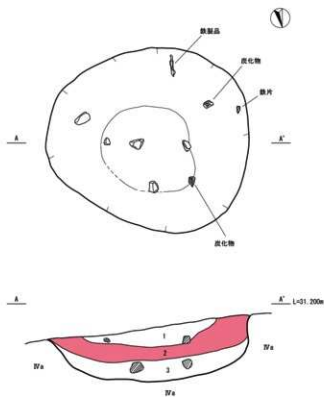
250



252



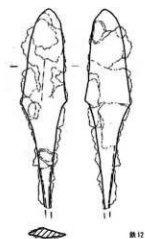
第2-253 図 製鉄関連土杭 出土遺物2



- 1 に近い黄褐色土。わずかに焼土を含む。
 2 焼土。炭化物・鉄製品・鉄片を含む。焼土層であるが強い磁気は認められない。
 3 黄褐色土。焼土粒・炭化物粒を含む。

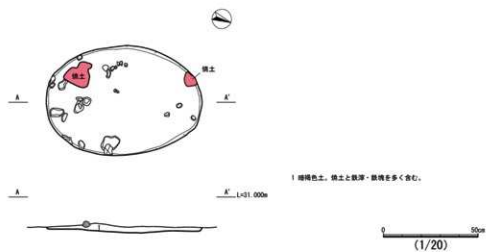
0 50cm
 (1/20)

第2-254図 製鉄関連土坑3

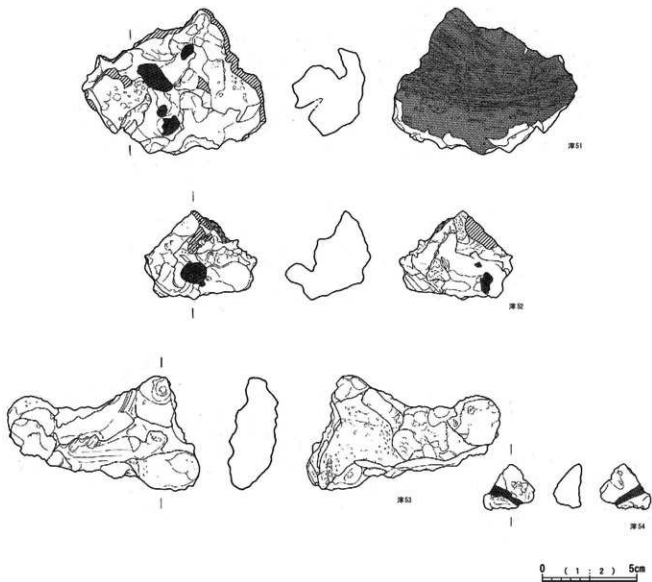


0 (1 : 2) 5cm

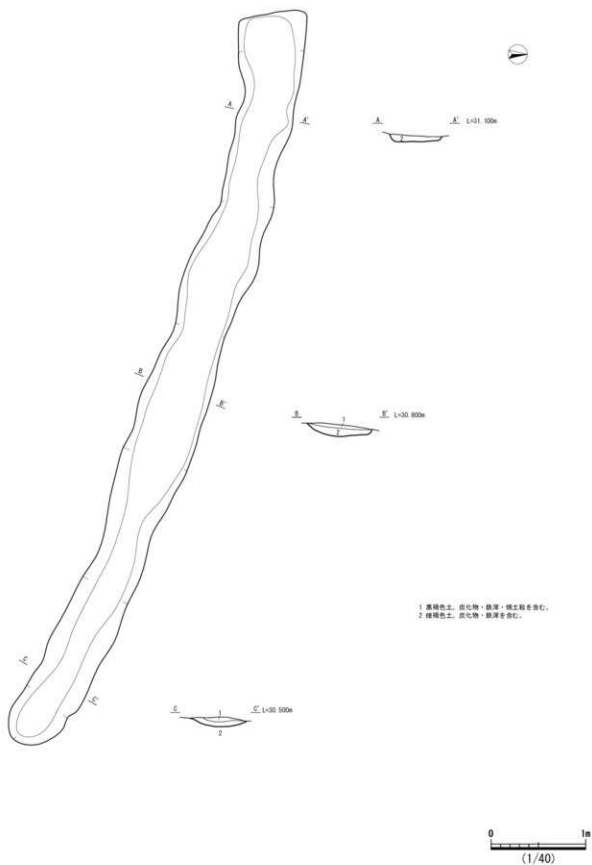
第2-255図 製鉄関連土坑焼土3 出土遺物



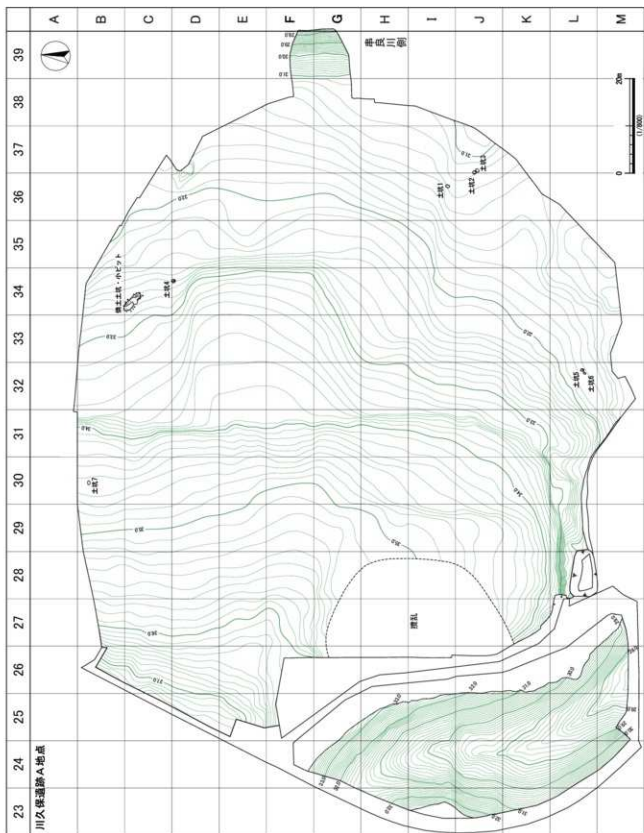
第2-256図 製鉄関連土坑4



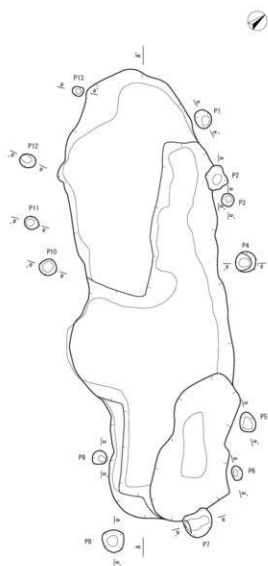
第2-257図 製鉄関連土坑4 出土遺物



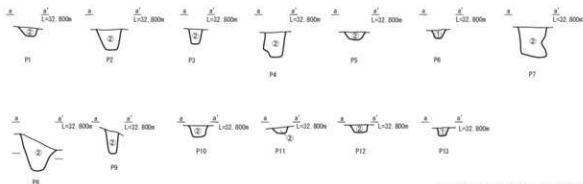
第 2-258 图 溝状遺構 1



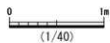
第2-259図 古墳時代土坑



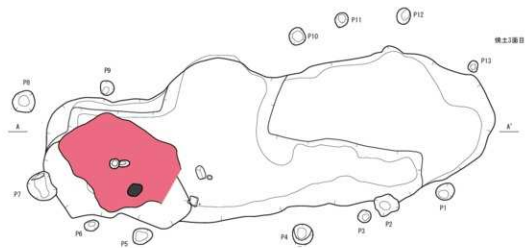
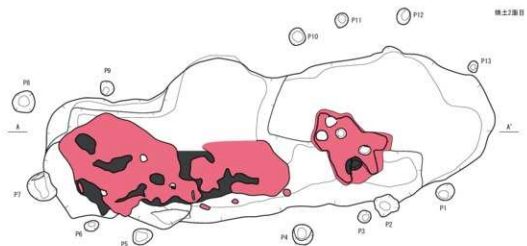
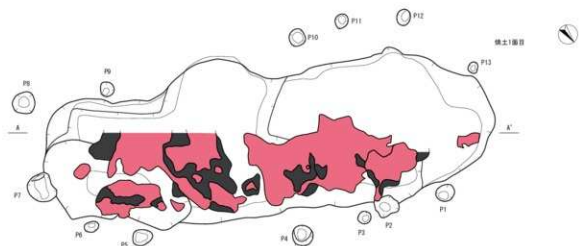
- 1 褐色土、焼土塊、炭化物を含む。
- 2 緑オリーブ褐色土、炭化物を含まない。
- 3 褐色土、焼土塊、炭化物を含む。
- 4 黒褐色土、焼きブロックを多く、炭化物を少量含む。
- 5 黒褐色土、炭化物を少量含む。
- 6 黒褐色土、炭化物を多く含む。
- 7 黒褐色土、焼土塊を多く含む。
- 8 炭化物。
- 9 明赤褐色焼土。
- 10 黒褐色土、炭化物を少量含む。
- 11 緑褐色土、炭化物を含まない。
- 12 黒褐色土、炭化物を少量含む。
- 13 褐色土、焼土塊を含む。
- 14 緑オリーブ褐色土、炭化物を少量含む。
- 15 黄褐色土、焼土塊。
- 16 褐色土、焼土塊。
- 17 黒褐色土、アカホヤ山灰土ブロックを含む。
- 18 黒褐色土。
- 19 緑オリーブ褐色土、アカホヤ山灰土ブロックを含む。
- 20 黒褐色土、アカホヤ山灰土ブロックを含む。
- 21 黒褐色土、アカホヤ山灰土ブロックを少量含む。
- 22 灰黒褐色土、アカホヤ山灰土ブロックを少量含む。
- 23 細かい黄色砂質土。
- 24 褐色土。



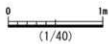
- ① 黒褐色土、アカホヤ山灰土ブロックを少量含む。
- ② 黒褐色土。



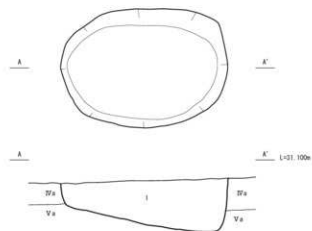
第2-260図 焼土土坑・小ピット



第2-261圖 燒土土坑 燒土堆積狀況

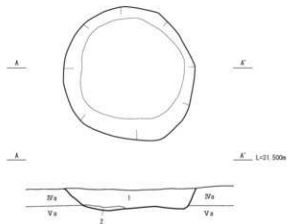


土坑 1



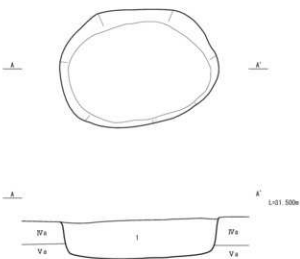
1 暗褐色土。に深い黄褐色のアカホヤ火山灰土を下部に若干含む。

土坑 2



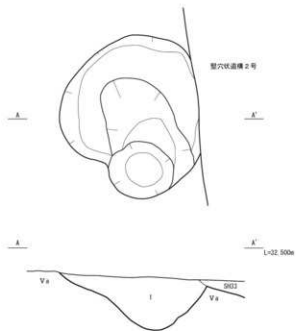
1 暗褐色土。に深い黄褐色のアカホヤ火山灰土を下部に若干含む。
2 暗褐色土。アカホヤ火山灰土を多く含む。

土坑 3



1 暗褐色土。に深い黄褐色のアカホヤ火山灰土を下部に多く含む。

土坑 4

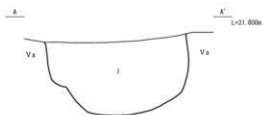


1 暗褐色土。赤黒緑色卵石を含む。

0 50cm
(1/20)

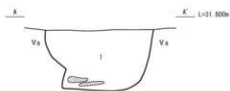
第 2-262 図 古墳時代土坑 1

土坑 5



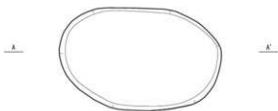
1 暗褐色土。

土坑 6

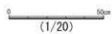


1 暗褐色土。

土坑 7



1 暗褐色土。



第 2-263 圖 古墳時代土坑 2

包含層出土遺物

土器(第2-264・265図)

587は完形に復元できた口縁部が外傾する甕B類である。口径26.3cm、底径8.2cm、器高29.7cm、脚部高3.8cmを測る。川久保遺跡A地点西側の北西側から南東側に向かって下る谷部であるK・L24区から出土している。外面口縁部上半は横方向の工具ナデが、口縁部下半から胴部にかけては縦方向の工具ナデが施されている。胴部下端には脚部を接合するときに貼り付けたと考えられる粘土が貼り付けられているが、部分的には剥落し、下地の縦方向の工具ナデが確認できる。脚部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。内面口縁部は横・斜め方向の工具ナデが、胴部は斜め方向の工具ナデが施されている。脚部内面はナデが施されている。

588は完形に復元できた口縁部が外傾する甕B類である。口径25.1cm、底径7.6cm、器高27.4cmを測る。谷部であるJ・K24区の製鉄関連遺構周辺で出土している。外面口縁部上半は横位の工具ナデを施している。口縁部は頸部に工具を打ち込み、上方向にナデ調整を施している。その後、部分的には斜め方向の工具ナデを施している。胴部上位は斜め方向の工具ナデを施しているが、部分的には調整の単位が不明瞭である。胴部中位から胴部下端にかけては、幅6mm程度の縦・斜め方向の工具ナデを施している。底部は横方向の工具ナデを施しており、指押さえの痕跡も確認できる。内面口縁部には横方向の工具ナデが施されているが、上半は調整の単位が明瞭で、下半は調整の単位が不明瞭である。胴部上位から中位にかけては、斜め・横方向の工具ナデが施されている。胴部下位には縦方向の工具ナデが施されている。脚部内面は調整の単位が不明瞭な横方向の工具ナデが施されている。

589は調査時に竪穴建物跡SH3(G31区)の遺物として取上げられた遺物であるが、この遺構は残りが悪く、遺構認定がされなかった。そこで包含層遺物として扱う。口縁部がわずかに外反する甕C類の口縁部から胴部中程までの資料である。口径26.8cmを測る。外面口縁部は横・斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部上位は横・斜め方向の工具ナデが、胴部中位は縦方向の工具ナデが施されている。内面口縁部上半はスジ状の痕跡が目立つ横方向の工具ナデが施されている。口縁部下半から胴部上位にかけては、横・斜め方向の工具ナデが施されている。口縁部上半の調整と比較すると、スジ状の痕跡が目立たず、器面はより平滑に仕上がっている。胴部上位から中位にかけては縦・斜め方向の工具ナデが施されている。

590は完形に復元できた口縁部が直行する甕D類である。口径28.4cm、底径10.0cm、器高38.6cm、脚部高1.0cm

を測る。谷部であるJ23・24区から出土している。外面口縁部は横方向のハケ目を施した後に、斜め方向の工具ナデを施している。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部上位は幅1cm程度の斜め方向の工具ナデを施した後に、縦方向の工具ナデを施している。胴部中程から下位は幅6mm程度の縦方向の工具ナデが施されている。脚部は横・斜め方向の工具ナデを施した上に、指押さえを密に行っている。内面口縁部上半は横方向の工具ナデが施されている。口縁部から胴部上位は斜め方向の工具ナデが施されている。工具ナデの幅は1.2cm程度と、外面胴部上位に施される工具ナデの幅よりも若干幅が広い。胴部中位は横方向、その下位に斜め方向の工具ナデが施されている。胴部下位は縦方向の工具ナデが施されている。脚部内面は横方向の工具ナデが施されている。

591は甕の胴部資料である。谷部であるK・L24・25区から出土している。外面口縁部は斜め方向のハケ目が施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。胴部は縦方向のハケ目が施されている。内面口縁部は斜め方向の工具ナデが、内面突帯部分は横方向の工具ナデが施されている。胴部は斜め・縦方向のハケ目を施した後に、斜め方向の工具ナデが施されている。

592は谷部であるI24区で出土している。布留留の丸底甕であり、口径12.9cmを測る。器壁の厚さは5~7mm程度であり、593よりは若干器壁が厚い。外面口縁部は横方向の工具ナデを、胴部上半は横・斜め方向の工具ナデを施している。胴部上位から底部にかけては、縦・横・斜め方向の幅の広いハケ目を施した後に、主に縦方向の幅の狭いハケ目を施している。内面口縁部は横方向の工具ナデを施している。胴部はハケ目・ケズリを施した後に、横・斜め方向の工具ナデを施している。一部には沈線が施されている。球形を呈し、外面のハケ調整、内面に残るケズリ痕跡から布留留式土器の特徴を見て取れる。しかしながら、器壁の厚みが布留留式土器と比較して厚く、ケズリ成形の効果が出ているとは言い難い。また、胎土に金色雲母が目立つのも特徴の一つである。いずれにせよ、布留留式土器を明確に意識して作られた土器である。

593は布留留式土器の丸底甕であり、口径13.9cm、器高18.7cmを測る。器壁は最も薄い箇所約3mmと非常に薄い土器である。谷部であるJ24・I25区から出土している。外面口縁部は横方向のハケ目が施されている。胴部には幅5mm程度の縦方向のハケ目の後に、幅1.3cm程度の縦方向のハケ目を施している。内面口縁部も横方向のハケ目を施している。胴部上半は斜め・縦方向のケズリが施されている。胴部下半は縦・斜め方向の丁寧なハケ目が施されており、一部の調整は胴部上半にまで及んでいる。

594 は長胴の丸底蓋の胴部から底部資料である。谷部であるH・I24区から出土している。内外面ともに強いハケ目を施しており、工具痕の幅から見ると少なくとも2種類の幅の異なる工具を使用している可能性が考えられる。外面口縁部下端から胴部上端にかけては、縦方向のハケ目が施されている。胴部上位には横・斜め方向のハケ目が、胴部中程から底部にかけては、縦・斜め方向のハケ目が施されている。内面胴部上端付近には横・斜め方向のハケ目を施した上から、指押さえが多数行われている。胴部上位から底部にかけては斜め・横方向のハケ目が施されている。胴部中程にはハケ目の打ち込みが一定間隔で確認できる。

595 は蓋の胴部から底部の資料である。底部はわずかに平坦面を持ち、底径2.4cmを測る。谷部であるH～J・24・25区から出土している。外面胴部から胴部上位にかけては、斜め・横方向の工具ナデが施されている。胴部中位から底部にかけては縦方向の工具ナデが施され、底部には指押さえが巡る。内面胴部には絞り痕が残る。胴部には縦方向の工具ナデが施されている。

596 は蓋もしくは蓋の胴部資料である。谷部であるL・25・26区から出土している。外面は斜め方向の工具ナデが施されている。突帯貼り付け部分の器面には横方向の工具ナデを施した後に、突帯を貼り付けている。内面は斜め・横方向の工具ナデが施されており、突帯内面部分には指押さえが行われている。

597 は蓋もしくは蓋の胴部下位から底部の資料である。谷部であるL・M25・26区から出土している。外面は斜め方向の工具ナデが施されている。内面は横・斜め方向の工具ナデを施した後に、縦方向の工具ナデや横方向のミガキを部分的に施している。

土製品(第2-265図)

598 は軸の羽口である。C26区でIVa層から出土している。長さ8.5cm、推定幅8.0cmの破片である。外面は黄灰色を呈し、半分ほどは被熱して明赤褐色および、灰白色に変化している。内面は黄灰色であり、溝の長さの1/5程度は吸気による被熱で明赤褐色となっている。厚さは2.1～3.0cmであり、被熱部分ですぼまる形状をし、基部側が厚い。先端部は欠損しており、ガラス質や鉄塊などの付着はみられない。調整について、外面は長軸方向に丁寧にナゲられ、指頭圧痕が認められる。内面の溝部分には製作時に使用される芯の抜き取り痕は観察できないが、間隔が1mm程度のしわが全面に観察され、水分が多い状態での成形痕とみられる。胎土は粗く、直径5～10mmの礫を多く含んでいる。外径5.3cm、内径2.2cmに復元され、破片の形状により先端径と基部径の差が小さく、文字通りの円筒形に近い旧状が復元される。

石器(第2-266図)

石141～150は砥石である。

装飾品(第2-267図)

包含層からは2点の勾玉が出土している。

装12・13はともにI30区の中世土坑埋土中から流れ込み遺物として出土している。

装12は長さ1.89cm、幅1.14cm、厚さ0.5cmを測り、重量は1.2gを量る。蛇紋岩製であり、緑灰色の色調を呈する。

装13は長さ0.95cm、幅0.55cm、厚さ0.21cmを測り、重量は0.2gを量る。蛇紋岩製であり、暗緑灰色の色調を呈する。

鉄製品(第2-267図)

包含層からは4点の鉄製品(鉄13・14・15・16)が出土している。

鉄13は短須の三角形鏃である。平造りの鏃身部は長三角形を呈し、鋒にはわずかにふくらみがあり、鏃身間はナゲ角間である。頸部は基部に向けてわずかに広がり、ナゲ角間にいたる。頸部、基部の断面形はそれぞれ長方形、正方形である。全長13.7cm、鏃身部最大幅3.3cmを測る。

(鉄14・15・16はP359参照)

炉壁・鉄滓ほか(第2-268～276図)

包含層では製鉄炉の炉壁、製鉄滓、鉄塊が出土した。

炉壁(第2-268～272図)

包含層出土の炉壁片は遺構にともなって出土した炉壁片に比較して総じて大型である。滓55は長さ約25cm、幅約30cm、厚さ約7cmを測り、内壁に付着したガラス質滓は上部で厚く2cm、下部で7mmである。付着した不成形の鉄塊が1/3程の面積を占めている。裏面にはスサの痕跡が著しい。大きく内面に向けて歪んでおり、炉が熱い間に壊されたため、炉壁は単に砕けるのではなく、内壁が溶融してアメ状であったために湾曲したと考えられる。長さ約29cm、幅約25cm、厚さ約14cmの大型破片である滓58も同様の特徴をもっている。滓56・57・59・67・68はガラス質滓の厚みが5mmの薄い炉壁片であり、滓60～66、滓69・70は最大1cm程度のガラス質滓が付着した炉壁片である。滓61・62・66・67・70は砂鉄あるいは砂鉄が膨張してなった鉄粒が観察される。滓69は大きく歪んでおり、炉の破壊時に変形したものとみられる。滓71は炉壁の下部に炉内に残留した製鉄滓が付着している。滓部分の破面は緻密な金属質を呈しており、鉄塊が割り取られた痕跡とみられる。

製鉄滓(第2-272～275図)

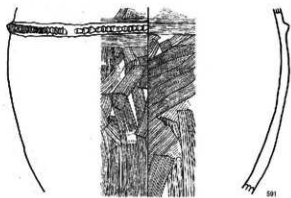
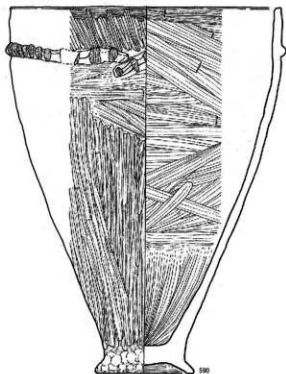
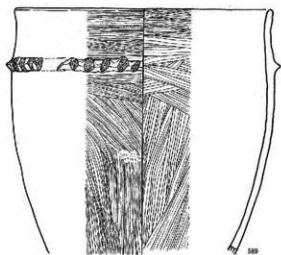
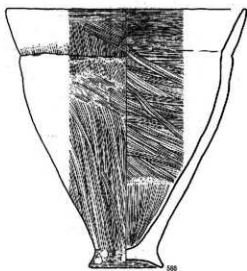
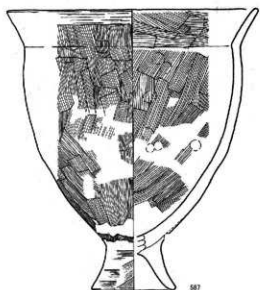
製鉄滓は炉の内部で生成された炉内滓(滓72～94、97、101)、炉外に流出した滓(滓96、98～100)に大きく分かれる。炉内滓のうち滓72～75、89は裏面に地山の砂礫を付着しており、いずれも破面は緻密で、金属光沢を放つ。滓75は裏面側に一部湾曲しており、炉の破壊時

に変形したものとみられる。炉外流出滓のうち、滓96・98は土の付着がなく、垂直方向の流動痕跡を残す滓であり、いわゆる「鳥脚状鉄滓」である。滓99は流出滓の表面の破片である。滓の内部で気泡が大きく成長したために、破裂してできた破片である。滓100は裏面に地山の砂礫を付着した流出滓であり、水平方向の流れを残している。棒状を呈していることから、排滓孔に近い部分で生成・固結した鉄滓である。

滓79～94,97,101は小割面をもち、金属光沢をもつ小型の製錬滓である。小割面は滓83・84が4面、滓79,82が3面、それ以外は1～2面である。付着した鉄塊が割り取られた痕跡とみられる。

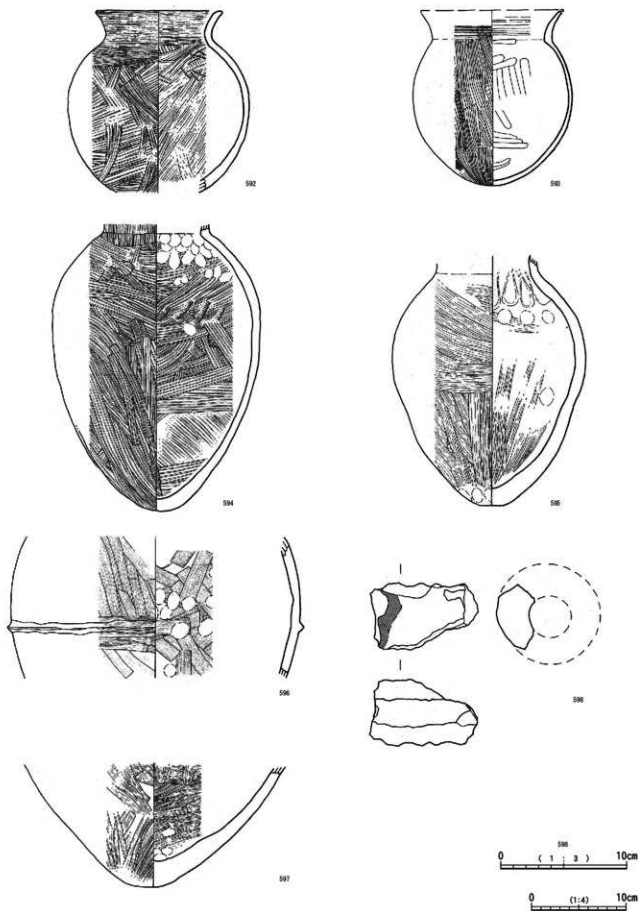
鉄塊(第2-276図)

滓102～105は微量ながら鉄滓分が表面に付着しており、また亀裂が走り、錆汁を吹いている。滓106は表面に付着物がなく、鉄滓から割り取られた小型鉄塊である。

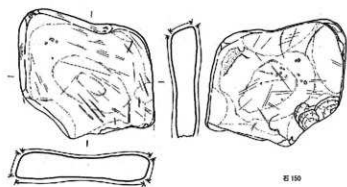


0 (1:4) 10cm

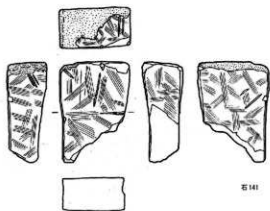
第2-264圖 包含層 出土遺物(土器)



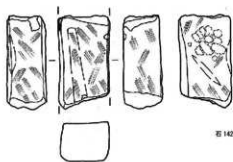
第2-265圖 包含層 出土遺物(土器・土製品)



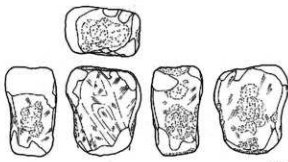
石150



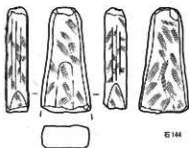
石141



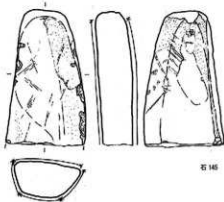
石142



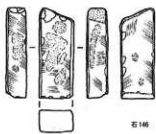
石143



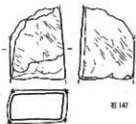
石144



石145



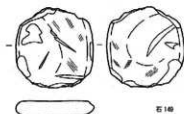
石146



石147



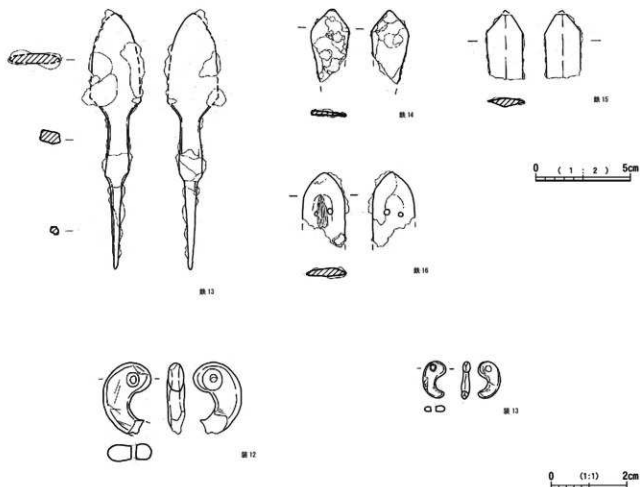
石148



石149

0 (1:4) 10cm

第2-266圖 包含層 出土遺物(石器)



第2-267圖 包舍層 出土遺物(鉄製品・裝飾品)

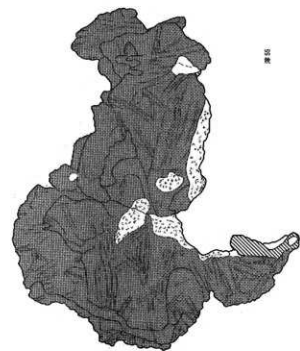


图 166

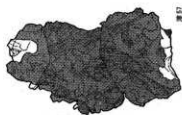
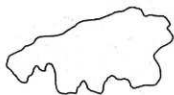


图 169

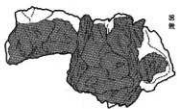
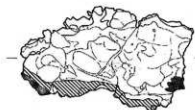


图 172

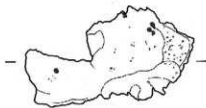
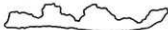


图 2-266 图 包舍簾 出土器物 (伊壁①)

第2-269圖 包含層出土遺物(碎璽②)



圖 18

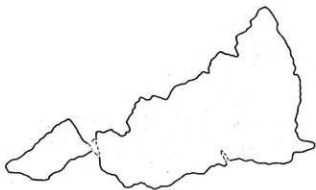
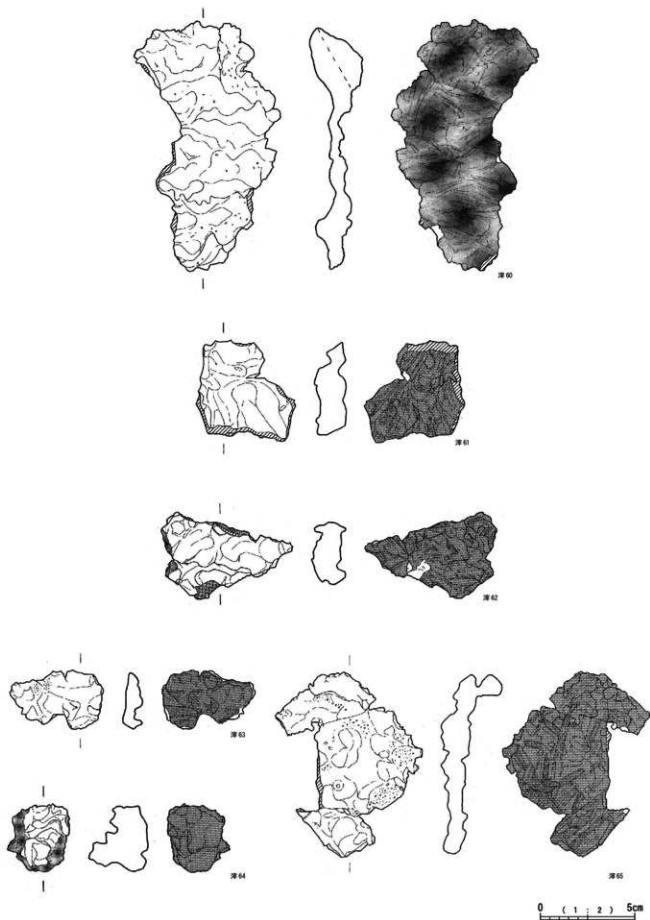
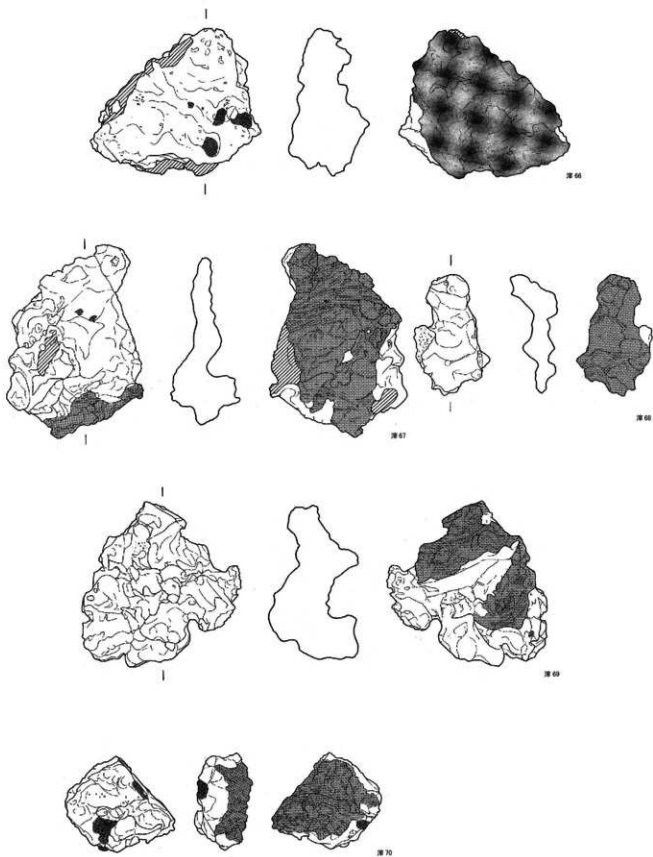


圖 19

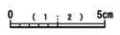
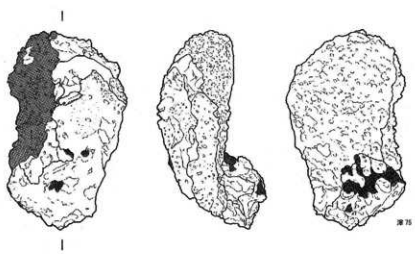
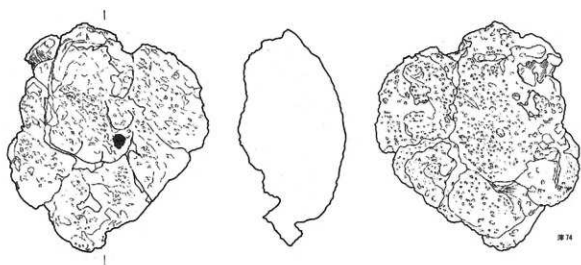
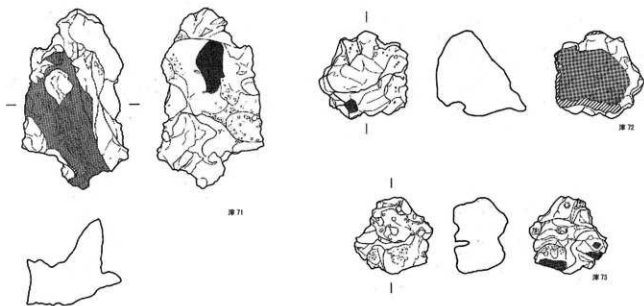




第2-270 図 包含層 出土遺物(伊壁③)



第2-271 圖 包含層 出土遺物(伊壁④)



第2-272圖 包含層 出土遺物(伊壁・伊内津)

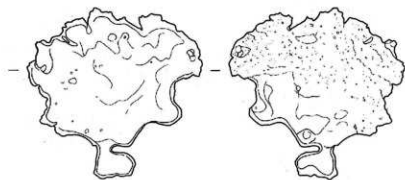


图76

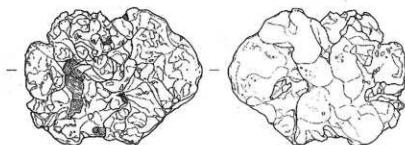


图77



图78

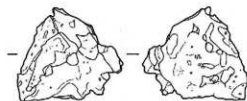


图79

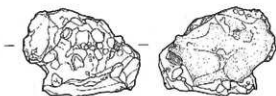


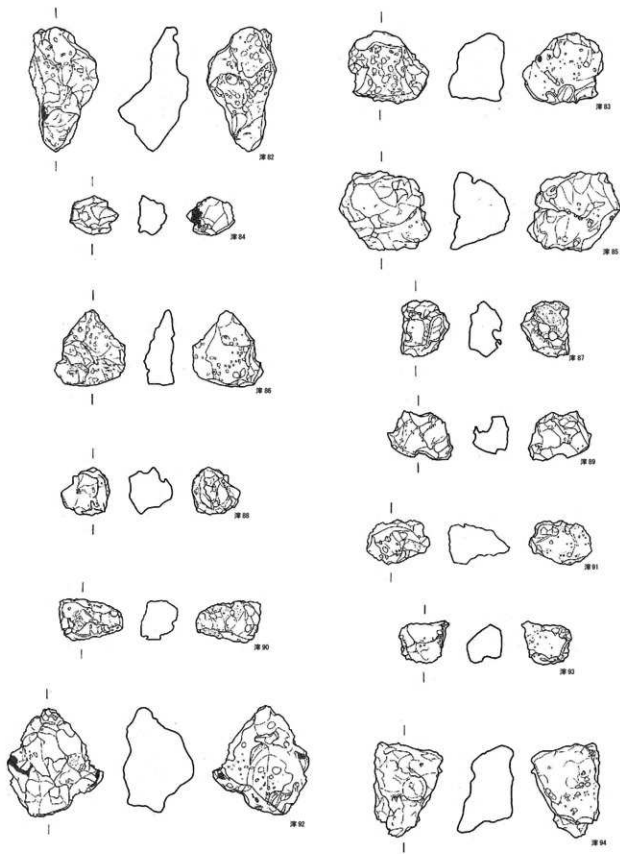
图80



图81

0 (1 : 2) 5cm

第2-273图 包含层 出土遗物(炉内滓①)

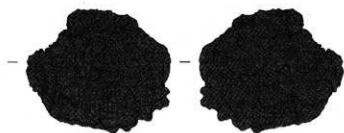


第2-274圖 包含層 出土遺物(伊内洋②)

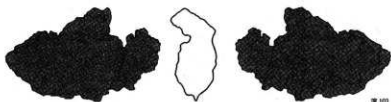
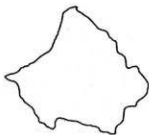
0 (1 : 2) 5cm



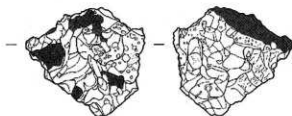
第2-275 圖 包含層 出土遺物 (伊外流出滓・製鉄滓)



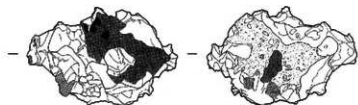
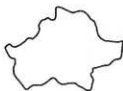
第 102



第 103



第 104



第 105



第 106

0 (1 : 2) 5cm

第2-276圖 包含層 出土遺物(鉄塊)

表2-103 包含層出土土器

図 番号	遺物 番号	表面	器種	部位 (欠損部位)	分類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	外面 調整	内面 調整	色調	胎土	備考
2 264	587		甕	完形	A	29.7	26.3	8.2	工具ナデ	工具ナデ	外:緑 内:緑	石・輝・雲・ 白・黒	脚部高:3.8cm
	588		甕	完形	B	27.4	25.1	7.6	工具ナデ	工具ナデ	外:にぶい緑 内:にぶい緑	石・白・黒	脚部高:0.8cm
	589		甕	口縁部-胴部	C	—	26.8	—	工具ナデ	工具ナデ	外:緑 内:黄緑	石・白・小	
	590		甕	完形	D	38.6	28.4	10.0	ハケ目 工具ナデ	工具ナデ	外:緑 内:緑	石・長・白・ 黒・小	脚部高:1.0cm
	591		甕	胴部	—	—	—	—	工具ナデ ハケ目	工具ナデ ハケ目	外:緑 内:緑	石・輝・雲・ 白	
2 265	592		甕	口縁部-胴部	—	—	12.9	—	工具ナデ ハケ目	工具ナデ ハケ目	外:明赤地 内:明赤地	石・長・輝・ 雲・白	右留式系
	593		甕	完形	—	18.7	13.9	—	工具ナデ ハケ目	工具ナデ ハケ目	外:緑 内:緑	石・輝・雲・ 白・黒	右留式系
	594		甕	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナデ ハケ目	工具ナデ ハケ目	外:緑 内:緑	石・長・輝・ 雲・白	
	595		甕	胴部-底部	—	—	—	2.4	工具ナデ	工具ナデ	外:緑 内:緑	石・雲・小・ ばか	
	596		甕・甕	胴部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:緑 内:緑	石・白・小	
	597		甕・甕	胴部-底部	—	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外:赤褐色 内:赤褐色	石・白・黒・ 小	

表2-104 包含層出土土器

図 番号	遺物 番号	表面	器種	残存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
2 266	石130		砥石	破損	(12.9)	14.1	3.4	(957.0)	砂岩	
	石141		砥石	破損	8.0	5.6	3.2	(179.3)	凝灰岩	
	石142		砥石	破損	7.6	4.1	3.4	(170.0)	砂岩	
	石143		砥石	完形	9.5	7.9	5.5	530.9	砂岩	
	石144		砥石	完形	8.4	4.0	1.8	386.3	砂岩	
	石145		砥石	破損	(10.6)	6.3	2.8	(279.0)	砂岩	
	石146		砥石	完形	7.1	2.8	1.9	70.5	砂岩	
	石147		砥石	破損	(5.6)	4.4	2.1	(788.0)	砂岩	
	石148		砥石	破損	(4.0)	(2.3)	0.9	(15.0)	頁岩	
	石149		砥石	完形	6.4	6.2	1.3	85.0	砂岩	

第3節 近世の成果

近世の遺構としては炭窯跡2基と、その関連土坑2基、その他の土坑1基が検出されている。

1 遺構

(1) 炭窯跡と関連土坑(第2-277～284図)

2基の炭窯跡(炭焼き窯跡)はK・L34区Va層から、炭窯跡に関連すると考えられる2基の炭化木・炭化物が集中した土坑をL・M34区Va層から検出した。2基の炭窯は並んで検出されており、2基の土坑も炭窯に平行するような配置で検出している。

炭窯跡1号(第2-277図)

炭窯跡1号はK・L34区のVa層から検出されている。長さ約3.4m、幅約1.1mの窯本体の北側に、長さ約1.3m、幅約1.1mの窯口付近の作業場所と考えられる外部施設が付属している。検出面から底面までの深さは42～47cm程度であり、天井部分は崩落している。炉壁は煙道が検出された南側(窯奥側)では検出面まで残存していたが、側面は炉壁の下部のみが検出されている。埋土3には炉壁が含まれていたため、側面も炉壁が構築されていたと考えられるが、炉壁の量としては、側面分しか出土しておらず、天井部分は粘土で構築されていた可能性が高い。炉壁は表面が黒色化しており、その内側に赤色化した部分が見られる。炉壁の外側の土も被熱により変色しており、10cm程度の幅でVa層または、V層が赤色化している。

炭窯跡1号の埋土は、埋土1がⅢ層とⅣa層の混ざった土である。埋土2の黒褐色土には炭・炉壁・焼土塊が少量混ざる。埋土3には大量の焼土塊と炉壁が混ざり、少量の炭や被熱を受け白色化した焼土塊が混ざる。埋土3は粘土で構築された天井部分の崩落土と崩壊した炉壁の混ざり土と考えられる。埋土10は赤色化し硬化した床面である。埋土3bは埋土10に類似し、南側ではこの埋土3bと埋土10の間に炭化物層である埋土7を挟むことから、少なくとも2回はこの炭窯を使用したことが分かる。埋土10の下部のⅥ層は被熱により白色粘質化している。炭が堆積しているのは窯奥側の埋土7と窯口側の埋土5である。埋土7の炭が、細かく少量であるのに対し、埋土5の炭は炭化木が形状を留めており、炭を組んだ状態のものも見られた。床直上にあることから、窯の最終使用時のものが残存したものと考えられる。窯はF1の加工された石を境に床面の様相が異なり、窯側の床面が赤黒く変色しているのに対し、外側の床面はVa層もしくはVa層であり、被熱を全く受けていない。外部施設に堆積している埋土8には炭化物が混ざる。埋土9は埋土8にV層の土が混ざる。埋土8・9はF1を境に垂直に堆積しているため、窯の最終使用時に埋められた可能性も考えられる。F1は窯を構成する構築物の中でも被熱

を受け、唯一赤白色に変色しており、同色の構築物は他には見られない。炉壁はこのF1を基元に構築されており、加工痕(鑿痕)も見られることから窯口の特別な構築物であったと考えられる。煙道は直径5～16cmで、上部に行くほど広がる形状を呈し、表面は被熱によりガラス質化している。

炭窯跡2号(第2-278図)

炭窯跡2号はK・L34区のVa層で、炭窯跡1号の西側から検出した。長さ約3.9m、幅約1.2mの窯本体と、長さ2.0m、幅0.8mの外部施設から構成されている。炭窯跡1号と比較して、幅はあまり変わらないが、全体的に細長い形状をしている。炭窯跡1号との大きな違いは、炉壁を持たず、Va層をそのまま壁面としており、5～20cm程度の厚さでVa層が赤色化している。また煙道は確認されていない。さらに加工した石材を組み合わせて窯口を構築していることが挙げられる。窯の中央部より奥には、大量の炭が交互に組まれた状態で検出されている。

炭窯内の炭化木に関しては、年代測定(AMS法)を実施したところ(第3分冊自然科学分析参照)、江戸時代中期頃の年代が得られた。

炭窯跡1・2号ともに、遺構内に炭化木が残存したまま廃棄されている状況が見られた。これは窯を廃棄する時に神様への供物として、炭の一部を残して窯を閉じた可能性があるという指摘を、愛媛大学の村上教授から頂いている。

炭窯関連土坑1(第2-279図)

炭窯関連土坑1はLM34区Va層で検出されている。長さ約2.2m、幅約0.8mを測る。検出面からの深さは約10cmである。南側に焼土が検出されており、埋土中には炭化物が堆積している。炭化物は細かく、炭化木の形状は保っていない。

炭窯関連土坑2(第2-280図)

炭窯関連土坑2はLM34区Va層から検出されている。長さ約2.5m、幅約0.6mを測る。検出面からの深さは約10cmである。北側に焼土が検出されており、埋土中には炭化物が堆積している。炭化物は細かく、炭化木の形状は保っていない。

土坑(第2-281図)

近世の土坑としては1基が検出されている。近世土坑1はE25区Va層で検出した。中世・近世の遺物とともに炭窯跡の炉壁に類似したのも出土しており廃棄土坑と考えられる。

近世土坑1出土遺物(第2-283・284図)

近1~6は龍門司系の陶器碗で、内、内1・2以外は高台まで残存し、その高台形状は高台外を垂直に立ち上げ、高台内は中心方向に向かって斜めに削り出している。施釉範囲は高台外の一部と高台以外残部全面であり、内近3~5は見込みに蛇の目釉刺ぎを行う。

近1は端反碗の口縁部で、外面に間隔の狭い轆轤目が強く見られ、段を持つ。

近2は轆轤目に釉薬が溜まり、器面は平滑となる。

近3は内外面の口縁部から胴部にかけて白化粧土を施し、その上から鉄軸を掛ける。白化粧土を施した範囲は明黄褐色、露胎部は暗褐色を呈する。高台外一部に指跡らしき痕跡がある。兎耳高台である。

近4は丸碗で、鉄軸を施した後、口唇部の釉薬を掻き取る。釉薬は黒褐色を呈し、非晶質部分が多く、質感はマットである。高台内面中央を凹ませる。見込み釉刺ぎ部に環状の重ね積み痕あり。なお、所謂『蛇の目』の中央部をさらに同心円状に釉刺ぎしている。

近5は高台以外残部全面に鉄軸を施す。非晶質部分がほぼ無く、質感はマットである。

近6は口縁部と胴部境で屈曲し、内傾気味に口縁部へと立ち上がる天目形の碗である。泥漿(灰色)を高台外から高台以外に施し、その上から白化粧土を外面は口縁部から胴部に、内面は全面に施し、その上から透明釉を掛ける。器面色調は、白化粧土上は灰白色、胴部中位から高台外の一部(泥漿のみの範囲)は黒褐色、高台(露胎)は赤褐色を呈し、轆轤目には下地の泥漿が見て取れる。見込みには目跡が確認できる。

近7は鉄軸を残部全面に施し、色調は黒味が強い端反碗である。器面に赤褐色の結晶が斑点状に生じている。

近8は半筒碗である。腰部で屈曲し、口縁部に向かって垂直に立ち上がる。腰屈曲部から高台脇を除き内外面に白化粧土を施し、その上から残部全面に透明釉を掛ける。

近9は皿の胴部から底部資料である。外面は胴部と畳付きに、内面は全面に白化粧土を施し、その上からオリーブ褐色を呈する灰軸を畳付き以外の白化粧土範囲に掛ける。見込みは蛇の目釉刺ぎを行うが、白化粧土までは剥ぎ取っておらず、釉刺ぎ箇所は灰白色を呈する。胎土は浅黄褐色を呈し、やや磁化している。見込みには、他個体の畳付きに施された白化粧土と思しき痕跡が環状に残る。胎土及び釉薬から龍門司系と推測される。

近10~17は苗代川系の資料である。共通項として、胎土に1mm以下の石英等の鉱物を含み、鉄軸を施軸する。

近10は底部端に円錐状の脚が付く鉢である。脚の周囲には5mm前後の爪状の刺突が見られ、また、約2×1.5cmの長方形を呈するコマの痕跡が一部付着している。内面に間隔の非常に狭い轆轤目を残す。残部全面に鉄軸を施す。

近11は挿鉢底部である。スリメが密に施されており、単位は判然としない。残部全面に鉄軸が施され、外底面に釉薬の掻き取りが見られる。

近12は壺の口縁部から肩部である。口縁部は外から内側に折り返しがつくられる。口唇部は平坦に仕上げ、コマの目跡が1か所確認できる。残部全面に鉄軸が施されるが、口唇部の釉薬については掻き取られる。

近13は底部資料である。器種は壺または壺か。残部全面に鉄軸が施され、底面は釉薬の掻き取りを行う。

近14は水注の注口部で、S字状の溜め口を呈する。茶止め穴が上下に2か所あり、径は共に約8mmである。施釉範囲は残部内外面全てであり、鉄軸を施す。外面は非晶質で光沢が強く暗褐色を呈するが、内面は釉薬が溶融しきれず、釉薬中に溶けきれなかった成分が白色の結晶として析出している。

近15・16は土版または鑄と考えられる。ともに、胴部に耳(近15はその痕跡)が付き、胴部中位付近に最大径を持ち、平型を呈するもので、胴部の屈曲は強くない。胴部下半以外は残部全面施釉されており、口唇部の釉薬は掻き取られる。また、露胎する胴部下半に煤が付着しており、直火にかけられた痕跡が認められる。いずれも、完形資料ではなく、注口部の有無は判然としない。

近15は胴部上端の耳の痕跡直下に、欠損しつつ突起する箇所があり、耳の直下であることから、注口部の痕跡の可能性もある。その場合は土版となる。

近16は将棋の駒状の耳を持つ。胴部下半には煤が付着するが、底部には付着していない。底部中心から半径6cm範囲は、胴部部の露胎箇所(暗赤褐色)と色調が異なり、黒褐色を呈し、その際には他個体の胎土の痕跡が付着しており、重ね積みの痕跡と考えられる。

近17は口径約6cmの土版蓋である。天井部にボタン状のつまみを有する。釉薬は残部外面に鉄軸を施す。内面は露胎し、底部及び見受けの端部は打ち欠いたような痕跡がある。

近18は灯明皿受け台である。口縁部から胴部にかけて間隔の狭い轆轤目を外面に残す。内面の轆轤目の間隔は広い。底部には右回転の糸切り痕が残る。底部付近から底部以外に灰軸を施し、口唇部は釉薬を掻き取る。加治木・始良系。

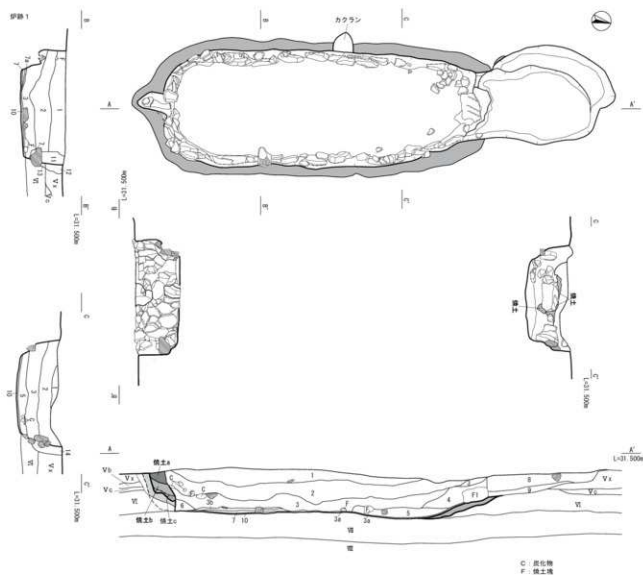
近19・20は磁器碗である。いずれも肥前系である。

近19は高台外及び高台脇に圈線が巡る。透明釉を残部全面に施し、畳付きで釉刺ぎを、見込みでは蛇の目釉刺ぎを行う。見込み釉刺ぎ箇所に重ね積みの痕跡が環状に見られる。

近20は半筒碗で、全面透明釉を掛けた後、畳付きの釉刺ぎを行う。釉薬は内外面ともに色調がやや青みがかかる。外面は無文で、内面口縁部に四角欄文が見込みには二重圈線とコンニャク印判による五弁花文が見られる。

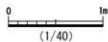
高台内にはアルミナが付着している。

近 21 は焙烙の把手で、下面側には煤の付着が見られる。

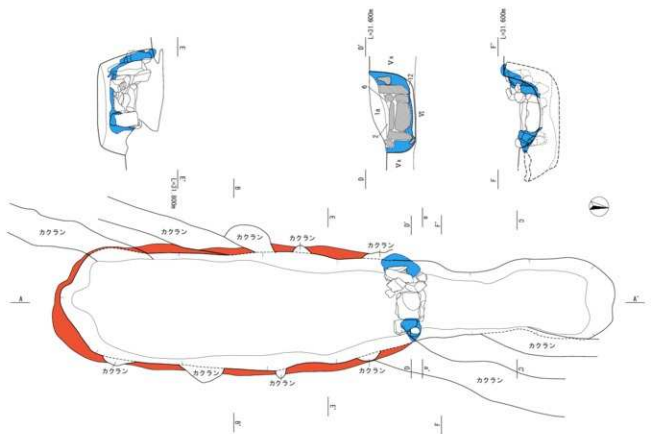


- 1 濃い黄緑色土、粘性なし、ややしめる。径1mm程度の白色粒を含む。
- 2 黄緑色土、粘性ややあり、ややしめる。炭化物、焼土層を含む。
- 3 暗赤褐色土、粘性なし、しまりあり、焼土層である。白色や暗赤褐色の焼土層を含む。
- 3a 灰赤色土、よくしめる、焼土層である。
- 3b 濃い赤褐色土、粘性なし、よくしめる。□部と7層の間にあり。
- 4 暗灰色土、やや粘性あり、しまり弱い。径1-3mmの焼土粒、炭化物を若干含む。
- 5 黄褐色土、やや粘性あり、しまり弱い。炭化物を含む。
- 6 灰黄褐色土、粘性なし、しまり弱い。
- 7 黄褐色土、粘性なし、よくしめる。炭化物層である。

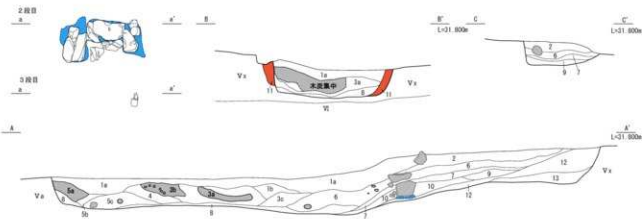
- 7a 赤褐色土、ややしめる、焼土層である。
- 8 黄灰色土、やや粘性あり、ややしめる。径5mm-1cm程度の炭化物を含む。
- 9 灰黄褐色土、粘性なし、しまり弱い。径5mm程度の炭化物を多く含む。
- 10 赤褐色土、よくしめる、焼土層の焼土層である。
- 11 濃い赤褐色土、ややしめる。1-2層に焼土粒が多く混入した層である。
- 12 暗赤褐色土、粘性なし、しまりなし。焼土により遠く離れた土が着色したものである。
- 13 暗褐色土、粘性なし、しまりなし、砂皮。
- 14 褐色土、粘性なし、しまりなし。焼土により遠く離れた土が着色したものである。



第2-277図 炭痕跡1号



伊藤2

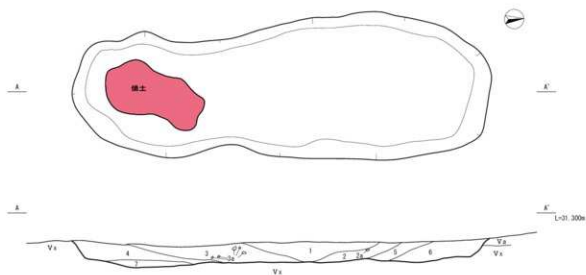


- 1a 黒褐色土 粘性なし。しまりなし。炭化物、焼土粒を少量含む。
 1b 暗褐色土 粘性なし。しまりなし。炭化物、径500程度の焼土ブロックを含む。
 2 赤褐色土 粘性なし。しまりなし。炭化物を少量、焼土粒を多く含む。径300程度、径1000程度の焼土ブロックを含む。
 3a 黒色土 粘性なし。よくしまる。炭化物層である。径300程度の木炭を少量含む。
 3b 黒褐色土 粘性なし。しまりなし。径1000程度の焼土ブロック、径300程度の炭化物を多量に含む。
 3c 暗褐色土 粘性なし。しまりなし。炭化物、焼土粒を多量に含む。径300程度の木炭を含む。
 4 灰黄褐色土 粘性なし。しまりなし。炭化物、焼土粒を少量含む。
 5a 黒色土 粘性なし。しまりなし。炭化物層である。
 5b 黒褐色土 粘性なし。しまりなし。炭化物、焼土粒を多量に含む。
 6a 黒色土 粘性なし。しまりなし。径500程度の焼土をまばらに含む。炭化物を多量に含む。
 6b 暗褐色土 粘性なし。しまりなし。炭化物を多量に含む。径400程度の木炭を含む。
 7 白っぽい黄褐色土 粘性なし。硬くしまる。炭化物を少量含む。焼土粒を少量含む。
 8 赤褐色土 粘性なし。しまりなし。焼土粒を多量に含む。
 9 白っぽい黄褐色土 粘性なし。しまりなし。炭化物を多量に含む。径200程度の木炭を少量含む。
 10 黄褐色土 粘性なし。しまりなし。焼土粒を多量に含む。
 11 暗色砂質土 粘性なし。しまりなし。焼土により面状崩壊の土が変色したものである。
 12 暗褐色土 粘性なし。しまりなし。
 13 明褐色土 粘性なし。しまりなし。炭化物を多量に含む。径300程度の炭化物を少量含む。

■ 木炭集中
 ■ 焼土
 ■ 焼土

0 1m
 (1/40)

第2-278図 炭窯跡2号

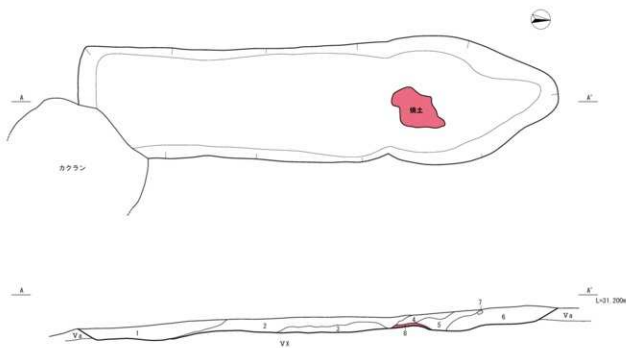


- 1 埴縄色土、焼土粒を多く含む。
- 2 黒色土、成層。
- 3 埴縄色土、灰を多く含む。
- 4 埴縄色土。
- 5 埴縄色土、焼土粒を多く含む。
- 6 黒色土、成層。
- 7 黒色土、成層。

- 2a 灰白色土、焼土ブロック。
- 2b 灰白色土、焼土ブロック。

0 50m
(1/20)

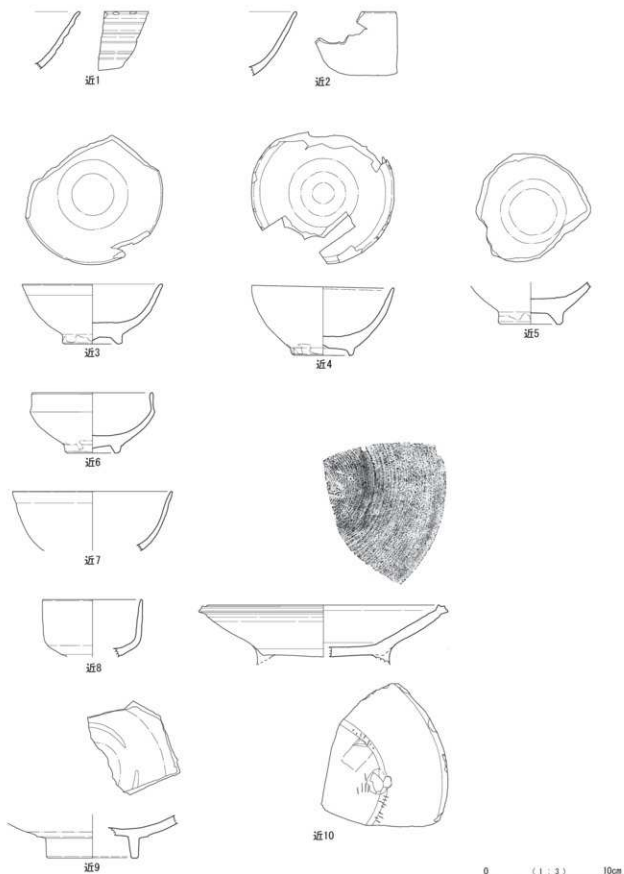
第2-279図 炭窯関連土坑 1



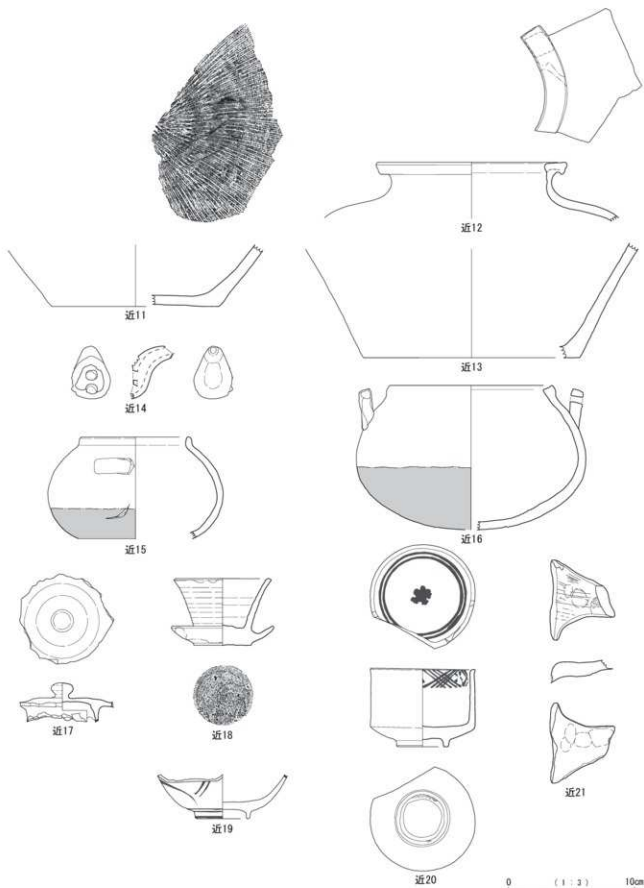
- 1 埴縄色土、やや粘性あり、しまりなし。
- 2 黒色土、成層。
- 3 埴縄色土。
- 4 灰白色土、白色の焼土粒を非常に多く含む。
- 5 埴縄色土、焼土粒を多く含む。
- 6 黒色土、成層。
- 7 灰白色土、焼土ブロック。
- 8 埴縄色土。

0 50m
(1/20)

第2-280図 炭窯関連土坑 2



第 2-283 圖 近世土坑 1 出土遺物(陶磁器①)



第2-284圖 近世土坑1 出土遺物(陶磁器②)

表2-105 近世土坑・出土遺物

調査号	遺物番号	遺物種別	図様	法量 (cm)		胎土色/釉色	釉薬・色澤(注)	施釉部位	取込部の内輪径寸	産地	備考		
				口径	底径								
1	283	21	陶器	瓶	-	-	にぶい黄褐色	胎体・裏面	-	龍門司系	-		
		22	陶器	瓶	-	-	灰(白口縁～胴部) 黒(胴部～底)	胎体・裏面	-	龍門司系	-		
		23	陶器	瓶	11.2	4.8	4.75	灰褐色	高台外(一部)・高台以外体部全面	有	龍門司系	口唇部・胎体裏面 高台・胎体裏面	
		24	陶器	瓶	11.4	4.6	3.5	にぶい黄褐色	胎体・裏面	有	龍門司系	口唇部・胎体裏面 高台・胎体裏面	
		25	陶器	瓶	-	4.8	-	黄褐色	高台外(一部)・高台以外体部全面	有	龍門司系	高台・胎体裏面	
		26	陶器	瓶	9.6	4.0	4.05	暗赤褐色	高台(口縁・外体部以外・口縁部、内面体部全面) 高台(口縁・外体部以外・口縁部、内面体部全面) 高台(口縁・外体部以外・口縁部、内面体部全面)	-	龍門司系	取込・目録	
		27	陶器	瓶	12.8	-	-	にぶい黄褐色	胎体・裏面	-	元治系	-	
		28	陶器	平皿碗	皿	8.0	-	黄褐色	胎体・裏面	-	元治系	-	
		29	陶器	皿	-	7.2	-	黄褐色	胎体・裏面	-	元治系	-	
		30	陶器	餅行鉢	鉢	16.4	9.6	4.2	黄褐色(胎体以外) 胎体・裏面(口縁以下)含む	高台外・高台・高台内面以外体部全面	有	龍門司系	取込・胎体裏面に施された白化粧土の痕跡が確認される
		31	陶器	鉢鉢	鉢	13.4	-	黄褐色(胎体以外) 胎体・裏面(口縁以下)含む	胎体・裏面	-	龍門司系	取込・目録	
		32	陶器	蓋	蓋	15.0	-	黄褐色	胎体・裏面	-	龍門司系	取込・目録	
2	284	33	陶器	壺・甕	-	17.4	-	黄褐色(胎体以外) 胎体・裏面(口縁以下)含む	胎体・裏面	-	龍門司系	取込・目録	
		34	陶器	水注 豆口瓶	-	-	-	黄褐色(胎体以外) 胎体・裏面(口縁以下)含む	胎体・裏面	-	龍門司系	取込・目録	
		35	陶器	土瓶・甕	瓶	8.6	-	黄褐色(胎体以外) 胎体・裏面(口縁以下)含む	胎体・裏面	-	龍門司系	取込・目録	
		36	陶器	土瓶・甕	瓶	15.0	-	黄褐色(胎体以外) 胎体・裏面(口縁以下)含む	胎体・裏面	-	龍門司系	取込・目録	
		37	陶器	蓋	蓋	5.9	-	黄褐色	胎体・裏面	-	龍門司系	取込・目録	
		38	陶器	付属品 受付	受付	8.6	3.3	黄褐色	胎体・裏面	-	龍門司系	取込・目録	
		39	灰行	瓶	-	4.2	-	白色	胎体・裏面	有	龍門司系	取込・目録	
		40	灰行	中皿碗	皿	8.4	4.2	白色	胎体・裏面	有	龍門司系	取込・目録	
		41	土瓶置 土瓶	壺・甕	-	-	-	黄褐色	胎体・裏面	-	龍門司系	取込・目録	

2 包含層出土遺物(第2-285~289図)

胎土・釉薬の特徴から近22・23は山本窯産と考えられる。

近22は端反碗である。外面は腰部で強く折れ、轆轤目による段が明瞭に残る。高台は片薄高台で、高台内面は兜巾状に仕上げる。高台外は垂直に立ち上げ、高台内は兜巾に向かって斜めに削り出している。畳付きは平坦である。胎土は灰白色で、磁化しており、黒色微粒子を含む。全面に透明釉を施した後、釉剥ぎを見込みでは楕円状に2か所(残部範囲)、畳付きでは全体に行う。細かな貫入が見られる。高台外から高台脇にかけて砂目跡が4か所残る。

近23は口縁部から胴部資料で半筒碗である。胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含み、磁化している。施釉は残部全面に透明釉を掛け、また貫入が見られる。

近24は腰部で屈曲する半筒碗で、白薩摩である。磁化した灰白色の胎土に、高台脇から高台を除く残部全面に透明釉を施しており、施釉範囲には細かい貫入が見られる。見込み及び高台に目跡は無い。

近25~27はいずれも碗資料で、胎土は黒色微粒子を含み、磁化しており、また、白化粧土を用いている。高台の形状は、高台外を垂直に、高台内は斜めに削り出している。加治木・給良系。

近25は碗の胴部から底部である。胎土断面は褐灰色を呈し、磁化している。施釉は畳付きから高台内面以外に透明釉が施されている。外面では、胴部から高台外まで灰色の泥漿を施し、その上から胴部より腰部まで白化粧土を塗り、最後に透明釉を掛けている。内面は白化粧土の上に透明釉を掛け、見込みは蛇の目軸剥ぎを行う。よって、色調は、外面胴部より腰部までが灰白、高台脇より高台外までが灰、畳付きから高台内面(露部)は明赤褐、内面は灰白色となる。重ね積みの痕跡としては、畳付き及び見込み軸剥ぎ箇所泥漿が環状に付着している。

近26は胴部に張りを持ち、口縁に向かってやや内傾気味に垂直に立ち上がる腰張碗である。近25と同質(肉眼観察の範囲)の灰色の泥漿と白化粧土を用いている。断面割れ口では、泥漿が素地内部に浸透する様が観察できる。外面は胴部から高台外まで泥漿を施し、その上から白化粧土を腰部と高台脇の境まで掛け、高台内面以外に透明釉を施す。内面は全面泥漿の上から白化粧土を施し、その上から透明釉を掛けている。白化粧土掛けの範囲では細かな貫入が見られ、下地の泥漿がその貫入より見て取れる。畳付きには泥漿が付着している。

近27は碗の胴部から底部で、畳付きは欠損している。外面胴部及び見込みに白化粧土を施した上から、高台内面以外透明釉を施す。

近28~30は元立院系の碗の資料である。共通項として、高台の形状は、高台外を垂直に、高台内は斜めに削り

出している。施釉後、見込みは蛇の目軸剥ぎを行う。

近28は碗の底部であり、胎土は橙色で白色微粒子を含む。畳付きから高台内面以外残部全面に鉄釉を施し、見込みは蛇の目軸剥ぎをする。畳付きに一部鉄釉が付着している。見込みには轆轤目が満巻状に残る。

近29は高台脇から口縁にかけてゆるやかに立ち上がる丸形の碗である。胎土は磁化している。釉薬は2種類使用しており、高台外の一部から高台内面以外に鉄釉を掛け、見込みを蛇の目軸剥ぎした後、口唇部及び高台脇から高台外の一部、見込み内面胴部側の軸剥ぎ縁(幅1mm程度: 圓線状)に褐釉を施す。畳付きには他個体の胎土跡が、見込みには畳付きの一部が付着している。

近30は胴部から底部の碗資料である。残部全面に鉄釉を施し、畳付きでは釉薬を掻き取り、見込みは蛇の目軸剥ぎを行う。胎土は磁化している。近29と同様に、見込み軸剥ぎ縁(胴部側)に褐釉が圓線状に施されている。また、胴部や高台外の一部に褐釉が付着している。畳付きには他個体の胎土跡が、見込みに施付きの痕跡がある。また、明瞭な指跡が高台外に2か所見られる。

近31~33は碗の資料であり、龍門司系である。いずれも、高台の形状は、高台外を垂直に、高台内は斜めに削り出している。施釉後、見込みは蛇の目軸剥ぎを行う。

近31は釉薬を3種類使用している。まず、鉄釉(黒褐色)を高台内面及び見込み以外全面に施し、その上から鉄砂釉(暗赤褐色)を高台内面以外に掛け、畳付きの釉薬を掻き取り、見込みを円形状に全面軸剥ぎする。その後、蛇の目軸剥ぎの蛇の目に当たる箇所及び高台内面に灰釉(オリブ黒)を施す。見込み軸剥ぎ部には他個体の畳付きの痕跡が見られる。胎土は磁化している。

近32は碗の胴部から底部であり、胎土は磁化している。高台外と高台以外、残部全面に鉄釉を施し、見込みは蛇の目軸剥ぎを行う。

近33は碗の胴部から底部であり、高台外と高台以外、残部全面に鉄釉を施し、見込みは蛇の目軸剥ぎを行う。内面見込み付近では豆粒状の釉薬の剥落が多く見られる。

近34・35は仏飯器で、鉄釉を施した後、見込みは蛇の目軸剥ぎを行う。ともに胎土の焼成は良好である。龍門司系。

近36・37は唐津焼の皿と考えられる。近36の胎土は赤褐色を呈し、黒色微粒子が見られる。高台脇から高台以外残部全面に薬灰釉を施す。また、外面胴部の薬灰釉が掛からない箇所、非常に薄く失透気味の透明釉が施されているのが確認できる。あるいは透明釉を薄く掛けた後、薬灰釉を施したか。高台は片薄高台であり、高台外、高台内面には縮緬皺が確認できるが、高台内面は皺の痕跡をナゲ削している。見込みに胎土目跡が3か所(径5mm)残り、高台脇にも2か所(径10mm)確認できる。

近 37 は近 36 と同様、胎土は赤褐色を呈し、黒色微粒子を含む。胴部下半から底部以外残部全面に灰軸が施され灰白色を呈し、また、口唇部は軸葉を掻き取った後、鉄が塗られ（皮触手）、黒色を呈している。高台は基筋で、ヘラ状工具で高台内面を削り出した後、生じた縮縮皺をナゲ消している。見込みには、胎土目跡が4か所、底部にも4か所確認できる。

近 38 は内野山窯産の銅緑軸蛇の目皿の底部と考えられる。胎土は灰白色で、黒色微粒子を多く含み、磁化している。残部内面には銅緑軸を施し、見込みは蛇の目軸剥ぎを行う。外面は高台脇に透明軸が掛けられ、高台は露胎する。畳付きには砂目跡が2か所見られ、銅緑軸が微粒子状に付着する。また、色調差から見込み軸剥ぎ範囲に目跡と思しきものが2か所見受けられる。

近 39 は赤地に文様を陰刻し、白土を充填（象嵌）して、残部全面に透明軸をかけた皿である。見込み中心より花文、二重圓線を象嵌し、圓線から口縁部方向にかけて白化粧土を横方向に刷毛塗した上で、波状文を掻き取って表している。見込みに2か所、畳付きに2か所砂目跡が見られる。龍門司系。

近 40 は灯明皿で、外面胴部から底部以外は全面施軸されており、浅黄色を呈する白軸を掛けた上から暗オリーブ色を呈する灰軸を施した後、口唇部の軸葉を掻き取る。外面には間隔の狭い軸目が多く残る。見込みでは4か所、円形状に軸剥ぎがなされ、底部にも4か所目跡が残る。底部には右回転の糸切り痕が見られる。

近 41 は灯明皿の底部で、外面胴部と見込みに透明軸に近い灰軸を施す。底部には糸切り痕が見られ、煤も付着する。見込みには環状に砂目跡が見られるが、底面には目跡は確認できない。ただし、底部縁には薄く軸葉が付着している。窯詰めは、見込み内の砂目跡が環状であることから、高台を持つ他器種で近 41 の見込みに重ね積みしている。

近 42 ～ 44 は鉢の口縁部資料である。

近 42 の口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁下に突帯が巡る。残部全面に浅黄色を呈する蕎麦軸を掛ける。軸葉に非晶質部分はほぼ無く、質感はマットで光沢は少ない。胎土は磁化している。口唇部に2か所目跡が見られる。

近 43 の口縁部は外側に折り返し、丸くおさめる。残部全面に鉄軸を掛ける。胎土は磁化している。口唇部に重ね積みの痕跡有り。

近 44 の口縁部は外側に折り返し、玉縁状に仕上げる。器形は口縁下の胴部上端で張り出す。施軸は口唇部上端から口縁玉縁状部の範囲で白軸を掛け、上から透明に近い灰軸を施す。細かい貫入が見られる。胎土は磁化している。山元窯産。

近 45 ～ 48 は苗代川系の鉢で、近 45 ～ 47 は口縁から

胴部の、近 48 は口縁から底部の資料となる。共通項として近 45 ～ 48 とともに、施軸は残部全面（近 48 は底部以外全面）に鉄軸（オリーブ色基調）を掛けた後、口唇部の軸葉を掻き取る。胎土には石英等の鉱物（径5mm以下）が一定量含まれる。口縁部上端を内側に折り返すもの近 45 ～ 48 と、外側に折り返すもの近 49 ～ 51 とがある。

近 45 の口縁部は、外から内側に折り返し、ナゲ調整により内面口唇部上端をやや内側に張り出す。T字状となる。口唇部は平坦に仕上げる。口縁下に沈線を巡らすことで、突帯状の隆起を作る。

近 46 の口縁部は外から内側に折り返し、逆L字状となる。折り返した先端はナゲ消さず、段として残す。口唇部上端は平坦である。口縁下に沈線を巡らすことで、突帯状の隆起を作る。器形は隆起線の直下より内側に屈曲する。

近 47 の口縁部は外から内側に折り返し、逆L字状となる。口唇部上端は平坦で、内側はやや張り出す。口縁下に微隆起線が巡る。

近 48 の口縁部は外から内側に折り返し、逆L字状となる。口唇部上端は平坦で、内側はやや張り出す。口縁下に微隆起線が巡る。器壁内外面に間隔の狭い軸目が多く残る。底部内面に軸葉を剥いだ痕跡が2か所見られるが、目跡等の痕跡は無い。口唇部にはコマの痕跡が2か所残る。

近 49 ・ 50 の口縁部はともに外側に折り返し、口唇部上端は平坦で、内側には強く張り出すT字状となる。

近 51 の口縁部は外側に折り返し、逆L字状となる。また、口縁部下端をナゲにより傾斜させ、断面三角形を呈する。口唇部上端はやや丸みを帯びている。口縁下に沈線が巡る。

近 52 ～ 56 は苗代川系の挿鉢で、近 52 ～ 54 は口縁部から胴部、近 55 ・ 56 は胴部から底部資料である。共通項としては、胎土は赤褐色を基調とし、石英等の鉱物（1mm以下）を含む。近 54 を除き施軸は鉄軸でオリーブ色を基調とする。

近 52 は口縁部を外側に折り返し逆L字状となる。口唇部上端はゆるい段を持ちつつ平坦に仕上げる。内面全体にスリメが施される。内面胴部以外全面に鉄軸を施し、口唇部は軸葉を掻き取る。口唇部にコマの痕跡が1か所見られる。

近 53 は注口部を持つ。残部全面に鉄軸を施した後、注口部を除く口唇部の軸葉を掻き取る。口縁下に突帯を持つ。スリメは、1単位1.5cm幅の8条で、内面全体に施される。

近 54 の口縁部は外から内側に折り返し、口唇部上端はゆるく段を持ちつつ平坦に仕上げ、内側はやや張り出すT字状となる。施軸は残部全面に鉄軸を掛けた上から、外面に蕎麦軸を施している。口唇部の軸葉は掻き取られ

る。外面、内面とも間隔の狭い輪軸目が多く、スリメは1単位1.2cm幅の5条で内面全体に施される。

近55の施軸は、外底面と内面を除く外面胴部に鉄砂軸を掛けた上から蕎麦軸を施す。

近56の施軸は残部全面に鉄軸を掛ける。外底面に貝目が1か所見られる。

近57は挿鉢底部である。施軸は残部全面に褐軸を掛けている。釉薬は非晶質部分が少なく、質感はマットで、光沢は少ない。外底面に貝目が1か所見られる。

近58は素焼きの植木鉢底部で、内外の器面、さらには断面にまで煤や炭化物が付着していることから、破損後に火を受けている。

近59は高台を持つ胴丸形の小壺である。胴部から高台脇まで白化粧土を施した後、緋に掻き取る。その上から銅緑釉及び褐軸を掛け流す。胴部に透明軸は施されない。高台内面に縮緬皺が見られる。肥前武雄系か。

近60・61は胎土色や含有鉱物、器面の調整が近似することから同一の個体であり、琉球産の無軸陶器耳付壺と考えられる。

近60は無軸陶器耳付壺の胴部である。胎土は赤褐色で非常に良く焼き締まる。肩部に耳の痕跡があり、胴部に沈線が2条巡る。

近61は底部で、底部と胴部の境を面とりする。

近62～66は苗代川系の甕または壺の資料である。共通項としては、胎土は暗赤褐色を基調とし、石英等の鉱物(1mm以下)を含む。近66を除き施軸は鉄軸だが、色調はいずれもオリーブ色を基調とする。

近62～64は口縁部と底部資料であり、それぞれの個体の釉薬や胎土の特徴、また器面に付着する灰白色を呈する結晶が同質のものであることから同一個体としてまとめて特徴を述べる。口縁部は外側に折り返した後、上下に肥厚させる。口唇部は内側に張り出し、上端は平坦に仕上げる。口縁下には突帯が2条巡る。施軸は残部全面に鉄軸を掛け、口唇部、外底面、内面の口縁部と肩部の境で釉薬の掻き取りを行う。目跡は外底面に2か所、口唇部に2か所確認できる。器面に灰白色を呈する結晶が広く付着しており、口縁部から胴部(近62)では内外面ともに、底部付近(近63・64)では外面に確認できる。

近65は口縁部であり、外側に折り返した後、先端をナゲ調整により上下に肥厚させ、口唇部内側は強く張り出すことでT字状となる。口唇部外側は溝縁状となる。口唇部は内側が高く、ゆるく湾曲しながら外側に至る。折り返し部断面には三角形の隙間が生じる。鉄軸を残部全面に施した後、口唇部の釉薬を掻き取る。

近66は底部であり、残部全面に灰軸を掛けた後、外底面の釉薬を掻き取る。外面がオリーブ色を呈しているのに対し、内面は釉薬が熔融しきれず、釉薬中の成分が白色の結晶として析出しており、灰白色がかり光沢も少ない。

近67は甕または壺の胴部である。焼成は良好で、胎土は灰赤色土と灰白色土がマーブル模様のように重なり合う。内面の当て具痕より、成形はタタキ技法であることがわかるが、当て具の痕跡はヨコナゲ調整によりナゲ消され不明瞭である。施軸は、残部全面に鉄砂軸を施し、外面はその上から黄褐色を呈する灰軸を部分的に掛け流す。両面とも顕微鏡下では金属質の光沢を持つ結晶の析出が確認でき、非晶質部分はほぼ無く、よって、器面の質感はマットである。

近68は瓶か壺の胴部から底部であり、胎土は灰色で非常に緻密であり、器壁は3～4mmと薄い。還元焼成である。

近69は土瓶の注口部である。三角形の耳を持ち、茶止め穴は上段に1つ、下段に2つの計3つある。施軸は残部外面と茶止め穴の周辺部に鉄軸を施すが、下段の茶止め穴付近では釉薬が熔融しきれず、釉薬中に溶けきれなかった成分が白色の結晶として析出している。

近70は丸形の器形を呈する土瓶あるいは鍋の口縁部から胴部である。残部内外胴部最大径以下以外全面に灰軸を施し、口唇部は釉薬を掻き取る。外面は釉薬中に非晶質部分が少なく光沢も僅かだが、内面は非晶質部分がほぼ無く、光沢も無い。直火に掛けられた痕跡として、外面胴部最大径以下に煤や炭化物が付着する。

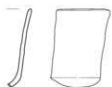
近71は宝珠形のつまみを有する蓋の天井部である。残部全面外面に鉄軸を施す。

近72はつまみ部が欠損している土瓶蓋で、残部底から天井部まで灰軸を施す。重ね積みの痕跡として、天井部と肩部境で環状に色調の濃淡が変化し、かつ他の個体の胎土跡が残る。内面には煤が付着する。

近73は白薩摩の口縁部あるいは脚部資料である。灰白色の胎土に透明軸を残部全面に施し、口唇部(口縁部資料の場合)あるいは壺付き(脚部資料の場合)、内面の一部の釉薬を掻き取る。

近74は土師質土器で、内面口唇部上端から底部に向かって(縦方向)、断面三角形の突帯が付く。口唇部と突帯の接合箇所では、ナゲ調整で丁寧に接合痕を消している。外面には雷文が見られる。形態から七輪等の加熱器の部品か。

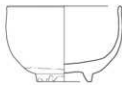
近75は土師質土器の器台であり、底部に1か所穿孔がある。口唇部内面に煤が付着しているが、他の部位に付着は見られない。内外面ともにヨコナゲ調整がなされ、胎土には1～2mm大の鉱物(石英、雲母他)が多く見られる。



近24



近22



近23



近27

二点绿釉 白化粘土质



二点绿釉 白化粘土上黑紫(灰色) 滑



近25

二点绿釉 白化粘土上黑紫(灰色) 滑



近26



近29



近30



近28



近31

二点绿釉内 黑紫

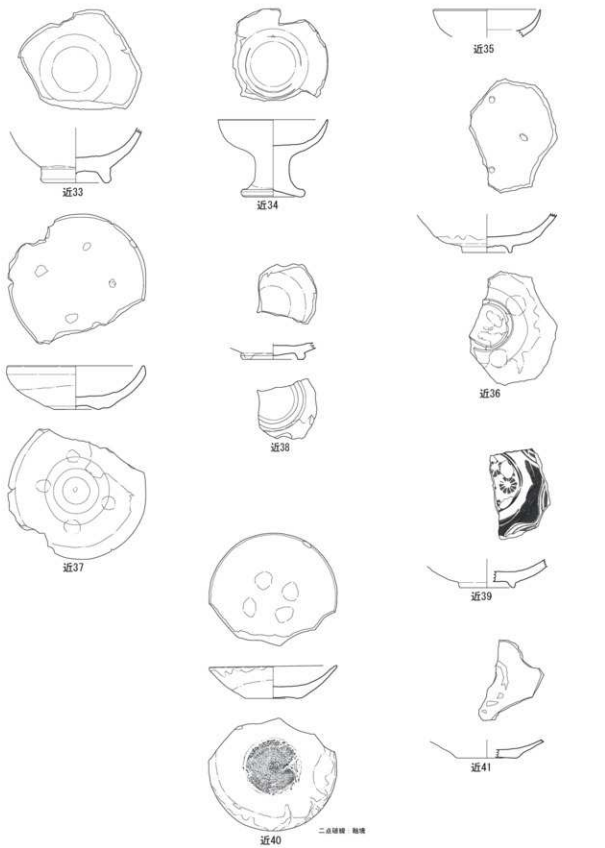


近32

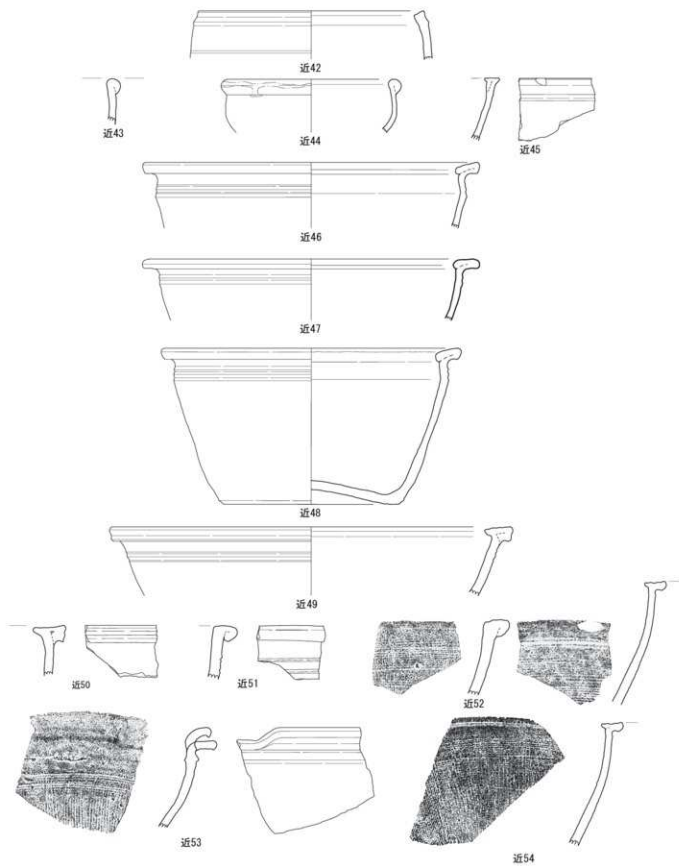


第2-285图 包含层出土遗物(陶磁器①)

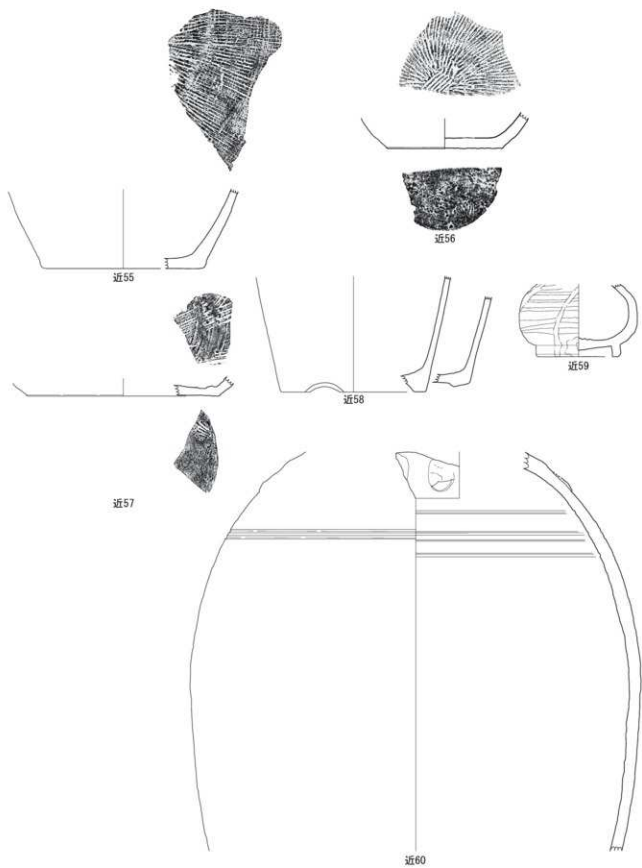
0 (1:3) 10cm



第 2-286 图 包含层出土遗物(陶磁器②)

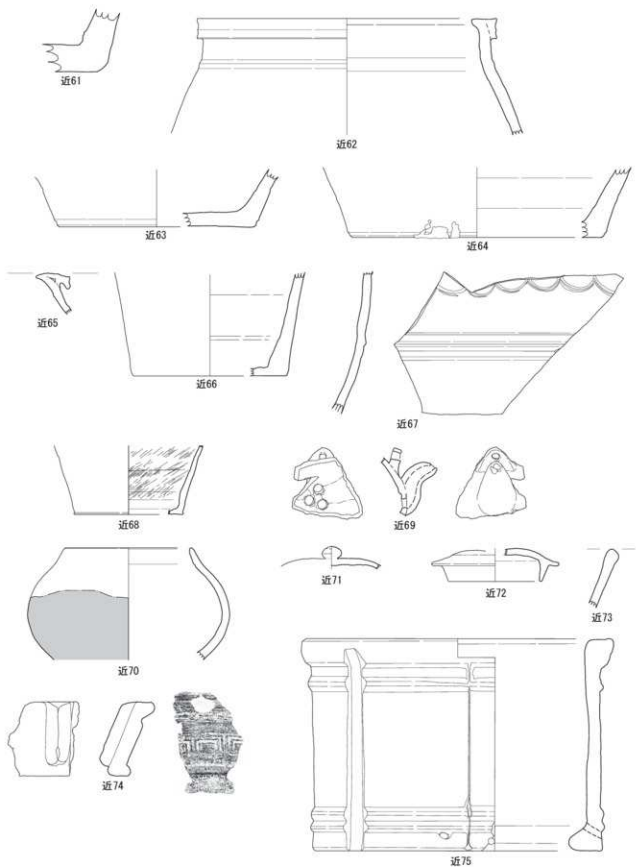


第2-287圖 包含層出土遺物(陶磁器③)



第2-288圖 包含層出土遺物(陶磁器④)

0 (1:3) 10cm



第 2-289 圖 包含層出土遺物(陶磁器 5)

0 (1:3) 10cm

表 2-106-1 包含層出土土遺物

調査番号	遺物番号	遺物種別	部種	口徑		長さ (cm)		土色・特徴	材質・色調・地	編組部位	見込中の目録番号	産地	備考	
				口径	底径	器高	器底							
2 1	222	陶器	灰穴甕	13.0	5.2	4.2	灰/黒色顔料を含む・酸化	透明釉	黒	器行以外外部全面	黒	山元窯	内底面・輪郭全周2.5cm 高台外・器口縁4.5cm 取皿と台蓋高台・貫入	
	223	陶器	甲冑碗	-	-	-	灰/黒色顔料を含む・酸化	透明釉	-	器底全面	-	山元窯	白磁質	
	224	陶器	甲冑碗	-	-	-	灰/黒色顔料を含む・酸化	透明釉	黒	高台盤から器行以外外部全面	黒	山元窯	器行・器口縁全周・器底全周	
	225	陶器	甕	-	4.2	-	黄灰/黒色顔料を含む・酸化	透明釉/外底に白化粧土・底面(灰色) 内面:白化粧土のみ	器行・高台内面以外外部全面	有	加圧水・加圧水・加圧水・加圧水	有	加圧水・加圧水・加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	226	陶器	罌蓋甕	9.2	4.4	6.1	二色(黄灰/黒色顔料を含む)・酸化	透明釉	黒	器行・高台内面以外外部全面	黒	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	227	陶器	甕	-	-	-	黄灰/黒色顔料を含む・酸化	透明釉/白化粧土	黒	高台内面以外外部全面	黒	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	228	陶器	甕	-	4.0	-	黄/白色顔料を含む・酸化	黄釉/赤釉	黒	器行・高台内面以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	229	陶器	甕	8.0	3.8	3.9	黄/白色顔料を含む・酸化	黄釉/赤釉	黒	器行・高台内面以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	230	陶器	甕	-	4.8	-	黄/黒色顔料を含む・酸化	黄釉/赤釉	黒	器行以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	231	陶器	甕	-	3.9	-	灰/白色顔料を含む・酸化	黄釉/赤釉	黒	器行以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	232	陶器	甕	-	3.1	-	二色(黄・黒)・酸化	黄釉/赤釉	黒	器行以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
2 1	233	陶器	甕	-	3.2	-	黄/黒色顔料を含む・酸化	黄釉/赤釉	黒	器行以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	234	陶器	仏炎筒	8.8	5.2	6.2	灰/白色(黄/黒色顔料を含む)・酸化	黄釉/赤釉	黒	器行以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	235	陶器	仏炎筒	8.0	-	-	黄/黒色顔料を含む・酸化	黄釉/赤釉	黒	器行以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	236	陶器	甕	-	3.9	-	黄/黒色顔料を含む・酸化	黄釉/赤釉	黒	器行以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	237	陶器	甕	10.9	3.6	3.5	黄/黒色顔料を含む・酸化	黄釉/赤釉	黒	器行以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	238	陶器	甕	-	4.8	-	灰/黒色顔料を含む・酸化	黄釉/赤釉	黒	器行以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	239	陶器	甕	-	4.4	-	黄/黒色顔料を含む・酸化	黄釉/赤釉	黒	器行以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	240	陶器	灯明皿	10.2	4.7	2.65	二色(黄・黒)	黄釉/赤釉	黒	器行以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周
	241	陶器	灯明皿	-	4.8	-	二色(黄・黒)	黄釉/赤釉	黒	器行以外外部全面	有	加圧水・加圧水	加圧水・加圧水	器行・高台外・器口縁 器行・器口縁全周

表2-106-2 包含層出土近遺物

調査号	遺物番号	遺物種別	図種	直径 (cm)		胎土色・特徴	施装・色調・地	施装部位	見込部の 目録長さ	形状	備考	
				口径	底径							
2 1 287	Z42	陶器	鉢	-	18.0	-	黒灰・浅黄	胴部全面	-	-	-	
	Z43	陶器	鉢	-	-	黒灰/磁化	胴部	胴部全面	-	物付本・ 胎土系	-	
	Z44	陶器	鉢	-	14.4	-	透明に近い赤黒 (灰白) : 口縁部から胴部 白粉 (注) : 口唇部から口縁上縁部迄	胴部全面	-	山口系	-	
	Z45	陶器	鉢	-	-	に濃い赤黒/ 右系等灰粉 (径1mm以下) 含む	胴部・オリーブ系	口唇部以外胴部全面	-	近代山口系	口唇部・胴部優多数り	
	Z46	陶器	鉢	-	27.0	-	に濃い赤黒/ 右系等灰粉 (径1mm以下) 含む	胴部・オリーブ系	口唇部以外胴部全面	-	近代山口系	口唇部・胴部優多数り
	Z47	陶器	鉢	-	25.0	-	黄灰/ 右系等灰粉 (径1mm以下) 含む	胴部・オリーブ系	口唇部以外胴部全面	-	近代山口系	口唇部・胴部優多数り
	Z48	陶器	鉢	-	24.0	12.5	明赤粉/ 右系等灰粉 (径1mm以下) 含む	胴部・に濃い赤黒	胴部外周、口唇部以外胴部全面	■	近代山口系	口唇部・胴部優多数り コウ目録2.0cm
	Z49	陶器	鉢	-	32.4	-	に濃い赤黒/ 右系等灰粉 (径1mm以下) 含む	胴部・オリーブ系	口唇部以外胴部全面	-	近代山口系	口唇部・胴部優多数り
	Z50	陶器	鉢	-	-	-	に濃い赤黒/ 右系等灰粉 (径1mm以下) 含む	胴部・オリーブ系	口唇部以外胴部全面	-	近代山口系	口唇部・胴部優多数り
	Z51	陶器	鉢	-	-	-	赤黒/ 右系等灰粉 (径1mm以下) 含む	胴部・オリーブ系	口唇部以外胴部全面	-	近代山口系	口唇部・胴部優多数り
	Z52	陶器	鉢鉢	-	-	-	に濃い赤黒/ 右系等灰粉 (径1mm以下) 含む	胴部・オリーブ系	口唇部・内面割取一部以外胴部全面	-	近代山口系	口唇部・コウ目録1.0cm
	Z53	陶器	鉢鉢	-	-	-	に濃い赤黒/ 右系等灰粉 (径1mm以下) 含む	胴部・オリーブ系	口唇部以外胴部全面	-	近代山口系	スリム部位:1.5cm幅に8条
	Z54	陶器	鉢鉢	-	-	-	黒褐色/ 右系等灰粉 (径1mm以下) 含む	胴部・オリーブ系 黒灰粉 (径0.5mm以下) : 外周	口唇部以外胴部全面	-	近代山口系	スリム部位:1.5cm幅に5条
	Z55	陶器	鉢鉢	-	13.0	-	に濃い赤黒/ 右系等灰粉 (径1mm以下) 含む	胴部・暗赤粉	胴部・内面以外胴部全面	■	近代山口系	胴部心3割部方向に3条割取を規定 越つたよう(元割取あり)
	Z56	陶器	鉢鉢	-	9.3	-	に濃い赤黒/ 右系等灰粉 (径1mm以下) 含む	胴部・オリーブ系	胴部全面	■	近代山口系	外縁部:長目録1.0cm
	Z57	陶器	鉢鉢	-	18.2	-	黄灰/浅黄 (地ムラ)	胴部・に濃い赤褐色	胴部全面	■	近代山口系	外縁部:長目録1.2cm
	Z58	陶器	鉢鉢	-	11.6	-	暗赤褐色	-	胴部以外胴部全面	-	-	内面同色粉付着
	Z59	陶器	小皿	-	-	-	に濃い赤黒	胎土系 外周部割取・胴縁部、胴縁	胴縁から底台に掛け残す	-	肥前式漆器	二部弁 糸付内証 黒磁器
	Z60	無形 陶器	耳付蓋	-	-	-	赤黒/白く焼きこまる	-	-	-	漆研製	耳付蓋下、底面耳及 内縁部:長目録2.7cm 底面、耳付一割体

表 2-106-3 包含層出土近世遺物

調査区分	遺物 番号	遺物 種別	器種	寸法 (cm)		胎土色・特徴	輪郭・土色調査	輪郭位置	見込 最小 目録番号	産地	備考
				口径	底径						
	2051	陶器	茶付蓋	-	-	赤褐色/貝く焼き上まる	-	-	成瀬産	外表面:ヨコナガノ溝型 底面:250円・胴体	
	2052	陶器	甕or蓋	34.0	-	黒赤褐色/ 右高等磁物(径:5cm以下)含む	鉄輪:ネリノフ風	口唇部以外全面	-	當代川系	口唇部:目録250円 底面・底・450円・胴体
	2053	陶器	甕or蓋	-	15.6	黒褐色/ 右高等磁物(径:5cm以下)含む	鉄輪:ネリノフ風	底内面以外全面	-	當代川系	外表面:輪郭復元あり 目録150円
	2054	陶器	甕or蓋	-	20.0	黒褐色/ 右高等磁物(径:5cm以下)含む	鉄輪:ネリノフ風	底外面以外全面	-	當代川系	外表面:輪郭復元あり 底面・底・450円・胴体
	2055	陶器	甕or蓋	-	-	にじみ赤褐色/ 右高等磁物(径:5cm以下)含む	鉄輪:ネリノフ風	口唇部以外全面	-	當代川系	-
	2056	陶器	甕or蓋	-	12.4	黒赤/ 右高等磁物(径:5cm以下)含む	底面:底ナリノフ	底外面以外全面	-	當代川系	外表面:輪郭復元あり
	2057	陶器	甕or蓋	-	-	底赤土質白灰ナリノフs状に重なる	鉄輪:底赤土質(外国) 底面(内面)	全面	-	-	外表面:底赤土質(底赤土) 内面:ナリノフ風
	2058	陶器	甕or瓶	-	8.6	底・胴体	鉄輪:瓶	-	-	-	胴体下部:目録1行 内外面:ヨコナガ
	2059	陶器	水缸 土口器	-	-	輪/ 右高等磁物(径:5cm以下)含む	鉄輪:瓶	胴体全面	-	當代川系	蓋:赤褐色 (上段付、下段付)
	2070	陶器	土瓶or瓶	10.2	-	にじみ赤褐色	底面:底白	口唇部・外側胴底・底以下以外	-	當代川系	胴底:底・底以下付、底化付行着
	2071	陶器	甕	-	-	黒褐色/ 右高等磁物(径:5cm以下)含む	鉄輪:ネリノフ風	底面外部分のみ	-	當代川系	-
	2072	陶器	土瓶産 or 甕部	10.2	-	赤褐色/ 右高等磁物(径:5cm以下)含む	底面:ネリノフ風	胴体～底付部のみ	-	當代川系	内面:底付行着
	2073	陶器	白練部	-	-	底白	底面	口唇部及び内面胴部一部以外全面	-	當代川 or 豊前系	白練部、底赤土質人
	2074	土師質 土器	土輪部品	-	5.9	にじみ赤褐色	底面	-	-	-	外表面:底赤土
	2075	土師質 土器	甕付	20.0	17.0	にじみ赤褐色 /ナリノフs状の底面(底赤、底付部)多 く含む	-	-	-	-	底面:ナリノフ型付片あり

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (53)
東九州自動車道 (志布志 I C ~ 鹿屋串良 J C 丁間) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

川久保遺跡 5 A 地点

古墳・近世編 ほか (第 2 分冊)

発行年月 2023年3月

編集・発行 鹿児島県教育委員会

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576

印刷 海上印刷株式会社

〒891-0122 鹿児島市南栄3丁目1-6

TEL 099-268-1002 FAX 099-266-3423